Flame,Plus

I・B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

【Ｎコード】
Ｎ４５８３Ｌ

【作者名】
Ｉ・Ｂ

【あらすじ】
一般人として普通の生活を送っていた少女、神崎椿。彼女は自分を育ててくれた祖父母の薦めで、名門と名高い魔法学校――楼城館女学院に進学することになった。そこで出来た友達と新たな絆を得る中で、椿は自分の“ルーツ”を垣間見る。安らぎの空間、心躍る学校行事、そして、人々に仇成す“邪霊”との戦い。／／これは、未熟な少女達が出逢いと戦いを通して、一人前の魔法使いとなっていく軌跡を描いく物語です。／／完結しました。ご愛読、ありがとうございました！

第一話　出逢い（前書き）

この小説のジャンルは、熱血学園友情ファンタジー……を、目指しています。

２０１０／８／１９　現在、改訂中です。

第一話　出逢い

――それは、普段と何一つ変わらない、日常の光景だった。

額にかいた汗を拭うのは、滑らかな黒い髪を銀のバレッタで止めた少女だった。

少女は、夕焼けの小道を早歩きで帰る。

肩にのしかかる真っ赤なランドセルを、一息をついて持ち上げる。

すると、少しだけ楽になったような感触を覚えて、少女は小さく息を吐いた。

学校へ行く前に、今日の夕飯はカレーライスだと少女は母親から告げられていた。

この年頃の子供は、カレーライスが夕飯だと聞くと、胸を高鳴らせるものだ。

小道を歩く少女もその例に漏れず、夕飯を楽しみにしていた。

「えへへ、かれーらいす♪」

口元を拳で隠して、小さく笑う。

だらしのない笑顔を見るのは、茜空に浮かぶ太陽ぐらいなものだ。

なのになんだか気恥ずかしくなり、少女は頬を赤らめて笑みを隠した。

普段と変わらない、日常のワンシーン。

――それは、砕ける前の最後の光景だった。

「あ、れ？」

胸騒ぎと共に、大きく息を吐くように呟いた。
その一言が意図するところは、自分でも理解することが出来ずにいた。

「っ」

真紅の空に昇る漆黒。
舞い上がる紅蓮と、空気を焼く灼熱。

ぱちぱちと音を立てて――少女の“日常”は炎に包まれていた。

「おとうさん、おかあさん」

身を竦ませるほどの紅。
その痛いほどの熱を前に、少女の口から感情がこぼれ落ちた。
それは、心を軋ませる憔悴の声だった。

「おとうさん！おかあさん！」

冷静な思考なんか、働かない。
ただ無我夢中になって、その炎に飛び込んだ。

倒壊する前の家屋。
それは、いつ倒壊するか解らないという意味だ。
この危険な空間に駆け込んで、何が出来るか解らない。
むしろ、何も出来ないだろう。

それでも、駆け込まずにはいられなかった。

重いランドセルを投げ捨てて、見慣れた――観たことのない――空間を駆ける。
爆ぜる火花に身体を小さく焼かれながら、倒れ込むように前へ走る。

「おとうさん！」

居間。
――割れたビール瓶。

「おかあさん！」

台所。
――切り分けられた野菜。

「ねぇ！どこ？！」

書斎。
――燃え上がる本棚。

「ねぇってばっ！」

寝室。
――フレームの歪んだ、家族写真。

「へんじ、してよぉっ！？」

走る、走る、走る。
もしかしたらとっくに避難をしていて、自分のしていることは無駄足かも知れない。

玄関に靴があったかどうかなど確認はしなかったし、もう家にいないかも知れない。

――それでも止まらない、大きな“胸騒ぎ”が少女を突き動かした。

足をもつれさせて、身体を煤で黒く汚して、お気に入りのワンピースを焦がして。

母親に見つかったら、怒られて。
苦笑する父親に、慰めて貰って。
三人で、食卓を囲むのだ。

「おとうさん……おかあさん……っ」

涙を拭うと、手についた煤が少しだけ落ちる。
その色が切なくて、少女は視界を歪ませた。

最後に訪れたのは、自分の部屋。
両親に強請って手に入れた、六畳の広い部屋。
そのドアノブを握ると、金属製のノブから走る熱が、少女に鋭い痛みを与えた。

――それでも、少女はドアノブを回す。
――胸騒ぎの末にある“確信”を抱いて。

「おとうさん、おかあさん?」

小さく声を漏らしながら、ドアを開く。
その視線の先には、黒い塊があった。
大きな塊が二つ転がっていて、奇妙な形の塊がもぞもぞと動いてい

た。

『あ、あ、あ』

この世のものとは思えない、甲高く淀んだ声。
黒い翼と三頭の頭。それが炎の中で黒い塊を貪っていた。
炭化した表面が崩れ落ち、その中から見えるのは――赤。

その色を見る度に、少女の胸が軋み、悲鳴を上げていた。

『兄者、兄者、残ってル』
『うるサい、食事中だ、弟よ』

何かをむさぼることに夢中な右の頭に、左の頭が声をかける。
すると、真ん中の頭が何かを呑み込んで左の頭の、視線の先――立ちすくむ、少女を見た。

「ぁ――」

声が漏れたことを、少女は自分でも気がつくことが出来なかった。
その淀んだ目に見られて、身体が竦み口が渇く。
炎の熱さとは違う、恐怖からの汗が、少女の背筋を冷やしていた。

声に反応して、夢中だった右の頭も少女を視界に納めた。

『予想以上の、ご馳走だ』
「ひっ」

両端をつり上げられて歪んだ口から覗くのは、いっそ鮮やかすぎる赤だった。

その強烈な色合いは、現実から意識を飛ばしていた少女の心を冷静にさせた。

――いや、冷静になったのではない。
現実から目を背けようとした結果、避けられない現実を見てしまったのだ。

三つの頭の怪物が両手に持っていたのは、奇しくも同じ形の“部品”だった。
その部品の先端に嵌められた銀色のリングには、ひどく見覚えがあった。

少女が毎日見ていたもの。
大切な人の指に嵌められていた、大切な人の宝物。

『こういう時は、ナんとイウんだ?兄者』
『ふむ、なんダったカな?弟よ』

怪物の言葉が、頭に入らない。
そんなこと――そう、“そんなこと”よりも、横たわる塊が、少女の心を蝕む。

「――――」

声は出ない。
出ないはずなのに、音が出る。
恐怖心を飛び越えて、悲しみを食らいつくし、深淵の魔物が顔を出す。
そのプレッシャーは、僅か九歳の少女には、重すぎた。

『兄者、弟……コウいう時ハ――いたダキまスというんダ』

空を切り跳躍する怪物。
その九つの視線に呑み込まれながら――少女の意識は、闇に落ちた。

どこかで誰かが――ぱたん、と本を閉じる、音がした。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

――桜が舞う、始まりの季節。

魔法学校の名門、楼城館女学院。
その寮の一室で、一人の少女が姿見の前に立っていた。

腰まで伸びる髪は、鴉の濡れ羽色。
その滑らかな黒髪を、銀のバレッタで留めていた。
細い眉の下から見えるのは、大きな瞳。
光を反射して輝く、黒曜石のような黒い双眸だ。

「制服、よし」

透き通るような声が、小さく言葉を紡ぐ。
白い制服に身を包んだ自分の姿が新鮮で、少女は小さくはにかんだ。

「って、これじゃあ危ない人だよ」

鏡の前で、一人で笑う。
そんな自分を客観視してみると、気恥ずかしくなって頬を抑えた。
この少女は、どこか抜けているとことがあるようだ。

「さて、行ってきます」

姿見から立ち去り、写真立てに頭を下げる。
そして、フレームの歪んだ写真立ての下に置いてあった、ネックレ

スを手に取った。

銀のリングが二つ並んだ、ネックレス。
大切な人の、大切な形見だ。

ネックレスを首にかけると、扉を開けて前を向く。
振り返ってばかりいれば、両親に心配をかけてしまう。
そう思っているから、少女は前を向いて、歩くのだ。

来る学院生活に胸を躍らせて、少女――神崎椿（かんざきつばき）は、大きく一歩を踏み出した。

†

私立楼城館女学院は、魔法学校である。
世界に存在する魔法は、人々の生活を潤わせるためのものではない。
できないことはないが、だったら科学を用いた方がずっと早く、低

コストだ。

ならば、魔法は何のためにあるのか？
それは――戦うためである。

人間同士の戦いではない。
人間に仇成す存在――邪霊と戦うために、魔法は用いられる。
そんな魔法を学ぶために開設されたのが、人の街から離れた場所に位置する“魔法学校”である。

楼城館女学院は、そんな魔法学校の中でも“名門”にカテゴライズされている。

広大な敷地面積と充実した施設を持つ、学院都市。
それが、楼城館女学院という魔法学校の姿だ。

細やかな調度品に囲まれた廊下は、上品な細工が施されている。
あまり煌びやかに過ぎず目に優しいのは嬉しいが、庶民に過ぎない椿にとっては肩身が狭かった。

手を置けば壊してしまいそうで、絢爛豪華な生活に慣れていない身としては、気後れしてしまうのだ。

「かといって、真ん中を歩くのもなぁ」

場違いな感覚が否めない。
だからこそ、端を歩きたい。
けれど、真ん中を歩くのは気後れする。
そんな、ありがちなジレンマに、椿は身を竦ませていた。

「慎重に、慎重に」

今から慣れておかないと、この先の学院生活は厳しいだろう。
自分を笑顔で送り出してくれた祖父母のためにも、ここで挫ける訳にはいかない。
握り拳をつくって前を向けば、クラスを割り当てる掲示板まで、目と鼻の先だ。

「頑張れ、椿（わたし）」

気合いは充分。
上品に集まる人垣から、一歩下がって覗き込む。
席は窓側、それも一番後ろだった。

「うぅ、春にこの位置は眠いよ」

周囲に聞こえないように、小さく独り言を零す。
友達も作りにくい上に、授業で眠くなる。
避けることの出来ない壁に、椿は大きくため息をついた。

「でも、負けていられないよね」

そう言うと、踵を返して前に進む。
教室に入って教科書を用意してしまえば、緊張なんか吹き飛ぶのだ。

「うん、頑張ろうっ」

気合いを入れる、一言を呟く。
だが独り言が異様に多いのは、緊張しすぎているためだということに、椿は気がつくことなく慎重に進んでいった。

――当然、歩くのは廊下の端である。

†

初日から授業というのは、この学院では当たり前のことだった。
本格的な授業にこそ入らないが、これからの授業の基盤を作る必要があるのだ。

そして、記念すべき楼城館女学院での初授業は、待ちに待った“魔法”の時間だった。

魔法の授業名は、精霊魔法学という。
精霊魔法学の教師は、金の髪に眼鏡をかけた女性だった。
どこか抜けている雰囲気はあるが、これでもレッドクラウンの高レベル魔法使いである。

「さてさて～……はじめまして、新入生の皆さん。私が皆さんに魔

法の手ほどきをすることになったミファエル・セルエイラです。よろしくお願いしますね～」

のんびりとした話し方の女性は、そう言いながら教室を見渡した。
ミファエルは、十一段階の称号の中でも上から四番目の実力者だった。
努力と才能の二つがなければ、この位には立てないという事実が、彼女に内包された力を示していた。

「それでは今日は、精霊魔法の基礎からお勉強しましょうね～」

そう言うと。ミファエルは説明を始めた。

「精霊魔法とは、私たちが存在する現実世界とは別の位相にある“幻想世界”に存在する精霊と契約を結ぶことで行使することが可能になる、特殊な術のことです」

精霊には沢山の種類がいる。
風の精霊や火の精霊と言った四大元素だけでなく、天使や悪魔、鬼や妖怪も全部まとめて“精霊”と呼ぶ。

「精霊と契約することを、“精霊契約―≪コントラクトエレメンタリー≫”といいます」

精霊契約は、精霊との契約だけではなくその儀式そのものも、その言葉で指す。
現実世界と幻想世界を一時的に結ぶことの出来るアイテム、“境界鏡―≪ラインゲート≫”を用いて一時的に門を開き、声と魔力を投げかけて契約を結ぶのだ。

そこまで説明して、ミファエルは堅くなっていた口調を柔らかいものに戻した。

「相性の良い精霊さんを呼び出して、無事に契約をすることが出来れば、精霊さんから“精霊石―≪エレメントストーン≫”というアイテムを貰うことが出来ます」

精霊石は指令との契約の証である。
これを持っていれば、境界鏡を用いらずとも精霊を呼び出すことができる。

「そして、呼び出した精霊さんから力をお借りするには、長い儀式によって意思の伝達と魔力の譲渡を行わなければなりません。この時間を短縮し、言語詠唱による現象の発現と魔力の譲渡をサポートするのが、“装霊器―≪エレメントローダー≫”です」

装霊器に精霊石を装填し、魔力を流しながら言語詠唱をする。
これによって、かつては最低でも半日かかる長い儀式を最短で一声まで短縮させたのだ。
もちろん、強力な術を使いたいのなら更に時間をかける必要はあるが。

「今回は早速、境界鏡を使って召喚をしてみましょう。精霊石は、契約が成功したら精霊さんがくれますから、安心してくださいね」

配られた境界鏡は、小さなリングだった。
これを右手の中指に嵌めて、詠唱をするのだ。
教室には特殊な結界を張ってあるため、少々“事故”が起こっても問題はない。

椿は深呼吸をして意気込みすると、右手を眼前に掲げて覚えたての詠唱を始めた。

「【世界を結ぶ・境界の円環よ】」

青白い光が、椿の周りに浮かび上がる。
その光は円環を象り、椿の右手を囲む。

「【幻想を喚ぶ・誓いの輪廻よ】」

椿の右手の先にある空間に、緩やかに回転する輪が生まれた。
その輪の中は、色がないのにもかかわらず向こう側を映していなかった。

「【我が声と血と魔力に応え・その姿を我が前に顕現せん】」

椿の双眸は、風が凪いだ水面のように揺らぐ円環の中を、じっと見据えていた。
瞬きすらせずに見つめるその瞳には、揺らぎない強い意志が宿っていた。

「【来たれ・我が友よ・来たれ・我が右腕よ・来たれ・我が道を共に歩むものよ】」

その瞳に宿る光と同様に、その声には万難排する力強い決意が乗せられていた。

「【顕れ出でよ・幻想の住人よ・神崎椿が・ここに望む】」

最後に区切られた言葉と共に、円環が強く輝いた。

やがてそれは炎となり、陽炎のように揺らめく。
そして、椿の前に精霊が舞い降りた。

赤い身体と金色の目。
長い胴体と短い手足。

たまに小さく火を吐くトカゲが、椿の前に浮いていた。
一瞬面食らった椿も、すぐに気を取り直した。

「【我は汝と契約を望む・我を認めるならば・証をここに】」

トカゲはくりくりとした目で椿を見上げた。
手のひらサイズと言うこともあって、妙に可愛い。

トカゲは、こくりと頷くと、真紅の宝石を残して幻想世界へ戻っていった。
その炎のような色の精霊石を手にとって、椿は漸く一息ついた。

そして、精霊石をのぞき込むと“刻印”が刻まれていた。
これは、精霊が契約者に与える自身を喚ぶための名前だ。

「あれく……アレク、か」

椿は、その“赤”を、愛おしげに胸に抱いた。

†

装霊器は、個人の希望に合わせてオーダーメイドで発注することが出来る。
だが、そのためにはまず精霊と契約しておく必要があるので、初日の授業以降でしか発注をすることができない。

名家出身の中でも特に伝統と格式を持つ家は、すでにオーダーメイドで装霊器をつくって持ってきている人もいる。だが、楼城館女学院の装霊器職人は腕が良いので、装霊器に関わる秘伝でもないかぎり、学校で作ってもらっている場合が多い。

初日の授業を終えると、装霊器の発注のために生徒達には二日間の休日が与えられる。
この間に精霊から得意な事を聞くなり、自分との相性を検討するなりして装霊器のデザインを決めて専用の窓口で発注するのだ。

寮から西へ十五分程歩くと、装霊器作成に携わる施設が見える。
この施設は、精霊魔法の練習場やトレーニングルーム、資料室などもある精霊魔法のための建物だ。

「えーと、三番窓口はっと」

係員に指定された窓口で、希望を書いた紙を提出する。
そこで、窓口にいる職員がアドバイスや指摘をすることでより現実的に作成できるように調整していくのだ。

そのためには、係員にまずどういったタイプの装霊器が欲しいのか相談する必要がある。
そのタイプによって職人が変わるため、この相談後に窓口を指定される形だ。

三番窓口を見つけると。椿はその列に並んだ。
新入生は今日と明日の二日間の内に発注しなければならないのだ。

「ねぇねぇ、君も新入生でしょ？」

椿は、後ろから声をかけられて振り向いた。
ダークブラウンのショートヘア、ボーイッシュな女の子が朗らかな笑顔を浮かべて立っていた。

「はい……と、ここにいるということは、貴女も？」
「うん。僕は佐倉奈津、一年Ｂ組所属の新入生だよ」

奈津は、腰に手を当てながらウィンクをして、自己紹介をした。
気さくなタイプの同級生に会えたことで、椿もある程度ここに来た不安を払拭することが出来た。

「私は神崎椿。クラスは……あ、同じだ」
「え？そうなの？……よかったぁ、話せる人いなくてどうしようかと思ってたんだよ」

そう、大きく息を吐いて奈津は安心したそぶりを見せた。

「三番窓口って事は、佐倉さんも装着型？」

「うん……っていうか、奈津で良いよ。僕も椿って呼ぶから」

ぐっと真剣なまなざしで身を乗り出す奈津に、椿は嬉しそうに頷いた。

この三番窓口にくる人は、みんな装着型と呼ばれる装霊器を求める生徒だ。

ようは、鎧やガントレット―（手甲）ということだ。

一番窓口は剣や盾と言った武器型。二番窓口は銃や弓と言った射出型。四番窓口はそれ以外の特殊型と呼ばれるものだった。特殊型は他の者と分類が難しいということもあり、そういった意味でまずは係員に相談することが義務づけられていた。

相談を終えた後に合流する、と奈津と約束を交し、椿は自分の装霊器の相談を開始した。

†

相談を終えて施設の外にあるベンチで待っていると、十五分ほど立った頃に奈津が来た。

「お待たせ～」

「結構かかったみたいだね」

椿が立ち上がりながら言うと、奈津は困ったように笑った。

「いやー、フルアーマーにしようかと思ったんだけど、慣れない内からそれは無理があるって言われちゃってさ」

「フルアーマーって、全身鎧って事だよね？」

「うん、そう」

それは無理があるだろうと、椿は苦笑いしながら頷いた。

重量もさることながら、精霊魔法を習い始めたばかりでは上手く使いこなすまで授業についていけないだろうと呆れられた、と奈津は肩を竦めながら零した。

「それでさ、これからだけど……“戦鎧―≪ウィッチコード≫”を見に行かない？」

「あー……うん、行こうかな」

戦鎧とは、魔法使いが着る戦闘服のことだ。

防寒防熱防弾防刃、おまけに対魔法や対呪詛までかかっているもので、邪霊と戦う際に絶対必要となる魔法使い達の基本装備だ。

「もうこなったら、戦鎧で全身鎧を作らないと」

「あはは……どうしてそんなにこだわるの？」

やけに全身鎧にこだわる奈津に、椿は首をかしげて訊ねた。

奈津は、その質問に胸を張りながら自信満々に答えた。

「装着、変身――ヒーローの基本じゃないか」

悪の組織に改造された身体を、正義のために使うヒーロー。

弱者を護り、強者をくじく。勧善懲悪の正義の味方――≪ヒーロー≫

……それが、奈津が目指す“魔法使い”の姿だった。

「おお……カッコイイ、かも」

熱意を持ってヒーローを語る奈津に、椿は感心したように呟いた。

それをしっかりと聞き取っていた奈津は、目を輝かせて椿の手を取った。

「そうだよね！カッコイイよね！……なのに、誰も僕の夢を真面目に聞いてくれないんだ」

親としては、夢見がちな娘をなんとか更正させたかったのだろう。

だが、奈津は夢見がちなどではなく、常に本気だったのだ。

「椿はどんな戦鎧にするの？」

「うーん、色は紅で……あとは、もう改造制服で良いかも」

特にこだわりがないのか、椿は悩んだあげくそう言った。

戦鎧は、特定のアイテムに収納することが出来る。そのため、どこでも持ち歩いてすぐに身に纏うことが出来るようになっているのだ。

装霊器のほど丈夫ではないし、強い邪霊の攻撃を防げる訳でもないが、集団戦における味方からの“不慮の事故”を防ぐためには必須の装備だった。当然、弱い邪霊相手では、あるとないとでは大きく違う。

戦鎧の施設は、精霊魔法に関わりがあるため先ほどまでいた建物のすぐ裏側にある。
そこで、オーダーメイドの戦鎧を発注する。

戦鎧担当の係員に椿が希望を言っていると、横で熱い討論が聞こえてきた。
一緒にいた、奈津だ。

「ベルトに収納して、かけ声と共に装着……これが変身の醍醐味だよ！」
「何言ってやがる！ヒーローと言ったら胸に光るカラータイマーだろうが！」
「それはヒーローじゃない！超人だ！」
「なんだとォっ？！」

厳つい中年男性と奈津が、ともすれば口づけでもしてしまうのではないのだろうかという距離で怒鳴り合っていた。椿はその様子に苦笑いしながら、ここが公共の施設だと気がついて慌てて二人を止めに走った。

「ま、周りのお客さん迷惑してるからっ！」
「ベルトなんて飾りだろうが！胸に輝く魂一つあれば、全身タイツでも問題ない！」
「はっ！飾りの良さも解らないなんて、おじさんホントにヒーローがなんだか解ってる？」

「二人とも、ダメだってばっ」

止まる様子の見えない二人の間になんとか割り込もうと頑張るが、椿では熱意の固まりのような二人を止めることは叶わなかった。

「もうっ人様に迷惑をかけることが、ヒーローのすることっ！？」

だからだろう、思わずそう言ったのは。

密かにヒーローに憧れていた、ピントのずれた乙女回路。

そう――彼女も、中学生が一度はかかる病気にかかったことがあるという、黒歴史の所有者だったのだ。

そんなことを口走ってしまい、椿は目に見えて顔を赤くした。

椿にとっても、できれば忘れ去りたい過去だったのだ。

だが、ヒーローに対する並々ならぬ熱意をもつ二人には、色々な思惑を通り越して壁面どおりに伝わっていた。

「なんて、ことだ」

「僕としたことが……一番大切なことを忘れていたよ」

両膝を付いてうなだれる、可憐な少女と厳つい中年。

その二人の前で息を切らせながら顔を真っ赤に染めている美少女。

カオスである。

「椿、僕は君に大切なことを教えられたよ……ありがとう、親友」

「椿って言うのか、お嬢ちゃん。俺の名前は柿沼荘厳。嬢ちゃんの戦鎧は、俺が全身全霊を込めて作らせて貰うぜ」

「おっちゃん、僕は？」

「あ？」

再びにらみ合いを始めた二人に、椿は大きく息を吐いた。

「ヒーローは仲間割れしない」

「っ！？――椿」

「っ！？――嬢ちゃん」

異口同音に反応を返されて、椿は指で額を揉んだ。

早くも開き直ろうとしていた。きっとそれは、彼女の強さだ。

「心を入れ替えたぜ、俺は。坊主、アンタの分も作らせて貰う」

「僕は女の子だよ？……今、どこを見てため息をついたっ！？――

まぁ、いい。よろしく頼むよ、世界最高峰の戦鎧職人の実力……見

せて貰うよ？」

割と重要なワードが呟かれたのだが、疲労から係員のお姉さんに慰

めて貰っていた椿は、それに気がつかなかった。

†

戦鎧を作る際のごたごたを漸く終えた椿は、妙に満足した雰囲気の奈津を連れて寮に帰るところだった。奈津は、目に見えて嬉しそうである。その様子を見ていたら、椿はいつの間にか憔悴していたことも忘れて微笑んでいた。

奈津は椿の笑みを見て、恥ずかしそうに顔を逸らした。
その様子がおかしかったのか、椿は口元に手を当てて小さく笑った。

夕暮れの空は、炎のように赤い。
その赤に溶け込むように奈津が走り、少し前で足を止めた。

「僕、さ」
「奈津？」

絞り出すように紡がれた言葉に、椿は首をかしげた。
その様子からは、先ほどまでの天真爛漫といって差し支えのない雰囲気が、なりを潜めていた。

「自分で言うのもアレだけど、へんな趣味だしさ、馴れ馴れしいって、中々友達が出来なかったんだ―」

背を見せているため、表情は見えない。
だが、その背中は、どこか泣いているように見えた。

「ヒーローになりたいって夢を、笑わないで聞いてくれたのは、椿が初めてだった」

真剣に語れば語る程、現実を見ろと失笑される。
他の名家との社交場に出たとき、奈津に向けられる視線は、嘲笑か侮蔑だった。
いつまでもくだらない夢を見ている、子供。それが奈津への、周囲からの評価だった。

「だから、ね……その、良ければ何だけど……僕の、友達になってくれると、その」

上手く言葉が紡げずに困る奈津を、椿は無言で追い抜かした。
奈津は一瞬驚愕に目を見開き、そして自嘲するように俯いた。
だが、奈津の目の前には、自分を追い越した椿の手があった。

「え？あれ？」

困惑しながらも、差し出された手と振り向いて奈津を見る椿を見比べた。
中々手を取らない奈津に、椿は大きくため息をついた。

「はぁ……私はもう、奈津の親友だって聞いたんだけど？」

名家に転がり込んだような形である椿も、この名門校で友人が出来るか不安だった。
そんな時に一番最初に声をかけてくれたのは奈津で、友達になってくれたのも、奈津だ。
だから椿は、顔が見えなかった奈津の前に回り込んで、手を差し出したのだ。

「椿……うん……うんっ……うんっ！」

奈津は差し出された手を取ると、椿に並んで歩き始めた。

すれ違う人の顔も解らない、昼と夜の狭間。

黄昏時に繋がれたその手は、寮につくまで片時も離れることがなかった――。

第一話　出逢い（後書き）

処女作という訳ではありませんが、どこかに公開するのは三～四年ぶりになります。
また、三人称小説は初めてですので、至らぬ点がありましたら、是非教えてください。

追記　２０１０／０８／１９

前半部分を大幅改訂。
他の部分も少しずつ直していきたいと思います。
とりあえず、後の話と意味が通じるように、と。

第二話　友達（前書き）

ここまでが導入部になります。
次回から、もう少し短くなります。

第二話　友達

――朝だ、起きろ。朝だ、起きろ。朝だ、起きろ。朝……

妙に渋い声が、寮の一室に響く。
布団からもぞもぞと這い出た白い手が、その怪音の発生源と思われる目覚まし時計に振り下ろされた。重力に従って振り下ろされただけなので、目覚まし時計は壊れる様子もなく停止した。

「うぅ……おじいちゃん、なんでこんな声入れたの？」

偏頭痛でもしているのか、椿は左手で頭を抱えながら起き上がった。音声入力式の目覚まし時計に入っていたのは、妙に渋くて無表情なのにお茶目な、彼女の祖父のメッセージだった。

「ふぁ……ん、今日も良い天気」

椿は大きく伸びをすると、カーテンを開けて朗らかに笑った。
一日の始まりは、晴れでも雨でも空を見上げることから始める。
それが彼女の、日課だった。

楼城館女学院の生徒寮は、一人部屋である。
家に伝わる秘伝の魔法を勉強するときのことなどを考えて、一人一人に大きな部屋が与えられる。中にはトイレとシャワーだけでなく、台所に実験室までついている豪勢ぶりだ。
贅沢とは無縁の質素な生活を好む祖父母の元で育った椿にとって、この環境には未だに慣れることが出来ずにいた。

祖父母が贈ってくれた野菜と米、そして学院内の都市で購入した青魚で朝食を作る。
自給自足は、質素な生活の強い味方。だから、こっそりカイワレ大根とミニトマトの苗を持ち込んで育てていた。貧乏性ではないと信じている。

朝食を食べ終わると、着替えて学校へ行く準備をする。
生徒寮から校舎までは徒歩三十分～四十分程度なので、余裕を持っ

ていればのんびり歩いても到着する。
椿は準備を終えると、部屋の遺影に手を合わせた。
「行ってきます――お父さん、お母さん」
手を合わせて祈る椿の首元には、二つのリングがネックレスになってぶら下がっていた。

†

出がけに奈津に声をかけ、一緒に登校する。
今日からこれも、椿の日課である。
寝起きの悪い奈津を爽やかに引っ張り、十分余裕がある時間に教室に着いた。
そこで初めて判明したのだが、奈津の席は椿の一つ前だった。

「おー……これは嬉しい誤算だね」
「うん、確かに」

そんな事を話ながら、二人は嬉しそうに席に着いた。
見知った人間、それも出来たばかりとは言え親友と呼び合える友達がすぐ近くの席にいるということは、二人にとって心強かった。

「一限は、歴史学かぁ」
「奈津、苦手なの？」
「うん。読書感想文とかは好きなんだけど」

得意な科目ではなく、あくまで好きなこと。
あまり勉強が得意ではないと言っていた。

憂鬱な様子で教科書を取り出す奈津を、椿は苦笑いしながら慰めた。

†

予鈴が鳴ると、教室の扉が開く。
HRは簡単な注意事項しかなかったのでその時間に予習をしてはいたものの、実際に授業が始まると緊張するのか、奈津は妙に姿勢を正していた。

「こ、こんにちは。初めまして」

入ってきたのは、男性の教師だった。
ボーイソプラノの声は、本当に成人しているのかと疑いたくなる。
目元が隠れる程の長い前髪と、猫背で低く見える背。頼りなさそうな教師だった。

「私の名前は遠峰雅人といいます。若輩の身ですが、皆さんに一生懸命指導していきたいと思います」

そう言って頭を下げる姿は、生徒相手というよりも職場の上司にしているようだった。
名門校の教師としてそれはいかなものかと疑問に思った生徒も居たが、歴史教師ならあまり関係はないのかと、各々で完結させていた。

「まず始めに、“創造主―≪ワールドロード≫”があられました――」

紡がれていく言葉は、神話を語る調べの様に聞こえる。
だが、これは“歴史”なのだ。人々が……幻想と現実の住人達が歩んだ、確かな軌跡なのである。

「創造主は、始めに我々を生み出しました。現実という枠に存在する、人間達です」

実際、幻想と現実のどちからが先に生まれたかについては、判明していない。
両者とも多世界の存在を知ったときには、すでにお互いがあった。
そのため、先に現実世界が生まれたというのは、人間優位の解釈に過ぎなかった。

「その次に、創造主は幻想の世界を生み出しました。これが、精霊達です」

“現実世界―≪ギアワールド≫”と“幻想世界―≪ファンタズマワールド≫”これが、人間と精霊達がそれぞれ住まう世界である。

「創造主は我々と精霊に大いなる加護を与えました」

それぞれの種族が繁栄していくことを願って、創造主は長く加護を与えていた。
そして、人も精霊も徐々に力をつけていった。

「最早加護なくしても、人々も、精霊も、不自由なく過ごせると判断した創造主は、一人“起源世界―≪アカシックワールド≫”へと去ったと伝えられています」

授業前とは比較できないような朗々とした声が、教室に響く。

「ですが、その後、邪霊と言われる存在が世界を荒らし始めました」

どこからか突然現れた、邪霊。
始めは人を襲う精霊かと思われていた彼らは、いつしか境界鏡を用いらずともこの世界に現れて人を襲うようになっていた。

「邪霊を率いる謎に包まれた邪霊王と、精霊魔法を駆使する人間達。やがて人間は大きな組織を持つようになり、邪霊と人は本格的に戦い始めました」

精霊器を持って徒党を組む人間と、恐ろしい力を持つ邪霊。その戦力は、未だほとんど姿を見せない邪霊王を考えなければ、人間が優位と言えた。

「これが、人と幻想と邪霊――三種族にまつわる過去から現代への軌跡です。本格的な歴史の勉強に入る前に、今日は初日と言うことでこのお話をさせていただきました」

そう話すと、丁度終了の鐘が鳴った。

雅人は、再び気弱そうに腰を曲げると、日直の生徒に号令をさせて、退室していった。

†

昼食の時間になると、生徒達は皆自由に移動する。
屋上、食堂、花壇、中庭……どこへ行っても構わない事になっていた。

椿と奈津の二人は、中庭で食事をするために、大きめの木の根元に茣蓙を引いていた。
この茣蓙は、椿の私物である。

奈津が購買で買ったお弁当なのに対して、椿は手作り弁当だった。
焼き魚におひたし、漬け物、煮物、味付けご飯と質素ながら食欲をそそる純和風のお弁当だった。

「椿、美味しそうだね……え？これってもしかしなくても、手作り？」
「うん。というか、奈津のお弁当も美味しそうだよ」

お弁当を食べながら、互いのお弁当を評価する。
お嬢様学園というだけあって、見事なバランスの豪華なお弁当だったのだ。

「ねぇ……一口貰っても良い？」
「いいよ。それじゃ、私も味見♪」

想像どおり美味しかったのか感心する椿の横で、奈津は驚愕に目を見開いていた。

「なにこれおいしい」
「そう？ありがと」

椿は料理が得意だ。

和洋中となんでもござれ、料理は椿の趣味なのだ。
その味は、一流料亭のそれに勝るとも劣らないというのは、椿の横で驚いていた奈津の感想だった。友人補正つきだが。
確かにかなり美味しい部類に入るのだが、妙に何でも出来る祖父に及ばないことから、椿の自己評価はあまり高くはなかった。

「やばい、癖になる」
「――作ろうか？」

ぎらぎらとした目で椿のお弁当を見る奈津に提案すると、奈津は勢いよく顔を上げた。

「いいのっ！？」
「う、うん。一人分も二人分も手間は変わらないし。それに、誰かに喜んで貰った方が、作るのも楽しいし」

そう、椿が照れながら笑うと、奈津は感動したのか涙目で椿の両手を握りしめた。
その尋常ではないテンションに、椿が微妙に引いているのには気がついていなかったが。

「ありがとう、椿！君は僕の心のともっ！？」

言い切る前に、奈津の頭に水がかかった。
結果的に奈津が盾になったので椿は濡れなかったが、奈津は足下までぐっしょりと濡れていた。おまけに、勢いが強すぎて威力があったのか、痛そうに頭を抱えていた。

「もう一度言ってみてくださるかしら？」

奈津の頭を撫でて痛みを和らげようとしていた椿は、奈津にかかった水の水源と思われる方向を見た。すると、漫画の世界から抜き出たような金髪縦ロールの少女が、白髪赤目にセミロングの少女を威圧していた。

明らかに怒りが浮き出されている強い威圧感を、白髪の少女は無表情に受け流していた。

「急に奇声を上げる人とは関わりたくない」

椿が周囲の話に耳を傾ける限りでは、事の始まりは、どうやら縦ロールの少女が高笑いをしながら白髪の少女に嫌みを飛ばして、それを流された上に悪口で返されたと言うことのようだった。

「ふ、ふふ、ふふふ」

一触即発な空気の中、身体をびしょ濡れにしていた奈津がゆっくりと起き上がった。
痛みは取れて怒りがやってきたようだ。

「周りの迷惑も考えられないなんて、たちの悪い“子供”だなぁ」

肩を竦めて「やれやれ」とため息をつく奈津を、人を射殺せそうな目で縦ロールの少女が睨み付けた。

「ハンッ……庶民の言葉などで、私(わたくし)が易々と挑発に乗るとでも？」
「あれ？自分のことだって思ったの？……別に僕は“誰”とは言ってないけど、思い当たる節があるならそうなんだろうね」

両者とも一歩も引かず、にらみ合いを続けていた。
決闘でも始めるのではないかと、周囲の人間が止ることも出来ずに緊張して見守る中、動いたのは椿だった。

椿はまず、白髪の少女も奈津同様濡れているのに気がついて、ハンカチを持って近づいていた。奈津を拭こうとしていたのだが、それよりも先に喧嘩に乗りだしてしまったので、白髪の少女の下へ行ったのだ。身体を拭きもせずに立っていたので、体調でも崩したのかと心配になったというのが、一番大きな理由だった。

「大丈夫？」
「――だれ？」

少女は、首だけ動かして椿を見た。
小首をかしげる少女に、椿はハンカチを差し出した。

「私は神崎椿、あっちの黒い子の、友達」

そう言いながら、椿はハンカチを受け取ろうとしない少女の髪を、自分から拭い始めた。
嫌がればすぐにでもやめようと考えていたが、少女は抵抗もせず受け入れていた。その姿は小動物のようで、椿の母性本能をくすぐっていた。

「私は千堂・ラミネージュ・オールアクセン。よろしく」

相変わらず無表情だが、しっかりと名乗り返してくれたので、椿は笑って「よろしく」と返した。ぐしぐしと顔を拭ってそのハンカチをラミネージュに渡すと、大きくため息をついて奈津と縦ロールの少女の下へ駆け足で近寄った。

「奈津！」
「椿、ちょっと待って。このお蝶婦人に解らせる必要があるから」
「庶民は嫌みの語彙もお粗末ですわね」
「あ、嫌みって解ったんだ。偉い偉い」

縦ロールの少女は、笑顔だった。大きく晒された額には、青筋が浮かんでいる。
奈津は、笑顔だった。よほど寒いのかそれとも怒りからか、肩が震えている。
椿は、無表情だった。何を考えているのか、俯いているため目元が見えない。

「いいでしょう！このレイア・イルネア・エルストルに歯向かった事を後悔させて差し上げますわ！」
「げ……装霊器持ち」

発注してまだ届いていない段階で装霊器を持っているものは、よほどの名家のものだ。
精神のある程度の成熟が求められる精霊魔法において、十五歳未満の子供に装霊器が与えられたりはしない。数ある名家も、精霊契約はさせても装霊器は与えられないのだ。なにせ、その年頃の子供に、装霊器職人は装霊器を作るたがらない。腕の良い職人なら尚更。
それでも装霊器を持っているのは、専属の職人を抱える名門中の名門くらいだった。

更に言えば、エルストル家は超名門と謂われる大家だ。
代々跡取りに受け継がれる強力な“守護精霊―≪ガーディアン≫”と装霊器を持つ家で、同じく名門のオールアクセン家と、精霊魔法名門大家の双璧を為していた。

レイアは、腰の後ろに掛けていた一振りの剣を掲げた。
金と銀で鮮やかに装飾された剣は、切っ先がなく平らになっている。
平和と人を慈しむことの象徴であるクルタナと呼ばれるその剣は、
安定の精神を魔法の刃で革新するという、エルストル家の家訓に基
づくものだった。

剣鍔と剣真の間に輝く青い宝石は、紛れもなく精霊石。
装霊器に精霊石、精霊魔法を行使する準備が整っていた。

「はっ……名門を盾にするやつに、僕が屈するとでも……」
「奈津」

短く呼ばれて、奈津は動きを固めた。
そして、引きつった顔でゆっくりと斜め後ろを見た。

「つ、椿……」
「水を掛けられて怒るのは解る。でも、人に悪口を言うのが、“ヒーロー”のすること？」
「ぐっ」

その場に、両膝を付いてうなだれる奈津。
椿は、挫けずに真剣にヒーローを目指す奈津に、自分からヒーロー
を否定するような行動をとって欲しくなかったのだ。それは椿の我
が儘だろう。けれど、椿は奈津がヒーローを目指すと語った夢を、
自分なりに応援したかったのだ。

目に見えて落ち込んでいるためレイアも少し引いていたが、ここで
自重できるのならそもそも喧嘩腰にはならない。彼女は、負けず嫌
いだった。

「ふ、ふん……ヒーローだなんて、ずいぶん夢見がちなようですわね」

なるべく見下すようにしているが、急展開について行けず無理をしているのが丸わかりだった。その言葉に強く反応しそうな奈津は、まだうなだれていて聞こえていなかったので。それは不幸中の幸いと言えたが。

椿は、腕を組んで言い放ったレイアを、正面からじっと見つめた。レイアは、その視線に負けじと胸を張る。

「人の夢を笑っていたら、自分の夢は叶えられないよ」

誰かの夢を笑う人間は、自分の夢を笑われても何も感じなくなっていく。

やがて人は自分の夢に誇りを持てなくなり、夢を見ることを諦めてしまう。

椿はそこまで悟っている訳ではない。

だが、例えそれが嘲笑だとしても、言葉による“暴力”には変わりない。

暴力に出来ることは壊すことだけ。壊した後には善も悪も何も残らないということは、椿は誰よりも知っていた。

レイアはその真摯な視線に晒されて、居心地悪そうに一歩引いた。

そして、ついに負けたように視線を逸らした。

「これで……」

「？」

小さく呟くレイアの様子に、椿は首をかしげた。
レイアは、勢いよく背を向けるとそのまま走り去った。

「これで勝ったと思わないことですわ！」

そう、素敵な捨て台詞を残して。
あっけにとられて、椿は再び大きくため息をついた。
そして、奈津を起こしてお弁当と茣蓙を回収してその場を立ち去った。

その後ろ姿を、ラミネージュはじっと見つめていた。
胸に、渡されたハンカチを抱きながら――。

†

授業が終わり、寮へ帰る道すがら。
奈津は、すっかり立ち直っていた。

「それにしても、色々とすごい人だったね」
「ホントだよ。制服乾くかな？」

現在、奈津は学校指定のジャージを着ていた。
制服は、教員に貰った紙袋に詰めてあった。

「しっかし……まさか同学年に“エルストル”がいるなんてなぁ」
「そんなにすごいの？」

椿の家は、名門という訳ではない。
ただ、全ての魔法使いの憧れと呼ばれている、国家直属魔法使い集団“特殊戦術魔法騎士団―≪エレメントナイト≫”――通称、騎士団――に祖父母で勤めていたというだけなのだ。祖父母とも、というのは確かにすごいことだし、現に椿の祖父母はその功績もあって、現在資産家とよばれる程度には蓄えがあったが。

祖父母一代で築いた名家だが、歴史在る名門という訳ではない。
そのため、どこの家の誰それがすごいといった情報は、ほとんど入ってこなかったのだ。

「うん。激流のエルストルと稲妻のオールアクセンっていったら、名門の中でも双璧を為す大家だよ。で、この二つ、なんだかやたら仲が悪いんだ」
「それで、あんなところで喧嘩を？」
「たぶんね。家同士の確執ってやつじゃないかな？」

家同士の確執。
両家に何があったのかなど、椿は知るよしもない。
けれど、自分の意志とは関わりのないところで、仲が悪くなると決

まっているということが、椿は無性に悲しかった。

椿のやや暗くなった表情の意味を掴んだ奈津は、椿に優しく微笑んだ。

こうやって、誰かのために落ち込めるということは、実は大きな事だと奈津は思っていた。

それが出来てしまう親友だからこそ、不当な悪意から守りたいと、奈津は真剣に考えるのだった。

†

寮に帰った後、椿は夕食を食べ終わって翌日の予習をしていた。

ノートに向かってシャーペンを動かしていると、チャイムが鳴ったのでこれに応じた。

「はーい」

鍵を開けると、そこには青い帽子と青い作業服の女性が立っていた。

その手には、大きな木箱を持っている。

「こんばんはー。毎度ありがとうございます、柿沼荘厳戦鎧職人助手の、風桐霧です」

満面の笑みで頭を下げる霧に、椿は慌てて頭を下げた。

「あ、はじめましてっ。神崎椿です……って、柿沼さんの？」

「はいっ。戦鎧のお届けに参りましたっ……それから、装霊器の方も」

「装霊器も？」

荘厳に頼んだのは、戦鎧だけだったはずだ。

だが、何故か装霊器も届けに来たと、霧は言った。

「はいっ……師匠が是非装霊器も手がけたいとおっしゃったのでー」

「そうなんですか……何から何まで、ありがとうございます」

「いえいえー。師匠にも、喜んでたって伝えておきますねー」

そう言うと、霧は頭を下げて次の配達をしに駆け戻っていった。

淀みない動きで場を去る霧を見送ると、椿は木箱を持って部屋に入った。

木箱を床に置いて、まずは付属の小さい箱を空ける。

中には赤い指輪が入っていた。戦鎧は、こういったアイテムに収納して持ち歩くことが出来る。そして、自分で設定したキーワードでいつでも装着することが出来るのだ。

「えーと……【キーワード・設定】」

キーワードは特定の行動でも構わない。
椿は、左手の中指に指輪を嵌めると、そこに唇を落とした。

「【装着】」

装着のキーワードを音声入力するのは初回のみだ。
その後は、設定した行動で自動装着される。すると、椿の周りに浮かび上がった光の粒子が、椿の身体を包み込んで真紅の戦鎧を構築していく。

基本の形は紅のブレザーとネクタイ、それにロングスカートに同色のブーツ。
ブレザーの下には紅のベストを着ていて、腰の横からスカートの半ばまでメタリックレッドの鎧が嵌められている。
ブーツにも鉄板が仕込んであり、手には指の出るグローブ。左手のみ手の甲と二の腕部分に鎧が嵌められている。
ブレザーは腰の辺りに交差したベルトが巻かれていて、胸ポケットに自分の階位を表す王冠の紋章が浮かべられていた。まだ、レベル一のクリアカラー・クラウンだ。

「すごい……」

思わず呟いたのは、その展開速度と着心地だった。
展開までにかかった時間は、およそ一秒。腕の良い職人でも、通常、二秒はかかる。
更に、着心地。鎧がちりばめられた戦鎧なのに重さは感じられず、またまったく動きを阻害しないようになっていた。

続いて、装霊器を木箱から取り出す。
こちらは、右手に装着する手甲型の装霊器だ。

形は亀の甲羅の様に幾枚かのパーツが合わさった形状をしている。
ここを開くと、精霊石が嵌められるようになっているのだ。
全体を見ると菱形で、肘から手の甲までをすっぽり覆う大型のものだった。

戦鎧だけみると左手の方が重装備のように見えたが、装霊器を装着すると右手の方が防御が堅くなっていた。

椿は、契約した精霊石を左手に持つと、装霊器を胸の前にかざした。
魔力を通すと中央部が淡く光り、左右に展開する。そこに、精霊石をはめ込んだ。
自動で展開した部分が元に戻る。これで、詠唱を覚えればいつでも魔法が使えるようになる。

椿はその出来に満足すると、翌日の魔法学に期待を抱きながら、戦鎧を解除した。

†

装霊器の施設には、魔法を実習するための演習場がある。
装霊器が届いたばかりの生徒達は、今日の授業をこの演習場で行うのだ。

実際に実習するのは授業の後半。
前半は、ホワイトボードを使って座学を行う。
実習用の学生ジャージは、一学年色の緑色で、教師であるミファエルもそれに合わせて緑のラインが入った白いジャージを着ていた。

「それでは、今日は“詠唱”について、お勉強しましょうね」

そう言うと、ミファエルはホワイトボードに赤いペンを使って“詠唱”と書いた。
生徒達もそれに合わせて、持ってきたノートに書き込む。皆、今日という日を心待ちにしていたのか、その目には期待の色が浮かんでいた。

「詠唱は大きく分けて三種類と一つになります」

ミファエルは、話ながらホワイトボードに書き込んでいく。

「一つは“古代言語―≪エンシェントワード≫”です。これは、歴史の積み重ねによる強い力を宿した詠唱です。柔軟性はあまりありませんが、基礎の組み合わせによる応用や高度な広域指定型魔法などに真価を発揮します」

古代言語による詠唱は、精霊と詠唱の結びつきとそれに込められた歴史という時を経ることによる強さが売りだ。そのため、既存の詠唱から派生させることはできず、組み合わせによる応用しか派生の

手段がない。また、広く知れ渡っているという点で対人戦だと手の内を読まれやすい。その代わりに威力はかなりのもので、少ない魔力でも詠唱そのものに込められた時代という名の魔力で補えるため、高威力魔法を放つことが出来る。

「二つ目は“自創言語―≪オリジナルワード≫”です。これは、精霊さんとの意思疎通により、自分が為したいことを詠唱で指定し、魔力を贈って発動させるというものです。高度なものになるにつれ、高レベルでの意思疎通が必要ですが、低レベルは精霊に送る“合図”程度と考えて構いません。ある程度信頼関係ができたら、試してみるのも良いかもしれませんね」

こちらは、文字どおり自分で編み出した詠唱を使用するというものである。
独創的で、かつ対人戦においても相手に悟られることなく、または詠唱自体をフェイクとして使用することが出来る。だが、こちらは自分の意図を精霊に伝えて承諾して貰うという、ある程度の信頼関係が必要な上に、どうしても魔力を多く使ってしまうのだ。そのため、小手先の技に集中してしまう傾向がある。それ自体は悪いことではないが、そこに至るまでの時間を考えればあまり効率的とはいえないのだ。

「三つ目は“精霊言語―≪エレメントワード≫”です。精霊さんは、それぞれ固有の能力をもっています。信頼関係を高めることにより、その精霊さんに固有能力を使用するキーワードを教えて貰います。それから精霊さんと相談をして詠唱を決めて、発動させます」

精霊言語は、精霊が固有で所持する特殊能力のことを指す。
精霊に能力を教えて貰うには、独自の思考形態を持つ精霊と完璧な意思疎通を行い、その上で信頼関係を築き上げる必要がある。そこ

までの道のりは非常に長く、所得を目指すくらいなら新たに詠唱を覚える事を望むものがほとんどだった。だが、そこまでしたからには強力なものが多く、魔力は装霊器を起動するための最低限で構わない。小手先のような固有能力ももちろんあるが、それにしても柔軟性が高く、様々な状況で役に立つ。

「最後に“伝統言語―≪ギミックワード≫”を挙げておきます。これは、大別すれば自創言語に分類されます。それというのも、伝統言語は文字どおり、伝統的な自創言語を指すからです。歴史の古い家が代々伝えている詠唱と考えてくだされば、大丈夫ですよ」

伝統言語は、名門や大家といった伝統ある家が、代々残すことにより時代の魔力を込めさせるという、特殊な自創言語だ。これには当然守護精霊の存在も必要であるため、あまり多くの家が持っている訳ではない。高い威力と少ない魔力という大きな利点を持つが、威力の上限で言えば古代言語には劣るし、柔軟性で言えば自創言語に劣る。また、低い魔力という点では精霊言語には劣ると、色々と使い勝手が悪かった。だが、それでも完全にものにすれば伝統言語を持たぬものでは辿り着きにくいレベルの魔法使いになることが出来るという利点もあった。

「それでは、テキストの十二ページを開いてください」

椿は、持ってきた教科書を広げた。
そこに書かれている項目は、固有魔法と属性魔法だった。

「過去に同じ精霊さんと契約を交したことが、前例としてある場合は適応した古代言語の詠唱が存在します。これを、その精霊の固有魔法として扱います。精霊言語による特殊能力の使用ではなく、精霊さんの“特徴”を生かした魔法だと考えておいてくださいね」

かりかりと、真剣な表情で椿はノートへ書き込んでいく。
それは周りの生徒も同じで、静まりかえった演習場にシャープペンシルの音だけが静かに響いていた。ミファエルはその様子を見て満足そうに頷くと、説明を続ける。

「属性魔法は、その精霊さんが持つ属性を引き出すことで発動させる魔法のことです。一応、どの精霊さんでも無色の属性は持っていて、その基礎魔法を実戦するのが、今日の授業の目的になります」

ミファエルがそう言うと、生徒達は目を輝かせた。
ほとんどの生徒が、魔法を学ぶということを心待ちにしていたのだから、この様子にも頷ける。

「それでは、初めのうちはあんちょこを使用しても構いませんので、教科書に載っている初級魔法を……そうですね、二人組で実践してみてください」

入学から親しくなった友人達で、集まる。
その中には当然、椿と奈津の姿もあった。

演習場でも端の方に移動した二人は、持ってきた装霊器を装着した。
奈津の装霊器は緑色のグリーブ（脚甲）型だった。右足の方が重装甲になっていて、膝の辺りに精霊石を嵌められるようになっていた。左足も、薄めではあるが装甲が嵌められている。

「うぅ……覚えられない」
「あはは、すぐに覚えるのは難しいよね」

精霊に理解させるためには、自分も理解する必要がある。

そのため、無造作に暗記をするだけではダメなのだ。

「そんなこと言ってるけど、椿はもう覚えたの？」

「逸る気持ちを抑えきれなくて、予習してただけだよ」

遠足を控えた子供のような心境で、椿は詠唱を覚えていた。

その熱意が理解に変わったことで、しっかり覚えていたのだ。

「それじゃあ、まず私が防御に回った方が良いかな？」

「うん。お願い、椿」

ミファエルが注意している以上、大きな事故が起こったりはしない。

だが、危険が少ないに越したことはないので、覚えている方が防御に回った方が良い。

そう互いに理解して、二人は十メートル程間を空けて立ち会った。

装霊器に精霊石を装填し、魔力を流す。

装霊器の内部の回路が淡く輝き、召喚の手順を省略して力を引き出す準備を整えた。

まずは、防御に回る椿が詠唱をして、攻撃を受ける準備をする。

装霊器の装着された右腕を持ち上げて、眼前に掲げる。すると、中心部が椿に呼応するように、ぼんやりとした光を放った。精霊石は、透明なパーツのおかげで装填しても上から覗けるようになっている。

それは奈津の装霊器も同様で、装填のし忘れを防ぐための処置だった。

「【護れ・我が敵を退けし・守護の壁よ】」

詠唱を唱えると、椿の眼前に赤い光で出来た壁が現れた。

この赤は、椿の精霊、アレクの色だ。

「え、えーと【放て・我が敵を打ち倒す・現想の射手】」

奈津が椿に、まっすぐと指を向けて詠唱した。
すると、指先に緑色の光が生まれて、それが弾丸となって突き進んだ。

「おぉっ」

奈津自身、放たれた威力に目を丸くしていた。
高速で飛来した弾丸を、椿は難なく受けきって見せた。といっても、装霊器に精霊とそろっていれば、誰でも出来るレベルの威力だった。

「これが……」
「……魔法」

椿と奈津は、目の前の結果に感動を覚えながら呟いた。
赤い光と緑の光。その二つが衝突した瞬間に、魔力干渉によって起きる刹那の虹。
七色の輝きを儚く放ち消えていく魔法は、この魔法と精霊が行き交いする世界において尚、神秘的といえる光景を生み出していた。

「うん、いいね……燃えてきた！」
「そうだね、奈津……よし、もうちょっと色々やってみよう」
「おー！」

魔法の授業は危険が伴う。
それを承知していない二人ではないし、それを黙ってみているミファエルでもない。

だが、今日この日だけは、ミファエルも優しい目で監督をしていた。
初めて魔法を扱う、今日この日だけは、神秘に触れた少女達の気持ちを汲んであげたかったのだ――。

†

魔法学の余韻から、興奮も冷めないまま生徒達は浮き足立っていた。
身近にありながら、触れることの出来なかった神秘を操ったものは、みんなこんなものだ。
それが解っているからこそ、上級生達は温かい目で後輩を見ていた。

奈津は、やはり興奮しながら椿と歩いていた。
これから昼食をとるために中庭へ行くところだった。

「いやーっ……魔法って、間近で見たことあるけど自分で使った方が断然カッコイイね！」
「うん、そうだね……すっごく綺麗だった」

意気揚々と話す奈津に、椿は嬉しそうに同意を示した。
そのまま変わらぬテンションで、二人は中庭のいつものスペースに茣蓙を引いた。
今日から椿の手作り弁当と言うことで、奈津の目は輝いていた。

「いただきまーすっ」
「いただきます」

箸を手に手を合わせる奈津と、やや照れながら手を合わせる椿。
奈津が美味しそうに食べ始めたのを微笑みながら見た椿は、自分も食事を始めようとした。
だが、その前に声をかけられて、後ろを振り向いた。

「椿」
「はい？……千堂、さん？」

椿の名を短く呼んだのは、昨日椿が喧嘩の仲介をした少女――ラミネージュだった。
ラミネージュは、首をかしげた椿に頷いた。

「ラミネージュ……好きに、呼んで良いから」
「う、うん……よろしくね。ラミ」

一瞬、略したらまずかったかと椿は内心で焦りを見せたが、その予想に反してラミネージュは簡単に了承した。その頬に朱がさしていたのは、奈津しか気がつかなかったが。

「これ、返しに来た」
「これって……あ、ハンカチ」

そう、それは、椿がラミネージュの顔を拭ったときのハンカチだった。
洗濯してあり、綺麗にアイロンがけまでされていた。

「こんなに綺麗に……ありがとう、ラミ」
「お礼を言うのは、私の方」

口数は少ないが、意思ははっきり伝えてくれるその姿勢は、椿にとっても心地の良いものだった。そして、無表情でも相手を気遣える人がいるというのは、祖父という例があるからこそよく解っていた。

「私も、一緒していい？」

そう言って奈津の方を見るラミネージュの様子に、椿は首をかしげた。
だが、すぐにラミネージュの視線がお弁当と茣蓙に向いていることが解った椿は、嬉しそうに笑って了承した。

「うんっ……と、奈津も、いい？」

訊ねられて、奈津は慌てて頷いた。
ラミネージュへの対応に、どこかないがしろにされているように感じてむくれていたのだが、すぐに自分にも了承を求められて機嫌を直した。単純ではないったら、ない。

「それじゃ、僕も自己紹介しておこうかな」

奈津は、先ほどまでのどこか棘のある雰囲気を払拭して、いつものように明るく胸を張った。張る程無いが、そこは気にしてはいけな

い。

「僕の名前は佐倉奈津。僕もラミって呼んでも良いかな？」

「うん。よろしく、奈津」

椿と相対するとき程の柔らかさはないが、それでも“家”というフィルターなしに笑って見せた奈津に、ラミネージュは好印象を抱いた。はじめにラミネージュを一個人として心配してくれた椿と、その友達の奈津。この二人のような人間に、ラミネージュは出会ったことがなかった。だからこそ、この機会を逃すまいと、極度の口べたなのに頑張って昼食を一緒に食べないかと誘ったのだ。

ラミネージュは、持参したバスケットからサンドウィッチを取り出して食べ始めた。

時折おかずを交換しながら食べ進めていると、三人の前に影が降りた。

「ふふふふ……ここで会ったが三年目、ですわっ！」

縦ロールを揺らしながら腕を組んで立ちふさがる、レイア。

だが、奈津とラミネージュはそんなレイアを完璧に無視して食事を続けていた。

レイアを空気扱いする奈津とラミネージュ、俯いて震えるレイア。

その狭間で、椿はどうフォローしようかと困惑していた。

「あ、あな、あなたたちっ……この私をいったい何だと……」

「縦ロール」

「縦ロール」

今まで無視していたのに異口同音で告げられて、レイアは広い額に

青筋を浮かべた。
一触即発の雰囲気に待ったをかけたのは、やはり椿だった。
「えーと……レイア、さん？」
「レイアで構いませんわよ。別に」
とりあえず巻き込むつもりはないのか、椿に当たり散らそうとはしなかった。
「それで？私になにか用があったのではありませんこと？」
「あっ……うん、折角だから一緒に、どう？」
そう言って椿がお弁当を指すと、レイアは怪訝そうな顔をした。
「私と食事、ですか？――私は、エルストルですわよ？」
「嫌、かな？」
椿が困ったように首をかしげた事で、レイアは椿が名家に対して怯えも敬遠も媚びもしていないことが見て取れた。そんなことができる人間は、滅多にいない。
意図を感じ取ったレイアは、大きくため息をついた。
「貴女、変な人ですわね」
「へ、変？」
正直聞いたことのない評価に、椿は顔を引きつらせた。
どういった意味で“変”といったのか理解した奈津とミラネージュは、こっそり頷いていた。さりげなく頷いたのだが、椿はしっかり見ていて落ち込んでいた。

「変な人ではありますが……そうね、嫌いじゃありません事よ」
「え？」

落ち込んでいた椿は気がつかなかったが、奈津とラミネージュはレイアが柔らかく微笑んだのをしっかり見ていて、目を見開いて驚いていた。

「私も、ご一緒させていただいてもよろしいかしら？」
「う、うんっ……どうぞ」

椿が嬉しそうに隣を空けると、レイアは柔らかい雰囲気を残したまま座った。
大家にして名門エルストルは、その名に恐れた者かその名に媚びるものの二択しか周囲に存在していなかった。それはラミネージュの方もそう変わらないのだが、口べたで無表情なラミネージュよりも、レイアに集まるものの方がずっと多かった。

身分を乗り越えて接してしまうのは、誇りの伴わない虚栄心ばかり強い者にとっては不快なことだろう。けれど、レイアもラミネージュも、中規模とはいえ名門に数えられる奈津も、その隔たりのなさが嬉しかった。

この時は、四人とも考えてもいなかった。
この先、卒業して、就職して、年を経ても尚――変わらぬ友情を結ぶことになる友達になっていくことなんて。

気づかぬうちに、自然な笑顔になっていた四人は、この時はまだ――。

第二話　友達（後書き）

ここまでは、これからのお話の基盤作りでした。
本編内でしたので、一話二話とふりましたが、扱い的にはプロローグ程度の内容にしてあります。

次回から、戦闘シーンなども入ってきますが、その際残酷な描写が入るのでご注意ください。

それでは、ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

第三話　邪霊（前書き）

残酷な描写が入ります。ご注意ください。

第三話　邪霊

夜の校舎は、しんと静まりかえっている。
水の一滴でもこぼれ落ちれば、廊下中に響くであろう静寂の空間に、大きな足音が鳴り響いていた。

片方は、靴音。
よほど急いでいるのか、音の間隔が非常に短い。
片方は、鉄の音。
がしゃがしゃと大きい音を立てていることから、この音の主はよほどの重量を持っているということが解った。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ」

走っていたのは、男性だった。
夜の巡回を担当する警備員の彼は、この日もいつものようにライトを片手に巡回をしていた。だが、彼の“いつも”とはかけ離れた存在が、そこに“あった”のだ。

『オォオォオォオォオォ』

地獄の底から鳴り響くような昏い声に、彼は更に足を速めた。
もう上がるはずがないと思っていた速度は、土壇場の力が働いてどんどん上がっていた。
だがいくら速くとも――所詮人間の足に過ぎない、速さだった。

自分から離れていかない声に、彼はついに屈した。
心では逃げたいと思っていても、身体が動こうとしなかった。
手にびっしょりと汗を掻き、疲れから足は震えている。立つことす

らままならず尻餅をつき、乾ききった口内を汗で湿らせてどうにか助けを呼ぼうとした。

だが、恐怖で引きつった喉はひゅーひゅーと空気の音しか放とうとせず、冷たいタイルにしがみつくように這って逃げようとする。

『オォオォオオォ』

――その儚い逃走劇は、予想に狂わずすぐに終焉を迎える。

近い距離で“声”が聞こえて、彼は身体の向きを変えた。
尻餅をつくような形になった彼を見下すのは、黒い甲冑だった。

漆黒の鎧の手には、彼の身長程ある巨大なバスターソードが握られていた。
その剣もまた漆黒だったが、鎧よりも暗いその黒は、数多の血を啜った悪魔のように見えた。

「あ、あはは、は」

彼の口からは、もう乾いた笑いしか出てこなかった。
逃げられない状況が、長く保たれていた彼の精神を叩き折っていた。

彼が最後にその目に映したのは、漆黒の大剣を振りあげる、伽藍とした甲冑だった。

椅子に座って、黒板を見る。
一般的な教室よりも豪華な教室での授業も、一週間もすれば慣れてくる。
朝のＨＲの度に黒板から視線を逸らしたりなんか、“もう”しない。
それでもまだ肩身が狭い気がするのは、クラスメート達がこの教室の風景を“当然”のように享受しているためだろう。
ようは、慣れても馴染めてはいないということだ。

椿は小さく息を吐くと、視線を教室の扉に移す。
運動靴が廊下のタイルを叩く音がしたためだ。教師が来るなら、とりあえず馴染めていない空間にいることは、忘れておくことが出来る。

「おはようっ」

気怠げに右手をあげて入室する、つり目の女性。
緑色のジャージにかかる所々跳ねた黒髪と、生徒の前なのに堂々と咥えた電気タバコ。
彼女の名前は草加楓――椿たちの担任で、姉御肌な体育教師である。

「それじゃ、朝のホームルーム始めるぞー」

教壇に立ち、声をかける。
教壇に手を置いてやや前屈みになる仕草は、鋭い目つきと相まって少しだけ怖かった。
ここの先生はどうにも“普通”な感じの人がいないと、椿はこっそりため息をついていた。

「起立――礼」

立ち上がって、頭を下げる。
こっそりクラスメートの様子を見ると、活発な奈津でさえ斜め四十五度に傾く綺麗な礼だ。
腰の前に重ねられた手といい、幼いながらに淑女然とした仕草をしている。

椿もある程度は祖父母から教わっていたが、日常生活にしみこむレベルの礼は出来ていない。クラスメートに合わせるのが既に難しいという事実が、椿に再び大きなため息をつかせるのだった。

「――で、最後に重要な連絡だ」

つらつらと自分の“礼”について考えていた椿は、それまでの話を全く聞いていなかった。
そのことに少しだけ慌てて、しかし後で奈津に聞けばいいかと思い直す。

「――すー……っと――すー……っと、と」

だが、奈津は後ろ姿からでも解るくらい、あからさまにうとうととしていた。
これでは話なんか聞いていないだろう。

ならばせめて、重要な連絡事項だけでも聞いておこうと、椿は楓を見た。
楓は、本当に重要なことを伝えるためだろう、聞いていない生徒がいないか首を回して見ていた。

「佐倉、起きろ」
「は、はいっ」

低く、それでいて冷たくいわれて奈津が飛び上がる。
その様子に、椿は小さく苦笑した。奈津は、朝は弱いのだ。

楓は額を揉みほぐすような仕草をして、呆れていた。
だがすぐに表情を戻すと、教壇に両手をついた。

「昨晩、校舎に邪霊が出現した」

――その一言に、教室が静まりかえる。

騒ついたりしないのは、上品な家庭環境で過ごしてきたためのもの

だろう。
だが行動には表れなくとも、生徒達の目に不安が宿っていた。
それは当然だが、椿も同様だ。
邪霊によって失ったものがあるというだけに、漠然な恐怖とは言い難い。
自身に迫る、不安なのだ。

「上級生と教師で討伐を行う。だから、夕方の五時以降は寮から出るな。それ以前でも、人気のないところには行くな。何か、質問はあるか？」

質問、と聞いて椿はおずおずと手を挙げた。
祖父母から、校舎には邪霊が侵入する事の出来ない結界が張られている、と聞いたことがある。だから、何故邪霊が出現するということができたのか、聞きたかったのだ。

「あの、学校には、結界が張られていると聞いたのですが……」

クラスメート達の疑問も、同じものだったのだろう。
椿の質問を聞いて、クラスメートの視線が楓に集まった。

「強い力に集まる傾向がある邪霊にとって、ここは絶好の餌場だ」

楓はそこで言葉を切ると、電気タバコを咥え直しながら目を伏せた。

「だから学校の敷地内には結界が張ってあるが、面積が広大だということもあり絶対ではない。前例は、少ないがな」

そして、教壇越しにしっかりと生徒達を見回した。

「だから、施設には特別強力な結界が張られる。一番強いのは寮で、次が校舎だ」
「え……でも、校舎に出たんですよ、ね？」
奈津が割り込むように、不安げな声を出した。
二番目に強力な結界が、張られている。
そう聞いてしまえば、最初の連絡事項が不可解なものになる。
――いや、この時点で、もうほとんどの生徒が気がついていた。
「そうだ――つまり、それだけ“危険”な事態ということだ」
しん、と静まりかえる。
椿は不確かな胸の動機を抑えるように、右手の拳を胸元に当てた。
「こんなところで犬死にしたくなければ、外出はするな。――以上だ。起立」
不安に思って、それでどうにかなる訳ではない。
この名門、楼城館学院には教師を含めて多くの優秀な“魔法使い”がいる。
ならば、椿たちに出来ることは、注意事項を守って先生達を信じることだけだ。
その無力感と不安が混じった礼は、最初よりもずっと精彩に欠けるものだった。

†

今日の三限は、歴史学の授業だ。
いつものように低姿勢で、雅人が授業を始める。

「そ、それでは授業を始めます。今日のテーマは“邪霊”です」

内容に入り始めると、はきはきとした口調になるのは、この教師の特徴だ。
黒板に丁寧な字で“邪霊”と書いて、話を続ける。

「世界の歪みや淀み、悪意から生まれたといわれている敵対存在。それが“邪霊―≪ダークウィスプ≫”です」

具体的にどうやって生まれてきたかは解っていない。
歪みや淀みから生まれてきたというのが一般的な説ではあるが、他にも人間の悪意の結晶体という説や、強い怨念を抱いて死んだ人間の変異種という説など、諸説は多岐にわたっている。中には、外宇宙からの侵略者というものまであるのだ。

「邪霊は、強い魔力を持った人間を好んで食べます。その血肉を食

べることで己の力として強くなっていきます」

これにも諸説はあるのだが、雅人は聞き取りやすさを優先して断定した口調で話した。

「人の魂は、人の世で輪廻の輪に加わり転生します。けれど、邪霊に食べられた人間は転生することが叶いません。邪霊によって吸収され、消滅します」

その言葉に、生徒の何割かが身体を震わせた。

名門といわれる大家名家は、邪霊と戦う歴史がある。中には研究者として名をはせた者も居るが、ごく僅かにすぎない。この楼城館学院に通う生徒達は、ほとんどの家が邪霊と長く戦ってきた魔法使いの血筋であった。

「そして、邪霊達には邪霊を率いる王というべき存在がいます。それが“邪霊王―≪ロードオブウィスプ≫です」

明確な意志を持ち、他の邪霊を統べる。故に、邪霊の王なのだ。

「全ての生きとし生けるものの敵対者、その頂点である邪霊王ですが、実は古くからその存在が確認されていた訳ではありません。邪霊王が我々の前に姿を現したのは、約百二十年前、魔法使いと数多くの邪霊が戦った“邪霊戦争”でした」

今までばらばらの行動をとってきた邪霊達が、突然連携や戦略を持つようになったのだ。

人間達に対して大々的に侵攻を開始した邪霊に、国々で争っていた人間達は団結した。

人間同士で争っている場合ではないと、世界の魔法使いと現代兵器

を駆使して戦った。だが、魔力の込められていない武器ではダメージを与えることは叶わず、それまで使い勝手の悪さから、戦争ではあまり優遇されていなかった魔法使い達が重宝されるようになった。

「数々の邪霊を退けた魔法使い達の前に現れたのは、人間でした。――いえ、正確には人間の形をした邪霊、というべきでしょう」

人間と全く変わらない姿なのにもかかわらず、邪霊達の数倍の力を持った邪霊だった。

腕の一降りで数百の魔法使い達を“圧縮”してみせたその邪霊は、自ら“邪霊王―≪重圧≫”と名乗った。

「その邪霊王は、数多くの魔法使いを屠り、自分の力と数多の邪霊の力を持って人間達を圧倒しました」

数千に及ぶ邪霊をどこからか連れてきて、それらを従えて人間を襲う。

その力は凄まじく、未だに国家間の問題から足を引っ張り合っていた人間達に、叶うはずもなかった。

「五年にわたり続いたこの戦争で、人類は三分の一まで減り、そこで漸く本当の意味で人間達が団結しました」

団結したことで長く続いた戦争は、終焉に向かった。

だが、漸く邪霊王を倒した人間達は、邪霊王の最後の言葉によ、り今後も団結し続けなければならないことを理解した。

「邪霊王は死の間際にこう残しました……“今回は私の敗北だ。けれど次の邪霊王はこうはいかない。次こそは、我々の勝利だ”と」

邪霊王が一体ではない。
確証が無くとも脅威は知っている人間達は、魔法使いの育成と発展に世界を賭けて取り組むことになったのだ。

「以上が、邪霊王と邪霊戦争までの歴史でした。……こ、これで、終わります」

再び雅人が低姿勢になったことで、張り詰めていた空気が霧散した。
生徒達は大きく息を吐いて、余韻を残しつつ休み時間に入るのだった。

†

中庭にある大きな木。
その下に茣蓙を引いて、四人でお弁当を食べるのが椿たちの日課だ。
椿と奈津は純和風のお弁当。ラミネージュは自家製サンドウィッチ。
レイアは洋風のお弁当だ。

時々おかずを交換しながら雑談をしていると、いつしか話題は学校に出た邪霊の話になっていた。

「襲われたのは巡回中の警備員。魔力はそこそこあったようでしたが、邪霊が好むような魔法使いでは無かったようですわね」

レイアが得た情報を聞かせると、椿は首をかしげた。

「好む好まないが、あるの？」

だとしたら気をつけないといけないことが出てくるのか、と椿はげんなりとした顔でため息をついた。好きこのんで食べられたいと思うような特殊な嗜好はもっていないのだ。

そんな椿に、レイアは苦笑しつつも説明を続けた。

「下っ端の邪霊――個としての意志が極端に低いものは、好みなんか関係ありませんわ。けれど、種としての力が強くなってくると意志も強くなっていくのですわ」

学院の結界を抜けて、更に強力な校舎の結界も抜ける。

邪霊王程ではないが、強い意志と力を持った邪霊ということがわかる。

「強い力を持つ邪霊はより強い魔法使いと精霊を求めるようになる。だから、力を得た魔法使いについて回る宿命ってところかな？」

レイアの説明を奈津が引き継いで説明すると、椿は納得したように頷いた。

「あれ？でもそれじゃあ、何故警備員さんが？」

納得して、再び出てきた疑問に再び首をかしげる。
そんな椿に答えたのは、先ほどまでサンドウィッチを一生懸命食べていたラミネージュだった。ラミネージュは、ハンカチで口元を拭い、紅茶を飲んで一息ついてから話に加わったのだ。

「おそらく、撒き餌」
「どういう、こと？」

その言葉の意味がわからないわけではない。
だが、どうしようもなくもやもやとした感情が、すぐに理解することを拒んでいたのだ。

「オールアクセンの言うとおりでしょうね。適当な人間を狩っておいて、強い魔法使いを呼び寄せる、といったところですわ」

ただそれだけのために殺された警備員。
日常において、他人の死などニュースからほぼ毎日耳に入る。
それでも、見ず知らずの人だったとしても、椿はそうして人が死んでいくのが嫌だった。
理不尽に生命を散らす人がいるのが、嫌だった。

「椿が気に病んでも仕方がないよ」
「奈津……」
「そうですわ。まったく」

慰める奈津と、ため息をつくレイア、無言で頷くラミネージュ。
そんな三人の様子に、椿は気を遣わせてしまったことを内心で恥じていた。

椿が気に病まずとも、学院の魔法使いが解決する問題なのだ。

「まぁ、巻き込まれないように早く帰宅する。悔しいですが、それが私たちのレベルの魔法使いに出来る、最大限の“協力”ですわ」

レイアのその言葉に、椿は気を取り直して頷いた。

邪魔をしないこと。それが、彼女たちに出来る唯一のことなのだ。

†

午後からの授業は一つだけ、一般教養の数学だった。

椿は落ちてくる瞼を必死に開きながら、授業の終わりを迎えた。

「はぁー……今日の授業は終わりッと」

大きく腕を伸ばして息を吐くと、見事に寝ていた奈津を揺すった。

「奈津、授業終わったよ」

「ふぁ？」

揺すられたことで目を開けはしたが、未だ夢見心地なのか焦点は定まっていない。
そんな奈津に、椿は困ったように笑った。

「神崎さん、佐倉さん。二人は放課後残ってください。お時間は取らせませんので」

そう告げたのは、数学の教師だった。
パンツスーツに分厚い眼鏡の女性教師で、椿は未だ彼女の名前を覚えていなかった。
個性の強すぎる教師陣の中で、普通の人は気配が薄すぎるのだ。

「あ、はい。わかりました」
「え？なに？うん？」

戸惑う奈津は置いておいて、椿がしっかりと頷いたことを確認してから教師は去っていった。

「え？呼び出し？なんで？」
「寝てたからじゃない？」
「あぅ」

慌てる奈津にため息をつきながら言うと、奈津は思い至ったのか頭を垂れた。
椿までとばっちりを喰らったことが、落ち込むことに拍車を掛けていた。

「うぅ……正義の味方が寝るなんて」

「ヒーローだって睡眠くらいはとると思うよ？」

そういって、二人は帰りのＨＲが始めるまで歓談していた。

だからだろう――教師の目が虚ろだったことに、気がつくことができなかったのは。

†

放課後、椿と奈津は言われたとおり教室で数学教師を待って残っていた。

だが、一向に来る気配はなく、既に空は朱色に染まり始めていた。

「もう夕方じゃないか。先生は何をやっているんだろう？」

奈津は腕を組みながら、憮然とした表情で呟いた。

ただでさえ早く帰らなければならないといわれているのに、ずっと

こうして待っている訳にはいかない。今、この校舎は“安全な場所”ではないのだから。

「奈津、先生だって忘れているかもしれないし、一端寮に戻ろう？」

「うーん、そうだね。職員室に電話掛けて、確かめればいいかー」

うんざりしたように学生鞄を持つ奈津に、椿も追従する。

時間が進む度に、もやもやとした気持ちが自分の中で大きくなっていくことを、椿は危機感とともに感じていた。

「その必要はないわ」

かけられた声に、二人は教室の入り口で足を止めた。

女性教師が、じっと二人を見据えていた。

「遅いですよー先生。なんなんですか？こんな時間まで待たせ……」

「――飛んでっ、奈津！」

最後まで言い切る前に、奈津が大きく後ろに飛んだ。

椿も叫ぶと同時に飛んでいて、奈津の斜め後ろに着地していた。

――ドゴンッ

教室の床を打ち破る衝撃音。

何が何だか解らずとも、二人はこの状況がまずいということくらい、理解していた。

「何のつもりですかっ……先生！」

椿が叫ぶと、砂煙の先で教師が動いた。

それが自分たちへ直進するものだと気がついて、二人は教室の中央へ飛んだ。
机の上に乗って走る。奈津は途中で、自分と椿の机の横に掛けられたスポーツバッグを拾い上げて、そのまま教壇の方へ駆け抜けた。

「椿ッ」
「奈津、ありがとう！」

椿は奈津からバッグを受け取ると、装霊器を取り出した。
そして、素早く右手に嵌める。奈津も、自分の足に装霊器を嵌めていた。

「逃げていないで、こちらに来なさい」
「誰がのこのこと行くもんか……」
「どうしちゃったんですか？先生……」

厳しい目で教師を睨み付ける奈津と、同じく厳しい目だが、心配と戸惑いが込められた視線で見る椿。そんな二人の様子に、教師は感情のない声で呼びかける。

「どうもしていないわ。いいから、早く、この子の、え、えさ、えさ、え、えさ、に」

途切れ途切れの声からは、何の感情も見えない。
机の向こうで立つ教師に何が起こっているのか、ひどい砂煙のせいで二人は理解できずにいた。ただ、まったく抑揚のない声が、二人に強い不安を与えていた。

「こ、この、この子、この子の、この子の、この、こ、この子の」

壊れたテープレコーダーのように言葉を流し続ける。
もう少し余裕のある間合いに出なければ、いくら展開速度が速いと言っても戦鎧を装着することは出来ない。それは、経験の少ない彼女たちとって、致命的な隙になる。

「この子の、え、さに――――――――餌になれ」

急にはっきりとした言葉に、再び横へ飛ぶ。
今度は、教壇横のドアから廊下へ飛び出る形だ。

――ズガンッ

先ほどよりも激しい音。
その音が物語る“何か”の威力は、よほど強力だったのか黒板を後ろの壁ごとたたき割っていた。

二人はその惨状を一瞥すると、互いに顔を合わせて頷いた。
そして、その場から一目散に走り出す。

「よくわかんないけどっ」
「走りながらなら……今しか、ないっ」

椿は左手の中指に嵌められた指輪に唇を落とした。
すると、椿の身体が光の粒子に包まれたて、真紅の戦鎧が装着された。

一方奈津は、まだ持っていたバッグから、緑色の金属で出来たバックルを取り出した。
それを腰の真ん中に当てると、黒いベルトが出てきて腰に巻き付いた。

「【変……」

走りながら、左手を握って腰に当て、右手を左斜め上に突きだした。
そして、ゆっくりと弧を描きながら、右手を右へ回していく。

「……身】」

右手が力強く右の腰を叩くと同時に、左手が右斜め前に突き出された。
すると、バックルが左右に開いて機械チックな銀色のプロペラが顔を出した。
そのプロペラが高速回転しながら光を放つと、奈津の身体に光の粒子が集まった。

グリーブと同じ緑色のガントレット。
緑を基調とした、銀色のラインが入った胸の装甲。
目元を覆う、緑色のバイザー。女性ヒーローの鉄則、“口元は出す”を律儀に守っていた。

その姿はまさしく、正義の変身ヒーロー（Ｖｅｒ，改造人間）だった。

「奈津……」
「だ、だめ、かな？」

並走しながら呟いた椿に、奈津は不安げに訊ねた。
だが、椿は目を輝かせて首を振った。

「すっごくカッコイイよ！奈津！」

「そ、そう？……えへへ、ありがとう」

先ほどまでの緊迫した雰囲気が、完全に壊れていることに気がつかないまま、椿は奈津を褒めた。隠れヒーローファンは伊達ではない。

後ろから追いかけてくる気配はない。

ならば、このまま逃げ切るのがベストだ。

廊下の尽きたりを曲がり階段を下りる。一階降りて更にもう一階降りようとしたが、二人はそこで足を止めた。

「階段が――」

強い衝撃を受けて崩されている階段。

何故もう一段上の階で崩さなかったのか理解できないが、そもそも人間である彼女たちが邪霊の考えを理解できるはずがない。ただ、教室で仕留められなかったことを考えてある辺りで意外と頭が回るのか、などと考えていた。

「とにかく、反対側の階段まで走ろう！」

「うん、わかった！」

椿は頭を振って、奈津を促した。

とにかく、じっとしている場合ではないのだ。

気を取り直して走る。

一年生の教室は、邪霊に襲われた際最前線になるであろう一階から遠ざけるために、上の方の階――最上階の下、五階――になっていた。空を飛べる邪霊が少ないことからとられた処置だったが、今の二人にとってはそれが仇となっていた。

――ズドンッ

目の前を舞う瓦礫と砂煙に、二人は慌てて足を止めた。
上の階から廊下を突き破って、教師が落ちてきたのだ。

「もう、逃げられないかな？」
「みたい、だね」

窓から逃げるのには、四階は高すぎる。
それは崩された階段も同様だ。
また、上に昇のでは流石に追いつかれるだろう。それを考えると、下に降りるのは目の前の“障害”を退けるしか、手段はない。

「なるべ、なるべく、く、いた、くしな、いか、いたく、ない」

相変わらず声に抑揚はないが、先ほどまでより口調がおかしくなっていた。
砂煙が晴れると、漸く教師の姿がはっきりと見えた。

「なん、で」
「――ひどい」

その姿に奈津が、遅れて椿が、息を呑んだ。

落ちてきた衝撃か、右足はあらぬ方向に曲がっていた。
右手には、漆黒のバスターソードが握られている。だが、その細腕はとこどころ裂け、鮮血と一緒にに白い骨が突きだしていた。
力なく俯かれた蒼白な顔。口元からは、血に染まった泡が零れ出ていた。

震える奈津の横で、椿は目を閉じた。
思い浮かべるのは、幼き日の光景。比べるつもりはないが、乗り切ることは出来る。
既に、経験してきた風景なのだから。

「怖がるのも」
――隣にいる友に言うのではない。
「怯えるのも」
――目の前に佇む、邪霊に云うのでもない。
「竦むのも」
――それは、ただ。

「全部、あとで。――――今はただ、あなたを倒す……！」
――自分自身への、宣誓。

装霊器に、魔力という名の火が灯る。
青白い光は炎を属性とする精霊石を通り、その身を真紅に変えた。
決死の炎は右手を包み込み、決意の炎がその双眸に宿る。

「え、さ、に」
「行くよ、アレク」

右手を前に掲げると、同時に邪霊の身体が動く。
無理矢理動かされた身体は、人間ではあり得ない速度で剣を振った。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

装霊器から伸びた炎の剣が、漆黒の大剣を防ぐ。
力負けをすることはわかりきっているからこそ、椿が横にしていた

剣を天井へ向けて突き上げて、縦にすることで大剣を流した。

床に打ち付けられ、タイルを割り、コンクリートに突き刺さる。
その最大の好機を逃すまいと、椿は突き上げた剣を振り下ろした。
その目指す先は、大剣の柄。まずは、教師の手から引きはがす。

「はぁっ！」
「ぐゥッ」

鈍い音が聞こえて、手から剣が離れる。教師はそのまま仰向けに倒れて、動かなくなった。
だが、大剣はそれでは止まらなかった。

跳ね上がるように椿の顔を狙う大剣を、なんとか装霊器でガードする。
その衝撃に耐えきれず、椿は二歩、三歩とたたらを踏んだ。

大剣は滑らかな動きで後ろに下がった。
そして、その大剣の影からしみ出るように、黒い甲冑が現われた。
甲冑は大剣を掴むと、その切っ先を椿に向けた。

そして――瞬間移動でもしてきたかのように、素早い動きで間合いを詰めた。
反応することすら叶わず、椿はただ、振り下ろされる剣を呆然とした目で見ていた――。

†

ほんの少しだけ、遡る。
椿が邪霊に啖呵を切ったとき、奈津はただ呆然とその姿を見ていた。
はじめて目にする“他人の”ひどい怪我と、それを引き起こした黒い剣。
その圧倒的な力を肌に感じて、奈津はただ震える身体を抱き締めていた。

椿は、地面を砕く程の一撃を、上手く流して見せた。
――自分は何をしていた？

椿は、邪霊から教師を引きはがして見せた。
――自分は何をしている？

椿は、黒い甲冑を目の当たりにしても、決して前を見据えることをやめなかった。
――なにも、できない？

「そんなものは、言い訳だ」

脳裏に浮かぶのは、あの日の夕焼け。

椿に手を取って貰ったあの日のことを、奈津は忘れていない。
忘れられる、はずがない。

椿の笑顔と、投げかけてくれた言葉を――。

――奈津、ヒーローは？
「ヒーローは――」
――ヒーローは……。

「――決して、挫けない」

青白い光が装霊器に流される。
風の精霊の魔力は淡く緑色に光り、奈津の足に決意がこもる。
バイザーに隠された瞳に宿るのは――勇気と、気合いと、根性と……友情。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に疾風の加護を授けん】」

足を中心に、緑の光が奈津を包み込む。
宿りしは風の精霊エアリエル。奈津が安直のようで一生懸命考えて、エアと名付けた彼女の相棒。

その時奈津は、ただ一つの風になった――。

†

時は戻り、椿に視点が移る。
呆然と剣を見つめていた椿は、ただ一度瞬きをした。

「え――？」

ほんの一瞬。それこそ刹那の時しか目を閉じていなかったのに、椿の目に映ったのは十メートル程先で剣を床に叩きつける、甲冑の姿だった。その足下にいたはずの、教師の姿すらそこにはなかった。

「遅れてごめん」

その声が聞こえてきて、椿は漸く自分が抱えられていたことに気がついた。
小脇に抱えられ、もう片方には気を失った教師の姿があった。

「――ううん。良いタイミングだよ。ありがと、奈津」

廊下のタイルに降り立ちながら、椿は力強く笑った。
奈津は、その笑みに返すように笑うと、勢いよく飛び退いて、更に後方に教師を横たえた。
そして、すぐに椿の横に立つ。

「第二ラウンド」
「開始、だね」

椿の装霊器から伸びる赤い炎と、奈津が纏う緑の光。
二色の光が、床から剣を引き抜いた甲冑に対峙した。

その姿には、先ほどまでの張り詰めた緊張も、恐怖に竦んだ姿も見あたらず、ただ強い意志のみがあった。

『餌となれ』

先に動いたのは、甲冑だった。
甲冑はその黒い剣を大上段で構えて、残像が残る程のスピードで間合いを詰めようとした。
だが、それを許す奈津ではない。

奈津自身に、攻撃力はあまりない。
だが、自身のスピードと相手のスピードを利用したカウンターならば、話は別だ。

「でぇぇえぇぇえぇいっっっ！！」

高速で飛来する矢のように、奈津はまっすぐ足を伸ばしてドロップキックを放った。
その軌道は、吸い込まれるように甲冑の兜に決まった。

――ガンッ

金属音。

だが、金属音以外はなにも聞こえなかった。
それもそうだろう――奈津が蹴った兜は、たやすく胴を離れて甲冑の後方に飛んでいったのだから。

空を切る音と共に、大剣が振り下ろされる。
だが、奈津の蹴りによって僅かに崩された体勢からでは、本来の速度は乗らなかった。
そして、椿は友達が作った隙を逃したりは、しなかった。

装霊器から伸びた炎の剣を、左斜め下から右斜め上へ斬り払う。
半歩出ることにより椿の身体すれすれで大剣がとおる。左手にかすったことで鮮血が舞うが、その程度の痛みに崩れはしないと唇を噛みしめて、炎の剣を最後まで振り向いた。

甲冑には大きく亀裂が入り、全身がぐらりと傾く。
それでもまだ動き、振り下ろした剣を振り上げた。
そのわかりやすい軌道は避けることが出来たが、その次――椿の脳天に合わせられた振り下ろしからは、逃れられそうになかった。

椿は回避行動をとることすらせずに、身をかがめて再び切り払いの形を作った。
椿が炎の剣を放つよりも先に、その漆黒の大剣は椿の身体を二つに分けるだろう。

「させるかァッ！！」

それは、椿に奈津という友達が居なければ、という話に過ぎない。
奈津は振り上げられた甲冑の右腕を、甲冑の後方から飛来してソバットキックで叩き落とした。

二の腕から外れて空を舞う大剣に、椿は冷静に狙いをつける。
奈津は、甲冑の左手に捕まれて地面に叩きつけられ、肋骨にひびを入れられながらも不敵に笑っていた。

「はぁあぁあぁぁっっっっ！！！！」

気合いと魔力と火事場の馬鹿力は、装霊器に込められた光を、廊下から漏れ出す程に輝かせた。

宙を舞い、ゆっくりと落ちてくる大剣。
それを椿は、横合いから叩き付けるように斬り払った。

――ガシャンッ

金属らしくない、ガラスが割れるような音。
漆黒の大剣は断末魔の叫びを上げるかのように、その音で空気を振るわせた。
真ん中から砕け散った邪霊の剣は、地面に落ちる前に煙となって、消滅した。

後に残ったのは、破損した甲冑とぼろぼろの校舎に、倒れ伏した教師。
そして、満身創痍といった表情で仰向けに寝転がる、椿と奈津の姿だった――。

「一件落着――」
「――で、済むのかな？」

椿と奈津の、切ないため息が廊下に響いた。
事後処理はどうするのか。そもそも、校舎に侵入するような邪霊を

倒したと説明して信じて貰えるのか。

二人は、駆けつけてくる足音を聞きながら、ゆっくりと意識を手放した。

怪我もあり、疲労もあり、後から来た恐怖心もある。

でもそれ以上に、名前をつけられない感情が、二人にささやかな笑顔を与えていた――。

†

それは男のようにも見えた。
それは女のようにも見えた。
それは人のようにも見えた。
それは獣のようにも見えた。

それは闇だった。
それは歪だった。

三日月に避けた口元から、絶え間ない笑い声が零れていた。

「まったく役に立たない。結局、わからなかった」

残念そうな口ぶりだが、その顔は未だ、嘲笑に歪んでいる。

「まぁ、いい。次がある」

それが呟くと、それの目の前がぐにゃりと歪んだ。
そして、歪んだ空間から、大きな身体を持つ“ナニカ”が落ちた。

「楽しみにしているよ。君が一体、“何者”なのか」

笑う、嗤う、ワラう。
その場所は、本来彼らが入り込めない――学院の、一室だった。

――――歯車が、回る。

第三話　邪霊（後書き）

初戦闘ということで、戦闘シーン短めです。
扱いとしては、一話二話は基盤作りで、漸くここから物語を動かすことが出来ます。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
それでは、次のお話も是非、おつきあいください。

２０１０／０８／２０　中間一部の改訂と編集、誤字修正。

第四話　後のこと（前書き）

扱いとしては、三話の後日談。
短めです。

第四話　後のこと

三寒四温。
四月の中旬は、まだ肌寒い。

そろって気を失った後、二人は救出された部屋で事情説明を請われた。
真剣な表情の楓と、学年主事と名乗った男性に、椿はまず数学教師の無事を確認してから状況を説明した。

教師が操られたという事実は学院側の不始末である。
そう伝えられた二人は、危険行為に対するやんわりとした注意だけ受けて、解放された。

さらに、強力な邪霊を倒し、学院の平和のために戦ったことを表彰されると告げられて、二人は慣れないことにそろって慌てて、楓に苦笑されるに至った。

医務室で楓達との話を終えると、入れ違いにやってきたのはレイアとラミネージュだった。
涙目のラミネージュと、顔を背けながらも髪が所々跳ねているレイア。
二人に散々心配され、椿と奈津は申し訳ないと思いつつも、どこか嬉しそうな笑みを浮かべていた。

そして、漸く医務室から解放された椿は――寮の自室で、寝込んでいた。

「げほっ、げほっ……熱い」

疲労か、それとも廊下で気を失ったためか。
三十九度の高熱を出し、椿は床に伏せっていた。

もぞもぞとベッドから起きて、おぼつかない足取りで冷蔵庫に向かう。
冷蔵庫を空ける動作一つで苦労する始末で、中からスポーツドリンクをとりだして冷蔵庫を閉めると、そのまま座り込んでしまった。

「はぁっ……はぁっ……うんどうぶそく、かな」

からからに渇いた喉にスポーツドリンクを流し込むと、背筋がすっと冷える。
それが寒気に変化するのに、そう時間はいらず、布団が恋しくなって立ち上がる。
震える両足に喝を入れて、なんとかベッドまで歩いて行こうと努力するも、やはり途中で座り込んでしまった。

「わたしはかめだ。かめになるんだ」

ぼんやりとした頭でよくわからないことを呟くと、椿はのそのそとした動きでベッドまで這っていく。実に滑稽な姿だが、本人は大まじめだ。

ベッドの脇まで辿り着くと、今度はどうやってベッドの上に登ろうかと思案し始めた。
立ち上がるのが辛いのなら冷蔵庫までいくのを我慢すれば良かったかもしれないと、椿は脱水症状が起こるかもしれないことなど頭の隅に追いやって、早くも後悔していた。

「うなれ、わたしのそこぢからー」

完全に頭も呂律も回っていない。
蛇が這うような動きでなんとかベッドに登ると、そこで再び力尽きる。
基本的に風邪を引かない椿は、こんな身動きがとれなくなる程の風邪を引くなど実に八年ぶりのことだった。最後に似たような体調になったのは、火事から救い出されたとき。その時は、三日程布団から抜け出すことが出来なかった。

そんな記憶があるからこそ、椿は常日頃から風邪を引かないように安定した体調管理を行っていた。おかげで、花粉症と食中毒以外で体調を崩したことはなかった。

「げほっ……うぅ」

咳をしながら呻ることしかできない身体を恨めしく思いながらも、どうすることも出来ずにじっとしている。高熱で部屋に一人きりという心細さから、椿の瞳には涙が溜まっていた。もちろん、熱のせいで涙腺が緩くなっているということも、この涙の原因の一つではあったが。

そんな中だった。椿の部屋のチャイムが鳴ったのは。
椿はそれに反応しようと声を出そうとしたが、熱に浮かされた喉は唸り声しか出してくれなかった。客ならば対応しなければならないと思う反面、風邪を移してはならいと気遣う心もあった。

『椿ーっ……返事が、ない？』

ぼんやりと火照る頭で、つらつらとそんなことを考えていた。
だからだろう、ドアの向こうから漏れてきた声に、気がつくことが出来なかったのは。

†

邪霊の件での疲労を欠片も見せず、奈津は元気に登校していた。
朝方、椿の部屋に行くと調子が悪いので休むと伝えられて、心配しつつも登校したのだ。

間に立っていた椿が休んでも、奈津達はいつもの場所で昼食をとっていた。
奈津は、今日は仕方なく購買で買ったパンセットだ。

「なんでこの学校には、高校生になったら巡り会える伝説のパン……“焼きそばパン”がないんだろう?絶対あるって信じてたのに」

お嬢様っぽくない奈津だが、こういったところでお嬢様と判明する。
その判明の仕方はどうなのだろうと、自分で考えて自分で突っ込む椿は、現在休養中だ。

「椿は風邪、ですか。様子はどうでしたの?奈津」
「しんどそうだった。椿に止められなかったら、僕も休んで看病したのに」

残念そうに呟く奈津だが、椿が止めないはずもない。
奈津も椿の立場だったら止めるだろう。自分のために休ませる訳にはいかない。
止めきれるかどうかは、奈津にも解らないところだったが。

「とりあえず、授業が終わったら即お見舞い」
「それから、看病」
マイペースで食事をしていたラミネージュも、強く頷きながら言った。
レイアは返事こそしていないが、それは返事をする必要はないという彼女らしい自信の持ち方だった。
「はぁ……やっぱり、僕たち、椿が居ないといまいち元気が出ないよ」
そう呟いた椿の言葉は、小さなささやきだったのにも関わらず、しっかりとレイア達を頷かせていた。

†

そして、時は進んで放課後。

奈津とレイアとラミネージュの三人は、お見舞いの品を持って椿の部屋の前まで来ていた。

初めて友達の部屋に入るという緊張から、三人はそれぞれ身体をこわばらせた。

揃いも揃って友達の部屋まで行くという経験がないというのは、年頃の乙女としては気に病むべきところかもしれないが。

始めに意を決してチャイムに指を置いたのは、やはり奈津だった。

妙に背筋を伸ばして、まっすぐと指を乗せ、押す。

声が帰ってくることを期待して待つが、返事はない。

奈津は、神妙な表情でもう一度チャイムを押した。

「椿ーっ……返事が、ない？」

奈津の顔から、さぁっと血の気が引いた。

「つ、椿っ！返事をしてっ！」

「お、おおお、落ち着きなさい！奈津！」

慌てる二人に、ラミネージュはいつもと変わらぬ表情で割って入った。

こうして冷静な人間が居るということは、中にいる病人にとってはありがたいことだろう。

ラミネージュは、冷静な目で二人をたしなめて、おもむろに扉へ手をかざした。

「【暗雲より来たりて……」

「待った待った待った！」

「お、落ち着きなさい！オールアクセン！」

――訂正。

どうやら一番冷静ではなかったようで、簡易装霊器と思われるボックスに精霊石を嵌めて、属性魔法の詠唱を始めていた。

どう見ても目が据わっているラミネージュを、奈津とレイアがしがみついて止める。

「って、こんなことしている場合じゃないよ！寮長さんに鍵借りてこようよっ！」

冷静を欠いている友人のおかげで逆に冷静になった奈津が、まともな提案をしてラミネージュから離れた。

「レイア、任せた！」

「任されましたわっ！」

奈津は、レイアにその場を任せて全速力で走った。

戻ってくるまでに、椿の部屋の扉が、無事なことを祈って――。

†

寮長に事情を話し、鍵を貰って戻ってくると、椿の部屋の前では第二ラウンドが行われていた。
おそらく冷静になったのであろうラミネージュが、クルタナ型装霊器を構えるレイアにしがみついていた。先ほどまでとは一転した状況だが、奈津は一つだけため息を零すと二人を押しのけて鍵を開けた。

「椿っ！無事っ！？」

なだれ込むように部屋に入り、ベッドの上で転がる椿に駆け寄った。椿は何故か、俯せのまま寝ていた。角度的に、ベッドへ這い上がったような位置だ。

奈津はすぐに椿を抱えて仰向けにさせると、その上から毛布を掛ける。
ラミネージュは椿の枕元にあった桶とタイルを回収して、水を換えに立つ。
レイアは椿の様子を一瞥してすぐ、医務室へ医者を呼びに行った。

事前に散々取り乱しておいたおかげか、三人とも冷静で迅速な動きだった。

奈津が毛布を整えつつ、体温を測り、ラミネージュが額のタオルを換える。
そうしている間に到着した医師が、寝ている椿の診察に入った。

アッシュブロンドのショートヘアに、橙色の切れ長の目。
すらりとした身長に、長い足。モデルのようなプロポーションに白衣を着たこの女性が、楼城館学院専属医師団の一人、アンジェリカ・アリリア・アクオル・アンシュタインだ。
アンジェリカは、不安に眉をひそめる三人にゆっくりと振り向いた。
「せ、先生、どうですの？」
不安そうなレイアの声に、アンジェリカはまず一言「問題ない」と告げた。
「過労ね。消化に良いものを食べさせて安静にしておけば治るわ。体調が夜になっても良くならなかったら、連絡して。医務室で点滴を打つから」
アンジェリカは淡々とそう告げると、注意事項だけ述べて医務室へ戻っていった。
ただの過労、よはいえ体調を崩していることには変わりない。
それでも、問題はないと告げられたことが、奈津達の妙な緊張をほぐしていた。
「さて――――この中で、料理できる人……いる？」
奈津はできない。いや、正確には出来るのだが、おおざっぱな“男の料理”しか作れない。
レイアは、専属の料理人を連れてきて、作らせたものを食堂で受け取っている。作れないという訳ではないが、消化に良いものと言われても困ってしまう。

そんな中、意気揚々と手を挙げたのは、ラミネージュだった。

「できますの？オールアクセン」

「うん」

ラミネージュはしっかり頷くと、強い意志を込めた目で台所を見た。

「オ、オールアクセン？」

「命を賭ければ、あるいは……」

「いやいやいやっ何言っちゃってるの？！ラミ！」

つまりは出来ないと言うことだった。

つねにサンドウィッチをバスケットに入れてお弁当タイムを過ごしているラミネージュ。

それは、「挟むだけなら、なんとか」ということなのだろうと、奈津達は推測した。

「……冗談。真面目につくる」

「わっ……解りづらいよぉ……」

「肝が冷えましたわ」

そういってへたり込む二人を尻目に、ラミネージュは台所へ歩いて行った。

奈津は、無表情で冗談を言われても解らない、と至極もっともなことをレイアに告げ、レイアもそれに頷いていた。だからだろう――。

「やればできる……やればできる……やればできる……」

ラミネージュが、そんなことを呟いていたことに、気がつかなかったのは――。

†

できあがったお粥を前に、奈津とレイアはぴたりと固まった。
椿は台所に青色一号でも隠し持っているのかと疑いたくなるような、真っ青なお粥だった。
しかも、結構量がある。

「色々言いたいことはありますわ。ええ、ええ、色々と」

レイアは額に指を当てて、頭痛を逃がすようにほぐしていた。
奈津は、まだ目を丸くしていて動かない。

「でも、そうね、まず一つ、これだけは聞かせなさい」

それでも青いお粥から目を離すことが出来ないレイアは、声が震えるのを押さえ込みながら聞いた。

「味見は、当然しましたわよ、ねぇ？」
「……てへ」

無表情で、小首をかしげながら、よりにもよってそうのたまった。
異性間ならばまだしも、同性間でこの仕草。レイアの額に、くっき

りと青筋が浮かび上がるのも仕方がないといえた。

一通り唸り声を上げた後、レイアは肩を怒らせながら食堂へお粥を貰いに行った。

その間に、奈津はレンゲを持って目の前のお粥にチャレンジしていた。

「ヒーローは、負けないっ！」

青いお粥をレンゲで掬い、それを口に放り込む。

案外食べられないこともない……というか、こんな見た目で無味無臭であることに驚きながら、青いお粥を咀嚼する。だが、トラップは時限式のものだった。

「ふぐっ！？！？！！」

突然襲ってきた刺激に、奈津は口元を抑えた。

辛いとか酸っぱいとか、甘いとか苦いとか。そんな次元を超えてダイレクトに味覚を破壊しに来た、怒濤の“刺激”に、お粥を呑み込むことが出来ずに悶える。ちなみに、はき出すという選択肢はない。乙女は、はき出したりなんかしない。

ゆっくりと身体から魂が離れていきそうになる中、奈津の頭に浮かび上がったのは、椿の笑顔だった。

――奈津、ヒーローは？

そう、ヒーローだ。

奈津を何度も救ってくれたこの言葉に、奈津は力を取り戻した。

（ヒーローは……挫けないっ！）

衝撃と刺激をアドレナリンで超越した奈津は、涙を流しながら異物を呑み込んだ。
その様子を見ていたラミネージュは、感動から手を叩いて目を輝かせていた。

「何をやっていますの？」

そんな中、戻ってきたレイアが呆れた目で二人を見下ろした。

「僕は、世紀末を見たんだ」
「そう。お粥、台所に置いておきますわ」

何かを成し遂げたように達成感に満ちあふれた表情の奈津を、レイアは華麗にスルーした。

「さて、後は起きるのを待つだけ、ですわ」
「うん」

完全に先ほどまでの騒動を無かったことにしようとするレイアと、それに追従して頷くラミネージュ。かつてないほど息のあった二人に、奈津は悲壮な表情で呟いた。

「椿、さ」

嫌な予感がしたレイアは、耳を塞ごうとするが、当然無意味だしなにより手遅れだった。

「作ったものは、全部食べるんだ。食材と調理してくれた人に、感

謝を込めて」
「そ、それは、あの“青い邪霊―≪ブルーウィスプ≫”を捨ててしまえばよろしいのでは？」
どうしてもあれをお粥と呼びたくないのか、レイアはさりげなく邪霊呼ばわりしていた。
そんなレイアに、奈津は悲壮な決意の込められた表情で、ゆっくりと首を横に振った。
「ラミが使ったお米は、椿のじいさんが作った特別なお米なんだ」
「え――？」
「っ……」
米は、ブランドによって味が違う。
それは、米をよく食べる人たちにとっては、常識だった。
そして、それが市販品でない以上……こっそり買い足すことは、できない。
椿が起きたときにまだ残っていれば、椿は病み上がりの身体に鞭を打って食べるだろう。
おいしかったと青い顔で言って、再び倒れる。そんな姿が容易に想像できたからこそ、残しておくという選択肢はなかった。
早く起きてしまったら、それはそれでやはり食べるだろう。
ならば、三人で協力して、さっさと平らげてしまわなければならない。
そう――正直に捨てたといえば許してくれるだろうという選択肢は、混乱して消えていた。
椿のベッドの脇に、三人は正座した。

左手は膝に置いて、右手にはレンゲを持つ。
青いお粥を……いや、青い邪霊を、三人は鋭い表情で睨み付けた。

「覚悟は……いいみたいだね」
「ふふ、これは武者震い、武者震いですわ」
「やればできる……やればできる……やればできる……やればできる……」

背筋をぴんと伸ばした格好で、三人は同時に青い邪霊を掬い上げた。

「いただきますっ！」
「いただきますわ！」
「いただき、ます！」

ついに、青い邪霊との壮絶な戦いが、幕を開けた――――。

†

ぼんやりとした頭で、周囲を見回す。
天井に付いている電球の形や、ファンシーなぬいぐるみの置かれた子供部屋。
その風景がどこであるかを理解して、椿はこれが夢だと自覚した。

「けほっ、けほっ」

椿が咳をすると、勢いよく部屋の扉が開く。
焦った表情で立っているのは、祖父によく似た顔の男性——椿の、父親だった。

「つ、椿っ……大丈夫か!?苦しいのか?!——病魔め……良くも僕の椿に」

ぎりぎり歯ぎしりをする父の姿は、どこか空恐ろしかった。
椿は父のそんな表情を見て、思わず涙目になる。

「あ・な・た」

気配もなく近寄って肩に手を置く自分の妻に、男は大きく震えた。
のんびりとした笑顔にウェーブのかかった髪を持つ、椿によく似た女性だった。

「おとうさん、おかあさん」

夢だとわかっているのに、無性に悲しくなる。
いや、夢だから悲しくなるのだろう。椿は、大粒の涙を流しながら、両親を呼んだ。

「大丈夫、怖くないよ。怖くない」

「お父さんもお母さんもついているから、安心して眠りなさい」

優しい笑顔で椿の頭を撫でる、温かい手。
椿はこぼれる涙を拭おうともせずに、小さな手で両親に手を伸ばす。
父がその手をしっかりと握り、母がその上から手を重ねた。すると、
不思議と心が軽くなった。

「ずっと、いっしょに」
「いるよ」

椿が言い切る前に、父はしっかりと答えた。
それに、母が続く。

「例え私たちが側にいなくても、私たちの心は、いつも椿と一緒だよ」
「いっしょ？」
「そうとも。ずっと、一緒だ」

温かい、光。
その光が広がっていく光景に、椿は夢の終わりを自覚した。

光に呑み込まれていくのは――――もうかえらない、やさしいヒト。

†

「――ぁ……」

椿は、仰向けの体勢のまま、ゆっくりと周囲を見まわした。
もう目に馴染んだ寮の部屋。誰もない、部屋。

零れていた涙を手の甲で拭うと、ゆっくりと起き上がった。
夢の内容は不思議な程鮮明に覚えていて、枕元に置かれたネックレスをみると胸が温かくなった。

「さて……心配、かけちゃったかな？」

思い浮かべるのは、三人の友達。
椿は無性に三人の姿が見たくなり――その願いは、すぐに叶った。

「……は？」

首を横に回すと、そこには横一列に並んだ三人の姿があった。
仰向けの状態で気がつかなかったのは、三人が土下座をしていたからだ。

「……え？」

土下座というのには語弊がある。
正確には、正座の状態で顔を土鍋に突っ込んでいるのだ。
右手にレンゲを持ち、左手を膝の上に置くというまったく同じ体勢で。

状況から判断すると、土鍋に入れた何かを食べて気を失ったと考えるのが一番妥当だろう。
だが、椿は頭を振って訂正した。そんな状況、思い浮かばない。

ならば次点で、看病疲れがあげられる。
それはそれで、申し訳なく思うが、それ以上に看病をしてくれたという事実が嬉しかった。

額に置かれたタオルと、整えられた布団。
その風景の暖かさに、椿は頬を綻ばせた。

「大切な、友達が居る」

だから、大丈夫だと。
安心して、見守って欲しいと、椿はネックレスを抱き締めた。

椿は、熱の引いた身体をゆっくりとベッドに降ろして、目を閉じた。

――だからこれは、決して、現実逃避なんかではないのだ。

第四話　後のこと（後書き）

早めに書き上げることが出来ました。
初めのうちは、なるべくペースを保ちたいとは思いますが、リアルも考えると中々うまくいかないですね。

次回は前編、後編に分かれるので、なるべくその二つの期間が空かないように頑張ってみます。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

第五話　大角大蛇　（前編）

学院校舎の、資料室。
ここでは、教員が授業で使うことができる資料が置いてあった。
もうすぐ日も暮れるというのに、この場所で女生徒が資料を探していた。
彼女は、教員に手伝いを頼まれた、模範的な生徒だった。

「先生、この辺りにはありませんよ」

言われた資料を探すも、一向に見つからない。
その苛立ちを隠すように、黒縁眼鏡をぐいっとあげた。

「先生？」

返事が来ない事を不審に思い、彼女は自分が“先生”と呼んだ人物の方へ、首を回した。
だが、そこにいたのは――大きな角を生やした、巨大な蛇だった。

「っ」

叫び声をあげようとした。
だが、それが音声となって空間に響く前に――女生徒の姿は、蛇の腹の中へ消えた。

「さぁ、次はどうかな？」

楽しげな笑い声が、夕暮れの校舎にひっそりと響いた。

四月の、ある平日。
中庭の大きな木の根元で、椿は目を丸くしていた。

「連続失踪事件？」
「ええ、そうですわ」

聞き返すように呟いた椿に、レイアはゆっくりと頷いた。

「最初に行方が解らなくなったのは、模範的な優等生。彼女の友人

達は、口を揃えて“ふらふらと遊びに行くような人間ではない”と言ったそうですわ」

レイアの説明に、奈津が手を挙げる。

「連続失踪で最初がその子なら、今は？」

何人、消えたのか？

そう訊ねる奈津の目は、真剣なものだった。

「これが起こったのが、先週の初め。今週に入って、これで五人失踪していますわ」

先週の初めという言葉に、奈津とラミネージュは苦い表情をつくった。

その日は、奈津達の中では“青い邪霊事件”と呼ばれていたのだから。

椿だけは、よくわからず首をかしげていたが。

「ねぇ、レイア」

椿に呼ばれて、レイアは説明を中断した。

といっても、これ以上説明することもなかったのだが。

「この学校って、よくこんな事件が起こるの？」

安全という保証はされていないとはいえ、名門校である以上セキュリティーはしっかりしているはずだ。それでも、短い期間で二度の事件。今回はまだ邪霊と決まった訳ではないが、短い間隔で起こった事件ということには、変わりない。

「そんなことはありませんわ」

レイアはそう、肩を竦めた。

「校舎に入り込むことが出来るような知恵のある邪霊は、魔法使い達の巣窟のような学校関係施設に侵入するなどという、大きなリスクを負うような真似は致しませんの。ですから、今回が異常なだけ、ですわ」

そういって苦笑いをつくるレイアに、椿は安堵の息を吐いた。

「でも、安心するには、早い」

ラミネージュが、そんな椿に待ったをかけた。

話に加わると言うことは、満足するだけ食べ終わったということだ。

「また、巻き込まれないように、注意が必要」

「――オールアクセンの言うとおりですわ。あなたたち」

ジト目で見られて、椿は顔を引きつらせた。

だが、あれは巻き込まれたくて巻き込まれた訳ではない。

「うぅ……気をつけます」

「わかってるよぅ」

うなだれる椿と、頬をふくらませる奈津。

確かに、警告されるような時期に放課後まで残るというのは、如何なる理由があろうと不用心が過ぎた。そのことは、既に楓からも注意されていたのだった。

「ま、そうそう二度も三度も巻き込まれるとは思えないけどねー」
「奈津……そんなことを言う人が一番信用ならないと、解っています？」
「う」
レイアだけでなくラミネージュと椿の視線にまで晒されて、奈津は冷や汗をかきながら目を逸らした。
もっとも、椿はただ目をやっただけで責める心算などなかったのだが、結果的に視線に負けた奈津には、知る術はなかった。
†
いつものように、のほほんとした雰囲気でミファエルの授業が始まった。
今日は、実践ではなく座学のため、場所は教室だ。
「はいはい～……それでは今日は、まずレベルについてお勉強しま

しょう」

魔法使いの実力に密接な関係があるのが、実力のレベルだ。

「ランク、レベルでも構いませんが、これは実績と力量により定められた階位のことです。これによって任されるお仕事や就ける職業も変わるので、よく覚えておいてくださいね」

ミファエルは、黄色のチョークを使って黒板に、クラウンと書いた。

「この階位の事を“選定の王冠―≪クラウンコード≫”といい、十一段階に分けられます。これは、戦鎧と装霊器に王冠の紋章を刻むことを義務づけられています。ちなみに、つけ忘れてしまったり、故意につけなかったりしたら、罰則を受けた上で罰金を払わなければならないので、つけ忘れたりしないように注意しましょうね」

ミファエルはそういって笑うと、黒板に十一個の数字を書いた。

「選定の王冠は、全部で十一段階あります。下から、無色、黒、白、黄色、緑、紫、青、赤、銀、金、虹とあります」

数字の横に、それぞれの色を書く。

ミファエルは、このためだけに無色、黒と虹と金、銀を抜く五色のチョークを仕入れていた。黒を持ってこなかっただけ良心的かもしれないが、緑は非常に見えづらい。

「教員資格が必要なのは、レベル六の紫からと原則として決められています。見合った実績があれば叩き上げでも高レベルにはなれますから、頑張って上を目指してくださいね～」

そこで一息入れると、生徒達の顔を見まわす。
決意に満ちた表情をする何割かの生徒に、ミファエルは優しい笑顔を浮かべた。

「国直属の魔法使い集団である騎士団に入るには、レベル八の赤が必要です。険しい道ですが、皆さんなら出来ると信じています、頑張ってくださいね」

言いながら、黒板に情報をまとめたものを書いていく、
生徒達は、それをかりかりと板書していった。

「レベル七以上の魔法使いは、国からその実績と力量を讃えられて二つ名が与えられます、この二つ名のことを“称号―≪ウィッチクラウン≫”と呼びます」

称号で、魔法使いのタイプが解る。
レベルの高い魔法使いは、急な呼び出しで戦闘に加わることが多々ある。
そんな時に、称号を伝えておけばいちいち得意なポジションを伝えることなく急造のコンビネーションがとれる。そのような配慮と、純粋に魔法使いに対する名誉として考えられた制度だった。蛇足だが、称号が贈られた魔法使いは年金が出る。

「皆さんの身近なところで称号を持っているのは、このクラスの担任の先生、楓先生と医務室のアンジェリカ先生、それに、私ですね」

楓はレベル七の青。ミファエルはレベル八の赤。アンジェリカはレベル九の銀だ。
アンジェリカは戦闘要員でこそないが、治療に関しては並ぶ者の居ない魔法使いだった。

「それでは、今日のところはサービス問題として試験に出しますので、皆さんしっかり覚えてくださいね～」

ミファエルはそう締めくくると、授業を終えた。

†

寮への帰り道。

椿と奈津は、選定の王冠について話をしていた。

「一般の魔法学校で、卒業時にレベル四か五くらいが普通かな。名門は、大抵は六や七を輩出しているんだよ。特に楼城館学院は、レベル十を輩出したことがあるって有名なんだ」

いまいちレベルや身分の話に疎い椿に、奈津が説明をしていく。

「あ、それは知ってる。確か、騎士団の“元帥一≪ロードオブナイ

ト≫”さんが、この国で唯一のレベル十、なんだよね」

祖父母が騎士団出身と言うこともあり、それに関係することならば、椿の耳にも入っていた。現在レベル十は、各国に一人ずつしかいない。

「レベル十一は、過去に一人だけ。むしろその人のために設けられたといっても良い地位なんだ。だから、亡くなられたその人に追いつくものが現われるまで、空席なんだ」

一番最初の邪霊王を倒すことにもっとも貢献した人物で、最後は邪霊王と相打ちとなって死亡した。動乱の最中、叩き上げだったためか性別すらも伝わっていないが、その圧倒的な力量と、人類でも最大級の功績をたたえられて、レベル十一を彼、もしくは彼女のために作った。今のところ、英雄と呼ばれたその人に並び立つ存在はいないため、空席となっているのだ。

椿は、自分の学生証を開いた。

学生証は、透かしで選定の王冠が刻まれていて、角度を変えると見えるようになっている。

椿と奈津のクラウンは黒。先日の邪霊との戦いが認められて、ランクが上がったのだ。

二学年に上がる際の平均は白、レベル三なので、庶民の出にしては調子が良い程度の扱いだった。

「卒業までにレベル六。それがこの学院で目指す場所」

椿は、学生証をかざしながら、そう呟いた。

その視線の先に何があるのか……何を、見ているのか。

奈津がそれを問おうとしたとき、椿は不意に足を止めた。

「うん？……どうしたのさ、椿」
「あ――今、何か聞こえなかった？」
「何かって？」

後ろを向いて遠くを見る椿に、奈津は首をかしげる。
だが、その意味もすぐに理解することになる。

――…キ…ァ……ァァッ！！

叫び声。それも、そう遠くはない。
奈津の耳に聞こえてきたのは今が初めてで、椿が何を聞き取って振り返ったかは解らない。
だが、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。椿は既に、走り出していたのだから。

「あー……もうっ！」

奈津は、急いで鞄から装霊器を取り出して足に装着すると、走っていった奈津を追いかけた。例えスタートが遅れても、彼女の“風”は、少しの距離などものともしない。

†

――食べ、ル、食、ベル、食ベル

断続的に頭に響く声と痛みに、椿は顔をしかめた。
頭痛を振り払うために頭を振って、走りながらも息を整えようとする。

――コロス、コロセコロセ、コロス

音量と共に、頭痛も非道くなる。
だが、それでも椿は走った。この声の主は、誰かを“殺そうと”しているのだから。
出来る場所にいながら、何も出来ない。
そんなのは嫌だと、椿は唇を噛む。

頭痛が強くなる方へ走っていく。
すると、寮への道から外れた広場で女生徒が倒れているのを見つけて、椿は駆け寄った。

「大丈夫ですかっ！？」

大きな声を上げると、不思議と頭痛が治まる。
それと同時に声も聞こえなくなり、椿は突然の展開に困惑し、眉をしかめる。

『シャアァァアアアアアア』
「っ！？」

頭上から聞こえた鳴き声に、椿は女生徒を抱えて飛び退く。
そこにいたのは、蛇だった。漆黒の鱗と闇色の角を持つ、巨大な蛇。
大蛇は、椿と女生徒を呑み込もうと口を開けていた。

焦ってきたことと頭痛のせいもあって、椿は装霊器を嵌めていなかった。
そのため、大きくうねって突進する大蛇を、退ける術がなく呆然とする。

「させるかぁっ！」

そんな大蛇の攻撃を退けたのは、奈津だった。
片足を曲げたドロップキックで、大蛇の横面を蹴り飛ばす。
バイザーが陽光に反射して輝く様子は、妙に格好良かった。

「正義のヒーローなめんなっ！」

左手を腰について、右手の人差し指で大蛇を指す。
ここまで綺麗に決まったことがよほど嬉しかったのか、奈津の顔はにやけている。
椿は、逆光のせいでその表情を見ることが出来なかったので、純粋に格好良いと感心していた。両者にとって、幸運である。

椿は、“黒縁眼鏡”にお下げ髪の少女を地面に降ろすと、自分もバッグから装霊器を取り出し装着して、戦鎧を身に纏った。

『シュゥゥゥウウウウウ』

目があるはずの位置には、ぽっかりと闇が広がっている。
それは、漆黒の鱗に埋もれることなく、椿たちに深淵を見せていた。

「なんでこうも僕たちに絡むかなぁ、邪霊め」
「本当に、迷惑だよね」

二人は肩を竦めて軽口を叩いてはいるが、緊張から脂汗をかいていた。
唇と喉はからからに渇き、手足は震えている。たった一度の戦闘で慣れるような訓練は、積んでいなかった。彼女たちは、まだ魔法を習い始めたばかりのひよこなのだから。

大蛇は威嚇のために、大きく身体を持ち上げる。
五メートルほどの高さから見下されるという滅多にない体験に、怯えが強くなる。
甲冑の時でさえ“少し大柄だった”程度の大きさだった。
このように巨大な化け物相手に立ち向かう経験など、まったく無い。

「それでも――」
「――逃げる訳には、いかないよね」

椿と奈津は、恐怖による震えを、正義感で覆い隠した。
今ここで逃げ出したら、後ろにいる女生徒は助からない。抱えて逃げたら共倒れで、そして、捨てて逃げる訳にはいかない。

だから、二人は心を振るわせる。
自身の意志を貫き、前を見据えるための一歩を踏み出した。
逃げることが正しいことだとは、思わない。

いや、思いたくないから、戦いを選ぶのだ。

『キシャァァァアアアア！！』

後ろには退けない。
横にも飛べない。
上にも行けない。
だったら――正面から、破ればいい。

「【四元素が一柱を司る・火焔を呼ぶ槍の火蜥蜴よ・我が敵を・その吐息で焼き尽くせ】」

新しく覚えた、アレク固有の魔法の、二つ目。
威力は拡散するが、多少大きい相手でも視界を埋め尽くすことが出来る、火炎放射だ。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に旋風の加護を与えん】」

奈津が纏う風は、速さのそれではない。
今彼女が纏っているのは、熱や冷気を通さない風の衣だ。

すなわち――――椿の放った炎の中を、無傷で移動することが出来るということだ。

「砕けろォッ！」

炎に怯み、身体を反らした大蛇の角に、奈津は強烈な空中回し蹴りを叩き込んだ。
大蛇は怯みながらも勢いよく首を戻し、体勢を直しきれていなかっ

た奈津の足を、咥え込んだ。

「げっ」

引きつった顔で怯む奈津を、大蛇はそのまま呑み込もうとする。
そんな大蛇の腹を、椿は装霊器を使って、ストレートを叩き込んだ。
友達が食べられるのを見て黙っているほど、大人しい気性の持ち主ではない。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

そして、先端を当てたまま魔法の刃を展開することにより、大蛇の腹に大きな衝撃を与えた。その衝撃に大蛇は奈津を離すが、ただ離したりはしなかった。

――ドンッ
「づっ！？」

首を振ることにより、奈津に思い切り身体をぶち当てる、咄嗟に腕を交差させて身体から力を抜くが、勢いを殺せる程鍛えてはいない。

そして、椿もまた、大蛇に衝撃を与えた無茶な攻撃の反動で、肩を痛めていた。

「奈津っ！」

奈津は、そのまま遙か後方へ飛ばされる。
そして、奈津を気にかけた一瞬の隙を、大蛇は見逃さなかった。

『シャアッ』

最早逃れられないタイミングで、大蛇は椿を呑み込もうと口を開けて襲いかかる。
ゼロ距離展開でも傷つけることができなかった鱗を持つ大蛇に、椿は対抗策が思い浮かばなかった。

反射で動けるようになるほど経験を積んでいないのは、この年代の魔法使いならば、当然のことだ。そう頭では理解しているが、感情は追いつかない。

悔しさに歯がみしながらも、瞬きはしない。
どんな絶望的な状況でも、諦めたくなかった。

そして――視界に大蛇しか映らなくなる程に接近を許してしまった椿の耳に、歌うような声が聞こえた。

「【豊穣を司りし・大いなる水の神よ・エルストルの契約に基づき・我らを害する者を・その力強き激流を以て・大河の底に沈めよ】」

聞き覚えのあるその声の主は、魔力を用いて詠唱を紡いだ。
それは、名家に伝わる伝統言語。守護精霊の力を借りた、特別な魔法。
完成されたその魔法は、椿の眼前から大蛇を押し流した。
その威力は並のものではなく、大蛇の鱗に大きな罅を入れた。
蛇の鱗なのに罅というのも奇妙な話だが、相手は邪霊だ。常識で語るべきではない。

「まったく……“嫌な予感”がしてみれば、これですわ」

「れい、あ？」

クルタナ型装霊器に青い光を灯し、悠然と佇む少女。
陽光を反射して尚呑み込まれることなく輝く金色の髪が、噴出した魔力の残滓によって揺らめいていた。その姿は、天より降り立った戦乙女のようにも、見えていた。

魔法使いにとっての“嫌な予感”は、必ずしも気のせいで済ませられるものではない。
精霊と契約をしている魔法使いは、個人差はあるが幻想に引っ張られている。そのため、こういった直感の類には、十分に注意しておく必要があるのだ。

名門エルストルの次期当主であるレイアは、抜群のセンスを持っていた。
それ故に、こうして感じた直感に従い、一番何かありそうな椿を探して学校の周辺を探していたのだった。

『フシュゥゥウ……』

毅然と佇むレイアと、体勢を立て直した椿。更に、満身創痍だが女生徒を抱えて距離をとった奈津。三人の姿を認めて分が悪いと感じたのか、大蛇はゆっくりと後ずさりながら、闇に消えていった。

「はぁ……た、助かりましたわ」

完全に姿が消えたことを確認すると、レイアはクルタナを杖にして肩を落とした。

「ホントだよ、立ってるのがやっとだよ」

「あ、あはは……わ、わたしも」

結局は、三人ともやせ我慢だったのだ。
レイアとて、本格的な魔法の勉強は学院に入った後から始めた。
それまでは伝統言語の理解と使い方を家で習ってきただけであって、実戦どころか実験で使うのすら初めてだった。慣れない魔力行使は体力を削り、たった一度で支えがないといられなくなったのだ。

「そ、そうだ！奈津、その子は大丈夫？」
「うん、気を失ってるだけだよ」

椿がほっと息をついたのを見て、奈津は優しげに微笑んだ。
そんな二人の様子に、レイアは肩を竦めてため息をついた。
そんなにお人好しだから、巻き込まれるのだ――と。

「大丈夫かっ！」

聞こえてきたのは、椿たちの担任教師である楓の姿だった。
その姿を確認して、椿と奈津は安堵から膝をつく。
その横で、レイアは虚勢からか、震える足で背筋を伸ばしていた。

†

「どういうことですかっ！？」

両手で叩かれた机が、悲鳴を上げて軋んだ。
やや広めの研究室で、室内は綺麗に整理整頓されていた。

磨かれたのかと疑いたくなる程の、美しい事務机。
その奥には、一人の男性が爪を磨いていた。

「ですから、彼女は怪しいといったのですよ。草加先生」

その言葉に楓は、音が漏れる程強く、歯を噛みしめた。
くすんだ黄色の髪と黄色の目、短い髪だが、前に垂らした左の一房だけ、伸ばして編み込んでいた。

中性的な顔立ちの教師――彼の名は、三上院慎二郎（みじょういんしんじろう）といった。

「校舎に侵入できる邪霊が、レベル一の魔法使いに敗れる？……私はね、先生」

慎二郎は、他者を見下す冷たい目で、一言一言をゆっくりと紡いだ。

「子供の戯れ言に付き合っている暇は、ないんですよ」

「――っ……神崎達の言葉が、嘘だと？」

教え子を貶されて唇を噛む楓に、再び爪を磨く作業に戻った慎二郎が、興味を見せない平坦な口調で答える。

「断定は致しませんよ。ですがやはり――様子を見るべきだと思うのですが、ねぇ？」

邪霊が出た際に、楓達は魔法戦闘を察知してすぐに出ようとした。だが、椿を怪しむ慎二郎によって、足止めされていたのだ。

「こう何度も侵入されている以上、疑ってかかるべきだと、私は忠告しているのですよ」

一年生担当の学年主事に就く彼に許可を貰わなければ、救出に行くことすら出来ない。教職員とはいえ縦社会で仕事をしている以上、ついて回る問題だった。

「もしかしたら、彼女は――」

「先生っ！」

言おうとした言葉を楓に遮られて、慎二郎は肩を竦めた。

「まぁいいでしょう。なんにしても、しばらくの“監視”は必要です。疑いたくないということも結構ですが――そうですね、疑わせない証拠でもあれば、別ですがね」

「っ……わかり、ました」

そんなものは無いと暗に告げる慎二郎の言葉に、楓は怒りによって漏れ出す魔力を抑えながら、肩を怒らせて退出した。

「さて、どう出るか見物ですねぇ――――神崎椿君？」

その呟きは、誰の耳にも入ることなく、泡となって虚空へ消えた。

第五話　大角大蛇　（前編）　（後書き）

後書きは後編で。
今日中には、遅くても明日の朝には後編をあげたいと思います。

それでは、後編もよろしくお願い致します。

２０１０／０８／２０　加筆修正

第五話　大角大蛇　（後編）

大降りの雨が窓を打つ音と目覚まし時計の音で、目が覚める。
目覚まし時計を止めて目を開けても、眠気から完全に覚醒することは出来なかった。

原因は、解っている。
椿たちを襲った、あの大蛇の邪霊だ。

腕を上げて、降ろす反動で身体を起こす。
ぐっと背筋を伸ばすことで、暗鬱とした気持ちを入れ替えることが出来た。
それでもまだしこりのように胸に残っているのは、未だ進展のない大蛇への不安だ。

「あ……そっか、もうすぐゴールデンウィークなんだ」

壁に掛かったカレンダーに目をやり、そう呟く。
五月の連休、ＧＷ……普段だったら、思わず頬が緩むというのに、気分は晴れない。
自分たちを襲った邪霊が、まだ校舎で息を潜めている。

――その事実が、重かった。

だからといって、足を止めてはいられない。
せめて誰かが巻き込まれないように、誰も巻き込まれないように、
そして――。

「――後悔しないように、しなきゃ」

朝食を作るために、立ち上がる。
弁当も作らなければならないし、部屋干しになってしまうが洗濯物だって干す必要がある。

朝は忙しい。
――そして、忙しさは憂鬱を忘れさせてくれる。

降り止まない雨と、窓に当たる風。
その音が、椿のため息を虚空へ消していた。

大蛇に遭遇してから、三日。
新たな失踪者が出ることもなく、静かな日常が続いていた。

そう――――不気味なほど“平穏”な、日常が……。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

助けられた女生徒は、最初に失踪した被害者だということが判明した。
だが、目を覚ました彼女は茫然自失となっていて、邪霊のことはなにも覚えていなかった。そのことが噂になり、学校には不穏な空気が流れていた。

そんな空気の中でも、授業は行わなければならない。
いつまでかかるかも解らないのに、休校にする訳にはいかないという判断だった。

「み、みなさん、お、おはようございます」

入室してきた雅人は、普段よりも腰が引いていた。
どんよりとした空気に当てられたのか、顔が引きつっている。
さっさと授業を始めたいのか、雅人はいつもよりも素早い動きで教壇に立って、号令を促した。授業に入ってしまえば、自分のペースだ。

「さ、さて――――今日は、邪霊と人間の関係について、お話ししましょう」

ペースに引っ張り込もうと必死なのか、いつもより良く通る声で授業の開始を告げる。

いくら陰鬱な空気だったとしても、ここは名門校。この学校に通う以上、授業に真面目に取り組む姿勢を崩したりはしなかった。彼女たちは、名家として名門に通うプライドがあるのだ。

「人間にとって、邪霊は天敵です。それは、魂の消滅というリスクからもわかるでしょう。そして、精霊にとっても邪霊は天敵です。彼らは、精霊すらも餌だからです」

邪霊は強い人間を食べて力をつけ、強い精霊を食べて力を取り組む。その関係からか、精霊達は極端に邪霊を敵視している。

「邪霊は、時折人間を浚うことがあります。浚われた人間はどのような事をされているのかわかりませんが、大抵は帰ってくることが出来ません」

邪霊に拉致された人間が居るという事実が確認されたのは、ごく近年のことだった。
今まで敵対してきた、直接の戦闘以外で関わることの無かった邪霊の新しい動きに、人間達は戸惑いながら必死に対策と原因を調べた。

「そんな中、浚われた人間が、無傷で帰ってきました」

生存して、すぐに保護されたのは、まだ十にも満たない少年だった。少年は断片的にしか記憶を所持していなかったため、結局なにも解らなかった。

「その状況に変化が起きたのは、保護されてすぐのことでした」

少年は、襲ってきた邪霊を、超常的な力を以て打ち倒した。
両目が紫色に輝くと、少年は手を握る動作で離れた位置にいた邪霊

を“掴んだ”のだ。

「その後の調査で、彼は邪霊によって特別な能力が植え付けられていた事が判明しました」

邪霊の仲間ではないかと疑われた少年の誤解が解けたのは、それから更に数年後のことだった。

「邪霊が何故そのようなことをしたのか？それが判明したことにより、漸く彼らに対する風当たりが弱くなりました」

最初の事件が二十五年前。
風当たりが弱くなったのは、ほんの五年前だ。
まだ、差別的な意識は抜けていなかった。

「それから、毎年、多くはありませんが同じ境遇の少年少女が確認されてきました。そんな彼らのことを、我々は“向こう側の子供達―≪アビスチルドレン≫”と呼びます」

そう締めくくると、雅人は一息ついて黒板に年号などの情報を書き込み始めた。
授業に呑まれたのか、生徒達の陰鬱は空気は、ある程度とはいえ払拭されていた――。

†

どこに出没するか解らない。
それが、邪霊の特に恐ろしいところだ。

どうも巻き込まれる節がある椿は、時間の空いていたレイアと連れ添って帰宅していた。
奈津は、数学の授業中の度重なる居眠りを注意されて、安全な職員室で説教されている。
奈津も狙われそうな状況に立っているのは確かなので、そちらにはラミネージュがついていた。

「それにしても、おかしいですわ」
「レイア？」

帰宅途中、レイアは顎に手を当てて、そう呟いた。

「教師陣の対応の遅さ、ですわ」
「他で手が回らない、とか？」

他校ならば、それでも通るだろう。
だが、ここは世界有数の名門校。名家大家が集まるような学校だけあって、セキュリティーも教師も一流だ。

「しかも、アンジェリカ先生のようにレベル九の魔法使いまで雇っているのですよ？それで手が回らないなんて事、あるはずがないですわ」

この学院に流れる不穏な雰囲気を、名家の権力争いといった人間の黒い部分を見てきたレイアは、敏感に感じ取っていた。それが、他者の悪意だと断定できる訳ではないが、なにかしらの思惑があるとは、確信した上での発言だった。

「なんにせよ、蛇は執念深い生き物といいますし、注意しておきなさい。椿」

「うん……そう、だね。ありがとう、レイア」

蛇は、家屋などで見つけたら自分を確認される前に追い払う必要がある。

下手に手を出して威嚇でもされたら、もう殺してしまわなければならいのだ。

それは、直接戦闘した椿たち――それも、椿は獲物を奪っている――は、尚更だ。

殺せなかった以上、最大限の注意を払う必要がある。

邪霊を常識でくくるのは間違いだが、習性は器に引っ張られるということは、少なからずあるものであった。

何事もなく、寮に着く。

椿とレイアはそのことに安堵の息をつく。

「それでは、また明日ですね、椿」

「うん、ありがとう。また明日、レイア」

椿は、レイアと別れて自分の部屋へ帰っていった。
レイアはその後ろ姿に、嫌な予感を感じながらも、流石に寮の中まで来たりはしないだろうと頭を振る。

「疑心暗鬼が、過ぎますわね」

そうして、レイアも気を取り直して自室に戻った。

†

部屋に帰った椿は、シャツにロングスカートという軽い私服に着替えて翌日の予習をしていた。そして、息抜きにコーヒーでも煎れようと、大きく腕を伸ばしてから立ち上がる。

壁掛けの時計を見ると、時針は五の数字を指していた。

「奈津達は、もう帰れたかな？」

そう呟くと、気になってくる。
携帯電話やテレビの類は校則で禁止されているため、持ってくることが出来ない。
そのため、寮生に連絡が取りたいのなら、直接部屋に行くしかなかった。

「様子、見に行ってみようかな」

狙われているかもしれない。
その不安をかき消すためにも、椿はあえて声に出して呟いた。
こんな時は、友達に会いに行くに限る。

――コン、コン

チャイムの音と、その後すぐに聞こえたノックの音。
椿は、奈津達かとも考えたが、わざわざノックをしたりはしないだろうと頷いた。
ならば誰だろうと首をかしげてから、すぐにのぞき窓を見る。

「どちらさまですかー？」

のぞき窓の向こうに立っていたのは、黒縁眼鏡にお下げをした女生徒だった。
最初の被害者にして、椿が救出したあの生徒だ。

「あなたは……もう、大丈夫なんですか？」

椿は、ドアを開けて心配そうに声をかけた。
非道く錯乱していたという話は、楓から聞いていた。聞いていなくとも、噂にはなっていたが。

「は、はい……その節は、ありがとうございましたっ」
頬に朱をさして勢いよく頭を下げる。
その姿はすっかり元気なようで、椿は安心しながらお礼を受け取った。

「どういたしまして。無事で良かったです」
女生徒は、再び頭を下げると、真剣な目で椿を見た。

「あの、それで、その……」
言いづらそうに口をもごもごとさせる女生徒に、椿は首をかしげる。
女生徒は、困惑しつつも口を開くのを待つ椿に、決心したように告げた。

「あの邪霊のことで、お見せしたいものがあるんです」
「え――？」
何故教師ではなく自分なのか？椿はそれを聞こうと口を開く。

「ねぇ――」
「お願いしますっ！……助けていただいたのに、いえ、助けていただいた貴女にしか、頼ることが出来ないんです！」
だが、それも女生徒の必死な叫びに遮られた。
かたかたと肩を震わせる女生徒に、椿は息を呑んだ。
女生徒は目に一杯の涙を溜めて、椿に懇願する。ここまで頼られて捨て置ける程、椿は大人にはなれなかった。

「わかった、わかったから！」
「あ――」
そう告げて、震える女生徒を抱き締める。
すると、ゆっくりだが女生徒の震えが収まった。
「今、装霊器をとってくるから待っていて」
「はいっ！」
椿は、すぐに部屋に戻って、装霊器を右手に嵌める。
左手の指に戦鎧を嵌めることも、忘れない。
「ねぇ、あの時貴女を一緒に助けた、私の友達も――ちょっ！？」
「ついてきてくださいっ！」
椿は、信頼する友人達にも声をかけたいと説得しようとした。
だが、女生徒はひどく焦った様子で走り出してしまった。
当然だが、先日まで錯乱していたという彼女を放っておくことなどできない。
だから、椿は女生徒を追うために、走り出す。
「待ってっ！」
女生徒は椿が考えていたよりもずっと速いスピードで、寮の外へ飛び出した。
椿は追いかけるのに必死で、寮の外へ来てしまったことの意味も気がつかず、追いかける。
女生徒の足は速く、視界の中に収めておくことだけで精一杯だった。

そのため、困惑している余裕もなく、椿は足を動かして女生徒を追いかける。

そして、女生徒は寮の裏手に回り込み、茂った林に飛び込んだ。

「はぁっ……はぁっ……一体、どうしたの？」

足を止めて、無言で俯く女生徒に、椿は肩で息をしながら問いかけた。

すると、女生徒は、虚ろな目で呟いた。

「にげ……て」

「え――っ！？」

崩れ落ちる女生徒を抱え込もうと近寄った瞬間、視界が闇に閉ざされた。

迫り来る漆黒に混乱する意識の中で、椿は抱え上げた女生徒を突き飛ばす。

これで、女生徒は助かるだろう。だが、ここで大きく口を開けた大蛇に呑み込まれてしまったら、女生徒が食べられるのも時間の問題だ。

闇より濃い深淵が迫る中、椿はどうにかして窮地を脱しようと考えていた。

だが、可決策を思い浮かべているような時間はない。

既に至近距離にまで迫った、大蛇の口。

そして、その絶望を覆す――声が響いた。

「二度あることはっ」

耳の届く、救いの音。
何度も何度も、椿を救いあげる、可憐なヒーロー。

「二度とも潰すッ！」

横面への跳び蹴り。
前回と違うのは、それだけで終わらないことにある。

「一つ！」

空中で足の裏から魔力を噴出させて、怯んだ大蛇の斜め上から踵落しを決める。

「二つ！」

そのまま足を振り抜いて、空中回転。左の踵落しを打ち込む。

「三つ！」

更に回転と勢いを加えて、右の踵落し。
この時点で、大蛇は反撃のそぶりを見せることも出来ずに怯んでいた。

「ラストッ！」

最後は、身体のひねりも加えて放つ、両足を使った踵落し。
巨大な鉄槌のごとき一撃に、大蛇は両の目から黒い液体をまき散らしながら、頭から地面に叩きつけられた。

「椿っ！無事！？」
「う、うん。でも、どうしてここに？」

奈津は、散々説教されて寮へ帰るところだった。
そこで、ラミネージュと一緒に歩いていたときに、遠くで茂みに入る椿を見つけたのだ。
こんな時間に、焦ったように茂みに飛び込む。厄介事なのは、間違いない。

「ラミは、装霊器が大きくて持ち歩けないとかで部屋に取りに行った。レイアも呼んできてくれるから、それまでに」

椿は力強く頷くと、戦鎧を装着して、起き上がった大蛇を睨み付けた。
大蛇は、二回三回と頭を振ると、黒い液体の流れ続ける深淵の瞳で椿たちを睨み付けた。
その瞳に映るのは、ただただ深い闇だけだ。

『シュゥゥゥウウウウウ……』

先の割れた細い舌が、黒い粘着質な液体を零しながら、ゆらゆらと動く。
それはまるで、邪霊の流す血液のようだった。

『シャァァアアアアアッッッ！！！！』

大蛇の身体が、ぶれる。
それは、今までのものとは比べものになりらないスピードだった。

それでも、椿と奈津は追いつかれることなく左右に飛んだ。

――ガヅンッ

大蛇は、獲物を見失った事を気にもとめず、大きな木に激突する。
そしてそのまま木をへし折り、口にくわえた。

それを、大きな身体を振り回す遠心力を用いて、椿の方へ投げた。
左右に別れたため、奈津はフォローに向かうことが出来ない。邪霊もそれを見越したのだろうが、奈津はそもそもフォローに向かう気は無かった。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

大きく伸びた炎の刃を、縦に一閃した。
すると、刃に触れた木が、燃え上がりながら二つに分かれた。
そして、木を投げたことで無防備になった大蛇を見逃すのような、奈津ではない。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に疾風の加護を授けん】」

その身体を疾風の矢として、一直線に大蛇へ向かう。
大蛇は慌てることなく、その長い尾を使って迎撃の態勢に入った。

「甘いッ！」

左側面から襲いかかる尾を、奈津は空中で体勢を変えることにより踏み台にした。

更に高く飛び上がる奈津の着地地点に、大蛇は大口を開けて構えた。

「させない！」

近づいてきた椿が、口が閉じるように穂先を使ったアッパーカットを入れた。

軽く仰け反る大蛇の顎の裏に、上空から魔力の噴射と落下の勢いを味方につけた奈津が、轟音と共に振ってきた。

――ドオンッ

「でぇりゃぁぁぁっ！！」

地面にめり込む勢いで、角から落ちる大蛇。

奈津は飛び上がって、大蛇から距離をとると、椿に並ぶ。

「あれ？これ勝てそう？」

「油断しないの。奈津」

大蛇は、尾を奈津達に向けたまま、動かない。

消滅しないうちは、油断は出来ない。それでも、緊張に耐えかねた奈津は、ほんの一瞬気を抜いた。

「――っ奈津！」

――ドンッ

轟音と同時に、椿は奈津を突き飛ばす。

「え？」

呆然と呟く奈津の前で、椿は大蛇に呑み込まれる。

悲鳴を上げる暇もなく、奈津の視界から消えた椿。大蛇は、めり込んだ部分から地面を掘り進み、胴を伸ばして椿たちを後ろから襲いかかったのだ。

「あ、ぁ、ぁ、あ」

ぱくぱくと口を動かし、声にならない悲鳴を上げる。
大蛇はそんな奈津を見て――ニタリと、歪に笑った。

「……えせ」

俯いているため、表情は見えない。
だが、噛みしめた唇からは血がにじんでいた。

「椿を返せぇぇぇえええっ！！！！」

技も策もなく、一直線に走る。
大蛇は穴から這い出ると、魔力を纏う奈津を呑み込もうとした。
だが、それは大蛇の頭上より振ってきた、“何か”によって遮られる。
それを確認して、奈津は大きく飛び退いた。

それは、筒だった。
アームガードと柄を取り付けた、巨大な銀色の筒。
奈津の身長の二倍はあるであろう筒が、壁になったのだ。

「大丈夫、奈津」
「やっと、追いつきましたわ」

素早く筒を回収して、軽々と肩に担ぐ。

一歩遅くも、全滅は逃れた。
そんなタイミングで、ラミネージュとレイアはやってきたのだった。

†

「つ……ぅ」

音も、光も、風も、匂いも。
なにも感じない空間で、椿はゆっくりと目を開けた。

「ここ、は？」

頭を抑えながら、立ち上がる。
そこは、なにもない空間だった。
光の届かない絶対なる闇。その闇は濃く昏く深く、自分の姿すら確認できなかった。

「誰か！……誰かいませんかー！」

声を出すも、反響することもなく、また返事が来ることもない。
なんとか出口を探そうと、歩き回る。だが、自分が歩いているという感覚すら、徐々に遠のいていった。

「誰か！返事をしてください！」

ここが大蛇の腹の中だというのなら、以前呑まれた失踪者がいるはずだ。
そう考えて呼び続けるが、喉が枯れる程叫んでも、返事は来ない。

「誰か……返事をしてっ！」

響くことすらない叫びに、椿の思考は暗く沈んでいく。
触覚も感じないため、自分という存在が本当にそこに居るのかすら、曖昧になっていった。

やがて、自分で自分が信じられなくなり、心が折れて絶望する。
それが大蛇の能力――“絶望の結界―≪テラーゾーン≫”だった。

折れそうになる心を、椿は必死に縫い止めていた。
光が無ければ、もう居られそうもなかった。

腰を落とし、膝を抱える。
涙すら流れず、ただ消えゆく希望をつなぎ止めようと、周囲から心を閉ざす。
絶望しないためにとる行動が、ことごとく椿を追い詰めていた。

――椿っ！

聞こえてきた、声。
その声に、椿は顔を上げた。

「だ、れ？」

椿の呟きが、闇に溶ける。

――こっちだ、椿っ！

二度目の声。
それはもう、気のせいなんかではない。

――椿、早く！

声に従い、立ち上がる。
折れかけていたのにこうもあっさりと立ち上がった自分の心に苦笑し、椿は力強く前を見据えた。

――こっちだ！
――急いで、椿！

導く声に従い、走り抜ける。
すると、遙か前方で、光を垣間見た。

さらに走ると、それは大きなひび割れだった。
レイアが魔法で割った、罅。

「あのっ……あれ？」

声の主にお礼を言おうとしたが、自分を先導していたはずの声は、いつの間にか消えていた。あの声が呑み込まれた人ならば、すぐにこの空間をどうにかする必要がある。
椿は気持ちを入れ替えて、罅を睨み付けた。

「行くよ、アレク」

精霊に声をかけると、精霊が装霊器から一鳴きあげた。
すぐに頼ろうとしなかったことを相棒に申し訳なく思いながら、光によって見えるようになった装霊器を、大きく弓なりに引いた。

「【終焉より来たりて・再生を冠する炎よ・我に応えて・我が敵を砕け・烈火の魔弾】」

基本魔法の詠唱。
それは、対象に当たることで爆発する魔法だった。
その魔法を肘の後ろに設置して、爆発させる。

「くっ……あぁぁぁあああっ！！！」

みしりと、嫌な音が耳に届く。
だが、その効果はあって、爆発により超加速を加えられた右のストレートが罅に激突する。
大きな衝撃と共に罅が広がり、装霊器の先が埋まる。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

そして、最後の一手。
埋もれた先から展開した炎の剣が、ついにその空間を貫き、壊した。

光が、視界を覆い尽くす――――。

†

椿が呑み込まれ、大蛇とラミネージュが対峙する。
怒りからクールダウンした奈津は、真っ青な顔で立ち竦んでいた。

ラミネージュが、筒を振りかぶって大蛇に叩きつける。
大蛇は大きく呻り、距離をとって再び向かう。時折魔法で作った土の壁で、攻撃を凌ぐ。
その繰り返しだった。

「しっかりなさい！奈津！」

そんな中、レイアは奈津についていた。
ラミネージュ一人で任せるのは心配だし、大蛇の腹にいる椿はもっと心配だ。

だが、二人を助けるためには、まずは茫然自失の奈津をどうにかする必要があった。

「レイア、どうしよう、椿が……椿が、あいつに、あいつの腹にっ！」

「落ち着きなさい！」

錯乱し始めた奈津に、喝を入れる。

だが、彼女に一番力を注ぎ込むことが出来る少女は、ここにはいない。

大蛇の腹の中という、それこそ絶望的な状況にいるのだ。

「でも、一緒だったのに、さっきまで、僕が――――“私”が一緒だったのにっ！！」

涙を溜めながら、慟哭する。

一体何と重ねているのか、その怯えは、尋常なものではない。

レイアは、そんな奈津の……頬を張った。

「――――っ」

――パンッ

唇を噛みしめるレイアと、呆然とする奈津。

レイアはふぬけた表情の奈津の、両肩を掴んだ。戦鎧がなければ、胸ぐらを掴んでいただろう。

「貴女はっ」

「レイア……？」

顔を赤くして怒りを表すレイアに、奈津は訳もわからずレイアを見

た。

「貴女は――――椿が誇った……“ヒーロー”なんでしょう!?」
「ぁ――」

がつんと、ハンマーで殴られたような衝撃。
そんな錯覚を受ける程、レイアの言葉は奈津の心に響いていた。

「私はオールアクセンの援護に行って参りますわ。――あとは、自分で立ち上がりなさい」

レイアは、そう厳しく言い放つと、装霊器を抜き放って悠然と援護に向かった。
その後ろ姿を見ながら、奈津は両手を握りしめる。

「ははっ……こんなんじゃ、椿に顔向けできないや」

そういいながら顔を上げる。
そこにはもう、先ほどまでの怯えた少女はいなかった。

「行こう、エア――オープニングは、もう終わった」

左足を、前に出す。
――――その一歩は、弱々しい。

「友と過ごす、日常を抜けて」

右足を、踏み出す。
――――その一歩に、気負いはない。

「合間に入れた、コマーシャルで休んで」

左足で、大地を踏みしめる。

――――揺るぎない意志を持った、一歩。

「ヒロインが、悪の組織に浚われた」

右足は、空に。

――――道は、ない。

「そして」

左足が、虚空を蹴る。

――――周囲の景色が、加速する。

「“ヒーロー”は、遅れてやってくる……！」

身体が、加速する。

風の抵抗も、大気を駆け抜けるエアリエルの加護を持つ奈津の前では、無意味だった。

爆発的に加速した奈津は、レイアもラミネージュも追い越して、他者の視界から消え失せた。

遙か上空で、奈津は構える。

右足をまっすぐ伸ばして、左足は曲げる。

斜め上から、自身を魔力を用いて発射する。

流星の如く飛来するその姿は、未熟ながら、彼女に“正義のヒーロー”を体現させていた。

上空から勢いをつける奈津の姿に、レイアは薄く笑った。
そして、ラミネージュの横に並ぶ。

「今回は、私たち、脇役のようですわよ？」
「それならそれで、“主役”を補佐する」

抑揚はないし、表情もない。
だが、その身に纏う空気は、どこか楽しげだった。

「一発しか撃てません――任せましたわよ、ラミネージュ」
「うん――任された、レイア・イルネア」

奈津の着弾まで、もう数秒程度だろう。
その間に、奈津が最大の威力を放つことが出来るように、舞台を整える。

「【豊穣を司りし・大いなる水の神よ・エルストルの契約に基づき・我らを害する者を・その力強き激流を以て・大河の底に沈めよ】」

激流が大蛇を打ち据える。
それにより、位置を修正され、さらに怯ませられた。

「【大地に宿りし・小さき民よ・汝が身体を以て・彼の者を封ぜよ】」

そして、ラミネージュの魔法が発動し、盛り上がった大地が大蛇の身体を固定した。

「悪しきものよ……永久（とこしえ）の、闇に還れぇぇぇぇえええっっっ！！！！」

緑の流星は、一直線に大蛇に激突し、その角を叩き折った。
それでも勢いが止まらず、奈津は地面にまで蹴りを入れて大きなクレーターを作る。
右手は腰に、左手は右斜め上に。
その決めポーズに呼応するように、大蛇の腹が輝いた。

「正義は――――勝つ」

大蛇が光に包まれて、ガラスが砕ける音と共に、光の中から炎を携えた椿が飛び出てきた。
その瞬間が、奈津の――ヒーローとしての人生の、本当の意味での“始まり”だった。

†

しゃり、しゃり、と果物を咀嚼する音が、医務室に淡々と響く。

並んだ四つのベッドに、椿たちは寝ていた。

レイアとラミネージュは過労で、椿と奈津は怪我で、それぞれ医務室に強制お泊まり会をさせられていた。

見事に邪霊を打ち倒し、倒れ込んだ四人は無事保護された。
助けに向かえはできなかったが、この状況でどう疑う?と呟く楓の様子が、椿たちには妙に印象的だった。

治療を受けて、翌日。
特にお見舞いに来るような人間も居ない、だから四人でのんびりとできると密かに喜んでいた奈津の思惑は、見事に打ち崩されることになった。

「椿様っ……リンゴのお代わり、いかがですか?」
――シャリッ
「う、ううん……もう、大丈夫だよ」
――ジャリッ
「そう、ですか……」
――ジュリッ
「あ、あああっ、やっぱり、いただこうかなっ」
――ザリュッ
「は、はい!今剥きますね、椿様っ!」
――ザジュリッ

横のベッドから聞こえてくる会話に、だんだんと咀嚼音が大きくなる。
彼女の名前は黒沢梓。最初の被害者であり、後遺症もなく助けられたただ一人の生徒。
黒縁眼鏡にお下げの少女だ。

今回の件を過保護な両親が許すはずもなく、彼女は海外へ留学することになった。
ならば一言礼を、と病室にやってきて――はっちゃけたのだ。

困りながら、青い顔でリンゴを食べ続ける椿。
うっとりとした目で椿を見る梓。
その横で不穏な空気を垂れ流し続ける奈津。
ラミネージュが剥いたリンゴが何故か青く染まったのを見て、身体が震え出すレイア。
色が変わる寸前に味見をして、ベッドに突っ伏すラミネージュ。

「おーい、無事かおまえら……や、邪魔したな」

お見舞いと事務連絡に来た楓は、音もなくドアを閉めた。
そして、目に映った風景を頭の奥のパンドラボックス―（Ｖｅｒ，３８）に丁寧にしまい込み、似たような光景だった自分の学生時代を思い出して、目頭を押さえた。

「一番苦労するのは、エルストル辺りかな」

そう呟く楓の背中は、どこか晩年のサラリーマンのようだった。

楼城館女学院は、今日も平和である――――。

†

「結局、こんな結果か」

事務机の上で、チェスの駒を動かす。
対局には誰もおらず、たった一人でチェスを続ける。

「さてさて、次の駒はどうなるのやら……全くもって、気が重い」

そう――慎二郎は、芝居がかった動作で髪を掻き上げた。

「まったくもって、度し難い連中だよ」

苛立ちも、幾分か含まれている。
その歪んだ笑みで、慎二郎は目元を覆い隠した。

「大丈夫、私は上手くやるさ……そう、大丈夫だよ、慎二郎」

チェスの駒が、盤上から消え失せる。
始めから、チェスそのものが幻だったようにも思えた、神秘的で悪魔的な光景。

「くっふふっふっ……まだだ、まだだよ、そう――これからだよ、慎二郎」

ぶつぶつと呟きながら、笑い出す。

その不気味な笑い声は、いつまでも校舎に響き続けていた――。

第五話　大角大蛇　（後編）　（後書き）

今後の展開において重要な伏線がちりばめられているため、前後編に分けたのに結構な長さになってしまいました。

次回、次々回は、展開の重くないお話を掲載させていただく予定です。

奈津にとって椿はヒーローで、ヒロイン。
それは、逆もまた然り、です。

それでは、ここまで読んでいただきありがとうございました。
次回も、どうぞよろしくお願いします。

２０１０／０８／２０　加筆修正

第六話　温泉×卓球×友情（前書き）

休みの日なので、なんとか投稿。

第六話　温泉×卓球×友情

まだ肌寒さの残る、五月の初め。
それでも春は過ぎ、そろそろ夏至に入ろうかというのに、その場所は涼しかった。

山の上の、旅館。その、テラス。
その景色を目に納めようと、椿は身を乗り出した。

「すっごーい……」

一点の曇りもなく晴れ渡った空は、太陽光を遮ることなく、綺麗に澄み渡っていた。
そのおかげが、命の鼓動に輝く新緑の山々が、青い空に良く映えていた。

今日から、世の人々に愛される黄金週間。
ゴールデンウィークに、椿たち四人は温泉旅行に来ていた――。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

事の始まりは、黒沢梓だった。
彼女は、海外へ旅立つ間際、自分の親類が経営している温泉旅行を椿たちにプレゼントしたのだ。それは、自分を助けてくれた椿たちへのお礼だった。

ゴールデンウィークに特に予定を入れていなかった椿と奈津は、温泉旅行へ行くことに決めた。また、家からの呼び出しがあったレイアとラミネージュは、さくっと予定をキャンセルして旅行へ行くことになった。

どんな言い訳をしたのか椿たちは解らなかったが、レイアとラミネージュは妙に清々しい顔をしていた。

移動手段は、バスだ。
そう聞いた椿は、旅行の支度をすると、集合場所である学院の関係者駐車場へやってきた。
ちなみに、外出許可は提出済みだ。

どこかの旅行会社に頼んだのだろうと当たりをつけて駐車場に到着した椿が見たのは、とても予想できるものではなかった。

色は白だ。それはいい。
銀細工が施してある。ここで首をかしげる。
長い。ぶっちゃけ、リムジンだ。

「あら、早いですね、椿」

声をかけられて振り向くと、そこには私服姿のレイアが居た。
レースのついた白いシャツと、銀細工で青い宝石が装飾されたブローチ。
それに、同じくレースのついた青いロングスカートを穿いていた。

対する椿は、白い半袖のシャツに、薄い生地で出来た淡い緑の上着。
それに、桜よりも薄い桃色のロングスカートというシンプルな格好だった。

「え？レイア……これ、バス？」
「何を言っているんですの？当然でしょう？」

認識の食い違いというレベルではない。
持ってる常識が世界観ごと違う。
なんとか自分の常識が通じないだろうかと周囲を見ると、旅行鞄を背負った奈津とラミネージュが歩いてくるのを見つけた。

「おー、早いね、椿」
「おはよう」

手を挙げて挨拶をする二人に、椿とレイアはそれを返す。
奈津は、黒の半袖のシャツに紺のジーパンという、椿よりもシンプルな格好だ。
ラミネージュは、白のワンピースに麦わら帽子という、まだ肌寒い

であろうこの季節には、少々先取りしてしまったような服装だった。
手に持った妙に長くて大きい鞄は、十中八九装霊器だろう。椿たちも持ってきてはいるが、ラミネージュほどかさばりはしない。

「うわぁ……リムジンじゃん」

奈津の引きつった言葉に、椿は漸く一（庶民の）希望を見た。
やっぱり、流石にリムジンはバスとは言わないだろうと、同意を求めに近づく。

「あら、どうしてですの？」

だが、その前にレイアが話しかけた。

「だってさぁ……」

うんうんと影で頷く椿。
だが、その希望はあっさりと打ち砕かれる。

「今、ゴールデンウィークだよ？使用人さんも運転手さんもお休みあげてるよ？」

バスそのものに、ツッコミがあった訳ではなかった。
椿は光の見えない展開に、心を閉ざすことで現実逃避をしようとした。

「椿？」
「ねぇ、ラミ……リムジンがバスって、普通のことだったりするのかな？」
「そんなことは、ない」

思いもよらないところからの援護に、椿は顔を上げた。

「うちは、クルーザー」

「うん。そんなことだろうと思ったよ」

椿の常識は、早くも崩れ去ろうとしていた――。

†

バスという名のリムジンは、椿が想像していた以上の乗り心地だった。

まず、揺れない。そして、冷暖房完備どころではなく、冷蔵庫もテレビもついていた。

ふかふかの高級感漂うソファーっぽい椅子に、椿は何度か腰を浮かして感触を楽しんでしまい、レイア達に温かい目で見守られるハメになった。

そうして、三時間程かけてやってきたのは、山頂に位置するひっそりとした旅館だった。
けっして大きくはないが、設備を見ればいかに儲けているかが解る、所謂隠れ宿的な旅館だった。

「いらっしゃいませ、梓お嬢様のご友人の方々ですね。お待ちしておりました」

頭を下げる女将と従業員に、椿は緊張していた。
他の三人はまったく気にしていなかったが、それに関しては何も言わないと決めた椿だった。何事も、妥協は大切なのだ。

部屋に案内された椿は、早速荷物を置いてテラスに出た。
美しく広がるその景色に、思わず息を呑む。

「すっごーい……」

こうして、冒頭のシーンに戻る。

†

温泉宿に来て最初にすることは？
そう聞くと、大抵は“温泉”と答えることだろう。
そう、温泉旅館の醍醐味――卓球だった。

だが、浴衣に着替えた椿たちは、奈津に連れられて遊技場にやってきた。

「第一回、チキチキ卓球ダブルスファイトゥッ！」

ハイテンションで、奈津はラケットを振り上げた。
椿たち三人は、しっかり汗をかいてからの方が温泉は気持ちが良いと、奈津に説得されてここにいた。
椿は、結構楽しみにしていたが、ラミネージュは表情から感情が読めず、レイアは肩を竦めてため息をついていた。

「さーて、チーム決めよう！僕は当然椿と……」
「あ、籤作ってきたよ」

当然のように椿と組もうとした奈津を止めたのは、声を上げようとしたレイアではなく、他ならぬ椿だった。

「気が利きますわね。あら？奈津から引きます？」

見下すように笑うレイアの様子に、奈津は青筋を立てる。
にらみ合っている二人をよそに、まずラミネージュが引いた。

「赤」

「うん、それじゃあ二人は……忙しそうだから、私から引くねー」

温泉に来てまでいがみ合うこともないだろうと、ため息をつきながら椿も引く。

ちなみに、先に色を塗った割り箸を空き缶に入れただけの、簡単なものだ。

「な、奈津、先に僕が――」

「お退きなさい、ここは私が――」

「あ、赤だ」

その呟きに、ラミネージュが表情を変えずに両手を挙げて喜んだ。

「わーい」

「頑張ろうね、ラミ」

手を合わせてチームを組む椿とラミネージュの横で、うなだれる奈津とレイア。

対照的な空気を醸し出す中、立ち上がったのは奈津だった。

「勝つよ、レイア」

「奈津……？」

奈津はラケットを振り上げると、天井を指した。

当然そこにはなにもないが、奈津の目には夜空に輝く星が見えていた。今は昼だが。

「そう、ですわね。やるからには勝ちましょう……足を引っ張らないようになさい、奈津」

「ふん、それはこっちのセリフだよ」

そうこうしている間に、ラミネージュはどこからかホワイトボードを借りてきて、そこにチーム名を書いていた。ちなみに、チーム名はラミネージュの独断と偏見で決められていた。

椿&ａｍｐ;ラミネージュの“フレイムスラッシュ”……どこから引っ張り出してきたのかわからない名称だ。

奈津&ａｍｐ;レイアの“バタフライヒーロー”……いつか奈津がレイアの言った“お蝶婦人”というセリフを気に入っていたのだろうが、レイアの額には青筋が浮かんでいた。

妙に燃え上がる奈津とレイア。
普通に楽しもうとする椿とラミネージュ。

先攻は、籤を後に引いたということで奈津達になった。

「疾風……サイクロンッ」

かけ声である。
ラケットに当たったピンポン球は、ラケットの広い面で転がりスピンがかかる。
高速で縦に回転するピンポン球は、跳ねる度にその勢いを増した。

「――ふっ……！」

椿はそれを冷静に見極めると、ピンポン球の下側をスライスさせて打ち返した。
その球は一直線にレイアに向い、レイアはタイミングを読んで打ち返そうとする。

だが、奈津が放ったときと回転の向きが変わっていないピンポン球は、椿たちに帰るように後ろへ跳ねた。

「こしゃくなっ！」

だが、それで呆然と負けるようなレイアではない。
レイアは、あろうことか人差し指と中指でラケットを挟むことにより、射程を伸ばして打ち返した。

――カンッ

鋭い音に、何が起こったかわからず呆然とする。
そこには、高速でラケットを振ることにより、稲妻のようなスマッシュを決めたラミネージュの姿があった。

最初から全てを見通したような、ラミネージュの紅玉の瞳に、奈津は薄く笑った。
レイアもそれに呼応するように笑うと、激戦の幕が開けられた。

――戦いは、はじまったばかりだ。

†

どっぷりと卓球大会を楽しんで、四人は疲れた身体を癒すために温泉に入った。
卓球は、椿たちが見事に打ち勝ち、奈津とレイアはうなだれていた。
この温泉は、疲労回復に美肌効果と効能が書かれていて、魔法による調査もしてあるようだ。
とろけるような表情で入っているラミネージュの横に、椿が入る。
髪はアップにして、タオルを巻いていた。

「今日はお疲れ、ラミ」
「うん」

短い返答。
口数の少なさと表情のなさから、ラミネージュは他者から敬遠されていた。
世界有数の名家生まれと言うこともあり、彼女に近づく人間は、みんな敵意か、悪意しか持っていなかった。取り入ろうと媚びてきた人間は、表情を変えないラミネージュを見て気味が悪いと去っていく。

家というフィルターは、彼女へ余分な害意を振りまいていた。
奈津でさえ始めはそのフィルター越しに見ていたし、レイアは初対面で喧嘩になった。

オールアクセンの名を捨てるつもりはないが、それでも彼女の小さな肩に、この責は重かった。

身体の特徴もそうだ。
白髪赤目の魔法使いは、“欠落者”を意味する。優秀ではあるが、なにかしら欠けているのだ。
それは、優秀であればある程多くの欠陥を持つ。

ラミネージュは、表情と料理の腕が欠陥だった。
料理は別に作らなくてもどうにかなる。だは、表情はそうはいかなかった。
意図的に作ることが出来ず、また自然に出るとしても、その切っ掛けは解らない。家の者ですら、妹以外は彼女を遠ざけた。

そんな中、ラミネージュは椿に出会った。
出会った当初、椿がオールアクセンを知らなかったという事実は聞き及んでいる。
だが、その名を知ってからもずっと、ラミネージュをオールアクセンではなく“ラミ”として見続けた。

そのことの尊さを、ラミネージュは心から感じ取っていた。
今のメンバーだって、椿が居なければ集まらなかった。GWなんて、いつものように実家で、見えもしない先のことを、両親から延々と提示されるのだ。

「椿」
「なーに？」

のほほんとしていた椿に、ラミネージュはゆっくりと告げた。

「楽しい、な」
「……うん。私も、ラミと遊んでいて、楽しい」
「――――うん」

自分と遊んで、楽しいという言葉。
こうして、望んだ範囲を超えて、欲しい言葉をくれる。
受け入れてくれる友人の存在が、ラミネージュはなにより嬉しかった。

「レイアっ！それちょうだい」

大きな声が聞こえてきたので、椿とラミネージュは音源に顔を向けた。
そこには、タオルも巻かないで仁王立ちした奈津が、レイアの豊満な胸を指さしていた。

「ななな、何を言い出すかと思えばっ」
「うぅだって、だって」

レイアは、顔を赤くしてタオルで巻かれているのに上から手で胸を隠す。
奈津は絶壁といって差しつかえのない己の胸を見た。
見事に平原だ。胸が痛む。痛む程もないが。

ちなみに、椿は平均。
ラミネージュは小さいが、奈津よりはある、レイアは、喧嘩を売られている理由で解るとおり、スタイルが良かった。

奈津は、そんなレイアの胸と自分の胸、そして椿たちの胸の間に視線を行ったり来たりさせて、大きくため息をついた。

――ガサッ

小さくも、はっきりと聞こえた音。
その音に真っ先に反応したのは、奈津だった。

「っそこ！」

桶を掴んで、フルスイング。
軽快な音とお湯を被った音と共に、何かが去っていく気配がした。
その瞬間、その影が小さく光ったことを、慌てて湯船に漬かったレイアがしっかりと見ていた。

「最後のアレ――ノズルフラッシュ？」

タオルを巻いていたとはいえ、半裸と言っても差し支えのない格好のレイア。
どっぷりと湯船に漬かっていたため、首から上しか見えないだろう椿とラミネージュ。

そして――タオルも巻かずに、仁王立ちをしていた、奈津。

「あうあうあうあう……きゅう」

真っ赤な顔で口をぱくぱくと動かすと、そのまま後ろに倒れ込んだ。

「な、奈津？！」
「ちょ、しっかりなさい！」
「とりあえず、タオル」

椿たちは、自分たちが悲鳴を上げるより先に倒れてしまった奈津を、必死で介抱することになったのだった……。

†

露天風呂近くの茂み。
草木も眠る丑三つ時に、フル装備の椿たちが立っていた。
一般市民に魔法まで使うのはいかがなものかと、椿は説得しようとしたが、奈津に説き伏せられてしまった。

「撮った写真を舐めますように見るんだよ？一般人なんかじゃ、絶対無いよ。悪だ、悪」

据わった目で言われたことと、“舐めまわすように”というフレーズ。
椿だって、年頃の女の子だ。放っておける問題ではなかった。

「ふふふ……エルストルの柔肌を撮影しようとは……」

「命はいらないんだと、思う」

普段全く表情に出さないラミネージュまで怒っているのを見て、椿はせめてやりすぎないように適当なところで止めようと、誓うのだった。

もっとも、“最初から”ではなく適当なところといっている時点で、椿も少々頭に血が上っていることが確認できたのだが。

暗い森を進んでいく。
奈津が桶ごとお湯をかけたので、同じ質の水がどこを通ったのか、レイアが水の精霊魔法を使用することによって追跡していた。

そして、歩くこと半時。
ついに反応が止まっている洞窟を見つけた。

「ここか……まさか、現像している訳じゃないよね？」

そう呟く奈津の声は、隣で聞いていた椿の背筋が凍る程冷たかった。
設備を持ってくれれば、暗い洞窟だ、現像くらい可能だろう。
そんな設備をわざわざこんな山奥に持ってきたりはしないだろうが、奈津はそこまで頭が回らなかった。

「行くよっ！みんなっ！」

そして、頭が回っていないのは他の三人も同じ事。
現像という言葉に肩を震わせると、奈津に続いて洞窟に突入する。

†

夜ということもあるのだろうが、洞窟の中はひんやりとしていて、肌寒かった。

高さは四人が入れる程度。

だが、奥に行くにつれて、どんどん大きくなっていく。

さらに、洞窟の中だというのに、明るくなっていった。

光の反射で、洞窟の壁や天井は蒼く輝いているように見える。

夜空に浮かぶ月が、太陽から吸い取った光を、地上の生き物に分けているようにも思えた。

暗い笑みを浮かべる奈津とレイアは気がつかない。

ラミネージュは、ぼうっと周囲を見ている椿に気がついて、次いで自分もその意味に気がつく。

「月明かりには、沢山の魔力が込められている。この光景に魅入るのは、魔法使いなら当然のこと」

ラミネージュは、椿にわかりやすいように呟いた。
その横顔に、椿は優しく微笑んだ。

「うわぁ……」
「これは……」

先行していた二人が、足を止める。
椿はラミネージュと顔を見合わせると、奈津達に並んでその視界の先をのぞき込んだ。

青い光が、降り注ぐ。
天井はずいぶんと昔に崩れ落ちたのだろう。その空間だけ、ぽっかりと穴が空いていた。

決して派手な光景ではない。
儚くも優しい月光が、洞窟一面の“水晶”に降り注ぎ、その光を反射していた。
その美しさと儚さに、思わず感嘆の息を吐く。

「っ……椿、あれ」

ラミネージュに裾を引かれて視線をやると、そこには黒い影があった。
一瞬、羞恥心に顔を赤く染めるが、すぐにそんな気持ちは消える。
影は、宙に浮いていたのだ。

「覗きかと思ったら」
「邪霊だった、というわけですわね」

影は、まさしく影を固めたような存在だった。
てるてる坊主のような格好で、顔の部分には漆黒の仮面が張り付いていた。
仮面の目は、魔力に呼応して時折輝いていた。

「魔法使いである私たちに近づいて」

襲おうとしたが、お湯をかけられたことを攻撃と見なして一端退いたのだろう。
椿はそう解釈して、覗きでなかったことに安心していた。

「邪霊の分際で、私たちの柔肌を覗き」

奈津に続いたレイアの言葉に、椿は首をかしげた。

「その上乙女が入ったお湯を吸って」

いや、かけたのは奈津だ。
それを突っ込もうとしたが、ラミネージュに裾を引く動作で止められた。

「慰安の時間を叩きつぶすとは」

レイアが、クルタナ型装霊器を振り上げる。
白い光が装霊器を通ると、精霊石に反応して青い輝きに変化する。
月明かりよりも濃いその光は、海淵を連想させた。

「その命。惜しくないみたいだね」

奈津はポーズを決めて、戦鎧を装着する。

レイアも、イヤリングを弾くことで装着する。レイアの戦鎧は、金の刺繍が編み込まれた青のドレスに、上から装甲を嵌めたドレスアーマーだ。

ラミネージュは、両手の腕輪を強く打ち付けた。
すると、白いシャツと白い短パン。そして、両腕と両足に嵌められた重厚な鎧という姿になった。

三人に続くように、椿も指輪に唇を落として、戦鎧を装着した。

仮面は、ふわふわと漂うと、流れるような動作で近づいた。

「【起源より来たりて・誕生を司る水よ・我に応えて・我が敵を叩け・水蛇の鞭】」

それを、レイアが属性魔法をもって叩き落とそうとする。
だが、仮面は木の葉のように柔らかい動作でそれを避けた。

「【我が腕は矛・我が足は槌・汝は我の・堅き鎧也】」

ラミネージュは、基本魔法を唱えて肉体強化をする。
そして、巨大な武器と武装を持っていることを、微塵も感じさせない素早い動作で、仮面を叩く。

「【終焉より来たりて・再生を冠する炎よ・我に応えて・我が敵を穿て・火焔の魔弾】」
「【果てより来たりて・世界を凪ぐ風よ・我に応えて・我が敵を射抜け・疾風の射手】」

前線で戦うラミネージュを、椿と奈津が属性魔法で援護する。

風属性の矢と、炎属性の弾丸が、仮面の逃げ道を無くしていく。
仮面は時折その目を輝かせて、光線を発射してきた。だが、絶好調ともいえる椿たちには、通じなかった。それは、月の魔力に当てられていて、こちらが向こうと違って四人もいるということが、大きく関係していた。

ラミネージュが、大きく後ろに飛ぶ。
それと入れ違いに、レイアが突撃した。

「【起源より来たりて・誕生を司る水よ・我に応えて・我に剣を与えよ・清流の剣】」

クルタナに水がまとわりつき、鋭い切っ先を持った剣となった。

「平和の象徴であるクルタナを、魔法をもって戦の象徴へと革新させる。平和と戦乱の全てを統べる力を持つ……それが、私たちエルストルの家訓ですわっ！」

流麗な剣撃に逃げ場がないことを悟った仮面は、空中へと浮き上がる。
そんな仮面を、ラミネージュはじっと見据えた。

「【リミット・パージ】」

ラミネージュがそう唱えると、銀の筒が、縦に割れる。
筒が地面に落ちると、そこには金と銀でできた、薄く長い長剣があった。
ラミネージュは、それを腰だめに構えた。

「【雷霆纏いし・金色の神よ・稲妻を従えし・勇敢なる戦神よ・力

の象徴たる・金剛杵を・我が剣に貸し与えよ】」

雷が、高い音を立てて剣に纏われた。
ラミネージュは、大きく飛翔すると、大きさからは信じられないような剣速で仮面を二つに割った。

それはまるで、空に浮かぶ月を切り裂く、神代の技のようにも見えた――。

着地したラミネージュに、椿は駆け寄る。
そして、どちらからともなく、ハイタッチを交した。
気のせいかもしれないが、椿は一瞬、ラミネージュが笑ったような気がした。

†

どっぷりと温泉につかり、料理を食べて、卓球で再戦した。
今度こそはと奮戦し、二度目は奈津達の勝ち……とはいかず、椿た

ちの連勝となった。

ここにいるのは、ＧＷの四日目まで。
夜を過ごし、朝を迎え、かけがえのない、思い出を作った。

帰りの車の中で、椿たちはすっかり眠っていた。
遊び疲れたのか、目を覚ます様子はない。
だが、のっそりと、ラミネージュだけが起き上がった。

椿の左隣の奈津は、椿の肩に寄りかかって寝ていた。
レイアは、中央の席で、なにやらうなされている。

ラミネージュは、ゆっくりと椿の横へ移動すると、その横顔をじっと見つめる。
そして、大きく欠伸を一つ零して、椿の肩へ寄りかかった。

ラミネージュが寝入った頃、レイアも寝ぼけて奈津の隣に移動して眠る。

学院に到着するまでの間、離れることなく寄り添う四人。

エルストル家の使用人である、運転手の女性は、バックミラーでその姿を確認すると、優しく微笑んで車の速度を落とした――――。

第六話　温泉×卓球×友情（後書き）

今回、次回とやや短めです。
お話的には、八話への繋ぎです。

プロットがっちりと固まっている九話までは、早めに投稿できるかと思います。
それ以降は、あまりしっかりとしたプロットは出来ていないので、まだなんとも言えません。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回もまた、どうぞよろしくお願いします。

第七話　試験／蠢く影

四月に失踪事件を引き起こした大蛇の邪霊を倒し、五月の初めには旅行先で仮面の邪霊を倒した。
その功績が認められて、奈津たちは正式の白のクラウン――レベル3を手に入れた。

もう怖いものはないと豪語していた奈津は……一人、目の前の恐怖に打ち震えていた。

五月末日。
一週間後には――中間試験が控えていた。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

奈津の朝は、遅い。
目覚まし時計はスヌーズ機能付き。そうでないと、絶対に起きないからだ。
何度目かのアラームを、ベッドから伸ばした手で止める。
ノースリーブに短パンという格好で寝ているため、絶壁ということも相まって少年のように見えた。

「なんか、ふめいよなことをいわれたきがする」

ごしごしと目をこする。
呂律が回っていないことからもわかるように、まだ寝ぼけていた。
ふらふらと立ち上がると、そのままおぼつかない足取りで洗面所へ向かう。
途中、壁にぶつかったりしているが、それでも起きる気配はない。
冷たい水で、顔を洗う。
真冬ならば冷たさによる衝撃で飛び起きるのだが、温かくなるにつれて、それで目を覚ますことが出来にくくなっていた。歯を磨いても、やはりまだぼんやりとしたままだ。
それでもなんとか意識を半分くらい覚醒させると、次は冷蔵庫に向かう。
卵を一個取り出して、フライパンを温めながらトースターにパンを

入れて、それから目玉焼きを作る。流れ作業だった。

蓋をして蒸している間に、冷蔵庫からレタスとトマトを取り出して、適当に切ってサラダを作る。ドレッシングは、学院で買ったモノだ。

目玉焼きが出来ると、焼き上がったトーストの上に載せる。なるべく洗い物は出したくないため、毎日朝はこの食事だ。

冷蔵庫から瓶牛乳を取り出して、朝ご飯を食べる。寝ぼけているためか、味覚はしっかり機能せず、微妙な味だが仕方ない。

――トーストにも目玉焼きにも味付けをしていないことは、気がついていない。

食べ終わると、いそいそと食器を片付ける。

といっても、片付けなければならないのはサラダのお皿とフォークと、牛乳瓶だけ。

楽だ楽だと頷いている内に、漸く目が覚めた。

白のブレザーに袖を通す。

ネクタイと制服に入ったラインは緑色。

他は全て白一色という、汚れがやたら目立ちそうな制服だ。

だが、その実制服にも金がかかっていて、汚れにくいどころか傷つきにくい。

その機能は足下も及ばないとはいえ、戦鎧職人から知識を借りて作っているのだ。

鞄に教科書を詰めて、スポーツバックに装霊器を入れる。

装霊器の重みに慣れることは、魔法使いの第一歩だ。

装着時に、重さで動きが鈍らないように、重みに慣れるまでは持ち

歩く。
これは一年生の一学期までの話で、二学期からは戦鎧を収納しているアイテムに、一緒に装霊器も入るように、学校側が調整をしてくれる。

奈津や椿たちは、度重なる実戦でとっくに慣れていた。だが、特例が認められる訳ではないので未だに持ち歩いていた。

時計を見て、時間を確認する。
七時四十五分。切りの良いところだと思い、玄関へ行く。
覗き窓を見ると、そこにはチャイムを押そうとしている椿の姿があった。
奈津はその姿に小さく笑うと、この時間に起きていられるようになったのは、こうして訪ねてくれる椿のおかげだったと苦笑した。

「はいはい、起きてるよ～」
「あ、おはよう、奈津」

いつものように、挨拶を交す。朝起きて笑顔で居られることが、奈津は嬉しかった。

「おはよう」
「おはようございます、奈津」

そして、ここ最近はこうして訪れる人数が、増えていた。
GWの温泉旅行から距離が近づいて、朝はばらばら……というか、昼の時にしか集まらなかったのに、今は授業中以外は四人で一緒にいた。

「おはよー、ラミ、レイア」

ひらひらと手を振って挨拶をすると、ラミはこくりと頷いて、レイアはそっぽを向いた。
無表情だが嬉しそうなラミネージュと、明らかに照れているレイア。
こういった掛け合い――友人と、挨拶を交す――に慣れていない証拠だった。

四人で並んで、歩いて行く。
順番は左から、ラミネージュ、椿、奈津、レイアだ。
初対面ではひどくいがみ合っていたのに、今はこうして一番仲の良い友達にまでなっている。
常にその間に立っていた椿を見て、奈津は目を細めた。

「もうすぐ中間試験だね」
「そうですわね。普段から予習復習をきちんとしていれば、一年生の内からそう難しい問題もでませんわよ」

椿がのんびりというと、レイアは心配はないと笑ってみせる。
続いてラミネージュもこくりと頷いた。

そして、奈津は――真っ青な顔で、固まっていた。

「ちゅうかん、しけん？」
「？……どうしたの、奈津」

文字どおり自慢にならないが、奈津は勉強が苦手だ。
特に数学はだめで、聞いているだけで眠くなる。魔法学と歴史学は、興味のある分野なのでなんとかなるだろう。体育は、運動神経で座学の成績をカバーすることができる。
文系科目も大体何とかならないこともない――もちろん、自信はな

い――が、数学含めて科学や地学といった理系は、完全にだめだった。

「もしかして、奈津……貴女」

何かに気がついたように、レイアが厳しい目で奈津を見る。

奈津は、すぅと目を逸らして、奈津にしか見えない蝶々を目で追っていた。現実逃避である。

「勉強なんか、出来なくたって！」

「赤点の生徒は、体育祭中補修が科せられる」

「勉強教えてください」

名門校に通う生徒ならいってはならないことを言おうとして、ラミネージュにばっさりと切られた。

中間試験が終わると、待っているのは体育祭だ。

紅組と蒼組に別れて、運動神経と連携力をもって競技をクリアしていくこの行事は、奈津がもっとも楽しみにしていたイベントだった。

学校側としても、魔法使いとして他者との連携に慣れさせるという意図があるため、真剣に取り組ませる。そのため、異常な熱気で行われる、熱い行事だった。

それを補修で潰してしまうなど、耐えられることではない。

――実際は、生徒の将来に関わる大事な行事なので、脅しと課題で済むのだが。

「それじゃあ、今日帰ったら、みんなでお勉強会しようか」

「そうですわね……まぁ、私も手伝いますわ」

「うん」

三人の温かい言葉に、奈津はそっと涙を流した。

「うぅ……ありがとう、心の友よ！」

涙に太陽光が反射して、きらきらと輝く。

その様子に椿たちは一歩退いていたが、その事に奈津が気がつかなかったのは、幸いだったといえるだろう。

†

こうして、奈津は自分の部屋に椿たちを招いた。

薄い水色で構成された、シンプルな部屋に、特撮ヒーローものと思われるポスターが一枚。

まるっきり少年の部屋だ。

椿たちは奈津に促され、ガラスのテーブルの周囲に置かれた座布団に座る。

ベッドを背に椿、その右に奈津で、正面にラミネージュ。左にレイアだ。

「それではまず……そうですね、奈津の学力がどんなものか見てみましょうか」

レイアがそういうと、ラミネージュがプリントを取り出した。妙にファンシーな可愛らしい字で書かれた問題用紙で、レイア以外の三人分作ってあった。

「教えるにしても、各員の実力を把握しておいた方が、役割分担も効率的ですわ」

プリントを印刷してきたのがラミネージュで、作ってきたのはレイアだ。

その可愛らしい文字と、所々に登場する注釈係の猫のイラスト。丁寧で凝ったそのプリントをじっくりと眺めていたくて、ラミネージュは印刷を買って出たのだ。

「それでは始めて……なんですの？その目は？」

妙に生暖かい目でレイアを眺める周囲の視線に、レイアは退きながら眉をひそめた。

レイアの問いには答えず、プリントを開始する。

止まることなくすらすらと書き込むラミネージュと、時折ペンを回しながら考えつつも、詰まることなく書いていく椿。

奈津は、解らなかったら次へ次へとやっている内に、一番上に戻ってしまい、頭を抱えていた。

やがてじっくりと一問一問解き始める。
時折悩みながらも、思い出しながらなんとか埋めていった。

「そこまで。さて、採点しますから、少し待っていなさいな」

赤ペンを使って採点するレイア。その正面の席で、奈津は真っ白になっていた。

「大丈夫？奈津？」
「あ、あはは、もう、だめ」

だめになるのが早すぎる。
椿は苦笑いを零しながら、奈津を慰めた。

「終わりましたわ」

レイアの声に、半ば空想の世界へ旅立とうとしていた奈津が戻ってきた。

「結構頑張れば出来るようですわね。椿は平均的に教えて、私が数学、ラミネージュが理科。これで教えれば、すぐになんとかなりそうですわ」

そういいつつも、レイアの表情は苦い。
自分が教えた方が良さそうな数学が、ぶっちぎりで悪いからだ。

「奈津、貴女、数学の授業中に何をしていらしたんですの？」

思わずそんなことを訊ねる程、悪かった。

奈津は、机の上に突っ伏すようにうなだれた。

「数字を見ると、眠くなるんだ」

職員室に呼び出される程寝ていたのだ。解るはずもない。

レイアはそんな奈津の様子に、深々とため息をついた。

「ふ、ふふ……ねぇ、椿」

「どうしたの？奈津」

数学の答案に一通り目を通して、その悲惨さに奈津は暗い目で呟いた。

その様子に、椿は顔を引きつらせながら首をかしげた。

「ヒーローには――――バカが多い」

「ヒーローを捏造しないっ！……というか、ヒーローは頭が良い人の方が多いと思うよ」

椿の言葉を聞いて更にうなだれる奈津を起こして、勉強会に入った。

†

一週間、四人で勉強を続けた奈津は、着実に点数を伸ばしていった。
元は悪くないのだ。やらないだけで。

試験当日もなんとか乗り越えて、奈津達は反省会を開いていた。

結果はまだわからないが、手応えはあった。
テストの見直しを終えて、問題用紙から採点してみると、補修は免れていることが解った。
昼休みにこの作業を終えて、寮への帰り道、奈津は憔悴した表情で感謝を告げた。

「うぅ……みんな、ほんっとうにありがとう」

感激から土下座に移行しかねない様子で頭を下げる奈津に、椿たちは笑いながら構わないと慰めた。

「あはは……いいよ。助け合うのは、当たり前だよ――友達だもん」

そう言って微笑む椿と、肩を竦めるレイア。ラミネージュは、無表情ながら何度か頷いていた。

その姿に、奈津は顔をほころばせる。
普段見せる少年のような笑みではなく、そっと花開く百合の花のような、可憐な笑み。
ヒーローという仮面の下の、奈津のさらに“下”にある表情を、ほんの少しの間だけ見せていた。

「ありがとう。うん――なんだか、すごく、嬉しい」

そういって、頬を朱に染めながら、少し前に出る。

言われた方も照れてしまい、みんなそれぞれに顔を背けていた。

椿は、前に出た奈津の手を握ると、走り出す。

年頃の少女の、拙い照れ隠しだった。

「あっ……待ちなさい！追いますわよ、ラミネージュ」

「うん」

夕暮れの中、奈津は手の中の温もりに、なくしたものを想うような儚い笑みを浮かべた。

そしてすぐに、普段の、少年のような快活な表情に戻った。

そこにいたのは、大人びた少女ではない。

友情を育み、青春を謳歌する――年頃の、女の子だった。

†

「完全にとは言い難いですが、被害者となった生徒達の断片的な記憶に、共通点があることがわかりました」

カルテからら情報を読み取るアンジェリカと、その横で満足げな表情を浮かべる楓。

生徒達の期末試験が終了した日の夕方、慎二郎の研究室で報告する二人の姿があった。

慎二郎は、俯いて目元は見えないが、どこか悔しそうな雰囲気を醸し出していた。

「いずれも、邪霊に襲われる前に会話をした、もしくは直前に一緒にいたような気がするという人物は――――男性でした」

これで、椿の容疑は晴れる。

なにより、一番はっきりとした記憶のあった黒沢梓が、椿ではないと言い切ったことが大きかった。

もちろん、嘘かどうかも調べた。

言葉の真偽を見つける“能力”を使える教師――歴史学の遠峰雅人――に頼んで調べたところ、直前まで男性と一緒にいたという証言まで、本当のことだと判明したのだ。

椿と邪霊の関わりも否定されて、これで楓の生徒の無実が証明された。

「さて、これで良いでしょう?三上院先生」

胸を張る楓に、慎二郎は答えない。
その姿を不審に思い、楓は再び訊ねる。

「どうしました？三上院先生」
「あぁ……いやいや、そうですか」

その顔は、笑顔だった。
まさか笑っているとは思わなかった楓は、一歩退いてその姿を見た。

「いえいえ、私としても安心しましたよ。これでも私は教師ですからね……教え子を疑うということは、中々どうして――――心苦しいこと、だったんですよ」

一転して見せる晴れやかな顔。
それが嘘か誠か、楓は見抜くことは出来なかった。
それは一緒にいたアンジェリカも一緒で、カウンセラーの資格も持っているが、ここまで解らない表情を見るのは初めてだった。

そう――“わからない”のだ。

偽りなのか……本当なのか、すら。
貼り付けているだけのようにも見えれば、本心のようにも見える。
なにも読むことが出来ない、目。

「さて、これで私も良心の呵責に苦しまずに済むというものです。後の始末は私がなんとかしておきましょう。先生達もお疲れでしょうから、ね」

慎二郎の口ぶりに、長居をしていても仕方がないだろうと、楓とア

ンジェリカは退出した。
後に残った慎二郎は、しばらくの間変わらぬ笑顔だった。
一分、二分と時が経つと、その表情が崩れ去る。
その瞳に映るのは、大きく黒い炎だった。

「くそっ……くそっ……くそォッ！」

何度も何度も、強く机に拳を打ち付けた。
その姿は滑稽で、狂気に溢れていた。

「庶民のくせに、この私の計画を、庶民のくせに、庶民のくせに！」

その慟哭は、椿だけに向けられたものではなかった。
彼の瞼に焼き付いた、沢山の“焼死体”。その姿が、慎二郎から冷静さを奪っていた。

「まだだ、まだ終わっていない」

ぶつぶつと呟く。その表情は憔悴しているが、それよりも遙かに狂気が強く浮き出ていた。
虚ろな目で、手を伸ばす。虚空に助けを求めるように、手を伸ばす。

「手はある、手はあるんだ」

伸ばした手の先から、ぽとりと何かが落ちた。
黒い、光を反射しない球体だ。

「くふっふふふっははははっ」

笑う。声に出して、腹を抱えて、涙を流して笑っているのに、その瞳には何の感情も宿していなかった。

球体は、大きく鼓動して形を崩す。
身体を震わせながら蠢くと、だんだんと大きくなる。

それは、スライムだった。
大きな一つ目の、スライム。黒い半透明の身体の中心には、うっすらと心臓のようなものが見えていた。

スライムは、ゆっくりと目を閉じる。
そして、大きく見開いた。すると、その足下から目のないスライムが沸いて出てきた。
心臓だけはあるため、その大きな鼓動が、スライムの声の代わりだった。

「そう、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫」

スライムは、タイルにしみこむように消えていく。
その様子を見もせずに、慎二郎は黒い瞳で空を仰いだ。

「大丈夫、大丈夫だよ――――慎二郎」

後にはもう、なにも響かなかった――――。

第七話　試験／蠢く影（後書き）

扱いとしては、幕間的なお話です。
来週は少しリアルが忙しくなりそうなので、思うように更新をすることが出来るかわかりません。

それでは、ここまでお読みいただいき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第八話　応龍祭編？　結成（前書き）

運動会編、開始。

第八話　応龍祭編？　結成

試験が終わり、生徒達は開放的な気分で登校してきた。
予鈴が鳴り、生徒達が席に着く。
すると、週初めのＬＨＲのために、楓が教壇についた。

「さて、今日は、来週の体育祭について決めるぞ」

生徒達は、今時の高校生にしては珍しく色めきだつ。
それもしかたがないだろう。名門、楼城館学院の体育祭は、魔法使いとしての実力も率直に問われるため、結果如何は後の評価にも密接な関係があるのだ。

個人プレーではなしえない、魔法使いの運動会。
魔法使いとして試される、少女達の聖戦。

楼城館学院精霊魔法体育祭――――“応龍祭”が、控えているのだ。

楓は、競技の種目を黒板に書いていく。
障害物競走、借り物競走、騎馬戦、チーム対抗リレー、応援合戦……。
次々と並べられていく種目名は、見たことのあるものばかりで、新鮮味はない。

「私たちのクラスは紅組だ」

そういうと、楓は大きな箱を置いた。

「魔法使いたるもの、どんな状況に陥っても打開しなければならない。だから、出場する種目は籤で決める。自分の運に賭けてみろ」

そういって、楓はニヒルに笑った。
楓の合図で生徒達は立ち上がり、それぞれ籤を引いていく。
椿は、どの競技が良いという希望もなかったので、なるべく全身の力を抜いて籤を引いた。

「すぅ――――せいっ」

引き抜くと、楓は笑顔で何が出たか聞いた。

楓の後ろ、黒板には、誰がどの競技か書かれている。その中には、クラス全員が出るクラス対抗の役割、というものまであった。

「えーと……応龍杯？」

黒板を見れば、一番左端に書かれていた種目だった。
聞いたことがない種目に、椿は首をかしげた。
さらに、籤には続きがあった。

「――の、リーダー？」

そう、椿は聞いたこともない種目の、リーダーにされていたのだ。
引きつった顔で楓を見ると、楓は妙に良い笑顔で頷いた。

「今年の応龍杯のリーダーは神崎か。期待しているぞ？あっはっはっ」

その笑い声と期待のまなざしに、椿はどうしようもない不安を感じるのだった。

†

応龍祭の目玉競技、その一つに“応龍杯”と呼ばれるものがある。
ランダムで選ばれた四人がチームを組み、トーナメントに出場するというものだ。
これだけは紅組も蒼組も混合で行い、一学年から三学年までの三クラスの優勝者を決める。
そして、紅組と蒼組で二クラス優勝した方へ得点が与えられるというものだ。

試合の過程も得点の条件に入る。
特別賞扱いで、点数が入ると、それも当然組みの点数になる。

一週間の準備期間で連携能力と信頼関係を作り上げて優勝を目指す。
目玉競技と言うだけあって、三日間の応龍祭の最終日に行う、この競技は、毎年騎士団の上位騎士たちが見学にくることで有名だった。
上手く目立てば、スカウトが来るのだ。

もっとも、“現役”の騎士にスカウトされる程の“学生”などよほどの事なので、せいぜい面接で有利になるように頑張ろう、程度の意気込みだったが、それでも重要な一歩には違いない。

この応龍杯に、生徒達は未来を託す。
そんなフレーズが囁かれている、競技なのだ。

「と、これが応龍杯の概要ですわ」

中庭の木の根もと、敷いた茣蓙の上で昼食をとっている時に、椿に

質問されたレイアがそう説明した。その、思っていたよりずっと大きな行事であるという事実に、椿は顔を引きつらせた。

「それで、具体的にはどんなことをするの？」

レイアは、食べ終わったお弁当箱を布にくるむと、姿勢を正して人差し指を立てた。

「演習場の近くに大きなドームがあるのを知っていますか？」

「あー……うん。みたことある」

演習場の裏手をしばらく歩くと、そこには大きなドーム状の建物がある。

椿は入ったことはないが、遠目から外観を眺めたことはあった。

「内部には空間制御とか環境変化設定とか……そういった魔法が施された施設ですわ」

聞いたことの無いような単語に、椿は頭を混乱させた。

字面からどういった効果があるかは解らないこともない。だが、そんなすごいことができる精霊と契約した魔法使いが居るという話は、聞いたことがなかった。

椿はそこまで魔法使い達の情報に詳しい訳ではないが、耳にしたことすらないのはおかしいことだと言えた。

「どうしましたの？椿――あぁ、現存の魔法使いが施した魔法ではありませんわ」

椿の困惑した表情の理由に思い至ったのか、レイアはすぐにフォローをした。

「“遺産―≪ロストファクター≫”ですわ、学院長の家に代々伝わる、楼城館の秘宝ですわ」

遺産とは、謎の技術、謎の魔法で作られたアイテムのことを指す。
それは、楼城館学院の特別演習場のようにドームサイズの巨大なものから、一見すると何の変哲もない指輪まで、大小様々なものの存在が確認されていた。

「へぇ……遺産、かぁ。おじいちゃんが持ってたなぁ」
「まぁ、名家に行けば、価値の差はあれど一つは転がってるからねぇー」

ここで、今まで口を挟めずにいた奈津が入ってきた。

「それよりも！――レイア達の種目はどうなったの？」
「私はクラス対抗リレーですわ。蒼組の」

レイアがまず答える。
すると、奈津は不敵に笑った。

「ふーん――僕もクラス対抗リレーなんだー……紅組の」

バチバチと火花を散らして、奈津とレイアがにらみ合う。
ちなみに、この火花はラミネージュが彼女たちの後方で演出しているものだった。無駄な技術である。

「ラミは？なんの競技だったの？」
「蒼組、パン食い競争」

なんである。
そう突っ込みたくなったが、椿はぐっと我慢した。

「え？や、焼きそばパンもあるの！？」

レイアから目を離して、ラミネージュに問いかける奈津。
購買になかったことがよほど悔しかったのか、必死だ。

「パンは、生徒達で作る。だから、作ればいい」

食事にありつけない程追い詰められることもあるだろう。
自分一人しかいなければ、自分で作るしかないだろう。
どんな粗末なものでも生きるために口にして、どんな食材だろうと食べられるものを作る。
そんなサバイバル精神を養うための大事な競技――と、教師陣から苦い顔で説明される競技だった。

毎年、パン食い競争だけは学院長がわざわざ校庭までやってきて、妙に感動して帰っていくというのは、有名な話だった。つまるところ、学院長の趣味だ。

「――――作ったパンは、自分で食べるのですか？」

戦々恐々。
そんな言葉がよく似合う表情で、レイアが訊ねた。
その様子に、未だ“青い邪霊事件”を知らない椿は首をかしげた。

「どんなパンに当たるかは、ランダム」

自分で食べられたらそれもいい。

だが、やはり本題は、他人が一緒の時に振る舞えることだ。
学院長は、冷たい目をしていた教師陣に、慌ててそんなことを“付け足した”のだ。

「他の選手のご冥福をお祈りしておいた方が、よさそうですわね」
「僕、今の内にアンジェリカ先生に話しておくよ――死者が出るかもって」

うなだれるレイアと奈津。
そんな二人を見て、椿は首をかしげた。

「どうしたんだろう？二人とも」
「――――――――さぁ？」

冷や汗を流しながら、すぅと目を逸らすラミネージュ。
椿は、そんなラミネージュの様子に、ついに気がつくことがなかった。

「さて、失礼しましたわ」

頭を振って、レイアはトラウマからの脱出を果たした。

「応龍杯のルールは至って単純ですわ」

一つ、場をただすように咳をする。
すると、椿も説明を聞くことに集中し始めた。

「四人一組でチームを組み、障害物のあるフィールドで互いのリーダーを狙う。リーダーを倒した方が勝ち、というものですわ」
「えーと……危なくはないの？」

魔法戦闘を想定しているであろう説明に、椿は戸惑いの声を漏らした。

「そうでしたわね、そこから説明するのを忘れていましたわ」

「応龍祭中はね、特殊な装霊器を使うんだよ、椿」

のけ者にされていると感じたのか、奈津も説明に参加する。

それに、ラミネージュも続いた。

「特殊な装霊器？」

「そう。特殊な技術により、当たった対象のヒットポイントを削る」

“競技用装霊器―≪アスレチックローダー≫”といって、魔力を無害なものに変化させることが出来るというものですわ。もっとも、設定されたもの以外、固有魔法や属性魔法、基本魔法ですら使えませんが」

競技用装霊器に、専用のディスクを使って三種類まで魔法を設定することが出来る。

近年に入って漸く固有魔法を一つだけ設定できるようになったが、強力な魔法はダメージを与えないようにすることができないため、やはり使うことが出来ない。

「使える魔力量も設定してあって、本格的に頭脳と連携力と根性が求められるんだ」

奈津が最後に、そう捕捉した。

魔力量は一定で、使える魔法も限られる。

固有魔法を登録できると言っても、それは使い慣れた魔法が一つもないのは現実的ではない、という考えのもとだった。

「そっか……うん、それなら、私も“根性”で、頑張らないとね」

気合いを入れ直して、そう言って張り切ると、冷たい視線が奈津に向けられた。

「椿に余計なことを言わないでくださいます？奈津」

「ほんとう」

「あぁっ……椿、そんなアホの子みたいなこと言わないで……僕が悪かったからっ」

半ば本気で心配されて、椿は言いようのない理不尽さを覚えるのだった。

†

帰りのＨＲが終了する。

応龍祭の練習を行うため、午後の授業後に楓が各競技の練習場所を

伝えて、解散になった。
この後は、自主的に練習させるのだ。

椿は、同じクラスでありながら顔を見たことがなかった、応龍杯のメンバーと顔合わせをするために、ジャージに着替えてから指定された演習場へやってきた。

椿たちが指定されたのは、広大な敷地の中に幾つかある演習場の中の一つだった。
他人に手の内を知られないために、指定された時間内は貸し切りにすることが出来るのだ。

「おっ……来た来た。君がリーダーくん、だよね？」

そういって快活な笑みを見せたのは、橙がかった茶色のポニーテールに同じ色の瞳の少女だった。演習場が間違っていないことが確認済みである以上、チームメンバーで間違いはない。

「あ、うん。私は神崎椿。よろしくね」
「うん！よろしく！……あたしは大寺門明里だよ！」

腕を組んで、仁王立ち。
そのまま大口を開けて笑う姿は、なんとも剛胆だった。

「おーい！リーダー来たぞーっ」

そう、明里が演習場の中央へ手を振る。
そこには、襟足の長い黒い髪に焦げ茶の目、それに細い銀色の眼鏡をかけた少女が本を読んでいた。少女は、眠たげな表情で椿を一瞥すると、再び視線を本に戻した。

「そう。私はルナミネス・イクセンリュート。よろしく」
「うん、私は神崎椿。よろしくね……えーと」
「好きに呼べば？」
「うん……よろしくね、ルナ」

略して呼んでも、大して反応はない。
ラミネージュと違って、終始眠たげでやる気も感じられない。

「おっ！それいいね！それじゃあ、あたしもルナって呼ぶよ！」

明里は、一言一言が非常に大きな声で、ルナミネスは終始迷惑そうに眉をしかめていた。
そうしているうちに、最後の一人もやってきた。

「とうちゃーくっ……ありゃりゃ？そろっちゃってる？」

そういって困ったように頭をかくのは、小柄な少女だった。
シルバーブロンドの髪は、毛先に柔らかいウェーブのかかったロングヘア。目は、澄んだ鳶色だった。何より特徴的なのは、その身長だろう。百四十前半程度に見える、小さな女の子だった。

「ま、時間内みたいだしいっか。わたしはフランチェリカ・水戸川。チェリカって呼んでー♪」

そういうと、フランチェリカはひらひらと手を振った。
椿も気軽に挨拶をした。言ったら怒られそうだが、子供好きなのだ。

「えーと、私がリーダーって事になったんだけど……リーダーってどんなことをしたらいいのか正直解らないから、手伝ってくれると

嬉しいです」

そういって苦笑いする。

好感触だったようで、興味がなさそうなルナミネス以外は笑って頷いた。

「あっはっはっ、よくわからないけど、あたしも出来る限りのことはするよ！」

「うーん……わたしも正直何をしたらいいかわかんないけど……チームだもん、協力はするよ～」

好意的な返事に、内心椿はかなり安心していた。

拒まれたりでもしたらどうしようかと思ったのだ。

「言われたとおり動く。でも、それ以上は別にいいでしょう」

疑問ではなく、断定。

チームワークとして動く気は無いと言い切ったようなルナミネスの反応に、フランチェリカは眉をつり上げた。

「なにそれ？クールぶって、かっこつけてるの？」

フランチェリカは、物怖じすることなく、ルナミネスの正面から言い放った。

良くも悪くも、感情を隠すことが出来ない女の子だった。

そんなフランチェリカに、ルナミネスは怒ることもなく一瞥した。

そして、ため息をついて本に目を戻す。

「そこになおれぇ～！」

「チェ、チェリカ？だ、だめだって！」

鞄を振り回してルナミネスに襲いかかろうとするフランチェリカを、椿は後ろから羽交い締めにして押さえた。だが、案外力が強く、引きずられる。

「おおっと、落ち付けって」

そんなフランチェリカを、明里は軽々と持ち上げた。

猫のように持ち上げられながら暴れるフランチェリカと、なんとか抑えようと片手で奮闘する明里。椿もフランチェリカをなだめようとしていると、ルナミネスはため息をついて立ち上がって、そのまま出て行く。

「逃げるな！こらぁっ！」

「あっ――私、追いかけてくる！」

「はっはっはっ、ここは任せてくれ！」

豪快に笑う明里と、その明里に抑えられているフランチェリカ。

二人をその場に残して、椿は出て行ったルナミネスを追いかけた。

†

ルナミネスの家、イクセンリュートは、代々学者の家系だった。
戦闘職につくものは滅多におらず、学者や芸術家として名を馳せる。
そんな、魔法使い達の中でも変わった家系だった。

長男や長女ともなると、跡継ぎだの何だのと煩わしいことはある。
だが、ルナミネスは四女。何のしがらみもなく、なりたいものになれる。
そんなルナミネスが目指したのは、魔法詠唱について研究をする、研究者だった。
人気のない職業のため、研究職に就くのに大きな功績はいらない。
並程度の成績で魔法学校を卒業していれば、それでいい。

だから、ルナミネスは、今回の応龍杯に何の興味も持てなかった。

元々身体を動かすことは好きではないし、応龍杯で得られる名誉にも実績にも関心がない。
そうなると、チームワークやなんだというものにも力を注ぐ理由を見つけられず、結局本を読む方が有意義だという結論に辿り着いたのだ。

ルナミネスは、小さい頃から本を読むのが好きだった。
心躍る冒険譚、胸騒ぐ恋愛もの、頭を捻る推理小説、誰かが残した論文。
著名な研究者の論文を読んでいる時間が、何よりもルナミネスの心を躍らせた。

楼城館女学院に入った理由も、本が理由だった。
この学院の図書館は、大きい。貴重なものからマイナーなものまで、ジャンル問わずに揃えられている、楼城館の大図書館。その存在に憧れて、ルナミネスは楼城館学院に入学した。

もちろん簡単なことではなかったが、それでも本のためなら、頑張れた。

本を読んで、幸せを感じる。
その他のことに一切関心を持たなかったルナミネスは、いつも一人で本を読んでいた。
一人っきりは、彼女にとって当たり前のことだった。

冷たく接すれば、他人は怒るか呆れるか、感心を無くして去っていく。
その背中を見るのも彼女にとっては当たり前のことで、これから先もずっと“そう”なのだと、信じて疑わなかった。

だから、自分を追いかけるその姿に、ルナミネスは声を失った。

足音と気配に振り返ると、椿が追いかけてきたところだった。
ルナミネスは知るよしもないことだが、夕暮れは椿にとって、とても縁のある時間だった。

「えーと……うーんと」

追いかけて来はしたが、何を言おうか考えていなかったのだろう。
椿はルナミネスを引き留めると、目の前で腕を組んで悩み始めた。

「ルナは、さ……体育祭、好きじゃないの？」

少しだけ寂しそうに笑う椿に、ルナミネスの良心は、ほんの少しだけ痛んだ。
運動はあまり好きではない――だが、そうまで嫌いという訳でもなかった。

「別に……協力とかは、私が勝敗に興味がないから、連携なんて出来ないんじゃないかって思っただけ」

勝ちに行く気力もない人間がいるのなら、せいぜい駒にでもすればいい。
ルナミネスは、半ば本気でこんなことを考えていた。

「そうなの？」

割と深く考えを巡らせていたルナミネスは、きょとんと首をかしげる楓にため息をついた。

「そう。だから――――」
「それならっ」

だから、駒として利用していいから、自分に構うな。
そう言おうとしたが、それも椿に遮られた。

「それなら、勝ち負けとかじゃなくて――――思いっきり、楽しもうよ！」
「は？」

勝敗に興味が無くても構わない。
ただ、やるからには笑い合いたい。椿は、そんな些細な願いを、恥

ずかしそうに言葉にした。

「興味がないって、自分の気持ちに蓋をするより、精一杯やって“楽しかったー！”って終わる方が、ずっと気持ちがいいんじゃないかって思うんだ」

椿は、そう言って、ルナミネスに手を差しのばした。
その笑顔があんまりにも綺麗で、その言葉があんまりにもあたたかくって。
ルナミネスは、自分の頬が綻んでいることにも気がつかずに、大きくため息をついた。

「貴女って……変な人ね」
「うっ……なんでだろう、よく言われるんだ……」

そういって肩を落とすが、ルナミネスに伸ばした手は、動かない。

「そうね、応龍杯にはやはり、あまり興味はわかないけれど、協力くらいするわ」

苦笑い、だが、やる気のなさそうな無気力感は、もう感じなかった。
差し出された手を握ると、椿は花開くように、可憐な笑みを浮かべた。

「それに、――――」
「うん？どうしたの？」
「なんでもないわ……さ、戻りましょう」

手は、握り合ったまま。
おそらく遅れたことを怒っているだろうフランチェリカ達にどう謝

ろうか。
そんなことを考えながら、椿は歩く。
そんな椿の隣で、ルナミネスは、新しい本に出会ったときのような、明るい表情で椿を見ていた。

――――それに、私は貴女に……興味がわいてきたから、ね。

心を許した少女に伝えはせず、ただ胸の内側で、小さく呟くのだった。

第八話　応龍祭編？　結成（後書き）

なんとか時間が作れたので、書き上げました。
今回から数話に渡って運動会編になります。

扱い的には前編のようなものですので、細かいことは最後に。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回もまた、よろしくお願いします。

第八話　応龍祭編？　狙われた少女（前書き）

短めです。

第八話　応龍祭編？　狙われた少女

応龍祭が近づいて、出場競技も決まる。
そうなると、生徒の関心は応龍祭に向く。それは、仕方がないことだった。

授業を開始するために教室に入った雅人は、そんな生徒達の様子に苦笑した。
これでは授業などろくに聞きはしないだろうが、それでも授業をしないわけにはいかない。
お仕事なのだから、それでもなんとか聞いて貰おうと、雅人は意識を切り替えた。

「そ、それでは、は、はじめます」

本題に入る前は、何度もどもる。
そんな自分の口調に、雅人はそっと苦笑した。

「今日は、邪霊と人間の関係、その二をお教えしましょう」

良く通る声。
生徒達は、なぜ雅人が普段からこの声が出せないのかと疑問に思いながらも、その声に耳を傾ける。

「何度かお話ししましたが、邪霊は、人間にとっても精霊にとっても天敵です。――ここまでは、いいですね？」

返事は聞こえない。
だが、何割かの生徒は頷いた。

「精霊の中にも、悪魔という種族は人に甘言を囁き、人の心を堕とします。けれど、彼らは魔法使いが契約を交すことで対等な関係になることが出来ます」

契約に代償を求められたりもするが、知恵比べで勝つことが出来れば、彼らは魔力を支払うだけで力を貸してくれる。

「少々特殊ですが、身近で悪魔と契約を交しているのは、セルエイラ先生ですね」

ミファエルの名が上がったことを、生徒達は驚いていた。
名前や雰囲気からして、天使と契約したのだろうと考えていたのだ。

「これと同じようで、全く違うのが、邪霊との契約です」

相互に天敵と称される関係。
今しがたそう説明をしたのは雅人だというのに、雅人はそんな矛盾した言葉を放った。

「高い知性を持つ邪霊は、人間と契約をする能力を持ちます。ただし、これは相互に利益のあるものではありません」

雅人は、そう言い切ると、厳しい目で説明を続ける。

「最初に邪霊と契約を交した人間が見つかったのは、七十年前でした」

圧倒的な力を以て人間を襲う人間。
魔法を悪事に使うものなど今までいくらでも居たが、それとは毛色

が違っていた。

装霊器も詠唱を用いらずに脅威を振るう、人間だったのだ。

「邪霊は、人間に甘言を囁き、耳を傾けた人間を自らの駒にします。人間は、願いを叶えて貰ったが最後、永遠に人を襲う化け物になります」

それは、後の調査で解ったこと。

だから、その当時、その人間は人々にとって“未知なる脅威”だった。

「邪霊と契約した人間は、死後、輪廻の輪に加わる事無く消滅する」

雅人はここで大きく切ると、生徒達が決して聞き漏らさないように、少しだけ声を大きくした。

「こうして邪霊の傘下に加わった人間は、左目に、契約を交した邪霊の紋章が現われます」

黒板に大きめに書かれた二文字。

「そんな彼らのことを、我々は“魔人―≪ダークアウト≫”と呼びます。皆さん、覚えておいてくださいね。――そ、それでは、これで終わります」

そういって退出する雅人を見送ると、生徒達は大きく息を吐いて気持ちを元に戻した。

午後からはまた、指定された時間に演習場へ集まる。
今日は、競技用装霊器の借し出しが始まる日だった。

ＨＲ終了後に、そのまま四人で演習場に来たのだ。話をしたことがなかった昨日までならともかく、ある程度打ち解けてしまえば、わざわざ演習場で合流するような遠回りをする必要もなくなる。

まずは時間までの間に、装霊器の施設で競技用装霊器を受け取ることになった。

「うーん……種類はどんなのがあるの？」

椿がそう問いかけると、左に並んでいたルナミネスが答えた。
ちなみに、左からルナミネス、椿、フランチェリカ、明里という順番だ。

「剣・短剣・槍・斧・槌・弓・銃・ガントレット・グリーブ・盾・棒。この十一種類から一つ選べるわ。私は棒よ」
「わたしはハンマーだよ～……特殊型だから、一番近いのがそれなんだよねー」
「あたしはガントレットだ」

棒、ハンマー、ガントレット。
見事に接近戦主体のチームなようだった。まだ戦法を聞いていないので判断は出来ないが、バランスを考えるのなら椿は弓や銃にしたほうがいいだろう。
そう考えていたことが顔に出たのか、ルナミネスがそっと思考に割り込む。

「私は遠距離主体の魔法使いだから、妙な気は遣わなくてもいいわよ」
「あ――うん、ありがとう。ルナ」

そう気を遣ってくれたルナミネスに、椿はどこか嬉しそうに微笑んだ。

「むー……昨日から妙に仲いーよね、あの二人」
「あっはっはっ、何かあったんだろうなー。仲良くなりたいのなら、チェリカも輪に加わればいいじゃないか！」
「あいたっ」

笑いながらバシバシと背中を叩く明里に、フランチェリカは眉をしかめながらも、そんなに嫌がっていなかった。構われるのは、嫌いではないのだ。

「ねぇねぇ！わたしも入れてー！」

フランチェリカは、軽く飛び上がって椿の首に巻き付いた。
椿はその勢いに負けて身体が傾いたが、すぐに隣にやってきた明里が支えた。

フランチェリカを負ぶさる形で、椿たちは施設に到着した。
そこで競技用装霊器と、インストールデータが入ったディスクと、その他の周辺機器を受け取ると、体操着に着替えて演習場に入った。

「このインストールデータに入っている魔法を、小型モニターを見ながら配線を使って、競技用装霊器にインストールすることで登録することが出来る。登録できるのは三つまで。うち一つまでならば固有魔法を登録することが出来るが、あまり高位の魔法は登録することが出来ない」

説明書を見ながら、ルナミネスが内容を要約しながら説明した。
一度で納得するのが椿、頷いてから納得するのがフランチェリカで、明里はかみ砕いて納得した。ルナミネスは、そんなに難しいことは話していないのに、とため息をついた。

「それじゃあ、みんなで役割分担をしながら登録しようか」

椿が選んだのは、剣の競技用装霊器だった。
ガントレットはどうみても格闘戦専用で、ガントレットから剣真を伸ばすくらいだったら、始めから剣を持ったほうが扱いやすそうだ

ったのだ。

応龍杯は、リーダーのヒットポイントがゼロになった方が負けとなる。

だが、当然リーダーだけが生き残ってもだめだ。リーダー以外にも最低一人は生き残る必要がある。

「定石としては、リーダーが探索、結界系統で指示をだして、私たちが指示に従って敵リーダーを倒す。そんなところかしら」

指を立てながら説明するルナミネスに、椿は真剣な表情で頷いた。

「サポートと司令塔、何より生き残ることを優先にする――だよね？」

「うん。それから、リーダーが二人倒せば仲間を一人復活させられるのだけれど……これはあまり現実的ではないわね」

「なんでー？椿ちゃんが二人倒せばいいんでしょ？」

「そんなことをするくらいなら、作戦を練り直して残りのメンバーで戦った方が効率的よ」

リスクを冒した場合は、リターンが無かった場合減点評価になる。時間切れにより、評価得点での決着になった際に、不利になるのだ。危険を冒して失敗すれば、大きな損害になるということを教えるためのシステムだった。

だからといって、冒険しなければいいという訳ではなく、乗り越えられる手札を揃えて乗り越えてみせれば、リターンはもちろん大きな得点になる。

この得点は、戦績として内申書に書かれるのだ。

「うーん……三つしか登録できないんだよね？」
「そうね。サポート系は私に任せて」
「それならわたしは前衛かなー？」
「あたしも前衛が得意だが……オールラウンダーも出来ないことはないぞ！」

話を統合して、椿は考えを話す。

「それなら、私が攻撃、支援で、ルナがサポート。明里が中衛、チェリカが前衛でいいかな？」

三人がこくりと頷いたのを見ると、椿は安心したように息を吐いた。すごく的外れなことだったらどうしようかと、頭を捻らせていたのだ。

「それじゃあまずはインストールをして、実際に感覚を掴んでみようか」
「うんっ！」

フランチェリカが元気よく返事をすると、椿は顔をほころばせた。

†

登録を済ませると、まずは実践してみることにする。
椿と明里、フランチェリカとルナミネスで、まずは組んでみる。
組み方は、椿の提案で、ジャンケンで決めた。

ヒットポイントなどは、網膜投影をさせることが出来る特殊な魔法のアイテムを身につけることで、応龍祭中は常に情報を表示しておくことが出来る。

種類は、ネックレス、ピアス、指輪のどれか一つで、椿は指輪を選んだ。
すると、数値化された情報が目の前に浮かび、椿は驚いて少しだけ後ずさった。

――ＨＰ１０００　ＭＰ１０００　Ｔ：００：００：００

ＨＰはヒットポイントでＭＰはマジックポイント。Ｔは競技の残り時間を表していった。
椿は、手元の説明書を開くと、詳細を見ていく。

「えーと……魔法によっては、情報が追加されることがあります？」
「ま、やって見れば解るって！」

朗らかに笑う明里を見ていると、椿は細かいことを考えていたことがばからしくなった。

「うん――そうだね。実践あるのみ、だよね？」
「解っているじゃないか！あっはっはっ！」

両手を腰に当てて胸を張る。
大きく口を開けて笑うその姿は、妙に様になっていた。

「それじゃあ始めよう。――行くぞっ！【肉体・強化】」
「そうだね、始めよう。――行くよっ！【弾丸・射出】」

明里が腰を落として、走り出す。
白い光が競技用装霊器に入ると、明里の精霊石に反応する。
だが、無属性なのか、光は白いままだ。

肉体に魔力が回り、飛躍された身体能力で、一足飛びに近づこうと身体を加速させる。
椿は、そんな明里を打ち落とそうと、魔力弾を発射した。

「疾ッ」

明里は、椿の放った弾丸を、淡く輝く拳で迎撃した。
魔力が霧散する反応で、淡い虹が生まれる。
その虹に隠れるように、二発目が明里に迫っていた。

「ははっ――甘い！」

明里は、その二発目を左手で掴み、握りつぶした。

「【固有魔法・炎刃】」

競技用装霊器は、固有魔法を一つだけ登録できる。

そして、登録した魔法は競技用装霊器で使う場合のみ、詠唱を短縮できるのだ。

椿の白い剣型競技用装霊器が、はめ込まれたアレクの精霊石に反応して赤く光る。
そして、剣真が炎を纏い、大きく伸びた。

右手を振りかぶる明里に、炎刃を振り下ろす。
鋭く早い一撃だが、明里はその一撃を、右手の甲を使って弾きながらそらした。

「っ！？」

威力が流されて体勢を崩す椿。
そんな椿に、明里は逸らすことに使った右手を後ろに引きながら、左の正拳突きを放った。

「はぁぁっ！」

身体を半身にしながら、明里の拳に背を向けるように無理矢理前に進んだ。
炎刃を振り上げる形で明里を斬りにかかるが、明里もここで負けはしない。

「でぇ、りゃあっ！」

振り上げを、右手を犠牲にすることで受け止める。
そして、左足を用いた鋭い蹴りを、椿に放った。

「つぅっ！？」

互いに衝撃から三歩下がり、そこで漸く椿は自分の数値を確認した。

――ＨＰ９００　ＭＰ８００　Ｔ：００：００

一撃で百も減ってしまった。

さらに、ＭＰは二百も減っている。

「長期戦でもなんとかなる戦法を考えないと……」

ほんの数十秒で、この有様だ。

これでは、本番の一試合十五分の競技を考えるのなら、もっと効率のいい魔力運用を考えなければいけなかった。

まだ続いている、ルナミネスとフランチェリカを置いて、椿は二人の光景を見ながら休憩を取ることにした。その間に仲良くなろうと、椿は明里に一歩踏み込んだ。

「いや、椿は強いなっ！」

「明里も、すっごく強いよ。体術が得意なの？」

自分を真っ向から気持ちよく評価した明里に、椿は照れながらもそれを返した。

「ああ。あたしの家は、代々体術を操るんだ。強いものは血が濃くて、血が濃い程、鮮やかなオレンジ色の髪を持っているんだよ。太陽のように、ね」

そういって、明里は少しだけ顔を伏せた。

明里の髪は橙がかった茶色――くすんだ、オレンジ色だった。

その色から、明里は、心ない親類縁者から“混じりもの”と呼ばれ、笑われていた。
そんなことから、明里は自分の髪の色が、あまり好きではなかった。

「それじゃあ、明里の色は――――」
「……うん」

くすんでいる。
濁っている。
そんな言葉をかけられるのは、もう慣れっこで。
明里は勤めて明るく笑おうと、自分“らしく”笑おうと、頬の筋肉に力を入れた。
だが、その力はすぐに霧散することになった。

「――――温かい、大地の色だね」
「よく、いわれ……へ？」

笑おうと、笑い飛ばそうとしたが、思わず言葉を詰まらせる。
ポカンとした表情を見せる明里に気がつかず、椿は言葉を続けた。

「お日様の光をいーっぱい吸い込んで、みんなに元気をくれる――――命の色だ」

椿はそういうと、朗らかな笑顔で明里を見た。
その笑顔には、それが正解だと信じて疑わない、優しい光が宿っていた。

「ぷっ――――――ははははっ」
「え？あ、あれ？なにか、おかしなこと言ったかな？」

明里は、おなかを抱えて笑いだした。
そんな笑顔でそんなことを言われたら、悩んできた自分がバカみたいだ、と。
笑いすぎてはいない。だというのに、明里の目尻には喜びの雫が輝いていた。

「いや――――そんなことを言われたのは、初めてだったんだ。ありがとう、椿」

普段のように声を張り上げることなく、明里は穏やかな笑顔で感謝の言葉を述べた。
椿はその笑顔にきょとんと首をかしげたが、すぐに明るい笑顔で頷いた。

「どういたしまして――明里」

和やかで温かい空気が、二人の間に流れた。
その空気を壊すものが、丁度二人、必然的に割り込むのだが。

「いい加減、自分が子供だって自覚なさい！」
「ふん！かっこつけ眼鏡には言われたくないよ！」

演習場に魔力を走らせながら、試合（ケンカ）をする二人。
その様子がどうにもおかしくなって、明里と椿は顔を見合わせて笑い合った。

†

貸し切り時間を終えて、片付けをする。
フランチェリカはルナミネスと目を合わせる度にいがみ合っていたが、子供のケンカのようにも見えて、微笑ましい空気になっていた。

その空気に気がついたフランチェリカとルナミネスは、盛大に眉をしかめた後、互いに顔を見合わせてため息を吐くのだった。そこまで相性が悪い訳ではないのだろう。二人は、互いを傷つけるようなケンカには、進展していなかった。

演習場から出る際は、リーダーである椿が演習場の確認をして、最後に出る。
忘れ物のチェックなどを済ませて、演習場を出ようとした。

「椿ちゃん！」

のんびりと歩いていた椿はフランチェリカの声で反射的に前へ――
フランチェリカ達の方に――飛んだ。そして、伸ばされた手を明里とルナミネスが掴んで、引き寄せた。

――ガシャンッ

大きな音に、椿は明里に抱き寄せられたまま振り返った。
その先では、椿が先ほどまで立っていた場所に、シャッターが落ちていた。
これは、災害時に演習場の出入り口を隔離するためのシャッターなのだが、本来の速度よりも遥かに速く落ちてきたせいか、シャッターは見事にひしゃげていた。その姿が、シャッターの威力を物語っていた。

「なに、これ？」

冷静に考えずとも、事故だと言うことは解る。
だが、椿の胸には、いいようのない“不安”が渦巻いて、消えなかった。

そう――まだ、始まったばかり。

第八話　応龍祭編？　狙われた少女（後書き）

なんとか投稿。
第八話は、まだ続きます。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

２０１０／０９／２５　誤字修正

第八話　応龍祭編？　加速

天気は雨。
どんよりとした空と湿っぽい空気は、その環境下で過ごす生徒達の機嫌を損ねるのに、見事に一役かっていた。

そんなじめじめとした空気の中でも、椿たち一年Ｂ組の選手達は、心なしか機嫌が良さそうに見えた。

それというのも、昨日の“事故”により発生した、棚から出てきたぼた餅が大きく関係していた。

その充実した設備を以て、生徒達に過ごしやすく学びやすい環境を提供する。
それは、名門校と呼ばれるところなら、最低限、当たり前のことだ。

だが、結果的にその施設が生徒に牙を剥いたという事実は、大きな事だった。

結果――椿たちには、特別に予備の演習場を貸し切る権利が与えられたのだ。

応龍祭まであと四日。
それまでに練習しておくのは、当然籤で引いた競技だけではない。
体育の時間には、クラス全員が参加する種目の練習もする必要があった。

楓の指示でストレッチをして、その後練習をする。
種目は――――組み体操だった。

この種目は“競技”……そう、競うのだ。
恥を捨て、羞恥を乗り越え、クラス対抗でもっとも美しい組み体操を行った組に得点が入る。魔法の使用は有り……というか、魔法で演出しないと高得点は狙えない。

さらに、高得点を狙うのなら審査員である学院長の好みを狙う必要がある。
どこのチームでもやっていることだし、独創性が出なくなる条件という訳でもない。

「真剣な表情でやる組み体操が見たい、かぁ……これ、“好み”とかじゃないよね」
「ホントだよ。嫌がらせの域に入ってるよね」

呟く椿の横で、奈津が大きくため息を吐いた。
だが、どうにもやりたいことがあるようで、その顔は微妙に綻んでいた。
椿はそれに嫌な予感を感じて、一歩退いていた。魔法使いの“嫌な予感”は、良く当たる。

組み体操は、五人一組で六組、横一列に並ぶ。
そして、端から組み体操を披露して、その総合的な美しさや技術力で得点をつける。
六組がテーマに沿った演技をするとポイントが高いし、六組の色合いのバランスなども見られる。息を合わすのが非常に難しくなるが、三十人で一つの組み体操を見せれば、さらに得点は高くなる。

そこまで真剣にこの競技のルールを定めた学院長なんか、しんでしまえばいいのに……というのが、大半の生徒の共通意見だった。

応龍杯と並ぶ程得点がおいしいので、手を抜く訳にはいかない。
その事実が、うら若き少女達が、羞恥心を箱に詰めて鎖で縛って心の底にに沈める理由となっていた。

奈津と二人でストレッチをしていると、楓が集合の合図をした。
椿は奈津と連れたって、楓の元へ行く。

「さて、それじゃあ組み体操となるんだが――まずは基本的なのを幾つか練習して、それから全体のバランスを整えるのにいい形を考

えていこう。自由に五人で組んで見ろ」

楓がそういうと、奈津と一緒にいた椿の元に、応龍杯のメンバーが集まった。

「椿！あたしたちもいいかい？」

「明里！――奈津、彼女たちも一緒で良い？」

大中小といった三人の姿に、奈津は苦笑しながら頷いた。

嬉しそうな椿の様子を見て断ることが出来るはずがない。

それに、きちんと自分の意思を確認してくれたことが、奈津には嬉しかった。

「あたしは大寺門明里だ！よろしくな！」

あっはっはっ。

そう笑いながら挨拶をする明里を見て、奈津は相性の良さを肌で感じていた。

「わたしはフランチェリカ・水戸川。チェリカで良いよ～」

脳天気な感じで名乗るフランチェリカ。

これまた、相性は悪くなそうだ。

「ルナミネス・イクセンリュート。よろしく」

奈津は直感的に思った。

絶対相性が悪い、と。

それはルナミネスとしても同様で、目を合わせようとすらしない。

その態度に顔をが引きつるのを、奈津は一生懸命隠した。ヒーロー

は、心に余裕を持つべきなのだ。

「僕は佐倉奈津。よろしくね、明里、チェリカ、ルナ」

努めて爽やかな笑顔を作って言ったのだが、ルナミネスには鼻で笑われた。

椿に対する好感度を肌で感じ取ったことも、原因の一つだろう。八割といっても良い。

「基本的な組み体操かー……チェリカはどんなのをやってみたい？」

「えーと……どんなのがあるの？」

椿以外は、全員お嬢様幼稚園、小学校、中学校と通ってきた、生粋のお嬢様だ。

学校の敷居と位が高ければ高い程、組み体操なんかやらない。

お嬢様学院に自分が通っていることなどすっかり忘れていた椿は、こんなところで思い出させられたという事実に、こっそりため息を吐いた。

「えーと……扇、とか。ピラミッド、とか。二人一組なら、サボテンなんかもそうだね」

椿があげていった例に、ルナミネスを除く三人は首をかしげた。

ルナミネスは本からの知識で概要と名称は知っていたが、実際どうすればいいのかはよく解らなかった。

椿は、形の説明をするのに手本となる組はないものかと、ぐるりと周囲を見回した。

だが、そこにあった光景は、とても手本になるものではなかった。

組み体操というよりも、サーカスじみた動き。

一人が腰を掴んで一人を持ち上げる。これを五人で行うことによりタワーを作る。

――――魔法による、身体強化だ。

身体を使って、空中で文字を書く。五画の漢字だ。

――――魔法による、空中浮遊。

その光景を見て、椿はここが魔法学院だったことを思い出した。

組み体操と聞いて思い浮かぶのは、こんなものなのか、と。

「――――で、どうするの？椿」

その困惑の理由に気がついたのは、書物から組み体操の知識を持っていたルナミネスだけだった。ルナミネスは、椿の袖を引いて、どうするのかと問うた。

一般の競技でも、競技用装霊器は用いられる。

当然、使用魔力量の制限もかけられるが、一般競技では応龍杯に比べて制限が狭い。

不必要な探索や、競技に関係のない治癒などが削られている。

網膜投影にしても、表示されるのは制限ＭＰだけだ。

他は特に制限されている訳ではない。

だが、制限ＭＰがあるということは、その範囲内で魔法も使って、組み体操をしなくてはならないと言うことだった。

「椿って、爆発系使えたよね？」

「うん？……使えるけど……？」

奈津は、目を輝かせながら椿に詰め寄った。

「ヒーローの背後は、必ず爆発するんだよ」

奈津が何かやりたそうな顔をしているのは知っていたが、これのことだったのかと頭を抱えた。気持ちはわからないでもないが、それでは奈津のワンマンプレーになってしまう。

そう説得すると、奈津はしぶしぶと引き下がった。

「とりあえず、椿ちゃんがいってたの、何かやってみようよ！」

なかなか方針が定まらずに悩んでいた椿に、フランチェリカが元気よく提案した。

そのフォローを嬉しく思いながら、椿は頷いた。

「そうだね、それなら――扇、でもやってみようか」

「扇かい？よし！それじゃあ、それ、やってみようか！」

明里が大きな声で賛同すると、もとから反対する気も無かったルナミネスも参加する。

奈津は椿の隣りに立って、どんなものかは知らないが、とりあえずポジションを確保していた。そのことに、ルナミネスは再び剣呑な表情をした。

「えーと、バランスを考えると――」

背丈は、高い順に考えると、明里＞奈津≧椿＞ルナミネス＞＞フランチェリカだ。

扇のバランスを考えると、真ん中に明里、その左右に奈津と椿、さ

らに左右にルナミネスとフランチェリカが良いだろう。

そう考えて、椿は早速指示を出した。

奈津とにらみ合っていたルナミネスはそのまま二人で手を繋ぐことになり、椿の隣はフランチェリカとなった。こうして機を逃す様は、レイアと奈津の関係によく似ていた。

椿の指示どおりに動き、横一列に並ぶ。

そして、椿が奈津に頼まれたように背後に爆発する魔法を仕掛けて、一気に身体横に倒した。

――ドンッ

爆音と共に、扇が開く。

背後で起こる真紅の閃光。

その光に照らされる、五人の息のあった“開花”。

使い古されたはずの形は、伝統という歴史を呑み込み見るものを魅了する。

そう、その瞬間。

周囲の生徒達は、確かにその演技に魅入っていた。

「これが――――組み体、操？」

それは誰の呟きだったか。

自分たちが練習していたものも、確かに組み体操だろう。

だが、その機能美を追求した形は、まごう事なき組み“体操”だった。

「……これよ」

金色の長い髪で目を隠した少女が、魅入ったまま呟いた。
彼女は、このクラスの委員長だった。

「これこそが、私たちの求めていた――――“美”だわ」

周囲の生徒も、こくりと頷いた。
魔法を使うのなら、シンプルに。
流麗さよりも強く表すものの名は――――“信頼”だ。

「応龍杯のリーダー……神崎椿。取るに足らない庶民だと思っていたけれど、これは認識を改める必要があるわね」

彼女はそう呟くと、彼女の発想をクラスの演技に取り入れて貰うように、楓に進言しに行った。

楓は「珍しく正統派が居る」程度にしか考えておらず、その提案を軽く了承した。
椿は、まさかこんなことで認められるとは夢にも思わず、ただ扇をして照れていた。
こんなとんでもない評価をされていると知ったら、泡を吹いて倒れるだろう。

そして、後日、この話を聞いて顔を真っ赤にさせて倒れることになるのだが、椿はそのことに気がつくとはなかった――。

†

組み体操の演目が“扇ｄｅピラミッド”に決まったことにより、椿はぐったりとしながら演習場へ向かうことになった。

提案者となった椿と、身長の問題で一番上に配置されることになったフランチェリカは、放課後に少しの間だが、委員長に拘束されていたのだ。

奈津はリレーの練習へ向かい、明里とルナミネスは待たせるのも悪いので先に演習場へ行って貰っていた。そのため、椿は今フランチェリカと二人で歩いていた。

ぐったりと歩く椿の横顔を、フランチェリカはそっと見上げた。

椿は、明里だけならまだしも、愛想のないルナミネスまで、すぐに距離を縮めていた。

椿はどこか、人を安心させることが出来る“何か”を感じさせるのだ。

それが何であるかは理解できずとも、悩みをそっと打ち明けても、笑われたりはしないだろうという予感が、フランチェリカの中に芽生えていた。

だから、フランチェリカは椿にそっと心の内を吐露した。

「わたし、ね」

「うん？」

首をかしげる椿に、フランチェリカは言葉を続ける。

「子供っぽいって、よくいわれるんだ」

水戸川の家は、紳士淑女とも言える、大人の雰囲気を持った人間が多い。

家の者も、当然のようにフランチェリカに“大人になること”を強要し続けていた。

「お父様もお母様も、お兄様もお姉様も、弟も妹も、みんなわたしに“大人なれ”って……“恥ずかしい”っていうんだ」

まだ十五歳。

たったの十五歳だというのに、フランチェリカの家族は、彼女にそう言い続けてきた。

弟、妹たちは、自分たちより背の低いフランチェリカに、一片の哀れみを込めて。

「わたしは、自分がこうありたいから、こうやって過ごしてる」

家族への反発心がないといったら嘘になる。

けれど、彼女が天真爛漫に過ごしているのは、彼女が“自分を偽りたくない”と、真摯に考えているからだった。

「子供っぽいって――――そんなにいけないことなのかなぁ」

消え入りそうな声。
フランチェリカは、自信がなくなってきているのだ。
自分がこうして、自分をさらけ出して生きていることが――――あの家に生まれたものにとって“罪”であり“悪”なのではないかと。
だから、例えどんな答えが返ってこようと、笑わないで聞いてくれればそれで良かった。
それで――――如何なる結果に落ち着いても、決意することは出来る。

「私は、チェリカは子供とか大人とか、そういうのとは、少し違うと思うな」
「……なにが？」
予想とは違う答えに、フランチェリカは怪訝そうに眉をひそめた。
「元気に笑っているっていうのは、すごくチェリカ“らしい”と思うんだ」
「――それって、子供っぽいのが、わたしらしいって事をいってるの？」
今度は、やや不機嫌になる。
子供っぽいと言われたい訳ではないのだ。
ただ、ありのままの自分を出している。それだけなのだから。
「違うよ――――」
何が違うのか解らず、ただただ首をかしげる。
椿は腰を屈めると、フランチェリカの目を、平等な視線で覗き込ん

だ。
その顔には、優しい笑顔が浮かんでいた。
「向日葵みたいに元気に笑っているほうが、チェリカらしくて」
一区切りすると、椿はいっそう力強く、フランチェリカの目を覗き込む。
「ずぅーっと“素敵”だってことだよ」
「ふぇっ？」
その目と笑顔に呑み込まれるように、フランチェリカは息を呑んだ。
そんな風に褒められたことは初めてで、その事実がフランチェリカの顔に熱を持たせた。
「あ、ぅ……あ、ありが、とう」
目を泳がせながらも、漸くその言葉だけふり絞った。
そして、散々混乱した後に、漸くいつもの笑顔に戻った。その顔は、まだ少しだけ赤い。
「ありがとう」
「どういたしまして」
再びフランチェリカの横に並ぶ。
フランチェリカはそんな椿の様子に、嬉しそうに微笑んだ。
「ねぇ……つーちゃんって、よんでもいい？」
「うん？……ふふ、いいよ。チェリカ」
「っ――――うんっ！」

許可を貰うと、チェリカは先ほど椿が言ったように、向日葵のような笑顔で頷いた。

フランチェリカは、そのまま椿の手を握って歩く。
長い道のりではなかったことを残念に思いながらも、演習場の入り口で、応龍杯のメンバーのことを思い描けた。

「他のみんなとも、仲良くなれるのかなぁ？」
「なれるよ」

ほんの小さな呟きだったのに、椿はしっかり聞き取っていた。
そのことが嬉しくて、フランチェリカは“えへへ”とはにかんだ。

「それじゃ、いこっか？つーちゃ……危ない！」

背が低いため、見上げる形になる。
だから、椿の頭上に何かが振ってきたことに、気がついた。

「っ！」

椿はその叫びに、反射的に飛んだ。
フランチェリカも、それに合わせて飛ぶ。
フランチェリカはなんとか間に合ったが、椿は一歩、間に合わなかった。

――ザンッ
「つぅっ！？」
「つーちゃん！」

空から振ってきたのは、剣型の競技用装霊器だった。
それが演習場の上の方の階から振ってきて、避けた椿の背中を切り裂いたのだ。
右肩寄りに切り裂かれ、鮮血が舞う。髪の毛はほとんど巻き込まれなかったことは、不幸中の幸いだったと、椿は混乱する頭で考えた。
滴る血液が、ジャージをじわじわと染めていく。
よほど高い階から落ちてきたせいか、剣は地面に深々と突き刺さっていた。

「つーちゃん、今、誰か呼んでくるから！」
「う、ん……おねが、い」

頭に響くような鋭い痛みと、肩に感じる高熱。
膝をついて、痛みで潤う目元を拭いもせず、気は失わないように耐える。
そして、どうにか、上を見上げた。

演習場の施設、その上。
椿は見えないと解っていても、確認せずにはいられなかった。
首を向ける度に、しびれるような刺激が肩から首を通り抜けて、脳に痛みを訴える。

痛みから来る吐き気と頭痛に耐えながら見据えた、その先。
椿は、その先に、黒く淀んだ何かを見た——そんな気がした。

高く離れすぎて見えないはずなのに“見えた”その淀みを忘れないように。
それだけを考えながら、椿はゆっくりと気を失った——。

遠くで、声が聞こえる。

†

研究室で、慎二郎は鼻を鳴らした。
リンクしていた視界を解除して、大きく背もたれによりかかる。

「失敗だが――そう、悪くないか」

視界を通して見た、鮮血。
使ったのは意志もない邪霊だが、こういった作業をするのは楽だ。
指示に従うときに、余分な思考が混ざらない。

「死にはしないだろうな。後遺症も、あの医者が居ては残らないだろう」

失敗したというのに、慎二郎の顔には戸惑いも不安もなかった。
ただ、暗い闇が、ぼんやりと身体を包んでいた。

「だが、いい。この力があれば、片付けるのも容易だ」

慎二郎を包み込む闇が、濃度を増していく。
その闇は、だんだんと研究室を覆っていった。

「くふっ」

耐えきれなかった。
そう思わせるような、淀んだ嗤い。

「ふっはははっ……くはははははっ！」

腹を抱えて笑い出す。
狂人のようなその笑いを止められる者は、そこにはいない。
だが、慎二郎は、まるで誰かに怒られたかのように、その動きを止めた。

「わかっています。はい」

一言、そう呟くと、身体を起こす。
一瞬無表情になったが、すぐにその顔が醜く歪む。

「大丈夫、大丈夫、だいじょうぶっ……くふっ……わかっているよ、慎二郎」

狂気が、慎二郎にまとわりつき、侵していく。

「でも、最後にあの女――私を“見た”？」

狂気を纏ったまま、訝しげに呟く。
だが、そんなことはあり得ない、と頭を振った。
最上階から落としたのだ。人間の視界で、見られるはずがない。

「あぁ、あぁそうさ、心配はいらない。いらないん、だ」

慎二郎は周囲に充満する狂気と闇を全て身体に呑み込むと、何事もなかったかのように立ち上がった。

「職員会議、か。まぁいい、お仕事は、しないといけませんからねぇ」

そう零すその横顔は、ただの人間のものだった――――。

第八話　応龍祭編？　加速（後書き）

今回、次回と短いです。
応龍祭編を終えると、一章の完結へ一直線になります。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第八話　応龍祭編？　現の夢と残滓

白いカーテン。
白いシーツ。
白いベッド。
白い壁と白い花。
白い服を羽織った壮年の男性。
白い服を着た若い女性。
白い雲に覆われた白い空。

なにもかも、真っ白で。
その場所がどこなのか理解するまでに、長い時間をかけてしまった。

（あぁ――――これは、夢だ）

誰かいないのかと、周囲を見回す。
父親と母親の姿を、必死で探す。

「ここは、どこ？」
（ここは、病院）

小さな手で目元をこする。
その“傷一つ無い”白い手に、行き場のない不安を感じて、首をかしげた。

「おとうさん？おかあさん？」
（この時には、もう二人は……）

身体を起こして、呼びかける。

何度も何度も声を上げようとしたが、うまく声は出なかった。

「ここはどこ、おうちにかえして、かえりたい、おとうさん、おかあさん」

（助け出されてすぐに熱を出して、熱が下がって見回したら、知らない場所だった）

うまく呂律が回らず、どうしたらいいのかわからないと、泣く。

シーツを力一杯に掴んで、目元を拭うこともせず、ただ泣く。

泣き叫ぶだけの体力はなく、ただただ涙を流していた。

「たすけて、おとうさん、おかあさん」

（まだおじいちゃんは見つかってなかった。おじいちゃん達が来るのは、翌日だ）

がちゃりとドアが開く。

そこに立っていたのは、薄ぼんやりとした視界の中で自分の側にいた、男性。

白衣の男性と白い服の女性に、ほんの僅かな怯えを見せた。

服装から、医者だとはわかった。

少しずつだが、周囲の状況から、ここが病院だと言うこともわかった。

自分がどうして病院にいるのかは、解らなかったが。

「騎士様、この子供は、やはり……」

「――――確証はありません」

白衣を着た、壮年の男性。

その背後に立つ、赤いマントに赤いフードの男性。

騎士と呼ばれたその男性のことが、どうしようもなく、怖かった。

「ですが――“焼け跡”から、死体と一緒に出てきたのでしょう？」

「まだ彼女が、“そう”だと決まった訳ではありません。ですが、念のため」

騎士の男性が目配せをすると、他の人間が病室から出て行く。

男性が近づく度に震える身体をどうにか押さえながら、男性を見上げた。

「ちっ――――“化け物”め」

そう言い捨てると、男性は外に出た。

聞こえてくる言葉に耳を傾けて、言葉をなくす。

「危険はないでしょうが――――目は、光らせておいてください」

「そんな！私たちが、“化け物”なんかをっ！？」

「不審な行動はとるかもしれませんが――――力は子供と変わりませんよ」

侮蔑の声と、歪んだ嘲笑。

流れる涙を気にする余裕もなく、目を見開いて閉じた扉を見る。

「わたし、は？」

（私は……私、は）

視界が暗くなる。

もう、その目に何かを映す気力もなく。

――――椿は、ベッドに崩れ落ちた。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

目を開けて、周囲を見る。
もう見慣れてしまった光景に、椿はそっと苦笑した。

右肩を押さえても、痛みはない。
それよりも、今の時間の方が、よほど気になった。

時計を探そうと、周囲を観察する。
意識が覚醒するにつれて感覚も正常へ戻っていき、そこではじめて

左側の温もりと、ふくらみを見つけた。

自分の手を掴んで寝息を立てているのは、フランチェリカだった。
その頬に残った涙の跡が、椿に必要のない罪悪感を感じさせていた。
その跡を拭おうと右手をあげようとするが、動かない。見てみると、
右手は奈津が掴んでいた。

「起きたみたいね」

扉が開く音がして目を向けると、アンジェリカが椿を伺っていた。
すると、その声に反応したのか、医務室の外から人がなだれ込む。

「椿っ！」

まずはじめに、レイアが走る。
そのレイアに登るようにラミネージュが飛翔し、勢いがつきすぎた
のか椿を通り越して奈津を踏む。

「ふぎゃっ！？」

ラミネージュに登られたことでバランスを崩したレイアが転び、そ
の額をフランチェリカの側頭部に、思い切り打ち付けた。

「あうっ！？」
「ぴっ！？」

やれやれと肩を竦めながらも早歩きだったルナミネスが、レイアの
足につまずいて、転ぶ。
転んだ先は、レイアの背骨。額の痛みに集中していたレイアは腰に
打ち付けられた痛みで前のめりになり、再びフランチェリカの側頭

部に額を打ち付けた。今度は、自重プラスルナミネスの体重で、威力は倍以上だ。

「あうっ……ふづっ！？」

ルナミネスはなんとか身体を起き上がらせようとしたが、奈津を踏んだラミネージュが倒れてきた時に頭を上げてしまったせいで、ラミネージュの額に自分の頭頂部を打ち付けることになって、沈んだ。

「あぅっ」
「いつっ」

医務室に沈んだ五人の後ろで固まっていた明里が、そろそろと慎重に入ってきた。
そして、ぴくりとも動かなくなった五人を引きつった顔で一瞥すると、大きく深呼吸をしてから椿と顔を見合わせた。

そして、二人で揃って朗らかに笑った。

「怪我はもう良いみたいだな。本当に良かったよ」
「うん、ごめんね……ありがとう、明里」

完全に周囲の状況をスルーすることによって、心の安定を取り戻す。
――――人はそれを“現実逃避”と呼ぶ。

医務室の端でその光景を見ていたアンジェリカの目が、妙に懐かしそうだったのが、印象的だった。

アンジェリカは小さく笑うと、そんな二人の友情を眺めた。
――――人はそれも“現実逃避”と呼ぶ。

†

何とか落ち着いて、椿は詳しい事情を聞いた。
演習場の施設、その最上階から競技用装霊器の剣が落ちてきて、椿に怪我を負わせた。
十中八九故意ではあるが、動機も目的も不明。競技用装霊器は、保管されていた場所から盗まれたものだった。

完璧なセキュリティーを抜ける事が出来るのは、内部の者以外に考えられない。
だが、その周辺に誰かが居たという情報は一切無く、捜査に進展はない。

「そう……ですか」

不安に駆られて俯く椿に、詳細を告げた慎二郎は申し訳なさそうに頭を下げた。

今医務室にいるのは、慎二郎と楓と椿、そして医師のアンジェリカだ。

「それで……神崎君、君は――――誰かに恨まれる覚えなど、ありますか？」

「え――？」

考えても見なかった質問だった。

だが、犯人を捜したいと思うのなら、当然の質問と言えた。

「いえ……私の知る限り、では」

「ほう、知る限り？――では、知らないところで恨まれるようなことを、やって……」

「三上院先生ッ！」

薄く笑ってそう続けた慎二郎の言葉を、楓が鋭い口調で遮った。

だが、そこまで聞いてしまえば、意図は伝わる。“当時”の夢を見たばかりだった椿は、唇を噛みしめて俯いた。

「彼女は被害者ですっ！――当たり所が悪ければ、どうなっていたかも解らないんだぞ！」

抗議している内に言葉遣いが乱れ、素に戻る。

一歩間違えれば死んでいたかもしれない――そんな怪我を負った自分の生徒が、よりによって自分たちによって傷つけられる。そんな姿に、楓は怒りをあらわにした。

「わかっていますよ、草加先生。これは確認――――そう、単なる“確認”ですよ」

慎二郎はそう言いながら肩を竦めると、再び椿に向き直った。

「辛いことを聞いてしまい、申し訳ありませんでした。私どもからは、以上です」

「い、いえ。大丈夫、です――お忙しい中、ありがとうございました」

「礼を言うのは私たちの方だ。顔を上げてくれ、神崎」

それでも気丈に頭を下げる椿に、楓はそっといたわりの言葉を投げかけた。

そして、一言二言告げると、申し訳なさそうな表情で退室した。

扉が閉まる音を聞いて、椿は小さく息を吐いた。

そんな椿の横に、アンジェリカが音もなくパイプ椅子に座った。

「大丈夫。みんな、あなたの人柄は解っているわ」

目を伏せたまま、アンジェリカはそう慰めた。

奈津達は、現在授業中だ。椿の目が覚めるまでは、と授業を休んで一緒にいたが、様子を確認すると慎二郎によって授業に戻されたのだ。

「ありがとう、ございます」

そういって健気に笑う椿の頭を、アンジェリカは淡く微笑んで撫でた。

その表情は、女生徒から絶大な人気があるというのも頷ける、怜悧で美しいものだった。

「そういえば、先生」

「どうかしたの？」

起きて一番に気になったこと。

それを今まで聞き忘れていたということに気がついた。

「私は、どれくらい気を失っていたんですか？」

「二日よ。今日は金曜日」

「へ――？」

怪我を負ったのが、水曜日。

せいぜい一日かと思っていた椿は、その答えに顔を引きつらせた。

応龍祭まであと二日。あと二日で、応龍杯に向けた練習も組み体操の練習もしなければならない。組み体操に至っては、土曜の最終練習しか参加することが出来ない。

クラスの競技なのに大きく足を引っ張ってしまう。

その事実に、椿は顔を曇らせた。

「――オウクストードさんが、ね」

アンジェリカが零した名前に、椿は首をかしげた。

そんな椿の戸惑いに気がついて、アンジェリカは苦笑いをした。

「貴女のクラスの、委員長」

「……？……あぁっ！」

ぐぐぐっと首を捻り、漸く顔を思い浮かべた。

金色のロングヘアで目元を隠した、組み体操で熱血していた少女のことだ。

思い出せないどころか、椿は彼女の名前を知らない。

「彼女、言っていたわ“私たちに閃きと熱意を注ぎ込んでくれた彼女と、私は一緒に演技がしたい。彼女がそれを望むかは解らない。だが私は……いや、私たちは、それを強く望んでいる。その気があるのならば、元気になり次第楓教諭に伝えて欲しい”ってね」

まったく真似る気のない声。

だが、その口調からどこか熱意のようなものを感じて、椿は目を潤ませた。

それを零すのはまだ早いと、目元を拭う。

「私、楓先生に――」

「今日は一日休んでいなさい。楓には、私が伝えておくわ」

「――はい。……お願いします、アンジェリカ先生」

アンジェリカの魔法で怪我は癒えている。

だが、それで体力が戻る訳ではない。ならば、このドクターストップも、当然のことだった。それが理解できているからこそ、少し間を置いたが、椿は素直に頷いた。

「今日は一日休む。そうしたら、明日からは自由にして良いわ」

「――はいっ！ありがとうございます！」

ベッドから上半身を起こした体勢のまま。椿は勢いよく頭を下げた。

その様子に、アンジェリカは優しい笑みを浮かべて、頷いた。

†

翌日、椿は医務室から出ると、ジャージに着替えて直接校庭へ向かった。
広大な敷地の中に幾つかあるグラウンドの一つで、一年生の医務室から一番近い場所だった。

椿が競技用装霊器を装着して到着すると、一番始めに気がついた奈津が手を振った。
椿は、奈津に嬉しそうに手を振り替えすと、駆け寄った。
奈津が椿に駆け寄ろうとするのを、委員長が手で制す。そして、まず始めに彼女が椿に近づいた。

「もう体は良いのか？」
「うん……ありがとう、待っていてくれて」

椿が喜びをにじませた表情で礼を言うと、委員長は軽く首を振った。

「ともに学び、ともに競い、ともに上を目指す仲間だ。ならば、待たぬという選択肢はない」

そういって、太陽に向かって指を指す。

そして、空いている右手で椿に手を差しのばした。

「あの太陽のように、輝こう……椿」

「うん。……うん……貴女の名前を教えて貰っても、いい？」

「当たり前だ。むしろ、名乗っていなかったことを恥ずかしく思うよ」

委員長は、そこで言葉を句切る。

椿は、差し出された右手に、そっと自分の手を乗せた。

「私の名前は“ミア・オウクストード”だ。よろしく頼む、椿」

「改めまして、私は神崎椿。……よろしくね、ミア」

手を乗せて、力強く掴む。

その手に伝わった力が、椿には大きな絆のように感じられた。

「さて、優勝するぞ、みんな！」

『おぉおおおぉぉおおおおお！！！！！』

最早怒号といっても良いような声。

少し前までは身を竦ませたであろうその声を、椿は平然と受け止めた。

「目指すはそう……優勝なんだ」

組み体操の一番も、応龍杯の一番も、そして紅組の一番も。

すべて掴み取るという熱い決意の元、椿は風を切って歩き出した。

†

しんと静まりかえった夜の校舎。
その廊下を、音も立てずに歩く影があった。

その影が歩いた後は、なぜだかその場にずっと、黒い足跡が残っていた。

影は、いくつもの足跡を校舎に残していく。
歩いて、歩いて、自分の足跡を刻みつけていく。
その様子は、さながら動物が残すマーキングのようにも見えた。

「もう、いいかな」

校舎のほとんどを渡り歩いた時点で、その影は足を止めた。
風の吹き抜ける、屋上。そこで、影は校舎の全てを見下ろした。
そして、右手を空に掲げて、指を弾く。

すると、校舎の中に残った足跡の全てが、大きくふくれあがった。
それは形を為し、核を持つ黒いスライムへと転じる。その数は、と

ても数えきれるものではない。

スライムはもぞもぞと蠢くと、溶けるように校舎の中へと沈み込んでいった。

「さぁ……どんなものを見せてくれるのか――楽しみにしているよ」

月の光が雲間に隠れて、一瞬周囲が暗くなる。

すぐに再び月の光が校舎を照らしたが、そこにはすでに、なにも残っては居なかった。

どこかで、誰かの笑い声がした――――。

第八話　応龍祭編？　現の夢と残滓（後書き）

連続投稿します。
後書きは、次話に書きます。

第八話　応龍祭編？　開幕

空は快晴。
雲一つ無く、風が心地よい。

一片の曇り無く地上を照らす太陽が、パンツスタイルの体操服を着る少女達を、淀みなく応援していた。

今日は、待ちに待った体育祭。

楼城館女学院名物――――応龍祭の、開幕である。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

――パンッ　パンッ　パパパンッ　パンッ

魔力により作られた特製花火が打ち上がる。
煙は発生せず、昼間なのに鮮やかな色彩を観客に魅せる、魔法演出研究会お手製の花火だ。

整列した生徒達。
その正面の高台に立つのは、楼城館女学院学院長――楼城館蓮だ。
所々に黒のメッシュが入った白い髪と黒い目の男性の姿をしている。
姿をしている、というのは、それが真実かどうか解らないからだ。
姿を現す度に違う姿をしている。それは、容姿年齢性別と、毎回色々な姿で現われる。
そのため、蓮の本性は学院七不思議の一つに数えられていた。

三年生の生徒が、学院長の前で右手をあげる。
応龍祭は運動会。これは、生徒による“宣誓”だ。

『宣誓！私たちは――――清く気高く美しく、優雅に煌びやかに清楚に真剣に正々堂々と戦うことを、ここに誓います！』

まるでこの宣誓の言葉が常識であるかのように聞き入る周囲を見て、椿は戸惑いはしたがすぐに諦めた。人間は、慣れる生き物だ。

宣誓の言葉が終わると、音楽と共に一時退場する。
各競技の準備が行われる中、校舎の屋上に設置された特殊な観客席から声が響く。

司会、実況、解説、ゲストの四人だ。

司会は、きっちりと進めてくれる几帳面な人が良いということで、数学教師の女性が選ばれた。邪霊に操られた、あの教師である。

解説には学院長が居て、その隣には黒い髪を姫カットにした、清楚な雰囲気の女性が座っていた。その女性が、実況である。

『さぁーって！……いよいよ始まりました！応龍祭！』

見た目に似合わず、テンションの高い雰囲気で話し始める。

投射魔法を用いたモニターが宙に浮かび上がり、実況席と会場の様子を映し出す。

グラウンドの上空に、大きなモニターが四方に四つ、展開されていた。

『司会は数学担当の明津莉子先生ですっ……はいっ拍手ぅっ――ぱちぱちぱちっと！』

『よろしくお願いします』

ハイテンションを見事にスルーする様子からは、卓越したスルー技術を見せていた。

普段から割と巻き込まれるのだろう。

『実況は、楼城館の歌姫と名高い、音楽教師にして生徒指導員の梓川マリアが担当しま～すっ！――みんなっヨロシクっ！』

よほどのお祭り好きなのだろう。

普段からこのテンションではないことを願って、一部の常識的な一年生達は、そう自分を納得させていた。その姿を、上級生は遠い目

で見ていた。過去を尊く思う目だ。

『解説は、我らが楼城館学院の奇人変人の代名詞！楼城館蓮学院長だよ～っ！』

『ふはははは……よろしく頼むよ』

入学式の時よりも年をとって見えるのは、気のせいではない。

入学式の時にはなかった“渋み”が、蓮から感じられた。

『ゲストは、ななな、なんと！現騎士団の副団長――“白銀の城塞”フィーリ・インスエルさんですっ！』

『今日はよろしくお願いします』

白銀の髪と青い目。レベルと騎士団を象徴する銀のマント。

毛先に軽いウェーブのかかったロングヘアは、画面越しでも解る程滑らかだ。

騎士団とはこれほどのものなのかと観客を呻らせる程の風格を持つ、絶世の美女だった。

『さーてっ……まずはプログラムの確認を、莉子先生にお願いしちゃうよ～っ！』

『午前はＡグラウンド、Ｂグラウンド、Ｃグラウンドで個人競技を行います』

モニターで同時観戦が可能なため、三種目が同時に行われる。

録画も学校側で行われるため、見られないということもない。

情報漏洩については、これだけ大規模な行事なので隠すだけ無駄だが、個人による撮影は念のため禁止されていた。

『正午に昼食休憩を挟み、夕方まで団体競技を行い、その後夕食休

憩が入ります』

きびきびとした丁寧な口調で、莉子が説明していく。

こういった時は、さすがのマリアも大人しくしていた。ここで騒ぐと、後で莉子に怒られるのだ。

『夕方から夜間の時間帯に、ドームにて応龍杯が行われます。閉会式は、その後です』

ドームは空間の広さとある程度までの時間の引き伸ばしが設定できるため、複数の試合を同時に行うことが出来る。これにより、選手の他の試合の情報は、外部からのもののみに頼らなくてはならないようになっているのだ。いかに信用できる友人を外に作っておくことが出来るか、という意味合いと、情報の取拾選択の大切さを学ばせるという意味合いがあった。

椿が参加するのは、団体競技と応龍杯。

つまり、全て午後からのプログラムなのだ。

そのため、午前中は友人達の応援をして過ごすことになる。

予定の書かれたしおりを見て、誰がどんな競技をするのか確認し、一番最初に行われるグラウンドへ行く。午前中に競技がないのは応龍杯のメンバーだけなので、奈津達はそれぞれ競技の準備へいっていた。

フランチェリカたちも、それぞれクラスの仲のいい人の応援へいったため、椿は結果的に一人で移動することになった。最初の競技はＡグラウンド――移動する必要のない、校舎前のグラウンドだ。

これから行われるのは、借り物競走。

出場するのは、最近仲良くなったばかりの、委員長ことミアだ。
グラウンドの周囲に備え付けられた石のベンチは、大地の魔法が使える生徒が共同で配置したものだ。これも、実習授業の一つだった。

『Aグラウンド個人競技、借り物競走が始まりました！この“借り物”は、どういった基準で選ばれているんですか？解説の学院長先生』

生徒達が合図と共に走り出す。
まずは誰よりも早くお題に辿り着かなくてはならない。

『全て私が決めています。独断と偏見と遊び心が詰まっています』
『なるほどー……それは楽しみですねっ！』

マリアと蓮は感性が似通っているらしく、モニターの中で頷き合っている。
その横で微笑ましそうに見ているフィーリと、嫌そうな顔で見ている莉子の姿が印象的だ。

ミアは一番にお題に着くと、封筒から小さな紙を取り出す。
目元は髪で隠れていて見えないが、真剣さは見学している椿たちにも伝わっていた。

忙しなく周囲を見渡すミア。
その様子に椿が、目的のものが見つからないのだろうかと心配していると、肩を叩かれて振り向いた。

「こんなところにいたのか。探したぞ」

灰色のスーツを着て、白髪をなでつけた初老の紳士。

鋭い目は空色で、怜悧で美しい。高い身長と綺麗な姿勢のおかげか、年齢を感じさせない若々しさがある。

「おじいちゃん――ごめんね、事前にどこに行っているか、伝えた方が良かったね」

表情が全く変わらないため、厳しい人間のように見える。だが、身に纏う雰囲気は、孫を気遣う老人のそれである。彼の名前は“神崎宗一”――椿の祖父である。

「あれ？おばあちゃんは？」

「観客席の方へ行っている。昼に合流する予定だ」

ほとんどは観客席へ行くが、グラウンドで観戦できない訳ではない。ただ、危険はないとはいえ魔法が飛び交うため、レベル六以上でなければ生徒が居るところまで入ることが出来ないのだ。

宗一は魔法使いとして引退しているため、レベルの序列からは外れている。

だが、魔法使いだった頃の功績があったので、こうしてグラウンドに入ることが出来るのだ。夫婦揃って騎士団出身は、伊達ではない。

「誰の応援をしているんだ？」

「ん？……今丁度悩んでる、金髪の――あれ？」

ミアは、きょろきょろと見回した後、椿を目にとめて駆け寄った。なぜ自分の方へ来るのかわからず、椿は首をかしげた。

「椿、丁度良かった」

ミアはそういって息を吐くと、宗一に頭を下げてから再び椿に向き直る。

「どうしたの？ミア」

「お題だ」

そういって椿に差し出された紙には、お題が一行で綴られていた。

椿はそれを、読み上げる。

「えーと……“友達の家族”？」

グラウンドにまで出てくる家族はそう多くない。

それを考えると、中々厳しいお題だった。

「それで、椿のお祖父さんをお借りしたい」

「私は構わんぞ。椿」

「あ、うん。おじいちゃんがいいなら、いってらっしゃい」

「うむ、恩に着る」

椿と宗一が快く頷くと、ミアは薄く笑って頭を下げた。

まだ周囲の選手は、いまだ見つかっていないのか、おそらく一番だ。

「む？この紙、裏にも書いてあるぞ」

お茶目と噂の学院長、蓮は、ただ借り物を指定するだけでは終わっていなかった。

宗一はそれを見つけて、読み上げる。

「“ただし、自分の足で向かうことを禁ずる”……つまり」

読み上げて、さすがのミアも戸惑った。
女学院で進み続けてきたのだ。年配とはいえ男性と触れ合う機会など無い。
椿も、戸惑うミアを見て苦笑いをしていた。自分だって、同じ立場なら戸惑うだろう。

「う……すみません、椿のお祖父さん。背負っていただいても――」
「――こうすれば良いんだな」

ミアが言い切る前に、宗一はミアを横抱きに抱き上げた。
そう――――お姫様だっこである。

「なっ?!」
「ゴールはあそこか……行ってくる」
「はぁ……いってらっしゃい、おじいちゃん」

暴れることなく大人しくなる。
突然のことにどうしたらいいか解らず、顔を赤くして固まってしまったのだ。
――――ちなみに、宗一は決して“鈍い”タイプではない。ただ、お茶目なのである。

『おーっと!?オウクストード選手が男性に抱き上げられています。あれはなんのお題でしょうか?』
『おそらく、友人の家族に抱えられてゴール、ですね』

実況が入る。
どこからか二宮金次郎像を持ってきて、リヤカーで走り出す生徒。
大玉転がしで使う大玉を、モップで突いてビリヤードのように運ぶ生徒。

会話をしている内に、だいぶ追い越されてしまっていた。とくに、もの凄い形相でニンジンを咥えて走る生徒が異様に早く、普通に考えたら追いつけないスピードを出していた。

『さーて、オウクストード選手も漸く出発するようで……って速っ!?』

宗一は、普通では考えられないようなスピードを出して走った。
両手がふさがり、人を一人抱えているとは思えない高スピードだ。

『あれは……』
『心当たりがあるんですか!?フィーリさん!』
『間違いありません。あれは、師匠ですっ』

その言葉に驚いたのは、なにも実況席だけではない。
観戦していた椿も、目を丸くして驚いていた。
現副団長の師匠が、自分の祖父だというのだから。

『おおーっと!ついに安西選手を抜かして……ゴーッル!』

ニンジンを咥えた選手がうなだれて、宗一は見事一位でテープを切った。
観客の異様な熱狂ぶりに、椿は身内として顔を赤くすることになった。

†

観客席に向かった宗一と、後始末を手伝うミアの元を離れて、椿はCグラウンドに向かった。場所は戦鎧の施設の前。今度は、ラミネージュのパン食い競争だ。

五百メートルのレーンを使って行われる競技で、魔法で浮かされたパンを食べるというものだ。つり下げるのは、教師監修の元作られた、不正のない手作りパン。選手達の力作である。

料理が苦手な生徒のパンは、やや形が悪いし、極端に大きかったりする。

毎年この微笑ましいパンを見て和むのが、年配の教員達の楽しみだったりする。

だが、今年はひと味もふた味も違った。

宙に浮くパンの中で、異彩を放つメタリックブルー。

着色料でも使ったのではないかと思わせるような、鮮やかな青だった。

その青いパンに挟まれているのは、いっそ清々しい程緑色な焼きそばだった。

ラミネージュに焼きそばパンをリクエストした奈津は、出場選手と義務として味見をした教員に、泣いて謝るべきだろう。

実況は、現在Ｂグラウンドの様子を見ているため、まだこの様子には気がついていない。

だが、モニターを通して全てのグラウンドを実況するのだから、時間の問題だった。

――パンッ

スタートの合図が鳴った瞬間、パンに認識妨害の魔法がかかった。

魔法で浮いている上に、ランダムで位置を入れ替えられる。直前まで知らされていなかった情報に、選手達は目の色を変えた。

ラミネージュのパンと味見をして倒れた教師の姿を見ていた選手達は、動揺した。

その動揺した隙を突いてスピードを上げたのは、他ならぬラミネージュだった。

食べても死にはしないという経験と、自分で作ったパンは食べたくないという意志。

選択肢が多い方が、気が楽だ。

他の選手達も、その様子を見て速度を上げる。

だが、ラミネージュは異様に速く、一直線にパンに向かって飛翔した。

手は後ろに組み、斜め上に飛ぶ華麗なフォーム。蝶のごとき優雅さでパンを咥えると、認識障害が解けて、かりかりふわふわのクロワッサンが現われた。

着地すると同時に、もう迫ってきた特別足の速い選手が、ラミネー

ジュの隣でパンを咥えた。この速度で追いついたのなら、すぐに追い抜かされてしまうだろう。

『さてさてCグラウンドはー？……あれ？認識障害？』

実況であるマリアが首をかしげた。

どうやら、知らなかったようだ。

『あぁ、今年はおもしろいパンがあったので、急遽付け加えました。毎年楽しみにしている競技ですよ。あっははははっ』

『なるほどなるほど～。さて、トップはオールアクセン選手。その隣りに北条選手がパンを咥えて並んだーッ！オールアクセン選手はクロワッサンですね～。北条選手は、え？』

認識障害が解けると、そこには青と緑のパンが淡く極彩色に光っていた。

時間が経って変色するならまだしも、光るパンなど聞いたことがなかった。

『北条選手、怪しいパンにもめげずに走っ――倒れたーっ！？』

『今年のパン食い競争は例年より楽しそうですね、学院長』

『オウクストード副団長もそう思われますか？いや、実に楽しそうです』

莉子のため息が聞こえる実況ルーム。

そんな中、クロワッサンを咥えたラミネージュが、華麗にゴールした。

後方では、北条選手が奇声を上げている。観客席も騒然としているが、ラミネージュは気にした様子もなくクロワッサンを食べながら、一位の旗をとった。

†

後始末で残るラミネージュに手を振って別れると、再びＡグラウンドに走った。
今度は、奈津とレイアのクラス対抗リレーだ。

各クラスから一人ずつ、学年ごとにＡＢＣグラウンドで同時に行われる。
クラス対抗なのに一人ずつというのも奇妙な話だが、ここらあたりは一般の学校との認識の違いだろう。
この競技は、競技用装霊器を用いた妨害や肉体強化が許可された、目玉競技の一つだ。

椿は、Ａグラウンドに到着すると、始まる前に来られたことに安堵した。
全八クラスで、走るレーンはくじ引きで決められる。くじ運が良いのか、奈津は内側の一番端っこだ。それに対してレイアは外側の一

番端だった。

妙にライバル意識を持っているこの二人に挟まれるのは、真ん中の選手達にとって不運なことだろう。

レベルが上がるには、実戦が必要だ。
実戦が行われるのは、二学期から。一学期は、心構えと基礎に集中する。
だから、入学早々実戦を経験し、乗り越えてきたためすでにレベル3になっている奈津とレイアは、他の生徒達よりも経験面で圧倒的に有利だ。

「ふふふふふ」
「はははははは」

両端で、俯きながら笑っていた。
実に不気味である。そのせいで、中間の選手は怯えている。

「今日こそぎゃふんと言わせてあげますわ」
「相変わらず発想と語彙が古いねぇ」

これが二人のスキンシップの取り方だ。
二人とも、いがみ合える相手が居ると言うことが、楽しくて仕方がないのだ。
それを解ってはいるが、あえて一触即発の雰囲気を出す二人の様子に、椿は頭を抱えた。

審判がつくと、選手達がクラウチングスタートの形をとる。
みんな、フォームがしっかりとしていて綺麗だ。

――パンッ

合図と共に走り出す。

奈津は早速肉体強化をかけて、さらにその上からヒットポイントをマジックポイントに変換させる魔法をかけた。完全に、防御は捨てている。

トップは奈津だ。実戦を含めて足腰を鍛えている奈津は、他の者では出せない速度で差を広げる。必死に追いつこうとする選手の中で、レイアだけはわざと一番後ろに甘んじていた。そのことに、椿は首をかしげた。

「――――【固有魔法・水流】」

小さく呟かれた、詠唱。

その意味するところに感づいた奈津は、半ば嫌々振り向いた。

遅れていた選手達をやすやすと呑み込む、津波。この競技でしかマジックポイントを使う予定がないのなら、と全ての魔力をつぎ込んだ固有魔法。

リレーで使うには反則的だが、高レベルの魔法ではないため、登録できてしまったのだ。

「おーっほっほっほっ！」

「うわ、なんか久しぶりに聞いたなぁ、その奇声」

もう一ヶ月以上前に、一度聞いたことがある。

その程度だったが、出逢いにも繋がっているので印象深かったのだ。

「さぁ、貴女も呑み込まれてしまいなさい！」

「はっ！ごめんだね！――――――【固有魔法・旋風】」

肉体強化は別の魔法で補うことが出来る。
そこで奈津が登録したのは、防御に重視した魔法だった。

大気の妖精エアリエルは、如何なる場所でも移動することが出来る。
その特性を生かしたこの魔法は、障害を受けないという用途のもの。
つまり、他者の妨害を気にせずにゴールするためのものだった。

『Aグラウンドの佐倉選手とエルストル選手が、非常に熱い戦いを魅せています！』
『将来が楽しみですね。実に優雅です』

フィーリのややずれたコメントを、レイア達は褒め言葉だと受け取って張り切っていた。
褒め言葉ではあるが、微妙に違う。その事実に、観戦していた椿はため息を吐いた。

レイアは、剣型装霊器の上に乗り、直立不動でサーフィンをしていた。
どうやってバランスをとっているのか、椿はそんなことを気にして首をかしげた。

「えぇいっ！大人しく呑み込まれなさいなっ！」
「だ・れ・が！」

インコースを駆け抜ける奈津と、アウトコースで波に乗るレイア。
ゴールは、あと僅かだ。

「一番は――」

「――僕のものだ！」

残像がその場に残る。そんな錯覚をさせる程のスピードで、奈津とレイアが走り抜けた。

テープカットが切られて、審判が流される。そのまま進行上の全てを水流が押し流し、跡には魔力が切れて呑み込まれた奈津と、止まることを考えなかったせいで、魔法を中断したとたん慣性の法則で放り出されて、顔面スライディングをしたレイア。その二人が仲良く地面で眠る姿だけが残された。

『映像判定は――――同時です！』

『素晴らしい試合でしたね。学院長』

『そうですね。来年も楽しみです』

既に過去のこととして流そうとしていた蓮とフィーリの姿に、椿とモニターの向こうにいた莉子は、ほぼ同時にため息を吐いた。

†

個人競技が終わると、昼食休憩を挟む。
椿は、お弁当をもってやってきた奈津と、一緒に食べる予定だった宗一達と昼食を食べる。

「あー、お邪魔だった、かな？」
「なんで？」

家族との昼食に入ってしまったことを気にする奈津に、椿は首をかしげた。
その様子から疎まれていなかったことを知り、奈津は安心しながらなんでもないと返した。
そんなことで嫌われはしないだろうという信頼はあるが、うざがられるのは嫌だった。

「奈津は、今日はお弁当どうしたの？」

宗一が作ってくると言うので、椿は作っていなかった。
奈津も家族が持ってくると思ったのだが、一応聞いては見た。すると奈津は必要ないといったので作らなかったのだ。

「うん？家族が、まぁ、作らせてきたみたい」

ひっかかりのある言い方ではあるが、椿はそれ以上追求しなかった。
誰にでも色々あって、それは話せないことが多い。できれば打ち明けて欲しいが、それは少なくとも“今”ではない。

「こっちが、おじいちゃんで、こっちがおばあちゃん」
「さ、佐倉奈津です！」

自己紹介へ話をシフトさせると、まだ名乗っていなかったことを恥ずかしく思いながら、奈津は慌てて名乗った。

「私は神崎宗一。こっちは、妻の牡丹だ」

「よろしくね、奈津さん」

髪をお団子にして纏めた、穏やかそうな老女だ。

和やかな雰囲気は、そばにいたものを安心させる。

「椿のお弁当、お祖父さんが？」

「うん。食べてみる？」

椿がお弁当を差し出すと、奈津はおそるおそる箸をつけた。

そして、煮物をとって口に運び、咀嚼する。

「なにこれ、ものすごく美味しい」

「うんうん。私もまだまだ、おじいちゃんには敵わないなぁ」

「お祖父さんが作ったの？！」

奈津は驚きながらも、箸をつけていく。

妙に量があるので、椿としても食べるのを手伝ってくれるのは、ありがたかった。

奈津がなぜ気まずそうにこちらに来たのかは、わからない。

だが、こうして元気になってくれるのなら、奈津が元気でいてくれるように微笑み続けよう。そう思って、椿は淡く、笑った。

†

午後からは団体競技。
まずはじめに行われるのは、ずばり、綱引きだ。

魔法による肉体強化も、妨害も全てなし。
ただ、己の力のみを試すという競技だ。

この綱引きの最大の特徴は、広い敷地を利用した、その規模にある。
全学年の紅組と蒼組が、ぴったりと東西に別れて綱引きをするのだ。

『さぁーって！午後の団体競技一番は、綱引きです！』

わき上がる観客席。
だが、よく見ればほとんどがサクラだった。

「よしっ！頑張るぞっ！椿！」

隣りに立つ明里に意気込みを入れられて、椿は俄然やる気が出てきた。

フランチェリカは、身長の問題から一番前だった、補佐するように奈津とルナミネスが後ろについているが、これはラミネージュがこっそり手を回したからだ。

当のラミネージュは、椿の正面で和んでいた。

『それでは、東西綱引き、よーい……始め！』

モニターから、マリアが開始の号令を送る。

椿たちも、縄に力を込める。

団体競技の一種目。

この綱引きが、午後の競技の始まりだった――。

†

大玉転がし、玉入れ、騎馬戦などの競技を終えて、ついに組み体操がやってきた。

蓮が、この競技はじっくり見るべきだ、という主張をしたため、各グラウンドで一組ずつ行う。ちなみに、生徒からせめて一年生だけで終わらせてくれと苦情が来たため、この競技に二年生と三年生は参加しない。

椿は、ミア達と最後の打ち合わせをした後、ライバル選手達の演技を見た。

『一年A組は……こ、これはッ』

三十人が互いの身体を持って、自分の身体を青い光で包み込む。作った形は、蒼組を連想させる龍だった。

『素晴らしい――なんという芸術美だ』

学院長の感嘆の声。

その声に、他の選手達が悔しそうに唇を噛んだ。

ミアも、苛立たしげに手を組んでその演技を睨み付けていた。

椿はそんなミアの隣りに立つと、自信の満ちた顔で笑いかける。

そこまで余裕がある訳ではないが、それでもこんな気持ちで臨みたくはなかった。

その顔を見て、ミアは一瞬惚けたが、すぐによく似合った不敵な笑みを浮かべた。

振り向けば、不安な顔をしたものなど一人もいない、自慢のクラスメートたちがいた。

「ふっ……ありがとう。椿――さて、みんな！私たちのクラスの“絆”を、見せつけてやろう！」

『おーっ！』

士気を高めて、椿たちはグラウンドに乗り込む。
その足取りは、軽やかだ。

『いやー、素晴らしい演技でしたね～。……さーて次は』
『一年Ｂ組の演目“扇ｄｅピラミッド”です』

マリアのセリフに、莉子が続ける。
入場した椿たちは、まず七列に並んだ。
一列目が八人、二列目が七人、三列目から五人、四人、三人、二人、一人と続く。
一列ずつは大きく幅が空いていて、列の一人一人の間は、逆に密着していた。

『これは一体なんでしょうか？学院長』
『ふむ……いやはや、合図を待った方が良さそうですね』

フィーリの質問に、蓮は楽しそうに答えた。
参加自体後からだったこともあり、椿の位置は一列目の一番左端だった。
右端は、明里で、七列目はフランチェリカだ。

『それではー……始めっ！！』
――パンッ

合図の破裂音が鳴ると同時に、生徒達が直立不動で横の人と手を結ぶ。
そして、一歩ずつ遅らせる形で、後ろの列が七列目に向かって走った。

『おおっ、これは……！』

手を結んだまま、息のあった完璧なタイミングで肩に飛び乗る。
身体能力強化により高く飛び上がり、ついにフランチェリカが一番上に飛び乗った。
そして、組んでいた手を、横に開く。

『なんと……これは』

すると、同時に全員が手を伸ばし、扇のように開いた。
瞬間、背後で複数の属性を混ぜた、大きな爆発が起こった。
そう、虹色の爆発である。

『なんという、機能美。なんという、芸術性。……私は、こんな素晴らしい演技は見たことがない』
『歴史に名が乗る、か。この日に呼ばれた私は、なんと幸運なのだろうか』
『これはすごい！大・絶・賛です！かくゆうわたしも興奮しております！』

その光景は、まさしく虹だった。
まるで青空が祝福して浮かび上がらせたような、虹の七列。

その日、応龍祭の歴史に、大きく刻まれた競技が生まれた。
その名は――“ドラゴン・ピラミッド”と、正式に名付けられたのだった。

†

夕方になると、夕食休憩が挟まれる。
夕食は、椛城館女学院が誇る大食堂で、学食をアレンジしたフルコースが出される。

親は親同士で社交的なお話をするため、この時間はクラスで固まってディナーを食べる。

「素晴らしかったな。私たちも、一生の思い出になりそうだ」
「うん。すっごく、楽しかった」

夕食を食べながら、ミア達と組み体操の祝勝会をする。
そう、椿たちは見事に一位をもぎ取ったのだ。

「チェリカも、すっごく綺麗だったよ！」
「えへへ、ありがとう、つーちゃん」

照れるフランチェリカの様子は可愛らしく、周囲のクラスメート達はその様子に和んでいた。

「次は、いよいよ応龍杯だ。応援しているよ、椿、フランチェリカ、明里、ルナミネス」

ミアとクラスメート達の、激励。

その言葉に、椿たちは顔を見合わせてから、力強く頷いた。

「うん……目指すは優勝、だよね」

そう言い切った椿をみると、フランチェリカは胸の内側から不安が消えていることに気がついた。この不思議な魅力に支えられてきた人は、まだ少ない。だが、彼女の内側の何かに惹かれる人は、確実に増えていた。

「さて、ほどほどに食べて、椿たちを送りだそう！」

『おぉーっ！』

夜からは、いよいよ応龍杯。

応龍祭の注目行事が、ついに始まろうとしていた――。

第八話　応龍祭編？　開幕（後書き）

お待たせしました。
漸く書く時間がとれたので、書き上げました。

今回、次回とかなり長いです。
次回は、今回よりもだいぶ長くなります。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第八話　応龍祭編？　応龍杯

夜のドームの中は、室内だというのに夜空が広がっていた。
この広大な空も、環境設定で整わせたものだった。

夜空に、いくつもの花火が打ち上がる。
七色に彩られた夜空を、椿たちは力強く見上げていた。

応龍祭の一大イベント。
騎士団副団長の前で己の力を見せる、絶好の場。
椿たちにとっては、みんなの努力を、結ぶ場所。

――――応龍杯の、始まりである。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

『それでは、ルールを説明します』

莉子の声が、会場に響く。

この説明は、観客に向けたものだ。

『四人一組のチームが、トーナメント形式で試合をしていきます』

ぱっと、上空のモニターにトーナメント表が現われる。

完全にランダムで決められた相手で、椿たちB組の一回戦は、D組――紅組だ。

『制限時間は十五分。その間にリーダーの腕章をとるか、リーダーを倒すか、もしくはリーダー以外を全滅させれば勝利となります』

椿は、左腕の腕章を見た。

この腕章は、ヒットポイントが四分の三以下になるまでは、決して外れることはない。

『主な説明は以上です。それでは、梓川先生、お願いします』

『はいはーいっ。一回戦はドームの中で全て同時進行で行われますっ。他の試合の情報は、クラスメートから集めてくださいね～。さて、それでは学院長先生！お願いします！』

補足説明が行われた後、蓮が立ち上がった。

その姿は、今度は少年のものだ。

『我が校の一大行事、応龍祭の中でも、この応龍杯は後の世に大きな軌跡を残していく、大切な行事です。日頃の学んできた全てをここに費やして、己の力を試しましょう。正々堂々と戦った後には、大きな絆と信頼と――栄光を得る』

蓮はそこで言葉を句切ると、大きく息を吸い込んだ。

『さぁ、競い戦え！――――魔法使い達よ！』

始まりの合図。
椿たちは意を決して、会場に足を進めた。

透明の壁に区切られて、一学年四つのグループに分けられる。
その後、正面のグループを残して、周囲の選手が靄に包まれて見えなくなった。

そして、正面の選手と向き合って、頭を下げる。
それを合図に、周囲の景色が変わった。

『一回戦の会場は、ジャングルだーっ！』

鬱蒼と茂る森。
空を見れば、いつの間にか朝に変わっていた。
それも早朝というような時間だ。

『それでは、レディ――――スタート！』

開始と同時に、椿を守るように明里が前に立つ。
その後方にルナミネスがついて、フランチェリカは大きく前に出て

いた。
あまり練り合わせる時間がなかったため、椿は息を合わせることよりも、互いに戦って互いの動きを知ることに集中した。

好きに動いても、互いの邪魔にならない。
あとは、椿が司令塔というよりも、物見台になるだけだ。
周囲を見て、位置を教える。椿が武器にするのは――“信頼”だ。

「【探索・感知】」
――ＨＰ１０００　ＭＰ９９０　Ｔ：１４：５０：１５

探索はマジックポイントを十使って開始する。
十メートルで十ポイント。一メートルごとに＋五ポイントで、持続に一分ごとに十ポイント必要になる。

待ちの体勢は、相手もそうしていた場合、時間を無駄に消費することになる。
だからポイントが低いが、低いのならやらないということ。それを考えて、椿はあえて待ちに入った。

「チェリカ！上に二人！」
「うん！」

声が届いた事を確認するために、必ず返事をさせる。
フランチェリカはハンマーを頭上に掲げることによって盾にして、剣を振り下ろした二人の攻撃を弾いた。

フランチェリカが大きく下がると、探索効果により奇襲が通じないと判断した敵のチームが出てきた。剣が二人に弓が二人の遠・近距離主体のチームだ。

剣士二人が、息のあった動作でチェリカの攻撃を捌く。

「明里！」
「おう！」

その間に放たれた弓からの射撃を、明里が全て拳で迎撃する。

「【固有魔法・魔弾】」

後方からルナミネスの声が響く。
ルナミネスの放った黒い弾丸は、空に登って消えた。
目の前の相手に集中していた敵のチームは、そのことに気がつかない。

フランチェリカが大降りの構えをすると、剣士はそこを狙って攻撃を仕掛ける。

「【弾丸・射出】」
――ＨＰ１０００　ＭＰ９３０　Ｔ：１３：２５：２２

放たれた弾丸が、隙を突こうとした剣士の横腹に命中する。
その怯んだところを狙い澄ませて、フランチェリカのハンマーが剣士を叩いた。
大きく吹き飛び、リーダーを巻き込んで倒れる。

「明里！」
「わかった！」

明里は椿の元を離れて、駆け抜けた。

もう一人の剣士はフランチェリカが相手をしているため、明里はリーダーめがけて走る。
その隙に弓兵が椿を狙うが、空に登ったはずの弾丸が、弓兵の手元を撃ち抜いた。

一撃当たれば、わりと大きく削られる。
弓兵が怯むと、椿はその弓兵に弾丸を浴びせた。

そうしているうちに、明里が、吹き飛ばされて気を失った剣士の下から出てこようとしたリーダーを、その拳を以て打ち倒した。

気を失ったリーダーから腕章をとる。
その様子を見て、フランチェリカの相手をしていた剣士が、大きく肩を落として剣を引いた。

試合開始から四分。
実に良いペースで、椿たちは初勝利を飾った。

†

休憩時間の間に反省点を纏めて情報収集をする。今度の相手はG組、蒼だ。
だが、休憩時間は五分と短く、相手の武器の情報のみを纏めて次の試合に臨むことになった。

『さてさてさてっ！二回戦、いきなり準決勝は、荒野のステージだーっ！』

時間は昼時に設定してあるのだろう。
頭上では太陽が爛々と輝いていた。

さらに、気温が非常に高く、長時間戦えば熱中症で倒れてしまいそうな温度だ。

『それでは、レディ――――スタート！』

今度は隠れる場所がないため、聞いた武器の情報が無駄になってしまった。
待っている必要はないと、今度は一気に走り出す。

一番前で明里とフランチェリカが並走し、その後に椿、ルナミネスと続く。
相手の装霊器は、短剣が後方のリーダーで、その前に盾が二人、迎え撃つのは槍使いだ。

フランチェリカがハンマーを繰り出すと、槍使いは高速の突きを放った。
その一撃を横から手を出した明里が弾いて、ハンマーによる一撃を

放つ。

敵のリーダーが放つ炎の弾丸を、椿が弾丸で迎撃して、ルナミネスが固有魔法の追尾弾でリーダーを狙う。

だが、盾使いが的確に防御をするので、あまり効果がない。

「明里ちゃん、行くよ！」

「おう！」

フランチェリカが腰だめにハンマーを構える。

すると、明里はフランチェリカの前に飛んだ。

自分に向けた明里の足に、フランチェリカは勢いよくハンマーを乗せた。

フランチェリカから大きな一撃が来ると予想していた槍使いは、大きく下がっていた。

斜め上に向かって、フランチェリカは明里を射出した。

上がった明里を目で追って上を見た槍使いを、近づいたフランチェリカが吹き飛ばした。

それにより盾使いが一人巻き込まれて、もう一人の盾使いは椿に足を撃ち抜かれて転んだ。

走って近づくフランチェリカを迎撃しようと、敵リーダーは油断無く短剣を構えた。

「せいやぁっ！」

だが、流星の如く突撃してきた明里によって、あっけなく意識を刈り取られた。

椿たちは、固有魔法を一つ見せるだけという好成績で、二回戦も勝ち残ったのだった。

†

早いもので、次はもう決勝だ。
情報を得る時間は五分と短いが、今度は、控え室での休憩時間が十五分もある。
次の試合はＡ組――レイアのクラスで、蒼組だ。

トントン拍子だったとはいえ、いやだからこそ、緊張と不安を取り除くことが出来ないでいた。ここまで来られたのは、作戦を練るのではなく個々の動きに合わせることからできた、臨機応変の柔軟さだ。

それが、緊張からしっかり“しすぎた”作戦を練って、突発的な椿たちに対処しきれなかった。
それが、相手のチームの敗因だ。

だが、決勝となるとそれまでのようにはいかない。
相手のチームは、これまで固有魔法を一つも見せずに、息のあったフォーメーションで勝ち進んできた強敵だ。

チームメンバーの名前と装霊器しか、わかる事がなかった。

「確認するね。相手のチームはリーダーが銃使いで、名前がリィ・リリア・サイミル。メンバーは、短剣の沖田五十鈴、斧使いのナリナ・フィイズ、手甲使いの、大寺門蘭香？」
「あぁ、あたしの従姉妹だよ」

明里は、そういって苦笑いをした。
昔はコンプレックスを持っていた、橙色の髪。
明里は、今はどうだろうと考えて椿を見ると、椿はきょとんと首をかしげた。
その様子を見ながら、明里は自分がもうコンプレックスを抱いていないことをなんとなく感じ取り、自信を持って笑った。

「全力を出そう」

椿は、大きく深呼吸をすると、そう呟いた。

「みんなで、一生懸命やって、楽しかったーって笑おう」

顔を上げて、見回す。

「勝てたら嬉しいって笑って、負けたら悔しいって顔を上げよう」

その双眸に浮かぶのは、揺るぎない意志の炎。

「どんな結末でも胸を張れるように、全力を出そう！」

その炎が、明里達の胸に、火をつけた。

「よし、遅れるなよ、二人とも」

「明里こそ。足を“引っ張らせない”でよね」

「それを言うなら引っ張るな、だよ。ルナちゃん」

もう、揺らぐことはない。

彼女たちは立ち上がると、円陣を組んだ。

そして、右手を出して円陣の中央で重ねた。

「行くよ、みんな！」

『おーっ！』

椿たちは、先ほどまでの不安を微塵も感じさせないしっかりとした足取りで、控え室を出たのだった。

†

決勝戦のために、敵のチームと向かい合う。
蒼組の、ブルーの腕章をつけたのが、リーダーのリリアだ。

金髪に細目の清楚なお嬢様風の少女がリリア。
鮮やかなオレンジ色の髪をツインテールにした少女が蘭香。
黒髪黒目のボブカットで、妙に地味な少女がナリナ。
モデルのようにすらりと高い身長に怜悧な目元を持つ、なぜか口元を黒い布で覆った少女が、五十鈴だ。黒い長い髪を、首の後ろで結んでいる。

「お互い、頑張りましょうね」
「はい、頑張りましょう！」

余裕な態度を崩さずに挨拶をするリリアに、椿は負けじと胸を張って答えた。
全く気圧されない様子に、リリアは警戒度を少し上げていた。優秀な軍人を輩出し続けているサイミル家にこのような態度がとれる、その自信。レベル3は伊達ではないのだろうという評価だった。

もちろん、まさか椿がサイミル家を知らないなどということは、考えてもいなかった。

ドームに靄がかかり、フィールドが出現する。
急激に下がった気温に、椿は身体を震わせた。

『決勝戦のステージは――極寒の、氷山だーッ！！』

滑りやすく、足場の悪い氷の地面。
超低気温による、判断力の低下。
吹雪と真夜中という環境設定による、視界の悪化。
それでいて障害物はないという、やりにくさ。

ここが、応龍杯の最終ステージだった。

『それでは、ラストバトル……レディ――――スタート！！』

開始と同時に、椿は探索魔法を発動させる。
すると、いきなり頭上に気配を感じて飛び退いた。

「散開！」

同時に指示を出すと、明里達も飛び退く。
椿の上から落ちてきたのは、ナリナだった。

ナリナは椿に向かって、斧を振り上げる。
椿はあえて一歩前に出て、振り上げたナリナの肩に体当たりをした。

「くっ！」

ナリナは体勢を崩しながらも、追撃を恐れて飛び退いた。
そして再び、気配が消える。

「みんな！さっきの子は、たぶん近づくまで気配がわからない魔法を使ってる！」

椿の言葉を聞いて、ばらばらの位置で頷いた。
声に出してはいるが、吹雪で上手く届かない。

椿の声が届いたとたん、吹雪が強くなったのだ。
これは、時折吹雪が強くなる、というフィールドの設定だった。

椿はとりあえず、仲間を信じて走り出した。
まだ動いていた方が、気配の無い敵相手にはやりやすいだろうという判断だった。

†

リリアは、蘭香達に各個撃破の指示をしていた。
危険があるとすれば、レベル３の椿のみ。フランチェリカの情報はあまりないが、ルナミネスは学者の家系で、明里は蘭香が揺さぶることが出来る。

ならば、椿からまず散り散りにさせて、各個撃破で三人を仕留める。
リリアは射撃型の利点を生かして、遠くからちまちまと足止めをすれば、全滅で勝利と成る。

もっとも、とどめは刺さずとも、身動きをとれなくしてしまえば、集まってあとは椿を討てばいい。イレギュラーが発生するとしたら、それはフランチェリカだけだが、フランチェリカには時間稼ぎを得意とするナリナがついている。

蘭香は、作戦を受けてまっすぐ明里の下へ向かっていた。
そして、茶色がかったオレンジ色の髪を見つけると、一気に駆け寄った。

「さぁて、お手並み拝見！」

まずは軽く、右のストレート。
その大降りの一撃を、明里は左手で弾いた。
だが、蘭香は弾かれることも想定した動きで左のジャブをすると、引き戻した右で再びストレートを放った。

「疾ッ！」

そのストレートを、半身になることで避けながら、その動きすら速度に入れた蹴りをカウンター気味に放つ。蘭香は咄嗟に後ろに飛んだが、頬をかすめてヒットポイントを削られた。

「強いなぁ、相変わらず」

そう、明里に聞こえないように呟いた。
親類が明里のことを“くすんでいる”と嘲る一番の理由は、この強さに対する劣等感が理由だった。だから、彼女に打ち勝つためには、まずコンプレックスを持っている髪のことを持ち出して、調子を崩す。

それが一番良い方法で、いつまでも効いてしまう方法だった。
自分は優勝するためにここにいる。ならば、使わない手はない。

「相変わらず濁った髪だね。本当に大寺門の血、流れてるの？」

そう嘯きながら、俯いて目元を隠す明里に接近する。
蘭香は、上段を狙った回し蹴りを放つ。明里はそれを手で受け止めると、右のストレートを放った。だが、その動きは先ほどまでよりも、ずっと単調だ。

「（かかった！）……汚れた髪、泥色の血、それが、体術の名家たる大寺門に相応しいとでも、思っているの？――かわいそうに」

哀れんだ目で言うと、その目に拳が飛んでくる。
蘭香は予測済みだったその一撃を難なく避けると、腕を掴んで引き寄せた。

「生まれ変わって、出直した方が良いよ。生きていて、恥ずかしいでしょう？」

耳元でそう呟くと、あえて身体から離れる。
ここまで挑発すれば当分頭は冷えないだろうと判断して、蘭香はおおぶりの胴回し蹴りを放った。ここで避けるのは難しい。普段ならともかく、冷静を失った今では無理だろうと、蘭香は蹴りを放って勝利を確信した。気を失わせれば、ヒットポイントを削りきると言う時間のかかることをする必要もない。

「え？」

蘭香は、思わず呆然とした声を上げた。

回し蹴りに手を添えられて、勢いを殺さずに流される。
明里は左手の甲で押すように蘭香の身体を流すと、自分の身体を回転させて流した左手を使った裏拳を放った。

すぐに防御に回ろうとするが、動揺から上手く動くことが出来ない。
結果的に盾にした腕を巻き込む形で肩に当たり、防御を抜けたダメージとしてヒットポイントが削られた。

痺れの残る右手をかばいながら、網膜投射の数値を確認する。
その数値に、蘭香は息を呑んだ。

――ＨＰ６５０　ＭＰ９５０　Ｔ：１２：４３：４６

一撃。
たったの一撃で、肉体強化により硬度が上がっているはずの防御を抜けて、三百五十も削られていたのだ。蘭香は、明里の不敵な笑みを見て、自分が嵌められたことに思い至った。

「くっ……コンプレックスはどうしたの？明里ッ」
「さて、ね」

明里は答える気は無いと言うように、左半身の構えをとった。
リーダーに自信満々に倒せると言ったことを今更ながらに後悔しつつも、苦戦するが勝てると自分の中で自信の軌道修正をした。

「使わずに勝つつもりだったけど……いいよ、見せてあげる。【固有魔法・瞬閃】」

蘭香の固有魔法、瞬閃は、一歩の超高速化だ。
これにより、蘭香は目にもとまらない速度で明里の死界に移動した。

ストレートを放つ時の空を切る音で反応されるが、それでは防戦一方になる。

蘭香の作戦は、シンプルに削って勝つことだった。

「そらそらそらぁっ！」

「くっ！」

一瞬しか魔力を使わないため、非常に低コストで使い続けることが出来る。

それを使って、蘭香は四方八方から明里を追い詰める。

「そういえば、あたしも蘭香と同じ事思っていたよ」

「くすんでいるって？」

防戦しながら呟いた明里に、蘭香は「強がりだったか」と安堵していた。

それならば、勝機はずっと上がる。

「使わずに、勝とうと思ってたんだ」

「なにを……っ」

「【固有魔法・千里眼】」

高速で移動する蘭香相手に、明里は棒立ちになる。

効果を発しない魔法を不思議に思いつつ、諦めたと判断して背後から踵落しを放つ。

「なっ！？」

だが、明里はそこに出現したことを知っていたかのように振り返り、

避けながらカウンターで膝蹴りを放った。目の良い明里は、正面から来るのならいくら速くても捉えてくる。
だから後ろに回ったのに、まるで正面から見ていたかのような動きだった。

――ＨＰ３００　ＭＰ８８２　Ｔ：１０：０６：１１

あと一撃受ければ、脱落する。
リーダーが二人倒せば、などというのは、有ってないようなルール。
ならば、正真正銘あと一撃で、終了だ。

今度こそとカウンターに気をつけながら、明里の左斜め後ろに移動する。
そして、超低姿勢からアッパーカットを放った。
ぎりぎり視界に入らない位置からの鋭い一撃。

これで戦況を覆せるだろうと、蘭香は不敵に笑った。

「づっ！？」

だが、望んだ状況は手に入らなかった。
アッパーカットを一歩右に移動するだけで避けられて、がら空きの胴体に体重を乗せた蹴りを放たれた。

――ＨＰ０　ＭＰ７８４　Ｔ：０９：０２：１３

網膜投射に映された、リタイアの文字。
その文字を無感情に見つめながら、蘭香は気を失った。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

明里はそんな蘭香を見て、気をが抜けたようにへたり込んだ。
明里が契約したのは、多くの目を持つ巨人“アルゴス”だ。
全周囲を見続けるというのは、並の集中力ではできない。

だから、打ち倒したはいいが、疲労で身動きがとれなくなっていた。

「ごめん、椿。少し休む」

それでもリタイア扱いにはならないようにと、明里は気だけは失わないようにうなだれた。

†

近づいてくれば、気配がわかる。
遠ければ、気配がわからない。
近づいては離れて、離れては近づく。
ヒットアンドアウェイにしても攻撃力が足らなすぎて、戦っている

気がしない。

そんな地味すぎる戦法に、フランチェリカは苛立ちを隠せずにいた。

――ＨＰ１０００　ＭＰ６００　Ｔ：１０：３１：７７

刻々と過ぎていく時間と武装強化の持続によるマジックポイントの減少。

どうしようもないと諦めるのは簡単だが、フランチェリカはそれをしたくなかった。

「ちっ！」

再び近づかれ、斧を振り下ろされる。

今度こそ逃がすまいと、ハンマーを振った。

今まで迎撃しようとしていたが、今度は吹き飛ばしを狙う。

「っ！」

狙いどおりに、ナリナが吹き飛ばされた。

そしてすぐに気配が消えるが、吹き飛ばすことにより、フランチェリカはナリナが消えた方角をしっかりと把握していた。

「【固有魔法・烈風】」

広範囲に風を吹かす。

それは相手の体勢を崩す程度の風だが、見えない相手を捉えるのなら、これに以上必要ない。

「うわわわっ！？」

その声に一直線に走ると、フランチェリカは大きくハンマーを振り下ろした。

「へっ？！」

ナリナは混乱した声を上げると、そのまま叩きつぶされた。

怪我はできない仕様なので、ナリナは地面で目を回すだけに、とどまった。

「さて、と」

網膜投射に現われた数値に眉をしかめる。

――ＨＰ１０００　ＭＰ２５０　Ｔ：０９：１３：８８

広範囲に使用するという条件の下、がっつりと削られたマジックポイント。

著しい減少のため、肉体強化をかけて駆けつけたら、下手をすれば到着と同時に切れてしまう。そうならないためにも自分の足で走り出そうとして――フランチェリカは、どちらへ向かえばいいのか、方角がわからないことに気がついた。

『大寺門蘭香選手、リタイアですっ！』

その実況に、フランチェリカは安堵の息を吐いた。

瞬間――背中が切られた感触に、フランチェリカは目を見開いた。

背後には、黒いマスクの麗人が、短剣を振り抜いていた。

麗人――五十鈴は、短剣を逆手に持つと、その柄をフランチェリカ

の鳩尾に当てて、意識を刈り取った。

「ナリナ、君の仇はとったぞ」

そういって、五十鈴は倒れ伏したナリナに一礼すると、踵を返した。
いくら地味だからって死んだことにしないで欲しい――ナリナは夢の中で、五十鈴にそう突っ込んだ。まともな初台詞である。

†

素早い動きに翻弄されて、ルナミネスは防戦一方になっていた。
魔弾を上空に放つが、落ちてくると解っていれば怖くはない。
ルナミネスの前に立つ“五十鈴”は、降り注ぐ魔弾を問題なく躱していく。

――ＨＰ８２０　ＭＰ７００　Ｔ：１１：３９：４４

もう四分近く、こうしていた。

低コストの魔弾のおかげでなんとなっているが、これではじり貧だ。

「【固有魔法・魔弾】」

それでも放ち続けるルナミネスに、五十鈴は呆れたように視線を向けた。

落ちてくる時間も、次を放つタイムラグも、全て頭に入っている。

だから、五十鈴はルナミネスが弾丸を放った直後を狙って、接近した。

そして、短剣を振り上げた。

――ダンッ

「ぐっ！なに！？」

空に登ろうとしていたはずの黒い弾丸が、直角に落ちた。

この軌道で来るとは思わずに、体勢を崩す。

「【弾丸・射出】」

魔弾よりも高コストだが、その分威力が高い弾丸。

その弾丸が、避けられない体勢だった五十鈴を撃ち抜いた。

さらに、薄暗くてよく見えなかった地面から、実はまだ残っていた魔弾が跳ね上がった。

ずっと残しておくには魔力を食い過ぎるため三発だけだったが、その全てが体勢を崩していた五十鈴を貫く。

――ＨＰ２４０　ＭＰ４５０　Ｔ：０９：０２：０１

減った体力に、眉をしかめる。
大きく息を吐くと、五十鈴は魔力を集中させた。

ルナミネスが、さらにフェイクで忍ばせておいた一発を、五十鈴の背後から襲いかからせる。五十鈴はその弾丸に気がついていなかった。

――ザンッ

だが、その弾丸を切り落としたのは、他ならぬ“五十鈴”だった。

「なんっ…で…？」

そう、ルナミネスの前には、二人の五十鈴が居たのだ。
五十鈴はもう一人の自分と手を合わせる。すると、後から来た五十鈴が虚空へ消えた。

「呼び戻す嵌めになるとは、思わなかったよ」
――ＨＰ４８０　ＭＰ５００　Ｔ：０８：２１：３３

五十鈴の固有魔法は“分身”だ。
それは、自分をもう一人作るという、反則的な技。
分身体は防御力が低く、また消えると分身を作った五百ポイントは戻ってこない。
そういったデメリット補えるほど、使い勝手の良い技だった。

分身を吸収すると、ポイントは現在の丁度倍になる。
マジックポイントは、離れた分身を呼び出すのにがっつりと使ってしまったため倍になっても半分だったが、十分だ。

「【剣真・装填】」

短剣から、魔力の刃が伸びる。
それを順手で構えて、上段から振り下ろす。

「【固有魔法・魔弾】」

ルナミネスは、大げさに左へ飛びながら、魔法を放つ。
体術が苦手なため、最小限の動きというものが出来ないのだ。

五十鈴は、短剣を用いて魔弾を迎撃しようと薙ぐ。
だが、魔弾は刃にまとわりつくように動き、五十鈴の顔面に飛来した。
それを、顔を傾けて避ける。

「【弾丸・射出】」

直線だが、高速。
その一撃を避けようとしたところで、既に避けた魔弾がUターンして、五十鈴の足に当たった。それにより再び体勢を崩し、弾丸を貰ってしまう。

「【弾丸・射出】」

流石に次は当たらず、五十鈴は完全に体勢を立て直した。
そして、数値を見て舌打ちした。

――ＨＰ２５０　ＭＰ４５０　Ｔ：０７：５５：９１

残り二百五十という低い体力。

魔力はまだ余裕があるが、時間の問題だ。

「もう、油断はしない」

そう呟くと、一気に走る。

鍛え上げられた肉体を用いた疾走は、魔力を用いていないのに、ルナミネスの視界からその姿を消した。

咄嗟に“嫌な予感”がして、振り返って棒を盾にした。

――ガキンッ

鋭い音と共に、ルナミネスは後方へ弾かれる。

その動きに合わせるように、五十鈴は滑らかな動きで身を乗り出した。

「シャッ」

一息一閃。

咄嗟に身を縮めたルナミネスの肩を、魔力の刃が切り裂いた。

一度対象に当たると砕けるため、すぐに補充する。そして、二度目の魔力刃が、後ろに転んだルナミネスの腹を切り、更に往復した刃が倒れたルナミネスの足に当たった。

――ＨＰ２００　ＭＰ２００　Ｔ：０６：１１：３９

五十鈴はトドメとして一撃で仕留めるために、ルナミネスに馬乗りになった。

椿に関わる前ならば、ここで諦めているだろう。だが、椿と関わっ

て、ルナミネスはこの試合を“勝ちたい”と、競うことを真剣に行いたいと、始めて思っていた。

だから、ルナミネスは、こんなところで諦めない。

「させないっ！【固有魔法・弾丸】！」

放たれた弾丸を避けても、Uターンする前に仕留めることが出来る。術者がリタイアすれば、魔法は少しの間残るが、誘導は切れる。

だが、予想に反して、魔弾は五十鈴の前で制止した。

その意図を理解して、五十鈴は焦って刃を振り下ろした。

「スプレッド！」

ルナミネスが契約したのは、幻想世界に存在する“魔女”だった。

魔力を操るという一点においては、現実世界の魔法使いとは比べものにならない技術を持つ魔女の力を使って、変幻自在の魔法を操ることが出来る。

登録できる範囲は狭く、空中での集束散開や超高速射出は出来なかったが、散弾は可能だった。動きによって必要魔力が変化する魔弾。

それに、ルナミネスは全ての魔力を込めて散弾させたのだ。

「ぐぅっ！」

「あうっ！」

振り下ろされるのと、発射は同時だった。

散弾したため、避けきることは出来ず、気を失ったルナミネスの横に転がる。

――ＨＰ２　ＭＰ０　Ｔ：０３：０６：４１

気だけは失いたくないと、五十鈴はなんとか瞼を持ち上げる。
満足そうに転がるルナミネスの顔を覗き込んで、五十鈴は楽しそうに笑った。

それは、マスクの下からでもわかる、優しい笑みだった。

†

――ＨＰ１０００　ＭＰ９５０　Ｔ：１３：５０：１１

足止めのつもりだと解る弾丸を、椿は一直線に駆け抜けながら切り落としていた。
死線を走る、怪我をしない限度。それが、実戦経験で椿が得たものだった。

命の取り合いとなれば、それでも怪我はする。
けれど、これは試合だ。命を刈り取ることがないと解っていれば、心にも余裕ができる。

走っても中々到着しないことに、疑問を覚える。
弾丸の魔法は、そこまで射程が長い訳ではないのだ。

十三分を切ったところで、漸く銃を向けるリリアの姿を捉えた。
リリアは、不思議そうに首をかしげていた。

「あら？よくあの弾丸の中、ここまで来られましたね」

穏やかな口調も、余裕な態度も変わらない。
そのことが、椿の警戒心を高めた。

「【弾丸・射出】」

弾丸を撃つ。役割は、様子見だ。
リリアはそれを理解していながら、あえて手の内を見せた。

「【弾丸・射出】【固有魔法・必中】」

放たれた弾丸を一瞥しただけで、たいして狙いもせずに打ち落とした。

「私の魔法は、私の視界に入ると、凶悪ですよ」

視界に入らなければ攻撃することが出来ない。
それがわかっているからこそ、リリアはあっさり明かして見せた。

椿はここに来るまでの間、自分の身体に当たりそうな弾丸を全て打ち落としてきた。
その時に、椿は打ちもらしがなかったことに気がついた。
それは、言い換えれば、全て自分の身体に当たる軌道だった。ということに他ならない。

リリアが再び弾丸を放つ。
それを、椿は切り落とそうとする。
だが、ここは違う場所で行われている、ルナミネスの魔法が五十鈴の剣にまとわりついてきた時のように、椿の剣を滑るように弾丸が剣を避けた。
そして、それは椿の顔面に飛来する。

「【弾丸・射出】」

それを、なんとか打ち落とす。
余分に魔力を使ってしまったのは惜しいが、仕方がない。
そんなことを考えていると、二発目、三発目と発射された。

ルナミネスの魔弾ほど自由度は高くないが、視界にいる限り必中になる効果と、速射性は脅威の一言に尽きる。

椿はルナミネスに近づくことが出来ないまま、いたずらに時間と魔力を消費していく。

だが、こんなところであっさり終わったりは、しない。
椿の長所は、その思い切りの良さにある。どうせ体力を削られるのなら、削られることを利点として捉えればいい。どうせ怪我をするのなら、最低限でなんとかするために、邪霊の前に踏み込むことが出来る、椿だからこその思考パターンだ。

「はぁっ！」

勢いよく、前に飛び出す。

弾丸が身体に当たり、痛みが走る。

だが、それを顔には出さずに、一直線に突き進んだ。

「えっ？」

ここで、はじめてリリアが余裕の表情を崩した。

だが、すぐに冷静になって腕章を狙う。もう四分の三以下になっているだろうという、動揺を超える素早い判断だった。

「せいっ！」

「【結界・展開】っ！」

思っていたよりもずっと速い剣速に、リリアは驚いて結界を作った。

椿ならば気にせずに腕章を打ち落とすだろうが、ここで経験の差が現われた。

――ガツッ　キインッ

椿が弾かれると同時に、結界が砕かれた。

その様子に、リリアは始めて目を開き、その緑色の双眸に驚愕の感情を宿した。

こんなに簡単に破壊されたということは、それだけ強い一撃が入ったということだった。

「一撃でも受けたら、大変ですね」

焦りをすぐに隠すと、冷静だという仮面を被る。
そのうちに仮面は溶け込んで、すぐ、本当に冷静になる。

『ナリナ・フィイズ選手、リタイアですっ！』

その言葉に眉をしかめるが、リリアにとってはまぁ予想の範疇だ。
だが、続く実況に焦りを覚えることになった。

『大寺門蘭香選手、リタイアですっ！』

これで二人、減った。
あと一人というのは、リリアとしてもまずい。

『水戸川選手、リタイアですっ！』

今度は、椿が眉をしかめる。
だが、動揺はない。焦りは、彼女たちの努力を潰すことになる。
その表情の変化につられて、リリアは冷静になった。その皮肉に、今は感謝する。

「【固有魔法・必中】【弾丸・射出】」

固有魔法が先に来たということに、椿は“嫌な予感”がして身構えた。
弾丸は氷の地面に当たると、氷を砕いて礫にする。そして、その礫全てに“必中”の効果が宿った。

「なっ……くっ……【弾丸・射出】」

椿はその礫に弾丸を射出した。

そんなものでどうすると、弾幕を張ったリリアは薄く笑った。
その礫の弾幕に、更に必中弾丸まで織り交ぜて。

「せやっ！」
「なんですって!?」

椿は、自分で放った弾丸を、魔法ではないため攻撃には全く使えない微弱な魔力を纏わせた剣で切り裂いた。すると、魔力の反応である虹の爆発が起こり、礫を全て叩き落とした。
更に、返す刃で弾丸も切り落とすと、再び駆け出す。

何度も動揺してしまう自分の身体を隠しながら、リリアは弾丸を放つ。
登録するための制限で、腕章を狙うという細かい設定は出来ないのだ。

振り上げる動作で弾丸を切り、そのまま振り下ろす。
一撃で割れたとしても、一撃に耐えられるのなら隙が出来る。
その結界を、椿は剣真ではなく柄で攻撃して、砕いた。

砕いた反動で振り上げて、ほとんどタイムラグをつくらずに、リリアを切り裂いた。
咄嗟に後ろに飛んだので衝撃を和らげることが出来たが、気を失うのを防いだ、という程度の差だ。それでも、それなら覆す手段はあると考えることが出来るのだ。

リリアは追撃されないように弾丸を放って礫を仕掛けながら、後退した。
礫全てを必中にするのは魔力を多く必要とするため、何度も出来ることではない。

――ＨＰ３００　ＭＰ４２０　Ｔ：０４：４６：１８

一撃で七百も削られた。
そのことを悔しく思いながら、椿を見る。

椿は、息も切れて、辛そうだ。
事実、椿は長期戦が苦手なため、苦痛を感じていた。
時間制限でドローでは、頑張ってくれた仲間達に申し訳が立たない。

――ＨＰ２８０　ＭＰ２００　Ｔ：０４：３１：９９

礫は、必中が無くても、確実に体力を削っていた。
そう何度も受けられる攻撃では、ない。

息を整えて、リリアを見る。
リリアも同じように、息を整えて椿を見ていた。

「はぁぁっ！！」

気合いと共に、駆け出す。
弾丸を打ち落として、剣を突きの体勢にする。
リリアは弾丸を四発放つと、それを椿に打ち出した。
必中のかかった対象は、椿の装霊器。武器を打ち落とそうとしたのだ。
それにより勢いを殺されて、椿の剣は結界を破壊しきれずに、中程まで貫いて止まった。

「捕らえましたよっ！！」

そう、始めから狙いはこれだった。
自分の結界で、椿の動きを止めること。
さらに、椿の周囲に弾丸を放つことと、剣を狙うことにより、絡め取りやすい突きの形に持って行かせること。全てが、計画通りだった。

『イクセンリュート選手、ついにリタイアです！これで、動ける選手は、実質リーダーの二人だけとなりました！接戦です！』

これで、大丈夫。
あとは椿を倒すだけだと、腕章に腕を差し出した。
その魔法を以て、終止符を就けるために。

だが、リリアは知らなかった。
この体勢が、椿を勝利へ導いてきた、必殺の構えであると言うことに。

「【固有魔法・炎刃】」
「くぅっ！？」

リリアは、自分の胸に突き刺さる炎の剣を見た。
椿は、絡め取られた状態から動くことなく、剣を伸ばしたのだ。

「ふふっ……完敗、ですね」

リリアは、そう呟くと、その場に崩れ落ちた。

――ＨＰ２０　ＭＰ０　Ｔ：００：０３：００

ラスト三秒の、決着だった。

†

勝利が告げられて、会場が歓声に包まれた。
その中央で、椿たちはA組の選手達と握手を交す。

「見直したわよ、明里」
「また手を合わせよう、蘭香」

仲直りを果たした、親戚同士。
親戚からは疎まれ続けてきたからこそ、明里の顔は嬉しげだ。

「なんかあんまり記憶ないや」
「うん、私も」

フランチェリカとナリナは、微妙に落ち込んでいた。
フランチェリカの方は勝ったからまだ良かったが。

「この日を忘れないと誓おう、ルナミネス」
「私も楽しかった。けど、そんなこと誓わなくても良いよ」
そう肩を竦めながらも、ルナミネスは嬉しそうだ。
「貴女と戦えたことは、私の財産になります。ありがとう、椿」
「ううん。私も、リリアと戦えて良かったって、心から思うよ。ありがとう」
椿もリリアと、熱い握手を交した。
この後に残るのは、閉会式と表彰だ。
充実した一日の終わり。
その終わりに、どうしてか“嫌な予感”がすることに、椿は大きな不安を感じていた。
――どこかで、誰かの……笑い声が、した。

第八話　応龍祭編？　応龍杯（後書き）

第八話は、次回で終了です。
なんだか、やけに長くなってしまいました。

少し時間がとれそうなので、次は近いうちに更新できる……ようにしたいです。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第八話　応龍祭編？　過ぎ去った世界

閉会式は、空調が効いたドームの中で行われる。
応龍杯のメンバー以外は制服に着替えているので、椿たちも指定された時間に制服に着替えていた。足下のスポーツバックには、競技用装霊器と交換された、通常の装霊器が入っている。

いよいよ、点数発表だ。

『まずは、個人競技の合計ですよっ！……たらたらたらたら、てんっ！』

マリアは、擬音を口ずさむ。
音楽教師だけあって、妙に上手だ。

『どん！』
――紅組　３５０　蒼組　６５０

蒼組から、歓声が上がる。
個人競技は、全学年を通すと蒼組の圧勝だったようだ。

『ではではでは～っ――団体競技を足しちゃいましょう！どんっ！』
――紅組　１０５０　蒼組９５０

今度は、紅組が押した。
これに足されるのは、応龍杯だ。

『さてさてっ！いよいよ応龍杯の得点が足されちゃいます！どどんっ！』

――紅組　１３００　蒼組　１７００

更に差が開き、紅組から落胆の声が響いた。
応龍杯で紅組が優勝したのは、椿たちのみだった。

『ここから、特別賞がプラスされるよーっ！落胆には、まだ早いっ！』

その声に、期待に胸をふくらませる。
頭を下げるのは、まだ早いのだ。

『まずは、一番戦略を魅せた、作戦賞は――一年Ａ組の、リィ・リリア・サイミル選手です！おめでとうございます！』
――紅組　１３００　蒼組　１９００

驚いて目を丸くするリリアに、椿は離れたところから笑いかけた。
リリアはその視線に気がついて、恥ずかしそうに頬に手を添えた。

『続きまして、もっとも美しい戦いを魅せた、三年Ｄ組に、美闘賞ですっ！』
――紅組　１５００　蒼組　１９００

三年生のブースで歓声が聞こえる。
あとで録画した映像を見せて貰えないものだろうかと、椿は密かに考えた。
美しい戦いというものが、非常に気になるのだ。

『そして、チームを率いる素晴らしリーダーシップと、信頼を手に戦う絆を魅せた、一年Ｂ組の神崎椿選手に、カリスマ賞をプレゼンツっ！』

――紅組　１７００　蒼組　１９００

その意味に、椿は呆然とした。

隣りに立っていた奈津に抱きつかれて、漸く我に返る。

「す、すごいや椿！カリスマだよっ！カリスマ賞！」

「あ――え、えぇえっ！？」

慌てふためきつつも、目頭が熱くなっていく。

『続きましてはっ……リーダーが二人倒せば一人復活という、有ってないようなルールを見事成功させて、チームを勝利に導いた、二年Ｆ組のリーダー、獅子堂吉良選手にチャレンジ賞だーっ！もってけこんちくしょう！』

――紅組　１９００　蒼組　１９００

並んだ。その事実に、会場がわき上がる。

『連続で行くよ！チームの中で堅実に支えてきた、一年Ａ組のナリナ・フィイズ選手に、縁の下の力持ち賞を授与します！お疲れ様です、アトラスさん！』

――紅組　１９００　蒼組　２１００

残す賞は、あと一つ。

そのことに集中しすぎてスルーされたナリナは、近くにいたフランチェリカに慰められていた。だが、フランチェリカも続きが気になって気も漫ろだ。

最後の賞は、ゲストから贈られるのが、習わしだ。

だから、フィーリがモニターの向こうで立ち上がった。

『最後は、どのような状況においても、最後まで諦めず、仲間達への信頼を大切にした。そんな絆を魅せた彼女に、ＶＩＰを贈りたい。――一年Ｂ組の、ルナミネス・イクセンリュート選手！君が、応龍賞だ！』

――紅組２２００　蒼組２１００

応龍賞の３００点が入り、会場が赤一色に変わる。
真紅の花火が打ち上がり、ここに応龍祭の優勝が決まった。

『わぁぁあぁぁぁぁっっっ！！！！！』

大歓声の中、椿は真っ先にルナミネスの元へ駆け寄った。
そして、その手を握りしめる。

「つ、椿、わた、わた、し」
「おめでとう……おめでとう！ルナ！」
「あ、あぁ、ぅあぁぁぁ」

思わず泣き出すルナミネスを、椿は抱き締めた。
居ても立ってもいられず、駆け寄ったフランチェリカがルナミネスに笑いかけた。

「チェ、チェリカ」
「おめでとう、ルナちゃん！みんな！胴上げしよう！」
「えぇっ！？」

戸惑うルナミネスを胴上げしようと、クラスメート達が集まる。
その中には、なぜか蒼組の五十鈴の姿があった。

持ち上げられて空中浮遊に顔を青くする中、ルナミネスは小さく呟いた。

「――楽しかったって、笑えたよ。椿」

だんだんと高くなっていく高度に顔を青くして、儚く微笑んだ。

周囲にはそれが辞世の句のように聞こえて、慌てて降ろすことになった――。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

閉会式が幕を閉じると、後片付けに入る。

椿は、奈津と二人で医務室にいた。

念のため、怪我をした場所の診断をするためだった。
奈津は、アンジェリカに呼ばれた時に、偶々一緒にいたので付き添いだ。

「後遺症もないみたいね。念のため、今日はゆっくり休みなさい。お疲れ様」
「ありがとうございます、アンジェリカ先生」

診断を終えると、椿はアンジェリカに頭を下げた。
この後は、もう寮へ帰るだけだ。

「それでは、失礼します」
「さよなら、アンジェリカ先生」
「ええ、さようなら」

椿と奈津はアンジェリカに頭を下げると、医務室を出た。
アンジェリカは教員用の玄関から帰るため、椿たちとは別の方向へ去っていった。

「いやー、僕も来年は、応龍杯に参加したいなぁ。できるかなぁ？」
「あはは、くじ引きだもんね」

余韻が冷めぬまま、ゆっくりと廊下を歩く。
過ぎ去った興奮の名残か、頬が朱に染まっていた。

――……
「――っ」

のんびりと話している最中、椿は急に感じた頭痛に眉をしかめた。

「椿？」

奈津が心配そうに覗き込む。

椿は一言「大丈夫」と呟いて、頭を抑えた。

――……来い

頭に響く声。

頭痛と声が反響して、椿は体勢を崩した。

「椿っ！？」

――来い

「どうしたの、椿？」

――来い、来い

「大丈夫？」

――来い、来い、来い

「……椿？」

――来い、来い、来い、来い来い来い来い来い来い来い来い来い来い

すっと止んだ、頭痛。

なんだったのだろうと首をかしげる前に、校舎が邪悪な気配に包まれた。

「な、なに？これ……」

校舎の天井、壁、床、窓。

あらゆるところから、黒いスライムがにじみ出てきた。

椿はすぐにスポーツバックから装霊器を取り出すと、装着する。
戦鎧も装着した時点で、我に返った奈津も装霊器を嵌めて、変身した。

「こんなに、邪霊が……いったいどうやって？」

対して強くもなさそうな邪霊が、校舎へ侵入する。
それは、あり得てはならない事態だった。

――来い、こっちだ、来い、来るんだ
「っ……また」

今度は、頭痛は伴わなかった。
ただ自然に、頭に響く声。

「行かなきゃ」
「え？椿？」

声を辿らなければ、この事件は解決しない。
そんな“予感”は確信となり、椿は呼ばれるままに従って走り出す。

「椿！」
「あっ……奈津」

だが、走れば当然のように奈津の方が速いため、椿はすぐに追いつかれて肩を掴まれた。
そして、声をかけられて、正気に戻る。

「大丈夫？」
「うん……ごめんね、心配かけたね」

「ううん。それよりも、どこかへ行こうとしてたみたいだけど……」
不安げに覗き込む奈津に、椿は理由を答える。
奈津は、椿がどこか遠くへ行ってしまう気がして、不安になっていたのだ。
「声がね、聞こえるの」
「声？」
首をかしげる奈津に、椿は簡潔に伝える。
スライムが活動を開始する前に、動かなければならなかった。
「来い、来いって。だから、私――」
自分にしか聞こえない声。
それがどれだけ奇妙なことだか解っていたからこそ、椿は言いにくそうにしていた。
それでも続けようとした椿を、奈津はすぐに遮った。
「――信じるよ」
「奈津……」
奈津のまっすぐな目に、椿は安堵から息を吐いた。
「行こう！」
「うん！」
これ以上はもう、言葉はいらない。
ただ、進むだけだ。この事態を、解明し解決するためにも。

†

ドームは、騒然としていた。
閉会式も終わり、観客はほとんど帰宅していた。
だが、当然残っている人もいる。

「怯むな、魔法使い達よ！」

激励が飛ぶ。

白銀の鎧と白銀のマント。
白銀の長剣と白銀の盾。
白銀の髪を靡かせて、邪霊を打ち払う白銀の騎士。

フィーリ・インスエルは、未熟な生徒達を鼓舞しながらも護り、そして戦う。
そして、生徒達を守るのは、彼女だけの義務ではない。

教師達も、ドームの外や校舎、施設、寮の付近で戦っていた。
スライムが地面から現われ群れと成る。

―／―

ドームの外、邪霊が生徒達を襲っていく光景が、そこにあった。
実戦経験の無い下級生達の前に、マイク型の装霊器を持ったマリアが立った。

「【打ち砕き・狂い惑わせ】」

呟いたのは、自創言語。
オリジナルのその詠唱は、妙にこぶしがきいていた。

『【散華】！！』

増幅された声が衝撃波となり、スライムを纏めて倒す。
その豊満な体つきと妖艶な声は、月明かりに照らされて、見るものの背筋を震わせるほどの美貌を魅せていた。

「さてさて……次はだれが、散りたい？」

戦鎧も纏わず佇むマリアに、意志の低いはずの邪霊達は、静かに圧倒されていた。

―／―

施設の周囲にまで逃げてきた生徒達に、スライムが飛びかかる。

尻餅をついて後ずさる生徒の目に映ったのは、自身の命に関わる絶望的な状況などではなく、銀の閃光によって二つに分かれ、消滅したスライムの姿だった。

「最近は生徒を守ることも出来なくてな」

そう呟いたのは、日本刀型装霊器を構える、楓の姿だった。

「今日の私は、機嫌が悪いぞ」

銀の刀真に映る、鋭い目。

その目は、有象無象の邪霊達を、確かに捉えていた。

―／―

校舎のグラウンドでは、ベンチの後片付けをしていた生徒達が、邪霊と戦っていた。
その中央には、治療専門の魔法使いであるアンジェリカが、邪霊を打ち払う程の“聖”のオーラを放って、生徒達を守っていた。

「なるべく私の側にいなさい」
「は、はいっ！先生！」

アンジェリカの側にいる限り、数だけの邪霊に後れをとりはしない。
彼女たちもタマゴとはいえ魔法使い。それも、二年生にもなれば、実戦も経験している。

生徒達の魔法で打ち払い、体力や魔力の疲労さえ完全に癒す。
その永久機関の前には、邪霊達などものの数ではなかった。

―／―

寮には、まだ帰っていなかった観客や、戦闘経験の無い生徒達が集まっていた。
流石に寮の中まで事前に入り込んでおくことは出来なかったのか、結界の弱い正面玄関から入り込もうと、集まる邪霊の姿があった。

もぞもぞと蠢き、邪霊は集まって固まる。
腰の高さ程のスライムが集束して二メートル程になると、力も膨れあがった。
それが十、二十と集まっていく。

地面を滑りながら侵入しようとするスライム。
だが、鈍色の閃光と共に、その身体がはじけ飛んだ。

「あらあら、こんなところまで入り込んではいけませんよ」

穏やかな口調でそう言葉を紡ぐのは、ミファエルだった。
その手には、ナックルガードの下まで刃が延びて、握り手よりも下一メートル程長い、全長三メートルにおよぶ片刃の大剣が握られていた。

超重量のそれを片手で持ち上げて、振るう。

「【喰らえ】」

学生時代から使い続けてきた自創言語。
たった一言で彼女の精霊は意図を理解して、その力をミファエルに宿す。

――ドンッ

剣が振るわれ、スライムに当たる。
すると、黒い霧状のものが、スライムを食い尽くした。

「さて、久々に頑張りましょうね。ベヒさん」

装霊器に装填された、黒い精霊石。
暴食の悪魔ベヒーモスが、彼女の背後で低く呻った。

†

声に導かれるまま、突き進む。
道中の邪霊は、無視するか薙ぎ払い、兎に角先を急いだ。

だが、スライム達もただでは通さない。
進むにつれ、合体した大きいものが現われるようになった。
追いかける速度も速くなり、前を向いて走るのが危険になって、仕方なく振り返る。

「まずどうにか数を減らさないと、どうしようもないかな」
「うん。そうみたいだね」

装霊器を構える。
ここで余計な消耗をするのは良くない。

だが、だからといって致命傷でも負ったら、そこでリタイアだ。
それでも、覚悟を決めた――その時だった。
銀色の光が走り、スライムを貫く。
椿たちの後ろからやってきて、十文字槍を突きだした、男性の姿があった。

「こ、こんなところで、ど、どうしたんですか?は、はやく、避難しなさい」
「遠峰、先生?」

授業の時の雰囲気は戦闘時には適用されないのか、どもった口調で雅人が椿たちを守った。
その槍捌きに、奈津も目を丸くしていた。

「先生!僕たち、どうしても先に行かなくてはならないんです!」
「佐倉、さん?」

スライムに間合いを詰められないように牽制する雅人に、奈津が訴えかけた。
椿も、それに倣う。ここで避難して、退く訳にはいかなかった。

「お願いします、行かせてください!遠峰先生!」
「か、神崎さん……」

二人のまっすぐな視線に苦笑すると、雅人はスライムの群れを睨み付けた。

「わ、私は、い、言ってみたかった、セリフが、あ、あるんです」

「先生――？」

そう呟くと、雅人の雰囲気が、授業の時のそれに変わった。
その独特な雰囲気に、椿と奈津は息を呑んだ。

「――――ここは、私に任せて先に往け」
「先生――ありがとう、ございます！」

真剣な表情に促されて、二人は勢いよく頭を下げた。
そして走り出す二人を追撃しようとした二メートルサイズのスライムが、切り裂かれて石に変わった。

「我が精霊、コカトリスの毒。その身に受け、身の程を知れ」

十文字槍が、夜の校舎に煌めいた。

†

二人が辿り着いたのは、校舎の屋上だった。
白い満月が照らす中、一人、背を向けた男性が立っていた。

「三上院、先生？」
「って、学年担当の？」

男性――三上院慎二郎は、怪しく笑いながら、振り向いた。

「遅かったですね。神崎君。余分なおまけもいるようですが……まぁいいでしょう」
「なに、を」

酷薄に笑う慎二郎の姿に、言いしれぬ不安が走る。
そんな二人を、慎二郎は、ただただ笑って見ていた。

「――先生達の援護には、行かれないんですか」

椿は装霊器を構えながら、問いかけた。
奈津もそれに合わせて、身構える。

「もう、解っているでしょう」

そういって、三上院が指を弾く。
すると、スライム型の邪霊が現われた。
その姿は、。他のスライムと違って、大きな目がついていた。

「見るからに、親玉って感じだね」
「何故なんですか……三上院先生！」

引きつった顔で呟いた奈津に、険しい顔で椿が続いた。

慎二郎は笑みを浮かべたまま、左目に手をやった。

「こういうことさ」

慎二郎の手からこぼれ落ちたのは、カラーコンタクトレンズだった。
魔法で作られたものなのか、アスファルトに落ちる前に、塵となって消えた。

「っ……まさ、か」

奈津が、震える声で呟いた。
椿もその目を見て、息を呑む。
紫色の瞳に浮かぶ、ローマ数字の「?」とも「I」ともとれる紋章。

「“遮断”の紋章というのだが……まぁ、それはいいか」

二つを分ける。
その紋章は、みれば確かに“壁”のようだった。

「邪霊に魂を売ったっていうの?!」
「契約、したんですか?」

激昂する奈津に、慎二郎は笑みを深めた。
そして、震える声で問う椿に、頷いた。

「そう、私は“魔人”だよ」

邪霊と契約して、紋章を刻まれた人間。
――それが、慎二郎だった。

「だが――君が憤るのも、おかしな話ではないかね？……佐倉君」
「っ！」

奈津が、こわばった顔で固まった。
どうしてそこで奈津のことが出てくるのか解らず、椿は戸惑いを見せた。

「君は、私たちと同類だろう？ねぇ――」
「っそれを」
「――“向こう側の子供達”よ」

しんと、静まる。
その声を聞いて、奈津は強く唇を噛んで、俯いた。

「アビス、チルドレン……？」

噛みしめるように反芻した椿に、慎二郎は笑い声を上げた。
震える程強く拳を握りしめる奈津の様子に、椿は意味を呑み込んだ。
邪霊に拐かされて、能力を植え付けられた子供。それが、奈津だった。

「おや？知らないのかい？勉強不足は減点対象だよ、神崎君」

何も言わずに俯く椿に、慎二郎はあざけ笑うように言い放った。
その嘲笑に、奈津は不安げな声を零す。

「椿……僕は……」
「そう！彼女は、私たちと同じ――」

不安げな声と、残酷な声。

それに重なるように、椿が口を開いた。

「奈津は」

その一言の続きを、二人は別の希望から求めた。

化け物だと罵ることを期待する慎二郎。

人間だと慰める言葉を求める奈津。

そんな二人の視線の中、椿はゆっくりと顔を上げた。

「奈津は――――“ヒーロー”だよ」

椿の瞳に映るのは、揺るぎない“信頼”だった。

その、無限の煌めきを宿した目に、慎二郎は悔しそうに唇を噛んだ。

「椿……椿っ……」

いいたいことも伝えたいことも全て置き去りにして、バイザーの下から涙がこぼれ落ちる。

とどめなく溢れる涙を止めることもせず、ただ、信じてくれた“親友”の名を呼んだ。

「私は三上院先生に行く。邪霊はお願いできる？」

「もちろんだよっ……行こう、椿！」

「うん、奈津！」

風を纏って走り出す奈津と、炎の刃を携えて駆ける椿。

その姿に、慎二郎は血がにじむ程強く、唇を噛んだ。

「行け、邪霊“群像”よ！」

スライムが、三メートル程の大きさになって突進してくる。
それを、奈津が正面から蹴り飛ばした。

「ぬあっ！？」

スライムは、その弾力でもって奈津を弾く。
そして、校舎裏の方まで弾かれて、奈津が屋上から落ちるコースを辿った。

「奈津っ」
「このくらいどうって事無いっ！任せてっ！」

奈津は短くそういうと、空中で体勢を立て直して、落ちた。
スライムも、奈津を追って落ちていく。

「気にしている余裕があるのかい？神崎君……っ！」

慎二郎は、指先を椿に向けた。
その指先に黒い球体が現われ、そこから高速のレーザーが放たれた。
椿はそれを、すんでの所で躱した。

長い夜は――まだ、始まったばかりだ。

†

屋上から落下しながら、風の力で校舎の壁に着地する。
そのまま壁を走り降りて、地面の近くで壁を蹴って、滑りながら着地した。

『ロォォォオオオォォォオオオオオ！！！！』

どこから響いてくるのかもわからない、不気味な声。
同じく屋上から落ちてきた邪霊が、奈津の正面に着地した。

『ロァアアアッッ！！』
「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に疾風の加護を授けん】」

速度を上げて、スライムが身体から伸ばした触手を避ける。
避けた触手は、地面に当たる度に、大地を溶かした。

「溶解液、か――ますます悪役っぽいなぁ」

その威力に引きつる顔を隠すように、軽口を叩く。
左右へステップして避けながら、触手に蹴りを当ててダメージを与える。

だが、スライムは消耗しているようには、見えなかった。

「あの、心臓みたいなのを潰さなきゃ、だめだろうな」

廊下にいたミニスライムも、核を潰さなくては消滅しなかった。
それを思い出して、奈津は小さく息を吐いた。

そのためには、この攻撃をくぐり抜けて、接近しなくてはならないのだ。

「でも、やらない訳にはいかないから、ねっ！」

地面が陥没する程強く、踏み込む。
足に装着された装霊器が、緑色の魔力に包まれて強く輝いた。

飛んでくる触手を、踏み台にして避ける。
更に襲いかかる触手を全て踏み越えて、スライムに接近した。
その舞うような動作は、スライムごときに捕らえられる速度ではなかった。

近距離まで近づくと、奈津は鋭い蹴りを放った。
右足の蹴り、それを弾力によって弾かれる前に引いて、もう一度。
それを何度も何度も、短い時間に繰り出す。

――蹴る、蹴る、蹴る、蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴る蹴るッ！！
――ズン、ズン、ズン、ズンズンズンズンズンズンズンズンズンッ！！

だんだんと表面が削られて、心臓に近づく。

あと少しというところで、スライムの反応が追いついた。

『ルゥアッ！！』

スライムは奈津の左足を触手で掴むと、遠心力に任せて振る。
そして、スライムの背後にあった校舎の壁に、奈津を叩きつけた。

「づっ！？」
――ドゴンッ

壁が崩れる程の、衝撃。
辛うじて頭はかばったが、足を捕まれているので衝撃は殺せない。

『ラァァウッ！』

スライムは、今度は自分の正面の地面に、奈津を勢いよく叩きつけて、そのまま触手を離した。当然、勢いは消えずに、地面をバウンドしながら大きな木に激突した。そして、それだけでは終わらずに、その木をへし折って更に後ろの木にぶつかる。

「かはっ！」

短く、息を吐きだした。
地面に身体を落とし、さらに咳き込む。

「がはっ！……か、ふっ」

どろりとした血液をはき出して、その鉄くさい味に眉をしかめる。
内蔵を傷つけたか、肋骨がどこかに刺さったか。
そんなことを考える余裕があることに、奈津は内心苦笑した。

「ヒーローは、諦め、ないっ」

痛みを振り払い、立ち上がる。
その瞳は揺らがない。揺るぐことがない程に、信頼されていたことを自覚したからだ。

「僕は、ヒーローになりたい」

満身創痍といった様子の奈津を、邪霊は警戒してにじり寄るに止まっている。

「悪の組織に改造された身体を、正義のために使う“ヒーロー”」

邪霊に拐かされて、要りもしない能力を植え付けられた。
その事から、家族は彼女に憐憫の感情を与え続けた。
ヒーローになりたいという彼女の夢を、憐憫の込められた目で、侮蔑した。

「僕は、そんなヒーローに」

何度も挫けそうになった。
化け物とも呼ばれた。
諦めかけたし、弱音も吐いた。

それでも――――信じてくれる、最高の“友”ができた。

「ヒーローに――なるんだっ！！」

大きく目を開く。

すると、バイザー越しでも解る程強く、奈津の瞳が紫色に輝いた。

右足を踏み出す。
――風が、吹く。
左足を踏み込む。
――風が、啼く。
更に右足を踏み込み左足を踏み出し右足で大地を蹴る。
――すると、風が止んで、音が消えた。

奈津が邪霊に植え付けられた能力は――“超越者―≪ハイブリッド≫”。
人間の限界を遙かに超えた、超身体能力だった。

まっすぐと、上空まで飛び上がる。
八メートル程の高さまで飛び上がると、身体が軋んで痛みが走る。
唇の間から零れ出す血液。その赤を吐き出すと、大気の壁を蹴りつけた。

自身を砲弾にした、超高速の突進。
その最中に体勢を変えて、スライムに右足を向ける。
左足は曲げて、歯を食いしばる。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に烈風の加護を授けん】」

風が奈津の右足に集まり、突撃槍を象った。
貫通力を強化された力が、飛んでくる触手すら切り裂いて直進する。

「穿てッ！これが“正義”の力だッ！！！！」
――ズドンッッッ！！！

邪霊の心臓を穿ち貫き、勢い余って地面に巨大なクレーターを作る。

『ログァァァァァァァァァァ！！！！』

断末魔の悲鳴を上げて崩れ去る邪霊に背を向けて、奈津は震える手で決めポーズを作った。

「正義は――――勝つ」

それだけ言うと、奈津は痛みと疲労から、意識を手放した。

†

連続で発射される黒いレーザーを、椿は円を描くように走りながら避けていく。

埒があかないと解っているから、多少の怪我は覚悟して、紙一重で避けながら近づいていく。戦鎧を切り裂く威力だ。まともに喰らえ

ば、命はない。

それでも、タイムラグがほとんど発生しないレーザーから避けるには、こうするしかなかった。近づかなくても、どのみち勝つことは出来ない。

「どうして、どうしてこんなことを！？」

問いかけずには、いられなかった。

聞いても何も出来ないだろう。でも、だからと諦めて聞かないのは、嫌だった。

「はっ――答えるとでも思ったのかい？平和な頭だねッ！」

更に連射速度が上がる。

それを身体に掠めて血を流しながらも、椿は折れることなく慎二郎の目を見つめた。

「くふっ……いいよ、それなら教えてあげるよ――私の、絶望を！」

それでも、弾幕は止まない。

ただ避けることしかできない。大胆に近づく、決心がつかない。

「私の家――三上院は、よくある名門の一つだった」

ぞくり、と背筋が粟立つような感覚に、椿は身を屈めた。

すると、レーザーが横に振られて、薙ぎ払われる。もう少し遅かったら、首と胴が泣き別れをしていただろう。

「家の名誉と体面ばかり気にする大人達は、私に“長男”としてな

んでも出来るように、跡継ぎとして有能であれと、実の子供に対してではなく道具に対するような態度で、厳しく育てた。全ては、三上院のために」

レーザーと薙ぎ払い。
両手を使って同時に使用されると、椿はますます近づくことが出来なくなった。

「私も、子供ながらに期待に応えようと必死だったよ。――その努力が、いかに無駄なことかなど、知る由もなかったからね」

薙ぎ払いが止まる。
今度は、通常のレーザーよりもずっと太いレーザーが、椿を襲う。
だが、少し速度が遅くなっていたので炎刃で斬り払う。

「私が六つを数えた時に、弟が生まれた」

斬り払ったはいいが、衝撃に体勢を崩す。
その隙に放たれた通常のレーザーを、辛うじて避けた。

「跡取り用の長男には厳しく接して、愛玩用の次男には優しく接する。私は愛など受けたことは、一度もなかった――だけど、それでも構わないと思っていた」

通常の高速レーザーと、太い高威力レーザーの連携に、椿は圧倒されていた。

「私は長男だ。長男として、跡取りとして、次男を守るべきだと思っていた。自分に懐いてくれた、弟を、守ればいいと思っていた！」

太いレーザーと慎二郎の視線が重なる一瞬に、椿はレーザーの下を通り抜けながら接近した。慎二郎は、空中から黒い靄を生み出すと、それを腕に纏わせた。

「だが、奴らはっ――弟の方が高い才能を持つといって、私を切り捨てた！」

振るわれた腕を受けようとしたが、嫌な予感がして避ける。
すると、アスファルトに大きな亀裂が生まれた。

「体面ばかりを気にして、弟と――慎二郎と、私の名前を入れ替えた！」

レーザーと腕の間合いの中間まで、身を退く。
慎二郎は、大きく手を広げて、怒りに満ちた表情で、笑って見せた。

「私は――――“俺”は、この世界がっ……魔法使いが憎いんだよォッ！」

咆吼と共に衝撃波が生まれる。
椿は避けることなく、手をかざした。

「【四元素が一柱を司る・炎燐を纏う槍の火蜥蜴よ・我が身を・その炎で覆い護れ】」

炎の結界が生まれて、咆吼を防ぎきる。
慎二郎は、変わらずそこに佇んでいた。
その姿には、さきほどまでの怒りは見えない――。

「だから、俺は契約したのさ。やつらを見返す力が欲しかった」

「力を手に入れて――一体、何を？」
「くはっ……やつらの大事な体面も名誉も伝統も格式も――全て喰らって、焼き尽くしたのさ」
――代わりに、そこには歪んだ狂気があった。
「俺は三上院の正式な跡取りとなり、最後の一人になった！そして、魔人となった俺が居ることで、三上院の歴史は泥にまみれる！――素晴らしい、復讐だろう？」
高笑いをあげる。
その声に、椿は顔を上げて、力強く睨み付けた。
「――どうした？神崎君？まさか私に、暴力の権利を問うか？」
「っ……誰にも、誰かを傷つけていい権利なんかありません。先生」
それでもまっすぐと目を見る椿に、慎二郎は心底おかしそうに笑いだした。
「くっははははっ」
そして、淀んだ目で椿を見る。
その中に浮かぶのは、憎悪と憤怒と――――“憐憫”だった。
「傷つけられた俺には、傷つける権利があるッ！それは――」
慎二郎は、黒い靄を剣の形に変えると、それを振りかぶった。
椿の炎刃と衝突すると、暗い虹と成って残滓が散る。
「それは貴様も“同じ”だろう！神崎椿！」

「なに、がっ！」

打ち合う度に、押される。
それは、純粋な腕力か、膨大な魔力か、身に纏う狂気か。

「邪霊に襲われて、“全て終わった後に”助け出されて、世間は君をどう見た？――俺は知っているぞ！神崎！」

大きな一撃で、弾かれるように下がった。
慎二郎はそこから動かずに、言葉を続けた。

「邪霊がやったなどと、証拠もない、“有りもしない”ことを言う、狂った子供ッ！」

当時の状況が、椿の中に蘇る。
実家に勘当されていた父親と、天涯孤独の母親。
その親族である宗一と牡丹が見つかり、引き取られるまでのたった一日。
――その間に、手の終えないところまで広がった、噂。

「親殺しの――“化け物”だと！」

いつしか椿は、周囲の全てから、化け物と呼ばれていた。

「――君には、“権利”がある」

静まりかえった屋上に、慎二郎の声が響く。

「君を傷つけた人間達に、復讐をする権利が――」
「――私はッ！」

力強く声をあげた椿を、慎二郎はきょとんと見た。
なぜ受け入れないのかという、純粋な疑問だった。

「他の人が、なんというおうと」

それでも、そんな周囲の目をはね除けてくれた人がいた。
宗一と牡丹は、疑うことなく、椿は人間だと――自分たちの孫だと、受け入れた。

「私は、私が愛されていたことを知っている」

死んでいった両親は、椿に無償の愛を注いでくれた。

「私は、私を愛してくれる人が――愛してくれている人がいることを、知っている」

椿を迎えてくれた、優しい祖父母。
学校で始めに言葉を交して、親友になった奈津。
それから言葉を交すようになって、かけがえのない友達になったレイアとラミネージュ。
応龍杯がきっかけになり、友達になったフランチェリカ、ルナミネス、明里。
それから知り合い、交友を結ぶことが出来たミアや、事件で知り合った梓。

沢山の優しい人に支えられて、椿は今ここにいる。
信じられる――信じてくれる、友達がいる。

愛されることも、愛することも。

憎まれることも――憎む、ことも。
すべてその十五年の生で、椿は体験し、実感してきた。
「人を憎めば、憎しみは広がる」
声が、響く。
薄っぺらい言葉なんかじゃない。
経験の一言で片付けられるものでも、ない。
「広がった憎しみは、愛した人を傷つける」
心に直接響き渡らせる、快不快を通り越した、なにか。
言葉に力を持たせる、人の心を掴み取る、カリスマ。
「私は“傷つけたくない”――――愛した人を、守りたいから」
魔力だけの圧倒ではない。
言葉だけの威圧ではない。
二つが合わさっただけの、言霊でも、ない。
「貴方には、いなかったんですか？」
本当に？と問う、言葉。
記憶を掘り返す、残酷な、ことば。
「貴方を、愛してくれる人が」
慎二郎は、自分の唇が震えていることに、気がつかない。
退くことも進むことも、逃げることも遮ることも。

許されることなく、暴かれる。

「貴方を――――“許して”くれる人が……！」

――ごめんね、“兄さん”

言葉と重なって響くのは、全て焼き尽くした後、最後の最後まで“なぜか”殺さなかった、弟の言葉。泣きそうな顔で、ただ自分を“許す”、弟の言葉――。

「黙れ」

――僕は

「黙れ、黙れ」

――僕は、兄さんのこと

「黙れ、黙れ、黙れッ」

――大好きだよ

腕に纏わせた、黒い靄を凝縮させて、殴りかかる。

椿はそれを真正面から受け止めて、弾いて見せた。

圧倒しているのは、椿だった。精神も、肉体も、魔力も、すべてにおいて、椿が圧倒していた。

「俺は、俺は――――俺はもう、戻れはしないんだぁッ！！！」

――願うことなら、兄さんと、一緒に……

慟哭。

嘆きと後悔と、捨て去ったものに目を背けることしかできなかった、人生の贖罪。

激しい感情をそのまま力にして、椿に振るう。だが、その目に映しているのは、椿ではなく――――過ぎ去った、過去だった。

「今からでも、遅くなんかない！」

縦に振るった炎刃が、大きく慎二郎を弾く。
慎二郎は体勢を崩しながら、屋上の縁まで吹き飛んだ。

「今、誰も貴方を許してくれないのなら、私が許します！足らないかもしれないけれど、貴方の一歩を手伝います！」

息を荒げながら、慎二郎は襲いかかることなく佇んでいた。
俯いていて、その表情は伺えない。

「誰も貴方を愛さないのなら！――私が」
「その先は、俺にはもったいないよ」

一瞬、呟かれた、優しい声。
弟を守りたいと、努力を重ねてきた、兄の声。

そして、椿は――――目を見開いた。

「先、生？」

指先から徐々に、灰に変わっていく。
今にも崩れてしまいそうなのに、その顔には優しい笑みが浮かべられていた。

「強い力を求めた、代償だよ」

それでも、心で負けて無用の長物になった、と乾いた笑みを零す。
だが、その表情に、悔いはない。

「――まったく、もっと早く、君のような人に、出逢いたかったよ」
「先生！」

ゆっくりと、屋上から身を投げ出す。
椿はなんとか助けようと、走り寄る。

「まったく――」
「先生――“慎一郎”さん！」
「――かなわないな」

掴み取った手は、灰に変わってすり抜ける。
呼ばれた名に驚いて、すぐに満足した笑顔に変わった。

「おまえのところには、いけないけれど、これで俺も、楽になれるよ――慎二郎」
「慎一郎さんっ！！」

最後に見た椿の顔が、涙に濡れていたことが――慎一郎は、ひどく残念に思えた。

月光の下。
校舎の屋上には、いつまでも椿の慟哭が響いていた――――。

第八話　応龍祭編？　過ぎ去った世界（後書き）

これにて、応龍祭編は終了です。
結構かかってしまいました……。

次の第九話は、扱いとして伏線回収編です。
一つの節目であり、重要なお話になります。

なるべく早くあげたいとは思いますが、少しまた忙しくなりそうです……。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第九話　統べる者　―第一章・完―

意識が、浮上する。
辛く悲しい、暗い場所から、体と心が浮かび上がる。

瞼の裏から感じる、強い光。
それを遮りたくて、右手で目元を覆い隠す。
その動作一つ行うことが、ひどく億劫で。
なぜこんなにも疲れているのか、疑問に思って目を開ける。

腕の向こう側から伸びる、白い光。
その光で、椿は日が昇っていることに気がついた。

一日を始める時は、まず空を見上げる。
そうしはじめたのは何時だったか、思い出すことが出来ずに瞑目した。

「おき、なきゃ」

身体を起こすと、周囲を見る。
馴染みと言っても過言ではない、医務室のベッド。

隣のベッドには、奈津が包帯を巻かれた姿で寝息を立てていた。

他に人はいない。
時間が授業中ならば、いることはできないのだろう。
そう考えて、納得した。

「――慎一郎さん」

気を失ったのか、それとも幼い子供のように、泣き疲れたのか。
覚えている最後の光景は、弟の名を呟いた、一人の男の末路だった。

「終わったの、かな」

小さく、零す。
これで終わったと飲み込めずに、つい声に出してしまった。

頭痛もない。
声も響かない。
だというのに、終わった気がしない。

枕元を見ると、戦鎧の指輪と、一枚の手紙が置いてあった。
指輪を左手に嵌めて、手紙を開く。

だが、その手紙にはなにも書かれていなかった。
そして、手紙を見た瞬間、椿は再び大きな頭痛に襲われた。

「くぅっ！？」

痛む頭を左手で抱える。
どうしても行かなくてはならない。
行って、終わらさなければ、ならない。

椿はふらふらと立ち上がると、戦鎧を装着した。
身に纏うものは病人服だけったので、すぐに着替えられる戦鎧を纏ったのだ。

医務室を出て、校舎の裏側に回り込む。
そして、校舎を背に向けて、歩き出した。
方角を知っている訳ではない。ただ、直感に従って、ゆっくりと歩き始めた。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

鬱蒼とした森を抜けると、空けた場所に出た。
障害物のない、広い草原。学校の敷地内なのかも怪しい、校舎からずいぶんと離れた場所だった。
その草原の中央に立つ、人影。

黒い髪の男性が、椿に背を向けて立っていた。

「待っていたよ、神崎さん」

聞き覚えのある声。

だが、その声の主であろう男性と、口調が違っていた。

「あなた、は」

一声発する度に、頭痛が椿を襲う。

その痛みに眉をしかめながらも、声を出して問わなければ、いられなかった。

「なんで、先生が？」

口調が、態度が、雰囲気が。

全て違っていても、それは間違いなく――。

「もう――解っているんじゃないのかい？」

ゆっくりと、振り向く。

どんどんひどくなる頭痛に膝をつきそうになりながらも、確信を込めて名を呼ぶ。

「遠峰、先生」

「あぁ、そうだよ――――神崎椿」

強い風が、二人の間を吹き抜ける。

愉快げな笑みを浮かべる、男性――遠峰雅人は、どこか優しげな口調で、そういった。

「どうしてですか？どうして、先生が」
「“自分を呼んだのか？”――かな？」

頭痛と、声。
反響してくる声が、だんだんと雅人のものへ変わっていく。
椿をずっと誘導していたのは、他ならぬ雅人だった。

「いいよ、ここまで来ることができたご褒美だ。自分語りは趣味じゃないけど、教えてあげるよ。何が聞きたいんだい？」

テストで良い点を取った生徒を褒めるような、労りの声。
ここまで、というのは、今日この日まで“生きて”という意味だった。
それは、これまでの全てが雅人の差し金だったという、証明だった。

「何時から、なんですか」

何時からこうして、邪霊の側に着いたのか？

「うん？――――あぁ、そうだね。ちゃんと名乗っていなかった」

だが、雅人から返ってきたのは、そんな言葉だった。

「改めて、私の名は“心絶”――邪霊王“心絶”≪ロードアウト≫」
「邪霊、王」

その答えに、息を呑んだ。
椿は、雅人が“魔人”だったのだと考えて、何時からと聞いた。

だが、最初からだったのだ。全て、彼の手の中で起こった、ことだった。

銀色に光る目。
黒だったはずのその瞳は、白銀の魔眼へと変貌していた。
その双眸の奥に映る“遮断の紋章”に、椿は息を呑んだ。
――冷静に考えれば、わかることだった。

「貴方が――――慎一郎さんの？」
「へぇ――？名前で呼ぶ程親しくなっていたんだ。そう……彼と契約したのは、私だよ」

背筋が凍るような、酷薄な笑み。
その中に存在するのは、嘲りか、侮蔑か――それは、今は亡き慎一郎を見下す目だった。

「もっともっとと望むから、大きな力をあげたのに――あんな粗末な使い方をされるとは思わなかったよ。なりふり構わなければ、もっと多くを殺せたのに」

それは、慎一郎に残った良心だったのか。
彼は、スライム以外の手段――魔人としての能力――で他者を傷つけようとはしなかった。
弟に対する負い目が、どこかにあったのかもしれない。けれど、そこまでして人を傷つけはしなかったという事実が、椿は少しだけ嬉しかった。

慎一郎に言った慎二郎の言葉が、僅かでも彼の心を満たしていた。
そう考えると、場違いだと解っていても、頬が緩んだ。

「さて、他には何が聞きたい？」
「他に……」
椿が言葉に詰まると、雅人かおかしそうに笑った。
「そうだね、それなら私から話してあげよう」
雅人はそういうと、手を広げて語り出す。
「まずは――明津先生、かな？」
椿は、はっと顔を上げた。
何を聞きたいと言うことなど、決まっていた。
呼び出してどうするのか？――そんなことは、聞く必要はないだろうと思っていた。
焦って聞いても答えてはくれないだろう。喚び出した理由など、すぐに解るのだから。
だが、雅人が言って気がついた。不自然なことなど、今までにいくらでもあったのだ。
「彼女は優秀な魔法使いだよ。それでも、流石に不意打ちには対応できなかったようだけどね。事をあの時、荒らげる訳にもいかなかったから」
邪霊の気配がする訳でもないのに、気を張り続けることは出来ない。
邪霊が出現したらすぐわかるという、優れた校舎の結界による感知を、信用しすぎた結果だった。
「教室での戦闘も、あれでせめて身動きくらいは封じられるかと思ったんだけど――君たちが案外早く逃げ出すから、焦ったよ」

「じゃあ、あの時階段を崩したのは――」

走ってきた椿と奈津に気がつかれないように、階段を崩す。
逃げ場を封じられて、結局ぎりぎりの戦闘になった。

「おかげで面白いものが見られたから、それはいいけどね」
「面白いもの？」

雅人は、ただ笑みを浮かべるだけで、答えない。

「蛇を連れて来たのは――」
「――そう、私だよ」

次の疑問に切り替えようと、椿が問う。
すると、雅人はやはり笑いながら答える。
その顔に貼り付けられた笑みには、大きな“期待”の色が混じっていた。

「連れ去られた生徒達も、私が呼び出した。自分で記憶をいじったんだ、都合の良いようにいじりなおすくらい、問題ないよ」

肩を竦める雅人を、椿は険しい目で睨んだ。
連れ去られた生徒は、未だに後遺症を引きずっている人もいる。
黒沢梓の椿に対する態度には、少ないとはいえ事件の後遺症があった。

そんな椿の視線を意にもとめず、雅人は続けた。

「校舎に邪霊の仕込みをしたのは、私と魔人だけど、最後の仕込みは私がやったよ。あんなところで消耗されそうになるから、焦って

介入してしまったけれどね。それではつまらない」

失敗した――そう呟くその姿には、気にしている様子など、どこにも見あたらなかった。

それもそうだろう、何せ彼は――今日まで誰に知られることもなく、教師をしていたのだから。

「さて――そろそろ始めよう」

雅人はそういうと、椿に指先を向けた。

椿はそれに嫌なものを感じて、左に飛んだ。

「見せて貰うよ――――【ラインアウト】」

雅人が一言呟くと、椿が先ほどまで立っていた場所に、黒い半透明の壁が縦に“出現”した。

その場にいれば、真っ二つになっていただろう。

「くっ……っ」

身体を覆う倦怠感に耐えながら、装霊器に魔力を流そうとして、気がついた。

椿は今、装霊器を装着していない。

「【ラインアウト】」

連続で出現する壁を、危ういところで躱していく。

だが、装霊器が無ければ、魔法使いなど少し運動が出来る一般人と変わらない。

微弱な魔力を用いた、僅かな肉体強化が出来ないことはないが、そ

れも本格的に鍛えている人には、遠く及ばない。

「どうした？君はそんなものではないだろう？――【ウォールアウト】」

雅人は前に出現した黒い半透明の壁の、面を椿に向けて発射させた。椿は、魔法のない自分に何を求めているか解らず、ただその避けられない攻撃に対して、手をクロスさせることで防御をするしかなかった。

「あうっ！」

強く打ち付けられて、身体が浮く。

草原に背中を打って、バウンドし、更に身体の前面を地面に叩きつけられて俯せになった。

「つ、ぅ」

そんな椿に向ける雅人の目は、侮蔑でも嘲笑でもない――ただ純粋な“期待”だった。

その目の理由がわからず、椿は身体を起こそうと腕を立てながら、困惑していた。

「私は邪霊だ。邪霊王という存在だ」

できの悪い生徒にヒントを出す教師のように、雅人は言葉を紡いでいく。

「同族か否か、それくらいは解る」

そのことが、何に繋がるのか。
解らない以上、椿は耳を傾けるしかなかった。

「君は、邪霊ではない。また、魔人でもないし向こう側の子供でもない」

何を言っているか解らず、ただ言葉を聞く。
だが、その言葉は、長く求めていながら、思い出したくない封印の鍵のように思えた。

「では、なぜ――邪霊に襲われた君が、こうして生きている？」
「え――？」

椿は、“焼け跡”から助け出された。
火事に巻き込まれて、両親を殺されて、椿はなぜ無事だったのか？
なぜ――こうして生き残っているのか。

「思い出させないのなら、手伝おう」

雅人はそう言って、椿に近づいた。
そして、椿の顎を右手で持ち上げて、銀色の瞳で覗き込んだ。

「君の心の封印を、“遮断”してあげよう――――【ロードアウト】」
「な、にを――？」

銀の瞳が、怪しく輝く。
その瞳に呑み込まれるように、椿の意識が、暗転した。

†

パチパチと木材の焼ける匂いに、眉をしかめる。
自分はなぜこんなところにいるのだろうと首をかしげ、目の前で邪霊にむさぼられている“両親だったもの”をみて、唐突に“思い出した”。

自分は両親を助けるために、炎に包まれた家に飛び込んだのだ。

『兄者、弟……コウいう時ハ――いたダキまスというんダ』

真ん中の頭が、椿をみてにたりと笑った。

「あ、う」

身体が竦む。
足が棒のようになって動くことが出来ない。
そんな椿を現実に戻したのは、椿の足下に転がってきた、銀のリングだった。

両親の――宝物、だった。

「お父さん、お母さん」

涙で目の前が歪む。

顔を上げて見た先には、飛びかかるために姿勢を低くした、三頭の悪魔。

「許さない――絶対に、許さない」

その瞳に浮かぶのは、憎悪でも憤怒でも哀愁でもない。

ただ純粋に溢れ出た、無垢な殺意だった。

その目の宿す色に気がつかず――気にする必要もなく――邪霊は椿に飛びかかった。

椿はそんな邪霊に、本能から右手を差し出した。

――ドンッ

『グアッ？！』

邪霊が、吹き飛ぶ。

椿の腕に集まるのは、周囲の炎だった。

炎にまつわる精霊の力だろう。境界鏡を持ち要らずに召喚したためか、名もない精霊が意志も保てずに浮かんでいた。

椿はその精霊を――ただ勝手に動く身体に従って……握りつぶした。

名もない精霊が、椿の身体に取り込まれる。椿は、これで自分が“炎を操る”ことができるようになったと、自然に理解した。

「集え」

たったの一言、
それだけで、振り上げた手の先に、家屋に灯っていた全ての炎が凝縮された。

『なンだ、貴様は、イッたイ、何者だッ！』

真ん中の頭が、声を上げた。
だがそんな言葉が、椿の届くことはなかった。
ただ殺意と本能のみで動く椿には、周囲の音は入ってこなかった。

『おォぉォオおオぉォォッッッ！！！』

本能的な恐怖を押し殺して、邪霊は再び椿に襲いかかった。
椿は集めた炎を右手に宿すと、手刀を象った。
そしてそれを——カウンターで、邪霊の心臓に突き刺した。

ぬるりとした、邪霊の中。
紫色の鮮血が飛び散るが、椿にかかる前にその高熱で蒸発する。

そして、突き刺さったまま、邪霊は塵となって消えた。
椿はふらふらと歩いて、二つのリングを胸にかき抱いた。

そして、自分の身に起こった強烈な出来事に必死で蓋をして——意識を失った。

†

視線が、外れる。
ほんの一瞬の時間に起こった回想の追体験。
一筋の涙がこぼれ落ちて、止まった。

「さて、何か思い出せたかな？」

雅人はそういうと、椿から距離をとった。
そして、再び指先を向けた。

「実践授業の二回目だ。さぁ、続けよう――【ラインアウト】」

黒い半透明の壁。
遮断の壁を、椿は無感情に見つめた。
感情を殺していた――蘇った、激情を、必死で押し殺していた。

「私、は――」

その溢れる感情を、激情を、椿は――。

「それでも、私は」
――私を、愛してくれている人が、いる。
顔を上げる。
その瞳に映る意志の名は――決意。
こんなところで挫ける訳にはいかない。
こんなところで折れる訳にはいかない。
――あんな悲しい思いをするのは。
「私だけで、十分だ」
――呑み込む。
自分のように、邪霊によって親を亡くし、理不尽な憎悪を向けられる。
そんな子供を見たくないから、そんな子供に手を差しのばしたいから。
椿は、魔法使いを目指した。
大好きな祖父母のように、“愛”をもたらす者に、なりたかったから。
魔力を通すのは、装霊器ではない。
自身の身体に魔力が宿り、真紅のヴェールが椿を包む。
自然に強化された肉体で、壁を避けた。
そして、右腕を大きく弓なりに引いた。
「【三槍・響炎】」
頭に浮かんだ詠唱を、そのまま紡ぎ出す。

不自然な程空間に響いた詠唱が、“現実”から“幻想”を生み出した。

「は、ははははっ！」

「穿ち抜け」

炎の槍が、三本浮かぶ。椿は、右腕の周囲に浮かぶ槍を、その手ごと突き出した。

椿の胸、鎖骨の間より少し下に、戦鎧越しでもわかるほど強く光る、紋章が現われた。

三叉の槍に翼を生やした、紋章。それは、三頭の悪魔のものだった。

放たれた三本の槍は、ばらばらの軌道で雅人を襲う。

一つの意志（肉体）の下に別々の思考（感情）で動く。それが、三頭の悪魔の特徴だった。

その特徴に忠実に、三本の槍は雅人を貫くという統一された意志の元、別々の方向から雅人を襲う。

「私はずっと、疑問だった。力の持たない少女が、どうやって邪霊を退けたのか……！」

雅人は、壁を使って槍を防ぐ、

防御に特化した雅人相手に、完全な自動追尾とはいえ威力の少ないもので対抗するのは、難しかった。

「でも、そう、そうだ！それなんだよ！神崎椿！」

それでも消滅することなく襲い続ける、炎の槍。

椿はその隙に距離を詰める。

「精霊にも邪霊にも“人間”にも属さない、突然変異の“化け物”！！」

手を広げて、笑い声を上げる。
椿はその言葉に動揺を見せることなく、左手をあげた。
その左手の側面に追従するように現われるのは、真紅のバスターソード。
炎の槍が消えて、同時に紋章も消える。その代わりに現われたのは、剣の紋章だった。

「【魔剣・真紅】」
「――――“神霊者―≪エレメントロード≫”！！」

柄を握る必要はない。
左腕の動きに追従して、魔剣も動く。
左腕を突き出すと、魔剣が雅人に襲いかかった。

「【ウォールアウト】」

壁が出現する。
遮断の壁は、防ぐという能力ではない。
向こう側とこちら側を壁を用いて“遮断”する能力だ。

記憶の遮断、気配の遮断、物理魔力の遮断。
文字どおり遮り断つ壁というこの能力は、物理的、魔力的手段を用いて破ることが出来ない。範囲や膨大な魔力の使用が必要など誓約はあるが、それでも強大な力だった。

だが――――それも、椿の“能力”の前では、その限りではない。

魔剣が壁に衝突する。
すると、剣の先から広がるように、壁に亀裂が入った。

「クッ……“吸収”か！」

精霊、邪霊に関わらず吸収する神霊者の能力により、絶対防御の壁に亀裂が入った。
衝突した部分から力が吸収されて、“割れる”という現象と共に消滅したのだ。
そう、高位の邪霊である傀儡の魔剣を、ただの一撃で砕いた時のように。

雅人は椿から距離をとる。
椿は、使えば使う程削られていく魔力により、身体が悲鳴を上げていた。
だが、それを表情には出すまいと、毅然に雅人を見ていた。

「貴方は、何故、私を？」

時間稼ぎだ。
雅人はすぐに意図に気がついてしまうだろう。
だが、それだけではない。確かに聞きたいことだったのだ。

「私はね、“見たい”のだよ。神崎椿」

憂いを帯びた表情に、椿は声を無くした。
今までのものとは違う、哀愁の声。

「全ての存在と敵対しなければならないという、世界の摂理から外れた歪んだ存在」

弱肉強食。それは、自然界における食物連鎖の法則。
その頂点に立つものも、いずれは世界に溶け込み、世界の要素の一つと成る。

「――邪霊という歪な存在の行く末が」

だが、邪霊は敵対することしかできない。
精霊にも、人間にも、自然にも――世界にも。

「君は、全ての種族に対する“鍵”だ」

雅人の目が、ぎらぎらとした光を放つ。
憂いを呑み込み怒りを食い散らかした、欲望の目。

「生きとし生ける全ての存在が、神へ問う未来への“答え――≪アンサー≫”」

耐えきれないように、離れた位置に立つ椿へ手を伸ばす。
椿は、その手に呑み込まれてしまうような、錯覚を覚えた。

「得たものを、創造主へ繋げる“天使の証――≪エンジェルハイロゥ≫”」

口元が歪む。
望んだものが、望み続けたものが、目の前にあるという“歓喜”が、雅人を包む。

「それが君だ――――神崎椿」

全てを統べる力を持つ。
その意味は、全てから外れていながら全てと同じで、全てより上位に立つということだ。

「望み、契約を交せ」

一歩進む。
椿は呼吸すら忘れて佇んでいた。

「君が望めば、全てが手に入る」

一歩進む。
息を呑んで、呼吸を知る。

「君が望んだ、全てを手に入れられる」

一歩進む。
流れ落ちた汗が、乾いた唇を通る。

「さぁ、この手を取れ、神崎椿」

一歩進む。
手の届く距離まで、いつの間に移動したのかわからなかった。
雅人の身体が、妙に大きく見えた。

「君は――――“創造主”を継ぐ者となるんだ」

差し出された、手。
邪霊王との、“神霊者”としての契約。
それは、大きなデメリットをもたらすものではない。

精霊の契約と変わらない。ならば、この手を取って、何の問題がある？

頭の中で響く声。

椿は、ゆっくりと手を伸ばして――。

――パンッ

その手を、振り払った。

「何故だ――何故だ、神崎椿！」

「私は、みんなを裏切れない」

邪霊と契約を交す。

それは、大切な人達と、大事な思いへの裏切りだ。

「私は、みんなを裏切りたくない」

契約した先にあるのは、何か？

それは、自分が世界の“敵”として君臨して、大きな混乱と悲しみを生み出すと言うことだ。

神霊者だからと、力があると思い上がっている訳ではない。だが、欺き続けてきた雅人と契約をして事を進めてしまったら、小さくない混乱が起きるのは、確かだった。

「私は、“支配”したい訳じゃない」

「なにを――君は、“支配”する者だろう！？」

雅人の慟哭を、椿は真正面から受け止めて――跳ね返した。

「私は――“共に歩く者”になりたいんだ！」

紋章が、更に強く輝いた。
名も無き炎の精霊が、同一化した椿の身体を炎で包む。
胸に宿る紋章は、真ん中に線の入った「Ⅴ」の字だった。

「ちっ……【ラインアウト】！」

放たれた壁に拳を打ち付けて、強引に逸らす。
掠ったのか、左腕から鮮血が散る。

「はぁぁぁぁぁっ！！！！！」
――ドンッ！

魔力が炎に変わり、炎が爆発に変わる。
真紅の魔力と炎の赤と、鮮やかな鮮血。
三種の赤が尾を引くように、鮮やかな軌跡を残す。

爆発的な加速。
雅人は、両手をかざして壁を出した。

「【ウォールアウト】！」

その身に宿る力が、吸収だというのなら。
全てを奪って砕け、と、椿は右腕にありったけの魔力を込めた。

「おぉぉぉぉぉおっ！！！！！」
「はぁぁぁぁぁあっ！！！！！」

亀裂が入る。
入った亀裂から罅が広がる。
そして、ついに、右腕が壁を貫いた。

「私の勝ちの、ようだな――」
「お願い――来て！」

そこで止まってしまった右腕に、雅人は侮蔑を込めて言い放つ。
だが椿は、諦めることなく声を上げる。

「なにを……」
「――アレク！」

椿の右腕。
その手のひらの中に、赤い精霊石が、真紅の光と共に召喚された。
契約を交していない精霊を、境界鏡なしで呼び出すことが出来る、神霊者の特性の一つ。
それは、契約を交した精霊ならば、遠くにある精霊石を喚び出すことすら、可能だった。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」
――ズドンッ
「が、ぁッ！？」

右腕から伸びた炎の刃が、雅人の心臓を貫いた。
装霊器すら必要ない、その特性。
通常よりも何倍もの魔力を消費しなければならないが、同じ詠唱で、タイムラグもなく放つことが出来る。

「私の、負けか」
「貴方の負けです――雅人さん」
最後まで“人間”としての名を呼ぶ椿に、雅人は苦笑した。
「最後に、忠告だ」
炎の刃が消えると、雅人は胸を押さえて、よろよろと下がった。
その手も、もう塵に変わろうとしていた。
「その力は、隠せ。人間、は、生き、物、は、異端を、嫌う」
そんなことは、椿だって解っている。
邪霊を吸収し、邪霊王を単身で滅ぼす。
そんな存在は、知られるだけで他者を歪ませる。
椿はそのことを、その意味を、その苦しみを――知っていた。
「あぁ、残念だ」
雅人は、上を向いて呟いた。
晴天の太陽が、爛々と輝いている、空。
その空を見上げながら、雅人は目を細めた。
「見たかった、なぁ」
風が吹く。
その強い風に、塵となった雅人の身体が、蒼天に呑み込まれた。
椿は、崩れるように倒れる。
過剰な魔力酷使が身体を焼き、大量の血を吐いた。

「あっ、くぅ……ごほっ！」

焼けるように熱い身体と、引き裂けるように痛む胸。

痛みから声すら上げられず、ただただ涙を流す。

その激痛に耐えきることが出来ず――椿は、眠るように気を失った。

†

あれから、医務室に運ばれて、三日三晩生死の境をさまよい、目が覚めた時には宗一と牡丹含めた友人知人全員に泣かれた。

椿は、邪霊の残りを見つけて、つい追ってしまったと説明した。

非道い怪我だったのは、装霊器も持たずに精霊石だけ持って戦うという無謀な真似をしたからだろう。楓達もそう納得すると、椿が思っていたよりもずっと早く、介抱された。

遅れを取り戻すように勉強をして。
それと同じくらい、奈津達と言葉を交し、期末試験も乗り越えた。

雅人は、失踪という扱いになっていた。
そのことで、助けてくれたのにと落ち込む奈津を、椿は慰めることしか、できなかった。

そして――今日は、終業式だ。

体育館に集まり、終業式を行う。
節目の行事は学校らしく体育館で。
それは、学院長である蓮の、こだわりという名の方針だった。

「はぁー……なんだか、すっごく長かった気がするよ」
「うん、そうだね」

今はまだ、式の途中だ。
特に聞く必要もない蓮の長話の間、二人は小声で会話をしていた。

「もう、あとは卒業まで、“普通”がいいなぁ」
「あはは、うん。私も、普通が良い」

なんとなく叶わないような気がしながらも、椿は希望を込めて呟いた。
やけに巻き込まれる、おかげで、椿と奈津のクラウンは黄色――レベル４だった。
一般校なら、卒業できてしまう称号は、正直椿たちには重かった。

『それでは、よい夏休みを！』

蓮の声と共に、式が終わる。
椿は奈津と連れたって、校舎を出た。

空の色は変わらない。
最初の日と同じ、蒼。

その心地よい光と風に、椿は一時、全てに身を任せて微笑んだ――。

第九話　統べる者　―第一章・完―（後書き）

これにて、第一章は完結です。
この後、夏休みを挟んでから第二章（二学期）に移ります。

この章で語らなかったこと、語れなかったことも、後の章にて。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございました。
次回、次章も、よろしくお願いします。

第十話　絶海バカンス！

燦々と輝く太陽。
吹き抜ける風。
どこまでも続く蒼。

水平線の先に目を向けて、椿は風を思い切り吸い込んだ。

「……っはぁ……良い風」

大きく手を広げて、タイタニックごっこをしてみる。
だが、一人でやるのも味気ないし、こんなことに付き合わせるのも恥ずかしい。
椿はそう考えると、一人で納得して頷いた。

妙にテンションが高くなるのは仕方がない。
なにせ、ここは海の上。

そう、ラミネージュの保有する。バスという名のクルーザーの上で、椿は夏を満喫していた。

絶海の孤島。
オールアクセンの保有する島での、バカンスへ行くのだ。

事の始まりは、終業式が終わった翌々日のことだった。
椿たちが、一学期の終了と共に、戦鎧を展開する時に装霊器も一緒に展開されるように設定して貰い、寮に帰る道で歓談していた時のことだ。

「夏休みー♪夏休みー♪楽しい楽しい夏休みー♪」
「音が外れまくっていますわ」
「音痴」
「が、がんばれ！」

なんとなく口ずさんでいただけなのに散々な言われ方をされて、奈津は静かに落ち込んだ。
さりげなく椿が奈津の音痴を否定しなかったのも、ダメージとして加算されていた。

「夏休みかぁ……なにして過ごそうかなぁ」
「エルストルの別荘でも行きます？」
「佐倉もあるよ、別荘」

ブルジョワジーな二人の言葉に、今度は椿が落ち込んだ。
変な見栄を張るつもりはないが、ここで「私も」と言えないことが、少しだけ寂しかった。

「それなら、私のところへ来ると良い」

奈津に一言告げてから、ずっとぼんやりとしていたラミネージュが、漸く口を開いた。
暑いのが苦手なようで、ふらふらとしていた。

「オールアクセンの別荘ですの？」
「うん。バスで行く」

バスという言葉に、椿は五月のリムジンを思い浮かべた。
その時ラミネージュはなんと言っていたか？それを思い出して、椿は顔を引きつらせた。

「絶海のリゾート。海の幸が美味しい」

その言葉に、奈津とレイアも賛同し、椿も願ってもいないと頷いた。
海に島に美味しい料理。おまけに避暑地でのんびりリゾート。

こうして椿たちは、ラミネージュと共に旅行へ行くことに決まったのだ――。

†

クルーザーから正面を見ていると、一際大きな風が吹いた。
その風に体勢を崩しそうになると、それを後ろから支える手があった。

「大丈夫ー？」
「っと、うん。ありがと、奈津」

奈津は椿の右に立つと、見えてきた目的地に指を指した。

「あれじゃない？ラミの別荘」
「すっごーい……」

周囲を海で囲った緑の島。
適度に手入れがされた、絶海の孤島。

個人所有の島など見たことがなかった椿は、感嘆の声を零した。

「そろそろ、中に入って」

後ろからかけられた声に、椿と奈津は頷いた。
クルーザーの中の客室では、すでにレイアが寛いでいた。
レースのドレスと、傍らには白い日傘。近世の貴族のお嬢様のような出で立ちだ。

ラミネージュは白いワンピースで、首に麦わら帽子を引っかけている。
奈津は黒のタンクトップに白い上着、紺のジーパンというボーイッシュな格好で、椿は水色のロングスカートに白いシャツと浅葱色の上着というシンプルな格好だ。

レイアはワイングラスを片手に、窓の外を見ていた。
未成年云々は関係ないのだろうかと椿は首をかしげていた。
奈津やラミネージュも別に気にしていないようだし、案外お嬢様達にとっては普通のことなのかもしれないと、椿は納得していた。

魔法使いは、酒で魔力を充填する家もある。
そのため、そういった一部の酒は普通に飲んでも良いのだが、そうでない酒は当然のことながら禁止されている。

そんなことを知るはずもなく、椿は自己完結した。

「ねぇねぇ、なんでレイアはそんなとこで深窓の令嬢ごっこしてるの？似合わないよ」
「人の立ち姿にいちいち文句をつけないでくださる？」
「え？似合うと思うけど……」

茶化した奈津に、レイアはジト目で反論した。

椿はそんなレイアに、つい感想を言ってしまった。
金髪縦ロールの美少女が、ワイン片手に海を見る。絵になる姿だった。

「あら、ありがとう。椿。誰かさんとは違って見る目がありますわ」
「ぬぬぬ……」

剣呑な視線でにらみ合う。
そこに悪い空気が流れないのは、互いになんだかんだで楽しんでいるからだろう。

「奈津には似合いませんものね」
「いいよー。僕は悪徳貴族に浚われたお姫様一（椿）を助ける、王子様やるから」
「ほう？悪徳貴族……」

椿は何故自分まで寸劇に巻き込まれているのか疑問に思いつつも、奈津の王子様が妙に似合いそうで苦笑いをしていた。ボーイッシュな美少女の男装は、映える。

「椿、到着したよ」
「あ、うん！」

未だに言い合いを続けている奈津とレイアを置いて、先導するラミネージュについて行く。
船着き場にとめられたクルーザーから降りて、椿は島を見た。

「すごい……」

思わず、息を呑む。

透き通った青い海。
緩やかに広がる白い砂浜。
ほどよく手が入れられた南国の森。
その向こうにそびえる、赤い屋根の大きな屋敷。

バカンスを楽しむにはうってつけの、リゾート地が椿たちを迎え入れた。

「おお！結構いいねー」
「あら、割とセンスの良い島を持っているようね。ラミネージュ」
遅れて出てきた奈津とレイアも、感心したようにそう言った。

「まずは屋敷に、荷物を置こう」
「うん、そうだね」

ラミネージュがそう呟いたので、椿はそれに頷いた。
そして、上がっていくテンションに気分を良くしながら、ラミネージュと手を繋いで歩き出した。

†

屋敷の中は、煌びやかな調度品に溢れているという訳ではなかった。だが、作りは繊細で、細かいところにお金がかかった、質素だが上品な高級感が漂っていた。

椿は、あてがわれた個室に入ると、再び感心した。
広いベッドに、水色を基調とした涼しげな内装。
白いカーテンの向こうにはテラスがあって、更にその向こう側には青い海と緑の森が広がっていた。高級ホテルにでも行かなければ見られない、絶景だった。

椿は荷物を置くと、小さなバックに水着を入れて部屋から出る。
まずは泳ぐ。それは、クルーザーの中で立てた計画の、第一段階だ。
計画といっても、ぎちぎちにスケジュールを決めて訳ではなく、なんとなくこうしたい、程度のもだ。こういった旅行は、緩く考えた方が楽しいのだ。

廊下を歩いていると、メイド服姿の女性に遭遇した。
ラミネージュが、沢山人がいることは好きではないため、使用人は最低限。
オールアクセンの使用人二人に料理人二人、外部の漁師が二人という内訳だ。

今日は貸し切りではなくオールアクセンの親族も訪れているが、そちらはまだ、椿は見ていなかった。その人物も、人が多いのは好きではないのだ。

「おや、お嬢様のご友人ですね。お部屋はいかがでしたか？」
「あ、はい。神崎椿です……とても素敵なお部屋でした」

赤茶のセミロングの髪をアップにした、焦げ茶の目の女性だ。
成人はしているという話だが、童顔な為年齢が解らない。

「おや、先に名乗らせてしまいましたね。私は林一里です。以後、お見知りおきをよろしくお願いいたします」
「は、はい！こちらこそ、よろしくお願いします！」

頭を下げる一里に対して、更に深く頭を下げる椿。
その様子に、一里は好意のある笑みを零してから、一礼して仕事に戻っていた。

ラミネージュの部屋に着くと、ノックをする。
すると、丁度用意が出来たのか、外に出てきた。

「ラミはどれくらい泳げるの？」
「少し」
「私も少しだなぁー」

そういって笑いながら、ラミネージュと連れたって奈津達に割り当てられた部屋まで歩いていた。

丁度曲がり角を曲がった時、今度は男性の遭遇した。
銀に近い金色の髪と、鳶色の目。
がしっしりとした体つきに、高い身長と鋭い目。
マフィアと言われれば「やっぱり」と返しそうになる、強面の男性だった。

「あ？――アルトのとこのガキか」
「――伯父様」
アルトとは、ラミネージュの父親の名前だった。
この男性は、ラミネージュの父親の兄に当たる親戚だ。
「は、はじめまして！ラミの友達の、神崎椿です！」
緊張しながら頭を下げる椿には目もくれず、ラミネージュを見て舌打ちをした。
椿は完全に無視されたことに、少しだけ腹を立てて、同じくらい落ち込んでいた。
いきなりこんな厳しい状況になるとは、思っていなかったのだ。
「無表情か――――相変わらず気色の悪いガキだな」
その言葉にラミネージュは反応を返すことなく佇んでいた。
その様子に、男性は苛立たしげに息を吐いた。顔が怖いため仕草の一つ一つが非常に怖い。
そんな、誰が見ても人を殺していそうな顔をした男性の前に、椿が立ちふさがった。
そして、男性の鋭い目を、真正面から睨み付けた。
「訂正してください」
「は？なんだ、てめぇ」
すごむ男性に怯みもせず、椿は続けた。

「ラミは、“気色の悪いガキ”なんかじゃありません。――訂正してください」
「ハッ」
そんな椿の横を、鼻で笑って通り過ぎる。
椿は、ラミネージュが袖を引くのにも構わず、声を上げる。
「逃げるんですか！？」
「ガキが――――類は友を呼ぶってか」
そう言い捨てて去っていく男性に、椿は拳を握って唇を噛んだ。
「私は、大丈夫だから」
ラミネージュの言葉で、我に返る。
そして、怒りから我を失った自分に恥じ入り、身を縮こまらせた。
「ごめんね、ラミの印象も、悪くしちゃったよね」
そういって目を伏せる椿に、ラミネージュは首を振った。
「伯父様は誰に対してもあんな感じだから。それに――――怒ってくれて、嬉しかった」
「ラミ――みんな、迎えに行こうか？」
「うん。――――うん」
椿は気分を切り替えて、今を楽しむために、奈津達を迎えに歩いた。

†

浜辺近くの更衣室で着替えて、海辺に出る。

椿は、タンクトップとミニスカートがセットになった、タンキニという種類の水着で、浅葱色の涼しげなデザインだ。

ラミネージュは白のセパレートタイプで、やや上品な感じだ。

奈津は緑と白のストライプの、ワンピースタイプ。これならば体形が気にならないだろうとぼやく姿が、印象的だった。

レイアはゴージャスにビキニ――とくるかと思いきや、白地に金のラインが入った、ゴージャスな競泳水着を着てきた。思い切り泳ぐことが目的だという。

「綺麗だねー」

「ホントだねー」

感嘆する椿の横で、奈津が感心して頷いた。

「さーて、まずはっ……第二回チキチキビーチバレーダブルスファイッ！！」

奈津がそういって手を振り上げる。
すると、ラミネージュがすっと籤を出した。
その間に一里がどこからか現われてコートを設置し、去っていった。
見事な手際である。

ちなみに、籤は温泉の時に椿が作ったものをラミネージュが保管していたらしく、同じものだ。

その籤を、一番にレイアが引いた。

「あっ！いつの間に！」
「私も」

先を越されておののく奈津をよそに、ラミネージュも続けて引いた。
続いて椿も手を出そうとして、奈津に止められる。

「ど、同時に引こう！椿！」
「え？う、うん」

その雰囲気に圧倒されながら、椿は頷いた。
レイアが青、ラミネージュが赤。まだ決まっていない以上、チャンスはある。
奈津は自分にそう言い聞かせて、籤を掴んだ。

「せーの」
「えいっ」

声を合わせて同時に引く。
これで――チームが決定した。

――奈津&

†

結局三十分ほどぶっ続けで試合をして、奈津とレイアの圧勝で幕を閉じた。
だんだんと、この二人のチームワークが良くなっていた。

ビーチバレーを終えると、海に入る。
椿は足先から感じる心地よい寒気に、笑顔で身を震わせた。

屈んで海水を手にすくって、大きく手を広げるように海水を蒔く。
すると、小さな虹が出来た。椿はその虹に顔を綻ばせると、今度は少し進む。

ラミネージュは砂浜で、砂の城を造っていた。
椿の身長を超えることが予想されるサイズの土台だ。
レイアと奈津は、早速競争に乗り出していた。
奈津のクロールもさることながら、レイアのバタフライも異様に速い。

椿はそんな二人の姿を見ながら、少しずつ前へ進んでいく。
泳ぎ方は、平泳ぎだ。この泳ぎ方が、一番落ち着くのだ。

足が着かないほど進むが、例えおぼれてもすぐに這い上がれる程度の深さまで来て、止めておく。奈津やレイアのように、競争が出来る程得意ではないのだ。

仰向けになって、ぷかぷかと浮かびながら太陽を見る。
太陽という大きな“炎”を見ていると、心なしか胸が痛んだ。
その場所は、紋章の浮かび上がった場所だ。

そんなことを考え始めると、雅人の言葉が頭を巡った。
人は、異なるものを嫌う、臆病な生き物だ。不安な要素を取り除くためならば、どこまでも残虐になることが出来る、生き物だ。

椿の能力が知られたら、世間の目は椿を離してくれなくなるだろう。
化け物と呼ばれるのは辛い。でも、自分のせいで誰かが傷つくことになることの方が、もっと怖かった。

化け物と呼ばれて、それまでの友人達になにも無いなんて、あるはずがない。
椿は見ているのだ。化け物と呼ばれた自分を匿ったことで、大好きな祖父母が、世間からどう見られてきたのか、そんな単純で恐ろしい、黒い感情を見続けてきたのだ。

そんな視線に、奈津達を晒すのは、嫌だった。

「でも――今考えても、仕方ないよね」

椿はそう呟くと、泳ぐことを再開した。

ここへは遊び――バカンス――に来ているのだ。
遊ばなければ、損。

ならば遊び倒してやろうと、椿はその顔に、いつもと変わらぬ笑みを浮かべた。

†

ラミネージュが二メートル程の砂の城を造り終わり、奈津とレイアの決着もついた。
ドローという戦績だが妙に清々しい顔をした二人と、椿とラミネージュはスイカ割りをしてスイカを食べた。

そうして遊び倒すと、空は茜色に染まっていた。

水平線に落ちる朱色の太陽と、同じ色に染まった海。
その様子を感慨深く見つめてから、四人は屋敷に戻った。

屋敷に戻ると、コックが用意してくれた食事を食べる。
刺身や焼き魚といった、純和風の食事だ。屋敷に似合わないことこの上ないが、その味に一同は舌鼓を打った。

「すっごくおいしかったです！」

デザートの水羊羹まで食べ終わると、椿は目を輝かせて控えていた料理人に言った。
コックの川上博人と、パティシエールの御厨美奈子だ。美奈子は既婚者な為名字が違っているが、博人の妹だ。

「そういっていただけると、料理人、冥利に尽きます」
「そうかい、ありがとうよ！嬢ちゃん！」

穏やかな物腰で丁寧に頭を下げる博人と、豪快に言葉を受け取る美奈子。
実に対照的な兄妹だった。

「なにガキと遊んでんだ、博人」

そんな和やかな雰囲気を壊したのは、夕食を取りに食堂に来た、ラミネージュの伯父だった。彼は博人に一言、そう吐き捨てた。その言葉に、博人は怒るどころか笑って答えた。

「あぁ、イストも混ざる？」
「――おまえに言った俺がバカだった」

嫌みではなく、素である。

「美奈子、おまえの天然アニキ、どうにかしろ」

「できるんなら苦労しませんよ」

げんなりとした二人の様子に、日頃からどれだけ博人がずれた発言をしてきたのかが伺えた。そして、付き合わされていると言いつつも関わることを止める様子のない男性――イストの姿に、椿はイストの人柄を修正していた。案外、そこまで悪い人ではないのかもしれない、と。

「こちらにおられましたか！」

微妙な空気を打ち破ったのは、茶色の髪をなでつけた男性だった。執事服を着ていることから、使用人であるということが伺える。

「おや、氏倉さん。どうかしたんですか？」

「い、いえ、実は――」

オールアクセンの使用人である氏倉直道は、ラミネージュ達に一礼すると、イストに小声で要件を告げた。

「あ？……ったく。明日まで待って、話はそれからだ」

「はい……畏まりました」

そう言って去っていく直道の後ろ姿に、椿は言いようのない不安を覚えた。

「どうしたんだろうね、ラミ」

「うん。なんだろう？」

首をかしげるラミネージュの様子は、特に気にしたように見えない。レイアと奈津は全く動ずることなく食後の日本酒を楽しんでいて、

誰も気にした様子がない。

椿は、自分が警戒しすぎているのだろうと、頭を振った。

「ほーらー、椿も一杯っ！」

「あ、うん――――」

それでも不安が拭いきれなかったためか、椿は全く気がつかず、真っ赤になった奈津に差し出された日本酒を、一気飲みにした。

「おぉっ！すごい！」

「なにが――って、お酒！？」

コップ一杯に注がれた日本酒。

割と度数の高いそれを一気飲みにしたことで、顔が熱くなる。

こんなところで未成年四人が酔うのはいくら魔法使いでも止めておいた方が良いだろうと、実は宗一と酒盛りをしたことがある椿は自重していたのだが、つい飲んでしまったのだ。酒盛りと言っても、身体をこわさないように、味だけ覚えておく程度だったため、そんなに量を飲んだこともなかった。

「むむむ、奈津からだけでなく私の酌も受け取りなさいな」

「え、ちょっ――――むぐっ！？」

酌と言いつつ、頬に朱を刺したレイアは、半ば押し込む形で椿の口にに一升瓶からお酒を注いだ。なんとか全部飲んでしまう前に自力で脱出したが、四分の一ほど飲んでしまった。

「――――きゅぅ」

結果、椿は真っ赤な顔で倒れ伏した。

その横で、全く酔わない体質のラミネージュが、伏した椿の様子を見ていた。

急性アルコール中毒を心配したのだが、椿は赤い顔で寝息を立てているだけだった。

「二人とも、あまり飲むと、明日が辛い」

「……それもそうですわね」

「あーうん。やめておこう」

折角の旅行なので、すぐに止める。

言われて止めるだけの理性が残っているのに椿に飲ませてしまったのは、ノリというやつだ。椿が倒れるまで言わないラミネージュもラミネージュだが。

「それにしても、このメンバーは、昔なら想像も出来なかったなぁ」

「中流貴族に大家の双璧、それを纏めるのが庶民出、ということですわね？」

「確かに、そう」

奈津が感慨深そうにそう言うと、レイアとラミネージュも、心なしか楽しそうに、そう言った。奈津は事情が少し違うが、レイアもラミネージュも、学校で気の置けない友人が出来るなど、想像もしていなかった。

「本当に――椿と出会えて、良かった」

わざわざ言葉に出して同意する必要はない。

そんなことは、はじめて一緒に食事をとるようになってから、ずっと思っていたことだ。

もともとそんなに酔っていなかったため、お酒はすぐに抜けた。
素面になって、和やかな雰囲気で博人が煎れてくれたお茶を飲む。
こんなに静かな雰囲気も、久しぶりのことだった。

そろそろ椿を起こそうかという段階になって、椿が起き上がる。

「あれ？もう大丈夫なの？」

奈津が覗き込むと、椿が笑顔で奈津の方に顔を向けた。
その顔が未だに赤かったので、奈津はまだお酒が抜けきっていないのかと心配した。

「いや、大丈夫なの？椿っ！？」

椿は奈津の身体を軽々と持ち上げると、自分の膝の上に乗せて、後ろから抱き締めた。
何が起こっているのか解らず顔を真っ赤にして固まる奈津に、椿は奈津の身体を横にずらして体勢を低くさせて、奈津の頬に頬ずりをし始めた。

「なんっ、なっ、え？な」

呂律が回らない奈津の頭を撫でたり優しく抱き締めたり、とにかく可愛がる。
泣き上戸に笑い上戸、絡み上戸など、人には多種多様の“酔い方”がある。

そして、椿のそれは――“可愛がり上戸”だった。

完全に動かなくなった奈津を存分に可愛がると、そっと奈津を横に降ろす。

一言も声を漏らさず、ずっと笑顔なのが、妙に怖かった。

その光景に固まっていたため身動きのとれなかったラミネージュに、椿は音もなく近づいて捕獲した。そして、やはり膝の上に乗せて可愛がる。徹底的に猫っ可愛がりする。

「あぅあぅあぅ」

「――――♪」

顔を赤くして目を回したラミネージュを横に置くと、逃げようとしていたレイアを羽交い締めにした。

「お、おちつきなさ――！？！！」

二度と酒は飲ませないと誓うレイアをよそに、奈津は時々こっそり飲ませようかと考えていた。

「やっぱり、恥ずかしいや」

考えては見たが予想以上に恥ずかしいだろうと思い、止めておく。

こっそり、ラミネージュが飲ませようと考えていることなど、知らずに。

旅行の一日目は、なんとも締まらない終わりだった――。

第十話　絶海バカンス！（後書き）

今回から数話、夏休み編になります。
夏休み編を終えてから、第二章に入ります。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第十一話　孤島の財宝

避暑地と言うこともあって、朝は少し肌寒い。
それは覚悟していたことなのに、布団が暖かいことに疑問を持つ。
椿は、ゆっくりと目を開けて――首をかしげた。

「え？あれ？」

何故か、四人で一緒に寝ていた。
どうしてこうなったのか？頭を捻らせてもまったく思い出せない。
いつの間に着替えたのかも思い出せない。入浴済みだが、いつお風呂に行ったのかも思い出せない。結局、夕飯以降のことはなにも思い出せなかった。

ちなみに、入浴の時は可愛がり上戸は終わって寝そうだったため、危ないと言うことでふらふらと入ろうとする椿を押しとどめて、レイア達で協力して手伝った。

夜一緒に寝たのは、成り行きだ。
ちなみに部屋は、大きなベッドがある空き部屋を使っていた。

「うーん……ま、いいか」

椿は大きく伸びをすると、カーテンを開けて日の光を取り入れた。
旅行二日目の、始まりである――。

持ってきた服は、私服とその替え、水着以外に、登山服がある。
この島は、島と言うだけあって当然山も森もある。

そのため、二日目は屋敷の裏の山で、宝探しを決行することになったのだ。

宝の情報は、ラミネージュが実家から引っ張り出してきた古びた地図から得たものだ。
別にお金に困っている訳ではない。だが、自由に探しても良い宝があるのなら、探したいと考えるのは、自然なことだった。

「何故宝を探すのか？それは――ヒーローのパワーアップアイテム

は、大抵こういうところに眠っているからだっ！」

張り切る奈津をよそに、レイアとラミネージュはついでに山菜を採る予定を立てていた。

椿だけは、密かに“パワーアップイベント”に心惹かれていた。そんなに都合良く眠ってはいないだろうが、期待せずには居られない。

「コンパスと地図は持って――キャンプ道具はどうする？」

「日帰りですわ」

「夜は危ない」

夜の森は、色々と危ない。

だから、行くのなら昼から夕方にかけて、五時間程度だ。

全員、そんな本気で探そうとは思っていなかった。遊びの範疇である。

「蕗の薹とって天ぷらにして貰おう」

「いいですわね。付け合わせてくいっと一杯――」

無表情なので解りづらいが、どことなく楽しげにラミネージュが言った。

すると、レイアもそれに倣って酒を飲む仕草をして――ちらりと椿を見て首を振った。

「いえ、お酒は止めておきましょう」

「別にいいと思うけど」

レイアがそう零すと、ラミネージュが小声で反論した。

だが、幸か不幸か、その言葉はレイアには届かなかった。

代わりに椿に届いたが、椿は何のことか解らず、首をかしげていた。

昼食をとってすぐ、腹ごなし代わりに出発したため、太陽はまだ真上にある。
あまり険しくはないので、特に苦労することなくすいすいと歩いて行く。
己の身に魔力を宿して戦う魔法使いは、体力勝負なのだ。

「あ、ミズナ」
「あっちはヤマユリかな？」
「蕗の薹は？」
「考えてみれば、あれは春ではありませんこと？」

四人は、宝探しを忘れて早速山菜採りをしていた。
道中、ラミネージュが“山菜”を連呼していたため、食べたくなってしまったのだ。

「春……」
「ミズナも天ぷらにしたらおいしいよ、ラミ」
「天ぷら……」
「茎のおひたしも美味しいですわ」
「おひたし……」

落ち込むラミネージュに、椿とレイアが次々と希望を持たせる。
漸く元気を取り戻して、山菜採りを再開する。

「あ、ラミ！キイチゴ見つけた！」
「今行く」

ラミネージュが、先行していた奈津の下へ走り寄った。
次の目標に前向きなラミネージュの姿に、椿とレイアは顔を見合わ

せて苦笑した。

「ほらっ！椿とレイアも早く！」

「うん！」

「今行きますわ。食べ尽くすんじゃありませんことよ！」

自分を呼ぶ声に、椿とレイアは小走りで駆け寄った。

†

奈津が本来の目的を思い出したのは、キイチゴを食べて満足していた時だった。

「あっ！宝探し！」

「あー……忘れていましたわ」

奈津ですら忘れていたのだから、仕方がない。

奈津は頭をがりがりとかくと、宝の地図を広げた。

「現在地が、丁度島の中心みたいだね」
周囲の目印とコンパスで位置を割り出す。
島の地図、現在地からそう離れていない場所に、×印が書いてあった。

「あれ？結構近い」
「それなら、行ってみようよ」

あまりに離れすぎていたら、時間的に危ないので、中止にするしかなかった。
だが、そんなに離れていないのなら、話は別だ。宝探しで宝が見つかるなど、胸が躍る。

「うーんと、北東にまっすぐ、かな？」
「そうですわね」
「行って、みよう」

賛同が得られたため、奈津は再び先頭に出た。
地図を見ながら、山道を早歩きで進む。山菜採りに時間をかけすぎたので、やや急ぐ必要があった。

進むにつれて道は険しくなり、奈津は鉈で邪魔な草や枝を伐採しながら進む。
石に躓きそうになったり、出てきた蛇を慎重に避けたりと注意深く進むと、ついに×印の場所まで辿り着くことが出来た。

「それで……お宝はどこにありますの？」
「う……」

ジト目のレイアに突っ込まれて、奈津は言葉に詰まった。
少し空けた場所になっているが、それだけ。そこには、なにもなかった。

「おっかしーなぁ」

奈津はそう零しながら、×印の真ん中まで来た。
なにもないことに首をかしげる奈津を見かねて、椿たちも×印の場所に立つ。

「ここで合ってるけど――？」
「うん。間違いはない」

奈津の持っている地図を、椿とラミネージュが覗き込んだ。
正しいという地図を正確に見ようと、レイアも奈津の手元を覗き込むために、一歩近づいた。

――ミシッ
「みし？」

地面から鳴った音に、首をかしげる。
いち早くラミネージュが異変に気がつくが――時既に遅し。

――ドゴンッ
「え？」「は？」「ん？」「あっ！」

地面が陥没して、落下する。
悲鳴を上げる暇もなく、遙か地中へと落ちていった。

†

――ざぶんっ

水に包まれる感覚。
冷たく清涼な水に、そっと身体を震わせる。

地中の下の湖などに入ったら、どこへ繋がるかわかったものではない。
椿はそう考えて、空恐ろしくなる。

だが、それにしては、どこか温もりを感じる水だった。
水に入ったまま、椿はゆっくりと“地面に”降ろされた。
優しく包み込まれて降ろされたおかげで、転ぶことなく地面に降り立つ。

「死ぬかと思いましたわ」

聞こえてきた声。
そこには、戦鎧を装着して装霊器を手に取ったレイアの姿があった。
他の二人も、見れば地面に降り立っている。

レイアが魔法の水で、落下の衝撃を防いだのだ。

「ふぅ――ホントだね。ありがとう、レイア」
「構いませんわ。二人は大丈夫なのかしら？」

レイアは椿に優しく微笑んだ後、困ったようではあるが優しさの残る顔で安否を確認した。

「もーまんたい。さんくす、レイア」
「ありがとう、助かった」

登山服はびしょ濡れだが、誰にも怪我は無かった。
そのことに、椿は一安心した。

濡れてしまっては、動きづらいし風邪を引くことだって有る。
そこで、ひとまず全員戦鎧を装着した。

「うっひゃー……上まで登るの一苦労だね、これ」
「奈津ならきっと、走って登れる」
「いや、それはちょっと……」

奈津は否定しているが、案外やれば出来そうである。

「ねぇ、みんな……この洞窟、奥の方、明るいよ」

椿は、洞窟の奥がほんのりと光っていることに気がついた。

そちらに、もしかしたら横穴でもあるのかも知れない。そう考えて、顔を見合わせた。

「もしかしたら、お宝だったりして」

「お宝は自然発光しませんわ。お宝が光っているのなら、それはやはり横穴があると言うことになりますわ」

洞窟の中で不自然に光る金銀財宝。

そんなものは、おとぎ話の世界の話だ。

実際に光っていたとしたら、それは遺産か精霊石だ。

椿は一人、そう納得して、レイアの言葉に感心していた。

こんなことできらきらとした目で見られて、レイアは戸惑っていたが。

進むにつれて、明るさが強くなっていく。

無色の白い光が、洞窟の周囲を埋めていく。

「ねぇ、レイア」

「どうかしましたの？椿」

椿は、一通り周囲を見回して、足元を見る。

そして、不可思議なことに気がついた。

「地面から、発光してる。……ううん。地面だけじゃない。壁や、天井からも」

「え――？」

椿の言葉を受けて、レイアも周囲を見回す。

それに倣うように、奈津とラミネージュを地面や壁を観察する。

「これはまさか――“亜霊石―≪エクスストーン≫”？」
「えくす……なに？」
レイアの口からこぼれ落ちた聞き慣れない単語に、椿は首をかしげた。
レイアは地面から光る石を拾い上げて、頷いた。
「亜霊石というのは、邪霊を怯ませることが出来る自然の鉱石ですわ」
魔力を用いた魔法使いの攻撃でなければ、邪霊を倒すことは出来ない。
子供でも知っている常識であり、人類が現代兵器に頼ることを諦めさせた、理由だ。
だが、それを覆すことが出来る鉱石も、存在した。
「邪霊を怯ませることが出来る自然の鉱石が、亜霊石ですわ。比較的手に入りやすいのですが、加工が非常に難しく、また魔法使いでないと加工できないという厄介な鉱石ですの」
主に、魔法を使うことが出来ない武装団体が、魔法使い到着までの時間稼ぎとして弾頭に込める鉱石だ。ただ、弾頭に込めると、加工の段階で威力が激減するので、大量に消費する必要がある。さらに、自然の鉱石なので人工で造ることも叶わず、お守りとして流用されることが多い。
「邪霊を倒すことが出来る“稀霊石―≪アヴァロンストーン≫”というのもありますが、こちらは滅多に見つからない上に加工も困難

なのですわ」

両者とも、困難を乗り越えて加工に成功すれば、非常に丈夫な素材となる。
そのため、銃弾や矢のような消耗品ではなく、剣や槍などの素材に使われる。

「えーと、これ全部？」
「そうですわね。亜霊石は、一つ見つければ大量に見つかりますの」
「一匹見つけたら三十匹」

ラミネージュが非常に嫌な表現をしたことで、椿たちの顔が引きつる。
それは、台所の黒い悪魔のことだ。

「この規模の群生は始めて見ますわ」

レイアは改めて周囲を見回して、感心したように呟いた。
家の者について行って、家が所有している鉱山を見たことがあるが、それもここまですごい範囲ではなかったという。

「って、奥に行けば行く程明るいって事は――」

奈津がその事実に気がついて、声を詰まらせた。
そして、椿たちと顔を見合わせると、一緒に走り出す。

どきどきと逸る気持ちを、わざわざ静めたりはしない。
宝探しと銘打ちはしたが、実際に見つかるとは思っていなかった。

――ただ少しだけ、夢を見て、期待していただけ。

走って、走って、走って。
そして、広い空間出て、息を呑む。

高い天井の広い場所。
洞窟の中とは思えない、神秘的な光。
微弱な魔力の発する亜霊石に反応して、魔力によって光る性質を持つ水晶が、その光を増幅させる永久機関。

「すごい」

誰の呟きだったか。
その声は、温泉の時の比ではない。
これが、宝の地図に記された――――“財宝”だったのだ。

そのまま前に進む。
ゆっくりと歩いているつもりだったが、興奮から早歩きになる。

そして、水晶と亜霊石で彩られた舞台の上、そこには、自然に出来た亜霊石が水晶と混じり合い、台座に突き刺さる剣を象っていた。

それはさながら、英雄を導く選定の剣のようだった。

「椿、奥に何かある」

こっそりと回り込んでいたラミネージュが、そういって椿を促した。
台座の裏側――そこには、誰かが造ったと思われる、階段があった。

「これって――」
「たぶん、地図を書いた人」

地下空洞に存在するこの場所の地図を書くには、帰還する必要がある。
この地図の主は、この場所を記した後に、何度か来て階段を作り上げたのだろう。
となると、所有者であり、この地図をラミネージュに渡した彼女の祖母も、当然ここを知っていることになる。

だが、誰が最初に見つけたかなど、どうでもいい。
今はただ、胸に宿る熱い気持ちをめいっぱい感じ取り、四人で無邪気に笑い合った。

†

屋敷に戻った時には、すでに夜の帳が落ちようとしていた。
ぎりぎりで帰ることが出来た、という形だ。

帰ってまずは博人に山菜を渡して、椿たちは浴場へ行った。

椿は、記憶のある状態では、初めての来訪だった。
西洋風の広い浴槽で、ゆっくりとお湯につかる。
その温かさは、疲れた身体を芯まで温めてくれた。

「はふぅ～」

声が漏れるのも、仕方がない。
椿たちは四人並んで、存分に寛いでいた。

「疲れがとれるぅ～」
「ふぅ……本当ですわ」

奈津とレイアも、頬に朱をさしてそう呟いた。
ラミネージュは声こそ出していないが、今にも寝てしまいそうだ。
その白い肌が、すっかり朱色に染まっていた。

たっぷりと寛いで、夕食にする。
山菜の天ぷらを中心とした山の幸は、自分で採ったという実感もあって、普段よりもずっと美味しく食べることが出来た。

「ですからっ！」
「ちょ、直道さん！もう少し静かに」
「す、すみません。御厨さん」

デザートをほおばっていると、大きな声が食堂に響いた。
椿はその様子にただならぬものを感じて、困った表情をしていた博人に問いかけた。

「あの、何かあったんですか？」

「あー……ちょっと、ね」
「博人さん」
椿に問われて言葉を濁したが、間接的ではあるとはいえ雇い主であるラミネージュの問いを無碍には出来ない。博人は、何度か戸惑いを見せたが、質問に答えた。
「実は、漁師がいなくなったんです――海の真ん中で、船ごと突然」
その言葉に、息を呑む。
怪奇現象じみたその言葉は、不安をもたらすには十分だった。
「まぁ、我々も出来る限りの捜査はします。私たちも無理をしたりはしませんので、皆さんはご安心して、お過ごしください」
そう言うのならば、安心する。
それが、笑って見せた博人への礼儀だった。
だが、もちろん気を抜いたりはしない。
表面上だけでも安心するそぶりを見せなければならいと判断したのだ。
「何かあったら、言ってください」
「私たちも、手伝う」
椿とラミネージュがそう言って、奈津とレイアが力強く頷いてみせる。
博人はそれに、困ったような、それでいて嬉しそうな笑みを浮かべて、未だに話し合いを続けていた美奈子達の下へ戻った。
旅行二日目から、早くも不穏な空気が、流れ始めていた――。

第十一話　孤島の財宝（後書き）

急に用事がキャンセルになって時間が出来たので、書き上げました。
しばらくは、夏休み編が続きます。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第十二話　雲を呑む大魚

旅行三日目は、何とも言えない曇り空だった。
一応朝まで報告を持ってみたところ、やはり漁師は戻っていなかった。

このままでは、素直に旅行を楽しむことが出来ない。

「なら、どうするべきか」

奈津が、神妙な顔でそう言った。
椿たちはそんな奈津の表情を見て、力強い意志を込めて、頷いた。

「解決してしまえばよろしいんですわ」
「原因がはっきりと解っている訳ではないけれど、私たちは魔法使い」
「普通では、出来ないこともできるから、ね」

意志は纏まった。
いなくなった漁師の行方。
それは、残念な結果に終わることの方が、可能性としては高い。

海の上、それも、表情を変えることない、穏やかな波。
そこで消えたからには、理由なんて限られてくる。

「それじゃ、行こう！」

奈津が高らかに宣言して、椿たちは後ろに着く。
まずは、直道に話をして、それから出発だ。

憂いは断つ。
そんな自己満足的な理由だけではない。

見ず知らずの人でも、助けられるのなら助けたい。
そうでなくても、これ以上傷つく人が出るのを、見たくない。
結局自分の願いを優先していることから、自己満足かもしれない。

「それでも、いい」

奈津の後ろで、椿は一人、そう呟いた。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

ここの管理責任者には、直道が就いている。
貴族風に言うのなら、執事長という立場だ。

その直道に、椿たちは魔法使いとして調査に乗り出すことを告げた。

「ほ、本当ですかっ！？――いやぁ、助かります。今、林さんに船を出すよう、お願いしてきますね！」

よほど不安だったのか、直道は頭を下げるとすぐに走り去った。
一里は魔法使いでは無かったはずだ。

だから、一里が来るのは、椿たちとしては少し不安だった。
船の操縦が出来る人はいないので、助かると言えば助かる。
だが、それで一般の人を危険な晒すぐらいなら、多少魔力を使っても、レイアが水の魔法で移動しようと考えていたのだ。

少し待つと、一里が慌ててやってきた。
本当に大丈夫なのか問おうとした椿の目にとまったのは、一里の腰から下げられた、二振りの剣だった。

「あの、一里さん？……それは」

椿が目をやりながら問うと、手伝う旨をレイア達に告げて一礼していた一里が、顔を上げた。一里は椿の視線に気がつくと、穏やかに笑って見せた。

「私は魔法使いではありません。ですが、オールアクセンに使える

身として、戦闘の手段は持っているのです」

そう言うと、腰の双剣を抜いてみせる。

不思議な程透明な右の剣。よく見なければ存在しているかも危うい儚い剣。

角度によって七色に移ろう左の剣。右の剣よりやや短い虹色の剣。

セットではなくそれぞれ別のところから持ってきたのだろう。両刃という共通点以外は全く違う、双剣だった。

「これって……稀霊石だよね」

「はい。我が家に伝わる稀霊石の剣、“湖の聖剣―≪アヴァロンセイバー≫”と、私が発掘した遺産、“踏破煌剣―≪ロードステップ≫”です」

稀霊石と遺産の剣を操る。

そんなものを持つものなどそうそういないことから、レイアは一里が戦力として数えられるだろうと判断していた。そうでなくても、逃げることは可能だろう、と。

「オールアクセンの使用人って、大変なんだぁ」

「いや、氏倉さんとか無理だと思うよ？」

感心したように呟く椿に、奈津がそっとツッコミをいれた。

普通の使用人は、そんなことは出来ないのだ。

「クルーザーでまずは島の周辺を巡回しながら様子を見ましょう」

「そうですわね。海辺から見た様子はどうでしたの？」

「変化なし、でした。海辺からでは、とくに異常も見あたりません」

その間に、レイアは一里と計画を立てていた。
海辺や高台からでは海の異常は見つからず、進展はない。
そこで、小型クルーザーで島の周辺を回りながら調査をする必要が出てきた。

何かあった時に救出できる人材が必要なため、一組は海辺に残る必要がある。
そこで、役割を分担することになった。

水に強いレイアとラミネージュが船に乗り込み、速く泳ぐことが出来る奈津と水に弱い椿が海辺に残る。

「でも、いざとなった時に船で駆けつけた方が早いと思うんだけど……どうしようか？」

人命がかかっているのだ。
万全を期した方が良い。

「それはそうだけど……操縦できて身を守れる人って、いるの？」

奈津がそう言うと、椿は言葉に詰まる。
魔法使いがそんなにいる訳ではないのだ。
それでは、どうしようもない。

「いらっしゃいますよ」
「え？一里さん？」

レイアと最終確認をしていた一里が戻ってきて、頭を捻らせていた椿と奈津に進言した。
一里はにこにこと、穏やかな笑みを浮かべて佇んでいて、思惑が読

めない。

「今から、頼んでみます。少々お待ちください」

一里はそういって一礼すると、上品に駆けていった。

足音がしない走り方に疑問を覚えつつも、一里を待つしかなかった。

「誰だろうね」

「うん、だれだろう」

二人で首をかしげて、一里が去った方を見つめる。

そして、魔法使いが他に屋敷にいたかどうか、待ち時間の間に考えていた。

来るまで、やることがないのだ。

†

数分後、待っていた椿達の下に、一里が帰ってきた。

そして、連れてきた人物を見て、身体を固まらせた。

「お待たせしました」

「ちっ」

不機嫌そうな顔で苛立たしげに舌をうつ、壮年の男性。

そう、ラミネージュの伯父である、イストだった。

どうやって説得したのか非常に気になるところではあるが、訊ねられる雰囲気ではない。

表情だけ見るのなら、今にも人を殺しそうだ。

「と、とにかく！泳ぐよりはずっと効率も良いし！」

奈津が無理矢理進行させる。

こんな空気では、いつまで経っても出発することなど出来ない。

「そ、そうですわね。それでは行きますわよ、ラミネージュ、一里」

「うん」

「畏まりました」

いつの間にか呼び捨てているが、一里のほうが気にしていない様子を見ると、打ち解けたのだろうかと考えた。実際は、見るからに高貴なレイアに「さん」と呼ばれるとむずがゆかったので、一里が頼んだ形になる。

ラミネージュは、雇い主の家族なので、呼び捨てに呼んで貰っていた。

小型のクルーザーが出発する。

一里が操縦して、ぐるりと外周を回る。
椿たちは戦鎧を装着して、さらにもう一回り小さいクルーザーで待機していた。

「見つからない、のかな？」
「うん……少しでも手がかりがあれば帰ってくる手はずだから、ね」

不安げな顔でレイア達の船を見る。
その二人を、イストが更に不満そうな顔で見ていた。

そうして、十五分程経った時、少し沖の方まで行って、レイア達の船が止まった。
そして、海から魚のようなものが飛び出して、レイア達が応戦し始めた。

「なにあれっ！？ダツ！？」

ダツとは、光に反応して突進してくる魚のことだ。
船の上の証明などに突進して、乗組員に怪我を負わせることもある危険な魚のことだが、その危険が及ぶようになるのは夜。今は、真昼だ。

「とにかく、救助に行こう！」
「イストさん！」

椿が名を呼ぶと、イストがクルーザーを発進させる。
まずはあの場所から助け出すことが、重要だ。

「レイアーっ！僕たちが引きつけるから、なんとかその場から脱出して！」

孤立無援にならざるを得ない沖で戦うのは、危険だった。
ならばせめて島の周辺までこないとならない。

レイアとラミネージュは、大振りの魔法を得意とする。
そのため、小型の群れを相手取るのは不得意だった。
得意そうな一里は、小型の敵に船を傷つけられないように旋回するので、精一杯だった。

船の上の様子がよく見えないことをやきもきしながら、近づいていく。
そして、適度に離れて引きつける。

「来たっ！」

椿たちの船にも、その影が飛びかかってきた。
ピラニアのような風貌の、八つ目の魚。鰭は刃物のように鋭く、歯も鉄のようだ。
それはまさしく、海の中の邪霊だった。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

装霊器から炎の刃を伸ばして、迎撃する。
大きく水を切って高速で進むクルーザーから落ちないように戦うのは、至難の業だった。
奈津も肉体強化で蹴り落としているが、揺れを気にして上手いように威力が出せない。
だが、囮という役目としては十分だった。

邪霊が引きつけられて、だんだんとレイア達が自由になる。
そしてついに、包囲網から脱出して、海辺へ近づいてきた。

「やった！」

だが、気を抜いたのが悪かったのか、クルーザーに大きな震動が走る。
そのことでバランスを崩して、魚の邪霊が山程いる海に、椿が落ちた。

「椿！」

助けようと奈津が走るが、クルーザーが椿から離れたせいで一歩届かなかった。

「ちっ！動力部がやられた！」
「でも、戻らないと、椿が！」

イストは椿が落ちた方角を見て、舌打ちをする。
そして、飛び込もうとした奈津の肩を掴んで、後方に引きずり下ろした。

「あうっ！……っ何を！？」
「じっとしてろ！」

イストはその勢いのまま、海に飛び込む。
そして、落ちて上手く泳げずにいた椿を掴んだ。

「僕も今っ！？」

助けようとした奈津に、邪霊が襲いかかる。
それを退けると、椿とイストの周りに邪霊がいなくなったことに気がついた。
イスト達の周りだけではない。自分の周りからも、すっといなくなる。

そして、船の下が急に暗くなる。
それは、巨大な魚影だった。

「なっ！？」

海面がうなりを上げて、鳴動する。
やがてそれは大きなうねりとなり……突然周囲が“夜”になる。

――ザブゥンッ！！

大きく口を開けた、巨大な鯨が、椿や奈津達だけでなく、海辺に近づいていたラミネージュ達のクルーザーもろとも、呑み込んだ。

†

目を、開ける。
ぼんやりとした視界に、ここがどこなのか解らず、頭を抑えて起き上がる。

「いつつ……どこさ、ここ」

立ち上がって、周囲を見る。
断っている場所は、小型のクルーザーの上だった。

「そうだ――椿っ！イストさんっ！」

橙色の空と、白い霧。
まわりには、幾多の船。
空母、ガレオン船、ヨット、屋形船。
多種多様の船が、周囲に浮かんでいた。

「ここってまさか――」

そう、ここは、邪霊の腹の中だった。
橙色の空とは、肉の壁。浮かんでいるのは、胃液と海水の上。
このまま脱出できなければ、どうなるか？
――考える、までもない。

「うぅ、後ろ向きなこと考えるのはよそう」

奈津は、頭を振って、沈んだ気持ちを振り払う。

まずは、一緒に呑み込まれた仲間の探索だ。
勢いをつけて跳躍し、隣の船へ移動する。
それを繰り返すことで、まずは空間の広さを確認する。

「どこまで進めることなのやら……っと」

警戒しながら移動していく。
そのうち、船の様子で気がつくことがあった。

「乗組員がいない？骨まで溶かすのかな？……いや、だったら溶けている船があってもいいはずか、な」

骨まで溶かすことが出来る程強力な胃液なのか、それとも風化する程古いのか。
どのみち、船に大きな損傷がないという時点で、別の可能性を考えるべきだった。

ひたすら進んでいくと、漸く白骨らしきものを見つける。
それは、比較的新しい世代の戦艦だった。
その上に降りて探索する。だが、結局右腕――それも、手首から上のみ――の白骨だけだった。

「手首から上……場所は、船の縁……救命ボートが、ない？」

船から身を乗り出して、海面を見る。
そして、ものは試しと、近くに落ちていた年代物の腕時計を投げ込んだ。

『ガウッ！』

すると、海中から出てきた魚の邪霊が、海面に落ちた音を聞きつけて、大量に集まった。

「少しでも音を立てたら餌、か」

奈津はその光景に眉をひそめる。

そして、手首の白骨に手を合わせると、再び探索のために跳躍した。

†

ラミネージュとレイア、一里は、同じクルーザーの中で目を覚ました。

ほんの一瞬だが、気を失っていたようだ。

「困りましたね、どうやったら出られるんでしょうかね？」

「炙る、とか？」

「二人とも、落ち着きすぎですわ」

のほほんと悩む一里と、感情が表に出ないラミネージュ。
その二人の様子を見て、今更慌てることも出来ず、レイアは必死に額をほぐしていた。
奈津並みに言い合える相手か、椿並みに癒される相手がいないと、胃にダメージが入るのだ。苦労性である。

「とにかく、周囲を水で調べてみますわ」
「おおっ！流石エルストルの青い星です！」
「青い星……カッコイイ」
「黙ってなさいっ！」

レイアに怒られて、二人は仕方なく下がってレイアの動きを見る。
レイアはクルタナ型装霊器を掲げると、魔力を込めて詠唱を始めた。

「【全ての大河の源たる・偉大なる水の神よ・その命を辿り・我を導け】」

詠唱と共に、水が生まれて渦になる。
そして、ゆっくりと海面に降りて、同化した。

「これで、周辺の情報はわかりますわ」
「おおーっ！」
「すごい」

拍手をする二人に、レイアはげんなりと肩を落とした。
ラミネージュだけではないので、普段の倍は疲れる。

「と、来ましたわ――魔力に余裕を持たせたのであまり広範囲は調べられませんでしたが……当たりのようですわね」

「何があったの？」

レイアは戻ってきた水の渦を、手の上で球体にしながら情報を読み取った。

「不自然な船がありますの……一つだけ、魔力の込められた」

船自体に大きな魔力が込められている。

何かあるとすれば、そこだろう。

「ただ、魚型の邪霊が、海中に大量にいますの。集中攻撃でもされたら、一網打尽、ですわ」

肩を竦めて言うレイアに、顔をこわばらせる。

海中の邪霊に気がつかれないように、進む必要がある。

「肉体強化で、船を渡る。いかにも奈津が得意そうなことですわ」

確かにそれしかないだろう。

肉体強化ならば、ラミネージュも得意だ。

「一里、貴女は……」

「私は大丈夫ですよー。この“踏破煌剣”は、肉体強化の力も付加されます」

「そう、それなら……進むわよ」

レイアが、怪しい船が見つかった方角を睨み付けながら、そう言った。

何があるか解らないからこそ、気を引き締める必要があった。

「うん」
「はいっ」

どうにも頼りない返事だが、ここで真面目になられる方が恐ろしい。
レイアはそう考えつつ、自分に肉体強化を施した。

出発は、ここから離れた場所にいる奈津と、ほぼ同時となった。

†

唐突に、目を開ける。
気を失った感覚は、経験しすぎて身体が覚えていた。
だから、気を失ってから復活までがずいぶん早くなっていたのだ。

「ここ、は？」

身体を起こして、周囲を見る。
どうみても、そこは牢屋の中だった。

「起きたか」

低い声に、身を竦ませる。
振り返ると、そこには、不機嫌そうに眉をひそめるイストの姿があった。

「イスト、さん？」
「他に誰に見える」

そう言い捨てると、壁に寄りかかってタバコを取り出す。
だが、ライターもタバコも、濡れて使い物にならなくなっていた。
その事に苛立たしげに舌打ちをして、タバコの箱を握りつぶす。

「ここは一体、どこなんですか？」

不機嫌な様子に退きながら、椿はそう問いかけた。
イストは椿の方に目をくれることなく、立ち上がる。

「邪霊の腹ん中の、海賊船の牢屋だ。骨の化け物が、お荷物ごと俺をここに放り込んだ」

つまり、気を失った椿のせいで捕まった、といっていた。
落ち込むそぶりを見せる椿に、イストはなにも言わない。
だが、それ以上責めたりもしなかった。そもそも、憎まれ口が出てしまうのは癖のようなもので、始めから責める気は無かったのだろう。

「あぅ……ごめんなさい」
「ああ」

頭を下げる椿に、一言で応じるイスト。
返事が来ないよりもマシだが、あまりに素っ気ない。

「とにかく、ここを抜け出すぞ。ガキ」
「が、がきって、また……」

抗議のために顔を上げた椿を無視して、鉄格子に向かう。
そして、肉体強化を施して、鉄格子を曲げた。

すぐに出て行けるのに、出て行かなかった。
その意味に気がついて、椿は頬を緩ませた。

起きるまで、待っていてくれたのだ。

「ありがとう、ございます」
「何してんだ。置いてくぞ、ガキ」
「ですから、私は……もうっ！」

椿が小声で礼を言う。
その声が届いたのか、届かなかったのか……相変わらず横暴な口調で引っ張られて、牢屋を脱出する。

「どこへ行くんですか？」
「外だ。ここいたら、邪霊の餌だろが」
「むぅ」

そんなこともわからないのか――イストは、そう言い捨てて進んでいく。

内部を進み、やがて甲板に繋がる部屋まで来た。
ここから外に出れば、脱出することも出来るだろう。
だが、それには――。

「こいつらを潰す必要がある、か」

イストが、無骨なガントレット型の装霊器に、白い魔力を宿す。
外には、海賊姿の骸骨型の邪霊が、黒いオーラを放ちながら彷徨い歩いていた。
数十体ほどの邪霊を倒さなくては、外に行けそうもなかった。

イストは、魔力が低い。
そのため、長期戦には向いていない。
魔力や力に敏感な椿は、そのことを感じ取っていた。

ならば、自分が出ればいい。
それをなす事が出来る力が、あるのだから。

自分の力に慢心している訳ではない。
だが、そうでも思わなければ、孤軍奮闘など、決意できそうになかったのだ。

「イストさん、私が引きつけます。その間にイストさんは、助けを――っ!?!!」
――ゴンッ

言い切る前に頭に拳骨を落とされて、椿は声にならない悲鳴を上げながら俯いた。
声にならなかったおかげで邪霊には気がつかれていなかったが、そんなことまで頭が回らない程、痛かった。

「なんっ、なっ、なっ！？」

涙目で囀る椿を、イストは高い身長で見下ろした。
その顔は、椿が今まで見てきた中で、一番機嫌の悪い雰囲気だった。

「ちっ、ガキが……そこでじっとしていやがれ」
「なっ……私は、イストさんに負けないくらいは、強いつもりですっ！」

そういって、椿はイストを睨み付ける。
実際、イストのレベルは五で、椿とほとんど変わらない。
まだまだ上がる見込みのある椿と違って、ここで打ち止めであるイストよりも、椿の方が強いかも知れない。経験の差も、年齢に比例しない程、椿は死線を越えていた。

真っ向から見上げて見せる椿を、イストは鼻で笑う。
その笑い方がどうしても嫌で、椿は目に力を入れた。

「いいか、ガキ」

イストは、椿の額にぶつけるように指を指した。
それがデコピンのように痛くて、椿は理不尽な状況に涙目になった。

「てめぇが俺より強かろうが弱かろうが関係ねぇ」

イストはそう言いながら、何度も指を額に打ち付ける。
その度に仰け反りそうになるのを、椿は必死でこらえていた。

「ガキが出張って、戦って怪我して倒れる。俺はそれが、気にくわ

ねぇんだよ」

苛立たしげにそう言い放つと、イストは椿に背を向けて、ドアに手をかける。
その先は、甲板だ。

「いいかガキ。ガキってのはな、脳天気にへらへら笑ってれば、いいんだよ」

イストはそう言い放つと、ドアを開ける。
そして、一直線に邪霊の下へ走り出して、引きつける。

「行け！ガキ！」
「っ！」

ここで行かなければ、イストの思いを無駄にする。
そんなことは解っているし、助けを呼ぶこと重要だ。
だが――。

「何のつもりだっ！？」
「ガキって呼ばれると、反抗したくなるんですよ」

――ここで置いていくことは、できなかった。

「ったく……来ちまったもんは仕方ねぇ……ついてこれるか？ガキ」
「イストさんこそ、遅れないでくださいよっ！！」

炎の刃と拳が煌めく。
白と赤の軌跡が無限に残り、たった二色の虹を、そこに作り上げていた。

倒せど倒せどきりがない。
しかも、イストは魔力が低いので、辛くなっていた。

「そこまでだっ！」

そんな時、マストの上に一つの影が降り立った。
言うまでもなく、奈津なのだが、椿はともかく、イストは完全に無視をしている。
額に青筋が立っているのを見る当たり、聞こえてはいるようだ。

「見つかりましたわ！」
「ご無事ですか！イスト様！」
「間に合った」

海賊船に辿り着くことが出来たレイア達が、参戦する。
最初に声が届いたのがレイアで、最初に参戦したのが一里だ。
一里は椿たちの姿を視界に入れると、レイア達を抜かしてその剣を振っていた。
ほぼ透明という剣の特性上のことだけではなく、剣筋が鋭すぎて剣真が見えなかった。

「奈津！そんなところで遊んでないで、降りてきなさい！」
「あ……うん……なんか、ごめん」

地味に落ち込んでいた。
上がりすぎたテンションを抑えて――抑えさせられて――奈津もマストから飛び降りる。
着地地点に邪霊が来るようにして、ついでに潰しておくのも忘れない。

「でもみんな、どうしてここにっ！」
「調べたら、ここが怪しかった」
魔法で邪霊を焼き払いながら椿が問うと、ラミネージュが簡潔に答えた。

「なら、ここは……」
「そうですわね、おそらくここが、邪霊の“核”ですわ」
邪霊は、その体積が大きいもの程、自分の中に“基点”を持つ。
存在を支える基点をつぶされると、邪霊として消滅する。
それを、魔法使い達は“核―≪コア≫”と呼んでいた。

「船が核なら」
「叩きつぶしちまえばいい！！」
椿の呟きに、イストが続く。
イストは魔力を右腕に一点集中させると、得意の魔力強化と持ち前の筋力で以て、マストに一撃を加えた。

「お手伝いします！」
流石にそれだけでは折れなかったが、大きく軋みをあげる。
半ばまで削られたマストに、一里が“踏破煌剣”を用いて斬撃を加えた。

「はぁっ！」
そして、トドメとばかりに椿が炎刃を振り抜く。

ほとんど削られていたマストは、その一撃で完全に折れた。
折れたマストは倒れ込み、船を傷つける。やがて船全体が軋みをあげて、中央に罅が入る。

『ギァアアァァアアァァアアァッッッッ！！！！』

断末魔の声が響く。
海賊姿の邪霊から、水中の邪霊から、空間全てから響く声。
やがて空に亀裂が入る。

空だけではない。
空間全てに亀裂が入って、ガラスの割れるような音が響く。

――パリンッ

そして――椿たちは、外に弾き出された。
場所は、空中。鯨の潮吹きのように弾かれたらしく、眼下では巨大な鯨が塵になっていくところだった。

邪霊は倒した。
だが、このままでは、海面に叩きつけられて、終わりだ。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に飛翔の加護を授けん】」

そんな中、真っ先に動いたのは奈津だった。
奈津は自分に、短い時間だが空を飛ぶ魔法を付加させると、椿たちを纏めて島の方へ押す。

「着地は任せた！レイア！」

「任されましたわ！」

レイアは魔法によって、着地するためのクッションとなる水を創り出した。

更に、ラミネージュがその周辺の地面を、魔法でもって柔らかくする。

遠隔操作に、流石に疲労の色を見せていた。

「いっけぇぇぇーっ！」

上空数十メートルからのダイブ。

風を切る音と落下の圧力により息苦しくなるが、それよりもこの高さからの落下は恐怖そのものだった。校舎の屋上から飛び降りたことのある奈津ですら顔を青くしていて、叫ばなければいられないようだった。

――ざぶんっ

緩めの音に包まれて、椿は漸くこのダイブが終わったことを感じ取ったのだった。

「はぁー……こ、怖かった」

命のやりとりを体験してきた中で、椿がそう零したのは、初めてのことだった――。

†

邪霊が消滅した後、海に今まで呑み込まれて来た船が浮かび上がった。
その中の一隻にいなくなった漁船があり、外に出ずに中で震えていた漁師二人は、無事救出された。

旅行三日目は、椿たちにとって散々な終わりとなってしまった。

その後、四日、五日と平穏に過ごして、六日目に帰ることになった。
帰りのクルーザーに乗り込む前に、世話になった人たちが挨拶をくれる。

その中に、一里によって引っ張り出されたイストの姿があった。
椿はイストの姿を見つけると、駆け寄って頭を下げた。

「あのっ……ありがとうございました！」

礼を言われたイストは特に反応する様子も見せずに、追い払うように手を払う。

「いいからさっさと行け」

最後の最後まで、口が悪い。
そんなイストを、一里はおかしそうに見ていた。

「は、はい。それでは、機会があったら、またお会いしましょう！」

出来た繋がりを、ここで終わらせてしまうのは少し寂しい。
だから椿は、イストにそう言って背中を向けた。

「ったく。機会があったらな。――“椿”」

始めて名前で呼ばれたことに、椿は頬を綻ばせる。
今度出逢うことが出来たら、まず最初に、自己紹介をしよう。

「それから、あのガキに言ったのは……仕方ねぇ、訂正してやるよ」
「はい！」

椿はそう言って笑うと、呆れたような顔で自分を呼ぶ仲間達の下へ、帰還した。

第十二話　雲を呑む大魚（後書き）

連日投稿で、旅行編を終了させました。
夏休み編は、あと二話を予定しています。

イストさんは、ツンデレです。
つい、憎まれ口を叩いてしまいますが、根はいい人なので幼い子供に懐かれます。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第十三話　Ｌｅｔ，怪談！（前書き）

「――←――」と「――→――」の間には、怖い話が入っています。
残酷な描写も入るので、苦手な方はご注意ください。

第十三話　Ｌｅｔ，怪談！

暗い部屋の中、蝋燭の明かりだけが、頼りなく揺れる。
四本の蝋燭を取り囲む、四つの人影があった。

場所は、特別に使用許可を貰った、旧校舎。
その中でも、崩れる心配のない場所。

特に気温の高い真夏日に、クーラーのない部屋に集まるその理由は、一つだけだ。

夏の醍醐味と言えば、代表的なものがいくつかあげられる。
スイカ、海、虫取り、かき氷、扇風機……。

その醍醐味の中でも、特に“涼しくなる”ことができる、独特なイベントがあった。

そう――――“怪談話”である。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

その日は、うだるような暑さだった。
普段でさえ、エアコンの効いた部屋にいながら、差し込む光で暑くなる。
だというのに、そんな炎天下の真夏日に、学院の校舎のエアコンは止まっていた。

特に実家に帰ってもすることがない、もしくは学院にいた方が楽しい。
そんな諸々の理由で実家に帰らず、椿たち四人は学院にいた。

ラミネージュは帰ってもする事が無く、奈津とレイアは学院の方が楽しい。
椿は、宗一が懸賞でペア旅行を手に入れたというので、送り出してすぐに学院に戻ってきた。ゆっくりさせてあげたいし、自分も友達と遊びたい。

椿が、そうして学院に戻ってきた翌日、校舎設備の一斉点検のため、施設内の全ての機能が、結界を残して一時的に解除されたのだ。

その結界も、予備と交換しつつ点検することになっていた。

この暑い日に何をすればいいのか？

椿は冷たい麦茶を飲みながら、宿題をやっていた。

質素な生活を送ってきた椿は、夏場でもエアコンなど使っていなかったのだ。

だから、この暑さの中、薄手のタンクトップに短パンという軽い服装で、麦茶片手に宿題片付け興じていたのだ。暑いので、長い髪はポニーテールにしている。

「自由研究かぁ……共同でも良い？……うーん」

今日のノルマを片付けて、宿題の一覧に目を通す。

自由研究、夏休みの友、各教科の宿題……。

数ある宿題に目を通しながら、首を捻っていた。

――コン、コン

「はーい」

ノックの音が聞こえて、切り上げる。

玄関を開けると、そこには奈津が立っていた。

「どうしたの？――とりあえず、入って」

「ありがとう～」

奈津は汗を流しながら、部屋に入る。

服装は、黒のタンクトップにトレパンだ。

「もう、暑くて暑くて……椿はどうやって涼んでる？」

「私は慣れてるから、冷たい麦茶に扇風機でもあれば、それで問題ないかな」

エアコンは各部屋に取り付けられているのではなく、健康管理のために寮全体で調整するようになっている。そのため点検で止まってしまうのだが、冷蔵庫などの理由があるため、電気は通っていた。

基本的に、エアコンの中で過ごしてきたお嬢様達は、実家から扇風機を取り寄せるという発想すらなかったのだ。

奈津は扇風機の前に座ると、だらしのない顔で風を浴びる。
風圧で髪が後ろに靡き、何とも言えない表情になっていた。

椿は宿題を机から片付けると、冷蔵庫から麦茶を取り出して、ガラスのコップに注ぐ。
そこへ、冷凍庫から取り出した氷を入れて、お盆に乗せた。

「はい、麦茶」
「う～ん？……あぁっ！ありがとうっ！」

奈津はお礼を言って麦茶を受け取ると、それを喉を鳴らして飲む。

「んぐ……っはぁ～っ」

実に幸せそうな表情である。
頬が緩んで、蕩けそうな顔だった。

「なんか涼しいこと無いかなぁ」
「涼しい事って……どういうこと？」
「こう、すきっとするような……」

扇風機と麦茶を堪能しながら、奈津がそう嘯いた。
椿も麦茶を飲みながら、一緒に涼む方法を考える。

――コン、コンコン

再びノックが聞こえて、椿は席を立つ。
玄関を開けると、今度はラミネージュが立っていた。

「暑い」

声が小さいのは、暑さで元気が出ないからだろう。
五月の始めの時点で、すでに夏服だった彼女は、暑いのが大の苦手だった。
この気温は、ラミネージュにとって、灼熱地獄のようなものなのだろう。

「あはは……さ、入って」
「うん」

椿に促されて、部屋に入る。
すると、一直線に扇風機の前に座った。
奈津と並んで、風を受けている。

ラミネージュにも麦茶を出して、涼む。
そうしていると、本日三度目のノックが響く。
インターホンの電源は施設のものなので、みんなノックなのだ。

「いらっしゃい、どうぞ」
「ありがとう、椿。ってやっぱり集まっていましたのね」

案の定、入ってきたのはレイアだった。
結局、四人で麦茶を飲みながら、扇風機にかじりつく形になってしまった。

「涼しいこと……涼しいこと……」

奈津は、ぶつぶつと呟きながら考えていた。
隣のレイアが嫌そうな顔をしていても、気にしない。
レイアはこの隣人から気を逸らすために、麦茶を口に含んだ。

「そうだっ！！」
「ぐふっ！？！！」

突然大声を上げた奈津に驚いて、咽せる。
鼻を押さえてのたうち回るレイアから目を逸らすのは、友達としての優しさだ。
もっとも、ラミネージュは目を逸らしただけでなく肩も震わせていたが。

「納涼だよっ！そう！夏と言えば――」
「言えば？」
「ぐふっ、おぅふっ！？」

鼻を押さえて震えるレイアから目を逸らしながら、椿はそっとレイアの背中をさすった。
意味があるかは、不明だ。

「――怪談話だよっ！！」

奈津が、声高らかに宣言する。
暑い日は、怖い話で盛り上がる。
それこそ、夏の醍醐味と言えた――――。

†

それからは、トントン拍子に事が進んだ。
怪談話が出来そうなところはないかと、奈津がノリの良さそうなマリアに相談し、旧校舎の一室が提供された。

崩れる心配のない部屋を借り、立ち入り禁止区域を教えて貰う。
怪談話をしたいのなら夜が良いだろうと、夜の時間帯の使用許可まで貰えた。
自由研究のテーマにするという理由で、青筋を立てていた莉子も説き伏せて、一同はレポートを書いて、本当に自由研究として提出することを条件に、怪談話の機会を手に入れた。

蝋燭を準備して、直前まで涼んでいた椿の部屋から出る。
そして、雰囲気を出すために、提灯のみで暗い夜道を歩いて行く。

「いやー……怖い？レイア」
「な、にを言い出すかと思えば」

一瞬、声が裏返る。
その様子に、奈津はにやにやと笑みを零した。

さて、魔法使いが召喚する精霊の中には、悪霊や怨霊、果ては都市伝説と呼ばれるものまで存在する。多種多様な精霊が存在するが、彼女たちはそれらを怖いと思ったことはない。
もちろん、畏怖の感情はあるが、恐怖の感情はなかった。

その大きな理由として、精霊は魔法使いの力なくして、現実世界に長く止まることが出来ない、というものがあった。

魔力を供給されていないと、現実世界から弾かれて、幻想世界へ強制送還される。
そのため、現実世界に長く存在している邪霊以外の存在は、彼女たちのように神秘の術を操る魔法使いにとって、未知の敵といえた。

人間が、理解できないものにに対する時、感じることでもっともケースが多いのは、恐怖という感情だ。稀に知的好奇心でそれを乗り越えるものもいるが、それはごく僅か。

有り体に言えば――――わからないものは、怖い。

レイア達もその例に漏れず、怖がっていた。
奈津はまったくその様には見えないが、彼女は怪談話は聞くまで怖

くないタイプ――つまり、聞いてから怖がる人間だった。
事前に怖がったりはしないのだ。
そのため、ホラー映画も平気で見る。
そして、夜に一人でトイレに行けなくなるのだ。

そして、一同はついに旧校舎に到着した。

旧校舎のおどろおどろしい雰囲気に気圧されながらも、足を踏み入れる。
これで鴉でも鳴いていたら、嫌な意味で、完璧だ。

地図を見て使用許可の下りた部屋に行くと、そこは図書室跡だった。
本は全て回収されている訳ではない。古くなって完全に中身が読み取れないものは、放置されていた。

朽ち果てる本と、古びた室内。
演出は、ばっちりだった。

奈津は蝋燭を四本並べる。
一人一話ずつ、それで十分だろうという判断だった。

カーテンは締め切って、窓は開ける。
蝋燭に火を灯すと、四人の顔がぼんやりと浮かび上がった。
この時点で、すでに怖い。

先陣を切るのは、奈津だ。
奈津は得意げな表情で、最初の話を始めた――。

←

その日、男性は登山のために山へ来ていた。
そこは、男性が幼少時代に良く来た山だった。

昔なじみの友人や、母校の教師に挨拶をして回る。
そのうち男性は、ある噂を聞きつけた。

山へ登ると、どこからともなく声が聞こえる。
その声に返事をしたら、帰ってこられなくなる。

その噂を、男性は一笑した。
帰ってきていないのなら、何故その噂が蔓延しているのか?と。

すると、その噂を男性に教えた母校の老教師は、それもそうだと笑って見せた。

男性は、その噂を忘れたまま、登山を開始した。
長く登っていない山を見て胸を躍らせながら、楽しんでいた。

――おい

そうしているうちに響いてきた声に、身を竦ませた。
噂が本当だったことに驚きながらも、返事をしなければいいのだと冷静になった。

――おい

だんだんと、声が大きくなる。
男性は耳を傾けまいと、耳を押さえて首を振る。

――おい
――おい
――おい
――おい

恐怖心から、戻って下山し始めた。
気味が悪くて、いられなかったのだ。

そして、漸く麓に辿り着き、一息吐く。

「おい」

あと一歩で山を抜けるという場所で、足を止めた。
肉声だったことに疑問を持ちながら、男性はゆっくりと振り向いた。
そこには、噂を教えてくれた老教師が立っていた。

「は、はは、驚かせないでください。先生」
「いや、すまん」
男性が困ったように笑う。
一気に気が抜けたのだ。

男性は、突然現われた恩師に要件を聞こうとして、固まった。
そう、この教師は――背後から“突然”現われたのだ。

「言い忘れていたことがあった」

そういって近づく老教師の目から、逃れることが出来ない。
老教師は男性を覗き込むと、焦点の合わない、濁った目で、ゆっくりと告げた。

「あの噂の最初の被害者は――」
「あぁ、うぁ」
「――私なんだ」

男性が下山することはなく、合う予定を立てていた地元の友人が、捜索願を出した。
この山は、数年前、彼らの恩師が“失踪”していたのだ。

だが、いくら立っても見つからず、結局失踪扱いとなった。

それから数年後、この地を訪れた観光客が、歩いていた“登山服の男性”に声を開けた。
男性は、観光客に快く、山の“噂”を教えた。

そして、今日も……どこかの山で、声が響いた。

――→――

奈津が、ふぅっと蝋燭を消した。
確かに、怖かった。レイアも身を震わせていた。

「はっはっはっ……さて、これ以上の怪談話が、できるかな？」

奈津が胸を張って言うと、レイアが果敢に挑戦した。
今度は、レイアが語り部となるのだ。

「吠えずらかかせて差し上げますわっ！」

そう言って、ゆっくりと蝋燭の炎を見つめた。

誰しも、女の子ならば幼少時代に、人形遊びをする。
特に気に入った人形を、姉妹のように可愛がり、大人になっても大切にしていたりする。

外国のある国のその女性も、そんな、人形を可愛がっていたかつての少女の一人だった。

だが、その女性の人形は、今はない。
それは彼女が少女だったころに、遊びに行った祖母の家で、なくしてしまったからだ。
当時は泣きわめいたが、彼女は今は、もう大人。その人形のことは忘れて、日々を過ごしていた。

そんなある日のことだった。
営業先の会社に飾られた、一体のビスクドール。

そのビスクドールをネタに、幼少の頃の話などで盛り上がり、結果的に好意的に話が纏まった。おかげで、思い出したのだ。昔の人形のことを。

女性は次の休暇で、かつての祖母の家を訪れることにした。
現在祖母の家は、彼女の母親が住んでいた。祖母は、元気の良いまま天寿を全うした。

帰郷して母に挨拶をして、よく遊んだ祖母の部屋に来る。
少女が抱えて持てるサイズだったはずのビスクドールは、どこに無くしたのだろうかと首を捻った。

そうしてぼんやりと祖母との思い出をあさっていると、ふと思い出したことがあった。
鍵のかかった、机の引き出し。祖母の日記入れだった。

試しに開けてみると、すんなり空いた。
亡くなった時に、鍵は開けて日記を取り出したのだろう。

その奥に残された、古びた鍵。
それは彼女が秘密の宝物置き場として使用していた、机の大きな引き出しのものだった。

なんで忘れていたのだろうかと苦笑いを零すと、その鍵でもって引き出しを開ける。
開きづらかったが、それはさびていたからだろう。

そこには——かつて彼女がなくした、ビスクドールがあった。

懐かしさに微笑むと、それを自分の部屋に持って帰った。

だいぶ古くなっていたが、修復すれば直る程度だ。

その後、母と夕食を食べて、何事もなくベッドに潜り込んだ。

だが、深夜になって、彼女は急に目が覚めた。

翌日には帰らなければならない身としては、早く寝ておきたい。

だが、起きてしまったものは仕方がないと、部屋を出て祖母の部屋へ行った。

眠れなくなったらここへ来るという、幼い頃の習慣が出てしまったのだ。

祖母の部屋の机の上には、あの人形が置いてあった。

確かに部屋に持って行ったはずの人形が、何故かそこにある。

そのことに、女性は薄気味悪さを感じた。

踵を返して、ドアノブに手をかける。

――ことん

そして、何かが落ちる音に、ゆっくり振り返った。

だが、そこには、なにもなかった。

見間違いだったのかと、視線を落とす。

その先には――人形があった。

「っ」

急いで、部屋を出る。

それが理解できないものだと、女性は気がついていた。

――おいていかないで

声が聞こえる。

聞こえてはならないものの声が聞こえる。

――おいていかないで

足をもつれさせながらも、走る。

何度か転びそうになりながらも、走る。

――おいていかないで

それは、女の子の声。

彼女の幼少時代のそれと、何一つ変わらない声。

――おいていかないで

なんとか自分の部屋に駆け込んで鍵を閉める。

目を伏せて息を整えて、ドアに耳を当てた。

そして、もう声が聞こえないことに安堵して、ベッドに向かおうと、振り返る。

「おいていかないで」

彼女は目の前に出現したビスクドールに、声を上げる暇もなく気を失った。

翌日、彼女はゆっくりと目を覚ました。

そこは、祖母の部屋だった。

祖母の部屋で寝てしまったから、あんな夢を見たのだと、嘆息する。
朝食を食べに行こうとするが、身体が動かない。

何故か顔を動かすことも出来ずに、ただじっとしているしかなかった。
そのうちに、あることに気がついた。視点が、低いのだ。

周りのものが、やけに大きく見える。
机の上から見れば、こんな視点だろうかと首を――動かないので、気分で――かしげる。

やがて扉が開いて、母が入ってきた。
助けを呼ぼうとするが、声が出ない。
もっとも、こんなところで固まっていたら助けてくれるだろうと、じっとして待った。

だが、一向に母は、自分を見ない。
そして、母の後ろから、もう一人、入ってきた。
別居中の父かとも思ったが、それは女性の姿だった。

そう――自分の、姿だった。

女性は楽しそうに微笑みながら、手鏡を取り出し自分に向ける。
そこに移る自分の姿は、あのビスクドールのものだった。

ゆっくりと、扉が閉まる。
絶望する“人形”に、“女性”はゆっくりと口を開いた。

――こんどはわたしが、おいていってあげる

今でもその人形は、古びた洋館に、佇んでいるという。

――→――

レイアの前の蝋燭が、消える。
人の話を聞いて、奈津が始めて震えだした。

「ど、どうだったかしら？」
「ど、どどど、どうってことないねっ」

強がる奈津の横で、椿は二度の話にノックダウンしそうになっていた。
次は椿の順番だ。早く終わらせようと、意気込んだ。

涼しくはなったが、今日は眠ることが出来るのか、心配だった。

ラミネージュは、無表情のまま小刻みに震えていた。
携帯電話のバイブレーションのように見える。

「つ、次は、私……だね」

椿はそう言うと、蝋燭を見つめながら、ゆっくりと語り始めた。

――←――

その男は、妻と二人で、日々をまっとうに生きてきた。
山へ猟に出かけて、鳥や猪を捕って生活していた。

慎ましくも平穏な日常だったが、それも長くは続かなかった。
男の妻が、流行病で亡くなったのだ。

男は悲嘆に暮れた。

そして、妻の亡骸に、二度と誰も娶らないと誓って、埋葬した。

それから、季節が二巡したころ、男の下に町娘が通うようになった。
その娘は、男が以前、猪に襲われていたところを助けた娘だった。

娘が通いはじめて、再び季節が一巡した。
すると、だんだんと娘に愛着が生まれてきた。

やがて、男と娘は情を交すようになり、翌年には娘を娶ることになった。
男は妻の墓に一言報告して、許しを願って、娘との生活を始めた。

だが、そうしたとたん、娘がだんだんと衰弱するようになっていった。

心配して、なけなしの金で医者にかけるが、原因はわからずじまいだった。
衰弱していく娘が心配で、いてもたってもいられなかった、そんなある日の晩のこと。

男が一人で晩酌をしていると、娘がすぅっと部屋から出て行った。
どこへいくのだろうと後をつけると、そこは死んだ妻の墓だった。

そう、娘に教えていないはずの、墓だった。

娘は墓を、素手で掘り返し始めた。
何度もそうしていたのだろう、土は掘り返しやすくなっていて、すぐに妻の骨が出てきた。

娘はそれを――あろうかとか、貪り始めた。

毎晩そうしていたのだろう。
骨はあと少しだけ、頭蓋骨のみ残っていた。
娘は踵の骨を食べ終わると、頭蓋の骨に手を伸ばした。

「な、なに、なにを、している」

男は、意を決して、そう言った。
すると、娘は衰弱した顔のまま振り返って、笑う。

『おや、どうなさったのですか？あなた』

その声は、死んだはずの妻のものだった。
男はその場に腰を抜かして、後ずさる。

「なん、で」

漸く零した、言葉。
その言葉に、“妻”はくすりと笑った。

『もう誰も娶らないと、おっしゃったではありませんか』

そして、狂気の混じった顔で、口の端をつり上げた。

『ですから、私のために――若くて美しい“器（からだ）”を用意してくれたのでしょう？』

亡骸を喰らわせることで、男の妻は娘の身体を徐々に乗っ取っていたのだ。
そして、残すところは、あの頭蓋骨だけだった。

「う、うわぁぁぁあああぁっ！！！」

男はそう叫ぶと、“妻”を押しのけて頭蓋骨を掴んだ。
そしてそれを、崖の方へ向かって投げ捨てた。

その男の首に、白い手が、巻き付く。

『ふふ、あれは猿の頭蓋骨ですよ』

追い詰められたことを理解する。
だが、何もかもが、手遅れだった。

『ずぅっと一緒に、在りましょう』

その後、男の姿を見たものも、女の姿を見たものもいない。
だが、誰もいないはずのその夫婦の家には、今でも時折、明かりが灯るという――。

――→――

蝋燭を消して、息を吐く。

「以上です」
「あわわわ」
「うぅぅぅ」

だんだんと追い詰められてきた、レイアと奈津。
椿もそろそろ、限界だった。

「大丈夫、私の話は、そんなに怖くない」

そう言うラミネージュに、椿たちは内心安心していた。
いつも微妙にずれたことを言う当たりで、きっと生理的な恐怖というベクトルで話をするのだろうと、踏んでいた。

ラミネージュは蝋燭の前に立つと、火を消した。

「いやいや、早いからっ！」

奈津が慌てて、もう一度火を点ける。
ラミネージュは満足したような顔で、頷いた。

この時点で、椿たちから緊張感は抜けきっていた。
そのことに、心の中で感謝を述べる。

「始めます」

ラミネージュはまずそう前置きして、最後の怪談話を始めた。

――←――

その少女の特徴を一言で表すなら、そう――“平凡”で事足りるだろう。

特に美人でも、醜悪でもない。

成績は中の上だが、上の下というのには少し足らない。

友人の数もそこそこで、とくに険悪な関係はない。

家族仲も良好、といっても、一般家庭としてというレベルだ。特別仲が良い家庭ではない。

彼女は、その日もいつものように、学校から家へ帰るために、住宅

街を通っていた。
その日の彼女について言うことがあるとすれば――そう、その日は、少しだけ運が悪かった。

学校では嫌な教師に当てられて、体育では盛大に転んで足を擦りむいた。
保健室へ行ったら、いつもよりもしみる消毒液を使われて、少しだけ目を潤ませた。
放課後は教材を運ぶことを手伝わされて、下校する頃には夕方になっていた。

今日は運が悪いと自覚していた少女は、足早に帰路を急ぐ。
もう少しで家に辿り着くという曲がり角を、安心しながら曲がった。

――ぱき

足の下で鳴った音に、身を竦ませる。
何を踏んだのだろうと足をどかせると、そこには罅の入ったコンパクトミラーがあった。

誰かの落とし物なのだろう。それならば悪いことをしたと思いつつ、せめて接着剤で修復しようと、そのコンパクトをポケットに入れて持ち帰る。

家に帰り、家族と食卓を囲み、入浴して、ベッドに潜り込む。
今日のコンソメスープは美味しかった、明日も食べようと考えながら、緩やかに眠りに落ちた。

そして、何事もなく、朝を迎えた。

目覚まし時計を止めて、ベッドから這い出る。
いつものように制服に着替えて、二階の自室から一階のリビングに降りる。

昨晩のコンソメスープの匂いにつられて食卓へ顔を出すが、そこには誰もいなかった。
キッチンにも、庭にも、ベランダにも、人影が見えない。

煎れかけのコーヒー、テーブルに置かれた朝刊、玄関に用意された弟のスポーツバック、煮込まれているコンソメスープ、犬小屋の前に置かれたドッグフード。
つい先ほどまで誰かいたという、人の気配があるのにもかかわらず、そこには誰もいなかった。

少女は、わき上がる不安を抑えるように、家中をかけずり回る。
父の書斎、母の趣味の部屋、両親の寝室、弟の部屋、お風呂場、トイレ、物置……。
全ての部屋を見て、完全に家の中に、誰もいないということに気がついた。

ローファーを引っかけて、街に出る。
周囲に人影は無いのに、誰かいたという名残がある。

近所のコンビニ、馴染みの料亭、老夫婦のクリーニング屋。
友人の家、学校、交番、消防署、病院、駅、バス停。

そのどこにも、人影は無い。
だというのに、生活感は残っていた。

息を荒くしながら、家に帰る。

そこでふと、コンソメスープを思い出した。
とたんに家族が恋しくなり、母が趣味で買った大鍋に近寄る。
火がついていて、沸騰していたので慌てて止めた。

その匂いはかぐわしく、少女は鍋の蓋を開けた。
お玉を使って、かき混ぜる。すると、一際大きな具にぶつかった。
そんな大きな具が入っていたのかと疑問に思いながら、お玉を持ち上げる。

そこには――――黒い髪に覆われた、母親の頭部があった。

「ひっ」

お玉を落として、後ずさる。
唐突にこみ上げた吐き気を我慢できずに、トイレに駆け込む。

出てきて、おそるおそるコンソメスープを覗き込む。
頭頂部が見えていたことに、少女は腰を抜かして座り込んだ。

声も出ずに、這いながら玄関まで来る。
弟のスポーツバックをどかそうとするが、一向に動かない。
正常な判断力も、冷静な思考も停止していた少女は、そのスポーツバックのファスナーを降ろした。

そこに詰まっていたのは、サッカーで鍛え上げられた、弟の両足だった。
不思議なことに出血はなく、綺麗に“断面”が見えていた。

「――――っ」

最早悲鳴を上げることも出来ずに、家の中を走る。
外に出ようとしたが、犬小屋から見えた赤黒い固まりに、怖くなって戻る。

そして、悩んだあげく、父の書斎に飛び込んだ。
幼い頃はよくここで遊んだと、古い記憶を呼び起こして、平静を保とうとする。
昔、壊してしまって怒られた、ボトルシップを思い出して、少女は無性にそれが見たくなった。

書棚を開けて、一番上。
そこへ手を伸ばし、ボトルを手に取る。
ゆっくりとそれを眼前に持って行き……取り落とす。

――がしゃん

ガラスが割れて、中身が出る。
どうやって詰めたかもわからない、父の両手首が、そこにあった。

「あ、あぁぁあぁぁぁあああぁっ！！！」

声を上げて、自分の部屋に飛び込む。

そして、原因を探ろうと、自分の部屋の一角に目をやって、気がついた。
自分の勉強机の上に置かれた、コンパクト。怪しいものなど、これしかない。

少女はそれを掴むと、思い切り床にたたきつけた。
少女の手によって修復されたコンパクトは、少女の手によって無残

に砕け散る。

すると、周囲の空間に罅が入って、だんだんと景色が崩れ始めた。

そのことに歓喜の笑みを浮かべて、少女は気を失った。

――そして、翌日、何もごともなかったかのようにベッドから出た。

安心するために、リビングに走る。

コンソメスープの匂いは、悪い夢の中よりも強かった。

食卓に顔を出すと、床がびっしょりと濡れていることに気がついた。

それは、台所から流れ出した、コンソメスープだった。

少女がおそるおそる台所を覗きこむと、そこには倒れた鍋と――母親の、頭部があった。

「あはっ」

少女はその光景に、ただ狂ったように笑い続ける。

その後、発見された少女は――衰弱した身体で笑い続けていたという――――。

――→――

ふぅっと蝋燭の火を消す。
ラミネージュの顔は、無表情でよくわからない。
いつものことだが。

「ぼく、きょう、ねむれないかも」

消え入りそうな声で、奈津がそう呟いた。
椿とレイアも、涙目で何度も頷いた。

肝心なところで予想を外れた行動をとるのは、ラミネージュの習性だった。

蝋燭を片付けて、図書室を出る。
風の音と床が軋む音が、いちいち怖い。

四人は、ぴったりと寄り添って、歩いていた。

暑いかと問われれば、きっと暑いのだろう。
だが、手にはびっしょりと冷や汗をかき、背筋を通る寒気に凍えて

いた。

図書室から出てから、正面玄関への道のりが、妙に長く感じる。
物音がする度に、四人が同時にびくりと震える。

「奈津、貴女、ヒーローでしょう？お化けくらいどうにかなさいよ」

冷静に聞こえるのは、声だけだ。
身体は、石のように固まっていた。

「ヒーローにも、出来ないことはある」

涙目だ。
ぎゅっと、両隣の椿とレイアの手を握る。
椿も、隣のラミネージュの手を握った。

「ねぇ、もうエアコン使えるよね？みんなで一緒に寝よう？」
「さ、賛成！僕は賛成っ！」
「し、仕方ありませんわねっ！お願い致しますわっ！」
「助かる」

椿の提案に、勢いよく賛成する。
ラミネージュに抑揚はないが、誰よりも速く首を縦に振っていた。
残像が見える。

――ことん

嫌な……とても聞きたくない、音がした。
さび付いているかのような、ぎぎぎ、と軋む音を発しながら、ゆっくりと振り返る。

プラチナブロンドの髪に、青のエプロンドレス。
廊下の真ん中に鎮座するのは、不自然すぎるビスクドール。
――おいていかないで
一斉に、走り出す。
応龍祭の時よりも、ずっと速い。
「レイアっ！君、人形捨てたことあるのっ！？」
「私のメアリーちゃんは、毎日手入れして飾ってありますわっ！」
混乱して、言わなくてもいいことを言ってしまっているのだが、誰も気がつかなかった。
気にしている余裕があれば、足を動かす。
階段を勢いよく、降りる。
後ろを振り向くと、ビスクドールを抱いた、登山服の男性が立っていた。
「おい」
もう、振り向かない。
ただただ走る。
「あわわわわわわっ」
「うぁうぁうぁうぁうぁっ」
「えぅっえぅっえぅっ」
「――っっっ」

最早自分でも、何を言っているのかわからない。
ただ、途中で人骨のような白いものを口に含んだ女性の姿からは、全力で目を逸らした。

「ここ、この次って、まさか」
「むむむむ、無限ループですの？！」

最早涙目どころではない。
落涙していた。

漸く正面玄関に辿り着く。
その玄関に鎮座するものは――――。

「コンソメスープだァーっっっっ！？！？！！」

沸騰する、鍋。
かぐわしい、スープの香り。
そして、ごとんと、中身が零れる。

中から出てきたのは、男性の顔で骨を咥えたビスクドールだった。

――ブチッ

何かが、切れる音がした。
幻聴だろう、きっとそうだ。
でもその音は、確実に空気を震わせていた。

同時に、戦鎧を装着して、魔力を流す。
最初に動いたのは、レイアだった。

「【豊穣を司りし・大いなる水の神よ・エルストルの契約に基づき・我らを害する者を・その力強き激流を以て・大河の底に沈めよ】」

激流が、ビスクドールを押し流す。

この攻撃が当たった時点で、その正体が邪霊であるのは、確定だった。

結界を予備と切り替える隙を突いて、入ってきたのだろう。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

次に、椿が動く。

駆け寄り、炎刃を以て、すれ違いざまにビスクドールに斬撃を入れた。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に疾風の加護を授けん】」

それを、高速で回り込んだ奈津が、蹴り上げる。

最後にラミネージュが、装霊器をパージして、長剣を出した。

「【雷霆纏いし・稲妻の神よ・戦車を駆りし・苛烈なる英雄よ・力の象徴たる・金剛杵を用いて・世を乱す悪を討て】」

巨大な雷の、槍のようなものが出現した。

ラミネージュがそれに手をかざすと、雷の槍は空に浮かんだビスクドールに飛来して、跡形もなく焼き払った。

後に残ったのは、静寂だけ。

四人は再び手を繋ぐと、げんなりとしながら寮へ帰る。

その日、エアコンの中で、四人は寄り添っても中々眠れなかった。

そして、しばらくは一人でトイレに行くことが出来なくなるのだった――。

第十三話　Ｌｅｔ，怪談！（後書き）

最近暑くなってきたので、怪談です。
書いていて、私は寒くなりました……。

次回は、第二章への繋ぎになります。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第十四話　これからへ

長い夏休みも、終わりに近づいていた。
自分の部屋で、奈津は一人真剣な顔で書類を見ていた。

一学期を終えて、夏休みを過ごし、思うところがあったのだ。

それは、四人で集まる機会が少ない、ということだった。
集まるのは、基本的に昼食時。ＨＲも、クラスによって長さが違うことがあり、待つぐらいだったら寮で集まった方が早い。

だが、奈津はそれを“味気ない”と考えていた。

ならば、どうするべきか？
それは、この学院の、あることの“規定”の緩さに答えがあった。

奈津はペンを取ると、申請の名称欄に記載する。
力強く書かれた、七文字。略称のところには、カタカナと漢字で合わせて五文字。

【英雄考察研究会】――――略して【ヒーロー研】……。

そう、放課後に集まることができ、予算の申請も厳しくなく、何より三人以上で設立できる――“部活動”の、申請だった。

夏休み終了まで、あと一週間を切った。
宿題をすっかり忘れていた奈津は、椿たちに手伝って貰いながら、頭を抱えていた。

「ぬぅ……ねぇ、椿、ここは？」
「こっちの文章をよく読んで。それから、ほら」

「レイア、ここなんだけど……」
「こちらを代入なさい」

「ラミ、あのさ、ここ」
「三十七ページ」

所々聞きながら、詰まりながらも終わらせていく。

ちなみに、書き写したり、感想文を書いたりといった作業は、既に終わらせていた。
そういったものだけならば、得意なのだ。

かりかりと宿題を続ける。
椿たちはもう終わっているので、各々に過ごしていた。

ラミネージュが妙に精巧に奈津の様子を模写していて、レイアは器用な手先を生かした人形作りをする。その間に、椿が人数分の冷やし中華を調理していた。

「あと、すこし」

ラミネージュが、模写の手を止めて呟いた。
完成された絵は、ラミネージュの部屋に飾られるようだ。

「これで……終わりッ！」
「切りの良いところで、こっちもできたよー」

奈津が両手を挙げて、終了を宣言する。
同時に、椿が持ってきた冷やし中華を、食卓に並べて囲む。

「はぁ～……みんな、ありがとう！助かったよ～」

宿題を片付けながらそう告げる奈津に、レイアは肩を竦めた。

「今度からは、計画を立てて、直前に焦らないようになさいな」
「うぅ……ごもっともです」

ぐでっとうなだれる奈津の肩を、ラミネージュがぽんぽんと叩いて

慰める。
むしろそこは、調子に乗らせるなと、レイアがツッコミを入れた。
そして、微笑ましいものを見る目で椿に見られて、レイアが顔を赤くして目を逸らした。
彼女たちの、“いつも”の光景である。

「ねぇ、みんな」

奈津がぽつりと呟いた。
呼ばれて視線が集まると、奈津は照れて目を逸らす。
照れるくらいなら言うな、そう思いつつも照れて目を逸らすレイアは、似たもの同士だ。

「こほんっ……僕たちって、学校が始まったら、そうそう集まれないと思うんだ」
「そうかな？……」

椿が即座に答えた。
集まれないことはない。だが、共有する時間はそんなに多くない。
だから正確には、長く一緒に居られない……なのだが、そこまでストレートには言えなかった。恥ずかしいのだ。

「だからさ、放課後に堂々と集まれる場所があったら、いいと思うんだ」

名門大家の双璧である、オールアクセンとエルストル。
二人はその家柄ゆえに、人目を集める。誰かの部屋に集まっていると、椿たちが彼女たちの“派閥”だと勘違いされかねない。

そうなると、大抵は、粘着質な輩が集まるのだ。

こうしておおっぴらに誰かの部屋に集まることが出来るのは、生徒の少ない夏期休暇期間中のみ。集まれないこともないというのは本当だが、椿はその辺りを失念していた。

そうレイアが説明すると、椿はひどく感心しながら頷いた。

レイアはこの、子犬のような目が苦手だった。抱き締めたくなるのだ。

伊達に、人形に名前をつけて可愛がる程の、可愛い物好きではなかった。

「そこで、僕は考えたんだ――部活を作ろうって、ね」

そういって、申請用紙を取り出した。

そに手際の良さと、名称欄に、椿たちは目を丸くした。

……同時に、次からは、こういった準備をするより先に、宿題をやらせようと、こっそりレイアは決意した。だんだん、奈津の保護者のようになってきている。

「それで、この――“英雄考察研究会―≪ヒーロー研≫”なの？」

「そう！過去から現在に至るまでの英雄達と、英雄の在り方、英雄が求めるモノと求められるモノ……そういった、英雄についての様々なことを、考察して研究するんだよ！」

趣味と実益を兼ねた部活である。

奈津が日頃から、あまりに真剣に“ヒーロー”を語るため、洗脳……ではなく感化されはじめていたレイアとラミネージュは、いいかもしれないという四月では考えもしなかった感想を持っていた。椿は隠れヒーローファンなので、始めから奈津側だ。

「調べてみたら、この学校、部活を設立するのに必要な人数、三人以上なんだよね」

この時点で、四人。

三人以上という条件は、クリアしている。

「それから、活動に対する熱意が問われるんだけど、僕はそのことに対してなら一週間は語り続けられる自信がある……喉が潰れなければ」

確かに、そうだろう。

そして、終わる頃には教師も“ヒーロー”に洗脳……感化されているのだ。

「で、家柄によるコネクションの形成目的で入部できないように、入部試験も設定できるみたいなんだ。これは僕が、ヒーロークイズを作っておくよ」

偏った無いようになりそうで、ならないだろう。

奈津はヒーローを目指しているだけあって、色々勉強をしている。

その熱意を勉学に向けることがないのが、彼女の友人達の、悩みの種だ。

「関係ないこと、といって、文句が来ない？」

それでも、趣味や好みがはっきり出るであろう、奈津の入部試験。

それが気になって、ラミネージュが問う。

「はっはっはっ――――“ヒーロー”への憧れなくして、ヒーロー

研究はできないのだよ」

奈津は顎に手を当てて、ニヒルに笑った。
彼女は、男性的な仕草がよく似合う。

妙な説得力を持った、言葉。
これに対抗するには、独特な価値観で反論しなければならないだろう。
つまり、変な感性を持っていないと、気圧されて言葉に詰まるということだった。

「だから、みんなでやろうよ！部活！」

最後は、やや強引にそう締めた。
“だから”……そう言ってはいるが、本心は一緒に居たいという感情が、一番強い。
そのことを隠すために強引に言ったのだが、ほんのりと朱色が浮かんだ頬から、彼女が照れていることが見て取れた。

まずはじめに動いたのは、ラミネージュだった。
ボールペンを取り出すと、部員の欄に名前を書く。
意図に気がついたレイアが、素早く自分も部員の欄に名前を書いた。

そして出遅れた椿が、戸惑いながらも名前を書く。
その欄は、副部長だった。少しだけ恥ずかしいので、平部員が良かったのだが、先を越されてしまったのだ。

それでも、誰一人として――――参加しないという、選択肢は選ばなかった。

奈津は満面の笑みを浮かべると、ボールペンを手に取った。
そして、部長の欄に、名前を書く。

「ありがとう、みんな」

小さく、呟く。
それは椿たちの耳にも届いていたが、あえて返事はしない。
その程度は、わかり合える、友人なのだ。

奈津は、椿たちを連れて、職員室に向かう。
そう、次に必要なのは――顧問捜しである。

†

職員室は、生徒が行き来しやすいように、と一階に広いスペースをとっている。
夏休みでも、教師は最低二人は残っている。今日の担当は、椿たちの担任教師である、楓だった。

よく知る教師の方が良いだろう。
そう考えて、奈津はこの日にみんなに言おうと考えていたのだ。
はじめから、みんなに断られるなどという考えは、頭になかったのだ。

ノックをして、入出する。
すると、書類整理をしていた楓が、顔を上げた。

「うん？神崎に佐倉……後ろの二人はエルストルにオールアクセンか？どうしたんだ？」
「実は――――」

奈津が部活のことを話すと、楓はメンバー見て驚いたが、すぐに快活に笑った。

「ははっ、そうかそうか！……高校生活は短いからな。なるべく、楽しいことは見つけた方が良い。私は賛成するよ」

そう言って、申請用紙にサインをして判を押した。
そして、顧問の欄を見て、どうしようかと悩む。

「うーん……そうだ、顧問のことで頼みがあるんだが、聞いて貰えるか？」
「え？……は、はい」

頼みに来たのに頼まれるとは思っていなかったので、一瞬声を詰まらせた。
なんだろうと首をかしげながらも、聞いてみようと返事をしたのだ。

「実はな、遠峰先生の後任の先生なんだが……」

遠峰雅人。

その名前は、奈津にとっても椿にとっても、思うところのある名前だった。

奈津は、守られてしまったという後悔にも似た罪悪感で、椿は、命を賭して戦って打ち倒したという過去の残滓。

まったく異なる理由だが、思い悩む人物は、同じものだ。

「……まだ新人の若い先生でな、顧問の部活を持っていないから、就けてもいいか？新しい部活で、解らないことだらけで進んだ方が、双方の為になると思うんだが、どうだろうか？」

奈津は、椿たちと顔を見合わせると、頷いた。

「はい、こちらからも、よろしくお願いします。ありがとうございました！」

「はっはっ、そう畏まるな。今呼んでくるから、応接室で待っていろ」

席から立ち上がって、背を向けて歩き出す楓を見送ると、言われたとおりに、職員室の隣に設置されている応接室に入る。そこで漸く、息を吐いて緊張を解いた。

「すんなりとおってよかったぁ～」

ふぅ、と息を吐いて、大きく背中を伸ばす。

骨の鳴る心地の良い脱力感に、奈津はゆっくりと身を任せた。

「新しい先生、かぁ……どんな人なんだろうね」
「そうですわね……まぁ、そうそう悪い人が入ってきたりはしない……？」

そこまで言って、言葉を詰まらせた。
三上院慎二郎による魔人の事件は、周知のことだ。
なにせ、それで椿と奈津は、レベル四になったのだから。

更に言えば、椿は学院に邪霊王が潜入していたことも知っている。
それも、新しい先生が担当する科目の先任教師だったのだから、これで不安にならないはずもなかった。

とはいえ、待ち時間では気を抜いておく。
何事もほどほどに。緊張するのもほどほどにしておかないと、ストレスが溜まるのだ。

――コン、コン

そうして待つこと、五分強。
控えめなノックと共に、ドアが開いた。
入ってきたのは、黒い髪をショートボブにした、空色の目の女性だった。
身長が低く童顔な為、椿たちと同年代の“少女”といっても通じそうな顔立ちだ。
ややたれ目で、良く言えば穏やかそうで、悪く言えば気の弱そうな女性だ。

「は、はじめまして、私が新任教師の、しゅっ……！？」

噛んだ。
思い切り噛んだのが、口を押さえて蹲る。
その後ろで、楓が頭を抱えて首を振っていた。

その様子に、不安を払うことが出来て、椿たちは息を吐いた。
あまりに痛そうで、演技には見えないのだ。少し、涙目になっている。

応接室で、向かい合うように座る。
奥から奈津、椿、レイア、ラミネージュ。
向かいは楓、女性という順番だ。

「うぅ……お恥ずかしいところをお見せしました」

女性はそう言って頭を下げる。
そして、大きく深呼吸をして、今度こそと自己紹介をした。

「すぅ、はぁっ……改めまして。二学期から歴史学を担当することになった、新任教師の東雲神楽です。気軽に、神楽先生と呼んでくださいい」

そう言って、“へにゃ”っと笑った。
威厳も何もない様子に、横で楓がため息を吐く。
新学期が始まったら、莉子に説教される神楽の姿が、目に見えて予想できた。

「えーと……部長の、佐倉奈津です！よろしくお願いしまーっす」

流れを変えるためにも、奈津が先陣を切って自己紹介をした。
それに、椿が追従する。

「副部長をすることになった、神崎椿です。よろしくお願いしますね」

解らないように小さくため息を吐いて、レイアも続く。
更に、ラミネージュも続けて言った。

「部員の、レイア・イルネア・エルストル、ですわ」
「平部員Ｂの、千堂・ラミネージュ・オールアクセン」

当然、Ａはレイアと言うことになる。
レイアは、その表現に眉をしかめた。

「はい、お願いします！」

平身低頭。
これでは、どちらが生徒か解らない。見た目的にも。

「それでえーと……英雄考察研究会――ヒーロー研、ですか？」
「はいっ！過去から現在に至るまでの英雄を、考察、研究するのが活動目的です！」

熱のこもった奈津の主張に、楓は苦笑いをしていた。
奈津は、進路希望に“ヒーロー”と書いていたのだ。
一年生の段階で、ただ展望を見ておく程度だったので苦笑いで済んでいるが、今後はそうはいかないだろう。奈津は、本気なのだ。

楓は、仕方がない、という態度で神楽を見て……固まった。
奈津のヒーロー談義を、きらきらとした目で聞く神楽。
その様子に奈津はますます熱が入り、隣の椿も嬉しそうだ。

楓がゆっくりとレイアの方を見ると、レイアはゆっくりと首を横に振った。
楓は、レイアとラミネージュだけが、救いだと安心した。

「いえ、ヒーローならそこは必殺技ですわ」
「小手先は、不要」

類友だった。
楓は、学生時代に世話になった胃薬が、少しだけ恋しくなるのだった――。

†

夕暮れの、帰り道。

八方丸く収まる形で了承を得ることが出来て、椿たちは満足げに顔を合わせた。

部室は、余っている場所を、後日通達される手はずになっている。
活動は、新学期からだ。

「いやー楽しみだね、部活動！」
「先生も理解ある方で、助かりましたわ」
「うん」

奈津が、笑顔で背を伸ばしながら、そう言った。
それに、レイアとラミネージュも頷く。

椿は、そんな三人から一歩前へ出て、振り向いた。

「これからも、いーっぱい……思い出を、作ろうね」

そう言って笑う姿は、どこか儚いものに見えた。
もっとも、そう感じたのは奈津だけで、他の二人は顔を赤くして照れていた。

奈津は頭を振って、椿に並ぶ。
そして、その手を優しく握った。

「思い出を作って、大人になったら語り合う。子供を産んでも孫が出来ても、ずっと変わらない……でしょ？椿。もちろん、レイアとラミネージュも」

奈津がそう言って、快活に笑う。
そう言われてしまうと、そんなことないとは、誰も言えなかった。

「うん……うんっ！」

椿が笑うと、それにつられて奈津も笑う。
そして、レイア、ラミネージュと繋がって、笑顔の輪が広がっていった――。

†

夕食を四人で食べて、各々の部屋に戻る。
椿はシャワーを浴びて、洗面所で項垂れた。

「っ……はぁっ、はぁっ、はぁっ」

息が荒くなるのは、頭痛と胸の痛みのせいだった。
熱を持って、熱くなる。身体に巻いたタオルが床に落ちる。
あらわになった胸元には、明滅する――“遮断”の紋章があった。
強大な力を持つ、邪霊王。

その力を吸収して、身体が対応しきれなかったのだ。
それにより、頭痛と熱、胸の痛みという形で、身体が椿に警告を発していた。

椿は、そんな自分が、怖かった。
熱と痛みで、壊れてしまう。そう考えるのは、もちろん怖い。
だが、それ以上に……“慣れる”ことが、怖かった。

この痛みを感じなくなったら？
邪霊王の力さえも、扱えるようになったら？

それは、本当の意味で――“外れたモノ”になるのではないのか？

そう考えると、身体が震えた。
事実、だんだんと痛みは減っている。

このまま完全に、痛みがなくなった時――。
椿は、自分の“心”が“人間”でいられるのか？

そのことが、ひどく椿の心を蝕んでいた。

「沢山、思い出を、作るんだ……っ」

負けられない。
椿は、涙に濡れた顔で、そう一言――呟いた。

二学期まで、一週間もない。

彼女の転機は、目前まで迫っていた――――。

第十四話　これからへ（後書き）

今回は、繋ぎのお話でした。
次回から、第二章に入ります。

手が腱鞘炎気味なので、これ以上の連日投稿は厳しくなりそうです。
一週間で十万字は、やり過ぎだったか……。

ですが、多少遅れても、止まることはないように、頑張ります！

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次章も、よろしくお願いします。

第十五話　英雄と猫と足音　―第二章・開始―

雨の日だった。
ざぁざぁと、激しい雨が降る。

学院の敷地の端。
旧校舎よりも更に向こう側に、草原があった。

激しい戦いでもあったのか、所々、草が燃えて、枯れていた。
その場所に、一匹の猫が在った。

猫は、弱々しく一声鳴くと、ただ一点を見つめて歩き出した。

その視線の先には、生徒達が暮らす、学院寮があった――。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

長かった夏休みが終わり、始業式も終わると、授業が始まる。
二学期最初の授業は、歴史――新任教師、東雲神楽の授業だった。

童顔で小柄なため、神楽はちまちまと動く。
その姿は、同年代の少女が一生懸命頑張っているようで、微笑ましい。

神楽は教壇に立つと、まず丁寧に頭を下げた。

「初めまして。遠峰先生の後任として歴史学を担当することになった、東雲神楽です。みなさん、よろしくお願いしますねっ」

そう言って、笑う。
見るものを和やかな気分にさせる、癒し系の笑顔だった。

「それではっ……授業を始めたいと思います。よろしくお願いします」

神楽は丁寧に頭を下げるとチョークを手に取った。
初回のテーマは――“天恵”と書かれた。

「二学期最初の授業でお話しするのは天恵……俗に謂う“超能力”というものについて、お話を進めていきたいと思います」

生徒の八割が、首をかしげる。
超能力という響きは、いつの時代でもどこの世界でも“うさんくさい”のだ。

「古代より、超能力者と呼ばれる存在は、数多く伝承されてきました。ですが、その九割は、特殊な精霊魔法を扱うことのできる、魔法使いでしかありませんでした」

彼らは、自分を超能力者と名乗ることによって、“特別”であろうとした。
そうすることによって、自分を擬似的な“神”として、教主たる立場に座ろうとした。
そういった存在は、これまでも数多く確認されていた。

「最初に、正式に超能力を扱う者が確認されたのは、今から二十二年前のことです」

神楽は、そう言いながらやや背伸びをしつつ黒板に書き込む。

「地方に現われた邪霊を倒すために派遣された騎士団に、地元の自警団の青年が協力を申し出ました。当時の騎士様は、それを承諾しました」

黒板に、さらに書いていく。

「彼は、魔力を持たなかったのにも関わらず、岩を持ち上げて邪霊にぶつけていました。それも、魔力を使わない攻撃なのに、邪霊を傷つけるという結果を残して」

魔法でなければ、邪霊は倒せない。

だというのに、彼が持ち上げた岩は、魔法で持ち上げた岩と同等の効果を生み出して見せた。

「当時は、騎士様も“向こう側の子供達”ではないのか、と判断して、彼らの立場の確立のためにも、と協力を承諾されたようです」

向こう側の子供達が、どのような扱いを受けているのか知っていた騎士は、この協力を承諾することで、彼らの立場にかかる重圧を削ろうと考えていた。

「この騎士様は、後に向こう側の子供達を保護する団体……“帰るべき家”を設立し、騎士を引退したあとも、会長として彼らを助けています」

そこまで話して、神楽は「このお話は、また次の機会で」と切り、本題に戻る。

「……ですが、彼は邪霊に拐かされた、という過去はありませんでした。そこで詳しく調査を続けた結果、彼は生まれながらにして特別な能力を持っていたことが解りました」

そして、黒板に“天恵者”と書き綴る。

「そのように特別な能力を持つ人間を、私たちは“天恵者―≪ギフトホルダー≫”と呼称しています。要注意ポイントですから、覚えておいてくださいね」

天恵者の文字の下に、黄色いラインを引いて強調する。

これはテストに出るだろうな、と生徒達もノートにラインを引いた。

「また、先天的な天恵を“先天天恵―≪プロギフト≫”と呼び。逆に後天的な天恵を“後天天恵―≪エピギフト≫”と呼びます」

天恵者の下に書き、今度は青いラインを引いた。

次点で重要ということだろう。

「身近な天恵者は、私の先任の遠峰先生と……」

ちなみに、雅人は天恵者ではない。

情報の撹乱のために、邪霊として邪霊を感知する能力と、遮断の力によって天恵者を語っていただけだ。

そのことを唯一知っていた椿は、今更ながらに情報を操作しきった理由に納得した。

「……あとは、私も天恵者です。っと、今日はここまでですね。ありがとうございました」

神楽は最後までのほほんと授業を終えて、退出していった。

この適度な、肩の力の抜け具合は、雅人の授業では感じ得なかったものだった。

†

放課後は、いよいよ部活動の開始だ。
空き部屋を部室として提供される手はずになっていたので、椿たちは提示された場所へ早速向かうことになった。

「ねぇ、この地図……どう見ても校舎から離れるんだけど」

奈津が、げんなりとそう呟いた。
奈津の手元の地図を、椿も覗き込む。

「えーと……あれ？本当だ」
「ちょっと見せてみなさい」

レイアも、その地図を覗き込む。
すると、確かに校舎から離れていた。
――そして、その場所から目を逸らすのを、やめる。

「旧校舎に、見える」

ラミネージュが、どこか嫌そうに呟いた。
そう、地図で提示された場所は、どう見ても旧校舎だったのだ。

「崩れたりとかは、大丈夫なのかな？」

それなりにぼろぼろだったはずなのだ。

しかも、怪談の時の邪霊騒動で、校舎にダメージが入っている。
そう考えると、非常に危険だ。

不安を押し隠しながら、旧校舎に到着する。
そのおどろおどろしい雰囲気は、夏休みのトラウマを掘り返させる。

「で、旧校舎のどこ？」

奈津が、地図を見る。
そして、首をかしげた。

「あれ？……裏庭、になってる」

宝の地図の如く印された、赤い×印。
その示す場所は、旧校舎の裏側だった。

訝しがりながらも、裏に回る。
そこには――お嬢様学院らしからぬ、真新しいプレハブ小屋があった。

扉に張られた、一枚の紙。
そこには、何故か学院長直筆で伝言が綴られていた。

【青春と言えば、プレハブだよね】

思わず、レイアが頭を抱える。

どこで聞きつけたのか？
――ただ単に、申請の最終確認は学院長が行うというだけの話だった。

「と、とりあえず、中に入ってみよう」

奈津が提案して、頷く。

椿は、出来たばかりの部活に対して二階建てのプレハブ小屋というのは、いささか大きいように感じた。一部屋七坪とかなり大きく、旧校舎の施設から持ってきたため、水道も電気も通って、風呂場とトイレ付き。

プレハブと入ったが、見た目だけでかなり豪華な仕様だった。

もっとも、そう感心したのは椿だけで、奈津達は「少し小さいかな」などと考えていた。

暮らしてきた、環境の差である。

中は、冷暖房完備の厨房付き。

冷暖房は、ここに通っている電気を使う形なので、施設点検の際も使用できるようになっていた。これで、最悪ここに寝泊まりすれば、点検中の暑い日も乗り越えられる。

ゆったりとした広さを堪能できる仕様だ。

ここまでくれば、ここで生活することが出来るだろう。

「さて！初日はまず、英雄、ヒーロー達の名鑑でも作ろうか！」

奈津は、生き生きと言った。

よほど楽しみにしていたのだろう、目が輝いていた。

「とりあえず、知っているヒーローをあげていこうよ」

「ヒーロー……英雄と言われている人たち、ですわね」

奈津が頷くと、とりあえず代表的な人間を思い浮かべようと、顎に手を当てて考え始めた。
椿とラミネージュも、同じように、頭の中から名前を探す。

――コン、コン

レイアが思い浮かんで答えようとした時、丁度ノックが響いた。

「すみませんっ！遅れました！」

入ってきたのは、神楽だった。
神楽が入ってきて始めて顧問の存在を思い出した奈津達は、冷や汗をかきながら優しく迎え入れた。

「うぅ、初日から遅れてしまったのに、みなさんお優しいのですね」

項垂れながらも感激する神楽に、四人は目を逸らした。
――罪悪感である。

「えーと……そう、とりあえず、覚えている英雄をあげてみようって事になったんです」
「なるほど、良い内容ですねっ。それなら先生も……」

とりあえず妙な空気を流すことが出来たので、改めてレイアが口を開く。

「やはり、現代の英雄と言ったら“カイン・アッシュ・ミリゴート”ではありませんこと？」
「えーと……騎士団元帥？」

現役の魔法使いで、この国では唯一のレベル十――金色のクラウンを持つ騎士である。
いまいち魔法使いに疎い椿でも知る程の、大魔法使いである。

「最年少の元帥で、確か二つ名が……」
「“天災―≪オーバーロード≫”」

奈津が首をかしげて思い出そうとしていると、横合いからラミネージュが答えた。
およそ“正義の味方”には似つかわしくない二つ名である。

「僕は、“華王”ルイン・フルクトさんをあげておこうかな」

奈津が、頷きながらその名を出す。
椿が聞き覚えのない名前に首をかしげると、神楽が捕捉をする。

「魔法の使えない魔法使いって言うのが、一番近いでしょうか？肉体強化しか使えなかったから、身体と技術のみを鍛えていたのです。それで、詠唱を封じる能力を持った魔人を、鍛え上げた肉体と錬磨した技術のみ。……ダメージを与えるために薄く魔力を纏っていたけど、それだけで倒しちゃったんですよ」

のほほんと説明する神楽。
同じ歴史学教師の雅人とは違った意味で、聞き取りやすい説明だ。

「すごい人なんですね……」

思わず、感心してしまう。
そして、程度は全く違うが、椿は一瞬イストのことを思い出してい

た。
椿は、そもそもの彼の精霊自体、知らないのだが。

「それなら私は、大寺門星矢、で」

ラミネージュが、小さく呟いた。
大寺門、という名字なら、椿も知っている。
応龍杯で共に戦った、友達だ。

「大寺門って、武闘の名門、ですわよね？……ヒーローなんて、いたかしら？」
「大寺門星矢は、対邪霊で伝説を作った英雄じゃないからねぇ」

知っているのか、奈津はそう何度か頷きながら、零した。
そこで、漸く思い至ったのか、神楽が手を打つ。

「あぁっ！星砕きの！」

だが、その一言で更に解らなくなる。

「ねぇ、奈津。星砕きって？」
「その人、魔法で肉体強化して、半径二キロ位を吹き飛ばす小型隕石を、迎撃したんだよ」

すなわち、色物英雄と呼ばれる人物だ。
やったことはすごいことだし、多くの人を救った英雄と言える人物だろう。
ただ、やった理由が“腕試し”なのだ。普通は隕石で試さない。

「大寺門の先々代かその前くらいの当主の人なんだけど、まだご存

命だよ。長老やってるって聞いたことがある」
「大寺門先々代当主で、現在はご意見番という地位にいますね」

奈津の説明に、神楽がすかさず捕捉をした。
生きる化石などと呼ばれる老人で、未だに大寺門において“最強”を名乗っている。
ちなみに、大寺門は未だ、彼に勝つことが出来る武闘家は輩出していない。

「椿は、誰か思い浮かぶ？」
「えーと……」

椿は、どちらかというと架空のヒーローが好きだった。
魔法使いの英雄は、あまり知る機会が無く、また祖父母から話してくれる以外では、聞くこともなかったのだ。

「確かおじいちゃんが、同僚の“京佳”さんって人がすごいって言ってた」
「京佳、さん？聞いたことがあるような？」

ヒントが少なかったためか、奈津が首をかしげる。
その横で、神楽とレイアも同じように首をかしげていた。

そんな微妙な空気を打ち破ったのは、ラミネージュだった。

「それ、お祖母さま。千堂京佳」
「っえ？！ラミのおばあちゃん！？」
「うん」

そこまで聞いて、神楽が再び手を打った。

「“雷迅氷華”！」

それが、京佳の二つ名だった。
イストに、子供には優しく、と幼い頃から叩き込んだ、張本人である。

「数々の事件を解決した、騎士団の“三騎士”の一人ですよっ」

神楽は、どこか興奮しているようだった。
英雄好きとしては――ヒーローファンとしては、身近にヒーローがいるというのは大きいことなのだ。

「神楽先生は？」

身内のことでつまらなかったのか、ラミネージュが先を促す。
神楽は、興奮してしまったのが恥ずかしかったのか、顔が赤いことをごまかすように、はにかんだ。

「私はやっぱり、大松原幸太郎さん、かな？」
「“帰るべき家―≪ホーム≫”の設立者で、現会長さん、ですよね」

奈津が、優しい目で、そう言った。
奈津が“向こう側の子供達”であるということを知っているのは、彼女の両親と事件に関わった人間、そして椿だけだ。

だから椿は、そんな奈津を優しい目で見ていた。
もう、大丈夫。奈津はもう、大丈夫なのだ。

†

そうして、英雄について語り合っていると、外が橙色に染まり始めたことに、気がついた。
もうそろそろ、解散しないと、寮母さんに怒られてしまうのだ。

夕暮れの帰り道、もうすぐ寮に辿り着くというところで、椿が足を止めた。

――……。

「椿？」

奈津が、そんな椿に話しかけるが、椿は答えない。

――……ぁ。

「っ！」

弱々しい、声。
それを聞きつけて、椿は草むらに向かって走った。

「ど、どうしましたの！？」
「椿っ」
草むらをかき分ける。
すると、木の根元に、一匹の黒猫が蹲っていた。
「この子の声が、聞こえたの」
椿はそう言うと、ゆっくりと抱き上げた。
奈津は衰弱している猫を見て、踵を返す。
「アンジェリカ先生呼んでくるっ！」
走れば、奈津が一番速い。
レイアとラミネージュは、その場に残って椿が抱きかかえる猫を見る。
「外傷はないようですわね」
「まだ子供。親がいないのかも」
「親が……」
子猫が、衰弱する。
それは、事故かそれに近い理由で、親が死んでしまったということだ。
稀に、育児を放棄する親もいるのだが、親がいないという一点においては、変わりはない。
「連れ来たっ！」
「早いですわねっ！？」

アンジェリカをおぶって、奈津が帰ってきた。
アンジェリカは文句の一つも零すことなく、子猫を診断する。

「……これなら、消化に良いものを食べさせて、暖かくしてあげれば大丈夫。念のため動物用の点滴もうっておきましょう」

アンジェリカがそう言って、子猫を抱える。
そして、歩き出したアンジェリカに、椿たちがついていく。

「規則があるから、付き添いは一人まで。後は帰りなさい」
「あの、みんな……」

アンジェリカが注意をすると、椿が不安げに願いかけた。
レイア達は苦笑して、頷く。

「ちゃんと元気になったところを、見てあげなさいな」
「明日、教えてね！」
「約束」

口々にそう言う三人に、椿は笑顔で頷いた。

「うんっ。みんな……ありがとう！」
「さ、行くよ」

椿は三人に手を振ると、抱えられた子猫を、やはり不安そうに見る。
そんな椿に、アンジェリカは薄く微笑んだ。

「寮は動物を飼うことも出来るし、一緒に居られる、他の手段だってある」

「え――？」

小さく、それでいて椿の耳に届くように、アンジェリカが呟いた。

「だから、よく考えておきなさい」

「先生――はい。ありがとう、ございますっ」

思わず頬を緩ませる椿に、アンジェリカは優しく微笑んだ。

小さくも、大きな――――始まりの、足音がした。

第十五話　英雄と猫と足音　―第二章・開始―（後書き）

今回、次回とやや短めです。
腱鞘炎が悪化してしまったので、前ほど思うように書けず、ペースは遅れ気味になります。
……申し訳ありません。

今回から、第二章がスタートします。
本格的にお話が進み始めるのは、次々回からになる予定です。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第十六話　ファミリー

最早、学校一の医務室の常連と言っても、過言ではない。
椿は、心地よさそうに眠る子猫を見ながら、そんな仕様のないことを考えていた。

結局椿は、医務室で一晩過ごすことになった。
椿が医務室にいることに対して疑問に思う教員は、いない。
それほどまでに認知されているということが、椿は少しだけ……結構、悲しかった。

せめて、神楽には医務室の住人と化していることを知られたくない、と、これまた叶いそうもないことを考えていた。

まだ子供の、黒猫。
授業へ出ている間など心配だが、教員も世話が出来る程暇ではない。
更に言うのなら、動物を長期預かるという、前例を作る訳にもいかなかった。

椿が子猫を拾ったという話を聞きつけて、担任の楓がやってきたのは、そんな時だった。

「うーん……医務室にいつまでも動物を置く訳にはいかないし……あぁ」

楓は、椿と子猫を見比べて、手を打った。

「本当は魔法使いとして余裕が出てきた頃――二年生から教えることなんだが、まぁ神崎なら大丈夫だろう」

楓はそう言うと、椿に提案をする。

「“使い魔―≪ファミリア≫”にしてみないか？」

「え――と？」

椿は、健やかに眠る子猫の横で、首をかしげた。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

幻想世界にまつわる、魔法民話や神話、伝説の中で幾度となく登場する単語。

その意味とほぼ変わることなく、魔法使い達の間にもその存在はあった。

それが――“使い魔―≪ファミリア≫”である。

使い魔とは、意志の希薄な存在、高い知識を持たない存在と契約を交し、簡単な命令を与えることができる、魔法使い達の“メッセンジャー”である。

使い魔の目を通したテレビ電話のような機能や、ちょっとした魔力ブーストなど、扱いとしては便利な携帯電話と考えることも出来る。

だが、使い魔も精霊と同様に“信頼関係”によってできることが増えたりと、その扱いは道具と言うよりも、魔法使い個人のマスコットキャラクターと言えた。

本来は、魔法にも慣れて、初期の実習を終えた二年生が、方法を教わった後に任意で契約して使い魔を得る。任意というのは、携帯電話の方がいいという魔法使いもいるからだ。

ちなみに、この場合はただの携帯電話ではない。

空間の魔力濃度が高いと電波が乱れるため、魔力を使用して動かすことの出来る特別な通信機のことだ。ちなみに、上流家庭でもよほどの資産を持つ者にしか、作ることが出来ない高価なものである。

動物が苦手な人や、そもそも通信手段を必要としないタイプの魔法を使う者、または必要ないと考えている者や戦闘時にひどく相性が悪い者など、持っていない魔法使いの方が多かったりもする。

――閑話休題（それはともかく）。

慣れが云々という話なのだが、魔法に対する“慣れ”という視点ならば、レベル四の魔法使いである椿は、二年生の中間程の実力はあると言うことになる。そのため、使い魔を申請しても、スムーズにとおるだろう。そう、楓は判断したのだ。

「それで、どうする？それなら、下手に衰弱していくことも無いと思うが……」

そう言って、楓は子猫に目を向けた。
その視線に合わせるように、椿も子猫を見る。

親のいない、小さな猫。
失ってしまった――子供。

「契約の方法、教えていただけますか？」

その姿に重ねたものは何なのか……。
椿は自分の内側から目を逸らすと、強い瞳で楓に問うた。

「あぁ、もちろんだ」

そう言って、楓は快活に笑って見せた――。

†

契約は、すぐに行われることになった。
現在は早朝、六時半――授業が始まる前に、終わらせてしまうのだ。
場所は、演習場を一部屋借りることが出来たので、椿はそこで楓から手ほどきを受ける。

「いいか？相手にどれだけ心を開き、また開かせることが出来るか？それが重要だ。成体だったらもう少し一緒に過ごす時間が必要なんだが、幸いにもまだ幼く、それ故に純粋な今なら、特に苦もなく契約できるだろう」

楓はそう、ざっと説明して見せた。
椿はそれに頷くと、魔方陣の上に立つ。

この魔方陣も、本来ならば自分で学び、描く。
だが、今回は特別に、楓が書いていた。
流石に一から教えていたのでは、かなり時間がかかってしまう。

「【我は願う・我と共に歩むものを・我は望む・我に並び立つものを・我は汝の命を望み・汝は我の世界を得よ・今ここに・尊き絆を・貴き誓いを】」

魔力が装霊器に流れ込み、精霊を伴った魔法として、魔方陣に真紅の魔力が流れ込む。
ぼんやりと、子猫と椿を中心に、魔力は真紅のヴェールとなって、徐々に輝きを強める。

やがて、魔方陣がだんだんと浮かび上がり始めた。
浮かんだ魔方陣は子猫を中心にだんだんと集束して――左の前足に、一筆書き六芒星の証を刻み込んだ。

「ふぅ……どうでしょうか？先生」
「……あ、あぁ。良いできだぞ」

楓は、半ばぼんやりとそう答えた。
通常は、魔方陣が対象の身体に証として刻まれるのは、もっと時間がかかる。
だから楓は、なるべく早い時間から始めようとしたのだが……結果として、かかった時間は演習場へ移動する時間の方が、長かったのだ。

「よほど、相性が良いのか。驚いたな……」

だから、楓はそう驚くしか、なかったのだ。
対象と魔法使いの相性がここまでいいというケースは滅多になく、その出逢いは“運命”と呼んでも、差し支えない。

楓がそう、椿に伝える。
すると、椿は子猫を持ち上げて、目線に合わせた。

「運命、か」

子猫は、眠そうに目を細めた。
その仕草に、椿は嬉しそうに目を細める。
そしてその様子に、楓がやはり微笑ましそうに、目を細めるのだった。

†

信頼関係を深めていくなどの理由で、使い魔は主と共に行動することを許可されている。
つまり、授業を一緒に受けても構わない、ということだった。

「へぇ、それでこの子、ここにいるんだぁー」

椿の肩で丸くなる黒猫。
そんな猫を、きらきらとした眼で見ながらそう言ったのは、フランチェリカだった。

「ね、ね、抱かせて貰って良ーい？」
「うん、大事にね」

椿が肩から降ろして、フランチェリカに渡す。
フランチェリカは宝物でも扱うように、優しく猫を抱き留めた。

「うわぁ、小さい、可愛い」
「ね、チェリカ。次、僕もっ」

そのやりとりをおそるおそる見ていた奈津も、そこに加わる。
肉球をふにふにしたくて、たまらないのだ。

「おぉおぉぉ」

そんな唸り声を上げるのは、ミアだった。
飛びかかりたいが、出来ない。そんな表情で、手を挙げたり降ろしたりしていた。
猫のような仕草である。

「はっはっはっ、小さいなぁ。なぁ？ルナ」
「うん。小さいわね」

明るくそう言う明里に、ルナミネスは本から顔を上げずに答えた。
ちなみに、本から顔を上げてはいないが、本ごと顔を持ち上げて、視線は猫に釘付けだ。

「可愛いですね～」
「和みます」

のほほんとした、声。

その声に、ルナミネスは同意した。

「でも先生、そろそろ授業始めたいなぁ」

「へ？」

襟元を捕まれて、猫のように持ち上げられる。

ルナミネスは、自分の身体浮いていることに驚きながら、掴んだ主を見た。

そこにいたのは、何食わぬ顔で輪に入っていた、ミファエルだった。

「わわわっ！す、すみませんっ！」

順番が回ってきて猫を抱えていた奈津が、慌てて猫を椿に返した。

そう、一時間目が始まる前の十分休憩で、和んでいたのだ。

「すみません、ミファエル先生」

頭を下げる椿に、ミファエルは顔を上げるように言う。

そして、のほほんと笑った。

「誰でも、使い魔と最初に契約したときはそんなものですよ。今の二年生も、一学期は浮かれていましたしね。さ、席についてくださいね～」

「は、はい……ありがとうございますっ」

ミファエルは、笑顔を崩すことなく教壇に立つと、授業を始めた。

今日のテーマは、次回の授業から始まる、実戦授業に関わることだった。

「明日は、皆さんにとって初めての“実戦授業”になりますね」

どんなに難しい魔法を覚えても、実戦で足が竦んでしまったら、役に立たないどころではない。共に戦う仲間の、足を引っ張ってしまうのだ。

そうならないためにも、実戦を経験しておく必要がある。

実際に邪霊と戦うので、実績となってレベルも上がる。もちろん、初回からそんな敵と戦わせたりはしないが。

「邪霊が生み出される条件は、実のところはっきりしていません。けれど、特別強い電波を発しているところや、コンパスが聞かなくなる場所に、邪霊が出現すると言うことが解っています。このような場所のことを“励起領域―≪ウィスプスポット≫”といいます」

励起領域は、発見されると監視がつけられる。

それは、出現した邪霊が力をつける前に、討伐するためだった。

「学院付近に存在する励起領域へ赴いて、まだ力をつけていない邪霊を討伐するのが、実戦授業の内容になります。もちろん危険はありますし、命に関わることもあります。気を抜かずに、頑張ってくださいね～」

口調はのんびりとしているが、その声には“迫力”があった。

レッドクラウンの魔法使いの名は、伊達ではないのだ。

実のところ、この実戦授業で死者が出たことは無かった。

監督する教師は優秀なものがつき、何かあってもすぐに対応できるようにしてあった。

だが、危険であると言うことを覚えさせるためにも、怪我を負ってもぎりぎりまで助けには入らない事になっていた。

魔法使いは、邪霊との戦闘で国の平和が脅かされたりする場合において、その“戦争”に参加する義務がある。――つまり、戦時における徴兵義務を負っているのだ。

その戦争にかり出された際になるべく生き残れるように、この授業は重要視されている。

そのため、彼女たちの実家から文句が来るようなことも、無かった。

望まないのなら、実戦授業の緩い学校へ、通わせればいいのだから。

そういった意味でも、楼城館学院に通う少女達の家は、実績を求めていることが伺えた。

もちろん、校風や施設――ルナミネスが蔵書を求めたように――が気に入って、この学院を選ぶものも、少なからずいるのだが。

今回の授業は、そういった危険と注意事項、基本的な知識を教えて、終了した。

†

放課後、ヒーロー研の活動は、椿の黒猫を中心に送ることになった。

机に猫を寝かせて、囲むように座る。

どこからか猫じゃらしを持ってきたラミネージュが、どんなに無視されてもめげずに猫へ構っていた。

レイアは、そんな猫じゃらしの動きに合わせて首を動かしている。

「今日のテーマは、椿の使い魔の、名付けでっ！」

そう、椿は未だに名前を決められずに、頭を悩ませていたのだ。

「椿は、どんな名前が良いと思う？」

「え？えーと……」

それがすぐに思い浮かぶのだったら、始めから悩まない。

だが、これを聞いておかなければ、どんな系統の名前をつければいいのか、わからないのだった。

「うーん……」

――ところで、椿はわりと何でも器用にこなす少女だ。

料理裁縫掃除洗濯整理整頓、それに勉強も魔法も、並以上にはできる。

そんな彼女だが、どうしても上達しない、上手くならないことがあ

った。

「ポ、ポチ、とか？」

それが、ネーミングである。

将来は、絶対に旦那に名前を決めさせた方が良いだろう。

「つ、椿？」

そんな真面目な顔で、冗談を言うなんて。

そんな戸惑いが、奈津の顔に浮かんでいた。

「うぅ……黒い、黒、くろ、く」

「良い調子だよっ椿！」

見た目の色から名前を思い浮かべようとする椿の様子に、奈津達は息を呑む。

この調子なら、ポピュラーでまともな名前に辿り着くかも知れないのだ。

「く、熊五郎っ！」

「なんでっ！？」

レイアが、勢いよく机に額を打ち付けた。

ラミネージュも、猫じゃらしを取り落とす。

神楽は顔を引きつらせて、どうフォローしようか考えていた。

「ねこ、ねこ、ね……ねっくん？」

「ネック！？首なの！？リストラ？！」

「うぅ」

いちいち過剰に驚く奈津を、椿は恨みがましい目で見た。
八つ当たりだと解ってはいるが、どうにも苦手なのは自覚しているので一緒に考えて欲しいのだ。

「“くん”とつけるのは良いかもしれませんわね。男の子、のようですし」
「猫にセクハラ」
「お黙りなさいっ！」

寸劇をするレイアとラミネージュに苦笑いしながら、椿はその方向で考える。
猫っぽいものから名前をつけよう、そして、“くん”とつけよう。
そんな風に考えた、椿の頭に浮かんだ動物―（？）がいた。

「まーくん、ってどうかな？」

椿がそう呟くと、四人はすぐに返事をした。

「いいんじゃない？」
「そうですわね」
「普通の、名前」
「良い響きだと思いますよ」

ここで止めておくのが無難だろう。
そう考えているのがよく解る、良い返事だった。
椿も満足しているから、と奈津達も満足そうだ。

まさか椿が――――“マーライオン”から名前をとってきた、など、

知る由もなかった。

「君、“まーくん”だって」

「よろしくねぇ～まーくん」

猫――まーくんは、どこか複雑そうな顔で、目を伏せた。

†

暗い部屋の中。

深夜、椿の部屋で、子猫が虚空を見つめていた。

黒い毛並みが、闇に紛れ、不思議な程溶け込んでいた。

その瞳は、時折淡い光を発していた。

その光は、何かの数値だった。

明滅して、浮かんでは消える。

――ＤＬ　２５％　……２７％　……２９％　……３１％

一鳴きもすることはなく、ただじっと、瞳を輝かせて佇む。
寝入っている椿には、目もくれない。

彼女とは――見る必要もない程、繋がっている。

始まりは、もうすぐそこまで、迫っていた――。

第十六話　ファミリー（後書き）

今回は、次回への繋ぎなので、短めです。

それから……。

一万ＰＶ突破です！皆さん、ありがとうございます！

腱鞘炎が気にならないくらい、モチベーションが上がってきたので、次回は早めに更新できるかと思います。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

次回も、よろしくお願いします。

第十七話　双頭の炎狼

大きく、歪む。
大きく、呻る。
大きく、啼く。
大きく、大きく、大きく。

始めはただの黒だった。
だが、それは黒では終わらなかった。

次に、赤が生まれた。
それでも、赤だけでは終わらなかった。

そして、黒が増えた。
そして、大きく口を開いた。

その淀んだ目は――正確に、人間を見つめていた。

その場所は、本来人間が近づかない、場所だった。
ある期間のみ、大量に魔法使いが訪れる、それだけの場所。

騎士団が監視をしているその場所は、魔法使いでなければ危険な場所だった。

魔法使いでも、一人では来られない場所。
そこに迷い込むことは出来ない。だが――故意に侵入することは、できた。

――できて、しまった。

その男は、密猟者だった。
その森が騎士団に監視されていることに目をつけて、その場所に貴重な生物、ないし稀霊石か亜霊石でもあるのでは？そう考えたのだ。

その欲求のもと、動いた人間。
少し理性が外れて、道徳観や倫理観を吐き捨てただけの、どこにでもいる人間だった。

男は、この“仕事”の前に、盗みを働いていた。
魔力を補充しておける力を持つ、水晶。その中でもとくに魔力をため込んだものを、男は持っていた。

これと稀霊石をセットで売れば、もっと高く、買い取ることが出来るのだが――。

そう言って、この場所を口から零した、クライアントを思い出す。
なにも、始めからこの場所を知っていた訳ではない。試しにと聞いた場所へ向かったら、騎士が実際に監視をしていた。

“騎士”が監視をしていると言うことは、男にとって他のなによりも“信頼”できる情報だった。

そして、森に入り、歩き回り――“それ”に、遭遇した。

男の腰までの高さ。
だが、渦巻く炎と二つの頭が、実際よりも存在を大きく見せていた。

咄嗟に走り出すも、逃げ切ることは叶わなかった。

それはすぐに追いつくと、男を引きずり倒した。
生まれたばかりでも、“それ”は狩人だった。

目の前の“餌”を逃す程、鈍重ではない。

悲鳴を上げれば、助かる。
助からなくても、聞きつけた騎士によって、一矢報いることができる。

男のそんな、小さなあがきは――“それ”に喉を焼かれて、消え失せた。

悲鳴を上げるどころか、呪詛の言葉を吐くことも出来ずに――男は、その泥にまみれた人生に、幕を下ろした。

そこそこ魔力を持った、魔法使いでは無い人間。
魔力を大量にため込んだ、純度の高い水晶。

めきめきと音を立てて、その二つを食い尽くした“それ”の身体が、大きくなる。

そして“それ”は――来たるべく、大量の“餌”のために、森の奥へと身を潜ませた。

九月三日の金曜日。
新学期が始まって、三日目。
今日は、午前中から通しで、実戦授業を行う日だ。

学校の敷地を出て、バスで一時間程移動した場所に、授業で使う森がある。
……椿は、バスが“普通の”バスだったことに、こっそり安心をしていた。

授業は、一学年全クラス合同で行われる。
その中から実力のバランスで考えられたチームを組み、指定されたポイントにいる邪霊を討伐する。そんな、シンプルな授業だった。

実力で、というだけあって、強い生徒は、同じチームにはならない。
そのため、他の生徒よりも頭一つ突き抜けた実力を持つ椿たちは、全員ばらばらのチームに割り当てられた。

応龍杯に参加したメンバーも、やはりばらばらだ。

毎年、この授業に始めて参加する生徒達は、八割が足が竦んで動かなくなる。

だが、今年はある程度の落ち着きを見せていた。

なにせ、全員が応龍祭で、邪霊との戦闘を――邪霊の脅威を、体験しているのだ。

その様子を見ていた引率の教師陣は、安心して――いることはなく、逆に不安そうな表情で佇んでいた。引率は、楓とミファエルと神楽。そして、治療要員のアンジェリカだ。

特別意志の低いスライム型の邪霊。

それも、教師がすぐ側にいて、いつでも助けてくれるという安心感。安全な状況で戦える、環境。

“そんなもの”を経験として認識していたら、痛い目を見る。

「神崎、佐倉、エルストル、オールアクセン、サイミル、沖田、オウクストード、イクセンリュート、大寺門、水戸川……この辺りは、まず問題はないだろうな」

「そうだねぇ～」

楓が名簿を見ながら、そう零した。

実家の気質的にも経験的にも、あまり心配はいらないだろう。

「問題が起こるのなら、邪霊だけにして欲しいところだが」

「無理、でしょうね」

肩を竦めてそう言う楓と、それに頷くアンジェリカ。
その様子に、神楽は首をかしげた。

「なにか、他にもあるんですか？」
「人間っていうヤツは、一筋縄でまっすぐなのばかりじゃ、ないってことだよ」

楓は、そう嘆息する。
メンバーの中で、一番心配なのは、椿のことだった。

上流家庭どころか、中流家庭でもない。
歴史と伝統による後ろ盾がないのに、おそらく一年生の中で一番の実力を持つ生徒。

厄介なチームを割り当てられなければ、まだいい。
だが、それは叶わないだろう。

楓は、手元のチーム割りの表を見ながら、大きく大きく息を吐いた。

†

椿は、チームメンバーに気づかれないように、小さく小さく息を吐いた。

割り当てられたメンバーに、同じクラスの人はいなかった。
クラスメートが一人でもいたのなら、だいぶ気が楽だったことだろう。
椿のクラスは、応龍祭の組み体操で、しっかり団結していたのだから。

また、大角大蛇に被害者側として関わった生徒でも、そうまずいことにはならなかっただろう。彼女たちは、救い出してくれた椿たちに、多かれ少なかれ恩を感じている。

だが、椿のチームメンバーは、そのどれにも当てはまらない生徒だった。

「ちょっと！聞いてるの！？」

そうヒステリックに叫ぶ、茶髪の少女に、椿は身を竦ませた。
さらに、その後ろに控えるように立つお団子頭の少女と目元の隠れた少女も、同じように椿を威嚇していた。胃の痛くなる状況である。

茶髪の少女が赤谷桃乃。お団子の少女が佐久間理恵で、目元の隠れた少女が岡本奈美。
この三人に椿を加えた四人が、第十三斑のメンバーだ。

実力によってメンバーの数が変わり、四人から八人のチームが、八クラスで分けられる。
椿の実力を考慮した結果、集まったのは最低人数の四人だった。

「は、はいっ！」

鋭く言われて、姿勢を正す。
気分は、授業中に居眠りを注意された時のような感じだ。

「エルストルにオールアクセンだけでも信じられないのに、どうやってサイミルやオウクストードにまで取り入ったワケ？……あんた、生意気なのよっ」
「は、はぁ」

いまいちしっくりこないのは、未だに“サイミル”が解らないからだろう。
オウクストードについては、ミアから話を聞いていたのだが。

このことを知れば、さすがのリリアも落ち込むだろう。

「あんたみたいな庶民がいると目障りなのよっ！」
「そうよ！腰巾着のくせに！」
「コバンザメは大人しくしてなさいよ！」

普通なら、怒るところだろう。
そうでなくとも呆れるべきなのだが、取り巻き二人の言葉がどうにも自分に向けられている気がしなく、椿はただ戸惑いながら聞いていた。

更に言えば、一般の中学から進学してきた椿は、同年代の少女の口

喧嘩を聞いたこともあるし、そうでなくても“悪意”は嫌という程受けてきた。

だから、そんな“庶民”だとか言われても、いまいち悪口を言われている気がしなかったのだ。

更に言えば、変なところで気弱なのか、椿が怒るであろうレイア達の悪口を言ったりも、しなかった。奈津の悪口も言わない辺りで、名家としては同じレベルなのだろう。
手も出してこない辺り、上品に育てられてきた証である。

「それに、そんな……かわ……薄汚い猫まで連れてきて！」
「そうよそうよ！そんな、愛くる……小汚い猫まで！」
「何の権利があって、そんな癒……可愛い猫を！」

一人、言い直せなかった。
普通は、高圧的な態度に出られれば、身を竦ませる。
だが、まったく動じない椿に痺れを切らして矛先を変えたのだが……変える対象がまずかった。椿の肩の上で欠伸をしながら顔を洗う猫を見て、和まない女の子など稀だ。

「と、とにかく！貧乏人は貧乏人らしく、小さくなって生きていればいいのよ！」
「あんまりそういうこと言っちゃ、いけないよ？」
「そ、そうかしら？……って、だ、黙りなさい！」

ずれた嫌みのおかけで落ち着いた椿が、冷静に諭す。
すると、桃乃は少し怯んだが、すぐ我に帰って踵を返す。

貶めようとする人間に、良い印象は持てない。

それでも、彼女はどうも嫌いになれないタイプの、人間だった。

ずんずんと足音を鳴らすように、先を行く桃乃を追いかける。
指定されたポイントを歩き回っていれば、邪霊と遭遇する。

そう指示されていたはずなのに、不思議な程静かな森だった。

「ホントに邪霊なんているのかしら？まったく、面倒ね」
「そうよね！」
「面倒だわ！」

そう言いながら先に進む桃乃の後ろで、椿はしきりに周囲を観察していた。
邪霊がいるところには、動物はいない。彼らは、動物も食べるため、邪霊がいる森に動物は近づかないのだ。

そのため、邪霊の気配は比較的探りやすいのだが、付近に自分たち以外の気配はなかった。
椿は、どうにも嫌な予感がして、周囲を見る。

「一端帰っちゃおうよー桃乃」
「奈美の言うとおりだよー桃乃」
「そうね、戻っちゃおうか。メンドーだしぃ」

桃乃が、踵を返す。
なにもいないと思って気を緩める、このタイミング。
動くならば、ここしかない。

椿はそう判断して、桃乃達を後ろから突き飛ばした。

「痛っ！？なにすんの……っ」

椿と桃乃達の間に降り立ったのは、巨大な狼だった。
炎の毛皮を持つ、双頭の狼。一つの頭に、それぞれ黒い四つの目がついていた。

『グルルルルル……』

低い、唸り声。
狼は椿を一瞥すると――振り返って、桃乃達を見た。

「ひっ」

引きつった声。
決して良い印象の人ではなかったが、見捨てる訳にはいかなかった。
――見捨てたく、なかった。

「【四元素が一柱を司る・炎燐を纏う槍の火蜥蜴よ・彼の者を・その炎で覆い護れ】」

小規模結界魔法を、自分ではなく桃乃達の方へ張る。
防御魔法が苦手な椿の結界ではたかが知れているが、それでも邪霊の突進による衝撃を、弱くすることが出来た。

「あうっ！？」
「きゃあっ」
「ひぃっ！」

だが、弱めただけ。
それだけで衝撃が殺しきれることはなく、三人はその衝撃で大きく

弾かれた。

椿がなんとか、怯んだ邪霊の横を駆け抜けて、桃乃の前に立ちふさがる。

腕から血を流して蹲る桃乃。奈美と理恵は、目を回して気を失っていた。

狼は、警戒しながら椿を見る。

こちらが警戒を緩めたところを狙って、襲いかかるつもりなのだろう。

「ここは抑えるから、逃げて」

「ひっ、ひぃっ……や、あたし、怪我してるんだよ!?う、動けないよっ！」

腰が抜けたのか、足が竦んだのか。

桃乃は、蹲ったまま動かない。

「いいから!早く!」

「うぁ……い、痛い、痛いよぉ」

錯乱する桃乃の様子を見かねて、椿は振り返る。

それでも意識を狼に向けて、威嚇を続けた。

黒猫も、毛を逆立てて、鋭く狼を睨み付けていた。

「っ――！」

――パンッ

「っ！？」

錯乱した桃乃を鎮めるために、椿はその頬を叩いた。

「何、するのよ!?あんた、庶民のくせに、あ、あたしを、あたしを――――え?」

椿を、敵意を込めて桃乃が睨み付ける。

椿は、そうやって涙を流す桃乃を、優しく抱き締めた。

――自分が泣いていたときは、おじいちゃんがこうしてくれた。

そんな、子供の頃のことを、思い出しながら。

「怖くないよ」

「え、なに、を?」

ぽんぽん、と、背中を優しき叩く。

「だいじょうぶだよ――――私が、守るから」

「あ、あんた」

それは、椿がなりたい――“魔法使い”の、かたち。

「早く、行って!」

「っ――――」

突き放されて、立ち上がる。

転がった二人を肉体強化で持ち上げて、桃乃は教師達が控えるキャンプの方へ走っていった。

二人を抱えているせいか、あまり速くはない。

だが、迷うことなく、走っていく。

『ガァ！』

「させない！【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

背を向ける桃乃を追いかけようとした狼の前に、椿は炎刃を携えて飛び出した。

牙を剥き噛みつく狼の横面を、炎刃で叩くように切る。炎属性なのが悪いのか、ほとんどダメージは与えられない。

『グルルルル……ガァッ！！』

ならば、手段は限られる。

周囲には、誰もいない。だったら、使えばいい。

――わかっているのに、決心がつかなかった。

狼の爪が、赤い軌跡を残して走る。

それを紙一重の所で躱すが、攻撃に転じる隙がない。

使えばいい。

使えばいい……だが。

――それで、人間から“外れて”しまったら？

そう考えると、力が入らなかった。

胸の痛みは、ほとんどない。その意味することを考えた、その刹那の隙。

それを見逃すことなく、狼が体勢を低くした。

「しまっ！？」
『グルゥア！』

気がついたときには遅く、すでに避けられるタイミングではなかった。

『ふにゃあっ！！』

そんな狼に飛びかかったのは、威嚇していた黒猫だった。
彼女の使い魔は、主を守ろうと飛び出して、狼の顔に張り付いた。

『ガァゥッ！！』
「まーくんっ！」

だが、もう片方の頭に頭突きを加えられ、その小さな身体が宙を舞う。
狼は、わずらわしい“それ”を消してしまおうと、口の中に炎の吐息をため込んだ。

「【魔剣・真紅】！！」

その狼の頭を斬りつける、真紅の大剣。
飛来したそれは、狼の顔に一筋の傷を刻み込んだ。

痛みに怯んで下がる狼を一瞥もすることなく、椿はまーくんと名付けた黒猫に近寄った。
命の灯火が薄らいでゆくその様に、椿はそっと目を伏せた。

「すぐに、助けるから、待ってて」

椿は、大剣を左手に追従させる。
右手には、真紅の刃が構えられていた。

どこまでこの相性の悪い相手に通じるか解らない。
だが、逃げることが出来ない以上は、できるだけ早く、打ち倒す必要があった。

狼が――低く、呻る。

†

焦燥した表情で森から出てきた生徒――桃乃の姿に、神楽は息を呑んだ。
アンジェリカと楓が駆け寄って、遅れて神楽も走る。ミファエルは、周囲の警戒に身を引き締めた。

「おい！どうした！？」
「先生っ！神崎さんが、神崎さんが！高位の邪霊を相手に！お、囮

をっ！」

抱えていた二人をおろしながら訴えかける桃乃の姿に、楓は緊迫した空気を放つ。

「っどっちだ！……って、おまえも怪我をしているじゃな――」

「あたしの怪我なんか、“どうでもいい”から、早く神崎さんをっ！」

必死で訴えかける桃乃に、楓はしっかりと頷いた。

「わかった……アンジェリカ、頼む！」

「わ、私も！」

「東雲先生は、ミファエルと警戒を！」

「っ……はい！」

走っても、間に合うかはわからない。

それでも――楓は、身体に魔力を流して、駆け出した。

†

椿と狼が、爪と刃を合わせる度に、赤い軌跡と火花が生まれる。
森を焼く勢いで、激しい剣戟の音が木霊する。

その戦闘の横で、一匹の黒猫が横たわっていた。

最早、ほとんど息もしていない。
使い魔として強化されていた身体でなければ、先ほどの一撃で粉々になっていただろう。

大地を濡らす、赤い液体。
それは既に、乾き始めていた。

全く動かない、黒猫。
だが、その瞳は――淡く、明滅していた。

――ＤＬ　９４％　……９５％

漆黒の瞳に映る、何かの数値。
その値は、完了が近いことを、示していた。

――ＤＬ　９６％　……９７％　……９８％　……９９％

そして、表示される情報が、変化する。

――ＤＬ　１００％
――情報構成・完了
――対象者にアクセス・コネクト

――リミット解放・1・2・3　……ロック解除
――権限を移行　一番・二番・三番　アクセス
――ログ・オン　スリープモード　解除　復元・完了
――プログラム・スタート

瞳孔が、銀色に染まる。
その右目に映るものは――“遮断”の紋章。

そして彼は――――ゆっくりと、目を開けた。

†

ほんの数度、刃を合わせただけで、椿は憔悴していた。
合わせる度に押されて、捌ききれなかった攻撃で、腕や足からは血が流れ出している。
細かい傷ならば、数え切れない。

その理由は、わかっていた。
――“相性”である。

炎が聞きにくい時点で、魔剣以外の攻撃が通りにくい。
魔剣で攻撃すれば傷つける出来るのだが、超攻撃力の突進や噛みつきに対する盾にするため、攻撃に回れない。

そして、盾にすると、力で押し負けるのだ。

そう、椿は――圧倒的に“防御”の手段に、欠けていた。

「【三槍・響炎】」

追尾の槍を放つ。
ダメージにならなくても、気を引かせることが出来ればいい。
雅人と戦ったときとは違い、椿は二種類同時に扱うことができるように、なっていた。

このまま能力が成長してゆけば、全ての力を同時に扱うことができるかも知れない。
そんな“恐ろしい”想像を、椿は頭からたたき出した。

だが――その一瞬ですら、狼にとっては大きな隙だった。

『ウル……グガァッ！！』
「きゃあっ！！」

とっさに大剣を盾にしたが、今まで逸らしてきた衝撃をまともに受けてしまったため、大きく後ろに弾かれた。

「っ――【走焔・群魚】！」

背後の木に背中を打ちつける。
その衝撃に飛びそうになる意識を、唇を噛み切ることでつなぎ止めた。
そして、無数の魚型の炎を生み出して、撹乱させる。

狼にとって無害に等しいダメージしか与えられないだろう。
だからこれは、狼がそれに気がつくまでの、時間稼ぎなのだ。

「どう、すれば」

力を使えば使う程、胸が痛くなる。
痛くなって、次第に“痺れて”いくのだ。
それはどこか、知りもしない麻薬のようだった。

「っ」

頭を振る。
今は、そんなことを考えている場合ではない。

諦めたくない。
でも、手段は少ない。
防御という一点を考えれば、これ以上はない力は持っている。
だが、それを使うことは出来ない。

心情的に、ではない。
まだ、扱うことが出来ないのだ。

「どう……すれば――」

『――私が、手伝うよ』

目を伏せて、悔しさから身体を震わせる。
そんな椿にかけられたのは、どこか幼い――それでも、聞き覚えのある――声だった。

「まー、くん？」
『クッ……そうだよ。“まーくん”さ』

その声は――雅人のものだった。
振り返る先には、無傷の黒猫。
その両目は銀色に染まり、右目には“遮断”の紋章が浮かんでいた。

「なん、で？」
『詳しい話は後にしよう。今は、そう……私を使えば、“心絶”の力を扱うことができる……まずは、目の前のあれをどうにかしようか』

狼は、律儀にもあらかた魚を潰し終えたところだった。
餌にならなかったのが気にくわなかったのか、低く唸り声を上げながら、椿を見ていた。

まーくん――雅人は、猫らしい身軽な動きで、椿の右肩に飛び乗る。

『私は君の使い魔だ。それには変わりはない』
「う、うん」
『だから、心を同調させるんだ。君の“使い魔”として、私を信用しろ』
「――うん」

疑問はいくらでもある。
だが、この黒猫は、椿が自分で助けて、契約した――自分の、使い魔――（家族）なのだ。

『グルルルルゥ……』

狼が、呻りながら、体勢を低くした。

『ガァッ！』

そして、勢いそのままに、飛びかかる。

『合わせて、椿』
「うん！」

目前まで迫った狼に、手をかざす。
心が同調して、雅人と同時に詠唱をする。

「【心盾・絶火】」――――『【ウォールアウト】』

出現した赤い半透明の“壁”に、狼が勢いよく衝突した。
雅人が行ったように、これを射出することは出来ない。
だが、防御力はまったく同じ――こちら側と向こう側を、遮断する。

「っ……ごふっ」

だが、過剰な魔力の運用により、身体に負荷がかかる。
そのせいで、大量の血を吐いた。
――それでも、椿は止まらない。

空に弾かれて、体勢を崩した狼。
次からは警戒されて、うまくはいかないだろう。
椿の魔力も、あと一撃分しかない。
それならば、この一瞬が――――最後の、チャンスだ。

指を指して、狙いを定める。
身体は右半身になり、視線は狼に固定される。
真紅の魔力が身体を走り抜けて、爪の間から血が流れる。
大きな負荷に身体が軋み、悲鳴を上げて、右腕が自然に裂けた。
流れ出る夥しい血液も、身を灼くような激しい痛みも、心を覆う――激情も。

今、この時だけは、全部捨てて前を見た。

「【断火・一閃】」――――『【ラインアウト】』

指先からまっすぐ縦に“出現”する、壁。
狼がその一撃を見たときには、すでに、二つの頭は別々の方向へ投げ出されていた。

『グゥ…ギッ!?!!』

そして、地面に投げ出される、前に。
塵となって、虚空へ消えた。

「さぁ、はな、し、を」
『そんな身体で何を言っているんだい?――使い魔に聞きたいことがあるのなら、後で聞けばいいだろう?一緒にいることに、なっているんだから』

荒い息を隠すことも出来ずに、問いかける。
だが、逆にたしなめられてしまった。

「けほっ……あっ、かはっ！」

さらに血を吐いて、地面に倒れる。
慣れることはない、激痛で意識が遠のく、感覚。
それに素直に身を任せることも出来ないまま――椿は、気を失った。

『さて――私だけで、守りきらないとならないのかな？』

周囲にゆっくりと姿を現したのは、無数の低位邪霊。
そう、この地は邪霊の住処――これだけ魔力をまき散らしていれば、邪霊だって集まる。

「どいつもこいつも……そんなに私の生徒を襲うのが、好きか」

だが、それは、おおざっぱな方角しかわからず迷っていた楓にも、言えることだった。
雅人は、神霊者の力が周囲に漏れないように、この身体で出来る範囲で、この周囲から意識を逸らしていた。それが、最後の一撃の時に解けたのだ。

楓はその膨大な魔力を感じ取って、ここまでやってきた。
雅人は、その刀に宿る“破邪”の力を感じ取ると、安心したように蹲る。

そして、自分も椿と同じように、魔力の過負荷で気を失った――。

†

もう何度目になるか、覚えていない。
椿はそんな自分に呆れながら、医務室で目を覚ました。

目を覚ましたときに、枕元で友達が泣いているのを見るのは、心が痛む。
奈津だけは、赤くなった目を隠しながらも、笑ってくれるのだが。

今回は、いつものメンバーに神楽が加わっていて、彼女が一番泣いていた。
フランチェリカに泣かれる事並みに、子供を泣かせている気分になる。
本人には、言えないが。

お見舞いと診察を済ませると、やってきた桃乃達が椿に謝って――
話の流れは覚えていないのだが、椿は彼女たちと代わる代わる握手を交して、別れた。

そして、落ち着いた頃、誰もいなくなった医務室で――雅人と、対面した。

「その、どうしてまーくんに雅人さんが？」

『あぁ、私は彼の記憶と経験をベースに使っているけれど、彼そのものではないよ』

「え……と？」

雅人は、猫らしい仕草で顔を洗っていた。

どう見ても、猫である。

『私の基盤は、確かに“遠峰雅人”のものだけれど、この身は君の“力”によって、生み出されたものに過ぎないのだよ』

雅人はそこに、「身体のベースに、死んだ子猫のものも使っているけどね。あ、餓死だよ？」と付け加えた。確かに、その一言がなければ、椿は気にしてしまうだろう。

餓死だと聞いて、やはり少し落ち込んでしまったが。

『強大すぎる邪霊王の力を扱うには、それなりの補助がいる』

「それが、雅人さん？」

雅人は、身体に引っ張られているのか、大きく欠伸をした。

『そう、私は、君が“私の”力を完全に扱えるようになるまで、君を支える“サポートユニット”という訳さ』

椿の身体にかかる負担を軽減して、さらに、その力の調整も担う。

『まぁ、他人がいるところでは、“まーくん”で構わないよ』

「あ、あはは……はい」

椿も自分のネーミングセンスには自信がないため、素直に頷いた。

二人の時は、雅人と呼ぶ。……そう、約束したのだった。

「それじゃあ、これからよろしく、ね」

『もちろんさ、それが私の存在意義だからね。マスター』

椿は、その小さな肉球を握って握手を交した。

慣れることは、恐ろしい。

それでも、助けてくれる人たちを、守りたい。

決心こそつかないけれど——椿は、悔やむことがないように、と。

小さくも、大きな——意志を、抱いた。

第十七話　双頭の炎狼（後書き）

モチベーションが上がり、五時間で書き上げました。
次は、今度こそ、そんなに早くはあげられないかもしれないです。

今回は、この作品のマスコットキャラクター、まーくんの正式参戦でした。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第十八話　フレイムウィング！？

奈津は、その日、居眠りをしていつものように呼び出されて、職員室から戻るところだった。げんなりとした気分を、部活で晴らすのだ。

椿も退院して、漸く全員で部活動が出来る。

だからこそ、楽しみにしていたのだが――数学は、どうしても寝てしまう。

「まぁ、いいや。部活部活……っと」

「きゃっ」

呟きながら、角を曲がる。

その時に、走ってきた生徒とぶつかって、奈津は慌てて少女の身体を支えた。

「す、すいません！」

「いや、いいけど……」

お嬢様学校で走る生徒も珍しい。

奈津の顔には、そんな戸惑いが表われていた。

少女は頭を下げると、そのまま踵を返す。

その時に、長方形のカード――キャッシュカードのようなプラスチックの板――が落ちたのを見て、奈津はそれを拾い上げた。

「ねっ、これ落とした……んん？？」

「あわわわわっ！！」

奈津が、そのカードを見て、形容しがたい顔で固まる。
その様子を見て青くなった少女は、カードをひったくると、逃げるように走り去った。

奈津はその様子を、カードを見た体勢のまま、眺めてしまっていた。

「あっ……追いかけなきゃ……って、もう遅い、よね」

既に姿が見えなくなった、生徒。
その“お団子頭”の少女が走った方角を見ると、奈津は真剣な表情で踵を返す。

「むむむ……まずは、レイア達に相談して……椿には……ど、どうしよう？」

ぶつぶつと呟きながら廊下を歩く様子は、不気味だった。
奈津は他人の目を気にする余裕もないのか、顎に手を当ててひたすら呻っていた。

思い浮かべるのは、拾ったカードの、内容。

【神崎椿非公式ファンクラブ――炎の翼】

一体何が起こったのか？
初めての事態に、奈津は唸り声を上げるしか、なかった。

「どうしてこうなったの？」

誰に尋ねているのか、とにかく、虚空に呟いたところで返事が返っ

てくるはずもなかった。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

九月十日、金曜日。
椿は、一週間入院して、今日になって漸く戻ってきた。

危険行為に注意されはしたが、チームメンバーを守って生き残るということは、大きな功績である……椿は、そう表彰された。

一年生から過剰にレベルが上がるのはよくない。
けれど、功績が評価されないというシステムを作る訳にはいかない。

そこで、椿のレベルアップは保留となった。
椿はその事を気にする様子もなく、いつものように楽しそうにしていた。

奈津は、そんな親友を見ながら、頭を捻らせていた。
内容はもちろん、つい先ほどのことだ。

奈津から見て、椿は確かに“良い人”だった。
優しくて、人に気を遣える……“温かい人”だ。

だが――きっと、それだけではない。

奈津は、椿がどうも自分に対する好意に疎いように思えていた。
詳しい話を椿から聞いたことはない。だが、慎二郎と戦っていたときの言葉――屋上から、僅かに響いた声――を聞いていれば、どのような幼少期を送ったのかは、想像がつく。

奈津は、そういった意味で、椿と似たような幼少時代を送っていた。
だから、それがどんなものなのか――想像するのは、たやすかった。

悪意を向けられて、反論する。
――“化け物”だから、そんな“怖い”ことをいうんだ。
暴力振るわれて、反撃する。
――“化け物”だ！殺される！
やがて人の顔を伺うようになって。
――最近、大人しいな
そして、それは無駄だと悟る。
――何を企んでいる！“化け物”！

それは、憎しみの連鎖。
それは、悪意の輪廻。
それは、醜い円環。

そんな環境で生きる人は、優しくしてくれた人間や、憧れた夢に強く影響される。
それは――“縋る”と言い換えても良い、感情だ。

奈津はそれを、自覚している。
自分が夢に縋っていることを、自覚している。

いや――縋って“いた”ことを、自覚していた。

本当に、ヒーローになりたい。
優しい人を……“温かい人”を、守れるような。
そんな“ヒーロー”に、なりたい。

そう思えるようになったのは、椿のおかげだった。
椿が信じてくれたから、奈津は他人の“信頼”を信じることが出来るようになった。

だから、奈津は、今も夢に縋っている訳ではない。
夢を信じられるように、なれたのだ。

ふと、椿を見る。
椿は奈津の視線に気がついて、首をかしげる。
その手には、黒猫がもたれかかっていた。
――できることなら、猫になりたい。

笑ってみせると、椿は奈津に笑い返す。

結局何か話をするわけでもなく、和んだ空気が流れた。
その様子を見ていたレイアは、自然に流されて一緒に和む。
ラミネージュは最初からリラックスしていたが。
ちなみに、神楽はまだ、仕事が終わっていなかった。

その空気から名残惜しくも抜け出して、奈津は再び思考の海へ潜る。

椿は、夢に縋っている……そんなことを、考えるそぶりも見せない。
手を差しのばしてくれた、大切な祖父母。そんな風になりたいと、
奈津は椿から聞いたことがあった。その真摯な声は、縋る人間の声
ではなかった。

椿は、その変わり……自分に向けられる感情の“ほとんど”を、遮
断しているのだ。

故に、好意に疎い。
それだけではないだろう。
悪意にも、憎悪にも、害意にも。
椿は、自分に向けられる、ありとあらゆる感情に疎いのだ。

悪意は“慣れない”……実のところ、そう考えているのは受けてい
る本人だけだ。

奈津も、そのことには自分で気がついていない。
奈津も、椿も、受けた悪意に対して、確実に慣れていっている。

そして、彼女たちの特徴として……期待に応えようと、躍起になる。
そういったところが、あった。

ファンクラブ、というものができる。

既に、できている、その集まり。

それによって、さも“聖人君子”のように偶像化されたら？
――その想いに、椿は応えようとするだろう。

そうやって、無理をして。
その先で……その、ずっと先で、椿がどうなってしまうのか？

奈津は、椿が心配だった。
壊れてしまうのではないか……そう、心配だった。

「だから、まずは……」
「奈津？」
「ううん、なんでもないよ。椿」

まずは、“相談”だ。
頼りなる、二人の友人。

この二人に相談して、それからどうにかしていく。

奈津は、“対等”でありたいのだ。
この、優しくて、温かい――“親友”と。

†

椿が使い魔との生活について、楓に詳しいことを聞くに行く。
本当は、実戦授業の後に、実戦を使い魔と経験してみた感想と共に聞くはずだったのだが、遅くなってしまったのだ。なにせ、医務室で療養していたのだから。

楓に指定された時間に、椿が席を外す。
そこで始めて、奈津はレイアとラミネージュに切り出した。

『ファンクラブ？』

声が重なる。
抑揚こそ違いはあるが、二人とも込めた感情は同じ。
――戸惑いだ。

「そう、今日ぶつかった女の子が持っていたカードに、書いてあったんだ」
「それが、椿のファンクラブ、ですの？」

奈津は、こくりと頷いて見せた。

「そう。神崎椿非公式ファンクラブ――“炎の翼”それが、会の名前みたい」
「むぅ……椿に気がつかれる前に、何とかしたいですわね」

「プレッシャーに、なりそう」

レイアが呟いて、ラミネージュが頷く。

奈津は、そんな二人の様子に、少しだけ安心した。

「とにかく、調査をしてみた方が良さそうですわね」

「うん……クラスの口が堅そうな人たちに、協力をお願いしてみる」

「頼みましたわ。私たちは下手に動いてしまうと、別口で厄介なのが出てきますからね」

「かとんぼ」

さりげなく、ラミネージュの暴言がひどい。

奈津とレイアは、そんなラミネージュの言葉を、華麗にスルーした。

気にしたら、負けである。

「あと、今できることは……」

「椿に心配されないよう、普通に過ごす」

ラミネージュが、抑揚なく言う。

レイアと奈津は、それが良いだろうと頷いた。

「そうと決まれば、即行動！……僕、ちょっと行ってくるよ！」

「まだ寮に帰っていない生徒なんて、わかりますの？」

「いや――部屋を知っているから、さ」

奈津はそう言うと、二人に椿への言い訳を頼んで、部室を飛び出した。

†

チャイムを押すと、高い音が部屋に響く、音がした。
それから、礼儀として、ドアをノックした。

中から聞こえてきた返事に、じっと待つ。
といっても、そんなに時間がかかるわけではなかった。

「む、佐倉か。何用だ？」
「ちょっと相談したいことがあるんだけど、いいかな？――――ミア」

奈津がそう切り出すと、部屋の主――ミアは、こくりと頷いた。

「ふむ、クラスメートを助けるのは委員長の努め。ましてや君は友人だ。入るといい」
「うん。ありがとう」

ミアに促されて、部屋に入る。
質素で整理整頓された、落ち着いた部屋だ。

インテリな高級感に、ミスマッチな“闘魂”ポスター。
どうにも、彼女“らしい”部屋だった。

「座ってくれ」
「あ、うん」

白いテーブルの前に座ると、ミアがキッチンへ行く。
そして、ガラスのコップにアイスティーを入れて、戻ってきた。

「ありがと。うん、おいしい」
「紅茶は好きなんだよ。……と、和んでしまうところだったな」

そのままのんびりした雰囲気になりそうだったので、ミアは慌てて軌道修正をした。
急がせるつもりはないが、話しづらいという雰囲気でもなかったので、先に聞くことにしたのだ。

「――って、ことなんだよ」

そして、奈津はあらかた説明した。
ミアは一度頷くと、返事をする。

「ふむ……ファンクラブ、か。聞いたことがないのはよほど上手くやっているのか、それとも出来たばかりなのか……。簡単に会員証を落としてしまう迂闊さを考えると、出来たばかりというのが近い、か」

ミアは推測を立てると、備え付けの電話を手に取った。

「予測を立てている内は、所詮全てが机上の空論で終わってしまう。

ならば、どうすればいいと思う？」
「そりゃ、行動するのが一番だろうけど……」
だから今、奈津はこうして行動に出ているのだ。
その答えに、ミアは悪役っぽくニヒルに笑った。
「そう。行動だ……本拠地を見つけ出して、乗り込めばいい」
「へ？」
直接叩く。
出来ることなら、そうするのはいいかもしれない。
過激だが、手っ取り早く、なによりシンプルな方法だ。
「私だ、少し手伝って貰いたいことがある」
誰に電話をしているのか、その笑顔は清々しい。
相変わらず長い金の髪で目元は見えないが、きっと輝いていることだろう。
ミアが事情を説明すると、電話越しに驚く声が、奈津の耳にまで届いた。
その声は、奈津にも聞き覚えのある、ものだった。
「え？ルナ？」
「あぁ――そうだ……あぁ、頼んだぞ」
そう、ルナミネスだったのだ。
だが、ルナミネスは自他共に認める本の虫。
とても情報収集が得意なようには、思えなかった。

ミアは、電話を切って机に置く。
そして、にやりと笑って見せた。

「イクセンリュート……彼女の“伝手”を、借りたのだよ」
「ルナの、伝手？」

ミアは紅茶を一口嚥下すると、「あぁ」と頷いた。

「そうだ。彼女は応龍杯からこちら、Ａ組の沖田と仲が良い」
「沖田って……マスクｄｏ忍者？」
「なんだそれは？……まぁいい、その、忍びだ」

ちなみに、「マスクｄｏ忍者」という呼び方は、ルナミネスがつけたものだ。
彼女は応龍杯で五十鈴に馬乗りにされただけあって、インパクトが強かったのだろう。

「彼女は実家で偶然遭遇した邪霊を打ち倒したこともある、レベル二の魔法使いだ。中々強いぞ？……と、それはいいのだが、そう……彼女は忍者だ。忍者というとは、除法蒐集に本領を発揮する……そういうことだ」
「おぉー」

ミアの手際に、拍手をする。
するとミアは、まんざらでもなさそうに、薄く笑った。
少しだけ、照れていたのだ。

こうして、あとは五十鈴の情報を待って――乗り込むだけとなるのだった。

†

その本拠地は、校舎内の多目的ホールだった。
施設の使用許可をどうやって取ったのか……土曜日の午前中から、こんなところで集会が開かれているというのだ。

「で、いつの間にこんな人数に？」

当初は、ミアと奈津の二人で乗り込む予定だった。
そこに、ルナミネスと五十鈴が加わるのは、まだわかる。
だが、どこからかやってきた、フランチェリカと明里、それにリリアまでいた。

サイミルが行くのなら、もう気にしなくて良いだろうとレイアとラミネージュも加わって、さらにいつの間にいたのか、また誰の付き添いなのか知らないが、ナリナまで同行して、気がついたら十人という大所帯となっていた。

これでは、カチコミである。

「すまない、私も予想外だった」

これも椿の人望。

そう、奈津は自分を無理矢理納得させた。

――そんな風に肩を竦めても、その顔は微妙に緩んでいたのだが。

「さて……それじゃあ――――たのもう！」

奈津は気持ちを入れ替えると、勢いよく扉を開いた。

そこには――五十人強の女生徒が、集まっていた。

出来たばかりという予測の元、せいぜい五～六人だと思っていたために、想像の十倍の人数に、奈津達は顔を引きつらせた。

「な、なんですか！あなたたち！」

ブルーのネクタイ。

二年生である。どんな繋がりなのだろう。

「みんな！殴り込みよ！」

「そんな！どうしてここがっ！？」

奈津達が何か言い出す前に、騒然となる。

収まり切らなくなり困っていると、事態を収拾させる声が響いた。

「静かにっ！……もう、何の騒ぎ？」

茶髪を適当に伸ばした、一年生の少女。

やってきたのは、そう――赤谷桃乃だった。

「会長！」
「会長っこの人達がっ！」
「会長！！」

声を大にして訴えかける彼女たちを、拍手一つで黙らせる。
変な方向へ目覚めたのか、妙なカリスマだ。

「あなたたち……いいわ、ついてきなさい」
「え？ちょ、ちょっと」

桃乃が背を向けて、歩き出す。
奈津達はその行動に戸惑いながらも、後ろについた。

†

多目的ホールの横にある、空き教室。

そこで、まず奈津達は、今回乗り込んだ理由を話した。

「そう――それは、あたしも良いことだと思うわ」

過分な憧れは、プレッシャーになる。

桃乃は、それはわかっていると言ったのだ。

「じゃあ、なんで……？」

「彼女が、“危ういからよ」

桃乃は、真剣な目で奈津を見て、それから周囲を見回した。

桃乃にだって、名家としてのプライドがある。

赤谷の家は、桃乃に“受けた恩は返せ”と教え続けていた。

桃乃が受けた恩は、“命”を救って貰ったことだ。

その大きさは、自覚している。

彼女が地位の問題で困ったときは、近くにいるエルストルとオールアクセン――レイアとラミネージュ――が、手を差しのばすだろう。

優秀な人材という意味でも、広く大きな伝手を持っている。それは、ここに集まった人たちが、何よりの生き証人だ。

こと、戦闘においては、手を貸そうにも足手まといにしかならない。

そうなると、恩を返せる方法は、限られてくる。

「そこであたしは、見ず知らずの“悪意”から、彼女を守ることにしたの」

桃乃は、恥ずかしい話だが、椿に突っかかった経験を持つ。

その時、やり方がよくわからなかったというだけで、確かに“悪意”を込めて、椿に接した。

その時、椿は動じなかった。

それに腹を立てて、思い浮かぶ限りの嫌がらせをしようと考えて、確固たる“敵意”を込めて、椿を睨みもした。

だが、椿はそんな桃乃を助け、慰め、囮になった。

それは、恩を恩と感じない相手だったら、非常に危険な行為だ。

実際、桃乃が教師に伝えることもせず治療を受けるためだけに走っていたら、取り返しのつかないことになっていた可能性もあるのだ。

「だからせめて、椿の知らないところから椿に向けられる“悪意”を、こういった会を通じて遮断しようと思ったの」

それからの行動は、早かった。

大角大蛇の事件で助けられたものを誘って、以前から少し気になっていた程度の人も勧誘する。そうやって広げた輪を使って、情報を集めて、悪意を持った人間を捜し出した。

「探して……どうしたの？」

「引き入れたわ」

「へ？」

こんこんと、三日三晩かけて魅力を語る。

すると、最終的には虚ろの目で染まりきる。

洗脳……説得の効果が切れても、椿は確かに良い人なので、その頃には根っこからファンになっている。

「う、うわぁ」

奈津は、退いていた。
後ろのミア達も、目頭を押さえたり頭を抱えたり目を逸らしたり、と多種多様な反応で退いていた。

だが、プレッシャーになると解っている以上、覚醒したカリスマ桃乃ならば、椿に知られるような事態にはしないだろうし、させないだろう。

「でも、それなら、確かに」
「解ってくれたなら、いいわ。それじゃあ、あたしはこれからスナップ鑑賞があるから、帰って頂戴」
「うん、わかった。ありが……うん？」

途中で聞こえた、単語。
全てをぶちこわすような単語に、奈津は眉根を寄せた。

「赤谷、待て」

背を向けた桃乃を、ミアが止める。
桃乃は怪訝そうに振り向いた。

「何よ？まだなにかあるの？」
「スナップ鑑賞とは、なんのことだ？」

すぅっと、目を泳がせる。
口が滑ったようだ。

問い詰めようと、ミアが言葉を続けようとする。

だが、その前に、桃乃が大きく息を吸った。

「あたしは会長としてみんなを導く必要があるの。そのことに妥協は許されないわ。もちろん椿さまに感づかれないように写真を撮って鑑賞する時間を作ってにやにやしてそう言ったところを会員にみせて如何に本気であるか教える必要があるわけ。そう考えると会長なのだから写真を管理して持ち歩き方から拝み方までしっかり指導して勧誘のノルマ達成に景品を用意してご尊顔を拝見してと忙しくなる。でもこれも会の存続のためには仕方がない。そう仕方がないことなのそれくらいわかるでしょう？つまりこれは絶対に必要なことなのわかった？わかったならあたしはさっさと行きたいのだけれどどう？」

一息である。

一度も息継ぎをすることなく、言い切った。

そして、固まってしまい返事のない様子のミアを前に、もう一度息を吸い込んだ。

「あたしは――」

「――わかった！わかったから！」

「そう？それじゃ！」

返事を聞くと、桃乃は今度こそ、と走り去った。

残された奈津達は、げんなりとした顔で、肩を落とした。

「帰ろうか」

「そうだな」

「疲れた」

「ホントですわ」

ため息をつきながら、肩を落とす。
十人がぞろぞろと歩いて、夕暮れの道を進む。
そんなに時間が経っていたのか、と驚いていた。

「あれ？そんな大人数で、どうしたの？」

その声に、十人は一斉に振り向いた。
その様子が怖かったのか――椿は、肩を振るわせた。

彼女は今日、部室で神楽に、遅れた分の勉強を見て貰っていたのだ。

「椿……」
「うん？なぁに？」

ひどく疲れた様子の奈津たちに苦笑いしながら、椿が答える。
奈津はそんな椿にふらふらと近づくと、その手を握った。

「どうしたの？本当に……」
「これからみんなで遊ぼう！こう、ぱぁっと！！」
「へ？」

すると、控えていたレイア達も、椿を囲む。

「いいですわね、どこへ行きます？」
「学院内部商店に、怪しいゲームセンターが、ある」
「それではそこでいいのではないか？」
「あっはっはっ、疲れを吹き飛ばそう！」
「元気良いわね。私も今日は元気出そうかしら」
「わたしはいつもより出しちゃうよ」
「地味でも、地味でも！」

「私は今日は、調べ上げただけだが、疲れたな」
「あらあら、楽しそうですね」

一気に先ほどまでの憔悴した雰囲気を吹き飛ばして、妙にテンションの高い明るい雰囲気になる。そして、椿を中心に添えたまま、歩き出した。

「え？な？え、なに？」

椿は戸惑いながら、なすがままにされて連れて行かれた。

楼城館学院は、今日も平和である――――。

第十八話　フレイムウィング！？（後書き）

なんとか、書き上げ……。
次回一話置いて、次々回から文化祭編に入ります。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第十九話　Ｄｅａｒ　Ｍｙ……

――九月中旬、旧校舎南、英雄考察研究会部室。

広い部屋。

普段は明るいこの部屋は、今は暗くなっていた。

といっても、空気が沈んでいて暗いわけではない。

電気がついていないので、視覚的に暗いのだ。

電気が消えているのなら、それは就寝時か誰もいないとき。

だが、今は真昼で、カーテンを閉め切り、机を囲むように三人の少女が座っていた。

言うまでもなく、奈津とレイアとラミネージュの、三人だ。

奈津は、手元のリモコンを手に取ると、ボタンを押す。

すると、中央にスポットが降りた。お金の無駄遣いである。

照らされた場所には、一枚の紙が置かれていた。

その紙には、“極秘資料”と書かれている。

「今日の議論は、この事についてだ」

そう、わざとらしい渋い声で、奈津が言う。

すると、ラミネージュがそれに頷いた。

「うむ」

そして、レイアが虚ろな目で声を発する。

諦めているのだろう。何に、とは言わないが。

「なんなんですの？……いや、いいですわ」

奈津とラミネージュに白けた目を向けられて、レイアは口をつぐむ。ツッコミたい、けれど、ツッコミをしたら負ける。そんな風に自分を納得させたのだ。

「作戦コードはＴ－０９２３－ＨＢ――よく、覚えておくように」

「うむ」

「はぁ」

奈津が大げさに言うと、ラミネージュはかけてもいない眼鏡を持ち上げる仕草をした。

机の上の資料には、しっかりと作戦コードとやらが書かれていた。

――Ｃｏｄｅ－Ｔ－０９２３－ＨＢ

――九月二十三日、椿の誕生日。

そう、誕生日の、打ち合わせだった――。

――九月二十日、月曜日。

チャイムが鳴って、席に着く。

就任して、もう一ヶ月が経とうとしているのに、入室する姿には緊張からぎこちなさが残っている。教壇に立つ姿にも、まだ違和感がある。だが、授業はしっかりと行うので、特に不満の声が上がったことはなかった。

「おはようございます！今日も暑いですけれど、頑張りましょうねっ」

こうして励みの声をかける姿が、いかにも“少女”が一生懸命頑張っているようで微笑ましい、というのも、不満の声が上がらない理由の一つだった。

「今日の授業のテーマは……“響霊者と魔霊者”ですっ」

そんな幼さの残る彼女は、今年で二十四歳。

実年齢よりも十歳ほど若く見られているとは、想像もしていなかっ

たりする。

「ごく稀ですが、特に感受性の高い存在が生まれてくることがあります。名家の子だったり、魔法と関わり合いのない家庭の子だったりと条件は不明ですが、その人は精霊と契約しやすい、という才能を持っています」

真剣な顔で授業を始める神楽。
その引き締まった表情に和みながらも、生徒達はしっかりと耳を傾ける。

「さらに低い可能性になりますが、そういった人たちの中に、境界鏡を持ち要らずとも精霊を召喚して、完璧な意思疎通を可能とする存在が出てきます」

境界鏡を必要としない、召喚。
その言葉に、椿は目を見開いた。
その様子に気がつく者もおらず、授業が進められる。

「そういった存在のことを――“響霊者―≪エレメントキャスト≫”と、我々は呼んでいます」

響霊者――その、聞いたことのない単語に、椿は首をかしげた。
神霊者では、ないのだ。

「最初の響霊者は、レベル十一の、“名も無き英雄”だと云われています。彼、もしくは彼女は、境界鏡を用いずに召喚した精霊で魔法を扱っていた……そんな伝承が残っていました」

あとで、神楽に聞いてみよう。

そう判断した椿は、聞き漏らさないようにしっかりと耳を傾けた。

「それから、現在までの間に確認された響霊者は、三人のみ。それも、そのうち一人は人類の敵となってしまいました」

どういう意味なのか解らずに、首をかしげる。

響霊者が、人間の敵に回る。それは、如何なる状況なのか、と。

「どのような現象で“そう”なったのかは、わかりません。響霊者が、悪意に堕ちて、人を害するようになる。それも、邪霊として。このように、響霊者が邪霊と成るケースは、たった一人のみです。その一人も、四十年前に、魔法使い達の手によって打ち倒されました。それ以来、そのような存在が出てきたという記録はありません」

そこで、一度言葉を切る。

そして、黒板に書いていく。

「そのような存在を、我々は“魔霊者―≪ダークキャスト≫”と呼びます」

そして、授業の纏めに入る。

それを聞き取りながら、椿はぼんやりと考えていた。

響霊者――それは、自分の力に繋がる、大きなキーワードなのではないのか？と。

そんなことを考えている内に、授業終了のチャイムが鳴った。

椿は、慌てて立ち上がると、神楽の元へ駆けつけた。

「神楽先生！」

「はい？……何か質問ですか？神崎さん」
「あの……神霊者って、どんなものなんでしょうか？」
椿が意を決して切り出す。
ストレートに聞いた方が、まだいいだろう。
「まだだいぶあと……二年生で習う内容ですが、よくご存じでしたね」
勤勉なのですね……そう疑いなく語る目に、椿は少したじろいだ。
「え、えと……まさ、と、遠峰先生！――遠峰先生が口から零したのを、聞いたことがあるんですよっ！」
「そうなんですか？」
思わず、“雅人さん”と言いそうになり、椿は慌てて言い直す。
どんな関係だと思われるか、わかったものではない。
神楽に、ではなく、周囲にいる生徒に、である。
「“真”霊者……“真霊者―≪ダブルキャスト≫”というのは、響霊者が精霊を自分に取り込んだ存在のことを指します。詳しい歴史的関係は二年生時にお話ししますが、三人の響霊者の内、純粋な響霊者はただ一人。他の二人は、真霊者と魔霊者なんですよ。真霊者は、響霊者よりも魂の“核”が、ずぅっと上だといわれていますね」
その説明に、椿はどこか困ったような笑顔で礼を言う。
だが、表情の変化はしっかりと隠していて、それを読み取ることが出来るとしたら、奈津くらいだろう。
神楽は当然気がつくことが出来ず、満足したのだと受け取って職員

室に戻っていく。
椿は、一人、神楽の言葉について考えていた。

真霊者と、神霊者。
神楽の言い方では、まるで後者など存在しないような、そんな風に聞き取ることができる。

誰に相談すればいいのか？
そう考える椿を、胡乱げな表情で見るものが居た。
――椿の肩に乗る、雅人である。

ここに記憶を継承した存在がいるのだから、訊ねればいい。
だというのに、椿は気がつかない。

雅人は、よくこんなところまで“ペット扱い”でいられるね、と呆れていた。
自分で言い出す気はなかったのだが、主をサポートするのは使い魔の定め。
ならば、人前から離れても聞かれなかったら、後から教えようと決意していた。

「椿っ！」
「あれ？どうしたの？奈津」

そうやって考え込んでいた椿に、奈津が声をかけた。
なにやら、慌てている様子だ。

「さっき、教室起動する途中のラミに会ったから、適当に雑談してたんだ」
「うん、それで……どうしたの？」

状況を思い浮かべながら話す奈津。
それを、椿は真剣に聞く。

「それで、何でかわかんない内に誕生日の話になったんだけどね」
「誕生日？」

話の流れはよく覚えていないようだ。
実際は、通りがかった生徒が誕生日占いの本を持っているのを目にとめて……という、偶然から話題に上った話だった。そんな理由、覚えていなくても仕方がない。

「それでそれでっ……ラミの誕生日、七月七日だったんだって！教えてくれればいいのに……っ」

祝いたかったのだろう。悔しげに、呟いた。
ちなみに、同じ事を言われたラミネージュは、怒られているような雰囲気なのに嬉しげだった。祝いたかった、と真剣に言われたのだから、嬉しくもなるだろう。

「そうなんだ……そうだね、お祝いしたかった。……奈津はいつなの？誕生日」

椿も、本気で残念そうだった。
この様子をラミネージュが見ていたら、赤面するラミネージュという珍しい光景が見られたのだろうが……残念である。

「僕は三月二十五日。だいぶ先だよ。……椿は、実は過ぎていましたーなんて、いわないよねー……？」

まさかそんなことはないだろう。
そう問いかける奈津に、椿は目を逸らした。

「ま、まさか……椿」
「す、過ぎてないよ！まだだよ、まだっ！」
「そ、そうだよね」

誕生日を言う。
そんな機会はなかったな、と椿は苦笑いをしていた。
ラミネージュの誕生日が過ぎてしまったくらいなので、一度くらいは話題に乗せるべきだった、と反省もしていた。

「で、いつなの？」
「う……九月の、二十三日」
「ふーん……って、近いよ！」

あと三日である。
過ぎてはいないが、近すぎる。
休みの日を挟むことが出来ないので、用意するのも大変だ。

「むむむ……絶対、サプライズパーティーするからねっ！」
「へ？」

そう、奈津が言うと、丁度予鈴が鳴る。
二人はすぐに席に戻ると、そのあとはもう、誕生日のことを話題に上らせることは、なかった。

†

「ということがあったのさっ！」
「サプライズって言ってしまったら、意味がありませんわよっ？！」
経緯を訊ねられて、奈津が答えた。
その後、サプライズの打ち合わせをするから、と言って椿を部室から追い出したことまで、しっかりと。

そして、レイアがそれに、最近ますます鋭くなっていたツッコミを入れたのだ。
もう、このポジションが板についていた。本人は、認めたくはないのだろうが。

ちなみに「椿も、本気で～」の下りで、ラミネージュはしっかり赤面していた。
各々自分のことで精一杯で気がつかなかったのだが、仕方がないだろう。

「それで、プレゼントとパーティーなんだけど……」
「そう、ですわね」

奈津は考えるように目を閉じて、指を立てる。
そして、そのまま前に乗り出しながら、目を開く。

「あんまり豪華すぎると、萎縮する」
「リムジンもクルーザーも、あまり慣れた様子はなかった」
「そう言われてみれば……そう、ですわね」

今まで質素な生活をしていたためか、椿は過剰に豪華なもてなしをされると、萎縮してしまって素直に楽しめない。

そうなると、“庶民的”なパーティーにする必要があるのだが……。

「庶民的って……どんなのだろう？」
「名家出身者以外に聞いてみればよろしいのでは？」
「誰か、知ってる？」

頭を捻らせるが、庶民出の友人など思い浮かばなかった。

「先生の中には？」
「……思い浮かびませんわね」
「聞いてみれば、いい」

教師陣は、全員レベル七以上の高位魔法使いだ。
そのほとんどが、当然のように名家出身である以上、難しい。

「そうだね、まずは神楽先生に、そんな人がいないか聞いてみよう」
「それが早そうですわね」
「うん」

奈津達は、ここで漸く電気をつける。
そして、身の回りのものを整理すると、書類仕事で涙目になっているであろう神楽の元へ行くために、部室を出た。

†

職員室では、神楽が予想どおり涙目で仕事をしていた。
彼女が今行っているのは、文化祭の下準備の、準備だ。つまりは書類整理である。
そんな仕事があるとは露知らず、来週までにしっかり生徒に指導することが出来るように、覚えておく必要があった。

彼女は部活動の顧問なのだ。
担当クラスを持っていないからといって、のんびり過ごすわけにはいかなかった。

「神楽先生ーっ」

職員室に入ってきた奈津達に、神楽は顔を綻ばせた。
そして、「これで休める」と顔に書いてあったことを、神楽の指導をしていた楓が見逃すはずがなかった。

「佐倉、東雲先生は忙しいから、要件なら代わりに聞こう。場合によっては力になれるぞ」
「あ、ありがとうございます。それなら、お願いします――ね？」
「――東雲先生のことは、気にするな」

机に突っ伏して撃沈した神楽の様子に、奈津は言葉を詰まらせた。
だが、楓が笑顔でそう言うので、野暮なことは聞くまいと、話を切り出す。

「椿の……神崎さんの誕生日にパーティをやりたいんですけど、庶民的なのが良いかなって思ったんです」
「あぁ、それで“庶民的”がどんなものか知っている人を探したい、と？」
「はい」

楓は、椿の部活のメンバーを思い浮かべて、苦笑した。
現在廊下で待っているレイアとラミネージュ。あの二人の感覚に慣れるのは、難しいのだろう。奈津の家も、名門と言える場所だ。そう言ったことも、関係しているのだろう。

「それなら、ミファエルに聞くと良い」
「セルエイラ先生、ですか？」

魔法学のミファエルは、レベル八のレッドクラウンだ。
相当高位の実力者なのに、“庶民的”が解るのだろうか？

そんな疑問符が顔に出ている奈津に、楓は苦笑した。

「ミファエルは、一般人の家から生まれた叩き上げだぞ」

「そ、そうなんですかっ？！」

セルエイラ。

そう耳にすれば、何となく聞いたことがある。

そこまで名声を轟かせたのは、ミファエル一代の力だった。

「ミファエルなら今、屋上の方で施設点検に参加しているだろうから、行ってみると良い」

「わかりました。ありがとうございましたっ」

頭を下げて退出する奈津を、楓は微笑ましい目で見送った。

そして、未だに突っ伏していた神楽の肩を叩くと、笑顔の“質”を変えた。

「続けようか？」

「あぅ……はい」

神楽の弱々しい声が、職員室にこぼれ落ちた。

†

奈津達が屋上へ向かうと、業者の男性と点検について話をしている、ミファエルの姿があった。彼女は今、慎二郎の引き継ぎで学年担当をしている。

「セルエイラ先生っ」
「おや？……佐倉さんにエルストルさん、それにオールアクセンさん？」

ミファエルは笑顔を崩さずに、振り向いて名前を確認した。

「どうしたんですか？」
「あの、実は――」

奈津は、楓にしたように椿の誕生日について、話をした。
楓に聞いてここまでやってきた旨まで話すと、ミファエルは和やかに微笑んだ。

「そうですか。友達思い、なのですね～」
「あ、ぅ……ありがとう、ございます」

顔を赤くして、俯く奈津。
レイアとラミネージュも、その後ろで目を逸らしていた。

「そうですね～……それなら、部室を使うと良いでしょうね～」

「部室を、ですか？」

ミファエルは、笑顔のまま、頷く。

「飾り付けは、なるべく手作りで。それから、一生懸命選んだプレゼントと一生懸命作った料理。――気持ちを伝えるのに、過剰なお金はいりません。ただ、真摯であれば、いいんですよ」

「一生、懸命……なんだか、解ったような気がします。ありがとうございます！セルエイラ先生っ」

「ふふふ、どういたしまして。それから、私はミファエルでいいですよ～」

「はいっ！ミファエル先生！」

走り去っていく奈津達の後ろ姿を見ながら、ミファエルは楽しそうに眼を細めた。

友人とは、財産である。

楼城館に生徒として通っていた頃の“親友”は、何の因果か現在、同じ職場で働いている。

「久々に、楓ちゃんとアンと、飲みに行こうかな～」

ミファエルはそう言いながら、二人の親友を思い浮かべて、笑った。

†

――九月二十三日、木曜日、椿の自室。

今日は秋分の日。
つまり、祝日だ。

椿は、誕生日の話をされた日から部室に立ち入ることを禁止されていた。
理由を知らなければ寂しくも思ったのだろうが、準備を始める前から宣言されていたため、待ち時間で顔が熱くなっていることを、椿は自覚していた。

とにかく自室で待機していてくれ。
そういわれて、椿は自室にいたのだ。

その午前中の、待ち時間で、椿は漸く雅人が呆れた顔をしているのに、気がついた。

「どうしたの？雅人さん」
『はぁ……神霊者のことは、もいいのかい？』
「神霊、者……？――――あぁっ！」

漸く雅人の言いたいことを理解して、椿は思わず声を上げた。

直後の騒動で、すっかり忘れていたのだ。

『はぁ、まったく、君って人は……』

「うぅ……そ、それでっ――神霊者って、過去にもいたの？」

無理矢理話を切り替えようとする椿に、雅人は大きくため息をついた。

そうは言っても仕方がないことなので、椿に合わせる。

『神霊者は、過去どころか現在においても、いたという記録はないよ』

「え――？そ、それなら」

自分は、何なのか？

そう問おうとする椿を、雅人は目で制した。

『遙か昔に、“預言―≪アカシックワード≫”という天恵を所持した人間がいたんだよ。ノストラ……なんだったかな？……とにかく、その人間が後世に出現するもの、として連ねたものの中にあったんだよ――統べる者、神霊者……ってね』

これから出てくる可能性のある存在。

そんな“夢物語”の存在を目にしたからこそ、雅人は椿を手に入れようとしたのだ。

「そっか……じゃあ」

正真正銘、椿は“異端”だということになる。

なにせ、物語の住人といっても、間違いではないのだから。

だが、これは一生ついて回る事情だ。
折り合いをつけて、生きていかなければ、ならないのだ。
沈んだ気持ちを振り払うように、頭を振る。
考えていても、仕方がないことなのだ。
そうして考えを振り切ったとき、チャイムが鳴る。
返事をしつつ扉を開けても、そこには誰もいなかった。
「あれ？」
右を見て、左を見て、上を見て、下を見た。
そこには、一枚の紙が置いてあった。
何故か、新聞の切り抜きで作られた、怪文書のような手紙だ。
「【ヒーロー研部室にて待つ】……あ、あははは、はぁ」
心底驚いたのだろう。
椿は、胸を押さえて息を吐いた。
「……、行こう？“まーくん”」
『はぁ……にゃあ』
しっかりと猫のように鳴いて、雅人は椿の右肩に飛び乗った。
ここが彼の、定位置なのだ。
椿は、先ほどまでの沈んだ気持ちなどではなく、胸を高鳴らせて部屋を出た。

†

相も変わらず恐ろしい雰囲気を醸し出す、旧校舎。
その裏側にある部室は、電気が消えているように見えた。

おそろおそるノックをしても、誰も出てこない。
椿は意を決して中に入るが、やはり真っ暗だ。

――バンッ
「うぇっ！？」

勢いよく、扉が閉まる。
その音に、椿は飛び上がった。

――パン、パパパンッ！！

そして、電気がつくと同時に、一斉にクラッカーが鳴った。

『誕生日、おめでとう！！』

その声に、目を丸くする。
奈津、レイア、ラミネージュ。
ルナミネス、フランチェリカ、明里、ミア。
七人がクラッカーを持って、椿を出迎えた。

色紙で作ったリングといった飾り付け。
手作りであろう巨大なケーキ。
数々の料理に、何故かクリスマスツリー。

その、椿を思って形作られた内装に、椿は感動していた。
ゆっくりと目元を拭うと、笑顔になる。

「みんな……ありがとう。……ありがとうっ！」
「ささっ、主役なんだから真ん中にこなきゃ」
「うんっ」

中央まで歩くと、各々が椿にプレゼントを持ってくる。

「まずはわたしからっ！はいっ、つーちゃん！」

フランチェリカが持ってきたのは、黒猫のキーホルダーだった。
粘土で型を取って樹脂で作った、手作りだ。塗りが甘いのが、試行錯誤を感じさせる。

「それなら、次は私ね」

ルナミネスが渡したのは、本だ。
食べられる野草ベスト千……微妙にずれたセレクトだが、椿が料理が好きと聞いて選んだのだろう。

「次はあたしだなっ」

明里が持ってきたのは、サンドバッグだった。
天井からつるすことが出来る、小型のものだ。ストレス解消にはいいだろう。

「では、私の番だ」

ミアから手渡されたのは、銀で作られたネクタイピンだった。
センスの良い、カッコイイデザインだ。

「私は、これ」

ラミネージュは、子猫の置物だ。
手作りだが、木彫りである。自分で彫ったのか、妙に上手い。

「私は、これですわ」

レイアが渡したのは、テディベアだった。
三日で作るという偉業を為したせいで寝不足なのだが、顔には出さない。
心配されては、元も子もないからだ。

「お誕生日おめでとう――椿」

奈津が贈ったのは……まっさらな、アルバムだった。
大きな赤いアルバムの下、縁に綴られた銀の文字。

――Ｄｅａｒ　Ｍｙ　Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ

一筋だけ、温かい涙をこぼす。
奈津は、そんな椿の手を引くと、壁際まで連れて行く。
手はずどおりにレイア達も動いて、椿の横に並ぶ。

奈津は三脚を取り出すと、ポラロイドカメラを設置して、タイマーをかける。
そして、椿の右側に並んで、手を握った。

「最初の一枚、笑って撮ろう？」
「っうん――――うんっ」

これから、沢山の思い出が紡がれていく、大きなアルバム。
その最初の一枚に映った椿の顔は、目を赤くしながらも……。

――最高の、笑顔だった。

第十九話　Ｄｅａｒ　Ｍｙ……（後書き）

次回から、文化祭編に入ります。

椿たちの誕生日は、「誕生日大全」という本から、性格と物語の都合を考えて設定しました。ラミを決めるのに、一番悩みましたｗ

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

文化祭編も、よろしくお願いします。

第二十話　虹睨祭編？　爪痕

学校の倉庫の奥。
その場所に、大きな箱があった。

布のようなものでがんじがらめにされて、厳重に封印されている、箱だった。

だが、その厳重な封印も、過去のもの。
手入れがされていなかったのか、もうぼろぼろだった。

――カタ

その箱が、揺れる。
見ているものが居れば、気のせいだったと感じる程の、小さな揺れだった。

――カタカタ

繰り返し揺れる。
だが、まだ揺れは小さい。

その箱に近づく影があった。
どこにでもいる、何の変哲もないネズミだった。
物音に反応して警戒し、何もいないことを確認して出てきたのだろう。
ネズミはそのまま、餌を探す。

やがて目に止まったのは、先ほどまでの音の発信源である、箱だっ

た。
ネズミはその箱に近づくと、箱に巻かれた布を噛りだした。
――カリカリカリカリ、カリ
だんだんと緩くなってきた布が、一枚、また一枚と地面に落ちる。
ついに全ての布が落ちたとき、ネズミは折角あらわにしたのに、箱に侵入せずに逃げていった。
新たに人の気配を感じたのではない。
自分たちの――生きとし、生けるものの、天敵の“匂い”を感じ取ったためだった。
――カタ、カタカタ、カタカタカタカタ
箱が、揺れる。
先ほどまでのように小さいものではない。
大きく、箱から飛びださんと、中のものが揺れているのだ。
――ゴトンッ
そしてついに、箱が倒れる。
中から転がって出てきたのは、壺だった。
不気味な程に真っ白な、壺。
その壺から、黒い煙が生まれた。
煙はやがて人の形をとると、その壺を持ち上げた。
そして――――どこかへ、消えていった。

十月四日の月曜日、朝のＬＨＲを、楓がにこやかに始めた。

「さて、それじゃあ、今日のロングホームルームは――“虹睨祭”の出し物について決めるぞ！」

虹睨とは、虹が具現化した龍を指す。

その虹睨の名を持つ行事……それが、楼城館女学院の“文化祭”の、名前だった。

「虹睨祭では、入場客による投票が行われる。その投票で一位を手に入れると、応龍祭同様に内申に色がつく。まぁ、そうでなくても伝統ある、名誉の賞だ。頑張れよ」

簡単に概要だけ話すと、楓は教室の端へ行き、パイプ椅子に座る。入れ替わるようにミアが教壇に立つと、指揮を執り始めた。

「それでは、まずは用紙を配るから、それに希望する出し物を書いてくれ」

ミアがそう言って、紙を配る。
椿はその紙を見ながら、首を捻った。

「出し物、かぁ」

やりたいことはなんだろうと、考える。
お化け屋敷と書いても良かったのだが、いざやる段階になって震えるのは目に見えている。

考えたあげく、椿は“喫茶店”と書いて提出した。
ミアは、それを集めると、黒板に書いていく。

お化け屋敷、射的、魔法料理教室、喫茶店、読書喫茶、応龍祭の歴史（展示）……。
書き終わって、そのまとまりのなさに、ミアはため息をついた。

「一部よくわからないのもあるが……まぁいい」

ミアはそう言うと、教壇に手をついて身を乗り出す。
このクラスは、割と全員ノリが良いため、その様子に真剣な表情を

作った。

「普通にやるのも、おもしろくない。そうだろう？」

クラスメートが、息のあった動作で頷く。

出遅れたのは、椿とルナミネスだけだ。

「ならば、一番普通そうなものに、何かしらの“要素”をつけたら、どうだ？」

再び、頷く。

今度は椿も、合わせることが出来た。

だが、ルナミネスは少し遅れてしまった。微妙な表情で悔しがっている。

「さて、どれが一番普通だと思う？――佐倉」

「喫茶店かな」

名指しで問われた奈津は、迷うことなく答えた。

彼女も、お化け屋敷と答えることは出来なかったようだ。トラウマである。

「では、ベースは喫茶店にしよう。いいかな？」

三度、頷く。

今度は二人とも合わせることが出来た。

クラスメートが生暖かい目で自分たちを眺めるのには、気がつかないことにしていた。

おもに、精神衛生上のために。

「特殊な要素が欲しいのだが、何かあるかな？――鎌倉」

鎌倉と呼ばれた生徒は、金に近い薄い茶色の髪を、頭の後ろでアップにした少女だ。
フルネームは、鎌倉里美である。

「我々は、常日頃から“淑女たれ”と教わってきました」

里美がゆっくりと告げると、ミアがその言葉に合わせて頷く。

「ならば――――たまには、“紳士”であっても、よろしいのではないでしょうか」
「うむ、なるほど」

その言葉で意図を読み取ったのか、ミアは口の端を持ち上げて、ニヒルに笑った。

「みんなも、それでいいかな？」

クラスメートが、一斉に頷く。
何のことか解らずに首をかしげたのは、椿とルナミネスだけだ。
他の人は、解らなくても頷いている。ちなみに、奈津も解っていない。

「ならば、決定だ。……草加先生、私たちのクラスは――“男装喫茶”を行います」
「ホント、ノリ良いな。おまえたち。……よし、それじゃあ私は報告してくるから、後はよろしく」
「はい」

そのやりとりを見て……椿は、固まっていた。
紳士……それは男装を指す言葉だった。

よく考えればわかるものだが、この妙な空気の中で気がつけと言う方が無理がある。

ちなみに、しっかりと頷いていた奈津は、机に突っ伏していた。
どうやら、本当に解っていなかったようだ……。

†

文化祭の出し物を決める段階ではあるが、まだ準備期間というわけではない。
本番は来週から。本格的に準備を始めるのは木曜日からだ。

木曜日の午後から、授業の代わりに準備を進める。
だが、それまでは普通に授業がある。この浮ついた雰囲気の中で、どうやって気を引き締めさせる授業を行うのかは、教師の腕の見せ

所だった。

実力者であるが故に、のほほんとしながらもしっかり教えられるミファエルは、こういった空気の中でもしっかりと授業を進めることが、得意な教師だった。

ちなみに、新任であるせいか、神楽は苦手である。

……自分まで浮ついた気持ちになりがち、というのも、否定は出来ないのだが。

「今日の座学は、精霊さんと仲良くなりましょう～……という、お話ですよー」

教壇に立つと、のんびりと話し始める。

耳に良い声は、良く通る。すんなりと頭に入ってくるので、集中しやすかった。

「精霊さんと仲が良くなると、自創言語による詠唱や、精霊言語の魔法が扱えるようになります。他にも、魔力の消費量が少なくなったり、威力が上がったりと、様々な恩恵があるのですよ～」

精霊との絆を深めて、信頼関係を構築する。

それは、魔法使い達にとって、とても重要なことだった。

「精霊さんと仲良くなって、精霊さんに愛されると、特別に渡されるアイテムがあります。私が持っているので、まずお見せしますね～」

そう言うと、ミファエルは黒い宝石を取り出した。

大きさは直径七～八センチ程度。加工された形ではなく、そうやっ

て出現したかのような不思議な球体だった。

ミファエルがそれを握ると、手のひらの中へ消える。

そして、そのまま手の裏、左手の甲に紋章が浮かび上がった。

「精霊さんが、“貴女のことを認めました。ずっと仲良くしましょうね”という証が先ほどの石です。これを“霊秘宝―≪エレメントクリスタル≫”と呼びます」

再び手のひらに出して、かざして見せる。

そして、再び握る。

「浮かび上がる刻印は、精霊さんの名前です。固有の名を持つ精霊さんは、契約時に皆さんに教えていると思います。逆に、固有の名を持たないものは、皆さんに名を求めたことでしょう」

椿が前者で、奈津が後者になる。

椿は、始めに精霊石に刻まれていた名を呼んだ。

奈津は、精霊に名を求められて名付けると、精霊石に名が刻まれた。

「いずれにせよ、精霊石には刻印が浮かびます。名前をつける、名前を呼ぶという行為は、現実世界と幻想世界の繋がりを濃くする効果がありますからね」

そう言って微笑みながら、改めて刻印を生徒達にかざした。

「霊秘宝にも、精霊石と同じ刻印が刻まれます。そして、その霊秘宝を身体に取り込むことで、精霊さんとの繋がりを、より強固なものとすることが出来ます。精霊さんと一心同体である、という証ですね。……この証のことを“刻印―≪エレメントコード≫”といい

ます。みなさんも、しっかり覚えておきましょうね～」

黒板に大きく書かれた二つの単語。

霊秘宝と、刻印。

「精霊さんと仲良くなるには、まずは一生懸命精霊さんとお話をすることから始めましょう。魔力を使ってこちらへ顕現させ続けるという行為だけでも、精霊さんに熱意は伝わりますよー。ちなみに、私は顕現させて、一緒に寝ました。暖かいんですよ～」

ちなみに、ミファエルの精霊ベヒーモスは、一言でいうと“巨大なカバ”だ。

部屋に入るはずもなかったので、校舎の屋上に忍び込んで、一緒に寝ていた。

当然、許可はとっていない。

「それでは、今日の授業はここまでです。みなさん、精霊さんと仲良しさんになれるように、頑張ってくださいね。お疲れ様でした～」

最後まで、のほほんとしながら、ミファエルは教室から出て行った。

精霊と仲良くなる――信頼関係を築く。それは、今後の大きな課題だった。

†

放課後の、ヒーロー研。
ここでも、虹睨祭の出し物について話し合っていた。

「英雄の歴史を調べて展示をする、というのはいかがかしら？」
「ヒーロー喫茶、とか」
「ヒーロー、ヒーロー……うーん」

関連づけるのなら、英雄の歴史が一番“らしい”出し物だろう。
一部よくわからない案が出ていたりする中、奈津が立ち上がる。
突然の行動になれた椿たちは平然としているが、そうでない神楽は肩を跳ねさせて驚いていた。

「ふっふっふっ……ヒーロー研というのなら、出し物は一つしかないじゃないか」

髪を掻き上げて、言い放つ。
その仕草に、レイアはあからさまに退いていた。失礼である。

「一つって？」
「よくぞ聞いてくれました！」

そんな奈津にわざわざ聞き返す椿は、甘いのだろう。
調子に乗ってしまった奈津の様子に、レイアは肩を落として息を吐

いた。
諦めと呆れである。

「そう、それは――――“ヒーローショー”さっ！！」

しん、と空気が静まる。

ぽかんと口開けるレイア。
いつもと変わらないラミネージュ。
首をかしげる神楽。
そして――――目を輝かせる、椿。

「ショー、ですの？」
「ブラウン管の向こうの世界をミュージカル風に再現する、架空の英雄劇」

よくわかっていない様子のレイアと神楽に、ラミネージュが的確に説明した。
普通のお嬢様は、ヒーロー好きでもそんなものは知らない。奈津や椿はともかく、ラミネージュが知っているというのも、おかしな話だが。

「虹睨祭でミュージカル、ですか。よろしいのでは？」
「そうですね、面白そうだろ思います」

的確な説明ではあったが、知っているものと知らないものでは、聞こえ方が違っていた。
ミュージカルを連想したレイアは、それでもいいかと頷き、神楽もそれに倣う。
椿は、少し恥ずかしいが、レイア達も賛成したのなら、と頷いた。

ラミネージュと奈津は、申し合わせたかのように目を合わせて、やはり頷いた。
特に打ち合わせはしていないが、息のあったコンビプレイだった。

「そっかそっか。良かったよ、賛成してくれて」
「それでは、私は報告をしてきますので、みなさんは細部を煮詰めておいてください」
「わかりましたっ……ちょうどここに、見本のＶＨＳが……」

実に、準備が良い。
ニヤリと笑う奈津の意図に気がつき、椿は顔を引きつらせた。
この手際はひとえに、レイアを逃さないためのものなのだろう。

報告を済ませて、後戻りは出来ない。その上で現実を突きつけることで、レイアに“言い訳を作ってあげる”のだ。

最近染められているレイアなら、嫌がりはしないだろう。
だが、確実に照れるので、こちらから“こういったわけだから仕方がない”という理由を用意してあげるのだ。

そうすれば、レイアとて最終的にはノリノリで参加することが出来るだろう。

そこまで考えた手順に、奈津の本気さがよく表れていた。
ヒーローショーでヒーローをやるなど、ヒーローファンの憧れの体現。
出来る機会が転がっているのだから、やらない理由はなかった。

そして――真っ赤になったレイアは、結局どこか嬉しそうに、この

案を呑み込むのだった。

†

夕暮れ、寮への帰り道。
奈津は上機嫌に鼻歌を歌いながら、歩いていた。

椿たちは、そんな奈津と一緒に歩ている。
奈津程ではないが、こちらも上機嫌だった。

「まったく、嵌められましたわ」
「顔がにやけてる」

肩を竦めるレイアに、ラミネージュが間を置かずに言う。
すると、レイアは顔を赤くして言葉を詰まらせた。

奈津が厳選した、ヒーローショービデオにすっかりはまってしまったようで、そわそわしていた。ビデオやゲームなどの娯楽道具は部

室でしか使えないため、続きが気になって仕方がないという様子だった。

寮の前につくと、見たことのない子供が立っているのに気がついて、足を止める。

「あんなところでどうしたんだろ？」

「虹睨祭が近づいてきたので、都市部のホテルに泊まりに来た、生徒のご家族ではありませんこと？」

虹睨祭は、チケットを入手すれば一週間前から都市部のホテルに泊まっていることが出来る。これは、移動に時間がかかる海外からの客にも対応するためだ。疲れを癒すための期間である。

だが、当然だが校舎どころか演習場付近にも近づくことが出来ない。あくまで都市部だけなのだが、何故か子供がいたのだ。

「おーい、そこの少年っ」

奈津が呼びかけると、少年が奈津達を見る。
その目には、警戒の色が浮かんでいた。

「誰か待ってるの？呼んでこようか？」

それでも気にせず、奈津が話しかける。
そんな奈津を、少年は未だ険しい目で見ていた。

「誰だよ、あんたら」

「僕たち？僕たちは……ヒーローさっ」

子供相手に、胸を張る。
自信に満ちあふれる奈津を見て、椿は苦笑する。
そして、少年を見て……目を、瞠る。

「……ばっかじゃねぇの」

その目に映るのは、憤怒、憎悪、そして――悲哀。
幼い少年が、“ヒーロー”に宿す感情とは、真逆のものだった。

「はい？」
「ヒーローなんか、いるわけねえじゃんっ！」

奈津は、憤りを向けようとして……それを、呑み込む。
少年の目を見て思うところがあったのか、深呼吸をして、少年と目を合わせる。

「いるよ。――ヒーローは、いる」
「っ……じゃあ、どこにいるんだよ！どこにもそんなものいないから、姉ちゃんがっ」
「悟っ！？」

少年が、声を上げる。
その声を遮ったのは、椿たちの後ろから響いた、少女の声だった。

赤茶色の髪を三つ編みにして、肩口から垂らした少女。
緑色のネクタイをしていることから、一年生であることが伺えた。

「どうしてここにいるのっ？お父さんと、お母さんは？」
「ね、姉ちゃん」

怯む少年――悟を、奈津は未だに、じっと見つめていた。

「父さん達は、学院長に挨拶してくるから、姉ちゃんのところへ行ってろって」

「そう……中に入れて貰えなかったの？」

「入って待っていても、いいって」

「それなら、入ってよう。ね？」

姉に言われて、悟は渋々と笑顔で待っていた寮母のところへ歩いて行った。

そんな少女を見て、ラミネージュが抑揚無く呟く。

「思い出した。同じクラスの、浅川洋子さん、だ」

「浅川さん？」

聞いたことがない名前のはずなのに、どこか引っかかるものがあって、椿はその違和感に首をかしげた。

「あ、あのっ……その、弟が何か、失礼なことをしてしまわなかったでしょうか？」

「うん？……いや、元気があって良いと思うよ」

奈津は、悟から目を話すと、そう言って朗らかに笑った。

明里曰く、“とりあえず誤魔化せる笑い方”である。

「えーと、浅川さん？」

「あっ……はいっなんでしょう？」

意を決して、椿が話しかける。

すると、洋子は妙に緊張したような、返事をした。

その様子に椿は首をかしげるも、奈津達は微妙に嫌な予感がしていた。

「奈津、これってまさかとは思いますが……」
「どうしても気になるんだったら、赤谷に聞けば良いんじゃないかな？」
「確定だと、思うけど」

三人で輪になって、そう話す。
椿は、その様子に気になりはしたものの、聞かない方が自分にとって良さそうな“予感”がしたので、話を進める。

「悟、くん？……は、その、ヒーローが苦手だったり、する？」
「ヒーロー、ですか？――あっ」

怪訝そうに眉をひそめるが、考えれば思い至ったのか、洋子は手を打った。

「おそらく、私のことだと、思うんです」
「浅川さん、の？」

洋子は、こくりと頷くと、苦笑した。

「私は、蛇の邪霊が出たときに、襲われてしまったんです」
「――――大角、大蛇」

そう、椿は、被害者の名前を聞いたときに、洋子の名を耳にしていたのだ。
彼女は、あの事件の被害者だった。

「それで、私は……後遺症で、右目が光を失ってしまったんです」

そう言って苦笑する洋子の右目は、極端に色素が薄かった。

ラミネージュの様に“真紅”とは言わないが、赤茶色の左目に比べると、紅い色に見えた。

「今は、アンジェリカ先生のおかげで奇跡的に回復に向かっているんですが、悟は小学校でも“英雄”の話が出る度に、「そんなのがいるなら、姉ちゃんが傷つくこともなかったのに」って」

子供から、夢を奪ってしまった。

洋子は、そんな風に考えさせてしまうことが、辛かった。

「で、でもっ…神崎さん達には、とても感謝しています。あのまま閉じ込められていたら、それだけでは済まなかったことでしょうから、だから……ありがとうございましたっ！」

アンジェリカの力を以てしても、“奇跡的”と言われる。

それは、一般の病院や治癒魔法使いが相手では、治らなかった可能性がある、ということだった。

頭を下げて寮の中へ入っていく洋子を見送ると、椿は奈津を見た。

奈津は、ヒーローを否定されてもなお、力強く笑っていた。

「成功させようね、ヒーローショー」

「……うん。そうだね、成功させよう！」

奈津がそう、意志の込められた声で、言う。

そのまっすぐな目に、椿は大きく頷いた。

「そうと決まれば、もっと煮詰めませんと、ねぇ？」
「頑張ろう」

新たな決意を、胸に。
少年の夢のためにも、と、奈津は虹睨祭への意志を固める。

「ヒーローは、いる」

そう、教えてあげるんだ。
言葉に出さずとも、奈津の意志は、しっかりと椿たちに伝わっていた――――。

第二十話　虹睨祭編？　爪痕（後書き）

今回から、文化祭編に入ります。
二章の大きいイベント、その二です。

文化祭の名称、虹睨祭ですが、これは「こうげい」と読みます。
古代中国の民間伝承に出てくる龍で、虹と睨という夫婦の龍です。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第二十話　虹睨祭編？　鳴動

暗い、校舎の中。
静まりかえったこの場所に、風を切る音が鳴る。
銀の閃光が煌めき、黒い影を断つ。
影は悲鳴を上げることもなく、塵となって消えた。

「これで、四体目、か」

刀型装霊器を一降りすると、鞘に収める。
その目は、じっと影のいた場所を見つめていた。

「今更中止するわけにもいかないのは解るが……大丈夫なのかねぇ」

そうはいっても、仕方がない。
楓はそう、肩を竦めた。

「ま、私も……あいつらの楽しみを奪いたくは、ないしな」

自分の担当するクラスの、少女達。
その顔を思い出して、楓は苦笑する。

火曜日早朝、まだ日が昇る前だというのにこんな場所にいるのは、
交代で校舎を警戒していたからだった。

土曜日から現れ始めた、謎の邪霊。
力は強く動きも速いが、妙に脆い。
そして、倒してもいつの間にか、沸いてくる。

「応龍祭の時みたいなのは、勘弁してくれよ」
楓はそうぼやきながら、交代のために歩き出した――。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

予鈴が鳴り、席に着く。
やがて本鈴が鳴る頃には、教室に入っていたミファエルが教壇に立った。

金曜日は丸一日、虹睨祭の準備に使用される。

そのため、実戦授業の代わりを、この日に入れておくことになっていたのだ。

といっても、演習場を使うわけではない。
教室でできる、実習授業だった。

「さて、それでは今回のテーマはずばりっ……“精霊さんと仲良くなるためにっ！”ですよ～」

ミファエルはそう言うと、黒板に「精霊さんと仲良くなろう！」と大きく書いた。
実習としては予想外の内容に、口を開けて固まる生徒もいた。

「精霊さんは、喚び出して維持をし続けることで、仲良くなり始めることが出来ます。これは、“これから仲良くなりたいので、よろしくお願いします”という合図だったりします。みなさん、早速やってみましょうね～」

すぐに正気に戻って、開始する。
環境適応能力が高く、臨機応援に動くことが出来るということが、このクラスの生徒の良いところだ。ノリが良いの一言で片付けてしまっても、間違いではない。

「よしっ……来て、アレク」

戦鎧は装着せずに、装霊器に魔力を通す。
無色の魔力が装霊器を走り抜けて、真紅の光となり輝く。
赤い閃光が伸びて、軌跡を生む。それが幾重にも重なり、いずれ、輪になる。

輪が更に重なり球体となり、球体が淡く輝くと、その身を綻ばせた。
ゆっくりと崩れ落ちて、そこに小さな蜥蜴が生まれる。

赤い皮膚。オレンジの目。
手足の先と尻尾の先、それから、頭のてっぺんに、真紅の炎が淡く灯る。

椿が契約した精霊――サラマンダーのアレクが、ゆっくりと机の上に降り立った。

椿が手を向けると、するりと登る。
ちろちろと覗かせる赤い舌には、やはり炎を纏わせていた。

「今まで、力を貸してくれて、ありがとう。――――これからもよろしくね、アレク」

声をこそ発することはないが、その円らな瞳は、しっかりと椿を捉えていた。
オレンジ色の眼孔は縦に割れていて、その更に奥には炎のような真紅の輝きがあった。
時折見せるその紅は、人間の心を捉えるには、たやすい。

普通の人間ではない椿を以てして、どこか惑わせるような美しい魔力が、そこに宿っていた。

手のひらの上のアレクに話しかけつつ、指で遊ぶ。
純粋に猫として雅人を構えない分、ここで動物成分を補充しているのだ。
これで、我慢が出来なくなって猫として雅人を構い倒そうとすることも、減るだろう。

椿の肩の上で、雅人はそんなことを考えて、安堵の息を吐いた。
成人男性の知識を持っていようと、ベースは子猫。根気よく構われれば、身体が勝手に反応してしまうのだ。猫じゃらしにじゃれる自分を想像して喜べる程、諦めてはいない。

「精霊さんに何かを食べさせてあげたければ、亜霊石と水晶を砕いてブレンドした、特殊な調味料を加えて料理に混ぜると良いですよ。欲しい人は、都市部の方で買ってくださいね～」

ペットフードならぬ、精霊フードである。
ちなみに、値段はそう高くはなく、庶民でも買えるお手軽調味料だ。

ちなみに、人間が食べると極微弱だが魔力が回復する。
その特性を生かしたスポーツドリンクなんかも、販売されていたりするのだ。
気休め程度にしかならないから、戦闘時の携帯飲料などではなく“スポーツドリンク”どまりなのだが。

今回は特別に、とミファエルはクッキーを一枚ずつ配る。
椿はそれを手にすると、小さく砕いてアレクに差し出した。
アレクは長い舌で器用にクッキーの欠片を絡め取ると、それを口に運んだ。
おいしかったのか、眼を細める様子は、実に和む。

椿は授業が終わるまで、そうやってのほほんと過ごしたのだった。

†

午後、最後のＨＲを使って、虹睨祭の役割分担などを煮詰める。

「喫茶店というのは、どのようなメニューが出てくるんだ？」

名前は知っている。

だが、喫茶店に行く機会など滅多にないお嬢様達は、まずその段階で困惑していた。

「つーちゃん、わかる？」

「コーヒーとか紅茶とか、あとはサンドウィッチやパスタみたいな軽食とか……あとは、パンケーキやパフェ、それにクリームソーダみたいなのも、置いてあるかな」

椿が例を挙げると、それをミアがメモしていく。

彼女にとっての“常識”は、この場では非常に役に立つのだ。

「さて、調理斑とウェイトレス……ウェイター斑は交互に行うことにしよう。その方が、全員男装することが出来て、楽しかろう」

ミアはそう言うと、意見を求めることもなく決定案に書き込む。
それに不安を言う者は居ない。大半の生徒が、目で合意を訴えていたからだ。
約一割程の生徒は、不満……ではなく、諦めた表情をしていた。

「料理は……どの程度の者が、できる？その、“軽食”とやらの」

ミアがそう問いかけると、手あげたのは当のミア含めて四人程度だった。
さっとできる料理が得意な奈津、本を読みながら食事をしたいがために軽食作りをマスターしたルナミネス、料理全般が得意な椿。パスタが好きなミア、といった具合だ。

「ふむ……では、料理の指導を行った方が良いな。私たちも互いに補完すべき部分があるだろう。そうだな……明日から少しずつ時間をとって、準備期間で本格的に学ぶことが可能となるための土台作りをしておこう」

ミアはそう言うと、今度は他の役割分担を始めた。
装飾や、調達、会計などといった仕事だ。

これも、得意な者を聞いた後に後の指導を含めて時間を作っていくことになった。
おおむね、順調である。

†

放課後は、ヒーロー研でシナリオ作成となった。
演技の指導にせよ小物の調達にせよ、まずはシナリオが決まらなければ思うように動くことが出来ないからだ。

ちなみに、神楽は屋上が会場として使えないか、学年担当のミファエルに交渉しに行っていた。

「やっぱり王道は、ヒロインのピンチ……かなぁ？」
「その場合、ヒロインはどうしますの？」

折角だから、神楽を含めた五人で、一組のヒーローをしようという話になっていた。
その場合、敵役、ヒロイン、エキストラなど、多くの問題が残っていた。

「ヒロインは……友情出演で頼めないかな？」
「誰に？」

そう呟いた奈津の声を拾い上げた椿が、首をかしげて問う。

「チェリカ。似合うと思うんだ」

それは、浚われた子供という役だろう。
本人が聞いたら、微妙な顔をしそうだ。

「なるほど。チェリカ、可愛らしいもんね」

……そして、続いた椿の言葉に照れる。
瞼の裏に、鮮明に思い浮かべることのできる、光景だった。

「敵役は？」
「敵役、悪役、ヒール……赤谷さん、とか？」

続いて質問をした椿に、奈津は悩んで、思い浮かんだ名前を口にした。
どのような形であろうと、椿との共演だ。二つ返事で了承するだろう。
そして、妙に似合うのだ。

しかも、そうすると、ファンクラブという名の雑魚戦闘員もついてくるだろう。

「でも、見返りが怖い」

ラミネージュが、小さく呟いた。
確かにそれでは、見返りが非常に怖い。
何をさせられるかわからない……というか、予想が出来ない分余計に怖い。

「まずオファーをしてみて、見返りを聞いて……それからでもよろしいのではなくて？」

「それもそうだね……まずは聞いてみよう」

これで、配役はひとまず保留にできた。

そして、シナリオ作りに戻る。

「やっぱり、会場に声を投げかけて、ヒーローの名前を呼んで貰うって言うのがいいよね」

「それは、観客が進んで名前を呼ぶように、テンションを上げさせるのが第一段階として必要ですわよ？」

原作のシナリオがあれば、始まった時点で盛り上がる。

だが、そうでないのならどうすればいいのか。

「そのために、音楽があるんだよ」

「気分が高揚する音楽で、パッパラパーにする」

それでは、電波である。

ラミネージュの例えに苦笑しながら、椿はその案を考える。

「どんな音楽が気分の高揚に繋がるかは、梓川先生に聞けば良いんじゃないかな？」

「あー、なるほど」

奈津が、納得したように頷いた。

「それでは、シナリオを煮詰めましょうか」

「そうだね。それで、その後オファーに行ってみよう」

方針が固まり、椿たちはシナリオ制作を本格的に始めたのだった。

†

翌日、オファーが貰えたことを朝のＨＲ前に、確認し合った。
桃乃に頼んだのが奈津で、チェリカに頼んだのが椿だ。
マリアへの音楽指導へは、レイアとラミネージュで足を運んだ。

そして、今日の放課後は、料理指導に入る。
学院の厨房を一室借りて、そこで指導を始めることになった。
椿は、クラスメートにパフェやクッキー、パンケーキなどの作り方を、教えていた。

「そうそう、生地はそうやって……」
「お、おぉぅ？」

今教えているのは、ホットケーキだ。
知らないだけなので、実際に教えて実践してみれば覚えは早かった。
椿に指導されて、まだやや形は歪だが、明里もそれなりに出来るよ

うになっていた。
ちなみに、作ったものは今日の夕飯となるため、手は抜けない。

「チャーハンに必要なのは魂だよっ！熱い魂だよっ！」
「うん！奈津！わたし、頑張るよ！」

妙にテンションが高いのは、奈津とフランチェリカだ。
空調の効いた部屋だが、テンションが高いせいで大粒の汗をかいていた。
もちろん、火力も原因だろうが。

「サンドウィッチの具は……焼きそば？それなら、コッペパンに……」
「そう、そこでアンチョビを……あぁ、そうだ」

ルナミネスとミアも、それぞれ指導に精を出している。
担任である楓は、試食係だ。楓が料理が出来ないわけではない。
ただ、彼女たちが試食のしすぎで太ることを、恐れただけである。

生徒の中でも、積極的に試食をしている奈津は、太らない体質だった。
おかげさまで、未だに絶壁である。何が、とは言わないが。

「さて、大体こんなものか」

できなかった生徒に対しては、また後日。
明日からは、衣装の作成や立ち振る舞いの練習と、本格的に内容を煮詰めていくことになっている。

内装を作り始めるのは、金曜日からだ。

デジタル時計が十八時半を指したところで、ミアは終了の合図を出した。
椿たちは、取りかかっている最中の料理を完成させると、片付けてから料理を並べる。
今から、夕飯だ。

量が多いので、教師陣も呼び集めた。
他クラスの生徒は、虹睨祭までお預けだ。

「アンシュタイン先生、これ食べてみてください！」
「アンシュタイン先生！こっちもお願いします♪」

生徒達が、束になって集まる。
中心にいるアンジェリカはそれを慣れた様子で受け取っていた。
慣れとは言うが、諦めと言い換えても良いだろう。

「東雲先生、こっち、おいしいですよ」
「え？あ、はい」
「東雲先生、こっちもどうですか」
「あわわわ、まっ、まって、くださ」
「こっちもありますよー」

小動物の如く食べ物を受け取っているのは、神楽だ。
そうしていると、ますます幼く見える。

「梓川先生、そのお酒、どこから持ってきたのですか？」
「あーくつせんせいっそんな堅いこと言わないでっ」
「真面目に聞いてくださいっ」

「もう、顔が怖いよ～りこちゃん」
「ぐぬぬぬぬぬ」

どこからか一升瓶を持ち出していたマリアと、その様子に青筋を立てる莉子。
高位の魔法使いは、案外“魔力補充のため”という言い訳が通ってしまう。
よそから補給するのが上手いのは、実力の証明にもなる。

「楓ちゃん、私もお酒飲もうかなぁ」
「エル、それだけはやめてくれ」
「えーでも～」
「頼むから、な？」

そんなマリアをうらやましそうに見るミファエルを、楓は必死で止めていた。
必死すぎて、呼び方が私生活の時のそれになっている。

わざわざ輪から抜け出して、アンジェリカも止めに入る。
そんなにひどいと言うことだろう。

「酒癖かぁ」

呟いた椿に、奈津が勢いよく反応した。
教師陣は、流石に生徒達には飲まさない。
だが、何かの弾みで飲んでしまったら、恐ろしいことになるだろう。
ある意味で。

「椿っ、チェリカと僕の力作チャーハン食べてみてよっ！」
「うん？あ、ありがとう。奈津、チェリカ」

「うんっ！」

なんとか話題を逸らすことが出来て、奈津は額を拭う。
冷や汗をかいてしまったのだ。

夕食会は予想外の賑わいを見せ、結局夜中まで騒いでしまったのだった。

†

散々騒いだ後は、教師陣を含めた全員で食器洗いなどの片付けを行った。
いつの間にか飲まされて潰れていた神楽を医務室まで運ぶ手伝いをしたため、椿と奈津は他の生徒よりも少しだけ遅く帰ることになった。

寮母への根回しは、すでに楓が行っているので、心配は要らない。

「いやぁー満腹満腹」
「ちょっと食べ過ぎちゃったけどね」

これでは、虹睨祭本番ではどうなるか解らない。
椿は、そう言って苦笑した。魔法を使うとカロリーを消費するので、魔法使いはあまり体形を気にする必要がない。……というのは男性に限った話で、女性はやはり気になるのだ。

主に、腰回りや二の腕が。

「明日からは、衣装合わせと立ち回り、だっけ？」
「うん。それから、部活の方も」

紳士然とした歩き方を学ぶ必要がある。
さらに、それに合わせた服装を考えることも、重要だった。

「でも、まぁ……このまま順調にいけば――っ」

奈津が、途中で言葉を切る。
道の中央、その場所に――――影が、あった。

黒い、煙を固めたような物体。
それは人の形をしているが、明らかに人間ではなかった。
闇を煮詰めて固めたような、深い黒。その黒は、かつての大蛇の目に、よく似ていた。

「順調には、いかないみたいだね」
「僕たち、運が悪すぎないか？」

向こう側の子供達である奈津と、神霊者である椿。

この二人は、どこか邪霊を惹きつけやすい“なにか”を持っているのだろう。

影が、動く。
音が発生するような器官を持っていないのか、無言だ。
スライムですら鳴き声を発していたのに、この邪霊はそれができない様子だった。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に疾風の加護を授けん】」

その素早い身のこなしに、最初に反応したのは奈津だった。
素早い、そうはいっても、奈津程ではなかった。

「せいやっ！」

邪霊が振り上げた腕を、何でもないことかのように躱す。
その風に乗ったツバメのような動きに、邪霊は反応することが出来ない。

奈津は後ろで、椿が構える気配を感じ取った。
ならば奈津がするべき事は、椿が一手を投じることが出来る、隙を作り出すことだ。

「はぁっ！――――あ、れ？」

そのために、胴に向かって素早さ重視の一撃を放った。
怯ませることが目的のため、威力はない。だというのに、邪霊は一撃で塵になる。

「弱ッ」
「でも、何かおかしいよ」
「う、うん……確かに」

脆すぎる、邪霊。
こうやって脆い邪霊は、大抵の場合“本体”がある。
だが、周囲にそれらしき気配は、無かった。

「本当に……厄介なことになりそうだ」

奈津のげんなりとした呟きが、夕暮れの道に小さく響くのだった――。

第二十話　虹睨祭編？　鳴動（後書き）

文章、ストーリー評価、ありがとうございます！
モチベーションが非常に上がったので、早めに書き上げることが出来ました。

今回、次回と短めです。
次回一話を置いて、虹睨祭本編に入ります。

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。
次回も、よろしくお願いします。

第二十話　虹睨祭編？　準備と兆し

それは、疑問に思っていた。
この人間の多い場所で、なぜ未だに“餌”にありつくことが出来ないのか？……と。

少しずつ移動して、人の多い場所へ向かう。
それは“本体”である以上、積極的に行動することが出来なかった。
そのため、ゆっくりと、ゆっくりと移動していた。

やがて、自分と同じような形をした“物”が大量に置いてある場所に、辿り着いた。
それは、活動するその瞬間以外では、自分の正体を悟られないという特性を持っていた。

自分のその特性を理解していたそれは、その場所にひっそりと身を隠す。
いずれ、“餌”が油断して動く気配を見つけたら、活動を開始するために……。

それは――備品置き場と書かれた部屋で、息を潜めた。

十月七日、木曜日。
この日は、午後から虹睨祭の準備期間になる。
そのため、椿たちはミアによって、立ち振る舞いの指導をされていた。
彼女は、男性の兄弟が非常に多い家庭だったため、自然にできるようになったのだという。

「歩くときは、大股に。それでいて仰々しくならないように、堂々とするんだ」

やや難しい注文だが、こなしていく。
できあがれば、男性らしい形になっていくのだ。

「何も完璧に男性になる必要はない。女性からの“理想的な男性像”も加えていくんだ」

ターゲットは、むしろ男性よりも女性である。
女性から見た男性の“理想像”を動きに加えていくことが、重要だった。

「礼をするときは、目を伏せすぎるな。じっと相手を見つめるといい。ただし、やりすぎるなよ？あくまで自然に、だ」

ミアはきびきびと指示を出す。
水を得た魚のように、生き生きとしていた。

「座るときは、やや足の間を空けるんだ。手は膝の上で、軽く握り拳を作る。胸はなるべく張れ。……あぁ、水戸川、君は少し猫背で上目遣いにした方が良い。テーマは“年上のおねーさんに甘える少年”だ」

どんな男性がミアの趣味なのか。
気になりはするが、気にしない方がいいのだろう。

「イクセンリュート、君はなるべく気軽に笑わないようにするんだ。目があったら、口元を手で隠しながら、あからさまに目を逸らせ。テーマは“堅物クールで赤面性”だ」

ルナミネスは、げんなりとした表情だ。
それでも、やるのだが。

「大寺門は、粗暴で良い。それでいて、触れそうなときは宝物を扱うようにするんだ。テーマは……そうだな“不器用な美青年”でいこう」

なんでも快活に笑って受け流す明里が、引きつった笑顔を見せてい

る。
珍しいことだが、気持ちはよくわかる。
「椿は、動作や仕草以外はなるべく自然体でいてくれ」
「え？……それでいいの？」
「もちろんだ。……テーマは“天然ジゴロなアイドルボーイ”だ」
「天……え？」
首をかしげる椿を華麗にスルーして、ミアは奈津を見た。
奈津は、練習のためにと椅子に座らせた女生徒に、世話を焼いていた。
「ほら、大丈夫？心配しないで、僕がついてるよ」
普段から磨いてきた少年らしさを、最大限利用したフォルム。
動作はどこか、紳士然としていた。
「ふむ……いいぞ、佐倉。テーマは“青薔薇の王子様”で決まり、だな」
最早意味がわからない。
だが、それにツッコミを入れることが出来る猛者は、ここにはいなかった。

†

放課後の部室で、奈津は上機嫌だった。

「一時はどうなることかと思ったけど、やってみると楽しいね、男装喫茶」

「そ、そう？……私としては、なんだか“ホスト”っぽくなっちゃってる事の方が、気になるかも……？」

「ほすと？」

「う、ううん。なんでもないよ」

ホストを知らないのか、流石お嬢様だっ……などと驚愕している椿に気がつくこともなく、奈津は、衣装合わせに期待を寄せていた。

「クラスの出し物にこだわるのも結構ですが、まずはこちらの話を進めますわよ」

そんなテンションを抑えたのは、レイアだった。

よく見れば、神楽も苦笑していた。ラミネージュも、心なしか何処か不満げだった。

「私たちの衣装ですが……それはどうしますの？」

「うーん……学校で特注……して、作ってくれるかなぁ？」

「自分たちで作る、とか？」

ラミネージュはそう言うが、それは中々難しい。
ヒーロースーツは、装飾品なども飾られる。魔法の力で制作時間が短縮できるため時間は気にする必要はないが、それも専用の施設を持つ職人にのみ、許されたことだ。

「職人……職人……そうだっ！」
「ど。どうしたんですかっ？」
「心当たりがあるの？奈津」

奈津が勢いよく、立ち上がる。
肩を震わせた神楽の横で疑問符を浮かべていた椿に詰め寄ると、その手を掴む。

「いるじゃないか！ヒーローファンの、職人さん！」
「え？……え、えーと――――あぁっ！！」

奈津の言葉で思い出したのか、椿も手を打って答えた。
そう、いるのだ。ヒーローファンで、腕の立つ、職人が――――。

†

ラミネージュが奈津と相談しつつみんなの意見を取り入れて、デザイン画を書き起こした。
それを持って、ヒーロー研総出で、装霊器の施設に入った。

初日に相談した受付の女性に頭を下げると、早速奈津が用件を切り出した。

「あの、柿沼荘厳さんは、いらっしゃいますか？神崎椿とその仲間達がやってきたっ……と伝えていただければ、解ると思うので……」
「はい、かしこまりました。少々お待ちくださいね」

女性は、すぐに内線を繋ぐ。
そして、一言二言交してから、要件を告げた。

「はい……はい、そうです……はい…はい…畏まりました」

女性は電話を置くと、奈津達に微笑む。
営業スマイルと一言で割り切ることが出来ない、奇麗な笑顔だ。

「四階の四〇六号研究室で、お待ちしているそうです」
「ありがとうございますっ……さ、いこうっ」

椿たちを先導する形で、エレベーターに乗り込む。

「ちょ、ちょっと奈津！いったい誰の元へ連れて行こうとなさっているんですのっ？」

「気になる」

レイアとラミネージュに問われて始めて、奈津は自分が説明していなかったことに気がついた。神楽は、ただ苦笑いをしている。テンションについて行けきれないのだ。

「僕と椿の装霊器と戦鎧を作ってくれた職人さんだよ。熊みたいだけど良い人だよ」

熊みたい、は人格に関係する特徴ではないだろう。
熊が凶暴だという考えは、レイアとしては頷きにくい。
くまさんのぬいぐるみを手作りしてしまう程度には、レイアは熊が好きだった。

「っと、着いたみたいだね」

歩きながら話していたせいか、移動はあっという間だった。
四〇六号と書かれた部屋をノックする。すると、ドアの向こうから野太い声で返事か来た。

「失礼しまーす」
「失礼します」

奈津と椿が先導して、研究室に入る。

短く逆立った髪。
適当に生やした無精髭。
胡乱げだが鋭い目。
強ばっていて厳つい顔。
熊のように大きな身体。

「お久しぶりです、荘厳さん」
「おう、椿の嬢ちゃん！久しいな！」

そう、世界最高峰と謳われる装霊器、戦鎧職人――――柿沼荘厳である。

「よう、坊主も久しぶりだなっ」
「あっはっはっ……熊の言葉は理解できないから人間に生まれ変わって人の言葉を勉強し直すと良いんじゃないかな？」
「二人とも？」

言い合って、窘められる。
長い間会っていなかったのに、息のあった動きだ。

「初めまして、ミスタ。私は、レイア・イルネア・エルストルですわ」
「千堂・ラミネージュ・オールアクセン」
「顧問の、東雲神楽です！」

レイアとラミネージュと神楽が、椿の後ろから出てきて頭を下げる。
すると、荘厳は豪快に笑って名を名乗る。

「おう！俺は柿沼荘厳だ！よろしくな！」

手を組んで笑う姿は、豪放磊落という言葉がよく似合う。

「それで、今日は総出でどうしたんだ？」
「あぁ、うん……それなんだけどね――」

一度の言い合いですっかり敬語のとれた奈津が、今日来た理由を説明した。
すると、荘厳は目を丸くして驚いていた。

「こんなに沢山、同士がいたとはっ！」

そう言って男泣きする荘厳の様子に、神楽はあからさまに怯えていた。
高位の魔法使いでも、怖い物は怖いのだ。

「いいだろう、この柿沼荘厳、全身全霊にかけてスーツを作ろう！
さぁ、ラミネージュの嬢ちゃん！デザインを見せてくれ！」
「うん」

ラミネージュがデザイン画を渡すと、荘厳はそれに目を通して、すぐに研究室の奥にある作業場に入っていった。

後に残された奈津達は、その様子を呆然と見送った。

「あー……できたら、お届けしますね」

作業場から顔を出した助手の霧が、一言そう告げた。
彼女は、始めから作業場にいたようだ。

奈津達は顔を見合わせると、安心したようにその場を去った。
これで、大きな問題は、解決したのだ。

†

翌日の金曜日は、丸一日虹睨祭の準備をする。
普段、実戦授業で丸一日使用するため、この日に準備を入れるのは、教師達としてもカリキュラムが組みやすいのだ。

本番のために三日間と後片付けに丸一日使ってしまうため、なるべく今後の授業のことを考えた時間取りがしたかったのだ。

お嬢様学院というだけあって、教室の内装は豪華だ。
授業を受ける環境ということを考慮して、目に痛くはならない程度にしているが、教室と解っていなければ、ちょっと質素な白亜の宮殿といった内装だった。

そのため、教室を改造しただけでも、十分見栄えの良い場所になる。

「第一班は丸テーブルを配置するように」
「委員長！カーテンは？」
「第三班が今用意している」
「委員長、メニュー表なんだが」
「あぁ、それは私が行こう」

「委員長！こっちも」
「しばし、待て」

中心で指揮を執るミアは、忙しそうに動き回っていた。
そんな中、椿たちは着慣れない男性の服になれるために、ジャージとサラシを着て準備を手伝っていた。

「うぅ、胸が苦しい」
「あっはっはっ、そこは慣れないとな」

胸を押さえて呟く椿に、明里が陽気に答えた。
サイズは、明里も椿もそう変わらない。

そんな二人の後ろで、項垂れる二人の姿があった。

「チェリカはどう？サラシの方は」
「奈津は？どうなの？」
「ふふっ……巻いてない」
「……わたしも」

巻いているように見える、とは、言ってはならないだろう。
現に、そう呟いたルナミネスは、二人に睨まれて竦んでいた。

「委員長！飾り付けはどうしますかっ？」
「備品置き場から何か借りてこよう」
「委員長、簡易厨房セットのことなんですけど」
「うむ、今行こう」

簡易厨房セットとは、教室に入れられる携帯型厨房のことだ。
窓際に設置することで換気扇も取り付けられる。人数の割りに無駄

に広い教室だから、厨房とフロアを区切る仕切りを作っても、十分な広さが得られるのだ。

仕切りは、ベニヤ板が張られる。
だが、当然それだけでは終わらない。

その上から土属性の魔法によりコーティングして、風景に溶け込ませる。
これによって、実に自然なフロアができあがるのだ。

看板も同様に、まずはデザインを起こして、それをもとに下書きをベニヤ板に書く。
その下書きに合わせて土属性の魔法でコーティングすれば、やはり綺麗な看板が完成するのだ。

土属性のコーティングと聞けば、当然思い浮かべるのは“土”だろう。
けれど、鉱石、鉱物の類も土属性に分類される。そのため、大理石などで看板や壁を作れたりもするのだ。

精密な魔法になったりもするので、そう簡単に完成はしない。
これは、残りの二日間を使用して、じっくりと完成させるのだ。

焦ってもいいことはない。重要なのは、より丁寧に行うことである。
――これは、ミアの持論だった。

「委員長、備品持ってきましたー」
「ありがとう。デザイン班！置き場所を決めよう！」

足早に、ミアが動く。

この忙しさも含めて、虹睨祭――文化祭の、醍醐味なのだ。

†

放課後には、フランチェリカと桃乃達の協力の下、ヒーローショーのリハーサルが行われていた。立ち回りをある程度早く覚えたラミネージュは、一端その場から離れてマリアから音楽指導を受けていた。

ちなみに、桃乃達の衣装も荘厳に依頼済みだ。
正義の味方を映えさせるのは、悪役の印象を強くする必要がある。
そう言って、荘厳は張り切っていた。

神楽は、土属性の魔法使いのため、舞台の土台を作っていた。
練習をしている場所は、やはり屋上なのだが、舞台が完成している訳ではないので、その脇で練習をしなければならないのだった。

「集合ポーズの後は、背後で爆発をさせた方がよろしいのでは？」

「でも、それだとお子様が……」

立ち回りの休憩時間に、舞台装置について話し合う。
ここで爆発！……などとシナリオを作ったはいいが、実際にやろうとすると難しい。

「煙を中心に、なるべく驚かないようにする、とか？」
「チープな感じも醍醐味ですわ」

椿の言葉に、レイアが頷きながら同意する。
レイアはここまで染め上げられてしまえば、もう後戻りは出来ないのだろう。
可愛い物と裁縫が趣味、というのが今までの彼女の知られざる内面だったのだが、いつの間にか“特撮好き”という、なんとも似合わない趣味が足されていた。

本人が満足そうなので、それは良いことなのかもしれないが。

「あたしとしては、こう……ヒーローを悪の道に引きずり込むことも必要だと思うのよ」
「長編なら一度は入れるべきだけど……すっかり板についてるね、赤谷さん」
「あったり前じゃない。あんたこそ、しっかり椿さま……神崎さんの台詞に“アレ”を入れてくれていたじゃない。佐倉」
「まぁ、それが条件だしね」

桃乃が出した条件とは、ある台詞を椿に言わせることだった。
その台詞自体違和感が無かったのですぐ取り入れることが出来たため、交渉成立となったのだ。

もちろん、椿はそんなことは、全く知らない。
むしろ、敵意を持って自分に接していた桃乃が、好意的に“椿のため”と言って協力してくれたのだ。裏事情など知らずに喜んでいた。
その喜ぶ姿が、“会”の士気向上に繋がるとも知らずに。
準備は、着実と進んでいた――。

†

それから――。
土曜日、日曜日は休憩をほとんど挟まずに、追い込みとなった。
内装はミアの的確な指示により土曜日の内に完成して、日曜日は衣装を着た練習となった。
もちろん、料理の練習も含まれている。
看板は日曜の夜まで時間を必要とし、非常にミア達の肝を冷やした

が、それでも急がずにしっかりと作った結果、満足のいく出来映えになった。

メニュー作り、チラシ作り、宣伝用の手持ち看板作りとすることも多かったが、ミア自身も着手して、早々に終わらせることが出来ていた。

ヒーロー研の方も同様に、ローラーで移動させることが出来る専用の舞台を完成させた頃には、荘厳の元から衣装が届いた。

それを合わせて、本番同様に爆煙を使用したリハーサルもこなした。立ち回りを煮詰めたり、フランチェリカの演技が結構よかったりと、特に大きなハプニングが発生することもなく、準備は整っていった。

翌日の月曜日は、ついに――――虹睨祭の、幕開けだ。

†

虹睨祭の準備が続けられているため、校舎には未だ明かりが灯っていた。
校庭にも人が集まり、屋上からも声が聞こえる。

そんな中、校舎の最上階に位置する学院長室で、蓮はじっと外を眺めていた。

部屋の電気は消えていて、室内は暗くなっている。
その上俯いているため、表情を伺うことは出来ない。

その瞳が讃える色に、気がつくものは、存在しなかった。

「まだ、早い」

零れた声は、細く弱々しい。

学院に張り巡らされた、結界。
それが、今までのような効果を出せずにいた。

それに“気がついた”のはいつだったか……蓮は、そう考えた。

「あぁ……“遠峰雅人”を雇ったときか」

蓮は小さく“彼が弾かれなかった、な”と呟いた。
雅人が邪霊王として潜入したことを知っているのは、直接戦闘した椿だけ。
――確かに、そのはずだった。

学院長室に、明かりが灯ることも、なく。

――ゆっくりと、夜が更けていった。

第二十話　虹睨祭編？　準備と兆し（後書き）

今回で、準備期間は終了です。
虹睨祭編は、残すところあと三話。
一日目、二日目、三日目です。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第二十話　虹睨祭編？　龍冠喫茶

十月十一日、体育の日。
祝日であるこの日、楼城館学院の空に、虹で描かれた龍の立体映像が、空に浮かんだ。

破裂する度に虹の円環を作り出す、小さな花火が青空に浮かぶ。
その度に、チケットを手に持った観光客達が、目を輝かせた。

伝統と格式のある楼城館女学院の文化祭。
――虹睨祭に参加する。そう言えば、学校も会社も公欠扱いとなる。
そのため、泊まり込みでこの三日間を過ごすと決めた社会人も、少なくはない。

楼城館女学院二大行事の一つ。
秋の醍醐味にして、伝統と技術の結晶。

――――虹睨祭の開幕である。

階段を上り校舎を進むと、西洋風の洒落た看板が見える。
派手すぎずに白い看板に空色の文字で、その店の名前が刻まれていた。

【紳士喫茶“Ｄｒａｇｏｎ　Ｃｒｏｗｎ”】

女学院であるはずなのに、“紳士”の文字を冠するその喫茶店に足を踏み入れると、そこはまさしく白亜の宮殿、紳士達による白銀の薔薇園だった。

ある女生徒は、その場所に踏み入れて、息を呑んだ。
男性などいない、女学院。家でもあまり男性との接触は、許されていない。

そんな少女が見たのは、見目麗しい美少年達だった。

眉目秀麗とはこのことか。
首の後ろで長い金の髪を一括りにした、目元を隠した男性が、動きを固めた少女の前に立った。

男性は控えめに微笑むと、少女に向かって手を差しのばした。

「席までご案内しよう。Ｌａｄｙ」

すっと手を取られ、白いテーブルの側に置かれた洒落た椅子に、案内される。

椅子を引かれて、ごく自然な動作で座る。そこで漸く、少女は我に帰った。

「あ、あの……」

「どうした？あぁ、メニューか。ゆっくり、選ぶと良い」

メニューを手渡される。

黒いベストの執事服。

手首まで覆う白い手袋。

きめ細やかな肌が目に入る度に、少女は胸の高鳴りを覚えていた。

「おっ……」

お名前は？

そう聞こうとしたが、少女は上手く言葉を紡げずに、詰まってしまう。

恥ずかしげに上目遣いで男性を見ると、男性は見守るように、微笑んでいた。

――彼に見られていると、どきどきする。

少女は顔を俯かせる。

そんな少女に、男性は小さく呟いた。

「折角可愛い顔なんだ……上を向いていないと、もったいないよ」

少女はゆでだこのように顔を赤面させると、メニューから一番高い物を注文し始めた。

もうこれで、四人目の“被害者”だった――。

紳士喫茶“Ｄｒａｇｏｎ　Ｃｒｏｗｎ”――少女に夢を与えてがっぽり儲ける。

そんな、一種のたちの悪いホストクラブのような、店だった。

†

白亜の壁、その内側のベニヤ板の、更に向こう。

簡易厨房で料理を作りながら、料理の受け渡し口から見えるその光景に、椿は顔を引きつらせていた。

ミアが非常に楽しそう。

これはいい。虹睨祭を楽しくしたいというのは、椿にもよくわかった。

だが、仕草がおかしい。

いたいけな少女を陥落させるのに、全力を使っているようにしか見えなかった。

「うっひゃー……ノリノリだね、ミア」

「う、うん……すごいね」

鍋を振っていた奈津が、感嘆の声を零した。

椿も、それに頷く。相変わらず顔は引きつっているが、仕方がないだろう。

「そろそろ交代しよう」

ミアがそう声をかけたので、奈津が出る。

椿は休憩を挟んでから、フロアに移動するのだ。

衣装は、白のスーツだ。

緑色のネクタイと着崩したスーツは、楼城館女学院の制服の男性用に見えた。

いちいち入り口で固まる客に悠然と近寄ると、声をかける。

「おねーさん」

焦げ茶のショートヘアの美少年。

厚底の靴を使って背を高く見せていることもあって、中性的な美少年といった風貌を、演出させていた。

「は、はい」
「席、案内するよ」

気軽に片手を出して、女性の手を取る、
決して疚しくない仕草に、女性は胸がどきりと鳴ったことを、自覚する。

「何食べたい？」
「え、えっと」
「僕はだめだよ？」
「えぇっ」
「クス……じょーだん、だよ」

すっかりペースに乗せられて、女性は翻弄されるのだった。
椿は休憩に外に出る寸前にその様子を見て、ミアを見たとき同様に顔を引きつらせた。

だが、後で自分もやらなければないこと。
ただのウェイトレス……ウェイターだったはずなのに、どこで間違えたのか。
椿は、気にしても仕方がないことだ、と頭を振って、自分を誤魔化すのだった。

†

休憩時間の間に、他の場所を回っておく事になった。
午前中はまだ良いが、午後からは客足も増えて、忙しくなる。

パンフレットを手にとって、一番近いところから見に行く。
最初は、レイアだ。その次に桃乃で、ラミネージュと洋子のクラスへ行く。
これで、休憩時間は終わるだろう。

パンフレットをしまうと、階段まで歩いて行く。
レイアの出し物は、一つ上の階なのだ。

「えっ、こっちで合ってる……あれ？」
「ち、違うよっ！あっちで……あれ？」

階段の近く、パンフレット見ながら首をかしげる二人組。
白に近い金色の長い髪と鳶色の目の少女と、黒いセミロングの髪に黒い目の少女。
どうにもうまくいかないという表情で頭を抱える少女達だった。

「どうしたの？」

そんな少女達を放っておくことが出来ず、椿はつい、話しかけてしまった。

「あ、あの、私たち、学園祭を見て回りたいんですけどっ」
「いやー二人とも、恐ろしい程方向音痴なんですよ」
黒い髪の少女に続くように、金髪の少女が明るく続いた。
陽気に言っても、目は泳いでいた。

二人は、普通に見て回りたかったらしいが、何度も同じ場所をぐるぐると回っていた。
おかげで、同じ店にしか行けないのだ。

「どこか、新しいお店を回りたいんですけど……」
「いやぁ……どうにもうまくいかないんですよね」

そう言って、困ったように笑う少女に、椿が既に回っている店を聞く。
すると、少女は戸惑いながらも、教えてくれた。大体、この下の階をうろうろとしていたようだ。

階段も上ったり降りたりしていたようだが、何故か移動は一個下の階のみ。
天性の方向音痴が二人集まると、こうなる。

「ここへは、どうやってきたの？」
「お父さんと伯父さんに連れてきて貰ったんです」
「でも、おじさま方、学院長先生のところへ挨拶に行っちゃたんです」

あっけらかんと答える金髪の少女と、肩を落とす黒髪の少女。
正反対だが、相性は良さそうだ。

「そっかぁ……ねぇ、それなら、私と一緒に回ろうか」
「……えぇっ!?いいんですか!?」

金髪の少女が、そう言って驚いた。
黒髪の少女は、口をあんぐりと開けている。

「うん……といっても、休憩時間の間だけだけど……どう?」
「お、お願いしますっ!」
「後で絶対、お姉さんの店にも行きます!」

休憩終わりに着いてきた方が確実に早いし、少女達もそのつもりのようだ。
椿はそんな少女達に、安心させるような笑みを作った。

「私は椿。あなたたちは?」

名門大家だったら、名乗るだけで素直に楽しめなくなる。
そんな風に考える人もいるということを、椿はレイアから聞いたことがあった。
だからあえて、名前だけ名乗る。名前だけで良い、といっているのだ。

少女達はそれを読み取ると、互いに顔を見合わせた。
そして、花開いたように、笑う。

「私はセレナー……セレナですっ」
「鈴ですっ……よろしくお願いしますっ」

金髪の少女――セレナと、黒髪の少女――鈴。

二人が迷わないように横に着くと、椿は案内を始めるのだった。

†

レイアの教室は、展示だった。
あらゆる魔法を使用して作った人形を展示する、という、聞いただけではよくわからない場所だ。

そして、椿は行ってみて、理解する。

「椿先輩っ！人形が燃えてますよ！」
「あわわわ、分身したっ！？」

二人は、楼城館女学院に進学するといって、椿を“先輩”と呼んでいた。
そんな後輩二人から目を話さないようにしながらも、椿は人形達を見る。

燃えている着せ替え人形。
帯電しているカバのぬいぐるみ。
忍者のフィギュアは、時折分身していた。

「あら、椿ではありませんか」

そんな人形達を見て冷や汗をかいていた椿に、人形の魔法管理をしていたレイアが話しかける。レイアの姿を見て、セレナ達は素早く椿の影に隠れた。

人見知りをする方ではないが、警戒をするに値する、奇っ怪な部屋だからだった。

「どこから拾ってきたんです？……まぁ、どうせ絡まれたか迷ったかで、放っておけなかったのでしょうけれど」

そう言って肩を竦めるレイアは、実によく椿を理解していた。
椿は図星をつかれて苦笑いをし、そんな二人の掛け合いを見て、セレナ達は警戒を緩めた。

「レイアのお人形さんは？」
「あれですわ」

レイアが指で示したのは、教室の一番奥だった。
そこに鎮座するのは、西洋風のビスクドールだった。

軽くウェーブのかかった金色の髪。
その髪を纏めるのは、水で出来た不思議なリボン。
青を基調とした白いドレスに身を包み、水で出来た台座に可愛らしく座っている。

「メアリーちゃんＭｋ－？ですわ」
「まーくつー……」

椿に通じるところがある、ネーミングセンスだ。
決めたのは、リリアである。彼女が全ての人形の命名係だった。一種の公開処刑に思えた。

ちなみに、なんの変哲もない人形が一体あるが、地味すぎて誰の目にも止まっていない。
一応光学迷彩がついた、優れものなのだが、作り主の気質が関係しているのだろう。

「あんまり、巻き込まれすぎるんじゃありませんことよ？」
「だ、大丈夫だよー」

そうは言いつつも、あまり自信のない椿だった。

†

続いて、その更に上の教室を使っているのが、桃乃達のH組だ。
階段を上って、歩く。すると、大きな看板が見えた。

【とき☆めき――ふぁんしーあにまる】

何のことだろうと、椿は首をかしげた。
造化で飾られた、ファンシーな看板。
非常に入りづらい雰囲気だ。

それでも意を決して中に入る。
すると、解説をしていた桃乃が椿たちに気がついた。

「あら？……神崎さん、来てくれたのね」
「う、うん。ここは……なにを？」

どこか嬉しそうな様子の桃乃の出迎えを受けながら、椿がこの教室で行われている出し物について訊ねた。

「ここは、あの装置を使って、デフォルメされた動物の幻影を作り出して、楽しむところよ。人の資質によって、出てくる動物が違うの」

そう言って、台座に水晶のような宝石が嵌められた装置を指さした。
そこへ一般客が手をかざすと、ファンシーなパンダが、白い煙とともに出現した。
第一印象から予想していたよりもずっと、面白そうな出し物だった。

「神崎さん……と、後ろの子も、やってみる？」

「あ、うん。ほら、セレナと鈴も」

椿に手を引かれて、二人は装置に手をかざした。
すると、淡く輝いて、白い煙が音を立てて膨らんだ。

セレナの正面に現われたのは、羽のついた動物――精霊の、グリフォンだった。
同じく、鈴の前に現われたのは、大きな鷹だった。

二体とも可愛らしくデフォルメされていて、本来の姿に宿る“恐ろしさ”は感じなかった。
幻影なので、当然触れることは出来ない。そのことで落ち込む二人の横で、椿も装置に手をかざす。

すると、やはり白い煙と共に、赤い竜が出現した。
竜はぱたぱたと羽を動かすと、すぐに消えていった。

「本質で竜って……案外、気性が荒かったり？」
「でも、のんびりした竜に見えましたよ」

椿は可愛らしい竜が消えたところを名残惜しそうに見てから、桃乃とセレナの言葉に苦笑いした。本質が現われるといって今までの邪霊でも出てきたら、目も当てられない。
そういう意味では、助かったと言えた。

椿の肩の雅人も、どこか安心したように見えた。

†

桃乃の出し物を後にすると、今度は再び降りる。
椿の教室に帰れるように調整された道順だ。どのクラスも自分の教室でできればもっと早く回れるのだが、教室の確保は早いもの順である。

早く決まった椿のクラスが、自分の教室を確保することが出来たという、それだけの話だった。

ラミネージュのクラスは、射的だった。
水晶に込められた魔力を使って、一般人でも魔法が放てる……という見出しだが、実際に魔法が使えているわけではない。

これもまた幻影の一種で、発射されたＢＢ弾を光弾のように見せる幻影を纏わせているだけだ。だが、銃型の競技用装霊器を象ったモデルガンから放たれる光の弾丸は、一般人に未知の感覚を与えていた。

また、この射的はそれでは終わらない。
ファンシーに改良された邪霊を撃ち抜くと、ポイントが加算される。

決められた弾数――財力で解決できてしまう人が多くいるので、決められている――の内でどれだけポイントを得ることが出来るか。
それで、景品が貰える。

同時に、邪霊に混じって現われる、ファンシーな黒猫。
これを撃ってしまうと、ポイントがマイナスされる。
合計マイナスポイントが一定数値貯まると、罰ゲームが施行される。

その罰ゲームは、料理が下手な生徒が作った、健康には問題はないが味と見た目の悪い料理を食べる……というものだった。

ただこれだけ聞けば、多少味と形が悪くても、お嬢様の手料理。
わざと失敗して食べたいと思う男性客もいるだろう。

だが、この料理は全て――――ラミネージュの、力作だった。

ラミネージュの料理について未だ詳しく知らない椿は、どれほど恐ろしいことなのか理解していなかった。これからも、理解できる機会は来ないだろう。たぶん。

射的のために銃を選んでいると、椿は後ろに気配が生まれたことに気がついて、振り向いた。

「椿」
「あっ、ラミ」

椿が笑顔で名前を呼ぶと、ラミネージュは少しだけ、照れたように頷いた。
そんなラミネージュに、高速で近づく影があった。

「お姉ちゃんっ！」
「っ……セレナ？」

その影は、セレナだった。
セレナの後ろでは、ラミネージュと親しげに話す椿を見て、鈴が驚いた顔をしていた。

「あれ？ラミの妹さん、だったの？」
「私としては、お姉ちゃんと仲が良さげな先輩の方にびっくりだよ」

そうは言うが、椿の方もかなり驚いていた。
更に言えば、イストが来ていると言うことにも、驚いていた。
彼女を連れて来た伯父というのは、イストの事だろう。

「なんだか、これなら名乗っても良かったみたいだね、鈴」
「う、うん、そうだね……驚いちゃった」

展開について行けずに首をかしげるラミネージュをよそに、セレナと鈴は改めて頭を下げた。

「千堂・セレナージュ・オールアクセンですっ」
「柿沼鈴です。改めて、よろしくお願いします」

丁寧に頭を下げる二人に、椿は慌てて礼を返した。

「こちらこそっ……私は神崎椿。ラミの友達……って、柿沼？」
「あっ、はい。父は、有名な戦鎧職人で――」

父親。
そう、この可憐で大人しい少女は、あの髭達磨と称しても間違いで

はない、荘厳の娘なのだ。ちなみに、奥さんも美人だった。勝ち組である。

どこでどんな縁があるか、解らない。

そう感心しながら、椿は自分と荘厳の関係を、鈴に話した。

「それは、なんというか、父がご迷惑を……」

「ううん。荘厳さんには、戦鎧や装霊器のことですっごく助かってるから、ね？」

「そう言っていただけると、助かります」

鈴が妙に申し訳なさそうにしているのは、説明中にラミネージュが、奈津と喧嘩友達のようだということを話したからだった。虹睨祭後の夫婦喧嘩が確定した、瞬間である。

セレナ――セレナージュが、ラミネージュに自分たちの事情を話し終える。

それを見計らって、椿たちはラミネージュに説明を聞き、射的を開始した。

幸いなことに、ラミネージュの料理を食べてしまうことは、なかった――。

†

椿の教室の前に到着する。
すると、二人は看板を見上げて呆然とした。

紳士喫茶の意味がわからないのだ。

「待っていてくれれば、私が接客するけど……どうする？」
「いいんですか？」
「それなら、お願いできますか？」
「うん。任せて」

椿が、着替えるために教室へ入っていく。
着替えも全て、厨房の端で行うのだ。

その間、セレナージュ達は周囲を観察していた。

好奇心溢れる様子で入った女性が、どこか夢見心地な様子で出てくる。
中で何が行われているのか、まったく理解できない。

「どうぞ」
「はいっ」
「は、はい！」

椿に呼ばれて、慌てて中へ入る。
するとそこには、喫茶店というよりも、洒落た軽料理屋のような風景が広がっていた。
名家出身という訳ではない鈴は、普通の喫茶店くらい、行ったことがある。

だから、普通と“ここ”を、見比べることが出来ていた。

喫茶店とは、もっと質素な物だ。
決して、上品な銀細工や純白の壺がよく似合う場所ではない。
白亜の壁とは一体どういう事なのか、鈴はわからず首をかしげていた。

「お待たせ、さ、座って」
「あ――」
「――へ？」

黒い長い髪を、ポニーテールにして、きっちりと上品なスーツに身を包んでいる。
男性らしい仕草と、凹凸の少ない体型。白い手袋で覆われた細い指と、どこか力強さを感じさせる瞳。肩の子猫も、しつかりと蝶ネクタイをしていた。

意図的に出されたやや低めの声は、美しいボーイソプラノの様で、心地よく耳に響く。
控えめな笑みの間から見える、白い歯。甘い言葉でも囁かれたら、くらりと来てしまいそうな瑞々しい唇。

一目で女性だとわかる程度にしか、改造していないのに、それを口に出させない、男装の麗人。今まで見てきた姿とは百八十度違う雰

囲気で、椿がそこに立っていた。

「顔が赤いけど……熱、かな？」

「ひゃうっ！？」

思わず赤面していたセレナージュに、椿は自然な仕草で額を合わせた。

どこか手慣れた姿には、百戦錬磨の称号を与えたくなる。

「うん？……大丈夫、みたいだね」

椿はそう言うと、二人を先導する。

さりげなく相手を気遣うその性格は、男性として見ると実に素晴らしい好青年だった。

「何か欲しい物はある？」

「え、えーと」

迷いつつも、二人は拙い口調で注文した。

「それなら、少しだけ待っていて」

無言で何度も頷く二人を見て、椿は薄く笑う。

そして、二人の頭を優しく撫でると、立ち上がった。

「うわっ……私、顔熱い」

「うん、私も、すっごく熱い」

男性に免疫などあるはずもなく、二人は顔を赤くする。

セレナージュはともかく、鈴まで免疫がないのは、間違いなく荘厳

の過保護が原因だった。
親ばかなのだ。

「お待たせ」

そう言うと、椿は二人が頼んだスコーンとパンケーキを置く。
そして、何気ない動作で、紅茶を二つ置いた。

「あ、あの、私たち、紅茶なんて頼んでませんよ？」
「これはサービスだよ。二人に出会えた今日、この日の記念に――貰ってくれる？」

ちなみに、素である。
折角未来の後輩に出会えたのだから、先輩として奢ってあげたかったのだ。

二人は口々に「ずるい、なんだかわからないけど、ずるい」と呟きながら、笑顔で見つめる椿の前で、紅茶を飲んだ。

やがて椿と別れた二人は、喫茶店に並ぶ少女達を見て、生暖かい視線を送った。
彼女たちは、確実に自分たちの、二の舞になるのだから……。

虹睨祭の、一日目。
この日は、喫茶店が最高の賑わいを見せることになった――。

第二十話　虹睨祭編？　龍冠喫茶（後書き）

今回で、虹睨祭一日目。
あと二回で、虹睨祭編は終了です。

その後、二章のスパートに入ります。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第二十話　虹睨祭編？　ＨＥＲＯ

黒い服に、どくろの仮面。
手には三叉の槍を持ち、耳は鋭く尖っている。

黒い戦闘服は、悪役（ヒール）の証。
戦闘員と呼ばれる姿をした彼女たちは、自分たちの親玉の指示の元、的確に動く。

幼い少女を捕まえて、親玉は高らかに声を上げた。

「おーっほっほっほっ……この娘は、あたしたちがいただくわっ！」

どこかで聞いたことがある笑い声だが、中身は当然その人物ではない。
茶色の髪を豪華に飾り付け、悪の女王様といった出で立ちで笑い声を上げる少女。

赤谷桃乃の、悪役姿だった。

十月十二日の火曜日。
虹睨祭の、二日目である。

椿たちは、朝早くから屋上に集まっていた。
最後のリハーサルと、衣装の最終調整のためだった。

衣装は、戦鎧と同じように自動装着が可能だ。
ブレスレットのボタンを押しながらキーワードを唱える。
すると、戦鎧と同じように、自動で装着されるのだ。

ちなみに、劇の時間の都合上、変身してから登場となるので、無駄な機能だったりする。

その最終調整を早々に済ませると、椿たちは奈津の下で円陣を組む。

「全力で、全身全霊を込めて、とにかく楽しもうっ！」
『おぉーっ！！』

一息で、気合いを入れる。

この日のための練習をしてきた。
ヒーロー研が屋上を使えるのは、二日目のみ。
ただし、午前と午後で二回も講演することが許されたのだ。

だからといって、失敗して良いと考えているわけではない。
一回目に素晴らしいショーをやって心を掴み、二回目で沢山の人に見て貰う。

そのために、こうして今ここで、気合いを入れ直しているのだ。

全員の準備が整う。
屋上にある移動舞台の、裏側。
その場所で、奈津達は瞑目する。

それはどこか――祈りのようにも、見えた。

「行こう」

奈津の言葉。
返事を返したりはせず、ただ強く頷くことで、意志を示した。

虹睨祭二日目のプログラム。
英雄考察研究会による――ヒーローショーの、幕開けだった。

†

軽快な音楽が鳴り響く。
人々のテンションを引き上げる、アップテンポな音楽だった。

その音楽と劇に、集まった子供達が沸き上がる。
舞台の上では、桃乃が戦闘員に命じてフランチェリカを浚ったところだった。

『みんな！大変だ！』

そう言うのは、ナレーションを努めている奈美だった。

『このままでは、幼い少女が怪人に連れて行かれちゃう！』

幼い少女という言葉に、フランチェリカは不満げだった。
もっとも、劇の最中に顔に出したりはしないが。

『みんなで、私たちの“ヒーロー”を呼ぶんだ！……せーのっ』

ヒーローの名前は、パンフレットで配られている。
それを同伴の保護者が、子供達に教えていた。

『助けて！ヒーローファイブ！』

――どんっ

白い煙。
魔法で起こした爆発を急速集束することで、爆風も発生させずに煙だけを演出として使用する。

その影で、組み体操の扇のようにポーズをとる、五人の姿があった。
羞恥心は、すでに犬の餌にしている五人だ。

「護り固める黒の盾！ブラックシール！」

一番左の、黒スーツ。
口元は出るスーツなので、よく見れば顔の判別ができる。
――神楽だ。

「煌めきたる白き稲妻、ホワイトサンダー」

声を張り上げてはいるが、抑揚がない。
一番右の白スーツ、ラミネージュだ。

「遙か海洋の水飛沫！ブルースプラッシュ！」

左から二番目の青スーツ、レイアだ。
バイザーで目元が隠れてはいるが、それを外せば虚ろな目が見られるだろう。
本気でやるとは誓ったが、この名乗りだけは慣れなかった。

「燃え上がる“炎の翼”！レッドフレイム！」

会場に来ていた、一部の女生徒が沸き上がる。

会の名前を台詞に混ぜる……それが、桃乃の出した条件だった。

右から二番目の赤スーツ、椿が終わる。
リーダーがレッドではないが、細かいことは気にしない。

「疾風怒濤の強き緑！グリーンエア！」

最後の緑スーツ。
中央の奈津が叫ぶ。

『我ら、ヒィーロォーッ……ファイッ！！』
――どどどどんっ

一斉に、五色の爆発が起こる。

『わぁぁあああぁぁぁあぁっっっ！！！！』

子供達も、それに合わせて熱狂していた。

「くっ……忌々しきヒーローファイブめっ！やっておしまい！」
『キーッ』

奇声を上げる戦闘員。
恥ずかしがる者は一人もいない。
日頃の洗脳……教育の成果なのだろう。

「おのれっ怪人“モモーヅノ”めっ！」
「幼い少女は、返して貰いますわ！」

奈津、続いてレイアが台詞を言う。

飛びかかる戦闘員を、魔法の演出をしながらちぎっては投げる。

「そこまでよ！」
「もう、逃げられない」
「観念してくださいっ！」

椿、ラミネージュ、神楽が続く。
桃乃は悔しげに唇を噛むと、自分自身が躍り出る。ボス戦だ。

「平和のために！笑顔のために！僕らは戦う！」
「ぬかしなさいっ！」

激しく見える戦闘を繰り広げる。
最後に桃乃を追い詰め、五人で一斉に手を前につきだした。

『必殺！ヒーローソウルッ！』

五色の光が弾丸となり、桃乃を襲う。
桃乃は断末魔の叫びと共に、舞台から逃げ去る。

『みんなのおかげで、ヒーローファイブを呼ぶことが出来ました！
みんな、ありがとう！』

ヒーローショーは妙なテンションを維持したまま、かつてない盛り上がりで幕を閉じるのだった。

†

午前の部を終えて、昼食時。
校庭の屋台から焼きそばやお好み焼きを買い集めて、食堂で昼食をとる。

劇中は考えないようにしていたが、いざ終えてみると、恥ずかしい。
顔を赤くして食事をとっているのは、椿とレイアと神楽だった。
椿はヒーロー好きだったおかげで、そこまで顔は赤くない。

だがそれも、長くは続かなかった。

「午後の部でさらに人は増えるだろうね」
「そうですわね……うぅ、お母様が来られるのは明日のみで良かったですわ」

急な仕事が入ったらしい。
偉い人は、そう簡単に休めない。

「ラミの妹さん、すごく形容しがたい顔してたね」
「――うん」

セレナージュは、“すごく酸っぱいレモンだと思って食べたらステーキだった”というような、形容しがたい表情をしていた。

「私は、おじいちゃんもおばあちゃんも来るのは明日だから、ちょっと安心かな」

身内に見られない、というのは、やはり嬉しかった。
恥ずかしいのだ。

焼きそばを食べて水を飲み、ふと顔を上げる。
視線の先には、一人の男性。白に近い金色の髪と、鳶色の目。
大きな身体と、鋭い目に、怖い顔。

とてもまっとうな道を歩いているように見えないその顔が、少しだけ歪む。
笑みと言うには凶悪な表情をして、すぐに口元を抑えて顔を逸らす。
肩が震えていた。

「炎の……くくっ……翼！」

見ていたのだ。
あの劇を、しっかりと。

「あ、ぅ」

椿は、顔から火が出るのではないかと勘違いするほどに赤くなった。
奈津はそのやりとりに首をかしげているが、レイアは椿の気持ちがよくわかっていた。
わかっていたからこそ、目を逸らして震えていた。

「れっ、れっど……くはっ、もうだめだ、いや、負けたよ……くくくっ」

腹を抱えて、笑い出す。

あんまりといえばあんまりな笑い方に、椿は涙目だ。

「大丈夫？椿？」

「あぅあぅあぅ」

唸り声を上げて固まる椿に、ラミネージュが声をかける。

「ちゃんとお父様に、伯父様が私の友達を口説いてセクハラしてたって、伝えておくから」

「おいっ！」

思わず、イストが声を張り上げる。

椿は真っ赤な顔で俯いていて、確かに傍から見るとセクハラだ。

「ちっ……わかったよ、今は笑はねぇ」

そう、“今”は、である。

「帰ってから、ビデオ鑑賞と洒落込むからな」

身内のみではあるが、撮影は許可されている。

イストはラミネージュの伯父なので、撮影が可能だった。

「な、なん、なん」

「あ？アルト――そこのガキの父親に、頼まれたんだよ」

イストは、弟であるアルトに、娘の勇姿を撮影して欲しいと頼まれたのだ。
自分も、午後から見に行くのにも関わらず。

「わたし、もうだめ、らみ、もうだめだ」
「……セクハラチンピラ」
「……おまえ、ほんっとうに言うようになったな」

鋭い目で自分を睨み付けるラミネージュの視線に、イストは顔を引きつらせた。

「はぁ……まぁいい。個人的には、遙か海淵の水飛沫が、一番面白かったしな。意味がわからなくて」

大きな爆弾を落とされて、レイアが机に突っ伏す。
確かに意味がわからない。

「っと、俺は飯喰わなきゃなんねぇからもう行くが……アルトに、なんかあるか？」
「セレナに伝言を頼んだから、大丈夫」

それだけ聞くと、イストは「そうか」と一言を言ってその場を去る。
時折、思い出し笑いが聞こえてきて、椿とレイアはその度に顔を赤くした。

「くくっ……ブラックシール！」

気にいったのか、聞こえてきた台詞に、一生懸命聞かないようにしていた神楽が、ついに撃沈するのだった――。

†

午後の部を終えても、悟が現われることはなかった。
結局、最後まで顔を見せることがなかった悟に、奈津はどこか寂しそうにしていた。

翌日の準備のために少し遅くまで残って、それから寮に引き上げる。
すっかり暗くなってしまった寮への帰り道で、二人は洋子の姿を見つけた。

「あれ？どうしたんですか？浅川さん」
「か、神崎さんっ……佐倉さんっ」

洋子は、椿の声に振り返ると、急いで走ってきた。
だが、片目が見えないのに暗い道を走ったせいで、転んでしまう。

「だ、大丈夫？」

まず奈津が駆け寄って、椿もすぐに追いついた。
洋子は焦ったような表情で、奈津と椿に縋り付く。

「悟が……悟が、どこにもいないんですっ！」

奈津と椿は、顔を見合わせる。
二人は、謎の邪霊の姿を見ている。
奈津や椿なら問題のない相手でも、子供にとっては脅威だ。

「椿、浅川さんをお願い。僕は校舎を探してくるから、椿は寮と……あと、他の人にも頼んで周辺を探して」
「奈津……うん、わかった。気をつけてね」
「うん……行ってくるっ！」

奈津は、校舎への道を戻るように、全速力で走り出した。
椿もその後ろ姿を見送ってすぐに、洋子に肩を貸して、寮への道を急いだ。

†

暗い校舎の、一部屋。
椿たちの教室で、悟は膝を抱えていた。

ヒーローショーを覗いて、見ていることが辛くなり、人がいなくなった後にこの教室に入ったのだ。悟がヒーローだと聞いた、少女の教室に、気がついたら入っていた。

やがて暗くなって、帰れなくなった。
姉に迷惑をかけていることはわかるが、足は動こうとしなかった。

――カタ

物音に身体を震わせる。
周囲には何もいない。そのことが、悟の内側にくすぶる恐怖心を、加速させていた。

――カタカタ

再び、鳴る。
その音に、身を震わせる。

――ガラッ
「っ」

突然開いた扉に、思わず息を呑む。
物音が止んだことに安堵の息を漏らしつつ、顔を上げた。

そこに立っていたのは――奈津だった。

「ここにいたんだ……お姉さんが、心配してたよ」

奈津が近づいてきて、しゃがみ込んで悟と視線を合わせる。
悟は目を合わせて、すぐに逸らした。

立ち上がろうとしない悟の様子にため息を吐くと、奈津は苦笑いをした。
そして、小さく息を吐いてから、悟の隣りに座り込んだ。

「僕もね、昔は――――“ヒーローなんて、どこにもいない”って、思ってたんだ」
「え……？」

自分がヒーローだと胸を張っていった少女の、意外な言葉。
その言葉に、悟は目を丸くした。

「僕にはね、昔、良く一緒に遊んだ男の子が居たんだ」

それは、独白のようだった。
悟に聞かせるためだけではない。
自分自身に、もう大丈夫だと語りかける行為。

もう――前を向いていられるという、宣誓。

「透君って言うんだけどね。気弱で赤面性、人見知りに引っ込み思案だった僕の手を取って、よく一緒に遊んでくれた。……僕の、幼なじみで、友達」

その焦げ茶色の目に映るの、遠き日の残照。
戻ることない、儚い蜃気楼。

「透君はいつも、“ヒーローになるんだ”って、胸を張ってた」
その眼差しに釘付けになりながらも、悟はじっと話を聞く。

「助けを呼ぶ声を聞きつけて」
――誰かが、助けてって叫ぶんだ。
「瞬く間に悪人を打ち倒し」
――あっという間に、悪い奴らをやっつけて。
「多くの人に、笑顔を与えてくれる」
――みんなに、ありがとうって、笑ってもらう。
「『――“ぼく”はそんな、ヒーローになるんだ』……ってね」
もう、記憶の中でしか、夢を語ってくれない男の子。
もう、記憶の中でしか、笑ってくれない――親友。

「ヒーローは、そういうものだからーって、笑ってたっけ」
そう言って笑う奈津の姿は、どこか楽しげだった。

「なんだよ、そいつ」
「――――でもね」

悟の言葉を遮るように、奈津が続ける。
その寂しげな横顔に、悟は再び声を詰まらせた。

「透君が、あいつら――邪霊に襲われたとき。どんなに助けを求め

ても、ヒーローは来なかった」

喉が潰れるほど声を張り上げて、泣き叫んでも……結局誰も、助けには来なかった。

「一人だけ、助かって、ヒーローなんて居ないんだって“私”は一人でいじけてた」

部屋にこもって、泣いていた。
突然変わった周囲の目、移ろう環境。
その全てが、奈津に絶望と失望を、与え続けていた。

「でもね、ある日、思ったんだ」
――化け物めっ！
「このままじゃ、だめだって」
――なんで、おまえが！
「こうしていじけているだけじゃ……」
――おまえだけが、生き残ったんだ！
「……何も変わらないんだって」
――なんで……透なんだっ。

頭に響く声は、男の子の、兄のものだった。
散々奈津に当たり散らして、我に帰って謝って、その頃には、奈津は手遅れなほど多くの人に“化け物”と呼ばれていた。

結局、騎士を目指して、道半ばで夢を閉ざした――憧れだった人。

新たなる絶望の中で奈津が思い浮かべたのは、幼なじみの男の子の、笑顔だった。
閉じこもった部屋の中で見た、特撮ヒーロー。閉じた世界の中で、

彼女はヒーローと幼なじみを、重ねていた。

「ヒーローが居ないって、絶望するのは簡単だ。簡単で、楽なんだ」

その声に、その意志に、その夢に。

悟の心は呑み込まれていく。

「でも、そこで終わったら、前に進めない」

前を向かなければ、彼女は閉じた世界から、抜け出すことが出来なかった。

「ヒーローがいないなら……ヒーローに、なればいい」

決して大きくない声。

なのにその声は、不思議な程強く響いた。

「もう、“僕”や“私”のような人が、でないように」

そこで言葉を一度句切る。

そして、大きく息を吸った。

「――――悪の組織に改造された身体を使って、助けを求める人を救い出す。颯爽と駆けつけて、みんなに笑顔を与えてくれる、正義の味方」

奈津は、立ち上がって、前を見る。

悟は思わず、奈津を見上げた。

「そんな“ヒーロー”に――――“僕（わたし）”はなる」

そして――振り向いて、悟の目を見て……笑った。

「なってやるって、決めたんだ」

差し出された、手。

その手を、悟は無意識のうちに掴んでいた。

その笑顔に――見惚れていた。

「さ、帰ろうか？」

「……うん」

短く、答える。

奈津が手を握ると、それに応えるように、悟も握り返した。

――カタ

そんな二人の間に届く、音。

奈津は悟を引き寄せると、自分の後ろに庇う。

――カタカタ

大きくなる音に警戒して、奈津は下がる。

――カタカタカタカタカタ……ごとん

廊下に出た奈津と悟を追いかけるように、飾られていた白い壺が、転がってきた。

背を向けるのは危険だと判断して、奈津は悟を庇いながら、壺を睨

み付ける。

『オォオォォ』

壺から、声が聞こえる。
怨霊を連想させる、暗い声。

『オォオォォォォオオォオォッッ！！』

壺から黒い煙があふれ出して、それが壺を中心に凝縮する。
分散する力を、本体を中心にして集めた、その壺の本当の姿。

――邪霊“魔を呼ぶ壺”の、真の姿だった。

「――悟君」
「な、なん、だよ」

強がる悟を下がらせて、奈津は一歩、前に出た。

「見せてあげるよ――本当の、“ヒーロー”を」

ショーでは見られない、本当のヒーロー。
その言葉に、悟はしっかり頷いた。

未だ形が固まらずに、蠢く邪霊。
その前で、奈津は緑のバックルを取り出した。

腰に当てると、黒いベルトが伸びて、巻き付く。
腰の横の両側に、銀色のパーツが出現する。
これが――スイッチだ。

右腕を、左斜め上に突き出す。
左腕は腰に当てて、握り拳を作る。

ゆっくりと、弧を描くように、右腕を右側に持って行く。

「【変――――」

右斜め上で一度停止させて、勢いよく腰に右腕を持って行く。

「――――身】」

左腕を右斜め上に突き出すのと同時に、右腕を右腰に打ち付ける。
すると、バックルが左右に展開して、白銀のプロペラが回転した。

奈津の周りを緑の粒子が舞い、そして、集まる。

目元のみを隠した黒いバイザー。
黒いスーツを貴重に、緑の装甲を嵌めた戦鎧。
右脚に輝く精霊石が嵌められる。それは、両足でセットの装霊器。

「“ヒーロー”」

悟の呟きに呼応するように、奈津から風が吹く。
力強くて、優しい風だった。

「【大気を統べる風の主よ・我が身体に宿り・我が身に烈風の加護を与えん】」

詠唱と共に、バイザー越しに両目が紫色に輝いた。

助けを求める子供の前で、ヒーローが“変身”した。
それならば、あと、やることはたった一つ。
クラウチングスタートの形をとる。
身体能力の強化により、一歩の力が何倍も増幅されて、踏み込む度に廊下が陥没する。
「一撃必殺」
貫通力に特化された魔法と、身体能力強化の力。
二つの力が混じり合い、邪霊にぶつかる。
『グゥオォォォオオォォォォッッッ！？！？！！』
漸く形を為したが、もう遅い。
誰よりも早く何よりも鋭いその蹴りが、邪霊の身体を貫いた。
「正義は――――勝つ」
塵となって消える邪霊の向こう側。
余波でぼろぼろになった廊下の中心で――奈津は、悠然と佇んでいた。
「今度こそ、帰ろう？」
「――――うん」
光の宿った目で見上げる悟の手を取ると、奈津は戦鎧を解除して歩き出す。
窓から見える校庭には、彼女の大事な友達が、息を切らして立って

いた。

「早く戻って、安心させてあげないとね？」

悟は、校庭に集まる人の中に、自分の姉の姿を見つけて、こくりと頷いた――。

第二十話　虹睨祭編？　ＨＥＲＯ（後書き）

これで、二章の大きなイベントは、残すところあと一つになりました。
次回で、虹睨祭編は終了です。

少し時間がとれるかわからないので、次回はいつあげられるとは言えません。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第二十話　虹睨祭編？　夜の宴

十月十三日、水曜日。
椿たちの紳士喫茶は、初日とは比べものにならない程盛り上がっていた。

それは、ヒーローショーが終わったことで、ファンクラブのメンバーがここに来る許可を得たことが、大きいだろう。

ヒーローショーに疲れを残さないために、桃乃が禁止していたのだ。

ファンクラブのメンバーが、外に出た後に感想を語り合う。
それに釣られて、訪れる人間が増える。

そうしている内に、老若男女が集まるという、当初では考えられなかった事態に発展していた。

そして、午前中に仕事にかかりきりだった椿は、昼食時に漸く解放されたのだった。

未だ男装のままで、椿は休んでいた。
予想以上に人気になってしまったため、本来は休む暇はない。
だが、それでは身体を壊してしまう。

それをどうにかするために、助っ人として担任の楓と、手の空いていた神楽が入ってくれたのだ。この何とかとれた休憩時間で、昼食を済ませて休んでおく。

椿としては、休みなしで動き続けるミアが心配なので、すぐにでも戻りたい。
だが、気を遣わせてしまったら元も子もないので、こうしてしっかり休んでいた。
疲れがとれたら、ミアと交代するためだ。

食堂で、昼食を食べる。
喫茶店の賄い料理と、屋台で買った軽食だ。

シフトが合わなかったため、椿一人の食事――だったはずなのだが、気がついたら、イストと食べることになっていた。

もちろん、イストと二人で食べるわけではない。
やけに口数の少ない雅人が肩にいるからと、一人として数えているわけでもない。

最初は、セレナージュに誘われたのだ。
一緒に食事をとろう、と。

それを了承したときに、偶然宗一と牡丹がやってきた。
彼らが客として訪れることが出来るのは、午後からだという。

一緒に昼食をとることになり、宗一と牡丹も参加するのなら是非、とセレナージュが自分の父親とイストを連れてきた。これが、イストがここにいる経緯である。

では、何故今二人は向かい合っているのか？
これにもやはり、訳があった。

出し物見て回っていた柿沼親子も合流して、大所帯になった。
やがて大人同士で話をするようになり、子供達が孤立する。

セレナージュと鈴は、椿を休ませるために気を遣って輪を離れた。
今頃、道に迷っていることだろう。

そして、大人同士の話を窮屈に思ったイストが輪から外れて――現在、こんな状況になっていた。

「そういえば、イストさんの精霊って、なんなんですか？」
「あ――？……戦闘の役には、たたねぇよ」

椿は、ヒーローショーのことで笑われた以外では、イストに対して気まずさといったものを持っているわけではない。そのため、その羞恥心を乗り越えてしまえば、普通に言葉を交すことが出来る。

「なんていう、精霊なんですか？」

じっと見てくる椿に、イストは珍しいことに目を逸らした。
顔も口調も怖いイストに面と向かって話すことが出来るのは、弟のアルトや両親を除けば、椿のみだった。

ようは、慣れていないのだ。
子供の純粋な、視線に。

「はぁ……まぁいいか……出ろ」

イストがそう言うと、装霊器に白い魔力が灯り、精霊が出てきた。
白い髪に白いワンピース。白銀の目をしていて、手には箒を持っている。

『はじめまして。ご主人様にお仕えしている精霊、シルキーのシエルです』
「は、はじめまして。神崎椿です」

イストの精霊は、メイドとして働く分には優秀だ。
ただし、戦闘魔法はまったく使えない。

イストはシエルとの相性が良すぎるため、送還して別の精霊を呼ぶことができなかった。
そのため、十五歳の時に召喚して、もう二十三年の付き合いだ。

シエルは、にこにこと優しい笑みを浮かべながら、イストの周りをふわふわと動いている。
イストが結婚することなく、現在まで独身で居るのは、やはりシエルが居るというこも大きい。なにせ、家事しかできないからと家事をやらせていると、恋人かと周囲が勘違いして女性が寄りつかないのだから。

……と、イストは考えていた。
口調と顔が怖いことは、そこまで意識していないようだ。

「しっかし……そうして見ると、本当に男みたいだな」
「そう、ですか？」

当然、嫌みである。
女性らしさを省いたわけではないのに、と唇を尖らせる椿を、からかっているのだ。
悪い大人である。

「君は、イスト君と言ったか？」
「あ？……えぇ、そうですが？」

そんなイストに、話し合いが終わったのか、宗一が話しかけた。
白に近い金髪を肩口まで伸ばした男性――アルトも、その様子を笑顔で見守っていた。
牡丹は未だ、荘厳とその妻――瑠璃と話をしている。

「一つだけ言っておくが……」
「……はぁ」

からかったことを注意でもされるのかと、イストは面倒そうな表情

をする。
隠そうともしないその態度に、椿は苦笑した。

「孫が欲しいのなら私を倒してからにして貰うぞ」
「はぁっ!?」
「えぇっ?!」

イストだけではなく、椿も当然のように驚く。
アルトは“なんだそうだったのか”という顔をしている。
というか、イストはアルトの兄……イストと結婚でもすれば、椿はラミネージュの伯母になってしまう。友達の父親に姉呼ばわりされるなど、意味がわからなかった。

そんなことを考えるほど混乱している椿はともかく、イストは自分がからかわれたことに気がついて頭を抱えていた。

そして、未だに慌てている椿を見て、獰猛に笑う。
いや、悪巧みというより悪戯を思いついた少年のような心持ちだったのだが、傍から見れば哀れな少女を文字どおり喰い殺そうとしているようにしか見えない、怖い顔である。

「じいさんを倒せばくれるってよ、椿」
「ななななっ何を言っているんですか!?」
「なにって……なぁ?」

顔を赤くして慌てる椿の様子は、確かに面白い。
そんな椿を見てにやにやしていると、イストの頭上に影が降りた。

「ん?――っ!」

慌てて椅子から横へ飛ぶ。
すると、座っていた場所に銀の筒が振り下ろされた。
この凶悪な装霊器は――ラミネージュの、ものだ。

「ちっ」

短く舌打ちをする、ラミネージュ。
感情を表に出さないラミネージュの、見たことがないような苛つきに、イストは顔を引きつらせていた。

「椿？大丈夫」
「ら、らみ？だ、だいじょうぶだよー」

顔を赤くしたままぽやぽやと言う椿を、心配そうに眺める。
そんなラミネージュに、アルトが話しかける。

「ふふ……イストでは、不満かい？」

大切な友達が居る。
その事実に、アルトは優しい目を向けていた。
不器用な娘だとは知っていたが、どうすることも出来なかったから。

「チンピラに渡すくらいだったら、私が貰う」
「えぇっ！？」

漸く落ち着いてきたのに、椿は再び声を上げた。
どんどん訳がわからなくなっていく状況に、ついていくことが出来なくなっていた。

「休憩そろそろ終わりそうだよーって呼びに来たんだけど……そん

なことになっているなら、僕も参戦しようかなぁー」

そういってジト目で椿たちのやりとりを見るのは、休憩の終了が近いことを伝えるついでに彷徨っていたセレナージュと鈴を連れてきた、奈津だった。

「奈津まで何を言ってるの！？」

「で、どっちが相応しいと思う？――ラミ」

椿を無視して、固い声で続ける。

ラミネージュも、普段よりも低い声で、対抗する。

「家柄、財力、容姿、頭脳。どれをとっても、貴女に勝ち目はない」

「へぇ？料理も？」

「――絶壁よりは」

不穏な空気が流れ始めて、椿は慌てた。

「ね、ねぇ！休憩終わっちゃうなら、早くいかないと！」

そこで椿はなんとか方向転換しようと、にらみ合う二人の間に割り込んだ。

二人は椿の声を聞くと、すぐに不穏な空気を霧散させる。

「それもそうだね。それじゃ、ラミ、また後でね～」

「うん」

「あ、あれ？あれ？」

先ほどまでのやりとりなど無かったことのように笑顔になる奈津と、無表情ながら楽しそうなラミネージュ。椿はそのやりとりを見なが

ら肩を震わせるイストを見て、漸く気がつき始めていた。

「ねぇ、奈津。私、もしかして、からかわれた？ねぇ、奈津？」
「ほら！早く行かないと！」
「聞いてる？奈津？ねぇ、奈津？」

淀んだ空気を発する椿の手を取ると、奈津は慌ててかけだした。
その背には、うっすらと冷や汗をかいていた。自業自得である。

†

最高の賑わいを見せた虹睨祭も、もう終わりが近づいていた。
人気投票が集められて、優勝が決まる。だが、優勝は半ば予想できていたので、生徒達の表情は至って普通だった。
なにせ、紳士喫茶は異常な盛り上がりを見せていたのだから。

『はいは～い、予想どおりで申し訳ない！一位は一年Ｂ組の紳士喫

茶Ｄｒａｇｏｎ　ｃｒｏｗｎ”ですっ！なんとぶっちぎりの優勝という、例年では考えられない優勝でした！みんなー来年も頑張ってねぇーっ！』

マリアの声が響く。

だが、夜の校庭にわざわざ集まったのは、この発表が目的ではなかった。

『それでは！虹睨祭の、後夜祭！みんな、楽しんでいってねっ！！』

マリアがそう言うと、夜の空に虹色の花火が上がる。

夜空を煌めかせる虹が現われるのと同時に、キャンプファイヤーが真紅の炎をあげた。

生徒達は、早速輪を作ったり、飲み物を持ってベンチに移動したりと、行動を開始した。

「椿！一曲踊ろうよ！」

「奈津……私、踊れないよ？」

「リードするよ、ほらっ！」

満面の笑みを浮かべる奈津の手を、椿はやはり笑顔で受け取った。

奈津はまだ、男装をしたままだ。

「あれ？上手いじゃん」

「そうかな？……奈津のリードが上手いんだよ」

くるくると、キャンプファイヤーの周りを踊る。

会場に流れるアップテンポな歌は、校庭の端でマリアが歌っているものだった。

「次、私」

どこからか、男装してきたラミネージュが、椿の手を取る。
椿は一瞬困惑したが、小さく笑って奈津からラミネージュに移る。

最後の余興だ。
最後まで付き合って楽しむのが、一番だ。

移動しながら、ミアとも交代して、それからレイア、神楽、楓と移動する。
疲れてしまうことはない。だてに鍛えては居ないのだ。実戦限定の鍛え方だが。

人の間を移る度に、雅人が小さく鳴く。
余興に合わせているのではない。くるくる回る椿に、辟易しているのだ。

そんな椿と雅人、そして踊る人たちの様子を、最初に離れた奈津は笑って見ていた。
そんな奈津に、声をかけるものが居た。

「佐倉さん」
「あれ?浅川さん?」

洋子だった。
そして、洋子の影には、悟が居た。

「あれ?どうしたの?悟君」

悟は戸惑いを見せたが、すぐに力強い瞳で奈津を見上げた。
そして、自信の輝きを含んだ笑みを見せる。

「オレ、大きくなったら、“ヒーロー”になる！奈津みたいな、“ヒーロー”になるよ！」

「悟君――」

その言葉に、奈津は目を見開いて、驚いた。
洋子を見ると、洋子は嬉しそうに微笑んでいた。

奈津は屈むと、悟の視線に合わせる。
そして、正面から、悟の顔を見据えた。

「楽しみにしてる。頑張れよ、“見習いヒーロー”」

そう言って、奈津は力強く悟の頭を撫でた。
悟は、満面の笑みを浮かべると、頷いた。

「うんっ！！」

笑顔で満ちあふれる、後夜祭。
生徒も教師も一般客も入り乱れて、笑い合う。

その笑顔の輪の中に、姿が見えない者も居た。

普段は必ず、何らかの形で参加している、学院長の蓮と――。

――椿の祖父、宗一の姿が、そこになかった。

†

校舎の最上階、学院長室。
電気は消えていて、代わりに空に浮かぶ虹色の花火が、学院長室の証明になっていた。

そこで佇むのは、白髪交じりの黒い髪。
二十歳程度の青年の姿をした、蓮だった。

蓮は打ち上がる花火を見ながら、眼を細める。
その瞳に映る色がどんなものなのか？その複雑な色を理解できる者は、いない。

そんな蓮に、近づく影があった。
白い髪をなでつけた、老紳士だった。

「久しいな、蓮」
「あぁ、そうだね。よく来てくれたね――宗一」

老紳士――宗一は、返事をすることもなく、ただ自然体で佇んでいた。

「そろそろ、聞かせて貰いたい」

願い出るような口調だが、その声には有無を言わせない重みがあった。

蓮はそれに、返事をしない。

「何故おまえは、椿を楼城館に通わせるように、私に“頼んだ”？」

「――それについては、感謝しているよ」

宗一は目を伏せて、小さく首を振った。

普段の彼の、厳格な中にも見せる温かい色は、ない。

「――楼城館は私と牡丹、それに、あれの父親の母校だ。元々ここを薦めるつもりだった。……それに、最終的に選んだのは椿だ。礼は要らん」

宗一はそこで言葉を切ると、再び鋭い目で、蓮を見た。

「それよりも、はぐらかすな……蓮」

蓮は、その視線を真正面から受けて尚、首を振る。

「――――今は“まだ”、その“時”ではない」

宗一は、更に鋭く眼を細める。

すると、魔力による威圧で、学院長室が“軋む”。

「言えん、と？」
「そうだ」

その魔力に、真っ向から意志をぶつける。
ここで怯むわけには、いかなかった。

「そのうち、話すさ」

蓮の言葉に、威圧を解く。
その感覚に、蓮は小さくを吐いた。

「その“時”とやらが、来ないことを望むよ」

宗一がそう言うと、蓮は目を見開いた。
そして、どこか悲しげに、笑った。

「そう、だね。――あぁ、まったく……そのとおりだ」

宗一に背を向けて、窓の向こう側を見る。
その虹を見ながら、側にいる宗一にすら届かない小さな声で、呟く。

――だけど、きっとその望みは……。

花火が上がる、夜空の下。
二つの影は、いつまでもその場に、佇んでいた。

第二十話　虹睨祭編？　夜の宴（後書き）

これにて、虹睨祭編は終了です。
二章も、残すところあと二回。

次話は、前編と後編の二部構成で、お送りします。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第二十一話　正義の騎士　（前編）

白いベッドに横たわる、二つの身体。
目元にかけられた白い布。

その二つを、少年は感情を表情に出すことなく、ただじっと眺めていた。

彼の親族達は、口を揃えて自分のところへ来るように、彼に言う。
その顔に映る笑顔は、欲望という醜い泥にまみれていた。

彼を引き取ることで、彼の両親の財産を望む、卑しい“物欲”の奴隷達。
そんな存在に縋ることを望まず、少年は首を横に振り続けた。

それから始まる、嫌がらせ。
幼い子供にすることとは思えないような脅しにも、彼は耐えた。

やがて、施設に行くことになった。
そこでも平穏は得られず、失望すら抱かない日々が続いた。

彼は、ただその瞳に闇を映していた。
自分に手を差しのばす者達は、誰も彼も“欲望”にとりつかれていた。

彼は、いつしか彼らを――――。

文化祭も終わると、とくに変わり映えのない日常がやってきた。
中間試験も終えて、今はもう十一月の中旬になる。

邪霊の被害も無く過ごす一ヶ月というものは貴重で、椿たちはのんびりと勉学、部活動に励んでいた。

実戦授業も、後半になると規模が大きくなっていく。
その中でも、一年生の二学期後半からは、実際に“仕事”の空気を肌で感じる必要が出てくる。

集団で学外へ出る。
そこで、騎士の監督の下、実際の依頼をこなすのだ。

これが、楼城館女学院最大の演習授業。
騎士団監督総合実戦授業――通称“騎士演習”である。
期末試験が近づいてくると、いよいよ、この騎士演習の季節がやってくる。
一学年総出で騎士団の待つ、実習のための場所へ行くのだ。

今回彼女たちに用意された舞台は、邪霊に襲われた際に人が住めなくなった、小さな街だった。襲った邪霊は退治したが、まだまだ邪霊は出てくる。

今までは騎士団が監視をするに止まっていたが、この土地をどうすることも出来ない土地の所有者が、倒しきれなくても構わないから邪霊をできるだけ退治してくれと頼んだのだ。

そこで、騎士団はこの依頼を受諾する条件として、楼城館女学院の授業に使うことを求めた。本来、監視だけで済む場所には騎士団は送らないのだ。なにせ、本部の騎士団は、そんなに手が空いているわけではないのだから。

依頼人はこの条件を快く承諾して、こうして楼城館女学院が介入することになった。

学年で移動するということもあり、移動は飛行機から大型バスで移動することになる。
飛行機と聞いて即座に普通の集団で賑やかに乗る物を思い浮かべた椿は、いざ乗るという段階になって絶句することになる。

「ねぇ、奈津……これ、なに？」

「なにって……なにが？」

ジャンボジェットのような大きな外見。
その中は、広くてとにかく豪華だった。

レストランみたいな場所や、ちょっとしたカジノも伺える。
さらに、シャワーも完備されていて、色々ありすぎて逆に落ち着かない。

そう――――ファーストクラスというヤツだ。
椿はいい加減、学習するべきなのだろう。
どう考えても、今の価値観ではついていけない。

ゆったりとした座席に座り込み、外を見る。
アナウンスが鳴り、だんだんと飛行機が進んでいく。

ふわりとする、独特な浮遊感に、椿はのんびりと身を任せるのだった。

†

空は、曇りで薄暗い。
雲が覆っているため、日の光がほとんど通らず、どこか陰気な雰囲気だった。

「これは、また」
「旧校舎を思い出すね……」

奈津の小さな呟きに、椿が答えた。
廃れた街は、薄暗さも相まって、非常におどろおどろしい。
一人で迷い込んだら、泣いて逃げ帰る。そんなレベルだ。

「みなさん、滞在するための場所へ移動しますよー」

そう言って、のんびりとした声をかけるのは、引率のミファエルだ。
魔法学の担当として、彼女が一年生の引率を務めていたのだ。
通常はそれと各クラスの担任がサポートのために来るのだが、今回は、新任と言うこともあり神楽も同席していた。

一年生担当の医師であるアンジェリカも、一緒だった。

滞在するのは、ホテルといった施設とは少し違う。
騎士団が用意したプレハブ小屋だ。お嬢様だ何だと言っていられない場所で行う演習のため、それも仕方がない。

「各クラスに、それぞれ騎士の方が一人ずつついてくれます。その方の指示をあおってくださいね～」

ミファエルがそう言うと、去っていく。
椿たちも、その人物を待った。

「誰だろうね、椿」
「騎士団に知っている人って……フィーリさんくらいじゃないの？」

奈津の言葉を聞いて、椿はそう、首をかしげた。
彼女が知っている騎士など、フィーリと噂で聞いた最年少元帥、カインくらいだったのだ。

「あ……でも、私、一人だけ知ってる人がいる」
「え？そうなの？誰？」

椿が首を捻りながらそう言うと、奈津は興味深そうに椿を覗き込んだ。

「えーとね、確か――」
「――みなさん、はじめまして」

そうしている内に、騎士がやってきた。
その中には、フィーリの姿もあった。

その騎士の中、一人の男性を見つけて、目を見開く。
黒い癖毛に緑がかった目の男性で、銀色のマントをしていた。
銀色と言うことは、レベル九。シルバークラウンの高位魔法使いだ。

椿はその顔を見て……息を呑んだ。

「椿？」
「香宮――さん？」

男性は、生徒達に挨拶を済ませると、自分を見る椿の視線に気がついた。
すると男性は、小さく……それでいて、どこか嬉しそうに、笑った。

「誰なの？あの人？」
「香宮陣、さん。私を――火事から救いだしてくれた人」

椿を“化け物”と呼んだ騎士は、名を騙る偽物だった。
火事の跡から椿を助けたのは彼――香宮陣だったのだ。

そう、彼は――最初に、椿に手を差しのばした人だった。

†

騎士演習、要は依頼をこなすのだが、今回は内容自体はシンプルだ。
舞い込んでくる依頼によって、捜査から始めないとならないケースなども、もちろんある。

だが、今回は見敵必殺……見つけたら倒せばいいと、それだけだ。
クラスごとに担当する地区を分けられて、更に二人一組で広範囲を探索する。
いつでも助けを呼べるように専用の通信機も持っておく。
騎士団監督のため、死者は出ない。
だが、稀に重傷者は出ることがある。
これは実際の“依頼”だ。
当然、卒業したら舞い込んでくることなのだ。
研究者のような立場を望むものにだって、その可能性がないわけではなかった。
魔法使いとして一定以上のレベルを持っているのなら、苦手でも矢面に立たなければならないことはある。それは、普通の人間から外れた力を持つ、魔法使いという“職業”に就いたもの達の、義務だった。
一人では、時に冷静な判断を下せないことがある。
世に出ればそんなことは言っていられなくなるが、ここは学校。
就職が関わる三年生までは、二人から三人一組で任務をこなすことが許されていた。
「うぅ、廃病院とか、僕たち運無いなぁ」
「ホントだよ……」
ペアは、自由に作ることが出来る。
安全性を考慮した結果のペアシステムだ。

ここでランダムにして、危険をあげてしまったら本末転倒と言えるためだった。

椿と奈津は、当然のように二人でペアを組んだ。
そして、椿たちが割り当てられた場所が――街の、廃病院だったのだ。

ぼんやりと光る蛍光灯。
病室で時折揺れるカーテン。
ひび割れた窓とくすんだ壁。

確実に、“なにか”がでそうな場所だった。

「こういう時は、怖い話をすれば逆に怖くなくなるっ」
「無いから」

奈津の渾身の冗談は、椿にばっさりと切り捨てられた。
こういう時にそう言った冗談を実行するのは大抵奈津な為、そう言った方面での信用は皆無と言えた。自業自得である。

『オォ』
「っ！」

暗く、低い声。
二人は即座に装霊器に魔力を流した。

詠唱はまだ唱えない。
敵のタイプによって、使う魔法を選択する。

それは、回避能力の高い二人だからこそできる、戦法だった。

『オオォ』

聞こえてくる。

だが、位置までは把握することが出来ない。

『オオォオオォッ』

「椿、上！」

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

即座に、炎刃を展開する。

天井に張り付いていた邪霊が、椿たちめがけて黒い“舌”を伸ばす。

「せいっ！」

『グゥッ！？』

それを、一歩後ろに下がりながら、椿が炎刃をふるって切り落とす。

その頃には、奈津は炎刃から避けつつ上に飛んでいた。

舌を切り落とされて蠢くのは、カメレオン型の邪霊。

邪霊は、周囲の色と同化を始めるところだった。

奈津はそれを阻止するために、空中で回転して天井の邪霊に蹴りを放つ。

『ギャウッ』

天井から離れて落下する邪霊を、椿が振り抜いた炎刃を返すことで、切り裂いた。

邪霊は咄嗟に尻尾を犠牲にして、その場から逃げようとする。
だが、それを見逃す奈津ではない。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に疾風の加護を授けん】」

速度を上昇させた状態で、天井を蹴る。
邪霊の僅か上空で回転すると、勢いの乗った踵落しを、邪霊の脳天に決めた。

『ガギャッ！』

邪霊は短く断末魔の声を上げると、塵となって消えた。

「ふぅ……透明になって近づいてくるとは、ね」
「もっと注意した方が良さそうだね」

椿が「用心しよう」というと、肩の雅人が同意を示すように、短く鳴いた。
邪霊はこの一体ではない。これで済むのなら、わざわざ騎士団に頼む程ではない。
まだまだ、先は長いのだ。

†

それから二時間程、椿たちは探索を続けていた。
だが、最初のカメレオン以外で、邪霊が見つかることはなかった。

そこで、一度休憩を入れることになった。

休憩の時は、簡易結界装置を設置して、一定空間の安全を図る。
適当な病室を選んでそこへ設置することにして、休憩をとり始めた。

ちなみにこの簡易結界装置は、騎士団御用達、騎士専用の支給品だ。
だが、今回は特別と言うことで、最大で三回まで使用できる物を、生徒達に渡してあった。
通常では手に入らない、一級品である。

「そういえば、さ」
「うん？」

奈津が小さく、呟いた。

「さっき、騎士の人……香宮さん、だっけ？……を、見て驚いてたみたいだけど、知り合い？」

目を見開いた、椿の顔。
唯一知っている騎士として椿が名をあげた、男性。

「香宮陣さん、だよね」
「うん、その人」
奈津がそう言うと、椿は懐かしむような顔をした。
「私はね、お父さんとお母さんを、邪霊に殺された……それは、前にも話したこと、あったよね？」
「……うん」
椿は、奈津とレイアとラミネージュ……この三人には、神霊者などの事情を省いた説明をしていた。その中には、火事の“跡”から助け出されたと言うことも、含まれている。
まだ神霊者のことを知られるのは怖い。だが、それ以外のことまで隠しているのは、嫌だったのだ。
「火事の跡で、倒れていた私を助けて、背負って病院に駆け込んでくれたのが、香宮さんなんだ」
「へぇ……それじゃあ、命の恩人ってこと？」
「うん、そうなる、かな」
椿はそう、照れながら笑う。
気恥ずかしいのだ。
「その後、騎士の格好をした人が、火事の跡から助け出された私に対して“悪い噂”を流しちゃったんだけど、その噂を消すために奔走してくれたのも、私の血縁を調べて、おじいちゃんとおばあちゃんを探してくれたのも……みんな、香宮さんがやってくれたんだ」
化け物と椿を罵った男は、騎士の名を騙る、偽物だった。

邪霊に恨みを持つ者が、椿のような人間や奈津のような向こう側の子供達に対して、悪質な悪戯をする。そういったケースは、多くはないが、確かにあるのだ。

「最初に私に手を差し伸べて、笑顔をくれた人。私の――恩人」
「そっか……大切な人、なんだね」

椿にとっての“憧れ”は、なにも祖父母だけではない。
そうやって助けてくれた陣も、“憧れ”の対象だった。

「そっかそっか、その人が椿の初恋の人かー、なるほどね」
「うん、そう。私の初恋の……って、えぇっ！？」

流れで、椿はうっかり聞き流すどころか乗るところだった。
真っ赤になった顔でベッドに腰掛ける奈津を見ると、奈津は生暖かい目で椿を見ていた。
目で、“自分は理解しているよ”と語っていた。

「大丈夫、僕は解っているよ」

口にも出していた。
椿は真っ赤な顔のまま、頬を膨らます。
その様子を見て、奈津は一際大きく笑い声を上げた。

「奈津」
「ぷっ……くくくっ……な、なに？」

笑い声を上げていたため、気がつかなかった。
椿が、非常に良い笑顔をしていたことに。

椿は奈津の名を呼ぶと、笑顔で近づく。
そして、その頬を両手で優しく包み込んだ。

「へ？」

目を合わせられる形になった、奈津は訝しげな声を出した。
そんな奈津に、椿は綺麗な、笑顔を見せた。

そして――――渾身の力で、その頬を外側に引っ張った。

「あいたたたたっ！？！？！！」
「変なことを言うのは、この口かなぁ？」

廃病院の一室に、奈津の叫び声が、いつまでも響いていた。

†

怒っていますと言いたげな椿の横で、奈津は真っ赤になった頬を両

手で押さえていた。

「うぅ、ごめんよ、椿」

「はぁ……まったく、もう」

しょんぼりと肩を落とす奈津を、椿は大きくため息を吐いてから、許す。

休憩も切り上げて、現在は探索に戻っていた。

「後、残っているのは……死体安置所、かな」

「うへぇ」

椿が気乗りしない声で、地図を見ながらそう言った。

奈津も、それに嫌そうな声を漏らす。病院で、トイレの次に怖い場所である。

一番怖いのがトイレというのも、おかしな話だが。

「場所は……地下、だね」

「地下かぁ」

奈津は、がっくりと肩を落とした。

行きたくない。だが、行かないわけには、いかなかった。

ゆっくりと、階段を下りていく。

地下に近づく度に、小さな音にも敏感になる。

水の滴る音に身を竦ませて、震える。

地下に到着すると、そこには無数の死体がプールに漬かっていた。

プールといっても、泳ぐためのそれではない。死体を洗うための、浅いプールだ。

「とにかく、奥へ進もう」
「う、うん」

ここまで来ると、先に吹っ切れたのは奈津だった。
奈津は椿を先導する形で、進んでいく。

更に奥の扉を開けると、人一人が入れるサイズのロッカールームのような場所に出た。
ここに、寝かせた状態の死体を入れるのだ。

「これ以上奥はない、かな」
「それなら、戻った方がいいよね？」
「うん、さっさと戻ろう」

再び奈津が先導して、踵を返す。
だが、戻ることは叶わなかった。

――バタンッ！

扉が勢いよくしまり、身を竦ませる。
奈津は急いで駆け寄るが、開かない。
椿はその様子に、得心がいったような顔をした。

「ねぇ、奈津……ここって、何年も前に潰れた病院なんだよね？」
「くっ、開かないか……。え……う、うん」

ドアノブを回していた奈津は、戸惑いながらも椿に答えた。

「それなら……なんで死体が“まだ”残ってたんだろう？」

「え……って、そうか」

怨霊の類。
もちろん、そうは言わない。
ここは確実に“邪霊”が出ると言われている場所。
それならば、怖がるよりも先に、やることがある。

真紅と緑の光が、装霊器を駆け巡る。
暗い地下室にぼんやりと光る魔力が誘蛾灯の様な役目をして、邪霊を呼び寄せる。

――ガタタン

ロッカーから音を立てて転がる死体。
だが、それは所詮、死体を象った邪霊に過ぎない。

ならば――椿たちに、怖がる必要はなかった。
死体が、ゆっくりと起き上がる。その数は、扉の向こうと合わせれば、三十数体程度になるだろう。

「【大気を統べる風の主よ・我が身体に宿り・我が身に烈風の加護を与えん】」
「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

二種類の魔法の光が、煌めく。
椿の炎刃が死体を象った邪霊を焼き払うと同時に、奈津の蹴りが扉を突き破る。
塵となった邪霊に振り返りもせずに開いた扉に左手をかざすと、炎刃を解除する。

「【四元素が一柱を司る・火焔を呼ぶ槍の火蜥蜴よ・我が敵を・その吐息で焼き尽くせ】」
「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に旋風の加護を与えん】」

椿が放った火炎放射の中を、奈津が突き進む。
炎で焼き尽くされて崩れ落ちる邪霊。その邪霊を盾にして生き延びた邪霊を、奈津が片付ける。

その絶妙なコンビプレーの前に、邪霊の三分の二が、塵となった。
残る十体と少しの邪霊を、二人は睨み付けた。
固まる邪霊の、その中央。赤黒い肌をした邪霊が、おそらく本体なのだろう。

『おおおぉおお』

邪霊は小さく吠えると、瞬く間に密集した。
それは、精霊の“レギオン”によく似た姿。
大きな肉のかたまりに、十と三の顔が浮かんでいる。

その左右には、同じく肉のかたまりが浮かんでいた。
右が“腕”の集合体で、左が“脚”の集合体。
なんとも奇妙なその邪霊の身体は、人間の脊髄のようなもので繋がっていた。

『おまえおおおまえおおおおおまあああえええええ』

邪霊はその口の全てから、声を出す。

その声は、年齢も性別も問わずに、奇妙な合唱を歌っていた。

「目に悪いねぇ」

「本当だね」

奈津が軽口を叩くと、椿もそれに頷く。

地下室という閉鎖空間で戦うのは、奈津も椿も得意とするところではなかった。

『ころこころろろろすすすころすすすすすすすろろろろろろろす』

「あーもーっ耳障りなんだよ！」

まず、奈津が走る。

先ほどの魔法は、まだ解除していない。

右側の腕の集合体から巨大な“腕”が生えて、奈津に襲いかかる。

それに連動するように、左側から伸びた巨大な“脚”が、本体を守るために壁になる。

奈津は自慢のスピードで、腕を難なく避ける。

そして、超越者の能力で身体強化を施して、身体のバネを使った蹴りの体勢を作った。

「【四元素が一柱を司る・火焔を呼ぶ槍の火蜥蜴よ・我が敵を・その吐息で焼き尽くせ】」

身構える脚を、椿が奈津の後ろから、奈津ごと炎で覆う。

奈津は魔法の効果により炎を寄せ付けないため、奈津をすり抜けるように邪霊の防御だけを綺麗に焼いた。

「一撃必殺」

奈津が、小さく呟いた。
腰だめから放たれるのは、ローリングスバット。
その一撃が、邪霊の本体の額を、容赦なく貫いた。

『ななななあななななんんんんんあああああ』

断末魔の悲鳴を上げながら、邪霊が暴れる。
その結果、天井に罅が入った。

「げっ」
「へ？」

邪霊は、塵になる。
だが、その代償に、天井が崩れた。
このままでは……生き埋めだ。

「まーくん！」
『にゃあ』

雅人と協力して、“壁”を生み出そうとする。
だが、奈津の前で使うことに、ほんの一瞬、ためらいを見せた。

「椿！」

奈津が、椿に降ってきた、一際大きな破片を蹴り砕く。
だが、それは大きな隙となった。

最早、逃げられないタイミングで、更に大きな破片が椿と奈津を襲

う。
決意と躊躇の間で揺れ動く椿に、それを防ぐ暇はなく、破片を砕いたことで体勢を崩した奈津に、それに対応する時間はなかった。

――ガキィンッ！

やがて、押しつぶされるというところで、光の結界が二人を守った。

「え？」
「あれ？」

疑問符を浮かべる、二人の頭上。
そこには、穴の開いた地下を、一階部分から見つめる影があった。
黒い癖毛に、緑がかった目。
銀のマントを翻して、両手剣を象った装霊器を向ける、男性。

「ふぅ、ここまで見回りに来て、良かったよ」

一年Ｂ組を担当する、監督の騎士。
香宮陣が、胸をなで下ろしていた――――。

第二十一話　正義の騎士（前編）（後書き）

今回は、前編です。
後編はかなり長くなります。

その他の後書きは、後編にて。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
後編も、よろしくお願いします。

第二十一話　正義の騎士　（後編）　―第二章・完―

魔法学校に入学した。
名門とは言い難かったが、優秀な生徒を輩出してきた学校だった。
そこでも、彼に平穏は訪れなかった。

優秀な彼を自分の派閥に引き込もうとする教師。
才能の有る彼を妬んで嫌がせをする同級生。
それを心の隙だとつけ込んで、取り入ろうとする子供と大人。

彼の世界では、誰も彼もが同じ存在だった。

妬み、僻み、欲望、怨嗟。
醜く歪んだ人間に手を引かれる度に、彼はその人間を見下した。

やがて彼は、その優秀さを買われた職に就くことになった。
そこで見た者も、やはり他と変わらない。

自分の利潤に他者を陥れ、陥れられた者はその恨みを無関係な者に向け、向けられた者もまた、人を傷つける。

誰も彼もが、歪んだ世界。
醜く汚れた、泥まみれのセカイ。

やがて彼は、自分を――――。

手を引かれて、一階部分まで上る。
その先で、椿と奈津は安堵の息を吐いた。

「助かりました、香宮さん」
「ふぅ……ありがとうございます」

丁寧に頭を下げる二人に、陣は頬を掻きながら、照れたように笑う。
好青年、という表現が、よく似合う男性だった。

「いや、無事で何より、だよ」

陣はそう言うと、一転して真面目な表情になる。

そして、これまで倒した邪霊の事などについて、椿と奈津に訊ねた。

「カメレオン型のが一体、それから……」

「今し方、天井を崩したレギオンみたいな邪霊が一体です」

「二体、か……それで終わるとも思えないし、どうもここは強めの邪霊がいるみたいだね」

邪霊同士は、共に争うことはない。

けれど、強い邪霊が居るところに、弱い邪霊が居ることはない。

なにせ、その場所にいたら、いつまで経っても餌は入ってこないのだから。

「よし……少し気になるから、ここの見回り、付き合うよ」

「え、い、いいんですか？」

「お忙しいんじゃ……」

椿と奈津の言葉に、陣は笑顔で首を振った。

「気になったのなら、しっかり見ておかないと。それも、騎士のお仕事だからね。君たちが気にすることはないよ」

そう言って、その笑顔を二人に向ける。

椿と奈津は互いに顔を見合わせると、笑顔で頷いた。

「それじゃあ、行こうか」

「はい！」

陣が先導する形で、歩き出す。

一階部分と地下を見回った以上、この棟にもう用はない。

次は、一つ隣の棟――十五階建ての、本棟だ。

外へ出て、本棟へ向かう形で歩く。
相変わらず空はどんよりと曇っていて、いまいち気が乗らない空気だ。

まだ昼間だというのに、明るくなる気配はなかった。
それだけで気が落ち込むものなのだが、二人は今、そんな感情を抱いては、いなかった。

なにせ、椿にとって恩人で、奈津にとって親友の“憧れ”の人。
そして、国のエリート魔法使いでもある陣が、こうして一緒に歩いているのだから。

「あの、今まできちんと言えなかったんですけど、あの時は色々とお世話になって、その……ありがとうございましたっ」
「あ、あの、僕からも……“親友”を助けてくれて、ありがとうございましたっ！」

本棟に入る目前。
これから気を引き締める、その前に。
椿は陣に頭を下げて、奈津もそれに倣った。

「そんな……俺は、人々を守る“騎士”として、当然のことをしただけだから。――でも、そっか、“親友”か……良かったね、椿ちゃん」
「っ……はいっ！」

友達が、出来た。
それも、礼を言った内容から察するに、事情を話してなお椿の事を“親友”と言える、友達が。

陣はそのことに、どこか慈しみを含んだ視線で、笑った。

「大切にするんだよ、椿ちゃん」

「はいっ！」

勢いよく返事をした椿。

その様子に、奈津も頬を赤くする。

「さて、ここからが本番だ……気を引き締めよう」

「はい！」

「了解です！」

気合いを入れ直すと、三人は本棟に足を踏み入れる。

正面玄関は、すでにガラスのドアが割れて、開きっぱなしになっていた。

枯れ葉なども舞い込んでいて、元々の姿が病院とは思えない程、廃れていた。

「なんだか、空気が重い？」

「う、うん。そうだね、奈津」

粘つくような、威圧感。

鈍重で息苦しい、圧迫感。

そんな、べったりとした空気に包まれた、廃病院。

こんなところに長くいたら、身体を壊す。

一般人だったら、気が狂うかも知れない。

そんな空気だからこそ、そこに邪霊が居るということが解る。

「進むよ」

陣が小さくそう言うと、二人は頷く。
陣が先導をしてくれるので、椿たちは最大限まで、周囲を注意することが出来ていた。

一階をぐるっと回って、二階に上る。
そこで……椿たちは、息を呑んだ。

床も壁も天井も……廊下の全体が、真っ赤に塗られていた。
それはペンキなどではない。だが、だからといって血液でもなかった。

『ああ、あああああ』

声が響くと、壁から真っ赤な手が生えた。
その手の一つ一つ、手の甲の部分には、人間の顔が張り付いていた。
さきほどまで戦っていたレギオンよりも、遙かに醜悪な姿だった。

「どうしますか？香宮さん」

奈津が訊ねると、陣は顎に手を当てて意見を言う。

「こういう場合は奥に本体が居るから、周囲を一掃するか、素早く駆け抜けるんだけど」

陣は、そう言うと装霊器を掲げた。
そこへ無色の魔力が流れ、両手剣の鍔の部分に魔力が走って、その色を黄金に変えた。
銀色の装霊器、その鍔の部分の精霊石はやはり金色で、黄金の天秤

が鍔の全体に刻まれている。

「今回は、ゆっくり歩いて抜けようか」

陣のその言葉に、二人は揃って首をかしげた。
意味がわからず、問い返そうとしたところで、陣が詠唱を始めた。

「【正義を司りし・公正なる者よ・清き魂に・麗しき美女の導きを・授けよ】」

陣と、椿と奈津。
三人の身体が、黄金の光に包まれる。

「これは？」
「これで、俺たちが歩くことは良い結果への道になる。さ、行こう」

言葉の意味が理解できずに首をかしげるが、さっさと歩いて行く陣に、慌ててついていく。
歩く度に周囲の手が椿たちに伸びるが、“偶然”他の手に阻まれたり、僅かなところで手が届かなかったり、と、椿たちを害することが出来ない。

幻想世界“ゾロアスター”の精霊、ラシュヌ。
それが、陣が契約した精霊だった。
善を為した人間を天国へ連れ行く際、彼が善と裁断した者は、美女に導かれて天国へ行く。

それを再現したこの魔法は、付加した者を良い結果へ導く“幸運”を授ける。
相手が強ければ実力で覆される程度だが、レベル九の魔法使いであ

る陣が使う上に、相手はせいぜい中位から高位の中間か、少し下程度。

覆すことの出来る、実力はない。

奥へ奥へと進むと、廊下の先にいたのは、全身が血液のよなものでできた、人型の邪霊だった。この邪霊は本来、弱った人間を自分の元まで連れ来て捕食する。

そのため、無傷でここまで来た陣達を見て、驚いていた。

「二人とも！」

言うが早いか、二人は既に駆けだしていた。
椿の炎刃が胴と首を切り離し、空を舞うその首を、奈津が蹴り潰した。

鎧袖一触。
それなりに修羅場を潜り抜けたレベル四の魔法使い。
その二人に対して、この程度の邪霊が絡め手もなしに抵抗することなど、不可能だった。

「うん、それじゃあ、先へ進もうか」

陣の言葉に頷くと、二人は陣に並び立つ。
この調子で邪霊が居るのなら、先は長かった――。

†

商店街の付近。
寂れた駄菓子屋を見て寂しそうな表情を見せていたフランチェリカが、周囲の“異変”を感じ取った。
ペアであるルナミネスの元へ走り、それを伝える。

「ルナちゃん、なんか変だよ」
「そうみたいね。空気が、変わったわ」

ルナミネスはそう言うと、先に黒い精霊石が飾られた、大きな杖を構えた。
彼女の、装霊器である。戦鎧も、黒いローブといかにも魔女といった姿だ。

フランチェリカもそれに合わせて、装霊器を取り出す。
形状は、大きな葉団扇。天狗の扇である。戦鎧は、高下駄に山伏姿だった。

――ズンッ

地鳴り。
その大きな音に、身を竦ませる。

音はすぐに止んだが、代わりに、周囲に濃厚な魔力が満ちた。
その威圧感と圧迫感に、フランチェリカは思わず口元を抑えた。

『おお』

暗い声が、そこかしこから響く。
足を踏みならすような、べたんべたんという奇妙な音。
その音が響き渡り、周囲に闇が満ちる。

もともと薄暗かった空が、さらに暗くなる。
見れば、灰色だった雲が淀んだ黒に変わっていた。

『食べたい』

どこから響いてくるのか解らない声。
その重低音に呼び起こされるように、雨が降る。

肌を打つ雨の中、目を閉じることはしない。
周囲から目を逸らすのが怖く、いつでも動けるように気を張っていた。

『くれ』

地面から、腕が突き出る。
一つや二つではない、十か百か千か、もしくはそれ以上の、白骨化した手。

「ホラー映画、苦手なんだよね。わたし」
「こんなB級映画じゃ、素直に恐がれないわ」

やがて、全身が地面から出てきた。
白骨化した身体に、四本の腕。その手には、さびて切れ味の悪そうな斧が握られていた。

――カタカタカタカタカタカタ

顎を打ち鳴らす。
その動作の意味など知らない。
だが、フランチェリカの目には、それが嗤っているように見えた。

「まったく……ままならないわね」
「どーかん」

息を吐く。
軽口をたたける程余裕ではない。
だが、ここで挫ける程、弱くもない。

「行くよ、ルナちゃん」
「言われなくても」

魔力が走る。
緑と漆黒が二人を包み、その邪霊達を睨み付けた。

――動き出す。

†

力は弱いが、数は多い。
そんな面倒なだけの邪霊を倒して、椿たちはついに最上階へ辿り着いた。

最上階は、院長室だった。
かつては栄華を誇っていただろうその部屋も、現在は残滓を漂わせて寂れている。
壁に立てかけられた額縁の中の賞状は、字がかすれて内容を読み取ることが出来ない。

「到着……って、あれ？なにもいない？」

奈津が、不思議そうに首をかしげた。

「ＲＰＧのセオリーなら、ラスボスの間ってとこなんだけど……どう思う、椿？」
「うん、私もてっきり、元凶が潜んでいて“フハハハハッ”って言

うモノかと」

別にゲームをあまりやっていなくとも、関係ない。
ヒーローファンなら、そう考えてしまうのは当たり前だった。
なにせ、変身ヒーローのセオリーも、あまり変わらないのだから。

「とくに何か居るようには、見えないね」

調べて回っていた陣が戻ってきて、呟いた。

「一端、戻って――っ！？」

戻る。
陣は、そう続けようとして、息を呑む。

「何だ……この気配」

椿と奈津も、戦慄した陣を見ながら、身を竦めた。
周囲に満ちる暗黒の力に、本能的な恐怖を覚えずには、いられなかった。

窓辺に駆け寄って、下を見る。
遙か眼下の風景は、寂れた街などではない。
白く奇妙なモノが、巣に群がるシロアリのように、地面を侵食していた。

それはまるで――裁きを待つ、咎人達の宴。

「俺はすぐに降りて、他の騎士達と協力してこの事態に対応する」

装霊器を握る手に力を入れながら、陣がそう言った。

「私たちも――」

「――だめだ」

そんな陣に協力しようと、椿と奈津は身を乗り出した。

だがその申し出を、陣は首を横に振って拒絶する。

「俺たちは、君たちを守るためにここにいる。こんな訳のわからない事態に、巻き込むわけにはいかない。君たちはまだ、独り立ちを許されているわけではないんだ」

陣は、二人の顔を真剣な表情で見る。

そして、言い聞かせるように、しっかりと理由を話した。

「それでもっ」

「足手まといだ」

言いたくないことを、言ったような。

そんな、辛い表情。

その表情に、椿は唇を噛みしめた。

「ここに結界を張る。君たちはここで待っているんだ。いいね？」

「私はっ」

「わかりました」

それでも食い下がろうとする椿を遮って、奈津がそう言った。

椿は奈津を驚いたような表情で見て――すぐに、俯いた。

どちらが正しいことを言っているかは、明白だった。

「わかってくれて、ありがとう。――行ってくる！」

そう言って、陣は簡易結界装置で結界を張ると、部屋を飛び出していった。

そのしんと静まりかえった部屋で、椿はぐっと拳を握りしめる。

一分経ち、二分経ち、十分が過ぎようとした頃。

椿は決意の表情を浮かべて、前を見る。

陣の言いたいことは、解っている。

それでも、この地獄に――恩人と友達を放り出したまま、止まっていることが出来なかった。

「奈津、私っ――」

「――そろそろ、かな」

今までじっと黙っていた奈津が、そう呟いた。

「奈津？」

「さ、行こう」

椿の手を引いて、前を見る。

そんな奈津の姿に、椿は首をかしげたままだ。

「なん、で？」

「え？そろそろ、香宮さんも下に到着しているだろうから、行こうかなって――だって、納得できないでしょ？黙って、見てるなんてさ」

奈津は、始めからそのつもりだったのだ。
だから、さっさと承諾して、先に行かせた。
より早く、参戦するために。

そのことに気がついて、椿は頬を綻ばせた。

「奈津――――うんっ！」

扉を開けて、外へ出る。
結界から抜けたその場所も、窓から見た眼下の景色同様、白骨の群れに囲まれていた。

「まずはこれを、片付けてからだね」
「うん……そうみたい、だね」

装霊器に、魔力を流す。
こんなところで足止めをされているわけにはいかない。
恩人との“約束”を破ってまで、動くのだから。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に旋風の加護を与えん】」
「【四元素が一柱を司る・火焔を呼ぶ槍の火蜥蜴よ・我が敵を・その吐息で焼き尽くせ】」

奈津が走り、椿の炎が一面を覆う。
白骨を炭化させて、焼ききれなかったものは奈津が蹴り砕く。

「せいやぁっ！！」
「はぁっ！！」

炎と風。
赤と緑。
轟と鋭。

突き抜ける二色の光を止められる邪霊は、そこには存在しなかった。
そう――――“邪霊”は……。

「【正義を司りし・公正なる者よ・悪しき魂に・北風の痛みを与えよ】」

階段までの廊下。
その空間に、響く声。

金色の魔力が迸り、先行する奈津に襲いかかる。

「うわっ！？」
「っつぅ！？」

衝撃とカマイタチ。
風の刃と槌が、まず奈津をはじき飛ばし、その後ろにいた椿を巻き込んだ。
人も邪霊も関係なく、黄金の暴力が蹂躙する。

ばらばらと砕けた白骨は、形をとどめる間もなく塵になって消える。
優秀な戦鎧のおかけで表だった怪我は無いが、それでも衝撃によるダメージがないわけでは、ない。

身体に響くような痛みをぐっとこらえて、二人は立ち上がった。

銀の装霊器、銀のマント、銀の鎧。

黒い癖毛、緑がかった目、優しげな顔立ち。

「助けるにしては、過激だね……香宮さん」

声を出せない様子の椿の代わりに、奈津が軽口で訊ねた。
だが、その唇は動揺から、震えている。

「まったく……もう少し待っていられなかったのか？」
『椿……こいつ』

何一つ変わらない表情と、口調。
だがその異様な空気に、椿の肩で雅人が囁いた。

「貴方は、一体」
「君と“似た様なもの”だよ、椿ちゃん」

そう言って、笑う。
優しげな微笑みなのに、その雰囲気が、それを否定する。

「なんでっ」
「椿……？」

声を震わせて叫ぶ椿の様子に、奈津は僅かな戸惑いを感じた。
似た様なもの……その意味が、解らずに。

「今ならまだ、間に合う」
「香宮、さん？」

陣は、真剣な表情を作り、椿に手を差しのばした。

「どこへ行こうっていうのかな？」

奈津が、椿を庇うように一歩前へ出る。
その様子に、陣は激昂することもなく、素直に手を引いた。

「そうだね、説明不足だった」

そう言って、苦笑いをする。
失敗したと言って笑う姿は、上司に怒られて照れているような、そんな“普通”の様子だった。

「この世は“悪”に満ちている」

それは、どこかで講演でもするような、口調だった。
廊下に、朗々と響き渡る声。その声は、人間の本能に、危機感を与える。

「誰も彼もが欲望にまみれ、自身とは違うものを排他する」

不思議と、胸に響く声。
そう感じているのは、椿だけではない。
隣の奈津も、同様に感じていた。

「自分より持たざるものを罵り、自分より持つものを傷つけ、自分と同じものを貶す」

その声に含まれている感情は、読み取れない。
歓喜、悲哀、憤怒、享楽。いずれの感情にもほど遠く、いずれの感情にも似ている。

「欲望の儘に人を傷つけて、殺すことしかできない醜い種族」

やがて、椿は、陣の双眸に映る色に気がついた。

その色の名は、黒と白。

両極端の、絶望と希望。

失い絶った希望の中に、新たな望みを見つけた、目。

「それが――――“人間”だ」

この世に満ちる“人間”……その全てが“悪”である。

陣は、椿と奈津に、そう断言した。

「人は醜い。それは君たちが、一番よくわかっているはずだ。人間は悪意に満ちている……そう、俺が、君に教えてあげただろう？椿」

その言葉の、意味。

それを考えて、椿は思考を止めた。

「まさか……あんた」

奈津が、険しい視線で陣を見る。

陣はその視線を真っ向から、受け流す。

「私を……あの時」

「あぁ……そう、そうだよ。椿。“選ばれた者”である君に、人間の“真実”を、教えてあげたかったんだ」

ぐるぐると頭を駆け巡るのは、過去の映像。

ベッドの脇に立つ、紅いマントの騎士。

あの時、椿を化け物仕立て上げたのは。
あの時、椿に手を差し伸べたのは。
あの時、椿を追い詰めたのは。
あの時、椿を救ったのは。
あの時、椿に憎しみを覚えさせたのは。
あの時、椿に憧れを与えたのは。

「誰？」
――誰だった？

フードの下から覗く、緑がかった双眸。
黒い癖毛と、柔らかな顔立ち。

その、姿は――。

「そう――俺だよ、椿」
「あ――――」

もう、声も出ない。
最後に悲鳴に似た声を零した。
ただ、それだけ。それだけでもう、何も零れない。
視界が――暗い闇に、閉ざされる。

「さぁ、俺の手を取れ」
「あんたは、なんでそうやって！」
「佐倉奈津、もちろん君にも“資格”はある。だが、椿の“それ”の方が上位――優先すべきは彼女だ。少し待て」

頭がぼんやりとして、目の前が暗くなる。
気を失うときよりもずっと重い身体を、椿は抱き締める。
その姿は、一人きりの家で、孤独に怯える幼子のようだった。

「“資格”？“上位”？何を言ってるのさっ！」
「なんだ、そうか……知らないのか」

そう言って、口元を歪める陣。
その姿に、椿は一時的だが、正気に戻る。

「彼女は、特別なんだよ」
「特別？」
――やめて

声は出ない。
絶望から、喉がからからに渇いて、声を発することが出来なかった。

「そうさ……人間も精霊も邪霊も、彼女は全てを超越している」
――やめて
「精霊を呑み込み」
――やめて
「邪霊を喰らい」
――やめて
「その気になれば、そう――“人間”だって」
――やめて
「彼女は、“支配”することができる」
「……めて」

目を見開く奈津に、陣は淡々と言いつのる。
その口調には、だんだんと強い感情が、込められていく。

「彼女は神霊者……全ての種の垣根を超えて他者を喰らい尽くすものなのだよ！！」
「やめてぇぇぇぇっっっっ！！！！」

漸く声を出したときには、全てが手遅れだった。
得意な表情で語りきった陣と、ただ俯く奈津。

邪霊に改造されたという次元ではない。
椿は、邪霊を呑み込んでその力を行使する。
その力は――憎むべき邪霊と、どう違う？

――使用者が、変わっただけだ。
――変わっただけで、その力を行使する者は……。

――“化け物”だ。

大粒の涙を流す椿を、陣は面白そうに見つめていた。
親友に拒絶され、孤独になって、絶望して、その先の答えが“自分と同じもの”になると、陣は“確信”していたのだ。

「椿ってさ」
「――――」

何を言われても、せめて受け取りたい。
だから、その一言には反応できなかったが、次は答えよう。
椿はそう、決意した。

「案外――――抜けてるよね」
「うん――――って、えぇっ！？」

思いもよらない言葉に、間抜けな声が出る。
そんな椿の横で、奈津は肩を竦めていた。
いかにも“呆れている”という仕草だ。

「椿が何かを抱えてたって事くらい、知ってるよ」
「え――――？」

奈津の表情は、優しい。
何よりも、穏やかな微笑みだった。

「どれだけ椿と一緒に居て、どれだけ椿を見ていたと思うのさ」
「奈津……」

奈津はそう言うと、手を差し伸べる。
それは、その双眸に輝く光は――――。

「重いって言うなら、僕も持つ。僕が重くなったら、椿も持ってくれればいい。だって僕らは対等で、かけがえのない、存在なんだ。だから、大丈夫だよ――――“親友”」

――――椿がなにより、“憧れ”たもの。
希望と救いの、光だった。

手を掴む。
全ての迷いは、振り切った。
挫けそうになっても、折れそうになっても。
支えてくれる“親友”がいる。

もう――揺らがない。

「なぜ、だ？」

そんな椿と奈津を、陣は驚愕の表情で眺めていた。
まるで、理解できない“存在”を見てしまったかのように。

「何故解らないんだ、椿！」
「貴方は私に、解らせようとしていない。それなのに、理解する事なんてできないよ」

揺らがない心は、信仰にも似た悪意を弾く。

「あの副団長、白銀の城砦だって、実力も伴わない魔法使いを護りながら戦えば消耗する。そこを叩けば、騎士団を掌握することだって不可能じゃない！俺と君で、世界を手に入れるんだ！」

まっとうな言葉は届かないのか、ただ自分の意見だけを募っていく。
それでは、他者の心に言葉を響かせることなんか、できない。

「は、はは……いいだろう。まずは、その自信……打ち砕く」

陣はそう言うと、背を向けて歩く。
そして、階段を上っていった。その先は――屋上だ。

「椿」
「うん」

短く頷き合う。
繋ぎ合った手から伝わる温もりを、しっかりと覚える。

そして――陣を追って、階段を上った。

†

少年の両親は、普通の人間だった。
どこにでも居るような、普通の人間。

少年はずっと、そんな風に、自分の両親を――“勘違い”していた。

母親は、父親に黙って外に男を作っていた。
そのことを父親が知ると、父親は心に宿る暴君をさらけ出し、母親を殺した。

その光景を見ていた少年を、父親は殺そうとした。
そんな父親を少年は、恐怖のまま“喚び出した”精霊を用いて、殺した。

事故として処理された事件。
その裏側には、権力者の夫であった、母の浮気相手の影があった。
都合の悪いことをもみ消して、浮気相手は口止め料だと、少年に“寄付”をした。

その多額の“金”に、彼の親族が群がった。
全てを絞りだそうとする親族を振り切り、孤児院に入り、彼は魔法学校へ入学した。

自分が“響霊者”であることは隠しても、才能は現われる。
家柄という後ろ盾のない彼を、他の生徒は排除しようとした。

そうでない者も、いじめられる彼を見下して、優越感に浸っていた。

彼はある日、精霊を呑み込んだ。
彼は止まることのない才能を開花させ、真霊者となったのだ。

全ての存在を正しく裁く“公正なる者”――ラシュヌ。
その存在を呑み込んで、裁定者として他者を見るようになった彼は。

――他者を“悪”と定義して。
――自分を“正義”と定義するようになった。

それは、彼の人生の、本当の終着にして――始まりだった。

†

病院の屋上は、ヘリポートになっている。
その中央に、陣は佇んでいた。

激しい雨が降り注ぎ、視界を悪くさせる。
それでもなお、前を見ることを止めない。

「全ての人間は“悪”だ。同じ種族で争い血を流し、他の種族を欲望の儘殺す」

それは、真実だ。
だが、側面に過ぎないのだ。
それが全てでは、決してない。

「悪意にまみれて生きる人間は、本当の意味で人を理解することは出来ない」

淡々と、語る。
その顔に、感情は込められていない。

「憎むことでしか生きられない人間は、本当の意味で人を愛することなど出来ない」

剣を、天に掲げる、
黄金の魔力が、周囲を満たす。

「ならば、欺瞞に満ちた人間を――この醜い世界を、一度壊してしまえばいい」

椿と奈津も、魔力を通す。
真紅と緑と黄金の魔力が、溢れる。

「真霊者にして、邪霊の力を得たこの身体――“魔霊王―≪ダークロード≫”たる俺と」

敵の出方が解らない。
だからまだ、詠唱はしない。

「人間も精霊も邪霊も、全てを超越した存在――“神霊者”たる君で」

真霊者で、悪に堕ちた――“魔霊王”
それは、神霊者たる椿に迫る、存在だった。

「幻想世界“エデン”の、アダムとイヴのように」

そして、陣は――凄惨に、嗤った。

「世界を真実の“正義”と“愛”で満たす、あらゆる生命の“母”になるのだよ!!」

黄金の魔力が集束して、精霊石に満ちる。

この石は契約の証ではない。

香宮陣“そのもの”だった。

「【正義を司りし・公正なる者よ・我を神の代弁者と認め・悪しき魂を裁く力を・もたらせ・ここに・正義の剣を顕現させよ】」

剣が、黄金に光る。

「証明しよう。俺が“正義”であると認めざるを得なくなる……絶対的な“力”を」

そして――閃光が走る。

「っ！」

椿と奈津は、同時に駆け出す。

互いに、神霊者の力と超越者の力で、肉体を強化する。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に旋風の加護を与えん】」

「【蛇鞭・流焔】」

炎のダメージを受け付けなくなる旋風の鎧と、大角大蛇の力を用いた、大きな炎の鞭。

このコンビネーションは、実力が上の者にも、通用する。

「せい！」

奈津の上段蹴りが、陣の側頭部へ放たれる。

陣はその一撃を、剣の腹を盾にすることで防ぐ。
さらに迫った炎の鞭を、受けた反動を用いて返した刃で斬り払い、刃を背中側へ回す遠心力を利用して、空中で停滞していた奈津に蹴りを放った。

更に、背中側に回していた刃を、正面に向かって振り上げ、降ろす。
その動作により黄金の衝撃が走り、椿を打ち据えた。

ほんの一瞬のあいだに大きく後退させられて、冷や汗を掻く。

「強い、けど」
「負けられない、ね」

折れない二人に、陣は何も言わない。
だがその目には、“絶対者”からの憐憫で満ちていた。

「【三槍・響炎】」
「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に飛翔の加護を授けん】」

椿は炎の槍を放ち、奈津は宙を舞う。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

更に椿は、炎刃を展開して、地面を滑るように走る。
空と地からの、二方向同時攻撃。更に、妨害のために炎の槍も混ぜられている。

「わからないのか……椿」

小さく呟くと、空の奈津と地の椿を、視界に入れた。

「【正義を司りし・公正なる者よ・悪しき魂に・醜き悪女の導きを・与えよ】」

それは、幸運の魔法と真逆の効果を持つ魔法。

すなわち……。

空から踵落しを放つ。

その側面に“偶然”突風があたり、身体がずれる。

炎刃を振るおうとしたところに“偶然”奈津の身体が来て、咄嗟に炎刃を消す。

「残念だよ」

……他者に“不幸”を付加する、魔法。

力でねじ伏せられる程度の魔法だが、理解するまでは、その魔法は大きな脅威だった。

そして陣は――その剣で、椿の身体を斜めに切り裂いた。

「椿っ！」

「あとで“よく言うことを聞くように”目覚めさせてあげるよ」

それは、身体のみを“使用”する、悪魔の試み。

死者蘇生とは名ばかりの、人形作成だった。

「あんた、だけはっ！」

奈津は、その双眸を紫色に輝かせたまま、突貫する。
椿は大きく後ろに弾かれて、立ち上がる気配はなかった。

「椿が寂しくないように、親友の君も“同じように”してあげよう」
「ふざけるな……っ！！」

向こう側の子供達の能力“超越者”は、あらゆる肉体限界を突破することだ。
その限界は、奈津の認識の範疇で決まる。それは、天恵者にも言えることだった。

認識が、限界と境界を、変えるのだ。

今まで奈津が限界だと捉えていたこと。

“蹴りで空を切る程の威力は出ない”

その認識を、塗り替える。
僅か離れたところで放った蹴りは、付加された“不幸”をたやすく弾き、蹴りの延長線上の空間を切り裂いた。

「なにっ！？」

その一撃を辛うじて避ける。
だが陣の顔の前にはすでに、奈津の膝が迫っていた。

「ちぃっ！」

咄嗟に剣で、ガードする。

「嘗めるなぁ！」

魔力により強く剣が輝いた。

そして、ガードしたまま振り抜くことで奈津をはじき飛ばす。

「だぁっ！」

畳みかけるように、奈津に剣を振り下ろす。

奈津は自身の肉体の強度を“刃を通さない”と認識することにより切られるのは防いだが、勢い余って床を突き抜けて階下に落下した。

そんな奈津を、焦りから追撃して、殺そうとする。

だが、動く気配のないことに、安堵する。

威力に耐えきれずに、気絶をした。

陣はそう判断して、倒れている椿の方に、首を向けるのだった――。

†

頬に当たる、雨。
その雨の冷たさに、身体が震える。

雨に溶けるように、真紅の液体が絶えず流れる。
だんだんと感覚が消えて行く身体に、椿は恐怖を覚えていた。

やがて――――世界が、白に染まる。

「死ぬ……のかな……これで……終わり、なのかな」

真っ白な世界で倒れ伏す椿に、歩いてくる影があった。
黒い髪に、銀色の目。背の高い、男性。

――死にたくない？
「死に……た……」

一学期、歴史学で聞いていた声。
よくとおる、威厳のある声。
不思議なほど、澄んだ声。

――生きたいかい？
「私は――私は、まだ」

脳裏に映るのは、かけがえのない、親友。

「私はまだ――――死にたくない」

その思いを、聞き慣れた声に、告げる。

すると声が、小さく笑った。
それは――どこか、心地よい、音だった。

――ならば生きろ、宿主よ。
「生き、る？」
――“人間”に、縋り付くな。
「人……間」

授業の時のように、朗々と声が響き渡る。

――生まれて死んで、再び生まれ死ぬことで、新たな生に繋がっていく。
――それは、人間が人間である限り、逃れることの出来ない輪廻の牢獄。
――でも、それは……“人間”が“人間”であるということの、“証”でもある。
――確定した“死”を拒絶して、定められた“宿命”を覆す。それは……。
――……摂理から外れ、真理を超越し、運命を呑み込むということ。
――人間を、本当の意味で“外れる”ということだ。

――選べ、椿。
――それでも君は……“在りたい”か？

人間であると言うことは、椿がもっとも望んだことだ。
人間でなくなると言うことは、椿が何より恐れたこと“だった”。

それでも、もっと怖いことが出来た。
人間を捨てることよりも、怖いこと。

「私は……“親友”を――――“奈津”を、失いたくない」

影が、大きく頷いた。

――邪霊の王を吸収した、その力。

――我が力を以て……その死を“遮断”しろ。

――己の存在を、確立せよ。

――君は今より、人ではない。

――進化せし、唯一の種族。

――現実と幻想と歪みを統べる者。

――目覚めよ……“神霊王―≪トライロード≫”よ。

「【神絶】」――『【ロードアウト】』

全てを超越し、呑み込む。

その始めて感じる浮遊感の中、椿は最後に、“声”を聞いた。

――頑張れ、椿。

†

頬に伝う雨を拭いながら、陣は椿の方へ顔を向ける。
そして――目を見開いた。

雨の中、悠然と佇むその姿。
その身体に傷はなく、その存在に欠損はない。
唯一無二の“完全”が、そこにいた。

「は、はは……はははははははははははっっっっ！！！！」

陣は、大きく笑った。
興奮から、歓喜から、声を張り上げた。

「超えたか、椿！」

椿はゆっくりと、顔を上げる。
その双眸に映る“憐憫”に、陣はたじろいだ。

「貴方は……可哀相な人だ」
「な、に？」

一歩、踏み出す。

「理解することから逃げて」

一歩、近づく。

「愛することから目を背けた」

その空気に――陣は、押されていた。

「与えられることを待つだけじゃ、得ることは出来ない。押しつけるだけじゃ、与えられることはない。貴方は愛することが怖くて、愛されることに逃げようとした」

そして、陣の目を見据えた。

「哀れな人だ」

陣は顔から笑みを捨て、剣を握る手に力を込める。

そして“初めて”……殺意を込めて、椿を見た。

「やはり君は、もう一度殺した方が、良さそうだ」

そう言って、剣先を向ける。

そして、殺意を込めて斬りかかろうとした陣の身体が――。

「づっ！？」

――ドンッ

――真横に、吹き飛んだ。

蹴りを放った体勢で佇むのは、奈津だった。

奈津は素早く椿の横に立つと、不敵に笑って見せた。

「信じてたけど、遅いんじゃない？」

「奈津ほど、お寝坊さんじゃないよ」

二人で目を合わせて、笑う。
そして、鋭く陣を見た。

「なん、だとっ！？」
「アンタさ……僕たちの“絆”を、嘗め過ぎなんだよ」

奈津はそう言って笑うと、握り拳から親指を立てると、それを地面に向けて下げた。
その仕草に、陣は顔を赤くして憤怒の表情を浮かべた。

「他人を排除して正義を執行する。そんなものは、独りよがりの箱庭だ」
「貴方が本当に欲しかったものは、そんな空虚なものなの？……香宮さん」

陣は、己の心が揺らいでいるのを、自覚していた。
だがそれを、憎悪と憤怒で覆い隠す。

「殺す、殺す、殺す！！」

剣を振りかざして、斬りかかる、
振るう度に放たれる黄金の斬撃は、触れるだけで脅威と言えた。

「【大気を統べる風の主よ・我が身体に宿り・我が身に烈風の加護を与えん】」
「【魔槍・三幻紅蓮】」

貫通特化の魔法は、攻撃力を担う。
その背後で、椿は左手を掲げた。

胸に浮かぶ紋章は、縦に並ぶ三本の槍と、それに生えた翼。
三頭の悪魔と傀儡の魔剣、二つの力の融合だった。

大剣の柄を槍のように伸ばした真紅の魔槍。
超攻撃力のそれは、完全な追尾と誘導で陣を追い詰める。

「あんたは、見ようとしていないだけだ」
「貴方が今まで接してきた人たちは、本当に“悪い人”だったの？」

思い浮かべるのは、両親が死んだ日。
本当に、自分に手を差しのばした人は、財産目当ての人ばかりだったのか？

本当に“悪人”ばかりだったのか？

孤児院でも、学校でも、本当に……そんな人ばかりだったのか？

どんな善人でも、人は心に“悪”を抱える。
正義の精霊ラシュヌを呑み込み、その視線で見た人間達は、確かに“悪”と裁定された。

それは、あくまで、幻想世界“ゾロアスター”の定義では、なかったのか？

正義への“信仰心”が薄れて、力が消える。
その姿に、椿と奈津は安堵の息を零す。

だが――陣は、ここで終わることが出来なかった。
自分を……“悪”と認めることが、できなかった。

めきめきと音を立てて、陣の身体がふくれあがる。
自身の“歪み”が、彼を化け物へと変貌させたのだ。

『殺す、殺す、コロス、コロサナケレバ、ナラナインダァァァアアアッッッ！！！』

大きな二本の羊の角。
黒い肌に、白骨の鎧。
全長三メートルほどの体躯。
金色の天秤の紋章を、胸に刻みつけた姿。

魔霊王“漆黒の裁定者”の姿が、そこにあった。

「椿……時間稼ぎ、頼んでもいい？」
「うん……大丈夫だよ」

その姿に、怯むことはない。
信頼できる仲間がいる。その事実が、彼女たちを、強くする。

『オオオオォォォォォォォォォォォ！！！！』
「通さないよ……【心盾・絶火】」

真紅の壁が、突進を防ぐ。
こちら側と向こう側を遮断する壁を、魔霊王は超えることが出来ずにいた。

左手を掲げる、椿の後ろ。
そこで奈津は、クラウチングスタートの体勢を、作っていた。

精霊と仲良くなる授業の日から、自分の精霊と言葉を交し続けた。

そのうちヒーローについて熱狂するおかしな精霊と意気投合して、
霊秘宝を授かるに至った。

左手で、緑の石を握りしめる。
すると、左手の甲に、風をモチーフにした紋章が浮かび上がる。

「【大気を統べし風の主よ・健やかなる自由の象徴よ・我が右脚に
その力を宿し・我に疾風怒濤の加護を与えん・我が望みに応えて・
その力を解き放て・風精の王】」

椿に目配せをして、壁を張ったままにして貰うように、頼む。
狙いは、金色の天秤。その中央の、精霊石。

超越者の能力を最大限まで引き出して、一気に走る。
大きく飛んで、空中で回転。右脚を伸ばして、左足を畳む。

そして、狙った場所めがけて、一気に加速する。

身体がぶれて、蜃気楼のように消える。
再び現われた先は、魔霊王の後ろ。

『オ、オォ』

魔霊王が胸元を見ると、金色の天秤の中央、精霊石だけが、綺麗に
砕けていた。

どこでも通ることが出来るエアリエルの特性を、最大限まで生かし
た魔法。
全てを貫通して、狙った場所のみを確実に攻撃する、防御を捨てた
最高の一撃。

魔霊王は最後に天を仰ぎ見る。
そこに何を思ったのか――眼を細めて、かつての騎士は塵になった。
その姿を見届けると、奈津は椿に近づいた。
そのまま真横まで歩くと、互いに左手を挙げる。
――パァンッ
そして、勢いよくハイタッチを交した。
「あれ？」
「ととっ」
そこで精も根も尽き果てたのか、二人は地面に倒れる。
極度の疲労で動くことはできないが、不快感はなかった。
「終わったねー」
「うん。なんとかなったね」
互いに横を見ると、逆さまの形で顔が見えた。
そして、二人で大きく笑う。
辛く悲しい、切ない戦いだった。
けれど今は……今だけは。
掴み取ることが出来た未来を思って。
疲労で気を失うまで、笑い続けるのだった。

†

目を覚ました椿と奈津は、騎士団より正式にレベル五……グリーンクラウンが与えられた。
奈津が精霊魔法を使ってとどめを刺した。要約すると、色々抜けてはいるがこんな言い訳をした。

何故か学院長のフォローが入り、それで通ったのだ。

さんざんな二学期を、二人は心底疲れながら、終える事となった。

二学期の終業式も終えて、椿は自分の部屋にいた。
あれから姿を見ない、雅人。サポートユニットといっていた彼は、椿が能力を使いこなしたから、消えたのだろう。
解っていても寂しくて、椿は雅人を思って一筋だけ涙をこぼした。

『――と、綺麗に終われそうもないんだけどね』

「えっ？まーくん！？」

窓辺に降り立つ、黒い子猫。
こんな風に喋る猫は、雅人以外にはいないだろう。

「どうして？」
『どうやら私は、君の中で“ペット”として存在を確立されてしまっているようでね』

雅人はそう言いながら、呆れたように肩を竦める、
猫の身体なのに、実に器用だ。

『その認識が消えない限り、お役ご免という訳には、いきそうもないみたいだ』

雅人はそう言うと、椿の目の前まで歩いてきた。

『だから、その、なんだ……これからもよろしく、と言う訳だ――椿』

椿は雅人の身体を持ち上げると、抱き締める。
そして、大きく頷いた。

「うん！……これからも、よろしくね。雅人さん」

再会と、契約。
雲一つ無い晴天の下……確かな絆が、結ばれるのだった――。

第二十一話　正義の騎士　（後編）　―第二章・完―（後書き）

過去最高の長さとなってしまいました。
お疲れ様でした。

今回で第二章は終了し、次は冬休み編に入ります。
それを終えると、三学期・終章に入ります。
七月中に、終章を終えて完結、と計画しています。

このお話を書くのにかなり腕を酷使してしまったので、ある程度疲れがとれるまでは、少しお休みします。それでも、二日以上遅れることはないと思います。

それでは、ここまでお読みいただき、ありがとうございました。
次回も、よろしくお願いします。

第二十二話　雪原冬合宿！

空には満天の太陽が、爛々と輝いている。
だというのに、暖かさを感じることがないのは、十二月下旬の真冬だからだろう。

楼城館女学院も、他校同様に冬休みに入り、椿たちにも時間が出来た。

そこでやってきたのが、レイアの持つ“別荘”である。
更に言えば、今回はただの“旅行”ではなかった。

白銀に染まる山々。
秘境とも言える、山奥の私有地。
その場所にある、大きなログハウスの前で、椿は大きく伸びをした。

「はぁーっ……寒い」

吐く息は白く、身体の節々は凍てつくように軋む。
椿の後ろでは、スキー板を引っ張り出してきた神楽が、使い方が解らず戸惑っていて、そんな神楽にレイアが教えていた。

その脇では、既に滑り出す準備の整ったラミネージュと、ボードを出してきた奈津がいた。
椿を含めて、スキーウェアをしっかりと着ているのだが、それでも寒いものは寒かった。

今回は、旅行ではない。

英雄考察研究会――ヒーロー研の“合宿”である。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

二学期も終了して、椿たちは冬休みの初日に部室に集まっていた。
奈津の提案で、合宿について決めるためだった。

冬休み前に決めておくべき事なのだろう。
だが、色々と事後処理などで忙しく、結局今日まで持ち越されてしまったのだ。

「やっぱり、冬は雪山だよねー」

「うん」

ラミネージュは、暑いのは苦手だが、寒い分には好きだった。
だから、素直に頷いてみせる。

椿にとっても、異論がある訳ではない。
寒いのは苦手だが、椿は雪が好きだった。
雪を踏みならす感覚が、特に好きなのだ。

「なら、私の別荘でやりましょうか？その方が、申請をするにしても楽ですわ」

レイアの提案に、頷く。
神楽も、初顧問の初合宿ということもあり、胸を高鳴らせているようだ。

「……そうと決まれば、次は……」

場所が決まると、次は日程や用意するものなどを聞いていく。
ここまでくると、奈津はぐいぐいとみんなを引っ張って、決めていった。

そして最後に神楽に許可を貰って、申請を頼んだのだった。

「いやーしかし、合宿かぁ」
「移動は私の“バス”を使いますわよ。椿も、それなら二度目で安心でしょう」
「安心……かなぁ？」

温泉の時と合わせて考えれば、レイアの“バス”……リムジンを使

用するのは、確かに二度目だ。しかし、一度乗って慣れる程、安い車ではない。

前回のようにはしゃいでしまうのは自重できるだろう。
しかし、やはりどうしても緊張してしまう。
そんなことを思って呻る椿を見て、奈津も苦笑していた。

慣れないのだろうと予想はついているが、リムジンで移動するのは楽なのだ。
雪山に相応しい車かどうかは、別にして。

「アレク～まーくん～」

温かい火蜥蜴と、温かい黒猫。
その二匹を、椿は抱き締める。

肌寒い季節だからこそ、こうやって二匹を抱き締めることが、心地よかった。

椿から“まーくん”の正体を聞いていた奈津は、抱き締められてもがく雅人を見て、ため息をついた。それは“男性”だと言いたいが、どうもペットか、可愛い兄弟程度にしか考えていない節があった。

アレクは、椿によく懐いている。
椿が神霊者であるという要素ももちろん大きい。
だが、こうまで懐いているのは、椿からの“親愛”を感じ取っているからだった。

雅人は、椿の腕の中で項垂れていた。
初めのうちは暴れていたのだが、疲れて諦めたのだろう。

心なしか、煤けて見える。

「エアも出る？」

奈津が精霊石に語りかけると、淡く光って了承の合図が返る。
緑と風を纏う妖精を指に乗せながら、奈津は眼前の光景に、楽しそうに笑うのだった。

†

日程が決まって、椿たちは別荘にやってきた。
自給自足を楽しむために、大きなログハウスに使用人は居ない。

リムジンは相変わらず緊張して、奈津に“借りてきた猫みたいだね”と、椿は揶揄されていた。実際そのとおりで、椿は身体を固まらせていた記憶しかなかった。

ログハウスに荷物を置くと、早速スキーウェアに着替えた。

椿が、赤に白のライン。
ラミネージュが、白に灰色のライン。
レイアが、青に銀のライン。
奈津が、緑に黒のライン。
神楽が、銀に青のライン。

それぞれ、好きな色のウェアに着替えていた。

「椿はボードとスキー、どっちにする？」
「うーん……ボード、かな？」

ちなみに、椿は初心者だ。
どうせどちらも出来ないのなら、好きな方を覚えたい。

「僕もボードだから、教えるよ」
「うん、ありがとう。お願いね」

ボードを用意していると、ラミネージュは既にいつでも滑り出せるようなフォームをとっていた。

「私は、神楽先生に指導してから滑り出しますわ」
「それじゃ、僕は向こうで椿に教えてくるよ」
「滑る」

それぞれ、練習と指導と滑りに別れる。
ラミネージュを見れば、すでにリフトに乗っていた。

「うわ、あれ一番上だよ」

どうも、上級者コースで思い切り滑るようだ。
比較的なだらかで、広い場所を使う。
そこで、奈津が椿に手ほどきをしていく。

「滑りたい方向の、前の足を固定するんだ。で、後ろ足ですぅーと滑る」
「こ、こうかな？」

奈津が実践して見せてくれるので、椿もそれに倣う。

「とっ、と？」
「前足が、身体より先に出ちゃってるから、こう自然な感じで」

教わって、倣っていく。
雅人は暇なのか、肩で欠伸をしていた。

「遠峰先生はできないの？」
『この身体で、かい？』

周囲に誰もいないので、奈津はどうどうと雅人に話しかける。
雅人はそんな奈津に、ため息を吐きながら答えた。

「人間だったときは？」
『一応、私はなんでもできるよ』
「うわ、嫌みだ」

友達同士のような会話である。
そのやりとりに、椿は苦笑する。
奈津は入学当初から比べて、本当に動じなくなった。

「よいしょっと」
「おお？そうそう、良い感じ」

ゆっくりだが、奈津と並走していく。

「止まるときは、後ろ足を前へ動かしながら、こう」
「こう？」
「うんうん、そんな感じ」

滑り方、止まり方、転んだときの起き上がり方。
曲がり方や姿勢について学ぶと、あとは兎に角実践あるのみ。

「ちょっと上の方へ行ってみようか」
「うん」

リフトに乗って、上へ行く。
といっても、まだまだ初心者コースだ。

ベンチに乗って空を進む感覚にどぎまぎしていると、上の方から何かが滑ってくるのを確認した。言うまでもなく、ラミネージュだ。

「風に、なる」

一言呟いて、下っていく。
その白銀の閃光に、椿は目を丸くしていた。

「はりきるなぁ」
「うん。楽しみにしてたんだね」

それきり、感想は出てこなかった。

†

滑りきった後は、ログハウスに戻る。
昼食を済ませると、部活動だ。

「最古のヒーローって、誰だろう？」
「伝説のレベル十一ではありませんこと？」

奈津が言った一言に、レイアが切り返す。
幻想世界の住人を考えなければ、確かにレベル十一の英雄が、人間の歴史、魔法使いの歴史でもっとも古い英雄といえるだろう。

邪霊が出現してからの歴史ならば、確実にこの“英雄”が、最古だった。

それまでの間、歴史に存在する革命の英雄などは、人間であったか

確証がない。
それはいずれも、英雄とされていた存在を、幻想世界から召喚した者が、これまでで何人か確認されていると言うことに理由があった。

すなわち、彼らは“幻想世界の住人”なのではないのか？
その疑問は未だ解明されておらず、それ故に最古の英雄が近代の者とされているのだ。

精霊単体では、邪霊を倒すことは出来ない。
効力があるのは、あくまで“魔法”の力なのだから。
亜霊石や稀霊石は、別と言えるのだが。

「逆に、一番新しい英雄は？」
「カイン・アッシュ・ミリゴート？」

奈津の問いかけに、今度はラミネージュが答える。
最年少の元帥。かれは確かに、現代の英雄だった。

「その辺りはどうなんですか？先生」
「もっとも新しい英雄ですか……エミリア氏、でしょうか？」

その名に首をかしげた椿に答えたのは、レイアだった。

「あー……エミリア・リレイン・エルストル。私の、お母様ですわ」
「え？お母さん？」

驚く椿に対して、神楽が説明をする。

「最高位の巨大邪霊が出現するという事件を、知っていますか？」
「えーと……確か、三年前の事件ですよね？太平洋に巨大な石像型

の邪霊が出現したっていう」

石像型と銘打たれたが、ようはゴーレムだ。
それも、海面ぎりぎりを浮上する。

意志が希薄なため、王ではなく邪霊とされた。
だが、その身に内包する力は、王と呼んでも差し支えなかった。

「圧倒的な防御力を誇るその邪霊を、エミリア氏は己の“天恵”を用いて倒したのですよ」

攻撃が通じず、為す術が無くなった時に現われたのが、エルストル家現当主の、エミリアだった。

「お母様の能力は“悠久永遠―≪インフィニット≫”……魔力の永久機関ですわ」

「エミリア氏は、練り上げられた魔力を用いた強力な水の槍を無限に作り、島程ある巨大な邪霊を消滅するまで削り殺すという、信じられない力業で打ち倒したんです」

「えー……」

信じていない訳ではないが、言いたくなる。
力業でどうにかなるものではない。

「その日は久々の家族旅行で、お母様、楽しみにしておられたの。それで、そのような時に起こったこの事件に腹を立てて、元凶を輝かしい笑顔で消滅させに行ったのですの」

息を吐いて、憔悴した表情を見せるレイア。
怖かったらしい。何せ彼女は、そのころは中学一年生なのだから。

「あの頃は、お母様はよく仕事に出ていましたわ。さっさと引退して楽隠居と言っていたのに、お父様に涙ながらに止められて、まだ現役ですわ」

レイアの母、エミリアは、とにかく家族が好きな人間だった。
それ故に、家の権力のせいでレイアに友達が出来ないことを悩んでいたことも、レイアは知っていた。

気恥ずかしかったが、エミリアに報告したときは、大変だった。
乗り込んでこようとするのを父が止めて、応龍祭の時も虹睨祭の時も、大事な仕事をゴミ箱に放り込んでまで来そうになって、父に泣きながら叱られた。

そうエミリアに愚痴られたことを思い出して、レイアはどこか嬉しそうに、苦笑した。

友達が出来た。
これでやっと、母を安心させられる。

そう思っていても、口に出すことは出来ない。
恥ずかしいのだ。

だが、そんな表情の変化を、椿は読み取っていた。

「素敵なお母さんだね」

だから、そう言って微笑む椿の姿に、レイアは嬉しくなって、微笑み返した。

「ええ……自慢の母ですわ」

笑い合う。

そこへ、奈津とラミネージュがごくごく自然に割り込んだ。

「そろそろ二人の世界から、帰ってきて欲しいなぁ～」

「まったく」

ジト目で二人を見る奈津とラミネージュ。

その様子に耐えられなくなったのか、神楽が笑い出す。

それを切っ掛けに、結局五人で大きく笑い合うのだった。

†

夕飯は、カレーライスだ。

こんな素敵なログハウスに来たのだから、定番のカレーライスも食べておくべきだろう。

奈津がそう熱弁して、椿もそれに頷く。
そうしている内に、レイア達はいつの間にか乗せられていたのだ。

材料を切り分けて、大鍋に投入する。
釜でご飯を炊いて、ルーを用意する。
チープな味の方が良いと言って、あえて市販のものを用意したのだ。

「隠し味に醤油は？」
「チョコレートとか入れると、甘味が出るよ」
「すり下ろし林檎でも作ってきますわ」
「蜂蜜なんかもいいですね」
「ソース」

とにかく、色々やってみる。
どんなことになっても食べきろうと覚悟していたが、できあがったカレーは濃厚でおいしいものだった。

旨味の出ている、いいカレーだ。

「うーん、この一口が、たまらないねっ！」
「大げさですわ……とも、言い切れませんわね」

みんなで作って、みんなで囲んで、みんなで食べる。
そのことが、チープなカレーライスをより美味しく調理していた。

友達と食べるご飯は、美味しいのだ。

やがて食べ終わると、横一列に並んで食器を片付ける。
五人で出来るスペースなんか普通はないのだが、ここは別だった。

かけているお金が違うのだ。

「デザート」

「用意してたっけ？」

呟いたラミネージュに、奈津が訊ねる。

ラミネージュは、ガラスのお椀とシロップを取り出して、外を指さした。

「なるほど……付き合うよ」

「おやめなさいな。あまり綺麗ではありません事よ」

「おなか壊したら、治癒魔法お願い！」

止めるレイアを振り切って、天然かき氷のために外へ飛び出る。

そんな奈津とラミネージュを見てため息を吐く。

「風邪を引いても知りませんわよ、ねぇ？椿、神楽……先生？」

レイアが二人の方へ顔を向ける。

そこには、グラスとシロップを用意する椿と神楽の姿があった。

「二人とも？」

無言で目を逸らす二人に、レイアは大きくため息を吐いた。

そして、自分もグラスとシロップを用意した。

「こうなったら、自棄ですわ……行きますわよ！」

「うん！」

「はい！」

元気に返事をする友達と、教師。
それでいいのだろうか、この童顔教師は。

外に駆けだして、雪を相手にかき氷をほおばる。
その様子を、一番最初に外に出ていたラミネージュが、こっそりと撮影していた。

そして、カメラをしまうと、おもむろに雪玉を生産し始める。
かき氷に満足していた奈津がそれに気がついて、一緒に作り始める。
木陰だから、ばれずに作れると踏んだのだ。

「甘いですわ」
「え？」

だが、気がついていたレイアが、前蹴りで木に衝撃を与えた。
下品には見えないのだが、複数の意味で女王様に見える。

――どさっ

木に積もっていた雪が落ちてきて、埋もれる。
辛うじて顔を出すと、椿と神楽が雪だるまを作っている様子が見て取れた。

「私は、向こうに参加してきますわね」
「え？ちょっ、助け……」
「待って」

縋り付くような二人の視線を華麗に受け流すと、レイアは椿と神楽の輪に加わる。
呆然と固まる奈津とラミネージュの様子に、椿の肩にいた雅人が鼻

で笑った。

「奈津……」

「……うん」

ラミネージュは雅人の様子に気がつかなかったが、レイアの視線だけで十分だった。

魔力で軽く電気を起こして雪を溶かす。そして、始めに抜けた奈津がラミネージュを引っ張り上げた。

「一番大きいの作るよ！ラミ！」

「うん」

ラミネージュと奈津も加わり、とことん笑い合う。

肉体強化まで用いた雪だるま作りは、普通の人ではつくることのできない、巨大なサイズとなっていた。

だが、バランスが悪かったのか、倒れてきて運悪く神楽が下敷きになった。

結局、四人は協力して、目を回す神楽を引っ張り出した。

そして、五人揃って、安堵の息を吐く。

それがおかしくて、結局顔を見合わせて、笑いあった。

合宿一日目は、なんとも平穏で温かい、終わりとなった――――。

第二十二話　雪原冬合宿！（後書き）

今回から数話、冬休み編に入ります。

次回が予想以上に長くなり、場合によっては前中後の三編使ってしまうかも知れません。

現在、なるべく前後編に纏められないか、調整中です。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

次回も、よろしくお願いします。

第二十三話　雪月焔歌　（前編）

雪山にいるのなら、遭遇することがある天候がある。

ゆったりと降る分には、ロマン諸々の感情事情で心が躍る、雪。
あまり降らない地方にいるのなら、多少寒がりでも体感したいと思う。
そんな人は、少なくはないだろう。

ただし、前述でも述べたとおり、それは“ゆったりと降る”場合のみといえた。

温度が高いと、感覚は“温かい”から“痛い”にシフトする。
それは、温度が低い場合も同様だ。

低すぎる温度は、感覚を“寒い”から“痛い”にシフトさせる。
それでいてやはり“寒い”のだ。

肌に叩きつけられる、雪。
スキーウェアよりも防寒性能に優れている戦鎧を纏ってなおそう感じさせるというところに、応龍杯の天候操作は、実はあまり温度が低くなかったのだと実感させられる。

歯がカチカチと鳴り、むき出しの頬が痛みを感じさせる。

「さささささ、さむ、さむ、い」

吐く息は、白くない。
吐く息がどうなっているのかわからないほど、視界が悪いのだ。

椿は、思う。
自分たちが旅行へ行くと、必ず何かに巻き込まれる。
そんなジンクスでもあるのだろうか？と。

英雄考察研究会冬期合宿二日目。
舞い込んだ“厄介ごと”の調査のために……。

……猛吹雪の中、活動中となっていた。

「ひっくちんっ」

情けないくしゃみが、ごうごうと鳴る吹雪の音に、かき消えた。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

合宿二日目。
それは、朝食を食べてすぐのことだった。
備え付けの電話が鳴り響き、レイアが取りに行く。
その待ち時間の間、奈津が小さく呟いた。

「嫌な予感がする」
「同感」

続く、ラミネージュ。
その言葉に、椿は顔を引きつらせた。
ただ一人、神楽だけは、なんのことだか解らず首をかしげていた。

「寒いねー、アレク」

椿は、顕現させているアレクに指を出して、遊ぶ。
現実逃避ともいう。

やがて、レイアが帰ってくる。
一目でイライラしているとわかる表情だった。
彼女は、母親同様“団欒”を潰されることに、怒りを持つタイプの人間だった。

「聞きたくない、聞きたくないけど……どうしたの？」
「私とて言いたくありませんわ。言いますけど」

奈津のフリに、レイアは前置きしつつ答えた。
この時点で、ため息が重い。

「ここら一帯はエルストルの私有地なのですが、そこに頭の悪い方々が侵入する事がありますの。亜霊石や稀霊石があると踏んでやってくるどうしようもないタイプの」

そう言いながら、席に座る。
その間に、ラミネージュがレイアの前に温かいお茶の入った湯飲みを置いた。

「二人でのこのこやってきて、氷漬けで発見されましたの。救出が早かったおかげで命に別状はありませんでしたが、厄介な証言をしてくれましたわ。……彼らは、ぎりぎりまで搾り取った方が良さそうですわね」

搾り取るのは、金ではない。
精神力や生きる希望ややる気や悪気……とにかく、生まれ変わって真人間に変身させるくらい搾り取る気であった。彼らの就職先は福祉系ＮＧＯだろう。

「聞きたくない、聞きたくないけど……証言って？」
「はぁ――――ずばり、“邪霊に襲われた”ですわ」

奈津は、額に手を当てて天を仰いだ。
大げさである。だが、こうしないと気持ちが沈む。

「まともに戦える人材は、ここ周辺で私たちのみ。当然、私たちにお鉢が回ってきましたわ」

冬休みに、地元の人が雪山にいるはずもなく。
更に言えば、レベル七の神楽がいて、レベル五が二人にレベル三が二人いる。
これで依頼が舞い込まないということの方が、不思議である。

「どうしますの？」

念のため、そう言った様子で、レイアが訊ねる。
すると、椿たちは顔を合わせて、笑った。

「断る訳にはいかないよね」
「そうそう、なんていったって僕たちは」
「英雄考察研究会」
「ヒーロー研の部員、ですからね」

神楽は部員ではなく顧問だが、細かいことは気にしない。
幸いにも、違和感のない風貌である。

「よし！二日目のプログラムは、邪霊退治！それで決まりで、いいね？」
『おーっ！』

手を振り上げて、奈津に呼応する。
レイアは楽しそうに笑いながら……口に含んだお茶を噴き出すのだった。

それは、ラミネージュのお手製である。

†

椿は、この気温でも変わらず暖かいアレクを、抱き締めていた。
雅人は、椿の戦鎧の胸元に収まっている。寒くて、奈津の冷たい視線を気にしている余裕がなかったのだ。

「ど、どこへ行けばいいの？レイア」
「椿、寒がりすぎですわ。ここからひたすらまっすぐ歩けば、目的の場所ですわ」
「ひ、ひたすら？」
「ひたすら、ですわ」

口調は至って平坦だが、逆に言えば平坦すぎる。
寒さのあまり、震えていたが、虚勢で胸を張っていた。

「いやー、この戦鎧防寒性能高いんだなぁ」
「丁度良い」

逆に、本当になんともないのが、奈津とラミネージュだ。
奈津は、全身を覆う軽装型の装霊器だけあって、保護部分が多くて

厚い。
ラミネージュは、もともと寒い方が好きなので、肩口からガントレット、股下から膝のグリーブまではむき出しの戦鎧だが寒そうではなかった。

むしろ、手足は重装なので、そういった意味では暖かそうだ。

神楽の戦鎧は、チャイナ服だ。
スリットの入ったものではなく、黒の人民服で、長ズボンのタイプだ。

装霊器は、シールドだった。
両腕に装着する二つのシールドで、拳の先の方に台形の鉄板が、嘴のような形でナックルガードになっていて、肘側にはブーストのようなパーツがついている。特殊装着型装霊器だった。

「せせせ、先生は、さ、さむさむくないんです、か？」
「あははは……我慢強いんです」

そういう問題ではない気がしたが、それ以上突っ込む気力はなかった。
それよりも、さっさと進んでさっさと終わらせて、暖かいお風呂に入りたかった。

「とにかく、歩きますわよ。歩けば身体も暖まりますわ」
「ううん、うん。そ、そうだよね」

震えながらも、進んでいく。
視界が悪いので、はぐれないように注意しながら歩く必要があるので、固まる。

「先が見えないと、憂鬱」
「そうですわね。……って、貴女は寒くないのでしょう？」
「うん」

では何が憂鬱なんだ、と愚痴をこぼしながらも、とにかく進む。
当然ながら身体は暖まらないが、それでも止まっているよりはマシだった。気分的に。

「眠くなってきた……」
「寝ちゃだめだよ？！椿っ！」

虚ろな目をし始めた椿を、奈津がゆする。
どうでもいいが、奈津の戦鎧が冷たいのが、椿は辛かった。寒い。

――……
「あれ？なにか、音が……」

風切り音に似た音。
それを聞き取って、奈津が首をかしげた。

「なんだろう？」

椿も気がついて、訝しげに周囲を見る。
右を見て、左を見て、視界が悪いため何も解らないことに落ち込んだ。

「うぅ、警戒のしようがないよ」

それで足を止めても、意味はないだろう。

そう判断して、それでも進んでいく。

「あれ？」

椿が、斜め上を見てそう呟いた。
奈津たちもその視線を辿って、首をかしげる。

「こんなところに、コウモリ？」

コウモリが、一匹だけ飛んでいた。
左右にふわふわと飛んで、旋回して、逃げていく。
視界が悪いため、不審に思っても追いかけることは出来ない。

「何だっただろう？」
「さぁ？」

椿が疑問符を浮かべながら小首をかしげると、奈津も同じ動作で首をかしげた。
今は気にしないで、進む。そう判断したが、進行は妨げられる。

――ゴウッ！！

そう……突風によって。
激しい風が、冷たい雪と一緒に椿たちに叩きつけられる。
椿は目を瞑りながら、倒れないように必死に耐えた。

「くぅっ！」

意図的としか思えない程の、風。

先ほどの風切り音は、この風が“近づいてくる”音だったのだ。

「はぁっ」

やがて、風が止む。

椿は息を吐いて、僅かな警戒と共に顔を上げた。

「みんな、だいじょう……っえ？」

周囲を見る。

だが、そこには、仲間は誰もいなかった。

「そん、な」

『落ち着いて、椿』

呆然と呟く椿に、雅人が言葉を投げかける。

胸元に収まっているのにそんなことを言うので、威厳も何もない。

その可愛らしい姿を目に納めることで、椿は何とか平静を取り戻した。

『君ってやつは……』

そんな椿の様子を、雅人は胡乱げに見ていた。

彼としては、男性として等と言うつもりはないが、せめて“ペット”ではなく“使い魔”として見て欲しかった。

「それで、いったい何が？」

『はぁ……邪霊の能力、だろうね。遭難させて、戦力を分散させたんだろうさ』

「それなら」

『うん。とりあえず進めば、いずれ進んでくる奈津たちと合流できると思うよ』

奈津たちも、邪霊を目指して進むはずだ。
なら自分も、邪霊の元まで進めば、辿り着くことが出来る。

遭遇しないということは、考える必要がない。
直接倒して餌にするつもりで、分散させたのだろうから。

「行こう、雅人さん、アレク」
『了解だよ、椿』

アレクは鳴きこそしないが、椿の言葉を正確に理解して、頷いた。

†

「……ア」

自分を呼ぶ声。
答えることが出来ずに、まどろみに落ちる。

「…イア」

声に抑揚はなく、感情が込められているようには思えなかった。
起こす気がないのなら、寝かせておいてくれればいいのに。そんな風に、思っていた。

「レイア」
「なん、ですの？」

漸く答えることが出来た。
その声が、少し安心したように聞こえて、心配していたような声だっただろうかと、疑問に思った。

「起きて」
「お、き？」

自分は寝ていたのだろうかと、レイアは働かない頭で考えて……思い至った。

「凍死、する？」
「しませんわよっ？！」

勢いよく飛び起きる。
寝そべるレイアの隣では、座り込んだラミネージュが安堵の息を吐いていた。
心配をかけてしまったことに胸が痛み、それ以上に“オールアクセン”にこんな感情を抱いた自分の心に、苦笑した。

「迷惑をかけましたわ」
「迷惑はかかってない。心配なら、した」
「……心配を、かけましたわ」
「うん」

素直でよろしい。
そう言いたげなラミネージュの様子は、腹立たしいものではない。
そこに宿るのは、温かい、感情だった。

「さて、ここはどこでしょうか？」
「洞窟」
「洞窟？」

ラミネージュの答えに、首をかしげた。
こんなところに洞窟なんてあったのだろうかと、疑問に思う。

「土の魔法で、作った」
「あぁ、なるほど」

ラミネージュが魔法で土を盛り上げて、そこに空洞を作った人工洞窟。
それならば理解できると、レイアは頷いた。

「モデルは、地下の鍾乳洞」
「あるんですのっ？！」

だが、続く言葉に驚く。
私有地だというのに、まだまだ知らない場所があったのだ。

ラミネージュは、そこにある鉱物や生物の有無はわからないが、地形や空洞の有無はわかる。鍾乳洞がある、ということだけ、地形から感じ取っていたのだ。

「他の皆さんのことは――」
「――わからない。でも」

レイアは「そう」と瞑目する。
そして、確かな自信の笑みを浮かべて、目を開けた。

「邪霊を目指していたのなら、こちらも目指せばいい……ですわね？」
「うん」

それを聞くことが出来た。
確認し合えたということは、ラミネージュも同じ考えに辿り着いたということ。
それならば、それでいい。前に、進むことが出来る。

「それでは、行きますわよ」
「うん」

抑揚無く頷くラミネージュの隣りを歩く。
友達として、ラミネージュがいることに安心をしている自分に、レイアは今日の内で何度目か解らない苦笑を零した。

考えてみれば、不思議である。

エルストルとオールアクセンは、何かと張り合ってきた家だ。
エルストルが騎士になれば、オールアクセンも騎士になる。

団長の座を争って、始めに負けるのはエルストル。その後、別の場所でも似た様な役職について、今度はオールアクセンが負ける。

終始張り合って、いがみ合う。
切っ掛けなんて誰も解らない。
張り合う気は無くても、縁があるのか遭遇する。

ラミネージュの母親と、レイアの母親は、未だに仲が悪い。

レイアも始めは、ラミネージュに噛みついた。
ラミネージュもそれに返すように噛みついて、険悪な空気になった。

レイアはその時、ずっとこんな関係が続くのだと、半ば確信していた。
それは、ラミネージュも同様に感じていたことだった。

それが、たった一人。
たった一人の少女が、二人の前に一歩出た。
それだけで——世界が、変わった。

不可能だと思ったことが、可能になった。
どんなに頑張っても、“運命”なら仕方がない。
どんなに頑張っても、“宿命”なら仕方がない。
そんな、逃げ腰で、弱気な考え。

そんな考えは自分“らしく”ない。

強気で挑めば、案外何とかなる。
だったら、心の内で“欠点”だと思っていた虚勢を張る癖も、“長所”に変えることができる。

だったら――“自分”を見失わずに、ただ前を向くことを忘れなければいい。

少女――椿は、レイアにそう思わせてくれたのだ。
そして、そう考えて、あらためて接した“オールアクセン”は、お茶目で友達思いな、どこにでもいる女の子だった。

人を見るのに、“家”というフィルターを通す。
それを何より嫌っていたのは、他ならぬレイアだった、はずなのに。

「どうしたの？」
「なんでも、ありませんわ」

和やかな笑みを浮かべるレイアの意図は、解らない。
だが、ラミネージュは……“信頼”できる友達に、ただついていく。

人工洞窟を出て、吹雪の中を歩く。
さくさくと雪を踏みならす音も、邪霊に警戒しなければならない状況下では、不快だった。

そうして歩いていると、空気が重くなるような独特な感覚に襲われる。

「どこから来るか解りませんわ。警戒していた方が良いですわね」
「【我が腕は矛・我が足は槌・汝は我の・堅き鎧也】」

ラミネージュは、返事の代わりに詠唱した。
肉体強化の基本魔法だ。

「さて、どこからでも来なさいな」
「あれ」

呟いたレイアの横で、ラミネージュが正面を指し示す。
その先には、邪霊が立っていた。

「堂々としすぎてません事？」
「警戒は、緩めない方が良い」

ラミネージュに言われて、気を持ち直す。
突飛なものをみると一瞬脱力してしまうのは、彼女の悪い癖だった。

邪霊は、不思議な形をしていた。
青い肌と、三本の角を持った大柄の鬼。
足は短く、鋭い牙を持った大きな口がある。
目は一つ目だ。瞳孔が白い、気味の悪い目だった。

だが、なにより気にしなくてはならないのは、その両腕だろう。
まるで、抉られているように、両腕は存在していない。

両腕があるべき場所は、鈍色の鉄板のようなもので覆われていた。

出方を待っているだけでは、打ち破ることは出来ない。
レイアはラミネージュと目を合わせると、頷いた。

「【起源より来たりて・誕生を司る水よ・我に応えて・我が敵を叩け・水蛇の鞭】」
「【暗雲より来たりて・破壊を為す雷よ・我に応えて・我が敵を討ち滅ぼせ・稲妻の槍】」

まずは、基本の属性魔法。
属性さえ同じなら誰でも使えるこの魔法は、発動が早く威力調整が簡単なので、凡庸性が高かった。

水が伸びて、鞭のように撓る。
そして、高速で発射された稲妻の閃光を守るように、巻き付いた。

そのまま、魔法は一直線に鬼へ飛んでいく。
その魔法を、鬼は軽く横に飛ぶだけで、避けてしまう。

「動きは鈍くはない、ようですわね」
「短足なのに」

さりげなく失礼なことを言っているが、相手は邪霊なので気にしない。

「まずは接近戦で、畳みかけますわ！」
「うん」

レイアの魔法は、広範囲のものが多い。
それは俊敏な邪霊相手にも通用するものだが、負担が大きいので簡単には使えなかった。

「【起源より来たりて・誕生を司る水よ・我に応えて・我に剣を与えよ・清流の剣】」

クルタナ型装霊器を、水が包み込む。
刃となった水の切っ先を、邪霊に向けた。
ラミネージュは、肉体強化を施しただけだが、巨大な筒の形をした装霊器は、重量による威力がある。肉体強化だけで十分だった。

一気に、走り出す。
戦闘に入ってしまえば、寒さなど関係ない。
みなぎる闘志が、熱を持って身体を動かす。

「せいや！」
「ふっ！」

かけ声で気を引き締め、小さく息を吐くことで、威力を上げる。
力押しにも種類がある。これは、呼吸法などを用いた“技術を持った力押し”だった。

あと一歩で、邪霊を切り裂くことが出来る。
それで終わり。だというのに、邪霊は動くそぶりを見せない。
だからレイアは、警戒心を引き上げる。

そして、わざと剣を空振りさせて、遠心力による勢いを利用して後ろを向く。
こういう場合、一番危ないのは背後だからだ。

「【豊穣を司りし・大いなる水の神よ・エルストルの契約に基づき・我らを害する悪意から・その大いなる抱擁を以て・大滝の守護を与えん】」

多少魔力を使っても、命には代えられない。
保険に現実味を持たせる程の、邪霊の様子が気にかかって、レイアは振り向くと同時に大きな水の壁を生み出した。

――ドンッ！
「ビンゴですわっ！」

空に浮く、巨大な青い腕。
雪の下に潜んでいたのだろう。見れば、ラミネージュの筒もその腕に止められていた。
邪霊の目的はシンプルだ、おそらくこうして、装霊器を掴み取ることなのだろう。

レイアは魔法を維持したまま、装霊器でラミネージュの装霊器を掴む腕を切りつけた。
怯んだその一瞬の隙にラミネージュは後退し、レイアもそれに追従する。

そこで休んでいる、暇はない。

「【大地に宿りし・小さき民よ・汝が身体を以て・彼の者を貫き穿て】」

土の中より放たれた岩の槍が、積もった雪を越えて邪霊に襲いかかる。
レイアとラミネージュを追いかけてきた二本がここにある以上、この攻撃には追いつかない。

だが、チェックメイトというのには、早かった。
上空に待機していたのだろう。空から二本の腕が降りてきて、邪霊の本体を守る。
その手のひらには、大きな目が二つついていた。

「あの目で上空から、私たちを監視していたということですわね」
「うん」

ラミネージュが、こくりと頷いた。
その間にも、攻撃のための二本は二人を襲う。
それを避けながら、次の手を考える。

「レイア、あの目」

ラミネージュの言葉に、腕についた目を見る。
腕は上下に動きながら、視界を調整しているようだった。

「あの目が情報の窓口で、本体が司令塔といったところかしら」
「たぶん、そう」

それならば、まずは目を潰すべきだ。
だが、二本の腕の猛攻から避けるので精一杯で、このままではそこまで辿り着くことが出来なかった。

「レイア」
「っ……危ないですわね！……なんですの」
「潜る」

身体からすれすれの空間を掴んだ腕に悪態をつきながら、レイアは問い返した。
そんなレイアに一言そう告げると、詠唱する。

「【大地に宿りし・小さき民よ・汝が身体を以て・我が身を隠せ】」

ラミネージュがそう唱えると、レイアとラミネージュは土の中へ沈んだ。
その不思議と息が出来て周囲が見回せる空間に、レイアは目を瞠る。

まるで、水中から水面を見上げているようだった。

ラミネージュは、レイアに目配せすると、レイアが頷いたのを確認した。

地中を泳ぐように移動して、レイアが周囲を伺う邪霊の“正面”に飛び出る。

そして、素早く突きを繰り出して、二つの目をついた。

本体の目は傷つけることが出来なかったが、問題はない。

本体の目は、指令の送受信装置でしかなかった。

対象が見えなくなって、邪霊は四本の腕を激しく動かした。

その遙か後方には、地中を泳いできたラミネージュが、飛び出したところだった。

ラミネージュは、装霊器の筒をパージさせると、長剣をむき出しにして、構えた。

「【雷霆纏いし・稲妻の神よ・戦車を駆りし・苛烈なる英雄よ・力の象徴たる・金剛杵を用いて・世を乱す悪を討て】」

雷の、巨大な槍に似た閃光。

それはまっすぐと走り抜けて、邪霊を襲う。

無防備になった背中を狙った一撃は――三本目と四本目の場所なのだろう、背中の鉄板に阻まれた。

その頃には、腕の目が再生していて、レイアを襲う。

「くっあぁっ！！」

当てが外れたレイアに、その巨大な拳が当たる。
全力で後ろに飛ぶという対処法が幸いして、威力は最小限に抑えられる。

だが、最小限の威力だというのに、レイアは自分の左腕が、動かないことを自覚していた。

はじき飛ばされた雪の上で、レイアは勢いよく立ち上がる。
いつまでも寝ていたら、邪霊の餌食だ。

ラミネージュとの位置は離れすぎている。
遙か後ろと遙か前。両極端の位置だった。

ラミネージュは、その状況に、決意の感情を抱く。

追撃はこない。
向こうの腕の射程外に居るからなのだろう。
だが、攻撃手段がない以上は、条件は同じだった。

邪霊は、自分から動き出すことは出来ない。
どちらかに、隙を見せることになるからだ。

レイアはそんな邪霊に苦笑すると、決意の表情を浮かべた。

始めに動いたのは、ラミネージュだった。
ラミネージュは、戦鎧の一部として登録してあったのか、腰の部分から銀色の十五センチほどの筒を取り出した。どう見ても、水筒だ。

地面の雪を水筒に素早く詰め込むと、電気の熱を用いて溶かし、水

にする。
そして、その水筒を、目の前にかざした。

「【雷霆纏いし・黄金の神よ・勇気を讃えし・猛威たる軍神よ・勇気の証したる・力の神酒を・我が為に貸し与えよ】」

オールアクセンの家に伝わる精霊、インドラ。
その力を用いて、ただの水を神酒“ソーマ”に作り替える。

ラミネージュは、それをためらうことなく飲み干した。
すると、ばちばちと音を立てて、ラミネージュの身体を電気が包む。

この魔法の効果は、一言で表すのなら強化だ。
肉体、感覚、魔力、攻撃威力、その全てを、極限まで強化するドーピング魔法だ。

踏み出す度に、電気の熱で雪が溶ける。
ラミネージュを、邪霊が注視する。なにかするタイミングがあるとしたら、ここだ。

「【全ての大河の源たる・偉大なる水の神よ・生命の主たる・大いなる母よ・その身体の在りし地に・豊穣と癒し・愛と誕生の加護を与えよ・今ここに・其の契約者が望む】」

まだレイアが片鱗しか使うことが出来ない、超高位魔法。
アナーヒターの力により、包み込んだ対象の中で指定されたものに加護を授ける。
その加護とは、治癒、再生、硬化、といった、あらゆるものだった。

邪霊を怯ませながら、水は流れてラミネージュを包み込む。

その水に触れることで、レイアは左腕を瞬時に治した。

「【雷霆纏いし・金色の神よ・稲妻を従えし・勇敢なる戦神よ・力の象徴たる・金剛杵を・我が剣に貸し与えよ】」

通常よりも何倍も早くなったラミネージュが、走る。
肉体にかかる負担はレイアの魔法が軒並み取り払うため、ラミネージュは歴代で初めて“デメリット”を極限まで減らしたこの魔法を使用していた。

電撃を纏った剣が、煌めいた。

「一刀、両断」

その勢いを防ぐことが出来ず、邪霊は盾にした腕ごと真っ二つに切られて、塵となった。

「ふぅ……お疲れ様ですわっ！？」

近づいてきたレイアを、ラミネージュが抱き締める。
その頬は、朱に染まっていて、目が潤んでいた。

「ラミネージュ、貴女……酔っているでしょう？」

ラミネージュは、答えずにレイアに顔をこすりつける。
極限までデメリットは減らした。だが、強力な霊酒であるソーマを口にして、酔うなという方が無理があった。

押せども引けども動かないラミネージュに、レイアは温かい笑みを浮かべる。

そして、気を引き締めて前を見据えた。

「ええい、女は根性ですわっ！！」

抱きついたラミネージュを引きずるように、レイアはゆっくりと歩き出した。

魔力がつきかけているので、早歩きも出来ないのだった――――。

第二十三話　雪月焔歌　（前編）（後書き）

前中後の三編に分けた方がすっきりと書けそうなので、分けることにしました。
なるべく、早めにあげていきたいと思います。

さて、内容にあまり関係のないことで申し訳ないのですが、ここのところ評価が伸び悩みモチベーションが上手いことあがりません。
果たして需要があるのだろうかと考えると、書くことに没頭しきれず、どうにも執筆速度が落ちているような感覚を、抱き始めて来ました。

この作品をお読みいただき、続きが読みたい、楽しみにしているなどと感じていただけているようであれば、一言、感想をいただけないでしょうか。もちろん、評価の方でも大歓迎です。

長々と、内容に関係のないお話を、失礼致しました。
お気に入りに登録してくださった皆様、評価をくださった方々、あなた方のおかげで、今までモチベーションを維持し続けることが出来ました。

なんにしても、一作者、一書き手としてこの物語は完結させます。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次回、中編も、よろしくお願いします。

第二十三話　雪月焔歌　（中編）

肌を打つ冷たい風。
痛みを伴う凍てつく突風。

その衝撃に、奈津は一歩、後ろに下がった。

――ボコッ
「え？」
「佐倉さん！」

ぐらりと身体が傾いて、浮遊感に包まれる。
空を飛ぶことを経験したことのある奈津でも、意図せず襲ってくる感覚には、僅かな吐き気を覚えていた。

穴なんか、無かったはずなのに。

そんな混乱から、一瞬思考が停止する。
だがそれは、隙というのにも短い間隔。
それだけで、奈津は立ち直る。

「嘗めるなっ！」

落ちた程度。
その程度で、どうにかなる奈津ではない。

「へぶっ！？」

だが、持ち直したところで、顔面にコウモリが張り付いて、再び体

勢を崩した。
それでも奈津は、風を操作して持ち直そうとする。

「あわわわっ！？」
「へっ！？」

だが、その行動は三度潰されることになった。
コウモリに引っ張られる形で、救助に向かおうとした神楽が落ちたのだ。

今度こそ抗うことはできずに、落ちる。
なんとか地面に着地することには成功したが、穴はコウモリによって塞がれた。
行きの時もこうして、地面に見立てていたのだろう。
最高のタイミングで、引きずり落とすために。

「あう、ごめんなさい」

着地をするとき、奈津はついでに神楽を横抱きに抱えていた。
抱えられた神楽は、その体勢のまま申し訳なさそうに謝った。

「いえ、今のは仕方がないですよ」
「うぅ、ありがとうございます」

項垂れる神楽。
そんな神楽の様子を見て、奈津は年下の少女をいじめているような気分になり、顔を引きつらせた。

神楽を地面に降ろすと、周囲を見回す。

そして、一度上を見上げて、息を吐いた。

「ひとまず、進みましょう。誘いに乗るのは癪ですが、合流するのにはそれが手っ取り早いでしょうし」

「そうですね。って、先生が言わなければならないことでしたね」

落ち込みながらも、神楽は顔を上げる。

まず邪霊を倒して、それから意気揚々と合流する。

二人はそう決めると、鍾乳洞の中を歩き出した。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

洞窟の中だけあって、鍾乳洞は薄暗い。
だが、視界が閉ざされる程ではなかった。
天井の所々から光が漏れていて、その光が、僅かではあるが洞窟を照らしていた。

「この洞窟、崩れるんじゃないかな」
「そうですね。所々光が漏れていると言うことは、穴だらけと言うことですからね」

むしろ、地形としては鍾乳洞だが、実は別の何かである。
そう言われた方が、安心は出来ないが納得することは出来る。

そうして歩いていると、奈津は上空に気配を感じた。
普通ならここでするのは“警戒”だろう。だが、妙に不意打ちの経験が多かった奈津は、実体験からそれを“不意打ち”と判断して、飛び上がる。

「せい！」
『ギィッ！？』

そして、身体を縦に回転させて、オーバーヘッドキックを放った。
すると、奈津の上空に来ていたのだろうコウモリが、悲鳴と共に塵になった。

「おぉっ！良い反応ですねー」
「あはは、ありがとうございます」

神楽はそう言いながらも、周囲の警戒レベルを引き上げる。
コウモリが邪霊なら、ここは邪霊の巣だ。

『キィッ』『キギッ』『ギィッ』『キギギ』『キィーッ』

奈津達の頭上を、邪霊が飛び回る。
その数は――千をくだらない。

「絶対に“核”持ちですよね、あれ」
「そうですね。ちょっと大変そうです」

神楽は苦笑しながら、腰を落とす。
両手の甲を外側を向けて、腰の横に持っていく。
左足を半歩前に出して、右足を一歩後ろに退く。
盾の部分が身体の両側面を守る、神楽の構えだった。

『キギキキィィッツッ！！』

邪霊は、大きく鳴くと、束になって奈津と神楽に襲いかかる。
その姿は最早、黒の津波と言っても過言ではない、怒濤のうねりだった。

「【大気を統べし風の主よ・我が身体に宿り・我が身に疾風の加護を授けん】」

一匹一匹が脅威ではないのは、わかっている。
ならば、使うのは速度上昇の魔法だ。
奈津は疾風の加護をその身に宿すと、蹴り出せるように構えた。

「【北方を守護せし・亀と蛇を象る・聖獣よ・我に怒濤の・力を与えよ】」

対して、神楽は動かない。
詠唱をしても、その構えは崩さなかった。
だが、シールドのブースト部分に青い光が走っていることが伺えることから、何らかの魔法を付加したことは解った。青と言うことは、水に属する魔法だ。

『キキィッ！』
「はぁっ！」
「シッ！」

先頭の一匹を、奈津が右足で蹴り落とす。
そして、すぐに足を畳んで再び蹴る、連続蹴り。

神楽は、腕を前に突き出す。
ブースト部分に宿った水が爆発して、スピードを上昇させる。
それによって邪霊を落とすと、逆噴射により腕が元の位置に戻る。
それを左右で繰り返すことによる、超高速の連続突き。

目を瞠る速度で減っていく自身の“身体”に、邪霊は形勢の不利を悟る。
当初の物量で押しつぶす作戦を変更して、大きく後退する。

だが、体勢を立て直すことを許す程、甘くはない。
二人は一気にその場から走って、後退した邪霊に追いすがる。
邪霊とて、無限の力を持っている訳ではない。核を壊されなければ死なないとはいえ、消耗はする。

雲のように纏まっていた邪霊は、二人の突撃で数十の肉体を塵に変えた。
邪霊は分散して、上空に飛び上がる。

量がだめなら、質を使う。
天井付近で再び集まると、今度は密集していく。

「先生……」
「……はい」

奈津が嫌そうに呟くと、神楽はそれに頷いた。
言いたいことは、嫌という程解った。

邪霊は密集して、合体していく。
それだけならば、まだいい。スライムもそうだった。

「なんだか、減ってますね……鍾乳洞」
「減ってますね」

鍾乳洞ではなく、鍾乳洞に見えるように形を変えていた邪霊だった。
ラミネージュがこれに気がつけば、突然消えた鍾乳洞に目を丸くすることだろう。

天井も無くなり、ついにその場所が開く。
そこは、地面の窪みの下に位置する、特殊な雪原だった。

そう、元からこの山に――洞窟など、無かったのだ。

やがて、邪霊の全容が顕わになる。
赤黒い肌と、鋭い牙。目はなくて、耳が大きい。
巨大な翼と細い足、背中からは、無数の“茨”が生えている。

なによりも注目すべきは、その大きさだろう。

吹雪の中でなければ間違いなく悪目立ちするサイズ。
横幅だけで十五メートルはありそうだ。

『ギギィッッッ！！！』

邪霊が、甲高い声で鳴く。
すると、背中に生えた茨が伸びて、奈津たちに襲いかかった。

「【大気を――」
――ィィイインッ！！
「――っ！？」

詠唱をしようとすると、響いた高い音に潰される。
奈津は咄嗟に超越者の能力を使うと、それを用いて飛び退いた。

神楽はそれをみて、奈津の力に納得をしていた。
楓、アンジェリカ、ミファエル、神楽、そして学院長。
この五人は、奈津の力を知っている。椿のそれと違って、公式に残っている事件で得た能力のため、担任や顧問といった関わりが強くて理解がある大人には、知らされていた。

ちなみに、理解があるかと言われれば疑問視せざるを得ないという理由で、慎二郎には教えられていなかった。

「先生！詠唱が、潰されます！」
「邪霊の能力でしょうね。私がなんとかします」

神楽はそう言いつつも、動かない。
そんな神楽に、邪霊は狙いを定めた。

茨を集束して、鎚の形に変える。
その巨大な鎚を、神楽に振り下ろした。
詠唱をされても、問題はない。
喉から出す音は、魔法使いの詠唱を潰す。

「先生！」
――ドゴンッ！

振り下ろされる。
それは周囲にクレーターを作り、その威力を物語っていた。
魔法による防御もなしに受ければ、その身体は粉々に砕け散るだろう。

雪が舞い上がり、煙となる。
奈津は超越者の力で、相変わらず襲う茨を避けながら、神楽の方を見て歯がみする。
目を逸らしたくなる気持ちを抑えて、煙の晴れたその場所を見た。

変わらず、神楽が立っている。
神楽は左手一本……たったそれだけで鎚を受け止めていた。

「“不動”の魔法です。貴方ごときの力では、動かざるものを潰すことは出来ません」

神楽は、魔法と言った。
それが例え詠唱の短い自創言語だったとしても、唱える暇などなかったのに。

神楽がその状態から右腕を出す。
すると、そこから放たれた水のレーザー……ウォーターカッターが、

邪霊の喉を貫いた。

『ッッッ！！？』

悲鳴を上げることも出来なくなり、邪霊は動揺する。

人間程考えられなくとも、意志はある。だからこそ、詠唱をせずに魔法を発現した神楽に、驚愕と困惑の感情を抱いた。

「これが私の“天恵”」

奈津に教えているのだろう。

その声は、授業でも感じられない。教育者の威厳に満ちていた。

それが、魔法使いとしての彼女――レベル七の、姿。

「ありとあらゆる過程を一段飛ばす力――“境界跳躍―≪ワンステップ≫”」

個人の認識によって、天恵者や向こう側の子供達は、能力の規模を変える。

どれだけ“人間”の価値観から外れることが出来るか？それを表す、力。

神楽は、魔法に対して、詠唱、発現の二段によって行われると解釈していた。

口に出した方が威力は上がるが、それは認識不足でしかない。それでも、詠唱をしたときに迫る威力を持つ魔法を、神楽は無詠唱で放つことが出来た。

「佐倉さん！本体は、左肩です！」

「っ――はい！」

邪霊の集合体であるため、核を隠すのは用意だった。
それ故に、見た目では解らない本体を見透かされたことに、邪霊は再び動揺する。
動揺して、茨の動きを、止める。

神楽が“探す”という過程を飛ばして、“発見”したのだ。

「【大気を統べる風の主よ・我が身体に宿り・我が身に烈風の加護を与えん】」

あまり丈夫な邪霊でないことは、解っている。
ならば、使用するのは貫通特化の魔法だ。

超越者の能力により一気に駆け出す。
動き出した茨を足場にして、飛び上がる。

邪霊はその鎚を持って奈津を叩き落とそうとするが、失敗した。

「【北方を守護せし・亀と蛇を象る・聖獣よ・我に地の力を秘めし・槍を授けよ】」

大地で構成された巨大な槍が、地面から突き出て宙に浮かぶ邪霊の足を貫いた。
その痛みに怯んで、動きが鈍る。音波によって奈津の位置を特定すると、奈津が自分の“背後”にいることを突き止めた。

『ッッッ――!!』

既に貫かれていた邪霊は、藻掻いたあげくに霧散して、一匹一匹が

天に昇る。
そして、霧のように広がって、塵になって消滅した。
その塵も吹雪に呑み込まれて、奈津たちに降り注ぐことなく、消えていった。

「終わったぁー」

奈津はそう言って、大きく息を吐いた。

「お疲れ様です、佐倉さん」
「神楽先生も……って、疲れてませんよね？」
「あはは、鍛えてますから」

神楽はそう笑って、力こぶを作ってみせる。
華奢なように見えて、腕はしっかりと引き締まっている。
本当に鍛えているのだろう。

天恵者も向こう側の子供達も、能力を使用する際に魔力的なデメリットはない。
その代わりに体力を使うため、鍛えることには意味があった。

「今度一緒にトレーニングしましょうよ」
「いいですね。それなら、神崎さん達も誘いましょうか」
「ははっ、喜びますよ」

女の子は、いつでも気になることがある。
その憎き腹回りや二の腕の悪魔を退治するためならば、喜んで参加するだろう。
奈津としても、レイア辺りはそろそろ胸回りの脂肪を減らすべきだ

ろうと、考えていた。

「そうそう、先生」
「どうしました？佐倉さん」
「そう！それ！」

首をかしげる神楽に、奈津は声を上げた。

「その“佐倉”さんって、止めましょうよ。奈津で良いですよ」
「あ――そう、ですね。解りました。奈津さん。ふふ、神崎さん達も、そうしましょう」
「ええ、喜びますよ。絶対」

顧問で、一緒に苦難を乗り越えて、こうして戦っている。
ならば、あまり他人行儀な呼び方をするのは、やめよう。
神楽は、教師として、慕われていることを自覚する。
そして、頬に僅かな朱を刺した。

「絶対、ですか」
「絶対、です」

頷き合う。
それで、もう十分だ。

「さて、休憩終わりっと」
「そうですね……では、椿さんたちを助けに行きましょう！」
「はい！」

神楽が、邪霊の気配を探す過程を飛ばして、方向を定める。
そして、椿の元へ歩き出す。

――どこかで、紅い光が渦巻いた。

第二十三話　雪月焔歌　（中編）（後書き）

今回は、中編でした。
次回後編は、椿パートです。

モチベーションが上手く上がらず、どうも質が落ちているような気がしてならないです。
ご意見ご感想ご評価のほど、どうかよろしくお願い致します。

後編も、できるだけ早めにあげたいと思います。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次回、後編も、よろしくお願いします。

第二十三話　雪月焔歌　（後編）

猛吹雪。
そう言っても差し支えのない天候の中、椿は特に寒がりもせず、歩いていた。

神霊者の力を使用するのに戸惑っていたのは、もう過去の話。
あまり乱用するべきではないと考えていたが、あまりの寒さに理性の箍が外れたのだ。

胸に浮かぶのは、名も無き炎の精霊の紋章。
これならば、低い魔力で現象を維持することができるのだ。
そもそも、“死”を遮断した時点で負荷が極端に減っているのだが、それに気づく様子はなかった。

常に微弱でも炎を纏っていれば、戦鎧の防寒機能も合わせて、寒くない。

そんな椿を、肩の上に移動した雅人が、胡乱げに見ていた。
遮断の事を……人から外れたことを、後悔しているのかどうかも解らない。
今は平気なように見えても、今後どうなるかは、わからない。

本当に“自覚”があるのか。
――それとも、どこか“諦め”にも似た感情を、抱いているのか。

いまいち読めない主に、雅人はため息を吐くのだった。

吹雪の中、視界が悪くても、歩かなければ仕方がない。
炎の精霊の力によって暖まることは出来たが、それもいつまで保つことができるか解らない。だから、早く邪霊を倒したかった。

「うぅ、まだ、かな」
『情けない声を出さないでくれないかい？』

薄情である。
だが、雅人も散々“ペット扱い”された鬱憤が溜まっていたのだろう。
その顔には、憔悴の色が見て取れる。不憫である。

「はぁ……ったっ！？」

肩を落としながら歩いていた椿は、顔を上げようと上を向いた反動で、後ろに転んだ。
それだけで転ぶのは、おかしい。足が滑ったのだが、雪の上で滑ることも、あまりない。

『これは……氷？』
「いたたた……え？」

地面を触ると、氷が張っていることが解った。

「違う……湖？」

そう、湖だ。
いつの間にか、椿は湖の上に来ていた。
水面は厚く凍り付き、疑問符を浮かべる椿の顔を映していた。

「割れない、よね？」
『割れはしないと思うよ。それよりも、前』
「え？」

雅人に言われて、顔を上げる。
視界が悪い中でも辛うじて見える距離、そこに氷の柱が立っていた。
それも、一本や二本ではない。複数だ。

「漸く、かな」
『大丈夫だとは思うけど、気は抜かないでよ』
「うん」

真剣に頷く椿の様子に、雅人はため息をつく。
自分の主は、果たして理解しているのか。
“よほど”のことが無い限り、死ぬことなんか出来ないということを――。

氷がつき立つその場所へ、椿はゆっくりと歩いて行った。

†

遊園地などで、ミラーハウスなどと呼ばれるアトラクションへ行ってみたことがあるだろうか。

氷の柱が無数に立ち並ぶその場所は、上以外の全方が鏡のようになっていた。
氷に映っているだけなので、鏡程鮮明ではない。だが、激しい吹雪と合わさって、視界は最悪と言えた。

「さすがに、寒くなってきたかな」
『そうだね』
雅人は、これ以上ペット扱いされないためにも、胸元には入らない。
入らないが、震えていた。
「どこから来るかな？」
『そうだね――――っ上！』
眼を細めて考え始めたとたん、気配を感じて雅人が叫ぶ。
椿はその言葉に反応すると、上を確認せずに後ろへ飛んだ。
――ドンッ！
落ちてきた氷の柱が、先ほどまで椿の立っていた場所に突き刺さる。
椿は焦ることなく冷静に、腰を低くした。
「雅人さん！」
『わかった！』
雅人が氷の柱を見て、どこから来るのか言う。
椿は周囲を見て、避けた後も逃げられる場所に飛ぶ。
『右！上！下！左に四十五度！』
――ドン　ドン　ドン　ドン
落ちてくる氷の柱は、速度があるためか高威力だ。
当たったら、その場に無残に串刺しとなるだろう。
椿は、そんな自分の姿を思い浮かべて、身体を震わせた。

『上から五本、囲む気だ！』
「【蛇鞭・流焔】」
炎の鞭を、並び立つ氷の柱の一本に巻き付かせる。
そして、身体を引き寄せた。
――ドドドドンッ！
椿はその五本を避けると、鞭を更に前に巻き付かせて、身体を引き寄せる要領で素早く進んでいく。地面がよく滑る氷だから、スケートのように移動することが出来ていた。
その動きを捉えきれなくなったのか、氷の柱が落ちてこなくなった。
そして、掴む柱が無くなったので、椿は能力を解除して走った。
「っ……本体、かな」
『おそらく、ね』
椿が辿り着いたのは、湖の中央だった。
そこには、華のように開いた氷の柱があった。
その華の中央では、女性が笑っている。
だが、女性と言って正しいのかは、わからなかった。
それは、氷像だった。
女性を象った氷像が、滑らかな動きで笑っていた。
氷という固体なのに、動きが滑らかという矛盾。
それは実に“邪霊”らしい、矛盾だった。
『アアアア』

高い声が、響く。
その声と同時に、邪霊の背後に巨大な球体が出現した。
透明の球体で、風が集まったもののように見える。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

何が来ても対応できるように、炎刃を展開させておく。
邪霊は椿の装霊器に宿った炎を見ると、愉快そうに笑い声を上げた。

『アハハハハハハハハッ！』

球体が、発射される。
思ったよりも速度が遅かったため、椿は炎刃で切り落とす。

「せいっ！」

球体はあさっさり切れて、二つに分かれて椿の左右に落ちる。
そして椿は、炎刃を見て――目を、瞠る。

展開し続けていたはずの炎刃が、消えていた。
よく見れば、装霊器の先端が凍り付いていることが解った。

「くっ！」

再び展開させるには、まず溶かさなくてはならない。
だが、氷は一向に溶けず、椿を焦らせる。

再び、球体が放たれる。

今度は二つ……それも、先ほどまでよりも大きい。

「【心盾・絶火】」

真紅の壁で防ぐ。

だが、椿の使う技は、ほとんどが炎属性が付加されている。

そのため、鉄壁であるはずの壁が、揺らぐ。

「っ！」

『【ウォールアウト】』

それを、雅人が補強する。

雅人が使う分には、無属性だ。

そのため防ぎきることが出来るのだが、雅人の身体では何度も使える訳ではない。

「――寒い」

椿が、小さく呟いた。

カタカタと震える身体を、両手で抱き締める。

防いでもその場に停滞する冷気が、椿の体力と精神力を削り、奪う。

『危険、だね……アレク』

雅人は、椿の身体を通してアレクを顕現させた。

炎の精霊、サラマンダーがいれば、直撃しない限りは熱を得ることが出来る。

「雅人さん……アレク……」

弱々しく呟く椿を、アレクは心配そうに見上げた。
その視線を受けて、椿は持ち直す。今まで一緒に戦ってきたパートナーに、心配をかけている。それで、平気でいられるはずがないのだ。

「ごめんね、アレク……もう少し、頑張ろう」
『とりあえず、いつまでも張っていられる訳じゃないから何とかしてね』
「うん」

雅人の言葉に頷くが、良い手段は思い浮かばない。
雅人が苦しそうに歯がみする姿に、焦りだけが生まれていく。

そんな椿の姿に、雅人もまた、焦っていた。
椿に足りないのは、火力だ。攻撃の威力ではない。文字どおり、温度が足らない。
熱は、温度が高ければ高い程、その色は白に近づく。対して、椿の炎は真紅。これでは、邪霊の魔力が上乗せされた冷気は、破ることが出来ない。

『だからといって、ここで諦める訳にはいかない』

椿に聞こえないように、そう呟いた。
邪霊王に打ち克つほどの少女が、ここで氷漬けにされる。
死ぬかどうかがわからないと言うことは、溶かされるまで永遠に氷の中。
死んで転生することも、叶わない。

『なにか、なにか方法は――』

逸る心を静めながら、雅人はアレクを見た。
椿に心を通わせようと、励まして力になろうと必死になっている、炎の精霊。
その姿に、雅人は賭けに出ることにした。
どのみち、そう長くこの使い魔の身体で壁を作っていられる訳では、ないのだから。

『椿……聞くんだ』
「雅人、さん？」

真剣な声で言葉を投げかける雅人の様子に、椿は怪訝そうに眉をひそめた。
雅人は、普段はなんだかんだで余裕を忘れないように努めているということを、椿は知っていたのだ。

『今から、全力でアレクに“想い”注ぎ込むんだ』
「想い、を？」
『そうだ』

雅人に促されて、椿は戸惑いながらも、アレクを左手にのせる。
そして、右腕で、包み込んだ。

「アレク……」

四月に契約を交して、それからずっと一緒に居た。
椿は、アレクが契約に答えてくれたおかげで、使いやすい魔法を使ってピンチを乗り越えてきた。
椿にとって、アレクは相棒。

大切な、パートナーだった。

アレクと共に戦ってきたからこそ、ここで負けたくはなかった。
それは、今椿と心を通わせているアレクも、同様だ。

椿にとってアレクが“最高の相棒”であるということと同様に。
アレクにとって椿は“最高のパートナー”なのだ。

そして、二つの心が混ざり合う。
二つの願いは一つの思いとなり、その思いが、アレクを包み込む。

『やはり、か……！』

紅の光が渦巻くその光景に、雅人がそう声を漏らした。
子猫の身体であるため、全身の毛が、興奮から僅かに逆立つ。

精霊と心を通わせていると起こる、非常に“珍しい”現象がある。
条件すら解らないそれも、神霊者である椿が呼びかければ、成功するのではないか。
雅人は、そう賭けに出て……それに、勝ったのだ。

サラマンダーの身体が、大きくなる。
めきめきと翼が生えて、炎をその身に纏う。
その姿は――――“竜”の、もの。

『精霊がさらなる上位存在に変質する現象――“進化”≪ライフシフト≫”！』

それは、竜。
炎を纏う竜、財宝の守護者、魂の監視者。

「アレク……すごい」
『火炎竜――“ファイアードレイク”』
竜に“進化”したアレクは、その瞳から炎で出来た涙をこぼした。
椿が慌ててその涙を受け止めると、それは石に変わった。
「霊、秘宝？」
アレクは変わらず無言のまま、頷いた。
詠唱は、自然に頭の中を流れる。
もう、この程度の寒さに、脅かされたりはしない。
『さて、解けるよ』
「うん、ありがとうね。雅人さん」
そしてついに、壁が消える。
その向こうでは、邪霊が玩具を買い与えられた子供のように、笑っていた。
『アハハハッッッ！！』
その甲高い声は、確かに耳障りだ。
だが、今の椿を揺さぶるのには、足らない。
「【魂と財宝を守護せし・灼熱劫火の炎竜よ・その大いなる炎を以て・我が敵を浄化せよ】」
椿が、右手の装霊器を邪霊に向けながら詠唱した。

すると、白に近い輝きを持つ太陽のごとき炎が、大きく呻り声を上げる。
そして、冷気の球体を用意していた邪霊に、荒れ狂う力の牙をむき出しにしたまま、襲いかかった。

火球と呼ぶには強すぎるそれは、正真正銘“火竜の息吹―≪ドラグブレス≫”といえた。
その荒れ狂う力は、邪霊の冷気をいとも簡単に呑み込むと、そのまま突き進む。
そして、邪霊の本体である氷像を“半分だけ残して”溶かしきる。

それは、その場にあった氷の柱だけでなく、進行上にあった湖の水すらも、蒸発させて見せた。太陽のコアを思わせる、超高温の炎だ。

『アハハ……ハハ？』
「【蛇鞭・流焔】」

何が起こっているのか理解の追いつかない邪霊に、椿は炎の鞭を巻き付かせる。
深いところで椿とアレクが繋がったためか、炎の鞭にアレクの温度が宿る。
そして、超高熱となった炎の鞭が、邪霊を跡形もなく消し去った。

『アハハハハ――――アアアア――――アアァァァッッッ！！！！』

邪霊が消え去ると、とたんに吹雪が晴れる。
この吹雪も、邪霊の仕業だったのだ。

足下の氷には罅が入っていて、今にも割れそうだった。

湖に落ちてはたまらないと、椿はそこへ手をかざした。

「【氷焔】」

浅葱色の炎が浮かび、水面に吸い込まれる。
するとその場が、瞬時に凍り付いた。
対極する属性の力を、ごく自然に、何でもないことかのように使用する椿に、雅人は目を瞠る。

椿がアレクに手を差し出すと、アレクは元のサラマンダーの姿に戻る。
進化した精霊の姿を操るなどという聞いたこともない現象に、雅人は頭を抱えた。

『椿……君はいったい、どこまで往くんだ?』

その呟きは、椿には届かない。
椿は遠くに見える仲間の姿に、ただ嬉しそうに手を振っていた。

†

合宿二日目を終えた頃には、椿たちはぐったりと過ごした。
学院に帰るまでの一週間を、このログハウスで過ごすと、愛着も沸く。

最終日には、どうにも名残惜しくなり、後ろ髪を引かれる思いでリムジンに乗り込んだ。

そうして、いつかのように、リムジンの中で眠りにつく。
肩を並べて寝息を立てる椿を、雅人はただじっと眺めていた。

『君は、どこまで“往く”？どこまで、“征く”ことが、できる』

自分の予想よりも、遙か上にいる宿主。
椿の力が上がれば、使い魔である雅人の力も上がる。
この身体になってから、一人で“心絶”の能力を使うことが出来てしまったという事実は、重い。

『なんにしても、私は君を支えよう。それが君の望みなら、応えよう。だがそれは、君が本当に望むのなら、という前提の元に成立することだ』

椿に望まれたから、雅人はこの場にいる。
邪霊王だった雅人の意識は、ただの記録でしかない。
それでも、人格の基盤として使っている以上、邪霊王だった雅人が望むものは、解る。

彼は、自分たちの種族の行く末が、見たかった。

だからこうして椿の使い魔となることは、未来を見据えるために、最も近い場所だと言えた。

だから雅人は、この場所に“満足”していた。

使い魔として主を敬愛する心と、邪霊王として望みのために椿を守りたいという心。

その二つが齟齬なく融合しているからこそ、彼は真剣に椿を“想って”いた。

『椿――――私は、君を守りたい。だから、私に君を……護らせてくれ』

目を離せば一人で消えていってしまいそうな主に、雅人はそっと、瞑目するのだった。

第二十三話　雪月焔歌　（後編）（後書き）

今回で、冬休み編は終了になります。
次回から三学期・終章なのですが、あとはもうクライマックスに走るだけなので、短いです。

一話挟んで、最終話を前後編で纏めてしまいたいと思います。
あともう少し、最後までお付き合いいただければ、幸いです。

それでは、ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次回、次章も、よろしくお願いします。

第二十四話　日常　―終章―

――ズ…ゥウン

緩やかな鳴動が、校舎に揺れを与える。

足音のように傲慢で。
鳴き声のように怠慢で。
笑い声のように横暴で。
泣き声のように貪欲で。

玩具を求める幼子が欲しい欲しいと癇癪を起こすように、身体を揺らして地団駄を踏む。

欲しい。
――ズ
欲しい、欲しい。
――ズズ
欲しい、欲しい、欲しい。
――ズズ、ズ
欲しい、欲しい、欲しい、欲しい。
――ズズズ、ズ
……。
――……、…

欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい。

“――”が、欲しい。

――ズズウゥゥンッッッ

一際大きく、揺れた。

まだ生徒の居ない、始業式の前々日。

何かが、ゆっくりと綻び始めていた――。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

――トントントン

冬休みの最後を祖父母の元で過ごした椿は、寮に戻って始業式を終えた。
三学期最初の授業は、その翌日。すなわち、今日この日である。
椿は自室で、昼食用の弁当を作っていた。
自分の分と、奈津の分。二人分の弁当だ。

「あ――」

料理の最中、手元が狂って、指を切る。
椿は“感覚”で、指を切ったと感じた。

左手の人差し指。
そこを左手の親指で、指をこすり合わせるように撫でる。
それだけで、もうそこに傷はなかった。

「結構、深く切っちゃったって、思ったんだけどなぁ……」

椿はそう言うと、寂しそうに笑う。
対極の属性を取り入れてから、神霊者の力が一気に強くなった。

それにより、椿は様々な影響を抱えることになった。

瞬時に再生するため、人体の警告信号である痛覚が、極端に鈍い。
その代わり、聴覚や視覚といった五感が、格段に上がっている。
耐性も身体も強くなっているので、それを利用した攻撃、閃光や大音量、音波といったものも、椿には通じないだろう。

魔力的な直感にも優れ、状況の予測から擬似的な未来予知をすることもできる。

「化け物、か」

否定してきた言葉だが、今ではそう言われても仕方がないような気がして、ならなかった。
おそらく、腕を切り落とされても、すぐにくっつくのだろう。

そんな自分を想像して、椿は身体を震わせる。
――心を、震わせる。

料理を弁当に包むために冷ます。
その間に、制服の袖を通す。

心は晴れない。
けれど、折れる訳にはいかない。

このまま、現状を維持できるのなら、まだいい。
だが、それは、不可能なことに思えて仕方がなかった。

『椿？』
「なんでもないよ、雅人さん」

椿は雅人を抱えると、抱き締める。
今はまだ――このままで。

†

教室へ入る、小さい影。
幼い容姿の教師、神楽だ。

まだ半年も経っていないのに、教師としての威厳が身についているように感じられる。
それは“顧問”としての経験が、授業の時にも生かされているからだろう。

「もうすぐ、一年生も終わりですね。最後まで気を抜かずに、でも肩の力は適度に緩めて、頑張りましょうねっ！」

そういって笑う。
その姿は、やはり幼く感じられた。
人間、そんなにすぐに、変わることは出来ないのだ。

「それでは、今日は精霊と人間、その狭間のお話です」

神楽は、そう言うと、横に並べて書いた精霊と人間の文字の間に、Ｔの字を書く。
その狭間にある存在を、Ｔの下の部分に書くためだ。

「幻想世界において、人と精霊の混血者、というのは、良く耳にします。ですが、その人間とは、幻想世界の住人であって、正しく我々現実世界の人間と同じものではありません」

精霊と人間が交わることは出来ない。

それは、精霊が現実世界において子を為すことが出来ないからだ。

「人間は幻想世界へ、自分で行くことが出来ません。しかし、稀に事故で幻想世界に“落ちる”ことがあります」

そこで神楽は一度区切り「詳しい事は、セルエイラ先生に聞いてくださいね」と付け加えた。注意事項諸々は、魔法学のミファエルの担当なのだ。

「これを“逆行―≪ゲートアウト≫”といいます」

逆行は、精霊を召喚するときに、何らかの要因によって幻想世界へ“落ちる”現象だ。

理由が不明なため、詳しい事は判明していない。

「六十年前、最初の逆行が発生しました。それより、何度か起こっていますが、幻想世界へ落ちたものは、現実世界に戻ってくることが出来ません。――ある、一例を除いて」

神楽はそう言うと、Tの字の下のところに、チョークを走らせる。

「落ちた人間が戻ることは叶いませんが、その子供は戻ることが出来ます。幻想世界で交わったが故に、精霊との間に子を為すことが出来た。そうして生まれてくるのが、精霊と人間の混血“重霊者―≪ダブル≫”です」

重霊者、と綴られた黒板。
重霊者ならば、現実世界へ渡ることが出来る。
だが、更に幻想世界へ戻ることはできなかった。

「彼らが――――」

神楽の説明が続く中、椿はふと、外を見た。
いつもと変わらない、学院の空。

その空が、何故か泣いているように思えて……。

†

――ズ…ゥウン

椿たちが中庭の木の下で昼食をとっていると、地面が小さく揺れた。

「うわ、また地震だよ。地盤、大丈夫なのかな」

奈津が、心配そうにぼやいた。
ここのところ、学院周辺では何度も地震が起こっている。
異常がないかどうかは、目下調査中だった。

「何ともなければいいのですけれど」
「噂をすれば」
「影が差すのとは、ちょっと違うと思うよ？」

ラミネージュがレイアを脅しにかかり、椿がそれを諫める。
なんでもない日常なのに、胸騒ぎが止まらない。そのことに気がついている人間は、どれだけいるのだろうか。

「椿？」
「ぁ――どうしたの？奈津」

思い悩む様子は、表情に出していない。
だというのに的確に見抜いた奈津に、椿は動揺を押し殺す。

「さっきから、変な顔してたよ」
「へ、変な顔って？」

揺れる心を、隠す。
それをここで、暴かれたくなかった。
一瞬、椿の目に、そんな懇願の色が浮かぶ。

奈津はそれに気がついて、周囲に解らないようにため息をつく。
ここまで来たら、引き下がる方が不自然だ。だったら、不本意だが

場をかき混ぜよう。
そう、不本意なのだ。決して、からかおうなどと考えては、いない。

「うーん、そうだな……」

例えを出そうと、奈津が頭を捻る。
その様子に誤魔化してくれると感づいていて、椿は感謝の念を視線に込める。
……だがそれも、すぐに霧散することになる。

「最近ちょっといいなと思う人が、猫っぽい人で自分的にどうだろうと考えつつ、猫扱いして誤魔化している時の顔かな？」
「――――っっっ！？！？！！」
「ちょっと奈津、猫扱いはないのではありませんこと？」
「それじゃあ、椿が変態になる」

事情を知らないレイアとラミネージュが、ツッコミを入れる。
奈津は「それもそうだねー」などと朗らかに笑っているが、その笑みを騎士演習の時に見ていた椿は、意図を汲んでしまい、頬が紅潮するのを止められなかった。

割と動じない雅人が、椿と奈津の様子を、目を見開いて驚きながら見ていた。
彼は、椿の横でキャットフードを食べているところだったのだ。

「ちょっと気になってた人を愛称で呼んでいる気になって高鳴った胸を押し隠す様子とか、抱き締めるのにも“猫だから”と自分を誤魔化しながらどぎまぎしてみたりだとか、気がつかれないことに安堵しつつちょっと拗ねてみたりだとか、他にも――――っ」

息継ぎもせずに話す奈津。
椿はそんな奈津に近づくと、頬に手を添えた。
ぱっと見た限りでは、危ない百合の園に思えるが、当人達にとってはもちろんそんなことはなかった。

「つ、椿、さん？」
「こ・の・く・ち・かな？」

そして、思い切り、全力で、奈津の頬を引っ張る。
よく見れば、指に青筋が浮いていることが解るだろう。
――それほど、本気で引っ張っていた。

「いいいいいいひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃっっっっ！？！？！！」
「え？もっとやって欲しいの？……しょうがないなぁ、奈津は」

騎士演習の時の比ではない、雑巾を絞るようにというか、むしろ引きちぎるように引っ張っていた。奈津はマジ泣きしかけている。すこし、喋りすぎた。

レイアは、仕方がないと肩を竦めると、止めようと声をかける。

「椿、そろそろその辺りで――」
「なぁに？」
「――なんでもありませんわ」

三秒と持たずに、レイアはすぅと目を逸らす。
椿は引っ張るだけでは飽きたらず、捻り始めていた。

「ラミネージュ、ほっぺたにソースがついていますわよ」

「うん」
「ほら、そんなに急ぐんじゃありませんことよ」
「うん」

レイアは、現実逃避にラミネージュの世話をし始めた。
なるべく、縋るように自分を見る奈津を、視界から外す。

ラミネージュも、現実逃避に、甲斐甲斐しく世話をされていることを、気にしないでいた。
――もしかした、“素”なのかもしれないが。

やがて、奈津は解放され、ぐったりと横たわる。
椿はレイアの死角で、食べ終わった雅人を抱き寄せた。

「まーくんは、何も聞いてないよね？」
『いや、そんなに気にしていてくれたというのなら、私ももう少し――』
「聞いてない、よね？」
『――聞いてないよ、うん』

抱き締める力が、万力の如く強くなる。
それに命の危機を感じた雅人は、すぐに頷いた。
こういう時、男性は非常に弱いのだ。関係ないかも知れないが。

「まったく、奈津はやりすぎだよっ！もうっ！」

気を取り直して、できるだけ柔らかく怒る。
だが、口から魂を出している奈津の耳には、届かなかった。

「あ、あれ？奈津？おーい」

結局、昼を過ぎて目を覚ました奈津は、何も覚えていなかった……。

†

放課後は、英雄考察研究会の活動だ。
旧校舎裏手で、英雄のテンプレートについて話し合う。

「やはり、平凡だったはずの人間が、ピンチになったときに覚醒するというのが、始まりとしては定石ではありませんこと？」

レイアが、まずは挙げてみる。
それに、ラミネージュが首を振る。

「やっぱり、ヒーローによって瀕死になった主人公が、ヒーローに乗っ取られて戦う」

王道のように見えて、少し違うパターンだ。

「僕としては、アブダクションかな？浚われて、改造されて、脱出して戦う」
「うんうん、そうだよね」

奈津がそう言って、椿もそれに頷く。
似た様な感性だ。

「私としては、五人の組織や兄弟が、巨大ロボットに乗って戦うっていのうが良いですね」

神楽が、そう続く。
すっかり、奈津に毒されていた。
この調子ならば、ヒーロー研は今後も安泰だろう。

「次は、名乗り文句かな？」
「家族構成が先ではありませんこと？」
「それは割と適当で良いような気が……」
「大切な伏線になる、かも」
「ま、まぁまずは、名乗り文句で行きましょう」

行き交う意見に、神楽が割り込む。
ここで躓いたら、進まない。

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ、とか？」
「天地人にかけているんですのね」

まずは、奈津が挙げる。
すると、響きが気に入ったのかレイアはこくこくと頷いた。

「闇に蠢く悪しきもの、照らし滅する白光の月」
「月光戦士的なヒーロー、かな？」

ラミネージュが挙げると、今度は椿が乗った。
気に入ったようだ。

「ヒーローなら、寡黙に“見参”とかも、カッコイイですよね」
「あ、カッコイイですよねー」

神楽がそう言って、和やかに奈津が頷いた。
椿たちも、それに合わせて頷き合う。

「それなら次は――――」

奈津が次々とお題を出して、それをみんなで議論して、レイアが律儀に記録していく。
ラミネージュが時折注釈を加えて、椿がお茶を入れて、神楽がこっそり職員室から持ってきたお菓子を食べる。

英雄考察研究会の、日常が広がっていた。

†

やがて、一日が終わる。
各々の日常を過ごし、就寝時間をすぎて眠りについた頃。

校舎の最上階、学院長室には、未だ光が灯っていた。

大きな机、豪華な椅子。
整頓された本棚……その、後ろ。

横にずれた本棚の後ろには、小さな部屋があった。
その中心には、魔方陣が敷かれていて、その上に大きな姿見が置いてある。

これは、特殊な境界鏡だった。

召喚のためのものではない。
送還のためのものでも、ない。

これは、“移動”のためのものだ。

境界鏡にそういった機能がある訳ではない。
この小さな部屋が、境界鏡に“移動”に機能を持たせることが出来る“遺産”なのだ。
つまり、この部屋は、どこかへ移動するための、エレベーターのようなものだった。

境界鏡が、揺らぐ。
水面に石を落としたかのように、中心からゆっくりと波紋を浮かべる。
だんだんとその波は大きくなり、穏やかな海が嵐へと表情を変える一幕を演出していた。
そして――境界鏡から、手が伸びた。

虚空を掴むように藻掻き、やがてその全容を顕わにする。
ワインレッドのスーツに、白髪交じりの黒髪。年の頃は十にも満たない幼い童女。
姿を変えた、蓮だった。

蓮は、陸に打ち上げられた魚のように身を捻らせながら、境界鏡から“落ちる”。
苦しげに歪んだ眉と、打ち震える身体。目尻に溜まった涙と、血の滲んだ腹部。

「つっ……はぁっ」

脂汗を流しながら、残った力で腹部の怪我を修復させる。
地をみっともなく這って、小部屋から出る。そして、本棚に魔力を通すことで、入り口を閉じた。

「限界、か……ごほっ、ごほっ！」

赤黒い血を吐き出して、口元を拭う。
皮肉げに歪んだ顔は、悲哀の色に満ちていた。

「護る、から……だから、大丈夫だ」

祈るように、天井を仰ぐ。
溢れる涙を拭うこともせずに、ただ、顔を上げる。

「約束は、守る……だから、もう少し、頑張ってくれ」

息も絶え絶えに、言葉を紡ぐ。
それは――――。

「――――桜」

――――儚い、悲恋の詩にも、似ていた。

第二十四話　日常　　―終章―（後書き）

最後の日常パートでした。
次回は、最終話。前後編で完結です。

あともう少し、最後までお付き合いください。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
最終話も、よろしくお願いします。

最終話　世界　（前編）

暗く沈んだ、闇の中。
黒く淀んだ、水の中。

その漆黒が、鳴動する。

鎖は解けた。
磔は壊れた。
箍は取れた。
蓋は外れた。

遮るものがなくなったそれは――無垢な歓喜の声を上げた。

――――――欲しい。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

――ドンッ

爆発音にも似た、地震。
その地震は校舎を揺るがし、授業を受けていた生徒達に、動揺を走らせる。

椿たちの一年B組で授業をしていたミファエルは、鋭い表情で装霊器を取り出した。

「オウクストードさん、皆さんをドームに避難させてください。あそこが一番、安全です」
「……わかりました。説明はどうせ後でも聞ける。今は避難だ！」

ミアが指示を出して、すぐに動く。
特に纏まりの良いこのクラスは、最初に避難が完了するだろう。

ミファエルが睨み付けた、校舎の外。
その空には、目に見える程大きな罅が入っていた。

「学院の結界が、壊れている？」

やがて罅は亀裂となり――――。

――バリンッ

――――音を立てて、割れた。

「全員！戦鎧を装着しなさい！」

ミファエルが、声を張り上げる。

初めて聞いた荒々しい声に、生徒達は咄嗟に戦鎧を装着した。

空気が震えて、大地が啼く。

地面から染み出るように、無数の黒い固まりが出現した。

球体のそれに、八本の足が生える。

そして、上に触覚のようなものが一本伸びて、その先にぎょろりとした目玉が生まれた。

奇妙な形の、邪霊だ。

球体の中には、足ではなく翼が生えたものも居た。

同じように触覚に目玉がついているが、その触覚は背中から十三個も生えていて、下に垂れ下がっている。

『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』『ホシイ』

暗鬱とした声が、響く。

その発生源は、邪霊の腹。

地上のものも空中のものも、変わらず腹に大きな口があった。

全身が漆黒で覆われているのに、その口の中は不自然な程紅かった。

「急いで！」
「はい！」

まだ、力の強い邪霊の気配はしない。
この間に、ドームに急がせる。

「【喰らえ】」

窓を割って侵入した邪霊を、ミファエルは切り落とす。
その風圧で、後から続こうとした邪霊も、数匹纏めて吹き飛ばした。

「我が内に、眠りなさい」

ミファエルの大剣が、生徒達に牙を剥く邪霊を、一匹も残さずに切り落とす。
数の多い邪霊は、合体することがある。だが、魔力を根こそぎ吸い取るミファエルの技ならば、その心配は要らない。

後には、枯渇した塵しか残らないのだから。

黒い魔力が、暴食の力を振るわせた。

†

避難の最中、椿は奈津と並んで、周囲を警戒していた。
気味の悪い邪霊の鳴き声に惑わされないように、冷静さを保てるようにしていく。

「いったい、何がどうなったんだろうね」
『結界が壊れたようだが……それだけで、狙い澄ましたように邪霊が溢れるのもおかしな話だ』

小声で呟いた奈津に、やはり小声で雅人が答えた。
結界が壊れることを待ち伏せしていたかのように溢れ出た、無数の邪霊。
結界が壊れるなどと言うことは、邪霊王であった雅人でさえも、気がつかなかったことだ。

『結界について特化した邪霊王でもいるのか……なんにしても、厄介だね』
「うん……そうだね」

雅人の言葉に、椿は沈痛な声を零した。
目下のところ、邪霊王は人類最大の敵である。
雅人は防御に特化した邪霊王だったが故に、神霊者の能力によって打ち倒すことが出来た。

だが、支援特化、攻撃特化の邪霊王が現われると、分が悪い。

他の人間を巻き込まれでもしたら、椿に出来ることはぐっと減る。
そして、今はまさにその状況だった。

「どうにか、しないと――――っ！？」
――ズキン

久しく感じていなかった、頭痛。
それを感じて、椿は唇を噛みしめて、動揺を隠す。

「とにかく、今は早くドームに行かないと、ね」
『それがいいだろう。なにも、椿が全て行う必要はない』

隠すことに成功したのか、奈津と雅人は話を続けていた。
椿は、どうにか頭痛を振り払おうと、頭を振る。奈津と雅人に感づかれないように、小さく。

――こっちだ。

頭に響く、声。
こんなことが出来るのは、“邪霊王”以外に、知らない。

校舎を出るまで、あと一歩。
そこまできて、邪霊達が椿たちの集団に、狙いをつける。
殿を守っていたミファエルが戻り、一気に乱戦となった。

椿はその混乱に乗じて――雅人を、肩から降ろす。
それも、戦闘に突入するので、肩にいられては困るといった形で、ごく自然に。

――来るんだ。

雅人は椿の使い魔で、椿も雅人を信頼している。
それでも――椿は胸に燻る、自分でも知らない感情から、雅人から離れた。

――さぁ、早く。

身を翻す。
校舎の外へと急ぐ集団の中、椿は一人、校舎の中へ飛び込んだ。

†

群がる邪霊を、斬り飛ばす。
体育の授業をしていて、その生徒達を避難所に送り届けた楓は、まだたどり着けていない生徒達の護衛にやってきた。

「無事か！」
「草加教諭！……まだ、点呼はとっていませんが……椿の姿が見あ

たりません！」

ミアが、唇を噛んで、悔しそうにそう叫んだ。
委員長としてクラスを纏める立場にありながら、クラスメートがはぐれたことに気がつかなかった。

――それよりも。
友達が、いなくなったことに、すぐに気がつくことが出来なかった。

そんなミアの様子に、楓は安心させるように笑いかけた。

「それなら、大丈夫だ」
「え？」
「神崎は、はぐれていたところを“保護”した、と“連絡”があった」
「それは――」
「――第二波だ、来るぞ！」

詳しい事を聞く前に、再び邪霊が密集する。
そのやりとりを聞いて安心する、ミアたち。
その中で、奈津は一人厳しい表情を作っていた。

「どう思う？まーくん」
『私がここに残っている時点で、厄介ごとは確定だろうね』

そういって、肩を竦める。
余裕を保とうとしているが、雅人の顔には焦りが見えた。

奈津は、小さく苦笑すると、足を速めて先頭のミアに並ぶ。

「ミア」
「佐倉？どうした？」

とりあえず落ち着いたところで話しかけられたので、ミアは平静に答えることが出来た。
そんなミアの目をまっすぐ見て、奈津は言葉を続ける。

「何も言わずに“はぐれ”させてほしい」
「――――椿、だな」

奈津の真剣な目と、その肩にいる雅人の姿。
それだけで、ミアは察して見せた。
楓の話で表面上は安心して見せた。追求して楓を困らせたら、余計な混乱が生まれる。
こうして、何が何でも助けに行く姿勢をとることができる奈津を、ミア少しだけうらやましく思った。

自分は、ここを離れてまで、クラスを纏める責任を放棄してまで離れることが、出来ないのだから。

「私が上手く誤魔化そう――――気をつけろ、“奈津”」
「――うん。ありがとう……行ってくる」

ミアに送り出されて、奈津は踵を返した。

「遠峰先生、椿の居場所はわかる？」
『先導する、任せてくれ！』

雅人が、宿主を強く感知する。
使い魔としての役割は、本来はこれが一番大きい要素なのだ。

椿が隠したがっていても、見つけることは出来る。
一人で行かなかったのは、気がついてすぐ移動するよりも、奈津の全力疾走についていった方が何倍も速いからだった。
それ以上に、戦力が欲しかったということも、あるのだが。

「あーもーっ……からかい倒してやる！」
『返り討ちが、関の山だと思うけど――手伝うよ』

軽口を叩きながらも、全力で走る。
そして、奈津と雅人は校舎へ飛び込んでいった。

†

声に導かれるまま、椿は学院長室に辿り着いた。
そのまま、堂々と中に入り、周囲を見回す。

――本棚に、触れるんだ。

言われるがままに、触れる。

――魔力を流せ。

魔力を込めると、本棚が鳴動した。
そして、音を立てて、横にずれる。

――入って、まっすぐ歩くんだ。

言われるがままに、まっすぐ歩く。
姿見の前で躊躇するが、意を決して進む。

水の中を通るような、空気の膜を破るような、不思議な感覚に包まれる。
鏡の中は、半透明の景色だった。水中を思わせるのに、その外側が見えない。
出口がどこかわからず、椿は戸惑っていた。

だが、それもすぐに終わる。

目を閉じて感覚を研ぎ澄ませる。
やがて感覚が正常になって、椿は外に出たことを悟った。

「ここは――――」

目を開けて、その光景に、絶句する。

石造りの建物の中のような場所だ。

天井は遠く、校舎よりも高いように見える。
どこにも窓はないのに、周囲は不自然な程明るい。
所々ひび割れた壁と、亀裂の走った地面。
大きな柱は、欠けている箇所があるが、崩れるような様子はない。

そこかしこに落ちている、白骨。
その側に転がる、色とりどりの精霊石。
最早ほとんど姿を見なくなった、拳銃や小銃も落ちていた。

「戦争の、跡？」

椿はそう呟くと、再び襲う頭痛に眉をしかめた。

――あともう少し、こっちだよ。
「なんにしても、進まないと」

言われるがままに、進む。
邪霊の気配はするが、結界が張ってあるのか、出てくることはなかった。

だから、とにかく進んでいく。
天井の高い廊下を歩く。
迷宮のように入り組んでいるが、導かれるままに歩いているので、迷うことはない。

歩いて、歩いて、歩いて。
緊張から、手のひらが冷たく濡れる。
口が渇いて、脂汗が流れる。
身体が強ばり、鳥肌が立つ。

それでもなお、進む足を止めたりは、しなかった。

やがて、大広間に出た。
いくつも並んだ長椅子と、巨大な石像。
大きなパイプオルガンに、ステンドグラスを模した壁画。

その一番奥に扉があり、その前には祭壇がある。
そして、その祭壇で、一人の青年が祈りを捧げていた。

「よく、来てくれたね」

立ち上がり、背を向けたまま、そう言葉を紡ぐ。
その声に乗せられた感情を読み取ることは、できない。

「待っていたよ、神崎椿――――“神霊者”よ」
「なん、で……知っているんですか？――学院長先生」

動揺を押し殺して、ゆっくりと、そう言った。
すると、青年――――蓮は、ゆっくりと振り向いた。
その表情は、どこかもの悲しい笑顔だった。

「知っている、知っているよ。遠峰雅人のことも、三上院“慎一郎”のことも――この学院で、私に感知できないものはない」
「学院長先生？」

蓮は、ゆっくりと祭壇を降りた。
そして、椿から数歩離れたところで止まる。

「私はずっと待っていたんだ――君のような、存在を」
「私のような――“神霊者”を待っていた、ということですか？」

蓮は、抑揚に「そうだ」と頷いてみせる。

「順を追って、説明しよう」

椿は答えない。

ただ、まっすぐと蓮を見る。

「まずは、そう……ここがどこか、だね？」

どこか、雅人の時のやりとりと似ている。

意図的なのかも知れないと思うと、そこまで知っている蓮の様子に、椿は先ほどまでとは種類の違う頭痛を覚えた。

「ここは学院地下大遺跡“ゴルゴタの棺”という――そう、かつての大戦の跡さ」

「ここが、学院の……地下？」

境界鏡のみしか入り口を持たない巨大な遺跡。

学院は、正しくこの場所に“蓋”をした形になる。

「ここが全ての終わりで始まりの場所。ここで終わって、今もなお続く地」

一つの終焉が、この場所に訪れた。

そして、一つの始まりが、ここにあった。

「百二十年前、激化した邪霊戦争に終止符を打つために、一人の“少女”が立ち上がった」

雅人の授業に似た、声。
声色を似せて話しているのだろう。

「類い希なる力を持った“響霊者”だった彼女は、この地に潜む邪霊王の元へ辿り着いた」

邪霊王“重圧―≪ロードアーム≫”――それがこの地にいると探り当てて、少女はこの地にやってきた。仲間の“全て”に外のことを託して。

「邪霊王を討ち滅ぼした彼女は、そこで邪霊王が守っていたものを、知った」

悲痛な表情。
その表情に、息を呑む。

「邪霊が生まれ続ける、歪み。世界の歪みが意志を持ち、そこにいた」
「貴方は……いったい」

扉の上に設置された、女性を象った大きな石像。
蓮はその石像を、悲しそうな表情で見上げた。

「彼女は言ったよ。“響霊者、ううん……例え真霊者になっても、勝てない。人間にカテゴライズされない、上位種でないと、あれには届かない”――とね」

蓮はその石像に手を伸ばす。
救いを求めていながら、救いを与えたいような、儚い願い。
蓮は伸ばした手を丸めて、指を弾く。

「だから、彼女は、その存在が現われるまで――“それ”を封印することにした」

石像が、砕け散る。
そこから出てきた姿に、椿は目を瞠る。

「自分の身体を依り代に、自分の“精霊”にこの地を守らせて、ね」

白髪交じりの、黒い髪。
薄く開かれた目は、碧色。
光の反射で、虹色にも見える。
身を包むものはなく、白い肌を晒している。
十四から十五歳程度の少女が、水晶の中で浮かんでいた。

「それでは……貴方は」

「――私の名は、レン……魔法使い“蓮城桜”の精霊――――“虹晛”さ」

虹を司る龍、虹晛。
姿を移ろわせて、なんにでも変身することが出来る精霊。
七色の力を持つ、龍神。

「私は彼女――桜との約束に従い、この地に封印を施した。そして、質の良い魔力を溜め続け、かつカモフラージュとするために、ここに学校を作った」

邪霊を“倒す”ことしかできない人間では、歪みの意志を滅ぼすことは出来ない。
だから、徒にこの地のことを知らせる訳にはいかなかった。それは

同時に、桜という英雄の為したことを、伝えられないと言うことだった。

「桜は私に、歪みを滅ぼせなかった自分の名を、後世に伝えないでくれと頼んだ。そんなことはいいから、ここを守ってくれと、約束した」

それでも、邪霊王を討ち滅ぼした彼女の名を、どこかに残したかった。

だから、この学院を――“楼城”館学院と名付けたのだ。

自分の名と合わせて、いつまでも残っているように、と。

――ズンッ

「――っ！」

地面が揺れる。

大気が慟哭する。

世界が、鳴動した。

水晶に罅が入り、桜の顔に苦悶の感情が浮かび上がった。

「そろそろ、封印も限界だ。時が、立ちすぎた」

水晶の罅が、広がっていく。

「私も封印に力を使いすぎた。もう、戦うことは出来ない」

所々が割れて、それに同調するように、邪霊の気配が強くなる。

「どうか――世界を救ってくれ」

水晶が、砕け散る。
落ちてきた桜を、レンが愛おしそうに、抱き締めた。

「どうか――――世界を、守ってくれ」

石像の下の扉が、開く。
その吸い込まれそうな闇に、椿はそっと目を閉じた。

迷いはある。
守るとも言えない。
逃げ出したい気持ちも、ある。

それでも、退くことは出来なかった。

目を開ける。
双眸に強い意志が込められる。
だが、いつもよりも、心なしか、光が弱い。

躊躇は残っている。
肩が重く、息苦しい。
それでも――――。

「――――ありがとう」

進まないという選択肢を、選ぶことが出来なかった。

早足で、進む。
久遠に続く闇を、無理矢理振り払うように――――。

——どくん

最終話　世界（後編）　―完―

走る、走る、走る。
雅人に先導されるまま、入り組んだ遺跡を駆け抜ける。

『オオオオォォォ』

そこかしこから出現する、邪霊。
学院に出現したものよりも、大きくて堅い。

「邪魔っ！！」

それでも、超越者の力で、蹴り抜く。
止まっている暇はなかった。

『そこを右……だと思う』
「えっ？！」
『邪霊の気配が強すぎて、わかりにくいんだ！』

時折迷いながらも、進む。
無限に沸き上がる邪霊と、辿りにくい気配、複雑な構造。

全ての要素が絡んで、中々思うように進むことが出来なかった。

「頼むから、無事でいてよね……っ！」

闇が、蠢いた。

Ｆｌａｍｅ，Ｐｌｕｓ

紅い閃光が、煌めく。
装霊器に宿した炎刃で、活路を開いて突き進む。

闇から闇へ移動する邪霊も、強化された椿の感覚の前では、丸裸も同然だった。

切り落とし、焼き尽くし、斬り裂き、燃やし。
進む先に闇の終着点を見つけた椿は、その広間に躍り出る。

「これが――歪み？」

黒い柱と銀色の壁。
高い天井と校舎よりも広い空間。

ここは学院の地下などではない。
どこか違う、異空間だ。
椿は本能的に、そう感じ取っていた。

その大広間の中央に、“それ”は在った。

闇を煮詰めたような漆黒の繭。
その大きな繭には、三十三対六十六本の蜘蛛の足が生えていた。
蜘蛛の足は裏返り、繭を包むようにして眠っている。

『欲しい』

繭が、小さく蠢いた。
繭の中から響く声に、椿は覚悟を決めた。
もう、ためらう余裕はない。
――そう、自分に言い聞かせて。

『欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい』

繭の中で響き、更に大広間に反響する。
狂おしい程の、渇望。

『“世界”が、欲しい』

繭が鳴動し、蠢き、その六十六の足を地につける。
強大な存在を前にして、足が震える。たった一人で立ち向かわなければならない、恐怖。

『邪魔を、するな』

体育館ほどのサイズを持つ、繭。
その身体が、蜃気楼のようにぶれた。

「【心盾・絶火】」

――ズドンッ

咄嗟に張った壁に、目で追えない程のスピードで突撃してきた、繭がぶつかる。

『要らない』

繭が一言、呟いた。
たったそれだけで、罅が入る。

「え？」

そして、簡単に砕けた。
椿は戸惑いを押し隠して、繭の下をくぐるように突進を躱す。
繭は見失うことなく、椿を追った。

「【三槍・蛇紅鞭】」

椿は、炎の鞭を三本出現させると、それに追尾させることによって繭のスピードを捉える。
そこから、なんとか方向を割り出して、突進を躱していく。
躱していくだけでは、攻勢には移れない。

どこかで、活路を見いだす必要があった。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・我が手にその穂先を与えん】」

炎刃を展開させて、繭を睨む。
突進してくる一瞬、そこを狙う。
何度か避けてタイミングを計り、椿は身を屈めた。
そして――黒い突風が、椿に襲いかかる。

「今！」

地面に背中を預ける形で転がり、上に向けて炎刃を突き出す。
繭の腹に炎刃が突き刺さる感触を確認する前に、詠唱を重ねる。

「【四元素が一柱を司どる・灼熱を統べし槍の火蜥蜴よ・その穂先を・彼の者へ放て】」

炎刃が射出されて、繭の中へ埋まる。
あと、一手。

「【四元素が一柱を司どる・轟火を放つ槍の火蜥蜴よ・込められし力を・爆ぜさせよ】」

繭の腹に収まった炎刃が、爆発する。
繭が突撃してから、椿の上を通り過ぎる一瞬に、椿はこの行程を終わらせた。
限界を超えた高速詠唱で、喉が痛む。

――ドン

繭が、内側から燃え上がる。
椿は極限の緊張状態で削れた体力を、なんとか少ない気力で持ち直した。

繭は音を立てて、燃え上がり、そこに動く気配はない。
そのことに椿は、少なからず安堵した。

だが――――まだ、終わらない。

燃え尽きた繭から、大きな何かが立ち上がる。
終焉の炎でさえ、それにとっては誕生への祝福でしかなかった。

それは、ゆっくりと繭から羽化して、立ち上がる。

『欲しい』

漆黒の鋼をつなぎ合わせたような、鋭く堅い鱗。
三本の巨大で長い首と、三対六枚の大きな羽。
鋭利に尖った、三本の鋼の尻尾。

それは――見上げる程巨大で、周囲の存在が霞む程強大な、“龍”だった。

感じる圧力に、身体震える。
どうしようもない寒気と共に、脂汗が流れる。
先の見えなくなるような絶望に、思考が停止する。

『まずは貴様を、いただこう』

三個の頭の中央が、その口に炎を溜める。
そして、そこから放たれた、漆黒の炎が椿に迫る。
脳裏に浮かんでは消える、大切な人の顔。
椿は閉じた瞼の下で、大切な“親友”と“使い魔”を思い浮かべていた。

「奈津……雅人さん」

弱々しく、名前を呼ぶ。
もう、身体に力は入らなかった。

漆黒の太陽は、椿を呑み込もうと、その牙を剥いた。

「【ウォールアウト】」

黒い、半透明の壁が、椿に迫る炎を押しとどめた。

「【大気を統べる風の主よ・我が身体に宿り・我が身に烈風の加護を与えん】」

止められた炎を、緑色の閃光が貫いて、霧散させた。
その姿に、椿は目を瞠る。

滑らかな黒髪と、鮮やかな銀色の目。
高い背に、整った顔立ち。
着崩した黒のスーツに、黒い手袋。

空から降り立った親友、奈津の隣りに、手をかざして立つ男性の姿。

「人間になれるなら言ってよね」
「私も、まさかなれるとは思わなかったのでね」

奈津と軽口を叩き合う、威厳のある声。
子猫の姿ではない――――遠峰雅人が、そこにいた。

「椿」
「あ――うん」

奈津の声に、我に返る。
奈津は、バイザー越しに眼を細めた。
龍は未だ、雅人が手をかざして押し止めていた。

「“親友”と“恋人”が助けに来たんだから――――」
「ふぇっ!?」
「――――ちょっと休んでいると良い」

奈津の言葉に、雅人が続く。
惚ける椿に、雅人は更に笑みを深くした。

「まぁ、時間稼ぎは任せると良い。もっとも、早く追いつかないと、我々だけで倒してしまうかもしれんがな」

腰が抜けて動けない椿に、雅人はそう言って笑った。
そして、椿を後ろに置いて、一歩前へ出る。

「そんな大口叩いて……大丈夫だったの?」

悪戯っぽく笑う奈津に、雅人は肩を竦めて見せた。

「さて、ね――――まぁ、なんとかなるだろう」

雅人がそう言ってみせると、奈津は少しの間虚を突かれたように惚けた。

そしてすぐに、笑い出す。

「ハハッ――――いいね、それ。気に入った。それなら……なんとか、しようか！」

壁が解けると同時に、二人は物怖じすることなく、龍の前に飛び出ていった。

†

椿に目を向けさせないように、高速で邪霊を翻弄する奈津。

そんな奈津を、防御と攻撃を合わせて支援していく、雅人。

二人の後ろで、椿は目を瞑って息を整えていた。

突然知らされた状況に混乱して。
それでも話を聞いてしまったら放っておけなくて。
恐怖も悲哀も動揺も、全部押し殺して、向かった。
化け物なんだから、せめて人の役に――。
そんな“逃げ腰”な、弱い自分。
悲劇のヒロイン気取りの、甘えた自分。
大好きな人たちに助けて貰って、まだ足りないと手を差しのばす、自分。

「でも」

いざ、本当に助けが来てくれて、椿は一つ、自覚した。
悪い奴らに浚われて、牢屋で涙を流しながら、“勇者（ヒーロー）”を待つ“お姫様（ヒロイン）”。
そんな受動的な状況に、耐えられない自分がいた。
ピンチに陥ったら、足掻けばいい。
ヒーローが来たら、一緒に戦えばいい。
一人で何でも出来るなんて言うのは、逃げでしかない。

「ごめんね、アレク。君も一緒、だよね」

漆黒の炎と、漆黒の稲妻と、漆黒の吹雪。
猛攻を退けつつも、徐々に精彩を欠いていく仲間達。

「私はみんなを守りたい」

そう、口に出して、首を振る。
答えは、これではない。

「私は、みんな“と”護りたい」

そう言って、微笑む。
これが正解だと、気持ちがすとんと胸に落ちた。

無色の魔力が、装霊器を走る。
真紅の光に変わり、やがてそれは灼熱の白へと変わっていく。

「【“進化―≪ライフシフト≫”】」

椿がゆっくりと立ち上がる。
それとほぼ同時に、アレクがサラマンダーからファイアードレイクへと姿を変えた。

頭の中に、詠唱が流れ込む。
霊秘宝を掴み取り吸収する、精霊魔法。
神霊者の力と合わせた、究極の一。

「【生きとし生きる・全ての終焉を超えし・勝利の象徴たる炎竜よ・我が世界に汝を・汝が世界に我を・我は大いなる加護の下・この魂を煉獄に捧げん・炎霊転神】」

ファイアードレイクの身体が、椿の身体に同化する。
椿の背中から、白い炎の翼が生えて、装霊器から巨大な白の刃が生まれる。
戦鎧も、髪も、全てが純白に染まり、真紅の炎燐を身体に纏う。

その瞳は、金。
光の加減で虹色に姿を変える、黄金の双眸。

椿は、揺らいだ意志で向かい、その力を“否定”された。
ならば、強い意志を持って、力を“否定”させなければいい。

まずは――フィールドを作って、自分の領域を拡大させる。

「【結界・無限炎燐】」

真紅の炎燐を纏った白い炎が、大広間を覆い尽くす。
指定された対象を閉じ込める、鯨の邪霊の能力。

奈津と雅人が、宙に浮く椿を見る。

「天使って言うには、格好良すぎるかな？」
「私“の”椿だ。当然だね」
「ハッ、言ってろ」

椿はそのやりとりに、小さく笑みを零す。
こんな彼らだから、椿はともに戦いたいと思えたのだ。

『邪魔を、するナァァァァッッ！』

龍が、吼える。
その波動に呑み込まれまいと、意志を強く保つ。

「はぁっ！」
『要らない』

不要の呪文。
拒絶の願い。
否定の言霊。

それを――――意志を持って、弾く。

漆黒の炎――奈津の蹴りが、霧散させる。
漆黒の稲妻――雅人の壁が、遮断する。
漆黒の吹雪――椿の炎が、溶かし消す。

漆黒の鋼龍を――三種の力が押しつぶす。

「【魂と財宝を守護せし・灼熱劫火の炎竜よ・その大いなる炎を以て・我が敵を浄化せよ】」
「【大気を統べし風の主よ・健やかなる自由の象徴よ・我が右脚にその力を宿し・我に疾風怒濤の加護を与えん・我が望みに応えて・その力を・解き放て・風精の王】」
「【ロードアウト】」

太陽の如き白い炎が。
全てを貫通する自由の風が。
あらゆるものを絶つ絶対遮断が。

龍の首を、切り落とす。

『グガァァァアアアアアアアッッ！？！？！！』

三本の首が地面に落ちて、塵になる。
魔法使いでは敵わないはずの歪みの意志も、椿の境界の内側ならば、

打倒することが出来る。
あと――――もう少し。
『――――――許さない』
世界が、揺らぐ。
龍を中心に、大気が、空間が、世界が、歪んでいく。
『我は――世界の意志』
歪みきった空間。
その中心は、“深淵”の闇。
なにもない、“虚無”の世界だった。
『増えすぎた人間を、世界から溢れる前に消す、修正機構』
それは、独白にも似ていた。
自分の存在意義を訴える、叫び。
他者の存在意義を否定する、慟哭。
『創造主は、少しでも世界の寿命を延ばすためにと、我を生んだ』
創造主によって造られた生命。
それが、邪霊だと、歪みは語る。
求めていた答えの片鱗に、雅人は目を見開いていた。
『大きな罪を犯したものは、我々がその存在を喰らう。万が一その存在が力をつけても対応できるように、喰らった存在の力を我に還

元する』

世界を綻ばせないための修正機構。
正しく生命体ではないからこそ、輪廻の輪から逃れた“歪み”であった。

『だが、人間は愚かにも、人間同士で大きな争いを起こした』

世界大戦と呼ばれるその戦争。
その戦争で、歪みが喰らうべく“大罪人”の定義が、あやふやになった。

『多くを喰らい、大きな力を得て、我は我として“目醒め”た』

それは、創造主の誤算。
そう――――修正機構に、意志などなかったのだ。

『我は世界を“修正”することができる。それは、創造主と何が違う』

世界を修正する。
悪いと思ったものは、排除すればいい。
全て薙ぎ払って――――君臨すればいい。

『起源世界に閉じこもり、世界に現われることのない創造主。彼が世界を顧みないというのなら――――』

その声は、まるで子供のようだった。
幼子のように、無邪気な声。

『――――我が世界の“主”となろう。愚かな世界を、修正するために』

それは子供の我が儘。
欲しい欲しいと願う、無邪気な渇望。

『ここに名乗りを上げよう。我は今日この日より、新たな創造主となる全ての存在を否定し、修正しよう――――！』

昏い気配が、空間に満ちる。
その空気に、奈津と雅人は胸を押さえて蹲る。

「奈津！雅人さん！」

歪みは、笑う。
無邪気に、嗤う。
世界を、ワラう。

『我が名は――――“否定者―≪アカシック＝デウス≫”！！』

それは、誕生の産声だった。
その名乗りと共に放たれた波動が、世界を包む。

アレクも耐えきれなかったのか、椿の身体からはじき出された。

誰もが立ち上がることが出来ないその中で、椿は一人、立って歪みを睨む。
歪みの中では、姿の見えない否定者が、独りで笑い続けていた――――。

†

避難の終わったドーム。
外の映像が映し出されたモニターに、その光景が映し出された。

校舎を中心に吹き出る、黒の気配。
漆黒の柱が、天を突く。

「椿、奈津――――無事でいてくれよ」

ミアが、そっと祈る。
固く結んだ手を、神楽がそっと包み込んだ。

「大丈夫、大丈夫だよ」
「東雲教諭……はい」

誰もが、祈る。

フランチェリカが、ルナミネスが、明里が。
リリエが、五十鈴が、ナリナが、蘭香が。
桃乃が、奈美が、理恵が、洋子が。
アンジェリカが、ミファエルが、楓が、莉子が、マリアが。
荘厳が、霧が。

そして――――。

「帰ってきたら――――お仕置きですわ」
「手料理作って、待ってる」

レイアとラミネージュが、ドームから天を見ていた。
それは、ここにはいない人たちも、同じだった。

――／――

旧校舎の、屋上。
そこで、レンは布に包んだ主を抱き締めながら、空を見上げていた。

「身勝手だな、私は」

それでも、託さない訳には、いかなかった。

愛しい主の護った世界を、壊されたくなかった。

「どうか、無事でいてくれ。こんなことを言う資格はないだろう。だが、どうか――」

腕の中で、主が少し、身じろいだ。

―／―

遠く離れたアルプスの山脈で、登山服姿の少女が、そびえ立つ黒い柱をじっと見ていた。

「梓！今、大変なことになっているみたいだよ、“日本”」

「お母様……」

「とにかく、すぐに下山するわよ」

「は、はい」

山の上から、その光景をじっと眺めて、梓はそっと目を伏せた。

「大丈夫かしら、椿様」

空は、暗雲に満ちていた。

―／―

オールアクセンの敷地で、遊びに来ていた鈴は、セレナージュと不安げに空を見ていた。

「先輩、無事かな」

か細い声で心配する鈴の背を、セレナージュが優しくさする。

彼女も、自分の姉が心配でたまらなかった。

そんなセレナージュの頭を、大きな手がかき回した。

その姿を見た使用人の博人と美奈子が、目を瞠る。

「あれが、こんなところでどうにかなるタマか」

そう言って、イストは、震える手でタバコをくわえた。

その手に気がついた一里は、驚きつつも微笑んだ。

「ちっ……なにやってんだ、ガキ」

それは、祈りの炎を灯す、小さな火。

ゆらりと、タバコの火が、揺らめいた。

―／―

首都“東京”の都庁に位置する騎士団本部では、現代の英雄と名高いカインが、派遣の準備をしていた。

フィーリもそれを手伝う中、カインはそっと頭を下げた。

「三騎士の皆様にご足労願うことになるとは――申し訳ありません」

「構わん」

元・騎士団最強の三騎士。

“天衣無縫”

――――神崎宗一。

“灼熱劫火―≪オーバードライブ≫”

――――旧姓、至王院牡丹。

“雷迅氷華”

――――千堂京佳。

かつてない混乱に市民全てを護るには、手が不足していた。

そのため、今も現役で戦うことの出来る宗一達に、手を借りることになったのだ。

宗一は、ただ空を見る。

「戻ってこい、椿」

その視線は、かつて最強の騎士だったものではない。
ただ孫を思う、祖父のものだった。

†

蹲る二人を置いて、椿は一歩、前に出る。

「椿っ！」

一人で戦いに行く。
でも、独りで戦おうとは、考えていない。

振り向いた椿の双眸に宿るのは、力強い輝きだった。

「帰ってくる」

「――――遅れたら、遠峰先生は、保健所に連れて行くからね」

その瞳に呑み込まれて、奈津は途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

アレクの精霊石を手渡されてもなお、涙は、見せない。

「私としてもそれは困るな――――早めに、帰ってきてくれよ」

「はい――――」

苦しげだが、それを声色には出さない。

安心させるように立ち上がると、雅人は不敵な笑みを浮かべた。

椿はそんな雅人に近づくと、微笑む。

「え――――？」

「あぁっ！？」

そして、つま先を伸ばして、唇を重ねた。

「行ってくる！」

踵を返して、走る。

雅人はそんな椿の手を掴むと、自分の元へ引き寄せた。

そして、顎を持ち上げて、やや強引に唇を奪った。

「行ってらっしゃい」

「あ、うぅ――――行って、きます」

耳まで顔を紅くして、椿は今度こそと、走る。
歪みに消えていく椿を見送ると、身体がいくらか楽になった。

「力を送られた、か」

奈津はそんな雅人の向こうずねを、思い切り蹴った。

「ぬぐっ!?」
「ふんっ……猫のくせに」

それだけしたくて根性で立ち上がったのか、奈津は再び蹲る。
雅人は少しの間悶絶すると、苦笑しながら奈津を抱えた。
――俵担ぎである。

「なっ!?」
「いいから、騒がない」
「うぬぅ……ペットショップに売り飛ばしてやる」
「それは怖いね」

雅人は、遺跡を走る。
椿が笑顔で帰ることの出来る場所を、守るために。

†

歪みを歩く。
淀んだ虹を塗り固めたような、暗く沈んだ道。

憤怒、傲慢、嫉妬、欲望、怠惰。
悲哀、悦楽、歓喜、殺意、憎悪。

負の感情で塗り固めた下から、淀んだ感情が滲み出る。
悪意と絶望で蓋をした歓喜が、濁って歪んで霧散する。

意志の弱い人間が入ったら、見ただけで発狂するような。
そんな地獄が、広がっていた。

その奥の、更に奥。
そこで椿は、足を止めた。

鳴動する虚無。
慟哭する深淵。
歪みの中心に、“それ”は在った。

逆さまに浮いた、漆黒の胎児。
無邪気に笑うその口は、鮮やかな赤。
薄く開かれたその瞳は、濁った虹色。

“否定者”の、真の姿が、そこにあった。

『要らない／欲しい／壊す／欲しい／修正／欲しい／頂戴／欲しい／欲しい／欲しい』

ただ求め続ける、無邪気な悪。

全部否定しないと、ほしがることの出来ない子供。

近づくだけで存在を否定されて、そこに立っていることすら朧気になる。

椿はそんな胎児に、ゆっくりと近づく。

どんなに願っても、“否定”されない存在に、否定者は戸惑いを見せた。

「貴方が全部を否定するというのなら」

『なんで／否定／何故／修正／どうして／否定／修正／否定』

戸惑いが、恐れへと変わる。

その強い力に、椿の身体は傷ついていく。

夥しい血液が流れ出て、足下がふらつく。

この空間では魔法も邪霊の力も操ることは出来ない。

ならば椿は――――。

否定者を、抱き締める。

その胸で包み込むように、そっと抱き締めた。

――――椿自身の力で、戦う。

『なん、で……なんで！否定されない！なんで、消えない！』
「貴方が私を……世界を“否定”するのなら、私は世界の全てを“肯定”する」

人間も精霊も邪霊も。
全ての存在を支配できる、“神霊王”の力。
その力の意味は――――全ての存在の、“肯定”だった。

歪みが広がる。
大きく、大きく、広がる。

広がった歪みは、椿を中心に集束していく。

やがて全て無くなろうとしたとき、否定者は感じたことのない“幸福”に包まれた。

――――“お母さん”

遺跡から、歪みの気配が消える。
跡には――――何も、残らなかった。

†

瞼の裏を照らす、無機質な光。
その光に、椿はそっと目を開いた。

「ここ、は？」

周囲を見回す。
そこは、図書館だった。

天井は見えない程高い。
周囲も、終わりが見えない程、沢山の本棚が並んでいる。

地面は、苔の生えた浅瀬の河。
それなのに、本が濡れているようには見えなかった。

光に照らされてはいるが、太陽があるようには思えない。
風もあるが、窓は見あたらない。

暖かくはないが、寒くもない。
どこか神秘的だが、それ故に生物の気配がない。
故に、無機質な空間と言えた。

椿は、何気なく本棚から、本を取る。
そして、そのタイトルに、首をかしげた。

「“ケルト神話”？――幻想世界“ケルト”じゃなくて？」

本棚に書かれたタイトルは、異国の言葉。
勉強したことのない言語なのに、椿はそれを読み取ることが出来た。

新約聖書。
北欧神話。
古事記。
アーサー王伝説。
封神演義。
ゾロアスター教。

そのタイトルを眺めながら歩いていると、椿は少し開けた場所に、人影を見つけた。

「あの――」

黒い学生服に身を包んで、眼鏡をかけた黒髪の少年。
大人しそうなその少年は、桐の机でじっと本を読んでいた。

「ここは――――」

どこか、そう聞こうとして、首をふる。
それよりも、聞かなくてはならないことが、あるような気がした。

「この本は、なに？」

椿は、少し悩んで、そう訊ねた。
少年は、顔を上げない。
本に目を落としたまま、答えた。

「幻想が幻想として存在し続けるためには、信じて紡ぐ“人間”が必要だ」

考えてみれば、おかしな言葉だ。
“幻”想が、“存在”するのだから。

「だけど人は、いつしか、紡ぎはしても、信じなくなった」

少年は、語る。
それは、椿が聞きたかった答えとは、ずれている。
それなのに、その言葉を遮ることが出来ない。

「それでは、“存在”することはできない。だから、“創った”」

少年の言葉。
それを信じるのなら、この少年は――。

「物語の数だけ存在する“幻想世界―≪ファンタズマワールド≫”」

あらゆる物語。
その本の背表紙が、淡い光を放つ。

「その世界を保つための“歯車世界―≪ギアワールド≫”」

現実世界。
それは、幻想を幻想として存在させるための、歯車。
欠けてしまったら、その全ての動きを止めてしまう、心臓（ギア）。

「そして、その全ての原典を内包する“起源世界―≪アカシックワ

ールド≫”」

答えに、辿り着く。

この本の中、全ての幻想を内包し存在させるために、全ての物語が“違和感なく”存在できるように創られた、世界。

それが、この世界の全てだった。

「修正機構が意志を持ってしまったのは、ぼくの不手際だ」

「それじゃあ――――邪霊は、消えるの？」

椿がそう訊ねると、少年は本に目を落としたまま、首を振る。

「修正機構が大人しくなれば、人間はまた、自分たちで争い始める」

それは望まない。

少年は、言外にそう答えた。

「だが、今回のような事態には、しないし、させない」

幻想まで壊れていくのは、少年にとっても不本意だ。

それでは――――“意味がない”のだから。

「そう――それなら私は、一体でも多くの邪霊を倒す。倒して――“肯定”する」

それが、自分に悩み続けて、なお苦しみ続ける邪霊達への、唯一の救済方法。

少年は、一言「そう」とだけ、呟いた。

「君は、ぼくの手から生まれながら、ぼくの想定を超えた存在だ。
――好きにすると良い」

椿はその言葉に、瞑目した。
そして、目を開いて、少年を見る。

「私は、帰れるの？」
「帰りたければ、帰ると良い」

門が、開く。
椿は背後に突然現われたその門に、驚いた。
そして最後に少年――――“創造主―≪ワールドロード≫”を一瞥した。

口を開きかけて、閉じる。
そして、踵を返して、門を潜った。

振り返ることをしない椿は、気がつかない。
少年が、顔を上げていたことに。

「どうせ君は、最後にはここへ戻る」

本を閉じて、門を見る。

「“肯定”と“否定”の力を持つものよ」

指を鳴らすと、門が消える。

「君は――――“管理者―≪イマジンロード≫”たる、資格を持っている」

少年は、ぐるりと本棚を見回すと、立ち上がった。

「待っているよ――――椿」

そして、新しい本を読むために、図書館を歩き出した。

†

門を潜ると、そこは不思議な場所だった。
夜空に沢山の本棚が浮かんでいる、不思議な場所。
しばらく呆然とその場所見て、振り返る。
そこには既に、門は無かった。

無限に広がる空間に、この場所が宇宙のような場所だと気がついた。
八方向の夜空には、時折流れ星が輝いた。

立ち止まっている暇はないと、歩く。

だが、どんなに歩いても、出口は見えない。
そのことに椿は、焦りを覚え始めていた。
――こっちだよ。
声が、響く。
――さ、こっち。
「だれ？」
その懐かしい声に、椿は自然と涙を流していた。
胸元の、指輪。形見のリングが紐でとおされたネックレス。
その指輪から、光が伸びて、道を示す。
――はやく、急いで。
「お父さん」
――こっちだよ、椿。
「お母さん」
溢れる涙を拭いながら、進む。
その先の門に、椿はふらふらと近づいた。
――大丈夫だよ。
――私たちは、ここにいるから。
――行っておいで、椿。
とん、と、優しく背中を押される。
門を潜る寸前に見えた、優しい笑顔。

「ありがとう。お父さん、お母さん」

涙を流しながらも、椿は笑顔で、別れを告げる。
そして、前を見る。

晴れ渡った、空の下。
校舎の屋上に出て、椿はちょうど屋上に出てきた、奈津と雅人、レイアとラミネージュの姿を見つけた。

胸に抱いた思い。
その全てを溢れさせて、椿は、満面の笑みを浮かべた。

「ただいまっ！」

満天の太陽の下。
歓喜の声が、世界を祝福の音で包み込んだ――――。

少女は、一庶民だった。

両親は、未だに仲の良い……良すぎる夫婦。
祖父母は、街の外れでよくデートをしている、仲良し夫婦。

弟が一人いるだけで、賑やかすぎる家族。

本当に一般人だった彼女は、ほんの少し魔法の才能があって、ほんの少し魔法使いに憧れていた。

だから、必死に勉強して、名門と名高い楼城館学院に入学した。

見た目がよく似た仲良し学院長“夫婦”の長い話を聞く。

同じクラスになった、白に近い金髪の少女と、黒い髪の大人しい少女と友達になって、彼女は早速、この学院に入学した目的の一つにやってきた。

おどろおどろしい旧校舎。
その裏手の、プレハブ小屋。

二年生でレベル七に辿り着いた先輩がいると聞いていたが、少女はそんなことは、気にしない。

「ここが……“英雄考察研究会”か――――よしっ！」

少女は、“正義の魔法使い”になりたくて、プレハブ小屋の、門を叩いた。

後書き（前書き）

ネタバレを含みます。
本編をお読みになっていない方は、本編をご覧になってから閲覧されることを、推奨します。

後書き

短いような、長いような。
二ヶ月と経たず、完結の運びとなりました。

ここまでお読みくださった、皆様。
評価、お気に入りをつけてくださった、皆様。
書き終える支えになりました。本当に、ありがとうございました。

この作品を書く切っ掛けは、受講中に短く綴った落書き程度の文字でした。
一言、装霊器と綴り、それから頭の中で物語を膨らませていきました。

折角だから、熱血を書きたい。
でも、あまり暑苦しいのはやめておこう。
そして、それならば女子校で熱血を書こうと思い至り、このような舞台になりました。

この世界は、現代ではありません。
似た様な歴史を辿った、パラレルワールド風味のファンタジー世界です。
そのため、最終話まで地名を出すことを極力避けてみました。

展開が超展開にならないように、悪役に厚みを持たせられるように、誤字脱字を極力なくすようにと試行錯誤を繰り返し、完結までのプロットが完成したのは、五話を執筆しているときでした。

それから、全四十部前後という目標になんとか沿って、書き上げることが出来ました。

外伝、番外編などは、ご要望があるようでしたら、書いてみようと思います。
登場人物一覧も、同様に。

ここでひとまず、お話は終わりです。

改めまして、ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
皆様のおかげで、一つの物語を完結させることが出来ました。

また、この場か、違う場所か。
私の名前が印された作品を目にお留めした際には、どうぞよろしくお願いします。

平成２２年７月３日（土）　――――完結

追記　２０１０／０８／２０
主人公への感情移入のしやすさの向上、説明臭さを抜くといった目標のために、現在改訂加筆修正中です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4583l/

Flame,Plus

2010年11月13日08時03分発行